
フルカネルリさんの転生苦労日記

真暇 日間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フルカネルリさんの転生苦労日記

【Nコード】

N5216P

【作者名】

真暇 日間

【あらすじ】

とある時代のとある場所で一人の男が死を迎えた。

しかし気付けばそこは見たことのない場所で、目の前にいたのは見知らぬ誰か。

その誰かに流されて、気付いたら記憶とその他のものを持たされて現代日本に良く似た場所に転生。

ただし体は女の子だ。どうしようか、まあ良いだろうと軽く流して彼女は今日も生き続ける。

投稿するのは初めてです。どうか優しくやってくださいお願い

しまずいせ本道三丁。

0 - 1 (前書き)

始まりはやっぱり死亡から

第0章 1話 フルカネルリの最期の時

私はどこまでも人間だった。

ただの一人の人間だった。

だからこうなる事も考えていたし後悔も無い。

「お師匠さま！」

弟子の一人が騒いでいるのが聞こえる。……全く、仕方の無い奴だ。

「…なに、私は良く生きた」

お師匠さまのお話だ！やら みんな静かにしろ！だのといった声が聞こえ、辺りが静まりかえる。

「私はもう死ぬだろう。」

「そんな！」

誰かが声をあげるがそれを聞かなかったかのように話を続ける。

「だが私はお前達の中に知識と技術として生き続ける。」

「知識を伝えよ。技術を伝えよ。その二つが世界に有る限り、私は無限の時を生き続けるであろう」

「…お師匠さまあ……」

一番昔から居る弟子の一人が泣きそうな声で私の名前を呼ぶ。

「……もしかしたら、死ぬまで判らぬ事も在るかもしれぬ。故に私は久しぶりに見聞を深めて来るとしよう。」

「…留守を頼んだぞ、お前達。」

「はいっ！」

弟子達の返事が響く。

それから数日後に私は弟子達の見守る中で静かに息を引き取った。

筈なのだが………

「キミがフルカネルリかナー？」

目の前には人間とは一線を隔す存在感を持った少年が居る不可思議な場所に私は居た。

0 - 1 (後書き)

… 短い …

「まあとりあえずお茶でも飲んでゆっくりするといいヨー。時間はたっぷりあるんだからサー」

「……判った、そうさせてもらおう」

目の前の少年が気楽そうにそう言った瞬間にどこから小さな丸いテンプルが現れ、その上にあつた緑色の液体を差し出してきた。

「……あ、もしかして緑茶じゃなくて紅茶のがよかつたかナー？」
どうやらこの液体は茶の一種であるらしい。

手を付けずにしばらく見ているとその少年がやはり軽く聞いてくる。その手には白いカップとおそらく中身の入っているであろうポットが静かに揺れている。

「あ、ああ、すまない」

「いいっていいって」

勝手に呼んだのこっちだしナー、と言いながら差し出された紅茶のカップを受け取って口をつけた。

「……うーん、やっぱりシヨゴスの淹れたやつの方が美味しいネー？」

くりつと首を傾げるその姿に少しだけ考える余裕ができた。

「……質問があるのだが、構わないかね？」

「いいヨー」

少年はニコニコとした笑みを崩さないままにフルカネルリに答えた。

「……私は死ななかつたかね？」

フルカネルリは一番知りたい事だけを直球で聞いた。

「死んだヨー」

そしてその少年も直球で返した。

辺りに沈黙が満ちた。

0 - 3 (前書き)

今回でプロローグもどきは終了です。

次からは転生後の話になります。

そしてやっぱり短い……

「……やはりそうか」

沈黙を破ったのはフルカネルリの一言だった。

「あ、やっぱり分かってたんだネー。説明が楽でいいヨー」

少年はケラケラ途中から楽しそうに笑い、それから少しだけ真剣な顔をした。

「うん、まずキミは死んだ。先に言っておくけど別にボクが何かした訳じゃないからネー？」

「ああ、それは何となくだが分かっている」

事実彼は色々なことを何となく理解していた。

例えば、目の前の少年に見える存在がどのようなものであるかの推測や、その人間（？）性を大雑把に。

「あー、うん。とりあえず自己紹介といこうかネー」

目の前の少年に見える存在は相変わらずの笑顔のまま自己紹介を始めた。

「ボクの名前はナイアルラトホテプ。気軽にナイアって呼んでネー」
その少年　ナイアは、それだけ言ってもう一度手に持った紅茶に口をつけた。

フルカネルリは当然知らなかったが、それはどこかの世界でいつか語られる事になる神話のとある邪神の名前だった。

フルカネルリが答えられないでいると、ナイアがまた口を開いた。

「……まあ、実のところそれは別にいいんだー」

何気なく向けられた目にフルカネルリは僅かに身を固くする。

それに気づかないわけではないだろうが、ナイアはあえてそれを無視してフルカネルリに向かって言葉を続けた。

「勝手だけど、キミには記憶と知識を持ったまま転生してもらおうヨ
ー」

そしてその後にごう続けた。

「ああ、キミに拒否権は用意してないし無いし使わせないかラー」

こうしてフルカネルリの新たな苦勞の日々が始まったのだった。

登場人物設定（人外含む）（前書き）

作者もここまで続くと思っていなかったために作っていないかった設定です。色々ネタバレがありますが、構わない人のみどうぞ。

ちなみに細かいところは脳内保管で

登場人物設定（人外含む）

古鐘瑠璃

種族：人間（一応）

性別：女（前世は男）

誕生日：六月十六日

髪の色：黒

目の色：黒

好きな事・物：研究、知識の収集、ナイア、アザギ、白兔、両親

嫌いな事・物：邪魔される事、無気力な奴、煙草（思考が鈍くなるから）

家族構成：両親、祖父（会ったことはない）、祖母（会ったことはない）、ナイア、アザギ（ナイアとアザギは思っているだけ）

性格：基本的に研究が好き。と言うか研究して知識を集める以外にあまり興味がない。転生者。元男だがあまり気にしていない。いきなり爺臭くなったり子供っぽくなったりと忙しい。

春原白兔

種族：人間

性別：女

誕生日：十二月三日

髪の色：黒

目の色：黒

好きな事・物：家族、瑠璃、瑠璃の両親、冬

嫌いな事・物：辛いもの、孤独感、無視されること

家族構成：両親

性格：よく言えば天真爛漫、悪く言えば子供っぽくて単純。ただしなぜか時々妙に大人っぽい考えをする。

孤独を嫌い、フルカネルリの事が好き。今はまだ恋人とかそういうことにはならない。

古鐘哀華

種族：人間

性別：女

髪の色：黒

目の色：黒

好きな事・物：瑠璃、古鐘裕樹、平和な時間、甘いもの

嫌いな事・物：夫の鈍い所、平和を乱そうとするもの、煙草（瑠璃がお腹のなかにいた頃に嫌いに）、幽霊、雷

家族構成：夫、娘、両親

性格：基本的に良い母親であり良い妻。瑠璃ラブ、夫ラブ。愛の力で夫である古鐘裕樹の食べたいものと帰ってくる時間が十分単位で何となくわかるという特殊能力を持っている。最近瑠璃にも使用可能に。

雷と幽霊が大の苦手。雷の鳴る日や怖い番組を見た日は裕樹に抱き締めてもらって眠る。

古鐘裕樹

種族：人間

性別：男

髪の色：黒

目の色：黒

好きな事・物：哀華、瑠璃、家族と一緒にいる時間、酒（ほろ酔いより上には絶対ならない）

嫌いな事・物：家族を傷つけようとするもの、家族との時間を邪魔するもの、煙草（瑠璃が嫌いだと言ったから）、まだ見ぬ瑠璃の夫（見極めて大丈夫だと思えば許しはするつもりらしい）

家族構成：妻、娘、母（父は他界）

性格：あまり押しは強くない、だが妻ラブ、瑠璃ラブ、親バカ全開。フルカネルリが優秀な分、それはとどまるところを知らない。だがフルカネルリにはかっこいい父だと思っただけという理由で家では自重している。フルカネルリには知られているが。

アザギ

種族：亡霊

性別：女

髪の色：白っぽい灰色

目の色：白っぽい灰色

好きな事・物：瑠璃を眺めること、瑠璃を護ること、話をする事

嫌いな事・物：瑠璃を傷付けるもの、瑠璃に悪意を持つもの

性格：基本的にのんびりや、しかし長生きしすぎて色々おかしくなっている。

少し前まで頭から血を流し続けていたが、最近になって何故か血が止まって血色がよくなってきた。

イメージカラーは白黒二色、いわゆるモノクロ。キレるとフルカネルリ並みに怖いらしい。

ナイアルラトホテプ

種族：神（邪神）

性別：男（基本。変更可能）

髪の色：金色（基本。変更可能）

目の色：青（基本。変更可能）

好きな事・物：フルカネルリ、クトウグア、アブホース、クトちゃ
ん、ヨグソトス、ノーデンス、その他友達、楽しいこと、友達
をからかうこと

嫌いな事・物：暇な時間、退屈、女装^{トラウマあり}

家族構成：両親（ンカイの森で隠居中）

性格：基本的に楽しいことが大好き、そして退屈とつまらないこと
が大嫌い。

フルカネルリを古鐘瑠璃として転生させた本人。ボケるのが好きだ
がなかなかツツコミを入れてもらえないため落ち込むことがある。
友達の中ではムードメーカーの役割を持っていた。

クトウグア

種族：神（邪神）

性別：男

髪の色：赤（基本。変更可能、ただし赤系統のみ）

目の色：赤（基本。変更可能、ただし赤系統のみ）

好きな事・物：クト、ナイア、アブホース、名も知らない女、友達、
辛いもの、夏

嫌いな事・物：水、冷たいもの、雨

家族構成：妹、両親（フォーマルハウトでまだ新婚気分）

性格：まごごうことなきシスコ。アブホースのことを憎からず思っ

ている。が、それを外に出すことはほとんどない。ナイアの家であるンカイの森を焼き払ったことがある。だが実はナイアならクトを任せても良いと思っている。

クトがやっている学校で副校長をやっているが、たまに仕事をサボってアブホースとクトに説教されている事も。

クト

種族：神（邪神）

性別：女

髪の色：赤（基本。変更可能、ただし赤系統のみ）

目の色：赤（基本。変更可能、ただし赤系統のみ）

好きな事・物：ナイア、兄、アブホース、自分の生徒

嫌いな事・物：熱いもの、一人ぼっちの時間、自分の弱い体、貧血

家族構成：兄、両親

性格：体は弱いしよく貧血や軽度の熱中症になるが、性格的には元気で気丈なフルカネルリ達の学校の校長先生。

ナイアが好きだと理解してはいるが、実のところナイアが幸せなら自分が出る幕は無いと思っている。もちろん一緒にになりたいと言われれば喜んで一緒になるだろうが。

アブホース

種族：神（邪神）

性別：女

髪の色：黒（基本。変更可能）

目の色：黒（基本。変更可能）

好きな事・物：友神達、クトウグア、おはぎ、もなか

嫌いな事・物：辛いもの、酒（昔飲まされて色々暴露したのをナイアに言われたから）

家族構成：両親

性格：簡単に言つたとある禁書目録の吹寄。好きな相手に好きと言えずに悶々しているが、それでもどうしても素直になれない。その上クトウグアの気持ちにも気付いていない困ったちゃん。クソ真面目でナイアのボケが通用しない。

ヨグソトス

種族：神（邪神）

性別：男

髪の色：暗い灰色（基本。変更可能）

目の色：暗い灰色（基本。変更可能）

好きな事・物：ナイア、暗いところ、開発、自分の作った何かがナイアの役に立つこと

嫌いな事・物：自分、灰色（自分の色だから）

家族構成：無し（全員他界）

性格：気弱で臆病で引きこもりぎみ。小さい頃に両親をなくしたからか仲良くなつた相手への依存が凄い。それが原因であまり好かれ
ていなかったがナイアが気にせず接したために少しずつ真っ直ぐに
なつてきている。でもその分ナイアへの依存がヤバイレベル。救い
はそれが表に出ないことと元々が弱気なこと。

引きこもり気味なために日焼けなどは無く、真っ白な肌をしている。
男の娘と言うべき容姿をしている。

発明が好き。

1 - 1 (前書き)

転生後の第一話です。今までで一番長いです。

ナイアとの話し合い（？）が終わり、私はナイアの遊びに付き合う代わりに色々なものを受け取った。

それは例えば知識だったり特殊な能力だったりした訳だが、何故か細かいところまでは教えられないことは無かった。

…これは私に自分で調べろということだろう。

よろしい、これで退屈な時間は少なくなることだろう。

…ところで、私が能力は要らないと言った時にナイアが言った

「いつか絶対に必要になるかラー」

という言葉にそこはかとない不安を感じるのは私だけだろうか。

…平和にのんびりと研究ばかりの日々を過ごして行きたいものだ。

…まあ、ナイアに付き合っている限り不可能だろうがな。

所でここは何処なんだ？

私は暗い所に居た。

光が全く届かないような所で何か液体に浸かっているような感覚だ。

《そりゃそうだよー。実際キミは今キミの母親になる人間のお腹のなかにいるんだからネー》

…ああ、なるほど羊水の中か。だがこんな最初期から意識があるとは聞いていないぞ？

《……驚いてほしかったんだけどナー》

そうか。悪いことをしたな。

《……別にいいヨー。ボクがそう思ったただだからネー》

そう言いながらもナイアの声には少しの拗ねが入っていて、私はそれに気付いたときに笑ってしまった。

《……何で笑うのサー》

その言葉と共にぶすつとしたナイアの顔が脳裏に浮かぶ。そのせいで私の笑いは余計に止まらなくなってしまった。

…意外に、可愛らしい所もあるじゃないか。

そう呟くと、ナイアの方から理解できない言語が流れてきた。どうやら恥ずかしがっているようだ。

こうしてナイアと話している間に私の体はすっかり大きくなり、いつでも生まれることができる程度の大きさまで成長した。

《さて、そろそろ生まれる時間だヨー》

ああ、分かっているさ。

周囲の壁か私を外に押し出そうと動き始め、さらに私が今まで浸かっていた羊水が減る。

私はそれに逆らわず、自分から出て行く勢いで外に出た。

……あ。産声をあげるのを忘れていた。少し遅くなっただが一応あげておくか？

《いや、もう必要ないと思うヨー》

む？ そうか？

《そうだヨー。おめでとうネー、フルカネルリ》

ああ、ありがとう。

目を開くと、急に入ってきた光に頭が痛くなる。

だがそれでも私は私を産んだ母を今、この目で見たかったのだ。

私のなかでは数分が過ぎた頃、ようやく目が光に慣れてきた。

ひよい、と抱かれたような感覚に身を任せ、私を抱いている者を見た。

「…ふふっ。良く生まれてきてくれたわ、私の赤ちゃん……」

疲れたような笑みを私に向けているその女性が、恐らく私の母なのだろう。

「良くやったぞ、哀華」

そして母（であろう女性）に話しかけているのが父か。

《そうだヨー。ちなみに名前は裕樹だネー》

説明をありがとうナイア。

「それで、名前はどにするの？」

おお、私の名前か。できることならば元の名に似ているものがいい

のだが。

母に聞かれた父は胸を張って答える。

「ああ。男の子なら優しい夜と書いて優夜、女の子なら宝石の瑠璃にしようと思っていたんだ」

そうかそうか、なら私の名は

「なら瑠璃ね。この子は女の子だから」

.....は？

私の前世の名はフルカネルリだ。恐らく寿命で死んでからナイアに出会って転生したらしい。

そして、今の私の名は古鐘瑠璃ふるかねるり。古鐘が名字で瑠璃が名だ。

ここで一番大きな問題は、前世の私は男だったが今の私は女、それも生まれの間もない赤子だということだ。

何故性別が変わったのだろうか。やはり偶然……？

《ボクがやったんだけどナー？》
なんだナイアか。

《……ここ怒るところだヨー？》

そうなのか？私としては完全に謎だった女性の体について自分で知ることができるといふのはメリットがかなり多いのだが。

《…あー、やっぱりフルカネルリってちょっとおかしいヨー》
自覚はしている。だが直す気は欠片もない。

これが私だ。

《……うん、とりあえずおむつを取り替えてもらいながら言っても気が抜けるだけだからナー？》

五月蠅い、巨大な蟻に跳ねられて死ね。

《それ相当嫌な死に方だよナー！？》

そうだな、私も嫌だ。

そう、私は今おむつを替えてもらっている最中だ。

正直に言って嫌だが私が動けないのだから仕方がないと割り切って現実から軽く目を背けながら替えてもらっている。

「はいキレイにしようとなりまちたよー」

頼む、母よ。その赤ちゃん言葉を辞めてくれ。私が恥ずかしさと屈辱のあまり死んでしまいたいそうだ。

《自殺はできないようになってるから平気だと思っヨー？》

精神的な問題だ。それにこれはある程度理解しているとわからせないと終わらないので現実から逃げることもできない。

…まさに絶望的だな。

《……愚痴くらいなら聞いてあげるヨー》

ありがたい。

…だがそれよりもこの動けない時間をどうにかして短くできないものか……。

「瑠璃ちゃん 次はごはんでちゅよー」

だからその赤ちゃん言葉を辞めてくれと。

……まあ、飲むんだがな。

《死んじゃうもんネー》

そうだな。

私は早く大きくなるために良く食べ良く寝て良く運動することを心に決めるのだった。

……………けぷっ。

1 - 3 (前書き)

1 - は小学生になる前です

フルカネルリだ。最近ようやく自分で用を足す事が出来るようになった。とても嬉しい。

《おめでとうネー》

ああ、ありがとう。

さて、こうして動けるようになった私だが、とりあえず最初にここがどんな世界でどんな所なのかはつきりと知りたいところだな。ナイアはそれについては教えてくれなかったし。

《だってその方がボクが楽しいんだヨー？》

そうか、なら仕方ない。

《……自分で言っというてあれだけどサー、ここは怒るところだと思うんだけどナー？》

なに、私も自分がやりたいことをやるときに周りを切り捨てることが多かったからな。勿論今回はある程度自重するつもりだが。

《へー、そうなんダー？》

ああ。

……ところでナイア、困ったことがあるんだが。

《なにかナー？》

それがな……

「瑠璃ちゃん お母さんでちゅよ〜」

「おかしゃん？」

「こぶっ……はい、おかあしゃんでしゅよ〜」

……このように発音が難しくてだな……。

《いやいやいやいや、つつこみ所はそこじゃないよネー!?!?》

……言わないでくれ。分かっているから……。

《……うん、うめん》

……いや、いいさ。

それに母だけだしな。

父の方は私の前ではかつこいいお父さんでありたいらしく、あまりでれでれとした姿を私に見せないようにしているようだ。

……その分他の所……例えば仕事場などではかなりの親馬鹿+愛妻家っぷりを見せているらしいがな。

……ふあ……。

……それにしても……この体になってからというものが……眠くなるのが……早く……なった……。

《寝ちゃいなヨー。その体はまだまだちっちゃいんだからサー。体に悪いヨー？》

……あ、あ。

《……お休みだヨー、フルカネルリ》

……おやす……み……。

この直後、私の意識はぶつつりと消えた。

とあるビルの中、とある場所

「うちの娘がな、これがまた可愛いんだ」

「はあ……………」

一人の男が同僚の男に話しかけている。

「仕事で夜遅くに帰ってくるだろ？　するとまあかなり疲れてるわけだ。だけど瑠璃の顔を見るだけでこう、明日も頑張ろうって気になってくるわけだ」

「そ、そうですね……………」

その男は身ぶり手振りを交えて自分の娘の可愛らしさを語り続けているが、聞いている方はうんざりという顔をしている。

……………まあ、誰でも何度も何度もループする娘自慢を聞けば同じような反応をするだろうが。

「それでな、うちの娘のどこが可愛いかをあげていくとだ、まずは

……………（以下省略）

会社員、古鐘裕樹のとある日の昼休みの一幕

1 - 3 (後書き)

まあ、こんなものでご勘弁を

1 - 4 (前書き)

まだまだ日常が続きます。

フルカネルリだ。ナイアに言われて軽く能力を使ってみることにしたんだが、どうすればうまく使えるだろうか？

《それはネー》

いや、まだ細かい説明はいらない。簡単に、どうすれば発動するかを教えてほしいだけなんだ。

：あまりに簡単に全てを知ってしまうのは私にとって損にしか見えないからな。

《おーけーおーけー、簡単に何ができるかだけ教えるヨー》

ありがとうナイア。苦労をかけるな。

《別にいいヨー》

そう言ってくれるとありがたい。

《これでもボクはアフターサービスまでちゃんとやる珍しく職務に真面目な邪神だって評判なんだヨー？》

誰の評判だ誰の。邪神仲間か？

《えっとネー、まずクトウグアだロー、ハスターだロー、アトラク・ナクアにツアトウグアでシヨー、それニー》

いや、もういい。有名なんだな、他の神に。

《そうだヨー》

ナイアがニコニコと笑っている顔が目に見えかけた。

「まずボクがキミにあげた能力の説明からするネー」

「よろしく頼む」

私がそう言つとナイアはニコニコと笑いながら頷いた。

ちなみにここは私の夢の中であるらしい。そのため私はいまと違って懐かしい前世の体になって黒板の前でなぜか眼鏡をかけている

ナイアの前で椅子に座っている訳だ。

「最初に『成長速度上昇』の能力だネー。文字通りあらゆる成長速度が上がるヨー」

「……年齢もか？」

私がそう聞くとナイアは嬉しそうに首を横に振った。

「聞いてくれて嬉しいヨー。ボクが頑張って改造したこの能力では年齢だけは普通なのサー」

……反則だな。

「これでも邪神だからネー」

ナイアはエツヘンと胸をはった。

「まあ、フルカネルリがフルカネルリだった頃を1とすると、大体20億くらいの速さかナー？」

「正直、申し訳なくなるほどの早さだなそれは」

心底思ったそれを口に出すと、何故かナイアは吹き出した。

「……何がおかしい？」

ケラケラと笑い続けているナイアに聞くと、驚くべき答えが帰ってきた。

「……くふっ……だ、だって……元々普通の人間よりずっと……つく、成長早いのに……ひひひっ……」

「具体的には何倍だ？」

「一部は……2000倍くらい……いひひひ……」

……どうやら私は元々人よりなにかの成長が早かったらしい。それも2000倍という相当な倍率で。

「……けほっ……それじゃ次ネー」

ようやく笑いの渦から帰ってきたナイアは頬を半分ひきつらせながら説明を再開した。

「二つ目は『上限突破』。簡単に言っちゃうと人間のまま人間じゃありえないぐらいの能力値になるヨー。……まあ、頑張ればだけどネー」

成長速度上昇と合わせて凄いいことになる気がするんだが？

「なるネー」

やはりか。

「……ツッコミどころだったんだけどナー」

なぜかナイアが落ち込んだ。

「……気を取り直して次だヨー。『下限値固定』って言ってネー、一度上げた能力値が下がらないようになるんだー」

……それこそ物凄いいことにならないか？

「なると思うヨー」

やはりなるよな。

「……ボク泣いちゃうヨー？ ボケをスルーされるのって結構きついものがあるんだヨー？」

「そうなのか？」

「そうだヨー！」

なるほど、そうなのか。それはすまないことをしたな。

「……うん、もう大丈夫だヨー」

うむ、元気になったな。よかったよかった。

「じゃあ次ネー。……といってもこれは呪いの類いんだけど……」

『健康の呪い』だヨー」

「健康の呪い？ なんだそれは？」

健康で悪いことはあつただろうか？

「健康の呪いなんだけどネー、フルカネルリは嫌だろうけど……体が女の子としてすつごく魅力的になっちゃうんだー」

「具体的には？」

「髪の毛はさらさらのツヤツヤで枝毛なんて考えることすらバカらしい髪になり肌はつるつるのすべすべ、なにもしないでいつもすべすべもちもちぷにぷにの赤ちゃん肌。さらにプロポーシオンも凄いいことになっていくから食べても全然平気で変わらない。睡眠不足だろうが運動不足だろうが変わらないどころかきれいになる一方という世の女性が聞いたら殺したくなるような呪いだヨー」

「……それじゃ、着替えてからご飯にしようか？」

私の言葉に瑠璃はコクンと頷いて私の手を握ってくる。
そのまま私たちは二人でご飯を食べる。

……ああ、し・あ・わ・せ

とある家の日常の朝より抜粋。

フルカネルリだ。ナイアに能力について聞いてからというものいきなりできる範囲が広がった。なぜだろうか？

《説明するまで能力は封印してたからネー。開放されて成長速度が上がったせいじゃないかナー？》
なるほど、そういうことか。

…ん？ と、言うことは……先に開放してくれればもっと早く自力で用を足せるようになったのではないか？

《体に魂が馴染む前にそんなことをやったら、ぱんっ！って弾けちゃうヨー？》

それは困るな。

《普通は困るで済むことじゃないけどネー》

能力については今わかってしているものが全て常に発動しているようなので、出来る事といえば体をちゃんと動かせるよう慣れることぐら이다。

……どうも前世の体のつもりで動かしてしまっ。するとバランスが崩れてうまく歩けないのだ。

《それはもう慣れるしかないヨー》

まあ、そうだろうな。

……っと、危ない。

ふらふらとする足で立ち上がり、トイレに向かう。

最近新聞紙を踏んで思い切り転んだのはいい思い出だ。足元に気を付ける、という教訓にもなったことだし。

《かなり痛そうだったけどネー》

「痛そう」ではない痛いのだ。それも今の私にとっては凄まじく！
《あーうんごめん、ボクの失言だったヨー》
ああ、もう構わん。別に死んだわけでもなし、ただひたすらに痛かっただけだ。

《具体的にハー？》

足の骨を折っても気付かずに実験をしていた経験のある私が痛みのあまり泣いてしまうほどだ。

《そういう経験があるっていう所に驚いたんだけドー？》

気にするな。つまりこの体は痛みに弱く泣いてしまいやすいと言うことだ。表情は昔と同じように変えようと思わなければ変わらないようだが、なぜこんな所だけが変わってしまったのだろうか？

《それについては知らないヨー。ボクなにもしてないヨー》
そうか。まあ、それならそれでいいのだが。

ボクの見ている前でフルカネルリがすてんと転ぶ。

しかしすぐによるよると立ち上がり、ふらふらとするおぼつかない足取りでフルカネルリは家の中を歩き回る。

ボクは「あとでもいいんじゃないかナー？」と言っただが、フルカネルリは頑として首を縦に振るうとはしなかった。

「……………まったく、キミも頑固だネー」

ボクがポツリと呟いたその言葉は、ゆらゆらと色と姿を変え続ける見慣れた空に吸い込まれて消えていった。

……………まあ、そんなキミだからボクはこうして興味を持ったんだけど

ネー。

ぺしゃりと転ぶフルカネルリを見ながら、ボクはフルカネルリが言った言葉を思い出す。

「出来て困ることよりも出来なくて困ることの方が多いのだから、出来ないことを出来るようにすることが出来るうちに出来る限りの事はやっておくべきだろう？ そうじゃないか？」

……フルカネルリはそう言ったけど、それは人間の考えだからネー。ボクにはちよつとわかんないかナー。

これでも一応邪神だからネー。寿命なんて無いようなものだシー、死んじやってもいつの間にか生き返ってるからやりたくないことは後回しでもなんとかなつちやうだよナー。

……だからクトウグアのやつとも安心してケンカできるし、クトウグアのやつも加減なんて考えないでケンカにに応じてくれるんだよネー。

まあ前にボクの家を火をつけられたときは流石にちよつときれちやつたけどー。

まあ、それはどうでもいいヤー。邪神らしく考えるのはあとにしちゃう。

これから色々あるけど、頑張つてネー、フルカネルリ？

邪神なナイアの今の心境。

1 - 6 (前書き)

アクセス1万いったらなんか書きます。

フルカネルリだ。三歳になったが振り袖とか言う服を着せられそう
だ。これが嫌だと思ったら女物の服を着るのはやめようと思う。

《似合ってるけどネー》

五月蠅い、両手両足の爪の間に針金虫を入れられて激痛にのたうち
回って死ぬ。

《……フルカネルリも言うようになったネー》

お陰様でな。

《……想像したらなんか痛くなって来たヨー……》

……御愁傷様。

なぜ私がそんな服を着せられそうかと言うと、この国の「七五三」
と言う行事のためだ。

それで着てみたのだが、やはり落ちつかない。これはやはり私が男
であるからだろうか？

《そうなんじゃないノー？》

気の抜ける返事をありがとう。

という声や音のみを運ぶ箱。あの後写真を撮ったり神社にお参りを
したりして一日を過ごしたのだが、とりあえずもう女物の服は着た
くない。

特にスカート。あれは絶対に嫌だ。

……話は変わるがあの「カメラ」というものは素晴らしいな。あっ
という間にあそこまで精巧な絵を描き上げるのだから。いったいど
のようにして作られているのだろうか？ 非常に興味をそそられる。
ここに転生させてくれたナイアには礼を言っておくべきだろうな。
ありがとう。

《喜んでくれるとボクも嬉しいヨー》

そうなのか？

《そうだヨー》

そうか。

それにしてもここには私の興味を引くものが多すぎる。例えば「てれび」とかいう遠くのを映し出す箱や、「らじお」という人の声や周囲の音を集めて記録し、多くの場所に送ることができる箱。その他にも「しんぶん」という毎朝送られてくる情報媒体と、どのようにしてこのような均一な文字を書き続けていられるのか。非常に興味をそそられる。

《興味を持つのは良いんだけどサー、読めなきゃ意味ないヨー？》
読めるが？

《読めるノー！？》

読めるぞ。さらにいってしまえば英仏独、ギリシャにローマにエジプト、スペインまでならなんとかなるぞ。

《マジで凄いなフルカネルリー！》

そうか？ このぐらい私の回りには出来ない奴は居なかったぞ？

《……ああ、そう言えばフルカネルリがいるんな所から取り寄せた本を読むために皆に教えてたからネー》

知っていて困るより知らずに困る方が致命的だからな。私の知ることはほぼ全て弟子たちも知っているさ。

《……キミが暗号化してたあれハー？》

あれは、秘密だ。

《……ボクにも読めなかったんだけどー》

本当か！？ ふむ、私も中々やるものだ。

《……「中々」どころじゃないんだけどネー》

ナイアはそう言って軽いため息をついた。

「あ、い、う、え、お」

「あー、いー、うー、…えー、おー…?」

「そつよー、瑠璃ちゃん」

喋り始めてすぐに瑠璃ちゃんは文字に興味を持った。それで時間のある私が平仮名を教えているのだけれど、瑠璃ちゃんはかなり覚えがいい。今だって、

「……きょう、は、いい、てんき、です」

こうやって私が書いた平仮名をたどたどしくだが読んでいる。

「……すごく、可愛い。」

「……おかあさん?」

「はっ! だ、大丈夫、あつてるわよ瑠璃ちゃん」
危ない危ない、変な所に逝っちゃうとこだったわ。

「それじゃあ次は、書いてみよっか。『いろはにほへと、ちりぬるを』」

私がそう言つと、瑠璃ちゃんは鉛筆をしっかりと持って書き始める。持ち方はどうやら私を見て真似たらしく、普通のものより親指がやや下になっている。

「わからなくなったらお手本を見てね?」

私の癖を瑠璃ちゃんに真似させないように指を直しながら私の書いたいろは歌の紙を瑠璃ちゃんが見やすい場所に動かした。

「……うん、だいじょうぶ……『い、ろ、は、に、ほ、へ、と、…』」

じつと見てみるが、瑠璃ちゃんは癖を直された後はしっかりとそのまま字を書いている。間違いもない。

ただ、なぜか『の』の文字だけが特徴的で、終わりのところがくるりと上を向いている。

「……おかあさん。『けふこえて』、のあとつてなに?」

「『けふこえて』の後は、『あさきゆめみし、ゑひもせず』よ。もう少しね」

私が笑うと、瑠璃ちゃんもつられて笑う。

「うん、がんばる。……『あ、さ、き、……』」

……それにしても、本当に覚えがいい。これならすぐに片仮名の方に取っかかれるだろう。

……まあそれも瑠璃ちゃんがやりたいと言えはの話だが。

あまりにも覚えが良すぎるのにさらりと流す古鐘哀華のある昼下がり

1 - 7 (前書き)

なんか想像以上に読んでもる人がいるww
ありがたいことです。

フルカネルリだ。2日で平仮名をほぼ完璧に覚えたぞ。中々なものだろう。

《かなり凄いと思うヨー》

ありがとう。

ちなみに『ほぼ』と言うのは『ら』『や』『るゆ』といった特殊な発音をマスターしていないからだ。

《ごめんそんな発音かすつごく気になるんだけドー!?》

そうか。安心しろ、私も聞いたのにどんな発音かわからなかった。

《聞いたノー!? 誰ニー!?》

母に。

《その人ホントに人間なノー!?》

さあな。

さて、今日は片仮名を教えてもらおうとしようか。特殊な発音はほぼ確実に使うことはないと言われたし。

ちなみに今回の教師は父。休みをわざわざ削って教えてくれるそうなので、真面目にやろうと思う。

……と言っても平仮名の時もかなり真面目だったのだが。

片仮名は一時間もかからず終わった。平仮名に当てはめて覚え直すだけなのでかなり楽だった。

父は喜びながらも悲しそうという複雑そうな顔をしているが、大方私という時間が短くなるのは悲しいが私の覚えがいいということに喜んでもいるのだろう。おそらくだが。

……次は漢字にするか。だがこればかりは完璧にしてからというわけにはいかないだろう。軽く聞いただけでも漢字は五万以上の数と

それぞれにいくつもの音読みと訓読みがあるらしいし、つくりとへんで大体の意味を理解できるようにしなくてはならないらしい。

《難しいけど頑張ってるネー》

勿論だ。それだけではなく文法も学ばなくてはならないしな。

《……文法はわかるでシヨー？》

まあな。伊達に赤子をずつとやっていた訳ではない。簡単なものなら文法だって理解できるようになるさ。

……あくまでも、簡単なものなら、という話であるが。

《ほんとニー？》

ああ、本当だとも。

《……………》

『なんとなく』という言葉を使って文章を作りなさい。 例文、

「鬼も殺すことができるという彼女の苦手なものとは、なんと泣く子だという話だ」《

とりあえずその例文は間違っていると思うぞ？

『なんとなく』、ならば「なんとなくそんな気分なので今日の夕食のおかずはハンバーグにしよう」といったところではないか？

《……い、今はフルカネルリを試したんだヨー！》
そうか。

……………。

本当にそうか？

《そうだヨー！そんなんだヨー！》

……………そうか。ナイアがそこまで言うのならばそういうことにしておこう。

……やっぱり結構ちゃんとわかってるじゃないカー。

ああ、あれはわざとだヨー。たまにはフルカネルリにもツツコミを入れてほしくてネー。

今回のことでわかったこと、それはフルカネルリがクール系天然ボケ殺しだったことかなー。

……フルカネルリのバカー！ボケたらちゃんとツツコミ入れてヨー！ボケっていう人（？）種はツツコミが無いと寂しくって死んじやうんだヨー！

………うづ、誰でもいいからツツコミがほしいヨー。

あ、でもクトウグア式火炎ツツコミは要らないヨー。いくら死なないうっていつても熱いものは熱いし痛いものは痛いんだからネー。

それとハスター式竜巻ツツコミも要らないヨー。ズタズタに刻まれてゴミのように宙を舞うのなんて一回で十分サー。

ボクが欲しいツツコミはもっと優しいツツコミなんだヨー。

こっ、『おいおい』ってかんじデー、『ポフツ』ってかるーく手の甲で肩を叩く、みたいなサー、そんなのを求めてるんだヨー！

……このくらいの願いなら、願ってもバチは当たらないよネー？

ツツコミが無くて最近寂しいナイアの心境

1 - 8 (前書き)

なんか予想以上です。一日に50もアクセスがあれば良い方だと思
っていたので……

フルカネルリだ。とりあえず父の読んでいた新聞をすらすらと読める程度の知識は手にいれたぞ。よくやったな、私。

《オメデトー！》

ああ、ありがとう。

といつても『誰がどんな立場にあるか』、やら『とはなにか』といった知識が不足しているためにわからないことが多いのだが。

……まあ、それについては別にかまわない。

《いいノー！？》

ああ。今は、まだ、かまわない。

《……あー、後々何かしらあるんだネー》

ああ、ある。

が、今は全くもって必要ない。

………とりあえず今は数学について色々調べてやろうと思っ
ているところだ。私には一応の知識しかないのな。

《あ、そ。まあ、頑張つてネー》

頑張らせてもらおうか。

とりあえず基本の四則演算は前世と同じ程度にはできるとい
うことがわかった。これで後はどの程度のレベルかを理解し、それにあ
わせて計算をしていけばいいだろう。

まあ、おそらく私の知識の中には無いことが多々存在するの
だろうが、私の楽しみとはまさにそれだ。

知識に存在しないことを引き寄せ調べあげ徹底的に丸裸にして私
の知識の中に引きずりこむ。私はその瞬間が楽しみなのだ。

………どのようにして調べようか？

《この世界には『学習参考書』というものがあつてだネー》

なるほど、それで調べればいいのだな？

《そうじゃないかナー？》

ありがとうナイア。そういうことならば何とかしてその「学習参考書」とやらを手に入れなければならぬ。書店に行けば売っているか？

《……売ってるとは思いつけどサー、お金はあるノー？》

………無いな。

《ダメじゃないカー！》

………くっ、まさかそんな落とし穴が存在したとは………。

私がつくりと床に手をついて落ち込んでいると、ナイアから救いの一言が降ってきた。

《………キミのお父さんかお母さんに言えば昔に自分達が使ってたのだったら見せてくれるんじゃないかナー？》

………ありがとうナイア。生きる気力が湧いてきた。

《そこまで落ち込むノー！？》

ナイアが何かを叫んでいるが、私にとってはそこまでの事なのだから仕方がない。

私は立ち上がると、昼に使った食器を洗っている母の元へと急ぐのだった。

フルカネルリが自分の母親のところへぺたぺたと歩いて行くのを見ながらボクは一つ溜め息をついた。

………あのねフルカネルリ、何でキミはたまにボクにすら予想のつかないことをやってのけるのにこういふところではシツコミどころ満

載のポケキャラになつたりするんだい？

それはむしろボクがなりたいのー！

そう思うとなぜかちよつとムツとしたので落ち着くために軽くパズルをいじる。

カチャカチャと箱形のパズルが動いて揃っていた色がバラバラになる。

そうして崩れたパズルを組み直す。こういうパズルは得意じゃないけど好きだから落ち着くにはちょうどいい。

しばらくたつてパズルが全面揃った時にはイライラなんてどこかに溶けるように消え去っていた。

……ふう、落ち着いた。オチついた訳じゃないけど落ち着いた。

……うん、やっぱりボクはこうじゃないとネー。

フルカネルリの方を見るとフルカネルリのお母さんに昔使っていたらしい教科書を見せてもらっているけドー……どこからどう見ても小学校の教科書だネー。しかも一年生のやつだシー。

……まあ、最初はそれでもいいんじゃないかナー。ちよつとずつ上を目指していくべきだヨー。何事もネー。

邪神のくせに妙に人間臭いナイアの今の心境

1・9 (前書き)

まだしばらくはこういった話が続きます。

フルカネルリだ。学習参考書ではないが教科書というものを手にいれた。

……いや、実際は手にいれたのではなく母が昔使っていたというものを借りているだけなのだが。

《いいんじゃないかナー？ キミのお母さんもあげるつもりらしいしネー》

そうだとすると、これはまだ私の物ではなく母の物だ。

それに、母も私に渡すときに、

「たまにお母さんにも読ませてね？」

と言っていたので母も少しは未練があるのだろう。

《……まあ、確かになんでかたまーに昔の国語の教科書を無性に読みたくなる時つてあるんだよねー。なんでかは知らないけどサー》
ほう、それならば私にもわかる気がするな。

……と言つかナイアが国語の教科書と言つと違和感があるな。

《神立邪神学校第1129917期の卒業生んだけど、なにかおかしいところでもあつたかナー？》

……ほう、そんなところがあつたのか。世界は広いな。

《いやいやいやいや、この世界じゃないからネー？》

……つまり、行くのは難しいと言つ訳だな？

《はずれじゃないんだけど何か違う気がするナー》

……そうか？

《……フルカネルリつては本気で言ってるヨー。はやくこいつなにかかしないとネー》

なにか言つたか？

《ボクもちよつと昔の教科書読みたくなってきたナーって言つたんだヨー》

……そうか。

……なあ、ナイア。

《なにかナー、フルカネルリ?》

私にも読ませてくれないか? ナイアの使った教科書を。

《……フルカネルリ? 神位共通言語なんて読めるノー?》

なんだその聞いたことのない言語は。それでナイアの教科書は書か
れているのか?

《そうだけド?》

……頼む教えてくれ。

私がナイアに頼んでみると、ナイアは静かになってなにかを考えて
いるようだった。

《……まあ、いいかナー。いいヨ?》

しかしそれも数秒の事で、ナイアは軽く許可を出してくれた。

《普通なら情報量が多すぎて廃人になっちゃうとこだけどフルカネ
ルリなら平気だと思うシ。たぶんだけどネ?》

そんな言語があるのか!

《……だからツツコミ入れてってバー。なんでツツコミいれないの
サー?》

ナイアが悲しそうな声を出している。だが私はこんなとき、邪神相
手に何をすればいいのだ? ツツコミ? どのようなものなんだそ
れは?

《……あー、そこから説明が必要なのカー?》

すまないな。前世から人付き合いより研究をとる日々だったし、弟
子が多くなってからもあまり話すことはなかったのな。そういう
知識が乏しいのだ。

《……うーん、説明となると難しいナー?》

まあ、そんなものだ。ツツコミはできないが頑張ってくれ。

《わかったヨ?》

……さてと、私は母から借りた教科書を読むとしようか。

……まさかツツコミを知らなかったなんて思わなかったヨー。

まあ確かにフルカネルリがフルカネルリだった頃の事を知っていれば予想はできたんだけどサー。

それはそれとして、フルカネルリはどれくらいで神位共通言語を理解できるようになるかナー？

ちなみにボクの予想としては一月あれば語彙が五百と本当に初歩的な会話文ぐらいまでなら出来るようになるんじゃないかって思っていたりしティー。

普通の人間だったら単語を三つ理解するだけで頭の中身が情報に圧迫されて‘ぱんっ！’ってなるだろうし、それ以前に一つの意味を理解するのに何十年もかかっちゃって文章になる前に寿命で死んじやうと思っけどネー。

なんでフルカネルリが平気かっていうと、実はフルカネルリはそういうところではとつくにおかしくなっちゃってるからなんだよネー。だってほら、普通に考えて邪神とはいえ神の予想を外れさせることができると思うかナー？

……まあ、普通なら絶対……とは言わないけど、十の十五万乗分の一程の確率もないんだヨー？ 特に細かいくない予想ならこのくらいの精度はボクだって持ち合わせてるヨー。これでも一応神の端くれだからネー。

で、その予想を外すにはそいつが予想を遙かに越えておかしくなつてなきゃ外れない。そんな神たちが使う言葉が、神位共通言語なんだよネー。別に学校で習う訳じゃないヨー。

神位共通言語は神なら大体のやつが元々使える言葉で、それこそ人間の言葉を忘れてる奴や元々人間の言葉を理解できない奴、果ては

狂った神相手でも通じる言語なんヨー。

……狂った奴が相手の場合は通じても話し合いにはならない事が多いけどネー。

ただし、たまに神位共通言語が使えない神も居る。

そいつは例えば九十九神のなり損ないや、悪意が集まって出来た祟り神とかだネー。

こいつらは神位共通言語が使えないかわりに人語を理解できるのが多い。ここで人語も理解できないやつは最初からそう作られたか意思がないかだネー。

まあ、そんな感じで理解するのは難しいんだけど、フルカネルリならなんかボクの予想をまた外してくれそうで楽しみなんダー。

……ボクも頑張って教えるから、キミも頑張ってネー、フルカネルリ？

……じゃあ、初めは文字と発音を覚えてもらおうとしテー……

……

授業計画作成中のナイアさん

1 - 10 (前書き)

作者は三つは書きためておかないと怖くて更新できないアホです。

フルカネルリだ。ナイアに神位共通言語を教えてもらってから二週間。なんとナイアと神位共通言語で日常会話をたどどしくだができるようになったぞ。頭は少々痛くなつたがな。

《一応、言っておくけどネー？ 人間がこんな早さでこの言葉を理解してそれだけで済む方が異常なんだヨー？》
そうらしいな。驚きだ。

《……驚きつてレベルの話じゃないんだけどナー》
そうか。

それからというものの、なにかを理解できるようになるための時間が格段に少なくなった。何をやっていても

「神位共通言語に比べればこれくらいは……」
と思ってしまうからだ。

それだけでなく、何故か他の言語や書かれた数式、図面などの意味が何となくだがするするっと頭の中に入ってくるかのように理解できるようになってしまった。

《そのぐらいこの言葉を使えるようになれば普通だつてバー。だから人間だと情報量が多すぎて良くて発狂普通で廃人悪くて生きる屍最悪即死つて言ったんだヨー》
そうだったな。

《え、いやあの普通の廃人しか言っていないはずんだけどナー？》
そうだったか？ 確かに言っていたと思つたんだが。

私が軽く記憶の中に沈んでいると、……確かにナイアは全部言っていた。

となると、聞こえなくて当然程度の思いで口に出したか、ついポロリと出てしまったかのどちらかだろう。

……まあ、私にとってはどちらでも同じことだが。

たとえそれが聞こえていなくても私は神位共通言語を習おうとした
だろうし、ついうっかりだろうが聞こえなくて当然という気持ちで
言っただろうがそれを習おうとしたら。

と言っただ、今している。そして習っている。

なんにしる困っているわけではないし、頭痛もしばらくすれば治る
だろう。

《……キミなら明日の朝には治ってるんじゃないノー？》
そうかもしれないな。

私はナイアにそう言って、母と父の布団の間に敷かれた私の布団の
中に潜り込んだ。

「……おやすみなさい、お母さん、お父さん」

私が布団に入るのを待っていた母と父は、にっこりと私に笑いかけ
た。

すやすやと眠る瑠璃ちゃんの頭を撫でてやりながら、私と裕樹さん
も布団に入る。

撫でるたびに思っけれど、なんで瑠璃ちゃんの髪はここまできれい
なんだろう。

さらさらと水が流れるかのように私の掌の上で揺らぎ、しゅるりと
すり抜けるときには手にひっかかることもなく抜けてゆく。

……ほんと、ただ石鹸で洗っているだけとは到底思えない髪ね。

手櫛で髪をとかす時もブラシでとかしたときも、瑠璃ちゃんの髪が
途中でひっかかるのを見たことは今までに一度もない。

……自分の娘の髪に憧れるのもどうかと思うけれど、やっぱり少
し羨ましい。

私のも…………。

そこまで考えたとき、不意に裕樹さんから髪を撫でられた。

「僕は、哀華の髪も大好きだなあ」

………… あああああああああもこの人はあああああつ！！

私はつい緩んでしまいそうになる頬を引き締めて裕樹さんを軽く睨む。

………… 多分私は真っ赤になっているだろうが、それは意図的に無視する。

「………… まったく。そんな風に優しい言葉でいったい何人の女性を落として来たんですか？」

私がそう言つと裕樹さんは訳がわからないと言つかのように首を傾げた。

「………… 女の子の心の機微はよくわからないけど、僕が今一番好きで、一番大切な人は哀華だよ」

………… 前々から思つてはいたのだけれど、この人は鈍いのかそれともわかつていて惚けているのか、どっちなのかしら？

………… まあ、多分鈍いのよね。

それなのにこの人は私や他の人が困っているときにはいつのまにかそこにいて、迷っていたり不安になったりするとその時に一番欲しい言葉をくれる。

だからこの人はかなり人気があつたのよね。特に私の学年では。

そんな風にこの人の事を思い出していると、胸の奥から暖かくなってくる。

………… ああ、私はこの人のことが好きなんだなあ……………。

かなり重症な恋の病に現在進行形で冒されている古鐘哀華さんのとある夜の話し

1・111(前書き)

そろそろ小学生になります。

フルカネルリだ。この国にもクリスマスがあるらしい。正直この国の宗教に対する寛容さは驚くべきことだと思うのだが、邪神代表としてはどうなのだ？

《ボクにとつてはどうでもいいけど、あえて一言コメントするなら、「節操無さすぎじゃないかナー」、ぐらいだネー》
そうか。

私の前世の頃ならば宗教家たちが黙ってはいないだろう光景の中を私は母と一緒に歩いている。

……手を繋いでいるのだが、何故か母の方が私よりもずっと楽しそうだ。

「~~~~、~」

鼻歌まで歌い出した。いったい母に何があったのだろうか？

《フルカネルリとの初めてのクリスマスパーティーの事を想像して浮かれてるんじゃないノー？》

ふむ、母ならばあり得る話だな。

「~~~~ 瑠璃ちゃんとクリスマスパーティーだー」

《正解だったネー》

ああ、正解だったな。

私がそんなことを考えていると、母がきゆうに尋ねてきた。

「瑠璃ちゃん、なにか食べたいものはない？」

食べたいもの？ ふむ、食べたいものか……………。

私は考える。正直に言って母の料理は素晴らしいものが多く不満なほどほとんど無いために、なかなか出てこない。

「……………なら、お母さんの作ったご飯が食べたい」

と、いう訳で母に全部投げてやる。

「お母さんのご飯って、なんだかとっても美味しいんだもん」
私がそう言つと、母は驚いたような顔をして、それからゆっくりと微笑んだ。

「瑠璃ちゃんにそう言ってもらえるとお母さん嬉しいなあ　よーし、それじゃあお母さん頑張っちゃうぞー！」

母は笑い顔のままきゅっと拳をつくつて、それを空に向けて突き出しました。

……なんの意味があるのだろうか？　自分を激励でもしているのか？
《きつとそんなものだヨー》

そうか。まあ、頑張ってくれるのなら止めることはない。なんと云つても母の料理が旨いのは事実なのだから。

やっぱりフルカネルリは他人の心の機微に疎いんだナー。

自分の母親を不思議そうに見つめているフルカネルリを見ると本当にそう思う。

これじゃあ友達とかもできないんじゃないかなー。

……ボク？　ボクには居るさ。一応だけどネー。

ボクと本の趣味が合うノーデンス。

ケンカばかりだけど嫌いじゃないクトウグア。

ケンカっぱやいけど情には厚いイタクア。

引きこもり気味で無口で気弱なヨグソトス。

いつも二人で一緒にいるツァールとロイガー。

その他にも学校で知り合つたりご近所付き合いで知り合つたりした友達がいっぱいいるんだヨー。

中でも一番よく覚えている相手はと言つと、偶然にボクの家の前を

ティンダロスに追いかけられていたところを助けたクトちゃんかナ
ー？

ちなみにこのクトちゃんだが、クトウグアのやつの実の妹だったり
しテー。そしてクトウグアのやつは頭に超とつくほどのシスコンな
んだよネー。

で、それが原因で懐かれて以来クトウグアはボクに事あることにケ
ン力をふっかけてくるようになったとサー。どうもクトちゃんが学
校の将来の夢はボクのお嫁さんになることって言ったのが原因らし
いけドー……………どんな反応を返すべきやら……………迷うナー…
……………。

まあ、そんな感じでボクにだって友達はあるっていう話だヨー。
だからまあ、なんとかなるよネー？

妙な交遊関係ばかりが妙に広いナイアによる悪友の記憶

一万アクセス記念外伝（前書き）

一万行ったみたいなので投稿します

一万アクセス記念外伝

これは昔々の話。まだまだナイアが幼くて、あんまり物事を深く考えなかった頃の話。

神立邪神中学校の2年D組の教室にナイアの姿はあった。

のんびりとした空気に少しだけ幼さからの騒気が混じった不思議な空気を纏っているナイアは、特にすることもなく周りで騒がしく話を続けている少年少女達の話の聞いている。

ただ、聞いているだけで理解しようとしていないためだろうが、それらの話はナイアの右の耳から入って左の耳から出て行くような状態だ。

デイン、ドン、ダン、ドーン

大きく低くチャイムが鳴り響き、次の時間の到来を知らせる。少年少女達は慌てて自分の決められた席へと戻って行く。

ゴリリリ……、と鈍い音を響かせて扉が開き、金色の髪を持った誰かが顔だけを覗かせて呟いた。

「……自習、騒いだら沈める。監督はアブホース、みんな言うことはある程度聞くように」

そしてその誰かは顔を引いて、ゴシヤリと扉を閉めた。

「……はいはい、それじゃ自習よ。お話ししてもいいけど、後のことは自分で何とかすることになるわ」

そう声をあげたのは今監督役を任されたアブホース。少女らしいその姿からは想像できないほど低く重い声で全員を纏め上げようとしている。

だが、それでも騒がしいやつは出てくるもので、一人、また一人とこそこそと小声で話を始める。

そんななかでナイアはというと、周囲とはまるで関係ないと窓の外を見てぼーっとしていた。

「……おいナイア、聞いているか？」

「………え？ 何かあったノー？」

「聞いてねえのかよ！」

いつからかは知らないがナイアは赤い髪の少年に話しかけられていたらしい。

「うん。ごめんネー、クトウグア」

「ほんとだよ！」

「そこ！静かになさい！」

クトウグアの大きな声に反応してアブホースが注意する。

「何だところの石頭が！」

「貴方こそそのうるさい声を何とかしなさい！」

ギャーギャーと騒ぐ二人の姿をナイアは慣れたように見つめている。

そして一言。

「………仲良いネー」

「誰がだっ！」

「誰がよっ！」

ナイアの言葉に口を揃えて怒鳴り返す二人。そしてナイアはそんな二人の事を慈愛に満ちた目で見ているのだった。

ゴリリリ……、と鈍い音が響いて、もう一度扉が開いた。そしてそこから顔を覗かせたのは、

「……アブホース、クトウグア。………てめえらちょっとこっち来い」

「えっ！」

「ちょ、何で俺たちだけ！？」

明らかにイライラしている先生だった。

「え、だってボク自分の声だけは押さえてたからネー」

「この裏切り者おおっ！」

ゴツッ！

「いいから行くぞ。……アブホース、てめえは大人しくついてくるよなあ？」

「……はい」

そうして先生は 気絶させたクトウグアを引きずりながらアブホースをつれて教室を出ていった。

「………なんだ、クトウグアのやつはまだ言ってないんだネー」
ナイアはそれだけ呟くと、また窓の外に目をやった。

昔からそれなりに考えていたナイアの中学生時代。（厨二病にはかかったことがない、と言つか元々地で厨二的存在）

1 - 1 2 (前書き)

一万アクセス突破！
と、言うことで外伝を投稿しました。

フルカネルリだ。とりあえずはメリークリスマス。

……遅すぎるだと？ それについては仕方がない。だが私たちの存在する今、ここはクリスマスイブだ。

ところで、世の中ではクリスマス当日よりもクリスマスイブの方が大きく扱われている気がするのだが、これは私の気のせいだろうか？

《少なくともボクはフルカネルリと同じように思うヨー》
そうか。

さて、先ほど言った通りクリスマススイブなのだが、何故か朝から母が物凄く頑張っている。主に料理面で。

「瑠璃ちゃん 今日のごちそうよー」
そう言っただけで母が食卓に並べた料理の数々。

ビーフストロガノフに七面鳥の丸焼き。サラダにカボチャの令製スープにシャンパン（ノンアルコール）、さらに私が名前も知らないような料理がいつもより七割増しで広いテーブルのところ狭しと並んでいる。

しかも驚くべき事に、

「瑠璃ちゃんが『お母さんが作った料理が食べたい』って言うてくれたから、お母さん頑張っちゃった」

……今までの流れからわかると思うが、これらの料理は全て母の手作りだ。

《頑張るすぎな上にスペック高すぎでしょ君のお母さんはサーー！》
私もそう思う。

だがもう慣れた。慣れとは実に恐ろしいものだな。

《あー、そう言えばフルカネルリはもうこの人間と六年近く一緒なんだっけネー》

ああそうだ。そこまで長い間に生活を続けていれば慣れるさ。
まあ、別に慣れなくとも害があるわけでもなし、普通に暮らせるが
な。

《……ボクの場合はちょっと無理そうかナー》
ほう？ そのころは？

《だってツツコミ疲れしそうだシー》
なるほど。私には理解できない類いの理由だな。

《……バーカバーカフルカネルリのバーカ。いつかストレスで胃
に穴開けちゃエー》

……何故罵倒されたのかはわからないが、とりあえず胃潰瘍に
ついては健康の呪いで難しいと思うぞ？

《くそう、ボクのバカー！》

……ナイアはかなり頭がいいと思うのだがなあ。

《フルカネルリに言われるとなんか逆に嫌かナー》

……理解できん。

《だってボクは長生きしてるから知識と経験が人間より多いだけで
あって、実際はそこまで頭よくは無いだヨー？》
そうなのか？

《そうだヨー》

そうか。

「お父さんも帰ってきたし、ご飯にしましょ」
おっと、夕食か。

それでは、

「いただきます」

……ほんと、フルカネルリってば自分の理解力の高さをちゃんと

理解してないんだからー。今やキミの頭の中身は最下級の神を上回ってるんだからネー。

……最下級とはいえ神は神。普通なら人間が辿り着けるような存在じゃ無いんだけど、フルカネルリは元々の理解力の高さに加えてボクがそれをさらに強化しちゃってるからこんなとこまで来ちゃったんだよネー。

……しかも無意識だろうし理解もしていなかったらうけど、子供の体であるうちに、つまりまだまだ延び白があるうちにその延び白そのものを伸ばそうとしてるしサー。

……考え事をしてるときはいつも神位共通言語で自分の脳を鍛えてるし、ボクとの会話もみんな神位共通言語な上にいつの間にかボクとの会話と同時に他の人とも話しながら本を真面目に読んで内容をちゃんと理解して返事まで出来るようになってたしネー。

……フルカネルリってば、どこまでボクの事を楽しませてくれるのかナー？

退屈はキライ、面倒事はキライ、戦うのはキライだけどトウグアとのケンカはキライじゃない、ただしあんまり被害が大きくならなければっていう条件がつくけどネー。

あと他人が頑張るのを見るのはスキ、応援するのもキライじゃない、時と場合と相手によっては手伝ってあげてもいいって思う程度にはスキだヨー。

特に、ボクの退屈を払ってくれるような相手ならもうボクの方から手伝いに行っちゃうヨー。だってボクは退屈が大キライだからネー。……だから、フルカネルリ。

ボクはキミがキミ《フルカネルリ》で在る限り、キミの事を手伝ってあげるヨー。

実に不死者らしい考え方をするナイアの考えの一部。

1 - 1 3 (前書き)

最近気がついたこと。感想がないと意外と寂しい。

……と、言うわけでは非とも感想を下さい。

あ、それと三万アクセスになったらまたなんか書きます。

フルカネルリだ。明けましておめでと。

《オメデトー！》

頭の片隅でナイアがクラッカーを鳴らしたらしく、パーン！という大きな音がした。頭がくらくらする。

《あ、ごめんネー》

……いや、いい。

さて、年が明けたわけなのだが、その日私が起きたのは実は朝の五時半頃だったりする。

無論前日もいつもと同じ時間に眠り、そして今朝もいつもと同じ時間に来た。

理由については至極簡単で、私がそのような祝い事にあまり興味がなかったりするだけだ。

《フルカネルリはそんなことよりも知識を増やす方が好きだもんネー》

ああ、そうだな。その通りだよナイア。

だが母はそうではないらしく、私をつれて神社に行こうとしている。……仕方ない。行くのでしょうか。

だが着物は却下だ。

「えーっ！」

「だって嫌なものは嫌なんだ」

「……似合ってるのに……」

実はそれはそれで嫌になる原因の一つであつたりするのだが、それを言ってもなにも変わらないだろうし黙秘する。

「……どーしてもイヤ？」

「嫌だ」

「……………しょうがないなあ。上に何か着てから一緒に行こ？」
それならば私に拒否する理由はあんまりない。

《あんまりなノー！？》

あんまりだがなにか問題があるか？

ちなみにあるとすれば私の趣味の時間が減ることぐらいか。

《あー？ フルカネルリってそんな趣味って言えるような趣味持
ってたっケー？》

……………ナイア。お前は私をなんだと思っているんだ。私にだって趣味
の三つや四つぐらい持っているさ。

まずは思考実験。

《ごめん一個目からなんかおかしいヨー！？》

気のせいだそうに決まっている。

《気のせいじゃないってバー！》

知らんな。

そして学習。最近はさらに効率が良くなり、物体を見ただけでその
物体の用途が理解できるほどになった。神位共通言語は覚えれば覚
えるほどにさらにその先が、さらに長く、さらに遠くが見えて行く
素晴らしい学問だ。

しかもそれがあらゆる部門に共通して役に立つのだからさらに素晴
らしい。

《どうしようフルカネルリがなんか解析の魔眼モドキを自力で手に
いれちゃってるヨー！？》

解析の魔眼？ なんだそれは？

《……………あー、うん、フルカネルリが小学生になったらキミにあげよ
うと思っただうちのひとつだヨー。ものを見るとそれが何て言う名
前でどんな力を持っていてどの程度の性能があるのかや、既に完成
されたモノならどんな風に使うかを理解できる範囲で理解できるよ
うになる魔法の眼だヨー。それだけじゃなくて石とかに何がどのく
らいの割合でどんな感じに混ぜてるかも慣れればわかるようにな
るけどネー》

……つまり、その魔眼があるとそのものが理解できるわけだな？

《そうだヨー》

……それはすごいな。

ただ心配なのは、そこまで情報量が増えると頭が痛くなりそうだと
言うことだ。

《まあ、神位共通言語で慣らしてなければ痛みで発狂してそれ以上の
痛みで壊れたまま正気に戻ってを何十回と繰り返してもしょうが
ないぐらいには痛いかなー？》

おお、習っていて良かった神位共通言語。まさかこんなところでも
活躍するとは、思ってもみなかった。

《……またスルー？ またスルーするノ？ ポケ殺しの二つ名
がここまで似合う奴なんてクソ真面目の阿布ホース以来だヨー》
そうなのか？

《そうだヨー》
なるほど、そうなのか。

で、三つめだが、父に無理を言って一日に二時間だけ貸してもらえ
るようになったたパソコンで色々な所をまわってみることだ。所
謂ネットサーフィンというものだな。

《……あ、あれ？》
？ どうした？

《……フルカネルリなのに、普通だ……》

五月蠅い、耳の穴から水銀を注がれて鼓膜を破られ蝸牛を潰され脳
まで壊されて死ね。

《何処の水銀旅団！？》

別に私は水銀旅団などというところに加盟した覚えはないが？

まあ、そんなところだ。

《……うん、とりあえずフルカネルリにも普通なところがあったん
だネー》

勿論だ。

そんな話をした日の夜のこと。ナイアはふと気になってフルカネルリがいつも見ているページを見てみることにした。

「……えー、と……ここをこうして……こうかナー？」

ナイアがパソコンを弄ると、とある画面がナイアの使うパソコンの画面に映った。

「いよっし！さてと。フルカネルリはいつもどんなところを見るのかナー？」

画面に映ったそこにかいてある言葉はほぼすべてが英語だったが、神位共通言語をマスターしているナイアにとっては母国語と同じ。あつという間にかかれていることを理解した。

そしてそのページとは……………

「……フルカネルリ。キミはいつたいていどうやってあんなちゃちいパソコンで、しかも物理的に繋がりを断たれてる所にバレないようにアクセスしたのかナー？」

……そう、外とは完全に断たれているはずの、とある国の違法な科学研究施設だった。

しかもそのデータを片っ端から閲覧しているというのに、その行動は全く知られていないようだった。

「……やっぱりキミは普通じゃなかったナー」

ナイアは真っ暗な中で、ポツリと呟いた。

自分も出来ている時点でフルカネルリの事をどうこう言える立場ではないことに全く気づかないナイアのある日の夜遅く。

1 - 1 4 (前書き)

次からは小学校編です

フルカネルリだ。今年の四月から私も小学生だ。中々に喜ばしいことではないか？

《これであげようと思ってた能力をまたちょっとあげられるヨー》
…… おお、そういえばそうだったな。

《忘れてたノー！？》

いやいや、そんなことはないさ。ただ、今ある能力以上のものをこれまでに求めるようなこともなかったのな。意外だった。

《…… あっそ、別に良いけどネー》
そうか。

とりあえず入学式に着ていくものはパンツスーツになった。というか、してもらった。

スカートは嫌だ。絶対に嫌だ。下着？ 聞くな。私にはあれで限界だ。

《フルカネルリにスカートってけっこう似合ってたけどネー》

五月蠅い、蟹の鉋に頸動脈を切断されて死ぬ。もしくは熱濃硫酸のプールに溺れて皮膚から内蔵から骨からドロドロにされて死ぬ。

《まさかの二種類！？》

大丈夫だ。お前ならば死んでも何かしらの方法で生き返ってまたバカなことを言い始めるだろう。

《…… いやまあその通りなんだけどサー……》
そうだろう？

ところで、この国には妙に祭り事が多い気がするならない。

《まあフルカネルリにとってはすっごく多く感じるだろうけど、この国にとってはそれで当然なんだヨー》

つまりは慣れるしかないということか。

《そういうことサー》

そうか。

……ああ、それと一つ頼みがあるんだが。

《なにかナー？》

……私の母が私に着物を着せようと画策しているようなんだが、何とかならないか？

《……やらないヨー？》

……そうか、残念だ。

「瑠璃ちゃん！ご飯だよー！」

おや、もうそんな時間になっていたか。

私は自分の部屋を出て食卓へと向かう。……この階段は小さな体では色々と危ないな。

とととと足音をたてて母の元へ近づいて行く。するとコン口に置かれた鍋からはなんとも言えぬ良い香りがして、私の胃がくきゅうとなった。

……また今度、母に料理を教えてもらうことにしよう。未来のために。

《もうすぐ必要になると思うしネー》

………待て、どういうことだ？

《ん？ あれ？ 言っただけじゃなかったけナー？》

ナイアは私の問いに不思議そうな雰囲気の反応を返した。

《前から決めてあったんだけど、フルカネルリの十歳の誕生日に異世界旅行をプレゼントすることにしてるんだヨー》

………初耳だ。

なるほど、確かにそれならば料理も必要になる。それに今すぐでは死んでしまうかもしれんし、今からおよそ五年があるのだから新しくもらった力についても少しは慣れていよう。

………だが、時間はどうするのだ？ そのときになっても私はまだまだ子供の体であり、長い外出や泊まりなどは許してくれそうもない

ぞ？

《そこら辺は大丈夫だヨー。ボクはこれでも邪神だからネー、時間操作ぐらい片手間でできるのサー》
それは凄いな。

《すごいだロー！》

ああ、凄い。

ところで、長くしてどの程度で、こちらではどの程度の時間が過ぎるのだ？ それと、時間をいじるのは良いが、私の体の成長はどうする？

《それも大丈夫だヨー！行った先で流れる時間はこっちの時間の実に5256000倍！向こうの世界で十年暮らしてもこっちでは一分しか過ぎないのサー。帰りたいたいと思うか死ねばこっちに帰ってこれるヨー。死んで帰ってきた時には向こうの世界の記憶の半分が消えちゃうけどネー》

初めから死ぬ気はなかったか更に死ねなくなったな。

《さらに体については身体能力と記憶以外は成長しないヨー。簡単に言っちゃえば不老になるヨー》
恐ろしいな。だが死ぬんだろう？

《まあ首跳ねられれば死ぬネー》
それは仕方がないな。

他にも色々と聞いておきたいことがあるのだが、かまわないか？

《良いヨー、何でも聞いてネー》

そうか。それならばまずは……………

……………ふ、フルカネルリの知識欲をなめてたヨー。まさか話は

じめて二時間以上も質問が続くなんて思ってたヨー。

向こうでも能力は使えるか、とかそんな簡単な質問から向こうで自分が手に入れた能力や技術、道具などはこちらに持ってこれるのか、持ってこれたとしてちゃんと使えるか、そんな質問までいっっぱい質問されて、少し疲れちゃったシー。

ちなみに能力は使えるし道具や技術は持って帰ってこれるけど、置いとく場所は自分で何とかしてネー、って感じかナー。

記憶については、フルカネルリの脳の容量はもはや人外って言うても何らおかしいところが無い位には多いから心配はいらないよネー。

……だって、十八個くらい同時に神位共通言語でかつかなりの速さで思考をしながら外でお母さんやお父さんと楽しくご飯を食べながらお喋りできるんだヨー？ しかもそのまま三千年暮らしても脳の容量の一割も埋まらないし、何より………まだ容量増えてるしネー。

このままじゃ中の上級の神相手に思考速度で勝てるようになってっちゃうんじゃないかナー？ 教えたのボクだけどサー。

この成長は体が十八歳になるぐらいまで止まらないんじゃないかなー？

………あれ、異世界に行ってる間も増えてくつてことかナー？

………まあ、良いよネー。別に困ることでは無いわけだシー。

それじゃ、頑張ってるネー、フルカネルリ？

フルカネルリの人外つぶりに少し引いたナイアのとある午後四時頃。

2 - 1 (前書き)

小学生編第一話

短いです。

それと途中で異世界編に跳びますが、ちゃんと帰ってくる予定です。

予定は未定にして決定に非ず。どっかの誰かさんが言ったたような気がする。

フルカネルリだ。今日は小学校の入学式、スーツ姿の私は浮いているようだが私は特に気にしない。何故なら私は私で他は他だからだ。
《フルカネルリらしいネー》
今言ったが私だからな。

小学校の入学式なのだが、どうやら私が思っていたものよりずっと簡単なものであるようだ。

ただ、歌詞カードを渡されて校歌を歌うときに、曲や音程等がわからずに少々苦労した。

まあ二番からはちゃんと歌えていたがな。やはり神位共通言語は習っていて損はない。

《ピンポン、これはフルカネルリの場合だヨー。普通の人には当てはまらないヨー。具体的には頭が‘ぱんっ!’ってなることがあるヨー。習うんなら止めないけど気を付けなヨー》

ああ、そういえばそうだったな。気を付ける。

《……しくしく、悲しいナー。ツッコミの無いボケなんてさむい上に空気の読めない親父ギャグにも劣るヨー》

そうなのか？

《そうなんだヨー》

そうなのか。

……ところで、あれはなんとかならないか？

《ん？ どれどレー？》

あれだ、あれ。具体的に言うと、一番後ろのところで残像が見えるほどの速度で手を振っている母と、シャッターが擦りきれられるのではないかとこの速度で写真を撮り続けている父のことだ。

《……うっわぁ……》

まったく、さつきから眩しくてしかたがない。

《そこなノー！？》

? それ以外に…… ああ、他の人の迷惑になるな。

《考え直してそレー！？》

うむ、それぐらいだろう。

…… おお、ようやく終わりか。

《…… はあ。うん、そうだネー》

やれやれ、帰るとするか。

いやあ、ツツコミ疲れたヨー。まさかたった一時間にこんなにツツコミすることになるなんてネー。

まず最初につつこんだのは学校の花壇。

…… なんで生えてる草がハエトリソウとかウツボカズラとかそんなんばっかりなのサー！

それから校庭を見ると、何故か三角錘が。

危なすぎでシヨー！

水道の蛇口を捻ると、たまに「てけりり」って鳴く半液状のやつが出てきて目が合うと急いで逆流していくんだー。

…… なんでキミがそんなとこにいるのサー！？ こっちに来るときちゃんと税関抜けたノー！？ と言うか許可証あったら人型のはずだよネー！？ 無断なノー！？

その他にも開会の挨拶の時に、「これから第 × 回」って感じで始まった時とかネー。

…… この学校何年前からあるノー！？ 桁多いよ桁ガー！？ しかもその挨拶してるのクトちゃんだったシー。

…… なにやってんのサー！？ クトウグアも止めるヨー！？ クト

ちゃんいつも貧血ぎみなんだからサー！？

その上やっぱリクトちゃんが倒れた時に真っ先に来たのはクトウグアだったシー。

……だからこんなことになる前に止めるって昔から何度も言ってるだロー！ このヘタレ系天然シスコンメー！！

ちなみにこの後にクトウグアが「誰がヘタレ系天然シスコンだゴルアアアッ！」って叫んでたナー。

……思わずボクもつい色々と叫んでフルカネルリに「五月蠅い、なにもない空間で時計の音を聞き続けて発狂して死ぬ」って言われちゃったシー。

しっばいしっばい、気を付けヨー。

かなりの突っ込みスキルを持つナイアのある日のこと、再会編

フルカネルリだ。約束通りに新しい力をもらったのだが、死にそう
だ。主に頭の痛みで。

《ボクはちゃんとめちやくちゃ痛いって言ったヨー？》
わかってる。わかってるから今は話しかけないでくれ。

痛みは十数時間も続き、ようやく痛みが止んだときにはもう朝日が
上っていた。始めが前日の14時半だったことから考えると、ずい
ぶん長い間痛みを堪えていたんだと驚きの気持ちの方が沸き上がって
くる。

今となつてはなんともないし、見えないように抑えることもできる
ようにはなつたが、私は抑えることはしない。むしろ痛みを伴って
でもそれ以上を引き出そうとしている。

《……よく耐えたネー。正直に言うて発狂ぐらいはしちゃうんじゃ
ないかと思つてただけど、ってフルカネルリ!? なにやろうと
してルのサー!?!》
なに、少々訓練をな。

《バカ! いいからすぐやめて休んで! こんな状態で次の扉開いたら
》
ナイアがなにかを言い切る前に、私の意識は一瞬にして焼き切れそ
うになつた。

今受けた痛みなどお遊びだったと言わんばかりの激痛。
あまりの痛みの量に今まで抑え続けていた悲鳴が喉から溢れ、垂れ
流される。

しかし私は狂えないし壊れたくない。
狂った瞬間私は私ではなくなり、壊れた途端に私の意思が歪んでき
えてしまうからだ。

私はそれを許さない。何故なら私は私であるうちに世界を知りたいからだ。

私を見送った弟子たちに私は

「見聞を深めてくる」

と言った。

これは私が私でなければできないことだ。

だから私は狂わないし壊れない。それこそが私が決めた、私にとっての最高法規。これを守れぬのなら、いつそ私は消滅すべきだ。しかし私は消滅しない。私は私で在り続けるから。

気付いたときには痛みはおさまっていた。

その代わりに私に与えられたものは、無限と言っても良いほどに沸き上がってくる情報と、その全てに解を出す事ができる知識の数々。これだけでもあの激痛に耐えた意味はあった。

しかし、科学者／私／フルカネルリにとってこれほどつまらないことはない。

だから私は答えを出す知識の流入を停止する。

そして一息つくと、ナイアがありえないものを見たマッドサイエンティストのような雰囲気醸し出していた。

《……………フルカネルリってサー》

ん？ 私がなんだ？

《……………実は元々人外だったりしない？》

何をいきなり。それについては私よりナイアの方が詳しいだろう。だが、一応言っておく。

私は、『私／フルカネルリ』という人間以外にはなりたくない。

《……………ふーん、そっカー》

ああ、そうだ。

……………いや、少し訂正だ。

『私』であれば人外でも一向に構わん。

《いいノー！？》

ああ。

時計を見ると、すでに短針が7を指し示している。

ああ、ちょうどよく起きる時間だな。

いつもより段違い　どころか次元違いで頭が回る。

《そりゃそうでシヨ。あんだだけ無茶苦茶やったんだからそのぐらい出来るようになるサー》

無茶苦茶なのか？

《例えで言うと、イカサマ無しでサイコロで一を八十回連続で出ることを用意して一発で当てるぐらい無茶苦茶だヨ》

それはかなりの無茶苦茶だな。

《しかも使うサイコロは24面体で1から24まで規則正しく並んでるやつネ》

訂正しよう。かなりを乗り越えた無茶苦茶だったな。

まあ、これもひとえに慣れか。

《……もうなんかフルカネルリだからでいいヨ……………》
そうか？

……まあ、ナイアがそう言うならそうなのだろう。

フルカネルリはそう言ったけど、実はそれはボクのせいでもあったりするんだよネー！。

具体的には、下限値固定と成長速度上昇のせいだネー！。

実はボクもこんなことになるとは思ってなかったんだけど、下限値固定ってネー！

上昇速度まで下限値固定されるみたいなんだー。

簡単に言っちゃうと、一日で3成長した事があつたとすると、その日以降も必ず3は成長するようになるみたいなんだよネー。

もちろんそのあと3より多く成長すればそれだけ多く成長するし。で、何が言いたいかというと……赤ちゃんから小学生になるまでにどれだけ筋力が上がると思ウー？ 赤ちゃんの時にはどれだけの速さで脳の神経が繋がっていくか知ってるかナー？ ついさつき、たった数十分でどれだけフルカネルリの脳が強くなったか知ってるかナー？

……これからフルカネルリはどんどん成長していくはずなんだけど、人間ならみんな持つてる上限もなくなっちゃったし、どこまでいくか、ボクもちょっと楽しみだったりしてネー。

いつの日に行かせてあげる異世界の中で、フルカネルリが何をしで、どんな風に生きて行くのか。

今回フルカネルリにあげたもうひとつの能力に、フルカネルリはいつ気が付くのか。

気が付いたとしてどうするのか。否定するのか肯定するのか。受け入れるのか拒絶するのか。

フルカネルリがどれを選んで、ボクはそれを楽しむだけだし、ここにない選択肢を作っちゃうかもしれないからボクはフルカネルリから目を離せない。

……まあ、離す気なんて初めっからこれっぽっちもないんだけどネ

！。

ついでにボクの想像では、フルカネルリなら素直に受け入れてそれについての研究を始めると思うヨー。もしかしたら違う反応をするかもしれないけどー。

……………想像するだけでも、とっても楽しみだヨー？

楽しいことが大好きなナイアの考えた未来の話。

フルカネルリだ。栄えある小学校最初の授業らしい授業は何故か音楽だった。私はどんな反応を返せばいいと思う？

《歌えばいいんじゃないかナー？》

それはまた後でな。

学校に来て最初にすることは、クラスを見て、それから学校の中を見て何がどこにあるかを把握することだ。前のままでも全て記憶できただろうが、今ならばさらに詳しく知る事ができる。

見たものの名称を知り、どのような使い方をするかを覚え、形を記憶し、次のところへ移動する。

校庭と一階から三階までは一時間目が始まる前に記憶したが、四階より上は放課後になるまで行くことはできないようだ。

ちなみに一学年の教室は二階に存在するので既に確認は済んでいる。私のクラスは三組。全員で三十七人いるクラスで男女に別れている。出席番号は十四番。男女を合わせると二十九番と割と後ろの方だが私の席は一番左の一番前。

既に多くの少年少女が話したり笑ったりしている中を私は突っ切って自分の席へと向かう。何人かが私を見てヒソヒソとなにかを話しているが、私にはどうでもいいことだ。

《……ホントにいいノー？》
構わん。

私がそうして座って本を読んでいると、誰かが私の席の前にやって来た。

……誰だ？

私が顔をあげるとその誰かの顔が見える。

それは、少女だった。

わざわざ切るのが面倒だからという私と違って肩の辺りで自然に切り揃えられた髪の毛、元気そうな印象を受ける少女がそこに立っていた。

じつ、とその少女を見つめていると、その少女がなぜか少しずつ焦れているような空気を纏い始めた。

「……………何か用か？」

私がそう言うと、その少女はようやく口を開いた。

「あなたの名前は？」

……………おお、中々にいい声だ。私の好きな響きだな。

そんなことを思いながらも私はその少女に答えた。

「古鐘瑠璃だ。お前は？」

私にとつての普通の態度で返すと、少女は少しだけ不機嫌そうに顔を歪めた。

「……………そんなんじゃないよ、友達できないよ？」

……………別に構わないが、ここで少しだけ昔の記憶に思いを馳せる。

……………そういえば、私に友人と言えるような相手は片手で数えられる程度しか居なかったな。

「そうなのか？」

「わかつてなかったの!？」

わかったとしても直す気は特に無いが。

「ああ」

と、それだけ答えておく。

するとその少女は「しょうがないな」と小声で呟き、私と目を合わせてはつきりと言った。

「私は、春原白兔はるはらって言うの」

それから、私に向けて手を伸ばす。

これは、一応知っている。

私もそれに合わせて手を伸ばし、白兔の手を軽く握った。

「これからよろしくねっ」

にっこりと笑いながら私に向けてそう言った白兔に、私は苦笑と共に

に言葉を返した。
「そうさせてもらおうか」

初めてその子の事を見たのは入学式の時。

男子はズボンで女子はスカートと規則正しく並んでいるなかで一人だけ、女の子なのにズボンをはいていながら堂々としたその姿に、私や私の周りは目を引き付けられていた。

その子はどちらかというところ目で、周りのことにほとんど興味を持っていないようだった。

私の視線や他の人からの視線も感じていると思うけど、それでもその子は真っ直ぐに立っていた。

その時から、私の中にあの子が入り込んできた。

ずっとあの子の事が頭から離れないで少しだけ寝不足になっちゃったけど、私はいつもと変わらないように家を出て、二回目になる学校に足を運んだ。

クラス分けであの子の名前を探そうとしたときに、ようやく私はあの子の名前すら知らないことに気が付いた。

私は少し落ち込んだけど、名前を知らないなら今から知ればいいと思っ直して自分のクラスに行く。

だけど、いくら待ってもあの子は姿を見せなかった。

他のクラスも見てみたけど、あの子の姿はどこにもない。

諦めそうになったその時、教室の扉がカラカラと軽い音をたてて開き、私はずっと求めていた姿が現れた。

その子は周りの視線をもともせず自分の席へと向かい、静かに椅子に座って本を読み始めた。

私はすぐにその子に近づいていったけれど、その子は気付いていな

いみたいで本に視線を落とすままだった。

私はそんなその子の顔を見つめ続けた。

一番に目につくのが目。澄んでいてどこまでも見通せそうなのに底が見えない真つ黒な瞳にはあまり感情が見えないけど、どこか吸い寄せられるような感じがする。

……あ、睫毛。…長いなあ……。

じっ、と見つめていると、ようやく気がついたのかその子と目が合った。

その子は何も言わない。私も、何か言おうとしてるけど、言えない。ドキドキと大きくなっていく心臓の音をできるだけ無視しようと頑張っても、その音はどんどん大きくなっていく。

「……何か用か？」

それが、私と瑠璃が初めて出逢って交わした言葉だった。

この後の事はよく覚えていない。

ただ、頭の中のパニックを外に出さないようにしながらの会話をし、お互いに名前を教えあって、それから握手をしたことだけはちゃんと覚えてる。

その日から、私と瑠璃は友達になった。

初恋の相手は同姓だった春原白兔の運命の出逢い。

フルカネルリだ。小学校の授業が簡単すぎてつまらない。なんとかならないだろうか？

《無理だと思うナー？》

そうか。それは悲しいな。

とりあえず授業の方は置いておくとして、最近の私は学校の図書室をよく使わせてもらっている。この方がまだ有意義だ。

…ほう、地球とはこのようにして出来ているのか……………今の科学は素晴らしいな。

《正直言つてボクもこんなに早くここまで伸びると思つてなかつたかナー》

そうなのか？

《うん、そうだヨー》

そうなのか。

数週間の時間をかけて、私は図書室の全ての本を読みきった。放課後にもここに来て下校時刻まで粘った甲斐があったというものだ。

《……………よく三週間ちよつとで全部読めたネー》

なに、昔から速読は得意だったのだな。その上この体になってからというものさらに速度が上がったのだ。

今では旧約聖書でも十分あれば読み終えて内容を丸暗記できるぞ？

《……………もう一回聞けドー、フルカネルリってホントに人間なノー？》

恐らくは。

《断言してヨー！》

無理だな。

《無理なノー！？》

ああ、無理だ。

……ん？ 誰か来るな。これは……………、

「瑠璃ーっ！！」

ああ、やはり白兔か。

「図書室では静かにな」

「あ、うん」

白兔はあの日からなぜか私によくついてくるようになった。最近では私と一緒に図書室で本を読んで頭を悩ませるようになっていたのだが、理由は不明だ。

《鈍っ！？》

五月蠅い、カジキマグロに脳天から貫かれて死ぬ。

《早速図鑑の知識が活用されてルー！？》

当然だ。知識とは使うためにある。使わない知識などそのらのゴミにも劣る。ならば使うしかないだろう？

「ねえねえ、今日も図書室に行くの？」

ナイアと話をしていると、不意に白兔が話しかけてきた。

「今日は昨日借りた本を返すだけだな」

「じゃあこのあと一緒に遊ばない？」

なんと、私に誘いがかかるとは。両親以外からは初めてだな。

……………このあと、か。何か予定が入っているわけでもないし、やれることはほとんどない。ほんの少しできることは他の行動と平行してもできる思考実験程度だし、……………まあ、構わないだろう。

「いいぞ。どこに行く？」

私がそう聞くと、白兔は急に驚いたような顔になって、それから少しだけ頬を朱に染めながら、おずおずと口を開いた。

「……………そ、それじゃあ、私の家に来ない？」

瑠璃は変わった子だった。

放課後になるといつもすぐに図書室に行って本を読む。それがまたすごく早い。

私が隣で本を一冊読み終わるまでに瑠璃は両腕に山のように積んだ本をすべて読みきって、その本を返してまた山のように持ってきてを二回ぐらい繰り返してるのももう当たり前で、あまりの早さにどんな読み方をしているのかと思って瑠璃の方を横目で見てみると、瑠璃は本をぱらぱらと1ページずつ流すように読んでいた。

それで本当に読めているのか不思議に思ったので聞いてみると、瑠璃は読み終わった本の中から好きなものを選んでページを指定すれば読んでやる、と言ってきたので私は適当に一冊引っ張り出して、真ん中辺りのページを言ってみてみた。

瑠璃はそれを聞くとすぐに読み上げ始める。右側のページの一番上から左側のページの一番最後まで。

しかもその時も本を読むのをやめずに、ぱらぱらと流すように読み続けていた。

「……瑠璃って、すごいね……」

私がそう呟くと、瑠璃は本から顔をあげて私の目を見た。

「ありがとう」

……そしてそれだけ言ってまた本に視線を落とした。

そんな瑠璃が、今、私の部屋に来ている。

ある程度片付けてはいるけれど、なんとなく気になってしまっ

あれはちゃんとタンスの中に入れたよね、とか、瑠璃ってどんなことが好きなんだろ？ とか、本当に色々。

気が付いたらもう瑠璃は帰らなくちゃいけない時間で、私は玄関で瑠璃を見送っていた。

「それじゃあ、また明日学校でね」

「ああ」

瑠璃はそれだけ言うと、くるりと私に背中を向けた。

「……ああ、白兔」

そのまま瑠璃は顔だけを私に向けて、

「なかなか楽しかったぞ？」

そう言った。

ふわっと私の中に暖かい何かが生まれた。

「今度は私が白兔を招待しよう」

私は瑠璃のその言葉に、元気よく頷いた。

この日は嬉しくて嬉しくてなかなか眠れなかった白兔の最初の
記念日

2・5(前書き)

およそ一話＝一月の話です。

例外は多々ありますがね。

フルカネルリだ。この学校の行事は妙に多いと思うのだが、どう思う？

《まあ、五月に一、二年生遠足＋五年生修学旅行、六月に三年生社会科見学、七月に四年生林間学校、六年生修学旅行、九月に運動会で十月に文化祭、十二月には希望した人はスキー合宿で一月になったら書き初め大会、二月には豆まきがあつて三月には卒業式と、何も無い月が十一月しかないもんネー》
そうだな。

……それと、書き初め大会の優勝賞品は餅が十七キロらしいぞ？

《マジ！？ それちよつとほしいかもしれないヨー！？》

そうか。ならば少し狙ってみるか。

《ありがとネー》

なに、気にするな。

と、言うわけで遠足に来ているのだが、周りの皆の体力の無さには少々驚いた。

《いや、フルカネルリの体力が多いんであつて他の子達の体力は普通だヨー？》

そうなのか？

《そうだヨー》

そうか。

白兔は普通についてきているからこれが普通だとばかり思っていた。

《ぎーんねん、違うんだナー》

そうらしいな。よくよく見てみると他についてこれている者は数人しかいないし、私達がおかしいのだろう。

《そのおかしい組のトップはフルカネルリだと思うけどネー》

私もそう思うよ。

「…瑠璃ってすごいよねー」

「？ なんだいきなり」

「だって、そんなにおっきな荷物持ってるのに何でもないように歩いているんだもん。……何はいつてるの？」

白兔が言ってきたのは私の背負う鞆。別に大したものはいっていないのだが……。

《なんか三十キロぐらいははいつてそうだよネー》
はいつてるぞ、三十キロ。

《はいつてるノー！？》

ああ、はいつてる。

「大したものではないが、塩と胡椒と唐辛子と砂糖とソースと醤油と山椒とにんにくパウダーとターメリックとカレー粉と酢と弁当と水がはいつているが？」

「何で?!？」

「使うことがあるかもしれないからだ」
あるよな？

《な、ないんじゃないかナー？》

そうか？

……まあいい。

「あとはレジヤーシートと筆記用具とラー油だ」

「そこでラー油!？」

何か問題でもあったか？

《ないけど、どうかと思うヨー》

そうか。まあ、どうでもいいな。

私の鞆の中身はそんなものだ。あとは本。

「……あー、瑠璃？ それ、なに？」

「本だが」

白兔の問いに即答する。うむ、何もおかしいことはない。

「……遠足に持ってくるような本には見えないんだけど……」

「そうなのか？」

「……やっぱりわかってなかったんだね」

遠足に本を持っていったとはいけないという話は聞いたことがないんだが。

そう思いつつ、私は今読み終えた大判のハードカバーの本を背中
の鞆に一気にしまいこみ、次の本を取り出した。

「いくつ持ってきてるの!？」

白兔が驚いているようだが、私は構わず返す。

「精々十五だ」

「それでも多いよ!？」

そんな話をしながら私と白兔は歩き続けていた。

仲良く歩いているフルカネルリとそのお友達をのんびりと見ながら
ボクは思う。

後ろの方にはクトちゃんがついてきてるけど、あの子は貧血ぎみだ
から倒れちゃわないかちょっと心配だナー。

ちよい、と後ろを振り向くと……ほら、やっぱりネー。

「……きゅっ」

「し、しっかりしろ!クト、クトうぶれるうあっ!？」

「貴方はもう黙ってなさい!」

クトちゃんが倒れてクトウグアが焦って叫んでアブホースがそんな
クトウグアをぶん殴って止めている。

昔ならここでボクが止めるんだけどー、今はアブホースも手加減し
ながらぶん殴れるみたいだし、ほっといてもいいかナー。

「っ……てえな!おい堅物女!いきなり何してくれやがる!」

「うるっさい!っ言うか貴方は副校長でしょうが!さっさと学校に

もどって仕事してなさい！」

「もう終わったよ！俺はクトのためならナイアのやつに頭を下げる
ことだってできんだよ！あのくらい余裕だね！」

「……え？ あれ、おかしいナー？ クトウグアがアブホースを言
い負かしそうになってるなんター……夢かナー？ 夢なのかナー？

「っ……また貴方はクトちゃんのことばかり……たまには……」

「あん？ なんか言ったか？」

「っ！ 何でもないわよ！」

「……アブホースが……自分の気持ちを……クトウグアの前で言っ
ているなんター……」。

うん、きつと疲れてるんだなボク。そうだよそうに違いないと言っ
かそうであってください本当ニー。

「あ、フルカネルリ？ ボクちよつと寝るかラー」

それだけ言って返事も聞かないうちに布団を出す。最後に使ったの
いつだったっけナー？

「……まあ、いいや。」

オヤスミー

ありえない現実から目をそらしたナイアのとある午前十時ごろ

2・6（前書き）

なんか妙なところで飛んでることがあるんですよ？

何ですかね。

少しずつ直していこうと思います。

皆様も見付けたらできればいいので報告をお願いします。

フルカネルリだ。学校の本を全て読み終わってからというもので、暇でしかたがない。なんとかならないだろうか？

《思考実験でもしてたらどうかナー？》

それはもうやっているが、新しい知識が入ってこないというのは私にとって苦痛以外の何物でもないのだよ、ナイア。

《…めんどくさい性分だネー》

自覚はしているさ。

と、いうことを母に話してみたら、

「じゃあ、近くの図書館に行ってみない？」

と言われた。

……この近くに図書館があったのか。知らなかったな。

《今度白兔ちゃんと一緒にこの町を散歩してみたらどうかナー》

それはいいな。まあ、白兔がそれでいいと言ったらの話だな。

《言つと思つヨー》

そうか。ならば今度暇なときにも誘ってみることにしようか。

母につれられて図書館に。学校以上の本に少々驚いている。しばらくはここに通いづめになりそうだ。

《白兔ちゃんが泣くヨー？》

大丈夫だ。白兔は私に付き合っただけの本を読みふけているうちに少しは本が好きになっていくからな。

《なんでわかるのサー？》

頭の中の電気信号を解析しておよその気分や考えていることを読み取った。

《読心術ダー！？》

いやいや、まだ不安定でな。喜怒哀楽とかの大雑把な感情ぐらいしかわからない上にある程度強くないと読み取れないのだ。

と言っても情報を抑えてなければ考えていることも感情も何となく感じている程度の弱々しいレベルからもう読まなくてもわかるほどの強いレベルまで全て理解できるだろうが。

……前に一度、このあたりにいた通行人にやってみたら出来たことだし。

《実験済みなノー!?》

実験済みだが？

それとこの目は、手書きの本ならば作者が何を思っ書いたのかが理解できるようだ。流石に大量生産された新聞や教科書の作者の意向は読み取れなかったが、それでもちらりと目をやるだけで内容だけならば頭の中に入って来るようになった。

簡単に言えばサイコメトリーだな。ただし接触する必要が無く見ただけで理解ができる。

《やっといてあれだけどやっぱり反則だネー》

本当にな。

この日のうちに貸し出しに必要なカードを作っておき、さらに貸出しできる限界まで借りた。明日ここに来たときに一番に返却するつもりだが。

貸し出し期間は二週間。冊数は五冊。それ以外にもいくつも読みあさり、これだけで私のなかで行き詰まっていた研究がいくつか息を吹き返し、今までは想像で補っていた部分に確実性の高い事実を当てはめることができた。

《想像で埋めてたわりには齟齬が少なすぎやしないかナー?》

一応初めは浅く広く、徐々に深く調べて行くつもりだったのだが、どうも想像が自重を忘れたらしくてな。止まらなかつたのだ。

《あ、それなら仕方ないネー》

ああ、仕方ない。

ボクが見ている前でフルカネルリがばらばらと本を流すように読んでいる。これで一言一句間違わずに覚えてられるって言うんだからすごいよネー。

しかも昔読んだ本の中には暗号になってて一行間違えると全部わからなくなるようなのがあったからってページも行も自体も筆跡も全部完璧に覚えるようにしたんだとか言ってたシー。

……いやあ、人間ってすごいネー。たまにボクたちですら考え付かないようなことを平気で考えちゃうシー。

……いや、人間だからこそ、なのかナー？

……まあ、ボクはそんなことなんてどうでもいいけどネー。

ボクにとって大切なのは、自分の命よりも何よりも『娯楽』だからネー。

なんてっ たって邪神だシー、殺されても死んでもいつの間にか元通りになるからネー。

……それでも痛いものは痛いし苦しいものは苦しいからわざわざ死ななくていいときはできるだけ死にたくないだけだネー。

……あ、これ『娯楽』を『知識の探求』に変えて不死性を無くすとフルカネルリそっくりになるナー。発見ダー！

自分とフルカネルリの共通点を見つけて喜ぶナイアの思考より。

三万アクセス記念外伝（前書き）

三万行ったようなので更新します。不意打ち更新です？

次は五万行ったら書きます。

三万アクセス記念外伝

これは昔々の話。まだまだナイアが幼くて、あんまり物事を深く考えなかった頃の話。

邪神学校の2年D組の教室では、今まさに二柱の邪神が全力でぶつかり合っていた。

「てめえは毎日毎日ぐだぐだとぬかしやがって！いちいちうるせえんだよ！」

「貴方の都合なんて知ったことじゃないわよ！」

最早このクラスどころか学校中に有名になっている二柱。クトウグアとアブホースのいつも通りの大喧嘩と言う名のじゃれあいであった。

「おい、二人とモー。間もなく先生が来るヨー」

「そんなことはどうでもいい！」

「ほう？ 『どうでもいい』か」

いきなり聞こえた声にアブホースとクトウグアの肩がびっくう！と跳ねる。

「ボクはちゃんと『間もなく』って言ったヨー」

「文字通り間がねえのかよ！」

「黙れ」

ゴツッ！

先生の拳が降り下ろされ、クトウグアの頭に大きなたんこぶを作り上げた。

「これからホームルームだが、アブホースとクトウグアは終わったら職員室に來い」

「センセー、クトウグアは気絶してて聞こえないと思いますけどー

「？」

「ならお前が連れてこい。……それでは出席をとる……」

「……おい、クトウグアア？」

ナイアがクトウグアを起こそうと肩を掴んでがくがくと揺さぶっているが、クトウグアは頭の回りに星を飛ばしたまま帰ってこない。

「……仕方ないナア。これだけはやりたくなかったんだけど、やるしかないよネー？」

ナイアはクトウグアの耳元に口を寄せ、あることを呟いた。

「……早く起きないと、クトちゃんはおくがもらっていつちゃうヨ
ー」

「待てごるあああああつー!!」

いきなり跳ね起きたクトウグアと衝突しないように、ナイアはすつと体を引いた。

しかし体を引いただけでこのシスコン邪神の追及を逃れることなど出来るわけもなく。

「おいてめえナイアクトに手え出すたあどういことだコラ眼球引き抜いて食わせるぞあゝあゝ？」

「……って言えって今職員室にいるアブホースが」

「あんのアマあああああつー!!」

クトウグアはそこまで聞くとすぐさま教室を飛び出して職員室へと走っていった。

「……別に言っていないヨア。人の話は最後までちゃんと聞こうネア」

……と、最後にぼそつと付け足したナイアは、クトウグアが出ていった扉をこりりり……と閉めて自分の席に座ったのだった。

もちろんこの事でアブホースとクトウグアに一日中睨まれていたことは言うまでもない。

「おるあああつー!!」

「よつと、危ないナア」

「私もいることを忘れたのっ！」

「いやいや、覚えてるヨー。せいやっ」

ナイアはアブホースとクトウグアに昼休みに全力で襲われていた。力任せに殴りかかってくるクトウグアと、蹴りが主体のアブホースにナイアはめんどくさそうな表情を浮かべたまま逸らしたり投げたりして逃げ回っていた。

「……あー、なに、二人の初めての共同作業はボクのお仕置きなのかナー？ 仲良いネー」

「誰がこんな頭がつちがちの堅物なんかと仲良しだ！」

「誰がこんなちゃらんぼらんでいいかげんな人と仲良しなのよっ！」

「っだどこの才槌頭！」

「五月蠅いわよこの焼き猪！」

ナイアの一言でアブホースとクトウグアの矛先がお互いに向き合い、いつの間にかナイアはその場から消えていた。

「だってボクまだご飯食べてないんだヨー」

策士ナイアのとある日の昼時

フルカネルリだ。七月になったのだがこの国は暑くなったり寒くなったりと本当に面白い気候をしているな。

《フルカネルリの前世の住んでた所は一年中暖かったもんネー》
そうだ。よく知っていたな？

《これでもボクは邪神だからネー。これぐらいはおちやのこさいさいサー！》

そうなのか？ それはすごいな。

《ありがとネー》

この一月は白兔と一緒に図書館に通いづめだった。まあ、あと二三日で全ての本を読み終わるだろうが。

「はう……一杯本読んだ」

「疲れたか？」

私がそう聞くと白兔はこくりと頷いた。まあ、無理もない。もう二時間以上も本を読み続けているのだから、小学生の白兔が疲れてしまつのもわかる。

そこで私は白兔の頭を引き寄せ、私の腿の上に乗せる。ここ最近はずっともこうして腿の上で体を楽にしている白兔の頭を撫でながら本を門限ギリギリまで読んでいる。ちなみに白兔の頭を撫でるのがなければ三日前にはこの図書館通いの日々も終わっていただろうが、その事は白兔には言っていない。

まあ、私もこのぬるま湯のような平和な日常をそれなりに気に入っているという事だ。

さらに、さらりと白兔の髪を梳く。白兔の髪は私のそれよりも遥かに柔らかく、私の指に馴染むような気がする。

《そのぶんフルカネルリの髪は痛まないししなやかだし瑞々しいし

艶やかだし丈夫だしきれいだけどネー」

そうなのか？

《実はそうだったりするんだよネー》

そうなのか。

「……………楽しい？」

白兔が私に聞いてくる。私はそれに対する答えを一つしか持ち合わせていない。

「楽しいかどうかはわからないが、こうして白兔の髪を弄るのは気に入っている」

「……………ふーん、そっかあ……………」

白兔はそれだけ呟いて、ふっ、と目を閉じた。

新しく借りた五冊の本を持って図書館を出たのは五時の半ばだった。夏は明るい時間が長いいためこのぐらいの時間まで図書館にいても怒られることはない。

「……………ふあ……………」

「こらこら、こんなところでそんな大きなあくびをしていると……………」
ゴッ！

「あいたあつ！？」

「……………またか。いい加減に懲りたらどうだ？」

頭を電柱に派手にぶつけた白兔の額を優しく撫でてやる。……………コブまでは行ってないな。軽い打ち身程度だろう。アザも……………まあ、できないだろうな。

それに若いのだし、なったとしてもすぐに治るだろう。

《ちなみにキミは健康の呪いと成長速度上昇で上がった+下限値固定で上がり続けた再生力でとかげの尻尾みたいに腕ぐらいならほっとしても治るヨー。切れた先の腕があるならくつつけた方が早いけどネー》

なるほど、そこまでか。

……………ふむ、私も順調に人外への道を突き進んでいるわけだな？

《その通りサー》

ナイアと話をしている間も私は白兔の額に一応絆創膏を張り付ける。いつもいつも白兔が頭をぶつけるので今では常備するようになってる。

「うう……瑠璃、ありがと……」

「次からは気を付けることだ」

いつも通りのやり取りをして、白兔は私と別の道を歩き出す。

「それじゃあ、また明日ね」

白兔が夕日のなかで私に言う。

「ああ、また明日」

私もそれに返す。昔に比べればかなり社会的になってきたな。

《……元々が最低値だから上がるか現状維持しかなかったんだけどネー》

五月蠅い、蟹の鋏で頸動脈を掻き切られて出血多量で死ぬ。

《前から思ってたけど何その地味かつかなり嫌な死に方ハー！？》
軽い罵倒だ。

《軽いけどひどいネー》

それはそうだろう。

瑠璃が学校の図書室の本をすべて読み終わってから一週間後、今度は近くにある大きな図書館の本を読むようになっていた。

まあ、私も瑠璃と一緒に本を読むようになってから少しは本を読むのが楽しくなってきたからいいんだけど。

それでも疲れるものは疲れるから、私は途中でリタイアして瑠璃の膝枕を堪能していたりする。

……うーん、瑠璃はスカートはかないからわかんないけど、手はと

つてもきれいなんだよね。だから多分他のところも………うん。
それはおいといて瑠璃の膝枕だよ。

いつも長ズボンで長袖で、あんまり他の人と触れあおとしない瑠璃だけど、実はとっても優しい。ついでにこれは学校では私しか知らないと思うけど、なんだかすごく落ち着く臭いがするんだよね。頭撫でてもらうとついつい眠くなっちゃうし。

瑠璃ってなんだか『優しいお姉さん』って感じなんだよね。だからついつい甘えちゃう。

だけど止める気はないっ！だって気持ちいいんだもん！

帰るときになると私はいつものように電柱に頭をぶつけた。どうしてかこの電柱はどれだけ気を付けててもぶつかっちゃうんだよね。なんでかな？

前に瑠璃に聞いてみたら

「幽霊が呪いでもかけているんじゃないか？」

そう真顔で言われた。

しかもなんでかすごく真面目に。

その日も瑠璃から絆創膏をもらって家に帰ったけど、今日こそはゴッ！

……い、痛い………

どこか抜けたところのある白兔の夏の日の不幸話。

フルカネルリだ。夏休みに入って宿題が出たのは良いが、簡単すぎて単純作業になってしまっているんだが、これはどうするべきだと思おう？

《とりあえず終わらせるべきじゃないかナー？》
安心しろ、とつくに終わっている。

《なら安心だネー。ボクの中学の頃の先生ってこういうのにはアバウトなんだけど色々とめちやくちやな人でネー……》
いや、ナイアもおそらくその先生とやらも人ではないだろう。

《………はっ！？ そういえばそうだったヨー！》

さて、宿題も終わったことだし、図書館にでも行くとしようか。あそここの図書館はたまに不意打ちでいい本を追加するからな。

《へー、どんな本があるノー？》

そうだな……こんなものがあるぞ。

私はオススメの本を手を取った。

《えーとなになに…… 『簡単な人造人間の作り方』初級編』って

これはなんなのサー！？》

見ての通りの本だが。

ちなみに中級編と上級編もあつたぞ。暗号化されて児童書のなかに混ざっていたが。

《これ書いたやつはなに考えてんダー！？》

まったくだな。こんな簡単な暗号にしおって。あの馬鹿弟子が。

《ツツコミどころが激しくずれてる上にフルカネルリの弟子の一人だっター！？》

ああ、この特徴的な筆跡を忘れるわけがない。この、どう頑張ってもUにしか見えないWなど、スプリングゴートのやつ以外には狙っ

ても書けはしない。……今の私ならばわからないがな。

《やってみルー？》

やめておこう。これで染み付いたらそれこそ馬鹿だ。

ところで、最近気づいたことがある。

《なにになんなノー？》

うむ。大したことではないのだが、この図書館で本を読んでいるとたまに血まみれな女がその辺りをふらふらと歩き回り、時々本を読んでいる者の後ろからひよいと覗き込んでいるということがあったのだ。

《どう考えても幽霊ダー！？》

そうなのか。幽霊か。

……………ふむ。

《……もしかして、研究したいとか考えてたり……》

？ ナイアは何を言っているんだ？

当たり前じゃないか。

《まさか過ぎる返答だよそれー！？》

そうか？ 私にとっては神だろうが悪魔だろうが幽霊だろうが妖怪

だろうが私の知らないものは全て研究対象だ。

《……え、ちよつと待って……それはつまり、……………ボクも？》

してほしいのか？ ならば私の全身全霊を持って解析して解剖して改造して改造してナイアの全てを理解できるまで研究しつくしてやるが？

《まっぴらごめんだヨー》

まあ、そうだろうな。安心しろ、神についてはいつか機会があればにしておくさ。

《……ふー、良かったー》

そうか。

さて、ナイアが安心したところで、今日は家に帰るとするか。

《あれ、なんかいつもより早くないかナー？》

ああ。明日が父の誕生日らしいのでな。何か手作りのもので母とお

揃いにしても違和感が無いようなものを作るつもりでいるのだ。

《オー、親孝行なフルカネルリだネー》

からかうな。それに大したことではない。前世では足りないものは自分で作ることが多かったのだからこのくらいのことなら簡単だ。

《ちなみに材料ハー？》

父の飲んだビールの缶を削って潰して粉と板にした物だ。つまりアルミだな。

《小学生が考えて手作りするにはレベル高すぎでシヨー！？》

頭の中身は八十過ぎの爺だがな。

《あ、そっぴやそっぴやだったネー》

忘れていたのか。まったく。

フルカネルリの作っているペンダントを覗き込む。

沢山のアルミ缶を潰してから削って粉にしたものをどうやってか溶かして一枚の板になっているそれを、フルカネルリは釘の先で細く模様を削り出している。

……よくこんな作る気になったよネー！。

縦4センチ横1.5センチ厚さ二ミリほどの角は削り取られて丸みを帯びているそれを折り曲げないように削るのは小学生には大変なはずなんだけど……まあ、フルカネルリだし、結構簡単なんだろうネー！。

お父さんにあげるそれは、絡まることなく上に向かって伸びている草と、その上で輝いている真ん丸な月が描かれている。

……正直フルカネルリにこんな美的センスがあるとは全く思ってたなくて、凄く意外だナー、と思って見てた。

ちなみにお母さんにあげる方は上は太陽で下は大きな木を描くらし

いヨー。

まあ、体を壊さない程度に頑張つてネー。

夜更かしするフルカネルリを見守るナイアの思考より。

2・9（前書き）

なんかばあちゃん死んだらしい。よって少し休みます。
明日の分は今日の3時に更新するので許してくださいな。

フルカネルリだ。夏休みがもうすぐ終わると言うところで白兔が私に泣きついてきた。

『白兔ちゃんは宿題が終わらなさそうな目でフルカネルリを見ていルー。助けてあげルー？』
まあ、助けても別に私は困らないな。

図書館に全ての終わっていない宿題を持ってくるように言ったのだが、自由研究以外全ての宿題を持ってきた。

「……………白兔？」

「うう……………ごめん……………タスケテ……………」

……………まったく、仕方のないやつだ。

「……………自由研究以外は写してかまわん」

「わーい！ありがと瑠璃えもん！」

瑠璃えもん？ 私は古鐘瑠璃だが？

『ボケ潰しが出ター！』

ナイア、ここは図書館だ。静かにしろ。

『あ、うん、ごめんネー』

よろしい。

『……………ってボクの声が外に聞こえるわけないじゃんカー！』

『……………聞こえてるわよお……………？』

おや、どうしたのだアザギ？

『まずこいつにボクの声が聞こえていることにツッコミいれてヨー！』
そんなことをしたところで得るものなどほとんどないだろうが。それならば受け入れて話を聞いた方が有意義だ。

『……………うふふふ……………瑠璃は頭がいいわねえ……………』
そうか？ まあ、ありがとう。

私とアザギとナイアの三人で話をしていたのだが、途中で近寄ってきた白兔が言った

「……なんか瑠璃の周りがあり得ないくらい寒いんだけど……」
という言葉に一時中断することになった。

これからアザギは私に付いてくるようにしたらしく、気付いた時にはすでに私の左肩の上を占領していた。

……重いのだが。

『……あらそう？　じゃあ……』

そう言っアザギがなにかをすると、アザギの体の重みが消えた。どうやら浮いているらしい。

……ふむ。どのようにして浮いているのか、非常に興味がある。

『……私達幽霊の体はねえ……実は物理現象より意思力の方が優先されるのよ……』

……大雑把に理解した。それはとても面白そうな存在だな。研究のしがいがありそうだ。

『……あらあ、私研究されちゃうわあ……』

《何で楽しそうなノー！？》

私は楽しいぞ？

『……私はねえ……ふふふ……秘密よあ……ふふふふ……』

そうか。いつかその存在を完璧に理解してやる。

『……あらあらあ……？　……うふふ、頑張つてねえ……？』

頑張らせてもらおうか。

ちなみに白兔は私の家に泊まって宿題を終わらせた。

よく頑張ったな。

夏休みに入ってから遊びすぎて宿題をやるのを忘れてた事に気付い

たのは八月の半ばを過ぎてもうすぐ夏休みが終わってしまいう頃になつてからだつた。

急いで宿題を片付けようとするけれど、このままじゃ絶対に間に合わない。

そんなときに、瑠璃の顔が思い浮かんだ。……そうだ、瑠璃なら……。

すぐに瑠璃の家に電話をかけて宿題が終わっているか聞いてみると全部終わってるって言ってたので、お願いしたら図書館に必要なものを持ってくれば写しても良いっていつてくれた。

私は終わっていない宿題　まあ、全部　を持って図書館に行つた。

……瑠璃はため息について私を見たけど、仕方ないな、という顔で写させてくれた。

やっぱり瑠璃って優しいよね。ちょっと分かりにくいけど。そうしているうちに不思議なことが起きた。

なぜか瑠璃に近付くととても寒くなる。

それを瑠璃に言ってみると瑠璃は少し考えて、それからなにかに気付いたように納得の表情を浮かべた。

「ふむ、すまないな。それはおそらくこの者のせいだ。……見えるか？」

瑠璃はこの者、と言つた時に自分の肩の上を指差した。

……え、ごめんそこなにか居たりするの？

私が混乱していると瑠璃はいつも通りの目を少しだけ細めて言つた。

「……ああ、白兔は‘見ええない’人か。何でもない……気になるなら私の家に場所を移すか？」

……色々ツツコミたいことはあつたけど、今の私にそれはかなりどうでもいいこと。すぐに頷いて道具を片付ける。

……結局その日は半分徹夜で次の日に凄くお昼寝しちゃつたけど。

……えーと、瑠璃は温かかったです！

小学一年にして夏休みの宿題をギリギリに片付ける行動に出た
白兔の思い出。

2 - 1 0 (前書き)

約束通り

フルカネルリだ。九月に入ったのだが何故か給食がかなり豪華だ。何がどうなっているのだろうか？

《秋は美味しいものが一杯の実りの季節だヨー！》

……まさか、それが理由か？

《クトちゃんならたぶんそう考えるヨー》

そうか。邪神の考えることはよくわからないな。

《他人がなにやるかだってわかんないでシヨー？ それと同じサー》
なるほど。つまり気分次第と言うことか。

《そういうことだネー》

体力測定ではかなり手を抜いたため、私はあまり大変そうなものには出なくてすむようだ。

《あ、運動会の話ネー。何に出るのかナー？》

私としてはどれでもよかったのだが、どうやら50m走に出ることになっているようだ。

《へー、そうなんだー》

ああ。

……ちなみに、優勝したクラス全てに山菜が送られるそうだ。

《山菜！？》

山菜。

《何で山菜！？ 何がどうなって山菜になったノー！？》
知らん。私に聞くな。

とりあえず私は賞品で母に旨い料理を作ってもらいたいのでそれなりに本気でやるつもりだ。

……そう言えば、異世界旅行中は自分で食事を作らねばならないな。軽く基本だけでも母に習っておくべきか。

《その方がいいと思うヨー》
そうか。

さて、私の出番だ。走ってくるか。

この体になってから久しぶりに全速力で走った。中々に早く走れたと思う。

《一着オメデト》

頭の片隅でクラッカーが弾けたような軽い音がした。ナイアがなにかやったのだろう、前回より頭に響かない。

《改造してあんまりうるさくないようにしてみたヨー！》
よくやってくれた。

このあとで私が出なければいけないものは……応援合戦と、玉入れか？

……やるだけやるとしよう。私一人で勝負が決まるとは思えないが、少しでも有利にもってゆく事ぐらいはできるだろう。

《フレ、フレ、フルカネルリー》

『……頑張つてねえ……うふふ……』

アザギか。朝はどこにいた？

『……寝てたわよあ……寝坊しちゃったあ……』

《それでもキミほんとに幽霊なノー！？》

さあな。本人に聞いてみたらどうだ？

『……ふふふ……さあねえ……？』

……だ、そうだ。

《答えになってないヨー！？》

そうだな。

『……そうねえ……うふふ……』

《わーん！ボケ潰しが二人に増えたヨー！》

ナイアも大変だな。

『……何があつたのかしらねえ……？』

《しかも一人わざとダー！》

まあ落ち着け。アザギは一体であって一人ではないぞ。

《フルカネルリは注意するところがおかしいってバー!》

そうなのか？

《そうだヨー》

そうなのか。

フルカネルリの活躍もあってフルカネルリのクラスは優勝することができた。

……玉入れで入った玉の数〃得点って言うのはすごかったネー。フルカネルリなんて拾っては投げ拾っては投げをどんな速度でやったのかは知らないけど一人で八十個は入れてたしネー。

そしてその日のフルカネルリの晩御飯は山菜尽くし。山菜のお吸い物や山菜の揚げ物。山菜サラダに山菜炒め。さらに山菜の擂り下ろしを使って作ったらしい山菜のデザート。

……正直言って美味しいのか疑問に思うのもあったけど、フルカネルリ達は美味しそうに食べてたヨー。ボクもちよっと食べてみたいような食べたくないようネー……。

……いや、やっぱりいらないヤー。なんというかこう……怖い
かラー。

それに、ご飯だったら自分で作れるしネー。これでも昔クトちゃんに料理を教えたことがあったんだヨー？

最近フルカネルリの方ばかり見てて全然食べてなかったけど、たまにはいいかネー。

……別に食べなくなたって死んだりしないけど、美味しいものを美味しく食べたいって思うのは人間も神様もおんなじだと思っただよネー。

食べないときは百年単位で食べないが食べるときは百トンの単位で食べるナイアの夕食（結構久しぶり）

2 - 1 1 (前書き)

色々ありましたが大丈夫なようです。でもやっぱりばあちゃんは死んじやってますけど。

と、言うわけで不意打ち更新行ってみましょうかそうしましょうか。金曜に葬儀です。

フルカネルリだ。文化祭はいいのだが何故かやることになった演劇で私がヒロインのシンデレラをやることになりそうだ。冗談じゃない。

《可愛いと思うんだけどナー？》

五月蠅い、大量の蚊に全身から血を吸い尽くされて死ぬ。

《想像するだけで痒いんだけドー！？》

五月蠅いと言っている、おろしがねで手の指先から腕、肩、胸、そして全身全て削られて死ぬ。

《今度はやたら痛そうなのが来たヨー！？》

仕方ないだろう、私は今追い詰められているのだから。

始まりはクラスで演劇をやることになったところまで遡る。

私は基本的に何でもよかったのだが、どうしても女らしい服を着るのだけは嫌なのだ。

だが、誰が言ったか私はあれよあれよという間にシンデレラの役を押し付けられた。

「なあ白兔。私は女らしい格好をするのが嫌だと言ったよな？ なのになぜこんなことになっている？」

「えー、私も瑠璃のかわいい服を見てみたいなーって」

おお白兔、お前もか。お前も敵か。

……………まったく。

「今月は休む日が多くなりそうだ」

「文化祭まで休み続ける気だー！」

「何の話がよくわかるな」

「わかる方なんだ！？」

それはもう。スカートなど履いてたまるか。

「……どうしてもだめ？」

頑なに拒み続ける私に白兎はうるうるとした目を向けてくるが、
「だめだ」

私は当然却下する。前世で色々と苦勞したせいだが、私にこのような情に訴えるやり方は通用しない。特にそれが私の嫌なことなら尚更だ。

「……そっかあ……そんなに嫌なら、しょうがないよね……」
こうして私はスカートを履かない役を貰うことになったのだった。

結局シンデレラの役は白兎がやることになった。

私か？ 私は人気が無かった司会だ。

文句を覚えて台本なしで言えるようにした。このくらいならば片手間で出来るさ。

あと、何故か服は道化師のような服だ。これが不人気の原因だったような気もするが、私にとってそれはスカートよりずっといい。

それと、この学校の文化祭は外からも人が来るのだが、そのなかには当然私の父と母も居た。

父は父で私を写真に納め続けているし、母は母で私を影からずっと見ている。

「……ねえ」

「言うな。わかっているから言うな」

流石の白兎も少し引いていた。まあ、仕方ないな。あれはな。うむ。ちなみに文化祭の時のみだが仮装も許されているので私は司会の格好のままだ。

そんなわけで私と、私と一緒にいる白兎はこの文化祭の中でかなり目立っていたと思う。

……校長達ほどではないが。

何故かと言えば、生徒たちに仮装を許可した理由は、校長が仮装したいと言い出したからだそう。仮装を許可してからというもの校長は毎年毎年かなり凄い仮装をしているからだ。今年は翼が三対あ

る天使らしい。重くないのだろうか？

「……きゆう」

「クトおおおおっ！！」

「うるっさい！叫んでる暇があるならクトちゃんを保健室に連れていきなさい！」

……どうやら重かったらしく校長は倒れて目を回してしまった。そしていつも通りの副校長と教頭の口喧嘩が始まった。

……元気なことだ。

若いつて良いネー。

ボクはフルカネルリと白兎ちゃんが一緒に歩いているところを見ながらそう思う。

……いや、ボクはそんな年寄りじゃないヨー？ まだ五億年ぐらいしか生きてないから年寄りじゃないヨー。まだまだ若いヨー。

……うん、きつとネー……。

……おっと、フルカネルリの方を見てなくちゃネー。人間はほつとくといきなり凄い早さでなにかをしたすから気を付けなくちゃナー。

……ってクトちゃん！？ 何着てんのサー！？

そんなの着てたら倒れちゃうヨー！

「……きゆう」

遅かったあああああっ！？

……ま、まあクトウグアかアブホースがなんとかするよネー？

心配性なナイアには文化祭とは心配事増幅機……かもしれないという話

2 - 1 2 (前書き)

また投稿を始めようと思います。無駄に不意打ちして申し訳無いで
す

フルカネルリだ。初雪が降って白兔は外ではしゃいでいる。私は中で本を読んでいるがな。

《えー！何で外で遊ばないノー！？》

図書室に新しい本が入っていたので借りてきたからだ。外に持って行って濡らしてはまずいだろう？

《あー、確かにネー》

そうだろう？

外では白兔達が雪合戦をしている。校長が混ざっているように見えるのは気のせいではないだろう。

……あ、校長の頭に雪玉が。

「クトに何しやがんだゴルアアアツ！」

「生徒にガンつけるなこのバカ！」

ゴツツ！

「つてえええ！」

……なんだ、いつも通りだな。

《そうだネー》

……さて、次だ。

その日の体育は何故か雪合戦になった。なんでも校長の提案という名の気まぐれらしい。

《クトちゃん何やってんのサー！？》

まだまだ子供だと言っことだろう。私よりずっと長生きな気もするが。

……いくつだ？

《えっとネー…四億二千万ぐらいかナー？》

かなり長生きだな。

《神様から見るとまだ子供だヨー》
そうか。

「瑠璃っ！」

ん？ ああ、雪球か。

ひよい、と避けて手に持っていた雪球で反撃。相手の額に直撃し、倒れた。

……よし、盾になってもらおう。

《ド外道ダー！？ド外道がいるヨー！？》

ド外道？ 何処だ？

《自覚ないノー！？》

無い。と言うか使えるものは最期の最後まで使ってこそだろう？

《最期？ 今、最期、って言わなかつたター！？》

言ったがどうかしたか？ 壊れようが死のうが最後まで使えるところは全て使いきるぞ私は。

生きていれば生きていたで使い方を変えて、できるだけ長く、できるだけ多くのことをやらせるように使い潰すが。

《フルカネルリって研究者より『職業：外道』の方が似合ってるよ
うな気がするヨー！》

……ナイアが何を思うかは自由だが、一応言わせてもらおう。

私は、研究者で、探求者で、学者なのだよ。

その過程で邪魔があるなら排除するし、欲しいものがあるならば解析して作り上げるか探すか奪い取る。

……まあ、奪うのは最終手段だが、どうしてもということになった
ならば躊躇はしない。

私が勝てないものは、私自身の知識欲だけだ。

……ああ、ナイアにも勝てる気はしないな。

《……うーん……ありがとう？》

どういたしまして。

雪の影に隠れながら少しずつ移動する。相手はまだ気付いていない。そう思った俺はすぐさまそいつの隠れているはずの雪の壁の横に出る。……………居た。

そいつはいつも通りに何を考えているのかわからない顔で手に持った雪玉を手の上でくるくると回して遊んでいた。

古鐘瑠璃。それがそいつの名前だ。

「瑠璃っ！」

俺が雪玉を投げようとした時に古鐘といつも一緒にいる春原が古鐘に呼び掛けて俺のことを教えたが、この距離なら絶対に外さない！そう思いながら投げた雪玉は、俺の方を振り向いていた古鐘にあっさりと避けられた。

そして、俺の目の前には古鐘が投げた雪玉。

ゴッ、と音を立てて俺にぶつかった雪玉は、妙に固かった。

暗転

気付いた時には保健室で校長先生の隣のベッドの上にあった。どうやら俺は古鐘に気絶させられたらしい。

……………ついでに最後まで盾にされ、何発も雪玉をぶつけられたらしく、色々な所が痛い。

……………くっそお……………。

凍った雪玉で気絶させられた上に盾として有効活用されたところからクラスメイトの話

《ちなみに雪玉が凍ってたのは偶然だヨー。フルカネルリの手の熱で少し溶けてまた凍ってできただけだヨー。フルカネルリはそこま
で外道でも鬼畜でもないヨー。……たぶんネー》

それとナイアからの簡単な注意。

フルカネルリだ。クリスマスのはずなのだが何故か私はサンタクロースの格好をしている。ちなみに白兔のリクエストだ。

《別にミニスカサンタとかじゃないヨー。ちゃんとズボンだからネー》

説明ありがとう。

始まりは冬休みに入ってすぐのこと。白兔が私たちと一緒にクリスマス会を開きたいと言ったのが原因だ。

白兔は既に自分の両親に許可をもらっており、後は私たちがどう答えるかを待つばかりだったそうさ。

…まあ、今私がこのような格好でいる時点で答えは想像できるだろう。私の両親はどちらも喜んでいただけ言うておくが。

「おー、瑠璃サンタだー！」

「…メリークリスマス……？」

この服を着ることになったときにこう言うようにと言われた言葉をそのまま繰り返す。

すると白兔と母がしばらく静かになった。

「………」

「哀華。鼻血鼻血」

「白兔？ 鼻血が」

「………あっ」

父と白兔の母に状態を指摘され、母と白兔は鼻をつまんで上を向いた。

……上でなく下を向いた方が良いと図書館の医学書に書いてあったような気がするのだが………まあ、良いだろう。

《良いノー！？》

良いさ。

幸いすぐに鼻血は止まり、何事もなかったかのようにパーティは続いた。

《いやいや!? ダメでしょそれハー!?》

気にしなくても良いと二人とも言っていたし、平気だろう。恐らくは。

《あ、断言はしないんだネー》

しない、と言うよりできない。私はこの先のことが全て見えているわけでもないし、見れるとしてもあまり見ようとは思わない。

《……ふーん、そうなんダー?》

ああ、そうだ。

……ところで、なぜ私はこの服を着たまま食事をしているのだ? そろそろ頭のあたりが暑苦しいのだが。

「……これは、脱いでは」

「ダメ」

間髪入れずに母と白兔に否定された。

父を見してみる。冷や汗を流しながら目を逸らされた。

白兔の両親を見してみる。ただにこにここと笑っていて表情が読みにくい、加勢してくれることは無さそうだ。

ナイアは……頼るだけ無駄か。

《ごめんネー。何もできないこともないけどやらないヨー》
やはりか。

《……やっぱりツッコミはないんだネー……ボクは悲しいヨー》

しくしくとわざとらしく泣いているが……まあ、演技だな。無視して良いだろう。

《泣くヨー? 泣いちゃうヨー? ボクってけっこう打たれ弱いんだヨー?》

泣きたければ泣け。打たれ弱いナイアなど想像できん。

私がそういうとナイアは私の頭の片隅でしくしくと泣き始めた。

……おや、あんなところに羽の生えた人型の虫が。

《それ虫じゃなくて妖精だヨー!》
ほう、あれがか。あのテレビを見ながらクッキーをかじっているあれが妖精か。

《俗世に染まってルー!?!》

まあ、妖精だろうが染まるときは染まるだろうさ。

フルカネルリ達のパーティを見てると、昔のことを思い出すナー。それは何億年か前のこと。クトウグアとアブホースとクトちゃん、その他にも仲の良かったやつらをボクのうちに呼んで、小さな小さなことで意味もなく宴会を開いてみたんだよネー。

何を思って開いたのかはもうあんまり覚えてないけど、その中で何があつたのかは良く覚えてる。

皆が皆、色々なものをボクのうちに持ってきたんだけど、その中にお酒があつたのサー。

……ちなみにお酒は一億二千万歳になってからだヨー。これを守らないと先生に鉄拳制裁されちゃうから気を付けようネー。

この時? 大丈夫、みんな一億二千万歳を越してたからネー。年増? 八八八ハハ、アブホースに言ったら殺されちゃうヨー? クトちゃんにもネー。

まあ、そんなわけでみんなでお酒を飲んで、歌って踊って騒ぎまくって、酔ったアブホースが意味なくクトウグアにキレたりクトウグアがヒヤッハハ言い出してボクにポッコボコにされたりノーデンスがボクのうちの本を勝手に読んでテンションがすごいことになったりしたわけだネー。

……フルカネルリ達はそんなことはないみたいだけどネー。

……久々にかーさんに顔見せにいこっかナー。

次回の出番を失うことになっちゃったナイアの話
いつか里帰り編も書くかもしれない。

……望み薄ですがね。

五万アクセス記念外伝（前書き）

五万アクセス突破ありがとうございます。
という事で投稿します。

五万アクセス記念外伝

これは昔々の話。まだまだナイアが幼くて、あんまり物事を深く考えなかった頃の話。

夏になったら海に行く。そのつもりだったんだけど、よくよく考えてみたらクトウグアとクトちゃんか海に入れるわけもない。仕方ないよね炎の神性だもノー。

「通販で耐水ジェル売ってたけど……効かないかなあ？」

「……い、いや、無理だと思うヨー」

「……そっか」

うん、ヨグソトスには悪いけど塗る相手がクトウグアとクトちゃんだからネー。すぐに蒸発して焦げちゃうと思うヨー。

「……じゃあ、これならどうかなあ？」

そう言つてヨグソトスが出してきた物は、ヨグソトス本人が作ったらしい何かの薬瓶だった。

「耐水耐熱耐炎耐刃耐冷氣耐電耐衝撃耐爆ジェルなんだけど……」

「……なんと言うか、ヨグソトスってすごいよネー」

ぼつりと呟くと、ヨグソトスは首を横に振った。

「……ううん。僕なんかより、ナイア君の方がずっと凄いよ」

「人の長所なんて人それぞれだって、前に言わなかったっケー？」

「……僕達、人じゃないけどね」

ヨグソトスとナイアは視線を絡めて、くすくすと笑いあった。

「……それじゃ、これ貸してくれないかナー？ と言うか一緒に海に行こうヨー。きっと楽しいヨー？」

「へっ？ 僕？」

ヨグソトスは驚いたように自分を指差し、声をあげた。

「…………ボクはヨグソトスとも一緒にいきたいんだけど……………ダメなら良いヨー」

「い、行くっ！行きたいよ僕！」

海に来た。それは良いんだけどクトウグアとクトちゃんの水を怖がって仕方がない。

「大丈夫だヨー、しっかり掴まっててネー」

「てめえナイアクトから離れろ！うるさいわよっ！」うおっ！？いきなり何てことしてくれやがる！？」

クトウグアが騒いでいるけどアブホースに水をかけられてものすごい勢いで引いてった。

「あの耐水ジェル塗ったんでしょ？ だったら平気よさあ入りなさい」

「っざけんな！何で俺が！」
聞いているとなかなか進まないようだったし、ちょっと発破かけてみた。

「…………もしかしてサー……………怖い？」
この時点でびっくう！とクトウグアの肩が跳ねた。わっかやすすいネー？

挑発の意味も込めてクトちゃんを抱き寄せて、

「クトちゃんだって入れるのに、お兄ちゃんのクトウグアが入れないのかナー？」

「なっ！？ ん、んなわけねえだろ！」

…………釣れちゃったヨー。単純だナー。

…………まあ、クトウグアがアブホースの前で弱味を見せたいと思うわけがないんだけどネー？

「ねえ、クトちゃん？」

「はい？」

ボクの腕の中でおとなしくしているクトちゃんに話しかける。

「妹が水に入ってるのに怖くて水に入れないお兄ちゃんって、どう思つかナー？」

「カッコ悪いです」

その答えにクトウグアは絶句して、ボクを睨み付けた。なんか『後で殺す』って言われてる気がするけど、少なくとも今日は無理だと思っヨー。

何でかって？ 簡単だヨー。

「アブホース。助けてあげてネー？」

「は？」

ボクがクトウグアを海に放り込むからサー。

「お、ちょ、まっ！」

「待たないヨー。えいっ！」

クトウグアを抱えたままボクの分身が海にドボーン！分身はすぐに消したから掴まるものは何もないネー。

そこ足つくけどサー。

それに気づかないクトウグアは何故かどんどん沖に流れていく。何でだろうナー。

ちなみにアブホースが助けた時にはマジ泣きして抱き付いてきたらしいヨー。

アブホースもそんななか見ることができないクトウグアを見て、なんか『きゅんっ』と来たみたい。

クトちゃん？ とりあえず手を離して浮かぶことができるようにはなったヨー。進歩進歩。良いことだネー。

夜になって、なんとなく皆が眠ったころ。ひとつの影が動き始めた。

「……ヨグソトスー？ どうかしたノー？」

ナイアがその影に話しかけると、その影はビクッと震えた後、ゆっくりと口を開いた。

「……僕、邪魔じゃなかったかなあ？」

「なんでサー？ ボクは楽しかったけど？」

「第一、ボクが来てほしいって言ったんだからサー。ヨグソトスはヨグソトスで楽しんでくれた方が、ボクは嬉しいヨー？」

ナイアのいつも通りののんびりした顔に、ヨグソトスは不意に涙を溢れさせた。

「え、ちよ、なんで泣くのサー？ ボク今結構良いこといったよネー？ 泣かないでくれヨー。反応に困るんだヨー」

そう言いながらわたたとナイアはヨグソトスをあやし始めた。

昔のナイアの夏休み〜海編〜

フルカネルリだ。初日の出は一応拝んだが、何か良いこともあるのだろうか？

……ナイア？ どうした？

いつもならばすぐさま軽口を叩くはずのナイアが、今日に限って何も言っていない。

不思議に思っていると、頭の中に妙な物を見つけた。

いつもナイアがいるあたりに、何故か立て札に貼り付けられた紙。それに目を通してみる。

《フルカネルリへ

ちよっとかーさんに顔見せに里帰りしてくるヨー。一応、直ぐに帰ってくる予定だからのんびり待っててネー。

ナイア

p・s お土産は期待してて良いヨー》

……なるほど、里帰りか。

まあ、たまには良いのではないか？

「瑠璃っ！あけましておめでとーっ！」

「ああ。おめでとー」

私が答えると白兔はとても嬉しそうに笑った。

『おめでとお……うふうふう……』

おお、アザギか。幽霊が神社に来て平気なのか？

『大丈夫よお……？……ここの神って……三流だものお……うふう……』

ほう？ そうなのか？

『ええ……そうよお……？』
なるほどな。

……となると、別に祈る意味は無いのか？

『……ほとんどねえ……？……くすくすくす……』
そうか。

「……あれ？ 瑠璃は神様にお願いしないの？」

「ああ。もうすでに色々と聞いてもらっているからな」

「へー、そうなんだ？」 「ああそうだ」

神は神でも邪神だがな。

お年玉を父と母から貰う。五千円ずつ計一万。何に使うか迷うところだ。

「大切に使うのよ？」

「はい。お母さん」

……貯めておくとするか。今はどうしても欲しいものなど無いことだし。

もらったそれを自分の部屋の本の中に隠す。実際はこんなことは必要ないと思うのだが、一応な。

『……いいんじゃないかしらあ……？』
そうか。

家に戻ってすぐに布団に入る。この体で夜更かしはなかなか辛いのだ。……まあ、できないわけではないのだが。

……さて、寝るとしようか。一週間後には学校だ。

瑠璃の上でふわふわと浮かびながら眠っている瑠璃の顔を覗き込む。
……眠っている時はこんなに子供らしい顔なのに、起きているときはどうしてあんなに愛想が無いのかしらねえ？

表情がないわけではない。ちゃんと笑うし、怒るし、疑問の表情をとることもある。驚くこともあるし、楽しむこともできているはずだ。

それでも瑠璃は愛想がない。老成していると言っても良い。子供のように知りたがりで、大人のように行動し、老人のように達観している。わたしにとつて瑠璃とはそんな妙な存在だ。

だが、わたしはそんな 瑠璃の事が、とても、愛しい。そう感じている。

昔のことを思い出す。わたしも昔は生きていた。死因はいきなり後ろから殴られての頭蓋骨折とその時に折られた骨によって脳が潰されたこと。

わたしを殺した相手はもう生きていない。少しだけ力をいれて念じたらころつと死んだ。心臓麻痺だったそうだ。

それから長いこと存在してきたけれど、瑠璃みたいな存在に会ったことはなかった。

神に気に入られ、神に生き返ることを命じられ、神と共に人生を歩んで行く。そんな瑠璃の姿に、わたしは心底惚れてしまった。

だからわたしは瑠璃に取り憑いた。一緒にいるために。できるだけ長く、できるだけ多くの時間を瑠璃と一緒に過ごすために、瑠璃の左肩に自縛した。

……たまに右肩に移動したりもするけれど。

瑠璃に危険があつて、それを瑠璃が嫌がるならば、わたしは危険から瑠璃を遠ざけよう。

危険を望み、成長しようとするならば、わたしはそれを手助けしよう。

そしてそれらの危険が瑠璃の許容範囲を越えたなら、わたしがそれを排除しよう。生憎わたしは霊だ。生きているものが相手ならば念じればある程度なんとでもなるし、物体でもどうにかできる。

最悪、あの邪神が瑠璃を守るだろう。あの邪神も瑠璃のことを気に入っているようだし。

……あ。瑠璃が目を覚ます。

わたしはいつものように瑠璃に言葉をかける。

『……あらあ……おはよう……』

わたしの声に反応したらしく、瑠璃はわたしの方へと顔を向けてくる。

そして一言、

「……ああ、おはよう、アザギ」

わたしにこう言うのだった。

意外と殺人経験有りなアザギの回想とちよつとした決意

フルカネルリは悪霊の加護を手にいれた。

危険から逃れやすくなりますが、たまにアザギが暴走して呪いを撒き散らすようになりました。

2 - 1 5 (前書き)

忘れてましたが、次の外伝は十万アクセスです。

フルカネルリだ。書き初め大会では三位で賞品の餅は三キロしかもらえなかった。笑ってやってくれ。

《全校で三位でショー、誰も責めないってバー》
おや、ナイアか。久々だな。

《そうだネー。はいこれお土産の蜂蜜酒。お酒は一億二千万歳になつてからだヨー》
いや、この国では二十歳で飲酒が許されるぞ。

《……はっ！そっいやそうだったター！》

『……第一、人間はそんなに生きられないわねえ……ふふふふ……
……』

そうだな。それは流石に無理そうだ。

豆まき大会だと聞いたのだが、鬼役は副校長と教頭がするらしい。何を考えているのかは知らないが、仲の良いことだ。

《ほんとは純情な女が鈍い男に近づきたいがための苦肉の策だったりしてネー》

そうなのか？

《実はそうだったりするのサー》

そうか。まあ、人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られてどうこうと言っらしいから、私は何も言わんがな。

《それが良いヨー》

ところでナイア、質問があるのだが。

《何かナー？》

うむ。私の食べる豆の事だが、前世の分の年まで数えるべきだろうか？ それとも今生の物だけを数えるべきだろうか？ どちらが良

いと思う？

《……うーん……今生のだけで良いんじゃないかナー？》
そうか。ならばそうしよう。

……うむ、美味しい。

「るーりっ！」

「んむ？ 白兔か。なんだ？」

白兔はにっこりと笑って私に豆を一粒差し出してきた。

「はい、あーん」

……つまり、白兔は私にこの豆を食べさせたいのか？

「……あーん」

まあ、別に構わないが。

……ふむ、やはり美味しいな。

「美味しい？」

白兔が私に尋ねてくる。私の答えは当然肯定。ここで嘘をつく意味など全く無い。

「ああ、美味しい」

「そっか じゃあ……はい、あーん」

白兔はまた私に豆を差し出す。私もすぐにそれを食べた。

《仲が良いネー》

そうだな。私もそう思うよ。

《……アブホースも、少しくらい素直になってクトウグアのやつにやってやれば良いのにネー》

……なんだ？ もしかしてそのアブホースとか言う奴は好きな相手に好きと言えないのか？

《そうなんだよネー。見てるとバレバレなんだけど、認めようとしてないんだよナー》

……なぜ好きな相手に好きだと言えないのだ？

《さあネー。恥ずかしいんじゃないノー？》

……理解できないな。

《ボクもちよっとわかんないかナー》

そうか。

……ボクにはちょっとした秘密がある。誰にも言いたくない、所謂黒歴史と言っちゃっサー。

細かいやりかたは置いておくけど、簡単に言っちゃうと……ボクは姿を変えることができるんだー。

……ああ、別にこれが黒歴史って言っ訳じゃないヨー。このくらいなら殆どの神ができることだしネー。クトウグアやアブホース、ハスターにクトちゃんにイタクアだってできるサー。

……でも、ボクのそれは姿だけでなく、性別その他まで変えられる。これはボクだけの特技だったりするんだー。

他の神は姿形は変えることができても性別までは変えられないからネー。

結局何が言いたいかって言うとネー……………

アブホース。ごめんネー。

ってことサー。

わかんない？　ならそれで良いヨー。多分いつかわかることだしネー。

なんらかの秘密を持っているナイアの黒歴史

2 - 1 6 (前書き)

1 / 1 5 に人物紹介を追加しました

フルカネルリだ。最高学年である六年生たちが卒業してゆく中、私と白兔はと言うと、特に変わらさず日々を過ごしていた。

《それはひどくないかナー？ 卒業式が変わったことに入らないってサー》

そんなものか？

《そんなものサー》

そうか。

春休みに入り、私はよく家で本を読むか、もしくは白兔とどこかに遊びに行くかといった行動を繰り返していた。

「瑠璃」

「なんだ？」

白兔はにこにここと笑っている。

「楽しいね」

私もそれに合わせて笑顔を作る。

「ああ、そうだな」

『……仲が良いわねえ……うふふふ……』

アザギか。まあ、確かにな。

「……ねえ、瑠璃。なんか……寒くない？」

「気にするな。私に取り憑いているいたずら好きの霊が寄ってきただけだ」

ちなみにアザギだが、最近頭の流血が止まり、血色が良くなってきた。

《明らかに幽霊じゃないよネー》

『……それは、そうよお……亡霊だものお……あははっ』
『……楽しそうだな。』

……ん？ どうした白兔。顔色が悪いぞ？

白兔はガタガタと震えて辺りを見回している。何がしたいんだ？

《アザギ探してるんじゃないかナー》
なるほど。

「とりあえず、ここに何かしら見えるか？」

私はアザギのいる左肩を親指で差す。

「そ、そこにいるの……？」

「ああ。ここにいます。………だが、やはり見えないようだな。安心しろ。アザギはあまり悪いことはしないさ」

多分な。

《多分なノー！？》

当然だ。なあ？

「………そうよねえ………？」

全く。何を言っているんだか。

私達、少なくとも私はこのあと起こる、または起こり得る事が全て予測できる訳じゃない。

前にもそういったことを話したと思うのだがな？

だが、そんな気休めの言葉でも白兔はかなり落ち着いたようで、青かった顔に血の気が戻りつつある。

「………よ………よかつたあ………」

………何がだ？

《フルカネルリはわかんなくて良いと思うヨー。理解できなくてよかつたなんていう感覚なんかわかりたくもないでシヨー？》

そうだな。それはわかりたくないな。

「………ところで、宿題は終わっているのか？」

「あ」

私がそう聞くと、せっかく血の気が戻ってきた白兔の顔がまた青くなってしまう。

………やっていないのだな。

《白兔ちゃんが涙目でフルカネルリを見ていルー。どうやら宿題が

終わってないみたいだねー。助けてあげルー?》

……まったく。冬休みは自分でやってきたから注意していなかったが、また戻ってしまったか。

「……それで、何が終わっていないのだ?」

「……………ぜんぶ」

よし、今すぐ帰ってしまおう。

しかし、私が後ろを向いた途端に白兔に泣きつかれてしまった。

「……………」

「……………はあ。わかった、明日はいつもの図書館に朝十時に。全部持ってこい」

「ありがとう!」

白兔は太陽のように笑った。

……………騙されているような気分だ。

《気のせいじゃないかなー》

私もそう信じたいよ。

瑠璃には結構不思議なところがある。

幽霊がそこに居るといきなり言ってきたりした時には、なんでかいつも寒くなったし、嫌な予感がすると言ったら大抵当たる。

この前なんて空飛ぶ人型の虫が居ると言われてそっちを見ると、寝っ転がりながらクッキーをポリポリとかじり、お笑い番組を見て大笑いしていた妖精を見た。

ちよつと固まってその妖精を見つめていると、その妖精も何かを感じたらしく、私の方を向いて……視線がぶつかった。

お互いに固まったまま時間が過ぎる。長かったかもしれないし、短かったかもしれない。

しばらくするとその妖精は慌てたような顔をして、一瞬で煙のように消えていた。その時にクッキーが二枚ほど一緒に消えていたのは愛嬌ってやつだと思う。

だから私にとつて瑠璃の勘とかそういったものはかなりの信憑性があると思っっている。

……つまり、瑠璃が私が宿題が終わってないことを当てるなんて簡単だよ、って話。

またもやフルカネルリに宿題を助けてもらった春原白兔の春休み。

フルカネルリだ。私達は二年生になり、新入生が来た。

「……………きゆう」

そして校長はいつも通りに貧血で倒れている。

「クトおおおおおっ!!」

「新入生の前で騒ぐなっ！」

もちろん副校長と教頭の掛け合いも健在だ。仲が良いと言っのはいことだな。

《そうだネー》

特許というものを知っているだろうか。

簡単に言えばこれこれこういうものをこうやってだれだれが作ったヨー、だれだれが最初に作った物だから他のやつに作らせないでネー、といったようなものだ。

《なんで例で使われてるのがボクなのかナー?》

付き合いが長く、わかりやすいからだ。例えばアザギにしてみる。なかなか終わらないぞ?

《……………あー、確かにネー》

『……………ひどいわねえ……………?』

そうか? よくわかると思ったんだが。

《よくわかっててもひどいこともあるんだヨー》

知っているさ。これでも意識は長生きしていたからな。

《没年齢は78だっケー? あの頃にしては破格の年だったよネー》
そうだな。皆私を置いて死んでいった。

……………息子もな。

幸いと言って良いのかどうかは知らないが、私の子は孫は残さなかったからそれ以上に傷つくこともなかった。

…………… けれどどこか、それ以前より研究や実験に集中することができた。

《……それ人間としての倫理観のどっかがその時にぶっ壊れたんじゃないのかナー？》

……否定はできないな。

《え、否定しないノー！？》

出来るほどの情報が無いからな。もしかしたらその通りかもしれないし、もしかしたら違うかもしれない。

……まあ、私はどうなるかと私だ。

『……そうねえ……それでこそ、わたしの大好きな瑠璃だわあ……

……うふふふ……………』

そうか。

……話を戻そう。特許を取るときには必ず、どのように作られているか、どんなもので構成されているか、がわかっていなければ駄目であるようで、さらにそれらはわかるように公開されているらしい。

…………… 見るしかないだろう。

《見るしかないネー》

『……見るしかないわねえ……………』

だろう？

と、言うわけで見てみたのだが……ここは宝の山だな！

《フルカネルリの目がキラキラしてるヨー！？》

『……それだけ嬉しいってことじゃないのお……………？』

いやあ、素晴らしい！私の生きていた頃から考えると、まるで魔法のようだ！

《聞いてないシー》

……おお！こんなものまであるのか！

《……ねえ、アザギー？》

『……なあにい……………？』

《…………泣いていいかナー？》

…………ふう。素晴らしい発明の数々だった！

…………ん？何をやっているのだ？

《キミに完全にスルーされてたから泣きそうなんだヨー！》

そうなのか。それはすまないことをしたな。

『…………ナイアはねえ…………？寂しいと泣いちゃうのよお…………？』

そうらしいな。気を付けよう。

《五月蠅いヨー！》

今日は散々アザギにからかわれたヨー。…………フルカネルリ？フルカネルリは無自覚だからノーカンだけドー？

…………あー、もう。こうやってからかわれるのはボクじゃなくなってクトウグアやアブホースの役目だつてのにサー。

…………そう言えば、今何してるのかナー？

…………覗いてみよっトー。

きゆるりと空間に小さく穴を開けて覗き込む。するとそこには…………

「お兄ちゃんは女の子の扱いがなってません！」

懇懇とクトウグアに向かって説教を続けているクトちゃんど、

「…………だ、だけどよお…………」

たじたじになっているクトウグアの奴が居た。

…………あレー？アブホースハ？

探してみると…………どうやら職員室で涙目で仕事をしているみたいだねー。

「…………なによ…………ばか…………」

…………喧嘩でもしたのかナー？でもアブホースがこんなに落ち込むんテー…………クトウグアの奴は何言っただんだロー？

クトちゃんの方に戻って話を聞いてみるトー……………クトウ
グアがアブホースの好きな奴がボクだって勘違いして、それを酷い
言葉と一緒に、さらにアブホースの言葉を無視して言っちゃったみ
たいだネー。

……………それは流石に酷いんじゃないかナー？

好きな相手に勘違いされた答えを押し付けられる……………しかもそれが
恋愛について。

……………フォローのしようがないヨー。

……………まあ、するけどネー。具体的にはクトウグアの誤解を解いて、
アブホースにもう少し素直にさせるぐらいかナー？

……………大変そうだナー……………。

人の恋路を手助けするべく動き出すナイア。ただし自分に向け
られる愛情は完全にスルー。(好意までは普通に受け取る困った
ちゃん)

2 - 1 8 (前書き)

不意打ち不意打ち。十ほどストック貯まったし不意打ち不意打ち。

あ、あとがきの事はマジです。

フルカネルリだ。遠足に行くことになってるんだが、どうも前回とは場所が違うらしい。

《一年ずつ二カ所を順番に見てくんだってサー。これで遠足は新鮮なところばかりになるネー》

ああ。文句は無いな。

白兔も楽しんでるようだし、万々歳だ。

《……古いネー》

五月蠅い、イエローケーキの食べ過ぎで死ね。

《放射性物質なんて食べたからお腹壊しちゃうヨー!?》

『……お腹壊すだけなのねえ……ふふふ……』

前回行ったところは高原だった。そして今回行くところは山だった。《絶対クトウグアが水嫌いだから湖とか故意に外したんだと思うナ
ー?》

色々なものを知ることができれば私はそれで構わないがな。

《そこは職権乱用だろ、ってツツコミを入れてほしかったナー》

職権乱用だろ。……これでいいか?

《うわーん!》

本気で泣き始めた。どうしたのだろうか?

《キミのせいだヨー!》

そうなのか? 良くわからないが……すまん。

しかし、湖はともかく海ならば家族旅行と言うことで行っただろう?
だから私としては今回が山でも一向に構わない。

《……あー。そう言えば海は行ってたネー。水着はそんなに嫌だった
ター?》

嫌だとも。私の中で嫌な服装の五指に入る。

《ちなみにトップファイブはなんなノー？》

スカート、ドレス、水着、（女物限定で）着物、ゴスロリだ。

《見事に女物ばっかだネー。着物はそんな嫌なのかナー？》

重いからな。その上動きにくいし。

私としてはパンツスーツに白衣が一番落ち着くのだが。

《白衣はよれよれでなんか染みとかいつぱいな上にめんどくさがって研究室に寝泊まりしてる姿が目につかぶヨー》

そうか。

だが、前世では良くやって妻に怒られそれでもやっていた覚えがあるが。

《やってたもんネー。月に二十回以上は研究所だったかナー？》

ああ。そうだった。

……懐かしい話だ。まだこの体で十年も生きていないと言うのに。

《まあ、ずっと続けてきたことをいきなり止めて、しかも全然知らないところに子供になって生まれ直すっていう大事件があったからネー》

原因も拒否権を奪ったのもナイアだがな。

……だが、後悔はしていない。

ここは私が居たところよりずっと平和だし、私の興味を引くものが多い。そして何より知識が簡単に手に入る。

……宝の山のような所だよ。ここはな。

《あ、そうかナー？》

そうだ。むしろナイアには感謝すらしている。

死ぬ事に忌避感は無かったが、それはどうにもならないと理解していたからの話で、生きて知識を集められるのならその方が私は嬉しい。

だから、感謝するぞ、ナイア。

お前のお陰で、私はまだまだこの世界で生きて行くことが出来る。

……ありがとう。

《……あ、あははハ！。そこまでお礼を言われると照れちゃう

ナー》

そうか。ならば忘れてくれて構わん。私がそう思っていると云うことは変わらない。

《……忘れないヨー。これでも邪神だからネー》
そうか。

山の上で

「ヤッホー！」

って叫んでる白兔ちゃんと、それをいつも通りの表情の薄い顔で見つめているフルカネルリを見ながらちよつど沸いていたお茶を飲む。

……お茶っ葉入れ忘れた。これじゃただのお湯だヨー。

……飲むけどネー。

《飲むのかよ！》

どこからかクトウグアのツツコミという名の声が聞こえた気がする。気のせいかなー？ ……気のせいだナー。

《気のせい扱いですんなやつ！》

五月蠅いよクトウグア。初恋の相手のことを忘れられないのに次の恋を見付けちゃった移り気な邪神の癖ニー。

しかも次の相手のアブホースにまだ自分の気持ちを

《それを言うなああああああつ！！》

はいはい、わかったヨー。

まあ、クトウグアが浮気性でも甲斐性無しでも素直じゃなくてもいいけどサー……アブホースは泣かせちゃダメだヨー？

《……うるせえ》

クトウグアの言葉を意識すると「わかってるけどついやっちゃうんだ。仕方ねえだろ」かなー。

仕方ないわけないけどネー。

《ねえのかよ!》

ないヨー。本当に泣かせたら先生とクトちゃんとボクとノーデンスとハスターとアトラク・ナクアが全員でぼこぼこにした上でティンダロスの前に放り出すヨー。

《いくら俺でも死ぬぞそれ!》

死ぬバー? 大丈夫、きつと生き返れるヨー。

ティンダロスのお腹の中で消化されなければだけドー。

《……勘弁してくれね?》

クトウグアがアブホースを泣かせなければ良いだけの話だヨー。

………と言うか、もう初恋の相手は忘れちゃいなヨー。

《それは無理だ》

ボクが言ってみるけれど、やっぱりクトウグアは拒否した。予想通りだネー。

たった一回会っただけで何でも燃え上がれるのかは知らないけど、ちょっとだけ尊敬してやってもいいかもネー。

………でも、こっちの方は応援しない。絶対にネー。

理由? それは………秘密じゃダメか

ナー?

ダメって言われても秘密にするけどネー。

昔々の黒歴史の封印が解けかけている事に気づかないナイアの遠足二年目。

2 - 1 8 (後書き)

最後の所を意識すると、

「十万アクセス記念にはナイアの黒歴史をバラします。今まで応援ありがとうございます、そしてこれからもお願いいたします」
です

フルカネルリだ。そう言えば最近私の体がどこまでできるのかを調べていない。調べるべきか？

《ちょうどいいことにもうすぐ身体測定と体力測定があるヨー。それで大体わかるんじゃないかナー？》
 なんと。ならばその時に調べてみるとするか。

一言で表すと、予想以上。この一言に尽きる結果となった。

走る速度は速く、力は強く、持久力と瞬発力とを兼ね備えた私の体。これで今まで鍛えたことがないというのだから驚きだ。

《ほんと驚きだネー》
 本当にな。

……まさかそこの大人よりも良い結果が出るとは……少ししか思っていないかった。

《ちよつと思つてたんだー？》
 少しだがな。

……まあ、悪いことではないし、良いとしようか。

とりあえず、この後にもう少しだけ体を鍛えておくでしょう。ナイアが言ったことが正しいならば、そこからはさらに早く身体能力が上がって行くことだろう。

いつか異なる世界に出かけるときに、少しでも役に立てば良い。立たなければ立たないで研究の日々だ。私に損はない。

《結構考えてるんだネー》

当然だろう？何があるのかわからない状態で私にできることは考えることと危険を排除するために必要なものを揃えることくらいな物だからな。身体能力は逃げるときには必要だろう。

故に私はまず体力を作る。徹夜にも道具作りにも研究にも、何をす

るにも体力は必要不可欠だ。

それに材料を取りに行ったり、畑などで薬になる草を育てたりするにも力が必要だし、行く世界によっては力がなければあつという間に殺されてしまいかもしれん。

そうならないように、私はできることは全てやっておかねばならない。

知識はかなりの量が集まった。次は死なないように、捕らえられて自由を奪われぬように、精神的にも肉体的にも強くならねばならないのだ。

《……そっか………頑張つてネー》

ああ。

……と、言っても前世の私の20億倍で成長するために今でも人外と言つて良い程度には強いのだがな。具体的には本気で投げたソフトボールが飛んでいる途中で焼き切れてしまう程度には。

《人外ダー！どう考えても人外ダー！？》

私もそう思うよ。

だが、私は私だ。人外だろうがなんだろうが私は、フルカネルリ、であることに変わりはない。

《……ま、そうだネー。キミがそう思うんならそれで良いんじゃないかナー？》

そっか？ まあ、ありがとう。

……だが、これはなんとかならないか？ 目立ってしかたがない。

《……あー、じゃあ今度なんか考えておくヨー》

フルカネルリと約束したモノを作っている。

とりあえず身体能力の方にリミッターをかける。ただしこれはこっ

ちの世界でも何かあつたら簡単に外れるようになってる。

……うーん。今は大体八歳ぐらいの身体能力まで抑えておこうかな。

……そしてここからがこのリミッターの凄い所なんだヨー！

なんと！抑えた分だけ成長が早くなるのサー！

具体的には、抑える前の能力を a 、抑えた後の能力を b とすると、抑えた後に出せる力は b/a 。そして上がる成長値は a/b 。仮に b を 4 、 a を 20 とすると、五倍も早くなるわけだネー。

凄いでシヨー！

ちなみにほんとはもつと成長値はおつきいヨー。既に人外なレベルから小学生レベルまで能力を落とすんだから当然だけどサー。

……え？ 実際はどのくらい早くなるかって？

……うーん。一番小さいところで五十倍、一番大きなところで三千倍くらいとだけいっておこうかなー。

抑える割合がみんな違うからこんな風になるんだけどネー。

このまま何年も過ごしてから異世界に行くんだけどサー………向かうの人達逃げテー！超逃げテー！

「残念、興味を持ったフルカネルリからは何人たりとも逃げられはしない！」

……幻聴だナー。確実に幻聴だナー。実際そんな気がするしそうなのとてるところが目に浮かぶけど幻覚だよネー。

……そうだよネー？

この後の事が怖くなってきたナイアの術式開発帳（ジャシニカ学習帳）のメモより一部抜粋

2・20(前書き)

どんどん進めていきますよー

……今日は不意打ち出来るかな？

フルカネルリだ。つい最近になって私の胸が膨れ始めた。ナイアがなにかやったな？

《健康の呪いの効果のひとつだヨー》
そうか。どの程度まで大きくなる？

《体のバランスを崩さない程度かナー》
具体的には？

《八十半ばってところかナー。腰の細さと相まっておつきく見えるはずだヨー》

……そうか。全く嬉しくないな。

《そこら辺は便利な能力と引き換えにしたって思っというてヨー》

……仕方がないか。

あまり大きくなりすぎると腕を振るうときに邪魔なのだがな。

白兎は何故かよく私の膝の上で昼食をとる。私が食べにくいのだが、まあ食べられないわけではないし許容している。

私と白兎の身長差はあまりない。精々五センチほど私が高いだけだ。

この日も私と白兎と一緒に昼食。白兎は何故か私と一緒に昼食を取りたがる。他の友人もいるだろうに、なぜそこで私になるのか、少々理解に苦しむ。

《人生なんてそんなものサー。わかんないことだらけだヨー》
そうだな。

だが、私は科学者で、錬金術士で、知識欲の塊だ。そのような謎の中に居るからこそ私は生きて行ける。

《生命活動に謎が必要なノー！？》

活動するだけならば必要ない。しかし、活動するだけの私などフルカネルリ/私/古鐘瑠璃ではない。

私は謎を解き、知識に変え、それを飲み込むためにここに生まれ変わったのだから。

《……あー、フルカネルリらしいネー》

『……ほんとにねえ……うふふふふ……』

その通りだ。私は‘フルカネルリ’だからな。

「はい瑠璃。あーん」

「……あむ」

……ふむ。美味しいな。

《……締まらないナー》

『……そうねえ……』

別に締める必要がない所なのだから、締めなくても構わないだろう？

《……まあ、そうんだけどサー》

最近になってナイアが付けてくれたリミッターのお陰で楽しみが増えた。

どう楽しいかというと、今までと同じ速度で本を読むだけで鍛えられるからだ。

その分本を読むのが遅くなったが、今さら新しい本が一度に大量に入ってくることは無いだろうし、別に構わないだろう。

それと、何故か目が良くなった。正確には、なっている。

今この瞬間も私の目はよくなり続けていて、今では地平線に人を立たせて指を上にあげさせればその数を数えられるレベルだ。恐ろしいな。なぜこのように視力が上がる？

《ヒントをあげるヨー》

ほう、なんだ？

《赤ちゃん 幼児でどれだけ視力は変わるかナー？》

納得した。だから体の方もここまで強くなっているのに壊れないのか。

《そつちは有精卵 幼児だからすごいヨー。十ヶ月で数兆倍までいくからネー》

人外になるのもわかるな。そんなことになっているとは。

……実に恐ろしい。

《成長速度増加も忘れないでネー》

ああ。元から忘れてはいないさ。

……フルカネルリに言ってるときはまだなんとか抑えられてたんだけどサー……。怖いネー、人間ってサー。

ボクたち神も成長する。だけどそれは物凄く遅い。例えば生まれたときの倍の力を得るには大体数千年の時間が必要なことだってある。でも人間はあつという間に育って、あつという間に強くなる。

それが神に届くことは殆ど無いけれど、それでも人間が集まって、力を合わせれば最下級の神にすら勝てる事もある。

そんな人間の成長率を上げて、限界を無くして……。最後はどこまでいつちやうんだろうネー？

フルカネルリはボクより強くなったらどうする？

戦う？ 殺し合う？ それとも何にも変わらないのかサー？

……最後のだったらいいナー。

……もしそうになったらちよつとだけボクの昔住んでいた家とかを見せてあげてもいいかナー。

そこで皆を呼んで……。お酒を飲んだり遊んだりして、酔って騒いで楽しんで……。……

……あははハー。きつとボク疲れてるんだナー。こんな事を考えちやうなんてサー。

期待はしない。言いもしない。伝えられることはたぶん永遠に無い

それを、そつと胸の中に納める。

だって、フルカネルリは多分人間を辞めたいとは思わないだろうシ
！。

……でも、もし本当にそうなってくれたラー……

……嬉しいナア！。

夢見るナイア。

フルカネルリだ。今年はさっさと白兔と宿題を終わらせて遊ぶということになってるらしいので、白兔を私の家に呼んですぐさま宿題を終わらせた。何故か白兔だけでなく白兔の友人まで来ていたがな。

《ちゃっかりしてるネー》

そうだな。将来大物になりそうだ。

遊ぶといってもたいした遊びではない。誰か一人がその日に遊ぶことを決めて、他の者はそれに合わせて遊ぶ。これがまたかなり決まりが緩く、いつの間にか全く違う遊びになっていることも多々。

白兔は

「王様ゲーム式だよー！」

と言っていたが、王様ゲームとはなんのことだ？

《誰だ子供にそんなもの教えたノー！？》

さあな。私に聞かないでくれ。

まあ、この良いところはあまり不正がない事だな。

《……これで不正してなんかあるノー？》

遊ぶときに意見が最優先される。ただし他の全員が拒否した場合は選ぶところからやり直し。

《結構考えられてルー！？》

そうだな。

ちなみに私の時は室内ゲームが多い。

それはトランプだったりウノだったりオセロだったり将棋だったりチェスだったり他の物だったりしたが、恐らく楽しんでもらっている。

その場合、私は大抵ハンデを背負う。そうしないと圧倒的すぎてつ

まらないと白兔に言われたからだ。

具体的に言くと、ババ抜きで何故か一人だけ最初の持ち札が0になることが何回も続いたり（後でアザギがなにかやったと聞いた）、大貧民で何故か最弱の札が「1」だったことが何回も続いたり（これもアザギがなにかやったらしい）、ポーカーで何故かロイヤルストリートフラッシュが何度も来たり（これもだ）……………。

こうして私はその時その場に居た全員に「ラッキー仮面」という名をつけられた。

……私は仮面など前世でマスクの代わりにつけていた以外でつけていた事など無いのだがな。

《マスク代わりにつけてたノー！？》

ああ。本当に始めの方は金がなくてな。援助してくれるような者も居なかったので削れるところは全て限界寸前まで削ったぞ。修繕や製作もこの頃に始めた。

《……………「必要は発明の母」って言うけど……………本当だネー》
ああ、そうだな。

……だが、私は大してラッキーでは無いと思うのだが……………。

《……………ふーん、そうなんダー？》

ああ。

……何を拗ねているのだ？

《……………別に拗ねてないヨー》

嘘だな。

『……………嘘ねえ……………』

《ち、違うヨー！嘘なんてついてないヨー！別に「ボクと出会ったことも不幸の中に入ってるのかナー？」って思って不機嫌になった訳じゃないヨー！！》

……ナイア。お前は嘘が上手いのか下手なのかわからんな。

『……………隠し事は得意なのよねえ……………嘘は、すつごく……………下手だけどお……………』

なるほどな。そういうことか。確かにその通りだな。

ナイアは隠し事は上手いが嘘をつくのは下手。ああ、実にわかりやすい。

《……その通りなんだけどサー……わかっていることをもう一度言われるのは気分のいいものじゃ無いネー》
それはすまんな。

フルカネルリに色々言われて、苦笑しながら考え込む。

一応ボクは神なんだけどー、やっぱりこういう付き合いって相性があるよネー。

ボクの嘘は相手によって騙されやすさが変わる。疑り深い相手ほどよく騙されるのサー。

実際、ばれても全然痛くないところでバレバレな嘘をつくの繰り返し返せば、大体の相手はボクが嘘は下手だと思ってくれる。そこで本当に隠したいことを嘘をつかずに隠せばばれることはあんまり無いんだヨー。

……アザギとフルカネルリはその辺りを理解して乗ってくれてるみたいだけどネー。

疑り深いやつにはここでほんの少しだけ別の隠し事を含ませるとそつちの方に気をとられて本当に隠したいことは隠し通せるって寸法だヨー。クトウグアにもアブホースにもノーデンスにもバレなかったしネー。

……あ、でも何でかヨグソトスにはバレちゃったんだよネー。黒歴史。

……ちよつと頭痛くなってきたヨー。泣きそうサー。

……クトウグア達には内緒にしてもらったけどネー。バレたら自殺しかねないシー。

ボクが。

ついでにクトウグアが凄いいことになりそうなのがするんだー。

例えばバー、クトウグアがそっちの道に目覚めるとカー、そっちには目覚めずにお付き合いをお願いしてきたりとカー、アブホースが虚ろな目でボクを殺しに来るとカー、アブホースがクトウグアと心中しようとしちゃうとカー、クトちゃんがボクをお姉ちゃんって呼ぶようになっちゃうとカー、そんなのだヨー。

……どれもやだヨー。そっちの道に目覚めたクトウグアに襲われるのもお付き合いしようとして来たクトウグアに女の子モードでときめくのも本気で殺しかかってくるアブホースから永遠に逃げ続けるのもアブホースとクトウグアが心中しようとするところを見るのもお姉ちゃんって呼ばれることに何の疑問も持たなくなっただけの間にかどう見ても女の子になってるのも全部やだヨー。願ひ下げじゃなくて請い願われても絶対やだヨー。

………うっだしのう

この後クトとクトウグアとアブホースとヨグソトスに自殺を無理矢理止められたナイアの狂乱の理由

番外編・春原白兔の幸せな日々（前書き）

白兔の出番が少ないと言われたので書いてみました。
感想をくれればある程度反映させますよー。

番外編・春原白兔の幸せな日々

白兔です。今回は私の主観で話が進んでいくそうです。……え、えと……頑張ります！

「ああ、頑張り」

ありがとうっ！

朝になって目を覚ます。でも私はあんまり寝起きは良くないから、つい二度寝の体勢に入っちゃう。

……うう……お布団から出たくないよお……。

もぞもぞしながら三十分。気が付くともう目覚ましは6時二十分を差していた。

……おふる……はいんなきゃ……。

ずりりつと脱皮するみたいにお布団から出て、着替えを持ってお風呂に行く。

……お風呂の描写は無いよ？ ごめんね？

……ふう、さっぱり。

このあとはすぐ朝ごはんを食べて、学校に行く準備をする。たまに食べながら行くこともあるけど、瑠璃に怒られてからあんまりやってない。

八時ぐらいに学校に到着。丁度来たばかりだと思われる瑠璃におはようを言いに行く。

「おはようっ！」

「ああ、おはよう、白兔」

瑠璃はそう言っただけに本に目を落とすけど、ちゃんと私の事を気にしてくれている事を知っている。

だから私は瑠璃にっこりと笑顔を返す。
……うん。今日も良い一日になりそう！

チャイムと一緒に先生が入ってくる。

「……出席、取る。明石」

「はい！」

先生はあんまり無駄なことを喋らないことで有名ならしい。名前は…

…たしかたかなかなかなた高中彼方先生。なんかすごく覚えにくい。

「春原」

あ、私の番だ。

「はい！」

私は元気よく答える。

「古鐘」

「はい」

瑠璃も返事をするけど、本から視線は上げない。

……いいのかな？

お昼休み。私は瑠璃の膝の上に座ってご飯を食べる。

「白兎と古鐘さんって、仲いいよねー」

とは友達の間。ほんとの事だけだね。

「そうだよ。ね、瑠璃？」

「そうだな。……だが、いきなり振り向くな。髪が当たる」

「あ、ごめん」

そしてご飯の後にはこれもまたいつもの事だけど、瑠璃に膝枕をしてもらう。

ん〜 瑠璃の太股やーらかい

……ちよつと撫でてm

「白兎」

瑠璃がそう言った瞬間に私の頭を撫でていた手に力が入って……痛

いいたいいいたいいいいいっ!?

ギリギリと私の頭を締め付けてから瑠璃の力が緩んで……

「撫でるなよ?」

「……ハイ………」

私は首を縦に振ることしかできなかった。

……くすん。

放課後に私がやることは、本を読むか瑠璃達と遊ぶか、大穴で瑠璃に勉強を教えてもらっている。

……大抵は瑠璃と遊んでるけどね。

今は瑠璃だけじゃなくって皆で遊んでる。

「はいフラッシュ!」

「ツープア」

「ふふん、フルハウス!」

……皆すごいなあ(ワンペアだった白兔)。

……あれ、瑠璃は?

「ロイヤルストレートフラッシュ」

「……またあ!!?」「……」

な、何回目だっけ……?

えーと、1、2、3、4、5、……十二回目……?

「ラッキー仮面だ……」

「またラッキー仮面が来た……」

うん凄い運だよな。だって瑠璃、一人だけカードに触ってないし。

……信じられる? これ配ったままの形なんだよ?

……もしかして瑠璃って守護霊とか憑いてるんじゃない……

『この者のせいだ。……見えるか?』

……そう言えば憑いてたね。守護霊かどうかは知らないけど、何か。

皆が帰る時間になって、瑠璃ともお別れ。まあ、また明日になれば学校で会えるんだけど。

「またね」

私が言うのと皆が同じように、「またね」と返してくれる。

瑠璃はそのついでに私の頭を撫でていくけど、私はそんな瑠璃が大好きだ。

だから私は今日も元気に笑って言う。

「また明日ね、瑠璃」

「ああ、また明日」

お風呂に入って体も髪もきれいに洗う。私は結構長風呂だから、ゆつくり入ると丁度夜ご飯の時間。

……うん、おいしい

お母さんとお父さんと一緒に食べるとすごくおいしい。

……「ごちそうさま！」

食べ終わったら歯をみがいてすぐに布団に入る。

……うーん、ちょっとだけ瑠璃の臭いがするかな？

……すう、と大きく息を吸い込んでから、ゆつくりと吐き出す。

……おやすみなさい。

春原白兔のとある平和な一日

……「どうかな？ 頑張ってみただけど……」。

私が不安そうに聞くと、瑠璃は私を優しく撫でながら言ってくれた。

「よくやった」

……「はあ、よかったあ……」。

フルカネルリだ。何故か今年から運動会の名前が体育祭に変わった。なぜこうなったか理由を誰か知らないか？

《 》

ああ、理解した。

《まだ何も言っていないだけドー！？》

‘昨日久し振りに話をして、運動会について話しているときに何故か行きなり改名すると校長が言い出して本当にやった’……なにか違うところは？

《うぐ……さ、最後は‘やったんだヨ’だけドー……》

つまり内容は当たっているわけだな？

《……うん》

そうか。

『……読心術かしらあ……？……わたしは独身術を使い続けて千年よお……？』

《つまりいきおく》

……ナイア？ いきなり黙ってどうしたんだ？

それとお前が黙った瞬間から鳴り続けているこの肉を金槌で叩いて柔らかくしているような音は一体なんだ？

……徐々に水音が混ざってきているが……。

『……気にしちゃあ、ダメよお……？』

そうなのか？

……だが、気になるな。

体育祭だ。周りのクラスメイトの応援の声が五月蠅い。

《……ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……》

あとナイアも五月蠅い。

《少しぐらい心配してくれてもいいじゃないカー!》

心配? ナイアを?

……八。

《鼻で笑われター!?!》

それは笑うだろう。ナイアがこの程度で致命的な事になるはずがないからな。同じ神同士の戦闘だったらともかく、アザギは千年存在してるとはいえ只の人間霊だぞ?

《千年自我を保っていられるってだけで只の人間じゃないって気付いてヨー!》

思考加速と同時思考の分も入れれば私も二百年程度は生きているが?

《……そう言えばそうだったネー》

ああ。

『……生きてる人間が、よくもまあ……すごいわねえ……』

《キミが言えることじゃないからネー?》

そうだな。

「瑠璃? どうしたの?」

「ん? いや、私に取り憑いている亡霊が非常識だと思っていただけだ」

「まだ幽霊居たの!?!」

白兔は何をいつているのだ?

「幽霊ではなく亡霊だ。間違えると怒られるぞ?」

「何に!?!」

「亡霊に。こいつは気合いで呪いすらかけるぞ?」

「怖っ!?!」

怒らせなければ気のいい奴だ。年の事に触れても平気だしな。ただ、行き遅れという言葉に敏感だと先ほどわかったがな。

《ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……》

ナイア、静かにしてくれ。もうアザギも怒っていないのだから平気

だろう。

《……ほ、本当……？》

恐らくは。

……どうだ？

『……うふふ……次は無いわよお……？』

「っ！？ な、何かいきなり凄く寒くなった！」

白兔にはきつかったか。

アザギ。抑えろ。

『……ふふふ……瑠璃は、優しいわねえ……』

そうか？ 自覚はないんだが。

やったー！優勝できたー！

なんかよくわからないけど、うちの学校って妙に個人技が勝敗を分けるような種目が多いよね。別に良いんだけど。

……でも、いつまでも瑠璃にばかり頼るわけにはいかないよね。

なんでかは知らないけど、瑠璃はある日からとっても……なんだろ

……薄く……？ なった。

その日までは、瑠璃を探すことなんてなかった。そんなことをしないで勝手に意識の中に入ってきていたから。

その日までは、瑠璃は凄いわかりやすい雰囲気を持っていた。瑠璃以外にあんなに強く私を引き付ける人なんていなかったから。

その日までは、私にとって瑠璃は遥かに高いところに咲いている、とっても綺麗な花みたいだった。

でも今は、近くにある触ろうと思えば触ることができる綺麗な石のような、そんな感じ。

どこにでもあるようでなかなかない、普通な物。多分、簡単に言う

とこれでほんとに瑠璃と友達になれたんだと、そう思う。
……今まで私は瑠璃の事を神様みたいだと思ってた。だから多分私
は瑠璃と友達ではなくって、知り合いだったんだと思う。
……これからもっと、瑠璃と仲良くなれるといいな。
そう思ってる。

少しだけ大人に成り始めた白兔の思い

フルカネルリだ。文化祭では簡単な工作物を作って発表することになった。白兔に

「どの程度本気でやっていいんだ？」

と聞いたら

「全力で！」

という答えが帰ってきた。

…… お望み通り、全力でやってやろうではないか。

《自重って知ってルー？》

知っているとも。投げ捨てるものだろう？

《違うからネー！？》

そうなのか？

《そつだヨー！？》

そつか。

作るものはちょっとした小物。他のクラスメイトが作った物の中に混ぜておけば気付かれずにスルーされてしまっただろうと言っただけの物。別に目立つことはないが作るからには全力で作ろう。

《頑張つてネー》

ああ。

……さて、ここはこうして……

「何作ってるの？」「む？ 白兔か。これはちょっとしたペンダ

ントだ。文化祭が終わったらお前にやろう」

「ほんとに！？」

「ああ」

ちなみに私が今私が作っているペンダントは貝殻を削っただけの簡単なものだ。

《削るのが簡単じゃないヨー!?!》

私の手先の器用さを舐めるな。このくらい軽くやって見せるぞ。

……ほら出来た。

《早すぎでシヨー!?!》

そんなことはない。少し前ならばもつと早かった。

《力の封印前だったからネー!》

ああ。だが実際に前の方が早かっただろう?

《……そうだネー》

だろう?

「どんなの作って……すごっ!?!」

白兔が私の手元のペンダントを見て驚いている。

別に大したものを作ったわけではない。貝に彫ったものは女の横顔。

私の中にしかない、私の妻の横顔だ。

……下らない未練だな。全くもって下らない。

……捨てる気は全く無いが。

これは私がフルカネルリノ私で在る限り、持ち続けなければならな

い物だ。持てなくなるときは私が死んだときだろう。

《死んでも平気かもヨー?》

そうだな。ナイアにとって死とはちよつとした睡眠か休憩のような

ものだろうし、起こすのも簡単だろう。

私にはあまり理解できないが。

《人間には難しいと思うけどネー》

そうか。

手の中のペンダントの女に思いを馳せていると、急にそれが白兔に

重なった。

……まさかな。

《あ、安心するかどうかは知らないけど、それは無いヨー》

……そうだよな。

《……わざわざ読心術まで使ったのにツッコミは無いんだネー》

『……空気の読めない子はあ……果てればいいと思うわあ……?』

《怖いってバー!》

後ろの方でナイアとアザギがなにやら喋っているが、私はそれを意図して無視しながら作業を続けた。

上の部分に貝殻が割れないように穴を開け、そこに銀色の糸を通す。

……これでいいだろう。

最後に全体に保護のためにニスを塗ればそれで完成だ。

「クオリティ高過ぎでしょ!？」

「そうだな」

……ちよつと前に、私は瑠璃が私に近くなったと言った。それはまだ変わっていない。

……でもね瑠璃。小学生でそんなものを簡単に作っちゃうって言うのはもうすごいっていろいろを通り越してむしろ呆れるよ？

しかも今二つ目を作ってる最中だし、それもかなりクオリティ高いし。

……せつかく近くなったのにあつという間に離れてったね。まだ近いけど。

「二つ目が出来たぞ」

「早あつ!？」

……瑠璃。いくらなんでも早すぎると思っただ。いくつ作るつもり？

「一ダース、つまり十二個だ」

「多くない!？」 と言っか普通に多いよね!？」

十二個って……。

……あれ？ 私今声に出したっけ？

ちらりと瑠璃を見てみると、瑠璃と目が合った。

「声には出していなかったぞ」

「じゃあ何でわかったの!? 心が読めたりするの!? 読心術!」?

「いや、おそらくこう考えているだろうと予測してな」

「……そんなこと、できるものなのかな？」

「実際にできているだろう?」

確かに……あれ、また読まれた?

「だから読んではいけない」

「……ふーん。」

「……。」

瑠璃にドレスとか着せたら似合うんだろうな。

「絶対に着んぞ」

絶対に読んでるー!!!?

近寄ったり離れたりと忙しい白兔の文化祭準備期間のある時

フルカネルリだ。今年は寒いな。

《アザギもいるから余計にネー》

『……ごめんなさいねえ……?』

いや、責めているわけではない。ただ寒いと思っただけだ。

それに、私よりも白兔の方が不味いだろう。早くコントロールできるように努めてくれ。

『……うふふ……じゃあ、頑張っちゃおうわあ……』

ああ、頑張ってくれ。

十一月になるとなぜか白兔が元気になる。白兔は雪兔、ゆえに冬が好きなのかも知れないな。

《名前はともかく正解だヨー。白兔ちゃんは冬が大好きなんダー》
そうなのか。

……ならばなぜ白兔はアザギが近寄ると寒がるのだろうか？

『……それはねえ……寒さのお、質が違うからじゃないかしらあ……』

……?』

……つまり、物理的な物が原因の寒さと精神的な物が原因の寒さの違いということか？

『……瑠璃は頭がいいわねえ……』

そうか。まあ、ありがとう。

ところで違いというのはどんなものだ？ 私としては魂がアザギの出す気配に押し潰されて、体に魂の薄いところができてそこが、魂がこの場所に足りていない」というのを本能として感じ、それが寒さとして現れているのではないかという仮説を立てているのだが。

《……え、何のヒントも無しでそこまでいったノー!?》

『……瑠璃はあ、本当に頭がいいわねえ……あはははは……』

楽しそうだなアザギ。ナイアは頭を痛めているようだが。

《キミのせいでネー》

そうなのか？ すまないな。

……それにしても、白兔は本当に元気だな。実に可愛い。

《フルカネルリ、一応言っておくとキミも白兔ちゃんも今は女の子だからネー？》

何を当然の事を。ただ‘可愛い’と言っただけだろう。恋仲になるとかそういう意味ではない。

私はおそらくもう他人とそういう関係にはならないだろう。

……まあ、子を産むということに興味が無いことは無いが、わざわざその為だけに体を売ろうとは思わないしな。

……白兔が男だったならば、いつか協力してもらうことを考えたのだが。

《……え？ 正気を失ってたりするのかナー？》

そんなものは前世で既に棄てた。でなければ研究にすべてを捧げ、あらゆる犠牲の上に積み上げた研究の結果の上で新たな研究と実験を私が死ぬその時まで繰り返し返す事などできる訳もないだろう？

《……つまり、フルカネルリはやっぱりイカれてるって事だネー》
そうだな。お前と同じだ。

『……わたしともねえ……？』

ああ、そうだったな、アザギ。

《……まあ確かにボクは人間から見ればおかしいけどサー……》
落ち込むな。私だっておかしいのさ。それぞれおかしいところがあるのが、生きているということではないか？

《……そうかナー？》

そうじゃないか？

『……そうかもねえ……』

私達は笑う。おかしい者同士、くつくつと笑う。

……私は外に出していないがな。ナイア達と話している事を外に出さないようにしていたら、いつの間にか演技がうまくなっていった。

……役に立つ時が来るかどうかは知らないが。
《来るんじゃないかナー？》
そうか。

フルカネルリは役に立つかわからないって言ってたけど、騙しは場合によっては凄く役に立つヨー。

逃げるとき、戦うとき、隠れるとき、交渉するとき、何時だって役に立つ。

……正直いってボクもほしい。

隠すのは外に出さなければいいだけだから簡単だけドー、嘘をつくときはつい外に出しちゃうからネー。

……そう言うことにしといてヨー。ボク、クトウグアとアブホースの二人に喧嘩を売られるなんて面倒なことは嫌いなんだー。

……真つ黒な所は隠すだけじゃ間に合わないシー、中途半端だとすぐバレちゃうしネー。

仮にも相手は同格の神だし、いちいち喧嘩は疲れるんだヨー。

……楽しいけどネー。

でも今はフルカネルリの事を見てる方が好き。だから、内緒の秘密サー。

隠し事の多いナイアの内緒の話

フルカネルリだ。十二月になるとやはり寒いな。雪まで降ってきた。……そして校長はまた雪合戦で雪玉を顔に直撃されている。

「ンのガキがああああああつー!!」

「何度も何度も辞めなさいつての!」

その後のこれももう何度も見て普通の事になってしまった。

《あいつらは変わんないネー。当然だけどサー》

神なのだろう? ならばそうそう変わるわけにはいかないさ。

《……ボク、フルカネルリにあいつらが神だって言っただけ?》
言っていない。だが、わかりやすすぎる。……隠す気も無かったの
だろう?

《……まあネー》

なら良いじゃないか。知ったところでなにも変わらない。なあ?

「……ふふ……そうねえ……」

《……そっか。ありがとネー》

礼を言われる意味はわからないが、どういたしまして。

今年はスキーに行ってみようと思う。そう両親に伝えたところ、寂しそうな笑顔で許可してくれた。

《実際寂しいんでしょー》

そうだろうな。解析しながら見ている私が言うのだから恐らく間違いないだろう。

《解析してるノー?》

ああ、している。と言うか今までほとんど欠かしたことは無いぞ?

白兎達と遊んだりしているとき以外は。

「……じゃんけんでそれはあ、狡いものねえ……?」

そうだな。流石の私もそこまで大人気ないことはやらない。

《クトウグアじゃあるまいしネー》

……副校長はやるのか。

《クトちゃんのためならボクに土下座をして頭を地面にめり込ませる事ができるクトウグアなら、それぐらいはやると思うヨー》
そうか。シスコンだな。

《まごうことなきシスコンだヨー》

『……シスコン、ねえ……あはははっ……』

アザギは何故かとても楽しそうだ。

……まあ、今はスキーの準備が大切だな。

スキー合宿は二泊三日。初日の午後には少しと二日目全て、そして三日目の始めに少しだけ滑ることが出来るらしい。

……さて、どこまでできることやら。

『……瑠璃、少し、離れるわねえ……？』

ん？ ああ、構わないぞ。だが私達が帰るまでには戻ってこい。いない？

『……はあい……』

アザギは楽しそうに笑って、すぐ近くに見える白銀の山に向かって消えていった。

……たまに人を通り抜けているのはご愛嬌、というやつだろうか？

《違うと思うヨー》
そうか。

……たしか、この辺りよねえ……？

山の奥深くにアザギは居た。辺りをぐるりと見渡して、なにかを探している。

……うふふ……みつけたあ……

アザギは嬉しそうに笑いながらその場所をみる。しかし、そこには雪しか見ることはできない。

『……出てきたらどうかしらあ……お嬢ちゃん……？』
ずるり、とその場所から何かが現れる。

『……あははは…… やっぱり居たわあ……』
現れたそれは、真っ白な和服を着た白い少女だった。少女は自分を見つけたアザギを剣呑な視線で睨み付けている。

『なんだ貴様は』

少女の言葉にアザギは笑うのを止め、いつも通りの緩やかな微笑みではなく、ニタリと真っ黒な笑みを浮かべた。

『……初めましてよねえ、この山の雪娘さん……わたしは、見ての通り、ただの亡霊よあ……？』

『……ふん。その‘ただの亡霊’が、こんなところまで何しに来た？』

雪娘の睨み付ける視線は変わらず、淡々とアザギに問いかけている。そんな少女にアザギは軽口のように言う。

『……いま、この山にわたしの大事な子が来てるのよあ…………手を出したらあ……消すわよ？』

アザギの周囲の植物が、アザギの迫力に負けてその命を止める。ざらざらとした冷気が山を揺らす。

『くっ……貴様……本当に人間霊か！？』
少女はその迫力に押され、一步、下がる。

その途端にアザギからの力の放出が止まる。……それでも、暫くはこの山に他所の獣が近寄ることは無いだろうが。

『……じゃあ、よろしくねえ……？……あははははは……』
そう言つてアザギはゆらりと消える。今ごろはフルカネルリの元へと移動しているだろう。

ついさきほどまでアザギがいたその場では、白い少女が悔しそうに唇を噛んでいた。

目的のためには手段を選ばないアザギの暗躍

因みに雪娘さんは前にクトに負けていて学校の生徒に手を出すことはできない。

そんな受難な雪娘さんに出番はもう無い(多分)。

2 - 2 6 (前書き)

なんだか最近書く速度が遅くなってきたような気がします。

フルカネルリだ。スキー合宿は何事もなく終わり、今は家で寛いでいる。

……アザギの持ってきた妖怪のサンプルを弄りながら。

《そんなので取ってきたのサー!?》

雪山に消えていった時だ。あの後私に雪娘という妖怪の服の切れ端だと言つて渡してくれた。ならばこれはもう研究するしか無いだろう。

《……そうなの？》

少なくとも私にとってはな。

軽く実験してみるが、どうやらこの布自体が熱を吸収し、最高でも0度にまでしているらしい。最低は計っていないが解析結果より恐らく絶対零度寸前。

……明らかに物理法則に真つ正面から喧嘩を売っているな。吸い込んだ熱量はどこに行った。

さらに言うと、どうやらこの布は燃えないようにできているようだ。熱量を無限に吸い込み続けるのだから当たり前と言えば当たり前だが。

……本当に、吸い込んだ熱がどこに行くのか……実に興味深い。

……まあ、解析してわかつているのだがな。

消えた熱量は、何故かこの布を持っている者の体の中の何かを消費して消えるらしい。それも興味深いな。

《それは多分妖力だよ》

妖力だと？ なんだそれは？ 名前から察するに妖怪の持つ力のようだが。

《そうだよー。実はフルカネルリには人間なのに妖力があるんだよ

ネー》

ほう？ またお前が何かやったのか？

《そうサー。小学生に上がるときにちょちよいとネー。名付けて『全ての微才』！》

じゃじゃーん！と頭の中でナイアが騒いでいる。……『全ての微才』か……どのようなものだ？

《説明するヨー。この能力によってフルカネルリは、ありとあらゆる物に対してほんの少しだけ才能を持ったヨー。具体的には魔力とか氣とか妖力とか霊力とか精神力とかそんなやつ。もちろん適正もちゃんと全部あるからネー》

そうか。ならばこれから研究の幅が一気に広がるな。

目指すはとりあえず自分で魔法科学を作り上げることだ。

……ああ、夢は広がる一方だ……あははは、はは、ははははははははは！

《フルカネルリが壊れター！？》

気のせいだ。なあ、アザギ？

『……そうよねえ、瑠璃……？』

《無駄にいいコンビネーションを發揮しター！？》

はいはい、そうだな。

……アザギ。私はお前と同じ力をほんの少しだが持っているらしいぞ？

『……へえ……そうなの……ふふふ……今度、少しだけ教えてあげるわあ……』

ありがとうな、アザギ。

《……あれー？ ボクは無視なノー？》

いやいや、そんな訳がないだろう？

お前は神だ。

《……ボクが言ったのは無視であって虫じゃないヨー！？》
知っている。

《わーんボケ役フルカネルリにとられター！？》

『……大丈夫よお……あなたも、ちゃんとボケ役になってるからねえ……?』

《……ほ、ほんとに? ほんとにボクもボケていいノー?》

『……くすくす……ええ、大丈夫よお……』
やっター!と喜んでいるナイアには、アザギが続けた言葉は聞こえていなかった。

『……まあ、不憫ボケだけどねえ……あははは……』

とある山の奥深くで、一人の少女が声を出さずに泣いていた。

涙が溢れる瞳を無理矢理に見開き、星の見えない夜の曇り空を睨み付けているその少女。

周囲には轟々と吹雪が吹きすさび、その少女の肢体を覆い隠していた。

しかし、人間ならばあつという間に凍りついてしまうような吹雪の中に立っている少女は、片袖が綺麗に切り取られた白い和服に身を包みながら平然とそこに立っていた。

ギリ……と少女の歯が音を立てて軋む。手は強く握りすぎて爪が手の皮を破り、血が滴り落ちていく。

『……殺、す』

その少女から出たとは思えない低い声が漏れ、辺りの吹雪がさらに勢いを増した。

『……殺、す……!』

その目は憎悪に満ち、ある相手だけを睨み付ける。

『……………母様の形見を傷つけた……………』

その視線の先にはなにもいない。しかし、その少女には見えていた。

それは、女に見えた。

そのナニカは、笑っていた。

そのダレカは、狂っていた。

それは、一体の亡霊だった。

その幻に、少女は言った。

『……………貴様だけは、絶対に……………』

その亡霊は、名をアザギと言った。

『……………殺す!』

少女は吠えた。ありったけの憎悪と、なけなしの妖気を込めて。

『……………忘れるな!貴様は、貴様だけは!』

雪の妖怪は、泣くように叫んだ。

『貴様だけは、この氷雨が!』

辺りには吹雪が吹く中で。

『殺してやる!!』

少女は、咆哮した。

復讐の道を歩き始めた雪娘、氷雨の話

フルカネルリだ。何故か最近アザギの関係で嫌な予感が止まらないのだ。

《……あー、もしかしてあれかナー？》
どれだ！？

《おひいっ！？ フルカネルリがキレた所なんて久し振り
黙って質問に答える、ナイア。

《……ハイ》

ナイアに話を聞いたところ、アザギの持ってきたこの布は雪娘という妖怪の衣服の一部であるらしい。

しかもこれはその雪娘の母の形見であり、アザギはそれを無理矢理剥ぎ取る形で持ってきたらしい。

…… やれやれ。何をやっているんだ。

……だが、アザギのお陰で霊力と霊気、そして妖力と妖気を少しだけ理解する事は出来たし、その他にも力があると言うことはわかった。

それに、それを理解してからというもの、少しだけそれを使うこともできるし、妖力や霊力を糸のようにしてあの布を複製することにも成功した。

《うっそお！？ どうやったノー！？》

うむ、色々な術式が書き込まれていたのな。分解して真似て解体して作り直して効果を確かめてを五〜六十回ほど繰り返したら出来たぞ。

《フルカネルリってほんとに化け物ダー！？》
そうだな。

……一応、その複製を使った着物を用意しておこう。

……アザギ。

『……はあい……』

その雪娘の服はどのようなものだったか、繊細に思い出せるか？

『……勿論よお……でも、どうするのぉ……？』

解析でそのイメージを読み取って作る。

『……瑠璃はあ……すごいわねえ……』

いいから考える。

『……はあい……』

……把握した。これならば直ぐに作れるな。

……と言つても半月ほどはかかるが。

《大丈夫だヨー。どんどん成長して三日ぐらいで作れると思つヨー》
そうか。

作るのは予想外に簡単だった。

まず糸を出し、布を作る。驚いたことにはかなりの量を作ることができた。これも成長速度増加と下限値固定の効果か。

さすがにこれで一日がつぶれた。

そして次の日に布から服を作る。霊気の糸で綺麗に作り上げ、それからふと気付いた。

……妖怪が相手なのだから、妖気で作らねば駄目だろう、と。

そして妖気で布を作り、これで二日目が終わった。

三日目になって気づく。霊力と妖力が前日に比べてあり得ないほどに上昇している。恐ろしいな、成長速度増加能力は。

妖気で作った布から服を作り上げ、最後の確認。

……うむ。これでよし。

……やることはやったし、今度は術式の研究でもしてみるか。

……‘殺す’と言ったが、住み家に戻ってタンスを開け、そこにある服に目を落とした時に気付いた。

……あれ、これって……母様の服？

慌てて今着ている服を脱ぎ捨てて首筋にあるタグを見ると……平仮名で‘ひさめ’の文字が。

……え？ じゃあもしかして、私ってば勘違いであんなことを口走ったの？ え？

自分のやったことを思い出してみる。

自分から殺気を向けて挑発し、自分よりよっぽど強い相手に生意気な口を利き、殺されても文句は言えない状態で生かされたのに勘違いで呪詛を向け、殺すと今の今までわめきたてていた。

だらだらと氷雨の背中を冷や汗がつたう。全裸のまま固まっているためにそれがよくわかる。

元々白かった顔が血の気が引いて青くなっている。

『……ど、どうする私……』

氷雨は誰に言つてもなく呟いた。

あつという間に復讐の道から外れた雪娘の氷雨の話

十万アクセス記念外伝（前書き）

十万アクセス行ったようなので投稿します。
次回は二十万アクセスです。

……そこまで行けばの話ですが。

十万アクセス記念外伝

これは昔々の話。まだまだナイアが幼くて、あんまり物事を深く考えなかった頃の話。

とある日に、ボクはあることを思い付いた。

そうだ、女の子になってそのまま散歩でもしてみようかナー。そう思った理由？ その場のノリだけドー？

思い付いたらすぐに行動しないとナー。ということで実際にやってみる。

髪を伸ばしテー、顔の形と体つきを女の子っぽくしテー、声もちよつと高くしテー……これで良いかナー。

後は服を変えテー、女の子っぽい靴を履いテー、……行ってきまーす！

散歩の途中でいつもならあり得ないことが起きた。

簡単に言うとなンパされた。バカじゃないのかナー？

いきなり話しかけてきたのは全然知らない誰か。ボクはさっさと断つたんだけど、なんかすつごくしつこい上に自分が世界で一番偉いって感じの雰囲気纏ってボクがそのまま拒否を続けると暴力に訴えてきそうな気がする。

……困ったナー。女の子の体には慣れてないから力がでないんだけドー。

その後によっぱり暴力に訴えてきたそいつは、たまたまそこにいた

クトウグアに叩き潰されてすごすごと退散していった。

「……つたく……だいじょうぶ……」

……あー？　なんでクトウグアがそこで黙るんだらうナー？

「あの……ありがとう」

まあ、助けてもらったしお礼は言うておく。口調でバレないように意識して口調を変えてやると、もうほとんどボクの面影は無いからいくらクトウグアでもわかんないはず。

……わかんないよネー？

そうやってボクが考え込んでいると、クトウグアが再起動した。ただし、顔は真っ赤だ。

はっはっハー、まさかボクに一目惚れとか無いよネー？

……無いよネー？

クトウグアの様子をじっと見てみる。

顔に血が集まっているのか赤い。さらに言えば熱くなっている。流石クトウグア、ここまで暑いヨー。

見えないところで大汗をかいている。心臓がさっきからうるさいほどに鳴っているみたいだけど、ここまで変わっていればそうなるだらうネー。

……ねえ。不安になってきたんだけど、ほんとに一目惚れとか無いよネー？

結論から言うと、あった。無いと信じたかったけど、あった。

だってなんかいきなり告白されたシー。しかもかなり熱く。「流石は生ける炎」って本気で思うくらい熱かったヨー。

本気で勘弁して欲しいって思ったヨー。なんでかって言うと……体に引っ張られたのかどうかは知らないけど、満更でもなかったからなんだよネー。ほんとにもう勘弁してほしいネー。

その時は謝ってすぐに姿を消した。そして女の子の格好をやめて、姿と声を戻してやっと一息つけた。

……もう絶対クトウグアの前では女の子の姿になるのはやめようと

心に誓いつつネー。

そして次の日にクトウグアから恋の悩みをぶちまけられた。あまりにも恥ずかしすぎることを連発してくるのでついぶん殴ってしまったボクを責めないでほしいナー？

ナイアにも若い頃があったというだけの話

その日に外に出ようと思ったのはただの偶然だった。

なんとなく暇で仕方ないが、やることは無いしクトも居ない。ナイアには何故か連絡がつかない。

だから俺は仕方なく家を出て、ナイアの家近くまで散歩でもするかと歩き始めた。

その途中で、俺は、彼女、に出会った。

始めに遠目で見た時は何も感じなかった。その時、彼女、は柄の悪そうな男に言い寄られて、困ったように懇懇とその相手を説得していた。

しかしその相手は、彼女、の言葉を聞こうともせず、彼女、を連れていこうとしているらしい。

それが、何故か酷く気に障った。

‘彼女’がついてくることがないと知ったのか、その男は‘彼女’の手を掴んだ。それは‘彼女’にとって痛みを感じるほどであったらしく、‘彼女’は少しだけ顔をしかめた。俺の体は勝手に動き、‘彼女’の手を掴んでいるその男の手首を握り潰す勢いで掴む。

これでも俺は神としての格はそれなりに上の方であると自負している。そこらの木っ端神とはまさに次元が違う。

と言うか、邪神学校という所がまずそういう奴等の集まりだ。ナイアもアブホースもハスターもアトラク・ナクアもイタクアも、皆ある程度以上の神格とそれに伴う実力を持っている。

普段の行動を見ていると疑わしく思うのも仕方無いが。

そんな俺が潰す勢いで掴めば、大体の奴は潰れる。それは目の前の奴も例外ではなく、その腕はギシギシと軋みをあげている。

……ナイアに毒されたのか、勝手に体か加減してやがる。

「嫌がつているだろう？ 諦めてさっさと消えたらどうだ？」

それだけ言って手を離すと、その男は俺を苦々しい目で睨んでから姿を消した。

それを確認してから俺は‘彼女’に顔を向けて……………言葉を失った。

……いや、言葉だけじゃない。俺の世界から‘彼女’と俺以外の存在が姿を消した。美しい。

最初に戻ってきたのはその言葉だった。

あの男があそこまで執着し、格の違う神である俺にあのような視線を向けたのも理解できるほどの美しさだ。

黄金比ではない。なのに何故かこれ以上に美しいものを見たことが無いと断言できる。

どこが美しいとはつきり言うことはできない、しかしとても美しい。炎の神性である俺の背に震えが走る。

その時、‘彼女’が口を開いた。

「あの、ありがとう」

‘彼女’の声はまだどこか震えていた。

気付いた時には俺は‘彼女’に頭を下げて、こう言っていた。

「あんたに惚れた！俺と夫婦になつてくれ！」

「え、ええーっ!？」

結局この時は‘彼女’に断られてしまった。当然だな。俺が同じ事をされてもおそらく断る。

だから、俺はこの日だけ散歩に付き合ってもらうことにした。

色々な所に行った。‘彼女’に付いていったり、逆に俺が案内したりした。

しかし、楽しいことは時間を加速させる。それはここでも同じ。もう‘彼女’とは別れなくてはならない。

最後に、聞いた。

「俺は、クトウグア。お前は？」

すると‘彼女’は笑って言った。

「教えてあげません」

胃袋に鉛が転がり込んできたような感覚がした。

だが、‘彼女’の言葉はまだ終わっていないかった。

「……でも、次に会ったときにまだ私の事を覚えていてくれたら、教えてあげます」

そう言つて‘彼女’はくるりと身を翻らせて姿を消した。

……覚えている。いつまでだつて覚えていてみせる。だから、今度は名前を覚えてくれ

つて訳だつていてえ!？ 何で殴んだよ!？」

「頼むから黙つてそして死んでネー?」

「ちよ、まつ!?!」

「大丈夫だヨー、ちゃんとアブホースの分は残しておくからネー」

「欠片も大丈夫じゃねえ!?! つーか何でお前がそんな赤くなっ」

「黙って死ね」

「怖っ!?!」

そしてクトウグアの悲惨な初恋。ちなみに次の恋はアブホース。

フルカネルリだ。話に聞いていた雪娘が何故か菓子折り持って家に現れた。しかもアザギを見て土下座している。何があったのだろうか？

《色々あったんじゃないノー？》
《そうだろうな。》

話を聞いてみれば簡単だった。つまり、勘違いだった、と言うことだ。

……なぜそのような勘違いをしたのか理解はできないが、勘違いとはそう言うものなのだろう。

……ところでナイア。この雪娘だが、妙な感覚がする。心当たりは無いか？

《……って言うかネー、この世界にはこういうオカルト系の奴はいないはずなんだけどネー？》

……居るぞ？

《うん。だからおかしいんだよネー。……アザギみたいに世界を渡ってきたのかナー？ でもそれにしては弱っちいんだよナー？》

……神以外にも世界を渡ることのできる存在がいるのか？

《それができる時点で神扱いされてもおかしくないけどネー》

……ということは、アザギは神なのか？

《基本と言うか大元は人間霊だけど、力だけならネー。でも神様として信仰はされてないから違うと思うヨー？》
《そうか。》

……ならば目の前で土下座中のこの雪娘は？

《さあ？ 少なくとも一端の妖怪なのは確かだけどネー》

……ほう？

《……ねえフルカネルリ。もしかして、研究したいとか思っていないかナー？》

思っているが？

《やっぱり思ってたー！？》

『……あらあらあ……やめてあげてねえ……？』

お前がそう言うなら我慢しよう。

……だが、この雪娘はどうする？ 今は冬だからまだいいが、夏になれば溶けてしまわないか？

『……そっちは、平気よあ……？ ……すぐにあの山に、帰らせるからねえ……あははっ……』

何が楽しいのかは知らないが、私はなにもしなくていいと言う事だな？

『……まあ、そうねえ……』

そうか。

……ああ、私の作った服はどうする？ 私が貰っても良いのか？

『……貴女はあ……どうするう……？ ……ふふふ……貰っても、良いわよあ……』

アザギがまだ土下座中の雪娘に問いかける。すると雪娘は頭を下げてたままその服を受け取ると答えた。

……まあ、あのぐらいならば次からはもっと早く作れるだろうし、それに元々渡すつもりだったために痛くもなるともない。

結局、あの雪娘は服を持って帰っていった。最後までアザギに向かってペコペコと頭を下げていた。

《神様も妖怪も、結局最後に物を言うのは実力だからネー》
そんなものか。

《そうさー。ね、アザギ》

『……まあ、大体はその通りよあ……うふふふ……』
そうか。

……この世界を覗き込む。
今起きていることを通り抜け、これから起きることをすり抜けて、
昔に起きたことに注目する。
焦点は、さっきまでここにいたあの雪娘。あの子がもっと小さかつ
た頃を覗く。

……いた。

もっと小さいあの子が、母らしき雪女と手を繋いでいる。そしてそ
の雪女は、見えないはずのボクを見て……薄く笑って視線を外した。
……おつどろきだネー。まさか神として生まれたボクたち以外に、
時間を越えて見られてる事に気付ける奴がいたなんてサー。

……まあ、居たっておかしくないけど……かなり少ないネー。
そしてよくわかった。たしかにこの雪女だったら世界の壁も、時間
も、うまくやれば飛び越えることができるはずサー。

……めっちゃ難しいと思うけどネー。人間で言うと、五千万ピース
のパズルを3日で完成させる、ぐらいかなー。

……え？ 無理だつて？

うん、そのぐらいの確率だヨー。失敗したらその場ですぐさま死ぬ
か、死ぬまで世界から外れた所で漂うか、運が良ければどこかの世
界に流れ着くかなー。

……まあ、ボクにとっては何でもいいけどサー。
でも、フルカネルリに手を出されたら……怒るヨー？

怒ると怖いと邪神達にもっぱらの噂のナイアが怒りかけたとい

フルカネルリだ。気が付けばもう3月。私達が二年生で居るのもこの一月が最後になるな。

《そつだネー。寂しかったりすルー？》

いや。……だが、なぜそんなことを聞く？

《聞いてみただけだヨー》

そうか。

また六年生が卒業して行き、教師たちも涙を流したり嬉しかったりと様々な反応を返している。

「きゆう」

「クトおおおおおおつぽげぶっ!!」

「こんな時にまで騒ぐなっ!!いいからさっさとクトちゃんを寝かしてきなさい!!」

だが、やはりあの三人は……三柱か? ……まあいい、三人はいつも通りだな。

《それが神だヨー》

そうか。

「……だ、だめ……今日は、最後まで……」

おや、校長が復活したぞ?

《よく頑張った!偉いヨー!》

そつだな。顔色は最悪に近いが、よく頑張っている。

「……大丈夫かなあ……?」

「平気だろう。あの校長ならば自分の体の事は自分が一番理解しているだろうしな。どうしても駄目なら自分から保健室に行くだろう」
多分だが。

「……そっか」

「ああ」

卒業式も終わり、ザワザワと騒がしい教室の中で、今日の午後は何をするかを考える。

「瑠璃っ」

「……………ああ、白兔か。どうした？」

白兔はやはりどんな時でも大抵元気だ。今も純粋な笑みを浮かべ、ハキハキとした声で私に話しかけてくる。

「あのね、このあと、一緒に遊びに行かない？」

……………ふむ。この後は特にやることも無いし、いつもやっている力のコントロールはいつでも出来る。現に今も細かい紐に術式を刻みながら話をしているわけだしな。

……………待てよ？ この紐をもっと細くし、糸そのものに術式を描かせたまま編み込めないか？

……………やってみる価値は在るな。

……………それはそれとして。

「そうだな、どこに行く？」

今日は白兔に付き合うとしようか。

ちなみに私が作っている糸や紐だが、これは基本的に他人には見ることは出来ないらしい。

《そりゃそうだよー。元々この世界に異能ってのはないんだからサー。この世界の人間が霊気やら妖気やらそんな物を見るなんて無理だっぺー》

神ならばどうだ？

《見えるだろうネー》

やはりそうか。こればかりは仕方ないな。

《まあ、頑張っぺー》

頑張るさ。異世界で知識を得る前に殺されたり奴隷にされたりしてはかなわんからな。

《すっごい嫌な所までしっかり考えてルー！？》

それは考えるだろう。最悪を考えておくことは大切だぞ？

「瑠璃ー？」

「ああ、すまない。すぐに行く！」

白兔に呼ばれたため、私は鞆に教科書を詰めてさっさと教室を出た。
……先ほど考え付いた術式を直接織り込む方法を実行しながら。

久しぶりに私の家に瑠璃が来た。さて、遊びましょうか！

……そう考えていた頃が私にもありました。

今日の瑠璃はなんだかいつも以上に大人しい。……って言うかちょっとぼーっとしてる気がする。

……イタズラしちゃうよ？

瑠璃の後ろからそっと近づいて、いきなり瑠璃の目を

「白兔」

「はいっ！」

……いきなり話しかけられた。ビックリしてつい声が大きくなっちゃったけど……バレてないよね？

「……悪戯は程々にな？」

ってバレてたー！？

何で！？ 何でバレたの！？

そう思いながら瑠璃を見ると、ちよいちよい、と指で前を指しているのが見えた。

そっちの方に目をやってみると……そこにあっただのは鏡。あれに映った私を見ていたらしい。

……今度から気を付けよつと。

「……知っているかどうかはわからないが、一応言っておこう」「
？ なになに？

「お前は……何かを企んでいると、鼻をひくつかせる癖がある」
「嘘っ!？」

慌てて鼻を抑える。

「……あれ? これって、なにかしら企んでいます」って言うてる
ようなものじゃない……?」

「白兔……?」

にっこりと笑った瑠璃がこんなに怖いと思ったのは初めてです。

「……その後はずっと勉強しました。……うう……あたりたい……
……」

少なくとも同情の余地はない白兔のある卒業式の午後の話

フルカネルリだ。三年生になったは良いが、特に変わったことも無く過ごしている。平和とは素晴らしいものだな。

《そつだネー》

この学校では三年から部活動が許される。つまり、私もそういった部に入ってみることができるのだ。

……とりあえず、一度全ての部を見てみるべきだろうな。

《あー？ たしか白兔ちゃんにどこかに誘われてなかったっけー？》

ああ、一応女子バスケット部に誘われているが、全て見てからでも遅くはあるまい？

「……そうねえ……瑠璃が、思ったように……動けばいいわあ……ふふふ……」

ありがとうな、アザギ。

ならば行こう。まずは体育会系からだ。

想像以上に部の数が多い。体育会系だけで五十近い数が存在している。文化系まで含めると、驚いたことに百三十にもなる。

……まあ、これには研究会や愛好会・同好会等も入っているが、それでも多すぎる。

まともやって全て見て回るには少しばかり時間が足りない。

………ナイア。

《ハイハイ、封印ちよびつと解除っトー》
感謝する。

……よし。行くか。

この日、私は活動していた全ての部活に顔を出した。

目を使ってしつかりと見て、すぐに別の部へ移動するということを繰り返していたが、いくつかの部では体験として少しだけ道具に触らせてもらうなどということもやった。

……ガスガンなどは初めて触ったが、それなりに扱えるようだ。

《これもちよつとした才能に入るヨ―》
銃を使う才能か？

《そうサ―。でもフルカネルリつて基本的に多才だからこういふことにも元々才能はあつたんだよネ―》
そうなのか？

《そうだヨ―。ちなみに元々才能があつた所には『全ての微才』は効かないからネ―。すっごい才能がほんのちよつとになってるとかそんなことは無いから安心してネ―》
そうかそうか。ならばそれなりに安心だ。

……これからはもう少し体を動かしてみようか。丁度武術研究会という所で太極拳や合気柔術といった非力だったり小さかったりする者が、体の大きく強い者を倒すために作られた武術の古い教本が目についたので解析をかけながら読んで覚えた所だし、毎朝太極拳の套路でもやってみようか。

《健康に良さそうだネ―》

元々健康の呪いがかかっているがな。

《そついやそうだったター！》

まったくナイアは……。

………待てよ？ ‘呪い’だと？

この世界に呪詛は無い、しかし私が行く世界に呪詛はあるのか？
あるのならばもしや私の呪いも解かれてしまうことは……。

《無い無い。前にも言ったけどボクはアフターサービスまで万全な邪神だヨ―？ ちゃんとボクのかけた呪いを解けそうな奴には話をつけてあるからネ―》

顔が広いな。

《小顔って評判なんだけどナー》

……そう言えば前に見たお前は小顔だったな。

《……泣いちゃうヨー？》

『……あらまあ……かわいいそうねえ……あははっ……』

今日の瑠璃はすごかった。

色んな所を回っていたみたいだけど、最後にはちゃんとバスケット部に来てくれた。

……でもね瑠璃。何でその身長でダンクなんてできたの？ すっごい跳んでたよね？

シュートだって一回目に外した後は一度も落とさなかったし、打ってるうちにだんだん遠い所から打つようになってるのに……しかも最後はハーフコートとはいえ向こうのゴール下から打って入るって

……瑠璃って、なんかやっていたりしたのかな？

先輩たちはすごい目をきらきら（キラキラかな？）させながら瑠璃を勧誘してた。でも瑠璃はあんまりやる気にはなっていないみたい。

……ちょっと残念。

結局瑠璃はどの部にも入らなかったみたい。聞いたらちゃんと答えてくれた。

でも先輩たちはまだ瑠璃のことを諦めてないみたい。

……やめて欲しいって言うてるんだから素直に諦めた方がいいのに。そうこうしてるうちに瑠璃はするりと逃げていた。かなり早く走ってるけど……瑠璃、前に計った時は手を抜いてたのかな？

でも、そんなに早く走っていると陸上部の人が勧誘に加わっちゃうよ？

女子バスケット部、
未来の部長の小さな呟き

フルカネルリだ。毎朝柔軟と太極拳の套路を繰り返すようになってから一月、中々に体の調子が良い。

《精神的な問題だけどネー》

そうだな。

「……はあ……朝日は、いいわねえ……とけちやいそう……」

まだ逝くな。お前には聞きたいことが山ほどあるんだ。

「……あらあらあ……死ねなくなっちゃったわあ……」

《いやキミもうとつくに死んでるからネー？》

その通りだな。

ガスガンに触ってからというもの、銃と霊・妖力を組み合わせる炎の弾丸や水の弾丸を発射できないかと考えているのだが、この国では銃を手に入れるのは難しいという問題のせいで実験が全くできずに止まってしまっている。

……仕方がない。作るか。

《フルカネルリがすごい結論出しター！？》

頭の中でナイアが騒いでいる。

《できるノー！？》

構造さえわかかってしまえば簡単だ。ただでさえガスガンという劣化コピーを見て、触れ、解析までしたのだから。

ただし材料はアルミ缶だ。スチール缶が在ればそちらを使うのだが、残念ながら量がない。

《……平気なノー？》

実際に撃つのは反動のほぼ無い炎や風だ。それで平気ならば次へと進もう。

さあ、今日から徹夜だ。

パソコンで形を調べ、部品全てを見て、正確に真似て組み立てるまで三週間かかってしまった。最近では白兔に心配されるような顔をしていたらしいが、鏡など見てはいないためどのような顔かわからない。

《ひどい顔してるヨー》

『…………寝なさいなあ…………』

後でな。

始めに靈力の糸で作った加熱術式が編み込んだ布の上に削ったアルミの粉末を乗せ、私の靈力という燃料をくべて温度を上げてアルミを溶かす。

この時ナイアが

《いつの間にそんな術式使えるようになったノー！？》

と聞いてきたが、実はあの雪娘の服の術式を分解して組み替えたら出来ただけだ。おかげで術式の効率やら術式そのものの強度やらといった重要な物が見えてきた。

…………話が逸れたな。

その後、溶けたアルミを大雑把な型に入れて冷却。余った分はもう一度溶かして別の部品に転用する。

ここまでは大して時間もかからないが、ここからが大変な所だ。大雑把な形を整えるために鑢でガリガリと削る。ネジの一本一本全て私の自作の銃が、ようやく形を見せ始めた。

《ここまでで二週間だヨー。フルカネルリの執念つて怖いネー》

『…………倒れないようにい、体を、冷やしてあげてた…………あなたが言えることじゃあ…………無いわよお…………？』

《…………そうだけどサー…………》

こうしてできあがった部品を一つ一つ組み合わせて出来たのが、この銃だ。

《おめでトー！》

頭の中でナイアがクラッカーを連続して鳴らしたような音がする。

『……うふふ……おめでとうねえ……』
ぱーん、とアザギも小さなクラツカーを鳴らした。少しばかり紙吹雪が鬱陶しいが、ナイア製のクラツカーは掃除をしなくても忘れた頃に勝手に消えてくれるから楽で良い。

……明日は組んでおいた弾丸用の術式で試し撃ちと行くかな。

……ああ、もうそろそろ限界だ。……子供の体は……やはり、不便……だ……な……

フルカネルリが椅子に座ったまま眠っている上で、わたしはいつも通りに浮いていた。

《……まだ夜は冷えるヨー》

『……そう、ねえ……』

ふわりと毛布を浮かせて瑠璃の肩にかける。すると瑠璃はもぞりと動き、その小さな手で毛布をぎゅっと掴んだ。

……可愛らしいわねえ……

《……寝てる時くらいしか言えないけどネー》

『……そうなのよねえ……』

いつもの瑠璃にそんな事を言おうものなら、物凄い笑みを浮かべた瑠璃が何かしらの方法でわたし達にお仕置きしてくることは間違いない。

……特に最近は靈気や妖気の研究が進んできているようだし、もしかしたら例の銃の的にされる可能性もある。

『……怖いわねえ……』

《……それにしちゃ楽しそうだネー？》

ナイアの言葉には答えずに、点きっぱなしの電気のスイッチを見やる。

『……いい夢を、見なさいねえ……おやすみい……』
パチン、と電気が消え、辺りが闇に覆われる。
わたしは瑠璃をじっと見つめながら、のんびりと朝が来るのを待つ。
また瑠璃に一番におはようを言っただけでいいから。

亡霊は眠らない

《……ボクもちょっと寝ようかなー》

でも神は眠る。

フルカネルリだ。社会科見学で科学博物館に行くことになった。社会なのか理科なのかはつきりさせてほしいな。

《じゃあ社会にしとくヨー》
そうか、社会か。

……どうしたナイア？ そのように無言でさめざめと泣いて。

《……ひつく……泣いてなんか……ひつく……》

泣いているぞ？

『……泣いてるわねえ……』

宝の山だな！

「瑠璃の目がすごいキラキラしてるー!？」

白兔がそう言うが、私の知ったことではないな。

《……知っときなヨー》

『……まあまあ……いいじゃないのお……』

古い製鉄法やその為に作られるようになった炭、そして新旧揃った銃や刀剣の数々！その上大雑把とはいえ作り方まで！

《聞いてないシー》

「る、瑠璃？ みんな先に行っちゃうよ？」

「……それはまずいな」

仕方がない。さっさと解析して記録だけでも残すとするか。

……完了。

「悪いな白兔。遅くなった」

「いいから早く！」

白兔に手を引かれて私はクラスメイト達を追いかけた。

昼になり、全員が適当な場所で持ってきた弁当をつつく。それは私

も例外ではなく、いつもより二割増しに豪華な弁当を白兔と一緒につついている。

「瑠璃のお弁当っていつも美味しそうだね」

「ああ。旨いぞ。……ほら、少しやるから口を開ける」

私が白兔に自分の弁当の中身を食べさせたり、逆に白兔が私に弁当のおかずをくれたりと、中々に楽しい時間だった。

……強いて言うなら、そう言ったことをする度に、他のクラスの奴等が五月蠅くなったのが少々鬱陶しかったのがマイナスだったが、このくらいならば許容しよう。

『……優しいわねえ……』

そうか？

食事のあとは自由行動。今のうちに出来る限りの物を見て覚えてしまおう。

「私も一緒に行つて良い？」

「構わんが、静かにな」

私の言葉に白兔はニパツと笑顔を浮かべた。

……とりあえず撫でておこう。よしよし。

《……フルカネルリってサー、意外と子供好きだったりするノー？》
少なくとも嫌いではないな。相手にもよるが。

《そうなんダー？》

ああ、そうだ。

製鉄などの軍用ばかりでなく、生活に有ると便利な物などの展覧物も見ておく。

……見たものを後から解析するのは無理なので、仕方無くこの場で解析する。

この目は融通がきかないが、普通ならば見えないものも見ようと思えば見えるので重宝する。

『……そうじゃないと……わたしも、見えないものねえ……あはは

は……』

《……何でキミはそんなに楽しそうなの？》
何でだろうな？

『……何でかしらねえ……？』

《二人がかりで誤魔化しに来ター！？》
誤魔化してなどいないさ？　なあ？

『……そうよあ……？』

《疑問形なのは何でサー！？》
さあな。

帰りのバスの中で、フルカネルリは白兔ちゃんを肩に寄りかからせたまま本を読んでいる。……よく酔わないネー。普通気持ち悪くなるヨー？

……なつても健康呪いですぐによくなるけどー。

……で、今はどんな本を読んでいるのかナー？

えーとどれどれ……世界の黒魔術、って何でこんなの読んでいるのサ
ー！？

『……さあ……？　　適当に持ってきたら、それだったんじゃないかしらあ……？』

……フルカネルリならありえるナー。どれだけ信憑性がなくてもな
んでもかんでも読んじやいそうだしー。これもそんな感じかナー？

『……そうかもねえ……？　　……あらあ……瑠璃ったら……うふふ
ふ……』

ボクが目を離していた間に、フルカネルリは白兔ちゃんの頭を自分の膝の上に乗せていた。うん、いつもやってるからたいして何も思
わないネー。

『……周りも……またか、って思ってるわぁ……』
どれどれ……あ、ほんとダー。

……それにしても白兔ちゃんを見てるとヨグソトスのやつを思い出
すナー。具体的にはフルカネルリに対しての押しの弱さとか、甘え
て目の細め方とかネー。

……血縁とか……無いネー。見てみたけど全然ない。ごくごく普
通の子だったヨー。

強いて言うならちょっとだけ外国の人間の血が入ってるぐらいかな
ー？

でもそれぐらい今の世の中じゃあ十分普通に入るシー。もし普通じ
やなくつてもフルカネルリならぜーんぜん気にしないだろうしネー。
フルカネルリの害にならないならボクは何でも良いヨー。むしろそ
の方が面白くなるから歓迎サー！

ちよつとクラツカーを鳴らしてみる。ぱーん！と良い音がして紙吹
雪が宙に舞った。

《五月蠅いぞナイア》

……ゴメン。

久々になかなか外に出ない友神を思い出したナイアのある帰り道

フルカネルリだ。もうすぐ夏休みだが、白兔は宿題を自分でやる気はあるのだろうか？

《あると良いネー》

『…………ふふふ…………どうかしらねえ…………』
 どのなのだろうな。

「…………と、言うわけだ。たまには自分だけでやってみたらどうだ？」

「ええっ!?!?」
 なぜ驚く？

「いいからやってみる。お前は今まで夏休みの宿題だけは毎回私に頼ってきていたが、他の長期休暇の宿題は自力でできていたのだからそれぐらい容易いだろう」

しかし、私がそう言っても白兔は動かない。

「…………どうしても、やらなきゃダメ？」
 「駄目だ」

可愛らしく聞いてくるが、私にそういった事は通用しない。昔に妻にもよくやられ、その度に振り払ってきたのだから。

《…………だからフルカネルリは鈍いんだヨー》

五月蠅い、隕石の直撃を受けてミンチになって死ぬ。

《宝くじで一等当てるより低い確率の死に方が来ター!?!?》

まあ、直撃など早々無いことは確かだな。
 だが直撃して死ぬ。

《まだ引つ張るノー!?!?》

私達がそうやって話している間も白兔は私を見ていたが、やがて観念したのか頑張ると答えた。

…………ちなみに全力でやっでできなかったなら手伝ってやることもや

ぶさかではない。

《フルカネルリってばツンデレなんだかラー》

五月蠅い、歯ブラシをくわえたまま転んで脳まで貫通させて死ぬ。

《ヤダよそんな死にかたハー！？》

知ったことか。どうせ死んでも何事もなかったかのように復活するんだらうが。

瑠璃に言われたから今年の宿題は一人で頑張ってみることにした。まずはできるやつから終わらせていこう。

国語の漢字書き取りが終わった。写すだけだから簡単だけど、やっぱり疲れちゃう。

……瑠璃はどこまで終わったかな？

電話をかけて聞いてみた。

『全て終わっているが？』

あの量がもう終わってるって何？ 瑠璃って実は超人だったりするの？

……あ、でも完璧超人って言う意味だったら外れてないかもね。

勉強はできるし、運動も苦手じゃないみたいだし、瑠璃は気付いてないかもだけど人気もある。それに手先も器用だし歌も上手いしできないことが想像できないんだよね。

……でもかわいい服とかそういうのを着たがらないっていうのがあったかな？ そのぐらいだよ。

……よし、頑張る。

社会と国語、自由研究、あとついでに体育と音楽は終わった。これ
で残るは日記と算数だけ。頑張ったぞ私！偉いぞ私！そしてもうち
よっとだけ頑張って瑠璃に誉めてもらうために、頑張るぞ！
えい、えい、おー！

いつも瑠璃に教えてもらっているのは伊達じゃないみたいで、かな
りすらすらと問題が解ける。

……でもたまーにわかんないところもあるんだよね……どうしよ……
…。

お母さんに聞いてみた。教えてくれたけど瑠璃の説明の方がずっと
わかりやすい。瑠璃はやっぱ先生とか目指すといいかもしれない
って思った。

……できたーっ！これで瑠璃に誉めてもらえるーっ！

……ちよつと想像……頭撫でてもらってー、髪を梳いてもらって
ー、抱き締めてもらってー、膝枕してもらってー……じゅるり。

「白兔ちゃん。よだれよだれ」

「あ、うん。ありがとお母さん」

いけないいけない。

……でもお……えへへ……

次の日、瑠璃に終わった宿題を見せに行った。そして一杯撫でても
らった。

「よく頑張ったな」

「ん、頑張ってみた」

ぼふ、と頭を瑠璃の膝にのせてもらう。すると瑠璃は私の考えがわ
かっているかのように動いて、私の頭を撫でてくれた。

……はあっ……

頑張ってみた白兔の話

《今回はちよつと短いから少しだけおまけがあるヨー。今回の話とはあんまり関係無いけど、見たい人は見てってネー》

白兔が宿題に忙殺されている時、フルカネルリはと言うと、

「……やはり夏は冷たい素麺だな」

こちらはこちらで夏を満喫していた。

朝は日が昇っていくなかで慣れてきた太極拳の套路を行って体を起こし、暇な時間があれば妖力や霊力を使った術式を組み上げ、それらを自作した銃で試し撃ちをしたり、今までに作り上げた術式の問題点を改善するなど、様々な事を行っていた。

《睡眠時間はどのくらいかナー？》

そうだな……三時間から四時間半といった所か。

《小学生の睡眠時間じゃないよそレー！？》

『……まあ、瑠璃が平気なら……いいけどねえ……？』

そうか。私は平気だ。

……さて。今日も朝の太極拳から始めるとしようか。

そんなフルカネルリの夏休み

フルカネルリだ。今年は強制で海に行くことになった。しかも水着でだ。

……実に憂鬱だ。

《……頑張れ、フルカネルリ》

……こんなことで頑張りたくはないのだがな……………。

憂鬱になっていようが何をしてもいようが時間は止まってくれはすもなく、私は砂浜でタオルを肩にかけてさらにパレオで腰を隠している。

……死にたくなってきた。

《自殺厳禁だヨー！》

『……死んだら、つまんないわよ……………？』

……はぁ……………わかつては、いるさ……………。

視線を下に落とすが、爪先は見えない。かわりに小学生としては破格の、女としては控えめの乳房が目に入る。

……………。

《じ、自殺しようとするフルカネルリの体の頑丈さだけもものすごい上がるようにしたから無駄だヨー！だからだから即死級の術式なんて組むのをやめてヨー！！》

『……落ち着きなさいなぁ……………ねえ、瑠璃……………？』

……仕方がないか。確かにこのような所で自殺してもなんの特にもならないし、諦めるとしよう。……………今は。

《……ふう……………よかったヨー》

『……死なれちゃあ、困るものねえ……………』

……そうか。

……はぁ……………。

砂浜に突き刺されたビーチパラソルの日陰でシャツを着たまま海を眺める。

……下は水着のままだがな……………。

《だから止めてってバー！》

……ああ。すまない、つい衝動的に。

『……衝動的に、自殺なんて……………ダメよお……………？』

……そうだな。

……はあ……………。

……うむ、そろそろ切り替えよう。そうしなければ私の胃がストレスでボロボロになってしまいそうだ。

なったことは諦め、これからはこうなる前に防げるように努力するべきだな。

……全力で。

《……無駄にきりつと決意したネー？》

『……ふふふ……………瑠璃にとっては、大切なことなんでしょう……………？』

そう、私にとってはとても大切だ。他の者が何を言おうが関係ない。私は、このようなことを回避するために全力を尽くそう。

《全力まで尽くしちゃうノー！？》

尽くすとも。お前が副校長をからかうことに全力を尽くすようにな。わかるか？ ナイアよ。

《……なんとなくだけどネー》

『……それで、いいんじゃないかしらあ……………？ うふふふ……………』

人の事を全て理解するのは難しいことだからな。

……神ならば簡単なのかもしれないが。

《フルカネルリのこと以外ならそれなりにわかるんだけどネー》
そうか。

……とりあえず、いつまでも落ち込んでいても仕方がないし、泳ぐ

か。本格的に泳ぐのは初めてだ。

シャツを脱いで、麦わら帽を被っている母に預ける。

それからゆっくりと海に向かって歩き出し、少しずつ深いところへ。前世では海に行くときは泳ぐためではなく研究のためだったので、水に入ることなど無かったからな。

太股まで海に浸かり、そこからさらにゆっくりと進んで行く。

……おや、浮いた。まあ人間は肺に空気を入れておけば浮かぶようにできているからな。

《沈んでたら邪神救助隊による高速救助が始まるヨー》

『……亡霊救助隊も……お忘れなくねえ……』

忘れようにも忘れられない名前だな。

《……ツッコミ待ちですヨー？》

む？ そうだったか。

……ふむ……。

……うーむ……。

《……無理にやろうとしないでもいいヨー。もう慣れてきちゃったしネー》

そうか。すまん。

しばらく泳ぎ続けていたらずいぶんと沖の方に流されていた。

……泳ぐのにも慣れてきたことだし、そろそろ戻るとするか。

……体も冷えてきたしな。

海から上がり、母のところへ戻ると、そこには母だけではなく父もいた。

「あ、瑠璃ちゃん。おかえりー」

「ただいま」

そう言いながらビーチパラソルの日陰に入る。

父の手には買ってきたばかりと思われる焼きそばが二つ。差し出されたそのうち迷わず片方を受け取って食べ始める。

……旨くもなければ不味くもない、よくある味だな。

流石のフルカネルリも今日は疲れたらしく、泊まっている民宿に戻るとシャワーを浴びてすぐに寝ちゃった。

……まあ、五、六回自殺しようとするれば疲れるのも当たり前かナー？
すやすやと眠るフルカネルリは、昼にあんなことをするような子には決して見えない。演技をしてるわけじゃなくって、ただ、その方が都合がいいから、自分の中身を外に出さないだけ。たぶん聞かれたら普通に答えるし、出すべき時はなんのためらいもなく地を出す。……けっこう長い間一緒にいたのに、あんまりフルカネルリのこと知らないナー。

……でもまあ、こんな生活も、悪くないよネー？

暢気なナイアのフルカネルリの考察。

フルカネルリだ。体育祭が嫌いになりそうだ。

《いきなりなにを言ってるのサー!?!》

……ふむ、流石にいきなりではなにを言っているのか伝わらないか。ならば一言で表すとしよう。

チアリーダー。

以上だ。

……ここまで読んできた者ならば理解してくれていると思っている。ちなみにわからなければわからないで一向にかまわない。どうせ私がやることに変わりはないのだから。

《……シリアスっぽく言ったところで、結局スカート履きたくないっていうだけの話なんだけどネー》

そのどこが悪い？ 私にとっては死活問題だ。主に精神面で。

『……そうねえ……』

なんとかやらないで済むようになった。心の底からよかったと思っただのは久し振りだな。

《オメデトー》

ああ、ありがとう。

……それにしても、誰だあのようなことを考えた馬鹿は。

《あいつだけドォー?》

ナイア頑丈さだけ示したのは明らかに悔しそうな顔をしているクラスメイトの中村。よし、少しばかり仕返しでもするか。

《……なにするつもり?》

大したことではない。ただ気付かれないように靈気で圧迫して寒気を起こさせてやるだけだ。

……それだけで貧血を起こす程度に。

《予想以上に過激ダー!?!》

『……………そう……………? ……瑠璃なら、これくらいやっても……………おかしくないわよお……………』

そうだな。全くおかしくなどない。さあ、始めようか。

二時間後、中村は真つ青な顔で早退した。

……………ハ。

《鼻で笑い飛ばしター!?!》

仕方ないだろう。私の中でアレは既に敵だ。これからは前世で積極的に私の邪魔をしてきた者と同じ扱いをすることは決定事項だ。

《……………^{モルモット}実験体扱いするには色々面倒だと思っヨー?》

そうだな。だが私の邪魔をしてきた者の末路はそれだけではないだろう?

『……………あらあらあ……………怖いわねえ……………あははははっ……………』

《……………まあ、別にいいけどネー。気を付けるんだヨー?》
わかってているさ。警察は色々と面倒だからな。

……………上手くやるぞ。

その日から、中村はずっと休んでいる。何があつたかは誰も知らない。

……………私? 勿論私も、'なんにも知らない'さ。

風邪でも引いたか? それとも重い病気か? もしかしたら事故にでもあつたのかもしれないな?

……………くくくくく……………。

『……………悪そうな顔ねえ……………』

嫌いか?

私がそう聞くと、アザギは久々に見る虚ろな笑みを浮かべながら、

『……………いいえ……………大好きよお……………?』

と、呟きを返した。

それから十日ほど過ぎて、中村が転校するという情報が担任から入った。

どうやら日本では治すのが難しい病気に罹患したらしく、海外に行くことになったらしい。

「へえ……だつてさ、瑠璃。……………瑠璃？」

白兔に話しかけられ、私は本から目を上げずに答えた。

「そつらしいな。病気をうつしていかなかったのがせめてもの救いだな」

《……白々しいネー》

……………何の話やら？

瑠璃にお願いされて、久し振りに生きた人を呪った。

不幸になるように、しかし殺さないように、慎重に呪いをかけた。

それを見て瑠璃は、呪いについて少し興味を持ったみたいで、いつもの調子でわたしが呪いを調整するところを見つめていた。

「アザギ。呪いに方向性を与えるのは可能か？」

具体的には、金銭にのみ影響するものや身体的な健康にのみ影響するもの、そして本人ではなく周りの者に害を与えるものなど……………とここまで言ったところでわたしが瑠璃の口を塞いだ。

「……………また、今度に……………教えてあげるわあ……………」

瑠璃は少しだけ不満そうだったが、すぐに了承して手元の銃弾のよくな何かを弄る作業に戻っていった。

……………確かにわたしから習うのならば、それはその銃弾に組み込むことができないはずだ。

……………人間に、と言うか生き物に撃つときは……………気を付けましょうねえ……………？

……別に、瑠璃以外がどうなるかと……構わないけどねえ……？

久し振りに悪霊らしいことをやった日のアザギの話。

フルカネルリだ。今年の文化祭はおばけ屋敷だそう。私は作る側に回って、驚かすのは他人に任せよう。

《……気のせいかな……なんかすごくいきいきしてないかなー？》
しているが？

《あ、やっぱりしてるんだー？》

『……うふふ……わたしも、頑張るわよお……？』
協力感謝だ、アザギ。

まず始めにやるのはどのようなものを作るか。例えば昔ながらの妖怪変化の類いを出すのか、西洋の怪物を作るのか、はたまた中華系の変化か今時の都市伝説の物か……それだけでずいぶんと変わってくる。

今回は和風のものでやるようだが、所々難しいものがあるだろう。

……… そういった難しい物は大好物だが。

その後には教室の大きさを調べ、図に書き出して細かく場所を決める。

どこに壁を作り、どの場所にどんなアトラクションを置くのか。その他にもどんな色にするか、音楽を流すか、流さないか。どのような怖いものが怖いものがあるか、それはこの教室に作ることができるかなど、様々な事を話し合い、意見を言い合う。

……… 最近の小学生の考えることはエグいな。そしてグロいな。グロい方は却下したが。

文化祭当日。私の教室からはそれなりに悲鳴が響いた。

……… はあ。実に楽しかった。

《趣味悪いヨー》

そうかもしれんな。

ちなみに最後の客は校長と副校長、そして教頭の三人だった。

《……あれー？ クトちゃんこついつの苦手だったような気がするんだけどナー？》

やはりか。よかった。

《？ どういうことかナー？》

……ふむ、つまり……片付けの手間が省けたということだ。

きゃああああああつー！！

てめえよくもクトをげぶらあつー！？

生徒の作ったものを壊すんじゃないわよこの単細胞！

《……あー、なるほどネー》

わかったようだな。

……アザギ。巻き込まれないように帰ってこいよ？

『……大丈夫よお……』
そうか。

結局校長達が去ったあとはボロボロの教室が残るだけだった。使っていた段ボールやガムテープなどは跡形もない。

《……うーん。これは灰すら残さないようにクトウグアが焼き尽くしたネー》

ほう。正解はどうだ？

『……ふふふ……大正解よお……みーんな、燃えちゃったわあ……』
『

そうか。

……机もか？

『……そうみたいねえ……？』

……そうか。金属部すら焼き尽くしたか。

……恐ろしいな。

《クトウグアは炎の神性だからネー。このぐらいはかるーくできちやうヨー》

……そのようだな。

……しかも焼くものの指定までできるのか、天井にも壁にも床にも焦げどころか煤すら付いていない。

……いつか研究させてもらえないものか……………。

《ダメだヨー？ 絶対ダメだからネー？》

……………そうか。

《……あ、解剖は絶対ダメだけど見て調べるのはやってもいいんじゃないかナー？》

そうか！

《元気になっター！？》

こ、こええええっ！なんだよこりやあつ！？

入ってすぐに後ろでドアがいきなり大きな音を立てて閉まるわ小さくライトアップされた所に座ってた人形がゲタゲタ笑いながら手足をカタカタいわせ、それに合わせて周りでも中途半端に肉の残った骸骨やら血濡れっぱく赤い絵の具の塗られたマネキンやらがガタガタ言い出すわポルターガイストが起こるわなんか妙に鉄臭くて少し気分が悪くなってくるわその状態で滅茶苦茶リアルな惨殺死体見せられるわで、さんざんな目に遭った。

……二度と小学生のガキンちよの作ったおばけ屋敷には入らねえと心に誓った。

……………ただだよお。ここはちいっと寒すぎだろ？

……お、出口か。

「……また、いらしてくださいねえ……」
いきなり横から聞こえてきたその声の方に振り向くと、扉のそばの薄暗いところに、二十歳を少し越えたぐらいの女が立っていた。

……このクラスの担任か？

……まあ、相手が誰だろうが俺の答えは決まっている。

「まっぴらごめんだね」

そう言っただけは目の前の扉を開けて、廊下に出ていった。

……後になって知ったが、あのクラスの担任はあまり喋らない男らしい。

……なら、俺が会ったあいつは誰だ？

お化け屋敷に入った一般客の話。

2・37 (前書き)

異世界編を書き始めました。

フルカネルリだ。白兔が風邪を引いて休んでいるようだ。見舞いにいくとしよう。

《いつてらっしゃーい。白兔ちゃんに桃缶あげるの忘れないでネー》
勿論だ。

白兔はそれなりに元気そうではあったが、やはりどこか弱々しく感じる。特に口元だな。

いつもならば意味もなくつり上がっているところが、今日はへにやりと下がってしまっている。

「……随分と辛そうだな？」

それでも私はいつも通りに白兔に話しかけ、

「……あはは……まあね……」

白兔も私にいつものように返した。

……だが、やはり口元は垂れ下がったままで口調に張りが無い。

……これはかなり重傷だな……。

……何とかする方法は無いか？

《いちー。フルカネルリの眷属にしてやれば風邪なんてあつという間になおっちゃうヨー》

副作用は？

《人間から外れちゃうから寿命とかそんなのがどっかにいつちゃって戻ってこなくなるヨー》

却下だ。

「……死んじゃえば……風邪なんt」

さらに却下だ。助ける相手を殺してどうする。

《じゃあサー。ボクの力で治しちゃうってというのはどうかナー？》

……ふむ。中々良い案だが……副作用は？

……ついでに言うと、

「どうせ一缶しか持ってきていないがな」

「へえ……あむ……」

缶詰の中身が無くなってから少しだけ話をし、すぐに白兔は眠ってしまった。

……私の手を握りながら。

《……可愛いワガママじゃないカー。白兔ちゃんは本当にキミの事が好きなんだネー？》
そうだな。

……私も白兔の事は、中々に気に入っているよ。
さらり、と頭を撫でてから、ふと時計を見る。

……七時か。そろそろ家に帰らねばな。

ゆっくりと白兔の指を外しながら、私は母への言い訳を考える。

……あの母は心配性なのだ。前に数週間連続で徹夜した後倒れるように眠っただけで起きたときに泣いたほどに。

《あの時は二日以上起きなかったのが原因だと思うナー？》
そうか？

『……一般の常識から考えると……自分の、娘が……二日も寝込んで……心配、するわよお……？』
そうなのか。

結局、あったことを正直に話したら、

「今度からは連絡しなさい」

とだけ言われて解放された。

……泣かなくて良かった。

《泣かれると困っちゃうよネー》
そうだな。

……今日は、少し疲れた。早めに寝るとしよう。

《……精神面の疲れが多いみたいだネー？》

……そうだな。

……少し、鍛えるか。人との関係を密にすれば良いだろう。
……おやすみ。

次の日。白兔ちゃんは普通に学校に来た。勿論瑠璃も風邪をうつされるような事は無く学校へ。

……健康な事はいいことだけど……あまり、無理はしないでねえ……？

お約束を軽く無視したフルカネルリを肩の上で見ていたアザギの思考。

2・38(前書き)

書き溜めが十五を越えたので投稿しておきます。

感想はいつでも募集中ですよ？

あと、誤字や脱字の報告も、見つけたらぜひ報告してください。

フルカネルリだ。雪が降り、いつもの光景が窓の外に見える。

「あははっ！行くよプフツ！」

「くおんのガキがあああああっ！！！」

「毎年毎年五月蠅いつ！いい加減に慣れなさいっ！」

……うむ。実にいつも通りだ。

《……ほんと、変わらないナー……》

今年は恒例の雪合戦大会ではなく、音楽コンクールのようなものがあるらしい。校長は

「こんなのをやると楽しい気がする！」

と言っていたので、またいつもの気まぐれだろう。

《神になるとネー……暇な時間が多いんだヨー》
そうか。

私達のクラスではのんびりと歌いたいという者が多かったので、全員がゆっくりとした声で歌う曲を幾つか白兔がチョイスしてきた。

……そう言えば、伴奏は音楽教師の杉村がやると聞いたが、他の楽器はどうするのだろうか？

……やはり、私達の誰かがやるのか？

結局私がやることになった。

一応誰が一番上手く弾けるかを確かめてからの投票式だったのだが、バイオリンを弾くのは初めてだったので軽く練習しながらやったのが悪かったのか、何故か私が選ばれた。

白兔が言うには

「えっとね……なんか、瑠璃の方が……こう、のびのび弾いてて、

楽しそうだったんだよね」

と、言うことらしい。

……やれやれ。

『……うふふ……期待してるわよお……？』

ああ、勝手にしろ。

《じゃあボクも期待すルー！》

……好きにしてくれ。

さっさと終わらせてすぐに帰る。そのために練習はちゃんとやった。おかげでそれなりの腕には成ったと思われる。

……外見の年齢から考えれば、の話だが。

《十分じゃないかナー？ と言うかもう一介のバイオリニストとしてそっちの世界で生きてけるぐらいの腕は持ってるヨー》

……そうなのか？

《少なくともボクはそう思うヨー》

……ふむ、そうか……。

……まあ、私は私らしく生きて行くつもりだが、一応の選択肢には入れておくでしょうか。

私は思う。

……瑠璃って万能だなあ……と。

校長先生のいつものノリでいきなり音楽祭が開かれることになって、私達は結構困っていた。

私が見つめてきたみんなで歌える歌は好評だったけど、どうしてもそれがいってという雰囲気になってから問題が出てきた。

この曲は、最低でもピアノとバイオリンの二つの楽器が必要で、先

生がピアノをやってくれるにしても一人足りない。

仕方無く私達の中で上手い人にやってもらうことになったんだけど、あんまり上手い人が居ない。

……九条さんはいつもバイオリンのお稽古をしてるって言ってたから期待したのに……。お稽古しても上手くなかった。それとも本当は最初からお稽古なんてしてなかったのかな？

……まあいいや。

私もやってみただけど、やっぱり初めてじゃあ上手くいかないや。

それで私はそのバイオリンと弓を瑠璃に渡してみる。

「……私もやるのか？」

「うん。みんなやるの」

瑠璃は渋々といった感じで私から楽器を受け取り、どこかぎこちなく構えた。

ぼそりと

「……たしか、こう、だったか……？」

と呟いてから、腕を動かし始める。

……すごい。普通にきれいな音が出る。

九条さんはかなり音を外していたけど、瑠璃はあんまり外れない。

……ほんとは、最初は結構酷かったけど、弾いてるうちにどんどん上手くなっていった感じだ。一度きれいな音になってからは、まるで決められたレールの上を走っているかのようにずっときれいなままだったし、音の変え方も少しの練習で学んでいた。

……瑠璃って、ほんとに万能だなあ……………。

瑠璃にそう言ってみたら、

「私は万能ではなく、学ぶ意欲が人より多いだけだ」
って言われた。

……嘘だっ！って言っちゃいそうになった。危ない危ない。

音楽祭の裏の苦労人、春原白兔によるフルカネルリ観察日記。

ただし脳内メモによる。

フルカネルリだ。新年の書き初め大会で初優勝。見事に餅を十七キロときな粉、醤油、海苔、大根おろし、砂糖、餡子を「お餅七つ道具」として渡された。家に帰ったらすぐに食べようと思う。

《ボクの分はあるかナー？》

『……………わたしの分は……………？』

……………食べられるのか？

《ボクはお供えしてもらえれば食べられるヨー》

『……………実体化……………すればねえ……………』

そうか。ならば焼こう。なにがいい？

《ボクはきな粉がいいナー》

『……………わたしは……………砂糖醤油が……………いいわあ……………』

そうか。わかった。

今日は朝から餅を食べる。母は

「お餅パーティーよ」

と言っていたが、食べなければ勿体無いと言っただけの話だ。

《もちゅもちゅ……………お餅ウマー！》

『……………わたしの分は……………？』

アザギが悲しそうにしているが、これは仕方がない。

実体化するということは、それはつまり母や父にもその姿が見えるようになるということであり、説明するのに時間がかかりそうだったので後回しになってしまっているのだ。

……………すまん。後で旨い餅を食わせてやるから、今は我慢してくれ。

昼に白兔が遊びに来た。そしてそのまま餅パーティー続行だ。

「……………このお餅美味しいね……………普通に売ってるのより、ずっと美味

しい……」
そうだな。

《そりゃそうサー。見た目はただの丸餅だけど作ったのはかなり位の高い神様デー、しかも三柱と一緒に作ってるんだからサー》
……なるほど。言われてみればその通りだな。

『……神様がぁ……おもちつきい……うふふ……』
《ぺったんぺったんお餅つきだヨー。……途中でクトちゃんが貧血で倒れてるところが目に見えかぶけどネー》

……ああ、有り得るな。
簡単に想像できた。そしてその後副校長がいつものように暴走し、水を使う仕事を一手に引き受けていた教頭が怒って副校長に水を叩きつけるのだろう。

《……アブホースならやりそうだなー……》
そうか。

夜になってからアザギとナイアと三人だけの餅パーティー。アザギは満足そうに砂糖醤油で餅を頬張っている。

「……食べるのは、久し振りだけど……美味しいわねえ……」
そうか。それはよかったな。

《ほんとに美味しいヨー》
知っている。私も食べた。

……流石に神が作っただけあって、かなりの味を誇っている。私は磯辺に砂糖醤油に塩、大根おろしにポン酢をかけた物と絡めたり、薄切りにしてチーズと一緒に焼いた物に市販のつゆの元をかけて食べたりと、色々なことをして食べた。

どれも中々にうまかったな。
《次は絡み餅がいいナー》

『……わたしはぁ、チーズが食べてみたいわねえ……』
わかったわかった。少し待っている。すぐに作ってやるからな。
……そうだ。軽く靈気の炎で中から焼けばいい。そうすればすぐに

作れるだろう。
さあ、作るとするか。

臼の中には蒸かした餅米がいっぱい入っている。

これに、'おいしくなあれ' と思いを込めながらついていく。
ぐりぐりと餅米を潰して、それから一纏めにしていく。

私もお兄ちゃんも水に触ると一気に調子が悪くなるから、これは毎年アブホースさんをお願いしてやってもらうことにしている。

……でもねアブホースさん。私のお兄ちゃんは一途で鈍くて素直じゃないところがあるから、そんなに回りくどいといつまでも気づいてもらえませんよ？

……まあ、私ができることじゃありませんけど。

……あーあ。ナイアさんは自分の事になるとすぐに鈍くなるんですよね。

……まあ、私はナイアさんがいい人を見つけれればそれでいいんですけど。でもヨグソトスさん、あなたは駄目です。

さて、お餅つきお餅つき………はれ？

杵を持って振り上げると同時に、世界がグニヤリと歪んだ。

……あーあ。こんなときにも貧血かあ………。

………きゆう。

貧血だと存在に刻み付けられているクトの餅つき。

2・40(前書き)

後四話か五話で異世界編に入ります。

ちなみにタグでも嘘をつくことになりそうです。

フルカネルリだ。氷雨が遅い新年の挨拶に何故か熊肉を持ってきた。
 《熊肉って右掌が一番美味しいんだってサー》
 ほう、そうなのか。ならば確かめてみるとしよう。

氷雨は挨拶だけしてすぐに帰って行ってしまった。どうもこの熊は
 寿命で死んでいた所を冷凍保存していたために少々鮮度が落ちてい
 るらしいが、まあ私にはあまり関係のない話だ。

……そう、たとえそのせいで氷雨が治めている山の主の座を動物達
 が争っていようが、私には全く関係ないことだ。

『……酷いわねえ……』

そうか？ 邪魔しない分だけかもしれませんが？

《……そう言えばフルカネルリって邪魔されるの大嫌いだったよネ
 ー》

ああ。邪魔されるとそいつを徹底的に潰したくなって仕方がなくな
 る。前世でとある国の王が邪魔してきたが……そう言えばそれから
 あの国に妙な疫病が発生し始めたのだったか？ そう、まるで水銀
 中毒の症状のような‘疫病’が。

……私はなにもしていないぞ？ そう、全ては‘偶然’起きたこと
 だ。

《……嘘臭いナー……》

五月蠅い、腹の中にドライアイスを大量に詰め込まれて気化した二
 酸化炭素の圧力で爆発して死ね。

《長い上に痛々しすぎるよそれハー！？》

さて、熊料理でも作るとするか。

《無視しないでヨー！》

料理に集中していたら、あっという間に時間が過ぎた。

……まあ、丁度いい時間だし……昼食にするか。

《ボクも食べていいかナー？》

好きにしる。

《やっター！》

熊肉料理を食べ終わってから、ふと、今年はまだ神社で抱負を語っていないことを思い出す。

……水雨が新年の挨拶に来てくれたお陰で思い出すことができた。そこで、近くの神社まで軽く散歩に出ることにした。

神社には全くと言って良いほどに人がいなかった。

そんな神社の鳥居をくぐり、道の左側を通って社に近付く。

賽銭箱に五円玉を放り込み、二回頭を下げ、柏手を二回打ち、心中で今年の抱負と願いを語る。

まずは抱負。去年と同じく研究者として恥ずかしくない一年にする。そして願いの方だが、今年は女物の服を着ないで済むようにと願う。

《無・理》

いつも銃でやっているように術式を組む。銃が無いので少々荒いが、今使うには十分。狙うは社の中で嫌らしく笑いながら私を見ている名も知らぬ神カミの額。

《ふ、フルカネルリー？》

……消え失せる。

私はその術式にありったけの霊気と害意を込めて、的に向かって打ち出した。

目の前ですごいことが起きた。なんとフルカネルリが自作の術式で、弱々しい木端神とはいえ神を殺してしまったのだ。

……その代わりにフルカネルリは気を失っている。いきなりあんな量の靈気を放出したんだから、当然と言えば当然なだけどネー。

……それにしても、きれいな良い術式だったナー。あれを人間が組み上げたなんて、ちよつと信じられないヤー。

「……すごかったわねえ……」

アザギもそう言っているし、やっぱりフルカネルリに目をつけて正解だったナー。

……そんなことを考えながら、倒れていたフルカネルリの体を立たせて汚れを払わせる。

そして何事もなかったかのように、フルカネルリの体は神社の敷地から出ていった。

「……さーとど。ここからはボク達の仕事だヨー？」

「……ええ、そうねえ……大丈夫よお………あはははっ……」

フルカネルリに殺された木端神の欠片を集める。逃げようとするそれも向かってくるそれも、みんな一纏めにして固めてやる。

「……ぐ……ぞおお……あの……ガキめえ……」

今、フルカネルリに殺されて意識を散らされた神の怨嗟の音が響く。ほつとけばよつぼどの事が無い限り復活しなかっただろっけど、ボクが力任せにその存在を弱々しくも取り戻させた。

それはボク達の事を無視してフルカネルリを追いかけようとしている。

「……まあ、やらせないけどネー。」

「アザギ。よろしくネー」

「……うふふ……いただきまあす……」

ぱくり、とアザギが死にかけの神を頬張った。

そしてそのまま、咀嚼するように口を動かす。

時折悲鳴や何かが砕けて潰れる音がするが、そんなのはボクもアザギももう慣れっこだ。

そして弱った神は、そのままあっけなくアザギに吞まれて消えた。

「……けぶ……ごちそうさまあ……でもお……美味しくなかったわあ……」

アザギは不満そうだけど、その力はちゃんと大きくなっている。

「まあまあ。明日フルカネルリに美味しいご飯でも作ってもらえば良いじゃないカー」

「……そうねえ……それも良いわねえ……」

そんな軽口を叩き合いながら、ボクとアザギはフルカネルリのいる家まで戻っていった。

後始末と言う名のアフターサービスまで万全なナイアのある日の行動。

フルカネルリは‘神殺し’の称号を手にいれた。

その効果により神属性に対して有利になりました。

スキル：‘邪神の加護’を手にいれた。

自分が力及ばないときに邪神が手助けしてくれます。

《……って言うてもあんまりたいした効果は無いヨー。精々神気とかそんなのが少しだけ使えるようになる程度サー》

2 - 4 1 (前書き)

今回は相当短いです。

フルカネルリだ。そう言えばもう三月。私の初の異世界旅行まであと三ヶ月程だ。

《そうだヨー。どんな世界に行くかは教えてあげないけど、準備はしといた方が良くと思うヨー》
 そうだな。

とりあえず銃と大型のナイフ、それに丈夫な服は用意した。

……まあ、服は既製品に妖力または霊力の糸を通して強化してやれば事足りるが。

そうそう壊れることは無いと思うが、一応予備に形だけのハンドガンを用意。形だけでも十分撃つことはできる。

……実際、何も無しでも撃てないことはない。少々疲れるが、不可能ではない。

《霊力切れにも慣れてきたもんネー》

そうだな。努力した甲斐があったと言うものだ。

ちなみにやり方は、毎日寝る前に霊力を全て吐き出して固めておくだけだ。今までに溜めた分は、小さな球体の宝石のようにして透明なガラス瓶の中に入っている。

……白兔はそれを見た時飴玉と勘違いしていたが。

《きれいに透き通った空色だもんネー。美味しそうだって思っても仕方がないヨー》

そうか？ 私ならそんな怪しいものは恐ろしくて食べられないのだが。

『……ふふふ……瑠璃は……心配性ねえ……』
 そうだな。

《ちなみに食べるとブルーハワイみたいな味がするヨー》

どれ……………おお、確かに。
《躊躇なく食べちゃっター!?!》

流石にトランクを作るには缶が足りなかったので自分でリュックサックを作った。

……………うむ、良い出来だ。

《小学生のやることじゃ無いよネー》
普通はそうだな。

……………まあ、私は普通には入らないだろうが。

……………さて、準備はできた。後は出かける直前に缶詰と水を入れれば良い。

……………一応、むこうの世界から帰ってきた時に混乱しないように、この世界についての日記でもつけておくか。

……………日付は……………私が生まれてすぐから始めよう。

フルカネルリって基本的に考えることがなんでもかんでも深読みしすぎなんだよネー。

今回の世界ならフルカネルリが死んで帰ってくることなんてほぼ無いし、死にそうになったとしてもボクとアザギがしっかり守ってあげるのにネー。

……………それでもフルカネルリは準備に手を抜くとか言うことは考えないんだろうけどサー。

それでこそフルカネルリだヨー!

……………まあ、なんにしるボクがそんな危ない世界にいきなり放り込んだりはしないって事は理解してほしいかナー? そういう所に放り込むなら、事前にちゃんと《危ないヨー》って言うっておくサー。

……少なくとも、ボクならネー。

フルカネルリが今までにあったことをみんな日記に書いているのを見ながら、ボクはそんなとりとめの無いことを考えていた。

もうすぐ異界旅行に出発するフルカネルリを見守るナイアの話。

フルカネルリだ。四年生になりはしたが、特に何も代わり映えがない。

《学校なんてそんなものだヨー。みんな平和な日常を享受することをここで覚えるのサー》
そうか。先達の言うことは違うな。

白兔の居る女子バスケット部で時間を潰す。白兔は四年の身で堂々とエースと呼ばれている。

……ちなみに私は裏エース等と呼ばれているが、この部に籍は無いしわざわざ入る義理も無い。

白兔は私に入ってほしいと思いつつ、私の自由にさせてくれている。得難い友だ。

まあ、今のところ入る気は全く無いが。

まわりつこうとしてくるバスケット部員をすり抜けて、ひょいとリングにボールを入れる。

入ったことを確認して、自分の守備範囲に戻る。

……だが、なぜ私に三人もついているのだ？　ここまでやっては他がから空きになるだろうに。

そう思いながら見ていると……ほら、白兔がゴールを決めた。

私に向かって笑いかけてくるが、それはすぐに私をマークしている部員に隠された。

……やれやれ。

私は再びその囲いをすり抜けて、リングにボールを投げ込んだ。

最終スコアは6対58。この紅白戦は私達のチームの勝ちだ。

「勝ったー！ やったね瑠璃！」

白兔が片手を上げる。

……確か、こつ返すんだったな。

「ああ。そつだな」

私も同じように片手を上げ、手のひらを打ち合わせる。

……ぱしん、と良い音が鳴った。

「……それにしても、やっぱり瑠璃ってすごいね」

「……そうか？」

「うん！」

なぜ白兔はこれほど嬉しそうなのだろうか？

その嬉しそうな顔を引つ込めないまま白兔は続ける。

「だって、今の試合の点つて半分は瑠璃が取つたし、いつもよりマ
ークも多かったのにもと変わらないように動いてくれたし……」

……ああ、なるほど。

だが、私にとつては大したことはない。まあ確かに今の体でそこ
までできたのは私も少しばかり驚きはしたが、この程度なら方向と
加減をうまくやれば誰でも出来る。

……私もまだ完全ではないが、外さないようにすることくらいは出
来る。それに今の試合では、何度かボールがリングに当たってしま
った。

《十分だと思つヨ》

私は不満だ。

……だが、今はこれで満足しておこつ。

私は白兔の頭を撫でながら、のんびりと考え事を続けた。

ぱすつ、と、静かな音を立てながら、瑠璃の投げたボールがゴール
ネットだけを揺らす。

するとその姿に周りで見ていた観客たちが歓声を上げる。

……うん、瑠璃って綺麗だもんね。仕方ないよ。

……でも、ちょっとやだ。

瑠璃の綺麗なところは私だけが知ってたはずなのに、いつの間にかみんなが知ってるようになってしまった。

……でも、瑠璃はこうやって体を動かすのはともかく目立つのはあんまり好きじゃないみたいだから、まあいいや。それに瑠璃の可愛いとところはまだ私と瑠璃のお母さん達しか知らないし。

でも先輩たちは瑠璃を他の部に行かせたくないみたいで、何回も入部して欲しいって瑠璃に言いに行ってる。

……まったくもう。自由にしてあげればいいのにさ。

言いに行くたび瑠璃の機嫌は悪くなってると、毎回私が落ち着かせてるんだからそのことも考えてほしい。

……怒った瑠璃ってすごい怖いんだよ？ 表情とか態度とかは変わってないけど、雰囲気……なんだろ……こう、獲物を前にしたお腹をすかした狼と言うか……子供を拐われた象と言うか……そんな感じ……かな？

とにかく怖い。いつも怒らない分とっても怖い。

……だから……やめて？ ね？

怖がり白兔と何も知らない先輩の話。

フルカネルリだ。よくよく考えてみれば、もしも今の時代から数千年前のような世界に行った場合、時間の計り方がおかしくなってしまう。そういう気がしたので時計をもって行くことにした。

……自作のな。

《時計を自作しちゃったノー！？》

ああ、した。

中々に苦労したが、アザギの協力によって相当正確な時計を作ることができた。

ゼンマイ式だが、十年に一秒もずれないようにしてある。それにしても霊術や妖術は使い方をうまくすればかなり便利だな。

《べ……便利とかそんなレベルの話じゃないような気がするヨ……》

『……ふふふ……気のせいよお……』

その通り、気のせいだとも。

……ただ、ネジを巻くのを忘れないようにしなければいけないのだが……自動で巻き上げてくれる術式か機構でも組み込むとするか。

「……おい、瑠璃ー？」

「……ん、なんだ、白兔か。どうした？」

「どうした、じゃなくてさ……瑠璃の方こそどうしたの？ もう七回も呼んだんだよ？」

……ああ、なるほど。集中しすぎて気付かなかったな。

「そうか。それはすまないな。……なんだ？」

むっ、とむくれている白兔に用件を聞くと、なぜか溜め息をつかれた。

「……わかってないんだろっなあ……」

「……なにがだ？」

「気にしないで。それより、その時計はどうしたの？」

白兔が指差したのは、今も術式を組み込むために手に持っていた鎖付きの時計だった。

「これか？ なに、母に買ってもらったのだよ」

「……そっか。そうだよ、いくら瑠璃でも自分で作れるわけが無いよね……」

私もただの小学生が時計を作れるとは思えないため、さすがに今回は嘘をつかせてもらった。悪いな、白兔。

《賢明だと思っヨ》

……ありがとう、ナイア。

「まあ、外側の意匠は私がつけたのだが」

「十分すぎるほど凄いよそれ！？ でもなんだか瑠璃なら納得！ 納得するのか。」

『……今まで……色々、作ってきたじゃないのお……』

ああ、確かに。それでか。

《そうなんじゃないかナー？》

いくつも術式を組み立て、いくつも術式を破棄し、いくつもの結果を作り上げた。

……初めは自動の巻き上げ術式を作っていたはずなのに、なぜか途中で自動反射術式が組み上がるという結果になったりもしたが、自動巻き上げ術式は完成した。

動かなくなる前に一瞬で巻き上げ、それ以降は適当なタイミングまで発動しない。ただそれだけの術式を組むのに五時間もかけてしまった。

……まあ、運動系の術式を組むのは初めてだったということだし、今回はこれで納得しておこう。

「あ、悩み事は解決したみたいだね？」

「ああ」

《……白兔ちゃん、よくわかったネー》

『……ふふふ……それだけ、瑠璃をよく見てる……そういうことでしょう……………?』

《そうだネー》

そうか。ありがたいことだな。

カシャカシャと術式を組み立て、その効果を確認しながら次の術式を組み続ける。そんなフルカネルリを見ながらボクは思う。

……やっぱりフルカネルリはこういうことに才能がある。

具体的には、感覚でおよその形を理解でき、さらに理論でそれを補強し、それらが無駄になっても腐ることなく前に進むことができる、いわゆる‘努力する天才’だ。

……しかも、‘成長速度上昇’もあるから手がつけられない。

……あー、こわいこわい。

フルカネルリは人間の範疇を越えて成長を続ける。

いつかそれはボクに届くかも知れない。

……まあ、フルカネルリならそうなってもなーんにも変わらない気がするけどネー。

『……ふふふふ……そうねえ……………』

《だよネー》

……まあ、そんなわけで。

もし、フルカネルリが人間を辞めなくなったらいつでも言ってくれていいヨー。

ボクたち……少なくともボクは、歓迎するからネー。

……フルカネルリが人間を辞めなくなるなんて、想像もできない

けどサー。

昔とちょっと考え方が変わったナイアの話。

2 - 4 4 (前書き)

短いので0時にもつひと

フルカネルリだ。今日は私の生まれた日。つまり誕生日だ。

そしてそれは私が異世界旅行に出発する日でもある。

それにともない私は、帰ってきた後の修学旅行の準備に明け暮れていた。

《なんで今それをやるのサー!? もつと他にやることがあるでシヨー!?》

大丈夫だ。用意については考え付くことはやったし、持っていく服はしっかりと別に用意してある。

……ああ、強いて言うならば水と食料か。

《……あつちの世界では食べなくても飲まないでもある程度平気にしたんだけどネー》

そうなのか? 聞いていないぞ?

《聞かれなかったから言っただけだ》

そうか。

《……ツッコミ……》

『……言いなさいよお……ふふふ……』

《……あーうんありがとネー》

……何をやっているのだろうか。

よし、修学旅行の準備はできた。

そして異世界旅行の準備も完了した。

服、よし。銃、本体、予備共によし。ナイフ、よし。医療道具、よし。食料と水、三日分ほどしかないが、まあよし。時計、よし。溜めた霊力と妖力、よし。

……忘れ物は?

『……氷雨に、手紙を出しておくわねえ……?』

そうか。ならば私も白兔と父と母に、一つずつ手紙を残すとしてよう。
《好きにしなヨー。時間はたっぷりあるからネー》
そうだな。

さあ、行こう。

《わかったヨー》

私が持つていく道具を掴み、アザギが私の肩に乗った瞬間。
くるり、と世界が回って、私の意識は暗闇に落ちていった。

ぱったりと倒れたフルカネルリの体を、ベッドの上に運んでおく。
今、フルカネルリの体は仮死状態にある。心臓は止まっているし、
息もしていない。このままだったら朝に両親に見つかって、大騒ぎ
になると思う。

だから、ちよつとだけこの体をボクの力で守る。

こうすれば燃やそうが凍らせようがフルカネルリの体には傷ひとつ
つくことはない。

……ちなみに、なんで体ごと異世界に飛ばさないかと言うと……今
のまま飛ばすと、ちよつと体が持たない可能性があるから。

……次回ならだいじょぶだと思っけど、今回はちよつとネー。

ちゃんと向こうの世界にいつてる間の能力その他が上がった分はこ
っちの体にもフィードバックされるようになってるから、問題は無
いはずなんだよネー。

……さて、ボクもいこっかなー。

異世界に行く前の最後の仕事を終わらせたナイアの話。

異世界編 1 - 1 (前書き)

異世界編の開幕です

フルカネルリだ。異世界に来て初めて見たものは、なんと六脚の機械だった。

『……………へえ……………これ、すごいわねえ……………』
ああ、そうだな。

とりあえず解析。いきなりこの機械の名前やらスペックやらが頭のなかに流れ込んでくる。

……………待て。製作日時が西暦一万二千年だと？ どういう……………ああ、そういうことか。

つまりこれは、前と同じ、時間旅行のようなものなのか。

《正確には違うけど、大体当たりだヨー》
やはりそうか。

……………正確にはなんなのだ？

《簡単に言っちゃうとネー、もしかしたらあるのかもしれないあの世界から派生する未来のひとつだヨー。勿論異世界旅行だから、キミがいなかった場合のあの世界からの派生だけドネー》
そうか。おおよそ理解した。

……………ところで、さっきから私のことを認識したまま動こうとしないこの機械はどうすればいい？ 私としては解体して解析結果を直に見たいのだが。

《やらない方がいいと思うヨー》
そうか。仕方がないな。

機械に手を差し出して、術式を組みながら言う。

「私を、君達の所に連れていってくれないか？」
ウォン、と機械の腕が動き、私を抱えあげた。

「……………了解。これより、第三機甲兵大隊、駐屯地へ向かいます」

……意外にも滑らかに話すのだな。外側から見て、こう言った機能はあまり期待していなかったのだが。

《超科学の産物だからネー。すごいヨー》

ああ、凄いな。

『……………すごいわねえ……………』

なんと言うか、驚きだな。まさかこの大きさと、しかも私というイレギュラーまである状態で透明になって見せるとは。

……………それに。

「どの程度で着く？」

あえて主語を抜いた文で、この機械に問い掛ける。

「一時間と、四十八分、三十三、秒です」

うむ、中々に柔らかな頭を持っているな。これ程のものを作り上げることができるようになるとは……………人間の可能性は未知数だ。

《そりゃそうだヨー。そうじゃなかったら多分今までにどこかの神様が暇潰しに世界を潰して回ってるヨー》

……………そんなことがあるのか。神とは誠に恐ろしく、そして素晴らしい。

……………研究したい。

《……………観察日記ぐらいなら、いいヨー》

言質は取ったぞ？

《……………あれ、おかしいナー？ 早まった気がしてならないのはどうしてかナー？》

実際にそうだからではないか？

……………明日からナイアの観察日記をつけよう。ついでにアザギのも作ってしまおう。構わんな？

『……………ふふふふ……………いいわよお……………？』
よし。

……………さて、食事にするか。

《この状況でご飯にしようとするフルカネルリがわかんないヨー！

？
》

異世界に来てもいつもと同じ

異世界編 1 - 2 (前書き)

異世界編はそんなに長々とは続きません

報告。哨戒任務中に、人間'を発見。命令により、第三機甲兵大隊駐屯地へ進行中。ルートは直進。

第一原則の適用により、戦時行動を停止し、休戦の打診を提案。オーバー。

全て了承。休戦連絡完了。仮想敵国、沈黙。オーバー。

こちら仮想敵国本部。休戦は了承。一時撤退する。

了解。

フルカネルリだ。何かあったような気がするが、気にすることはない。私を運んでいる機械の通信記録を解析して読み取っただけだ。

《解析をボクも予想してなかった方法で活用してルー!?》
人の頭の中身ですらある程度なら読み取れるのだから、これぐらいなら楽にできる。

……それにしてもこの時代のプログラム言語は素晴らしく進んでいるな。神位共通言語ほどではないが、少々苦労した。

《お疲れ》

ああ。

第三機甲兵大隊の駐屯地に到着。様々な形をした機械が見える。

……ああ、研究したい。

バラバラにして間接部分の造りを確認したい。

コンピューターを繋いで人工知能を上から覗いてやりたい。

素材の一つ一つを手にとって解析したい。

使われている技術を、全て私のものになりたい。

『……ふふふ……瑠璃は、我儘な子ねえ……』

《それでこそフルカネルリって気がするけどネー》

私のことをよく理解しているじゃないか。

私の前に、人の形をした何かが跪いている。
外見は人と変わらないが、解析してみればわかる。

これは、完全に人の手で作られた人間だ。

いくつもの蛋白質を組み合わせ、筋肉や脳を作り上げ、内蔵を形作らせて、人と同じくなるように作られている。

ただ、頭の中に洗脳用の機械が埋め込まれている以外は、ただの人間だ。

……新たな研究対象が、向こうから来てくれるとは……素晴らしい。

「御名前を」

……ああ、これで認証するのか。

私は、この機械達の仮の主に向かって、名乗りをあげた。

「私は、フルカネルリだ」

自覚はなかったが、私はこの瞬間に、この世界での最高権力者になっていた。

「確認いたしました、フルカネルリ様。これより、我々、第三機甲兵大隊、以下全ての機甲兵は、フルカネルリ様の指揮下に入ります」

「わかった……ふむ。お前、名前はるか？」

目の前の人造人間に名を聞く。あるとないとは大違いだからな。

「機体番号、0000025番、です」

……二十五番か。

「ならばお前はハヴィラックだ」

「了解しました」

私が言った命令も素直に受け入れたハヴィラック。何故かは知らないが、私に全ての命令権があるようだ。

《素晴らしいネー。……ところで、なんで二十五番がハヴィラックなノー？》

……前世で私が作った二十五番目の発明品の開発時の仮名称がハヴ
イラックだったのだ。

《……なに作ったのサー》

……正確には、作ろうとして技術と材料の壁にぶつかり、断念した
のだがな。作ろうとしたのは、馬より早く、多くの荷物を運ぶこと
のできる機械だ。簡単に言うならば、車だな。

《あの時代にそんなの考えてたノー！？》

ああ、そうだ。

『……なんの話かは知らないけど……車を作るには、早いと思う
わよお……？』

……そうだな。

《まあ、確かに時代的にも技術的にも早かったネー》

異世界で王になったフルカネルリ（自覚なし）。

フルカネルリだ。ハヴィラックに頼んで集められるだけの情報を集めて貰った。

……ちなみに、私は十歳だと思われたらしく、十八禁や十五禁といったものは見せてもらえない。

《……なんと言うか、頑張つてネー》

頑張らせてもらおう。それに、どうせかなり長い間この世界に居ることになるのだから、このくらい待つて見せるぞ。

『……一番見たかった、知らない技術についてはあ……普通に見ることができたものねえ……』
そうだな。

キュルルル……という早回しの音がしそうなほどに高速で画面が上から下へ移り変わって行く。

しかし、それは決して早すぎるということはなく、むしろちょうどいいと言える速度だ。

いくつもの画面が同時に私の目の前に映し出され、滝のように文章化された情報が流れていく。

この他にも、脳に直接情報を焼き付ける方法もあるようだが……と
言うより、そちらの方が主流であるようだが、私はあえてこのやり方を採用した。

理由は、私には解析の目があるため、こちらの方が細かいところまで理解しやすいということ。それに合わせてこちらの方が単純に早いということ。

最後に、そのやり方は気分が悪いという理由だ。

……ちなみに、最後の理由がかなり大きかったりする。

《我儘ダー！》

その通り。私は我儘だ。だが、こちらの方が早いのだし、別に構わないだろう？

《……まあ、なんだっていいけどネー》

『……ふふふ……』

ぶつ通しで流し読みを続けておよそ一月。ようやく私の欲しかった情報のほぼ全てが集まった。この世界に来てからというものの、食事も水も睡眠も、殆ど必要としない。

《言った通りだったでシヨウ？》

そうだな。

……さて、見つけた設計図の中から作れそうなものを作るとするか。……だが、その前にやることがあった。

「ハヴィラック！」

「はい、フルカネルリ様」

私が情報を集めると言って以来、姿を見せなかったハヴィラックが当然のように扉から現れた。

「食事にするぞ」

そう。簡単に言つと、そろそろ食べておかなければ研究の途中で気を失ってしまいそうで勿体ない。

《もったいないってどんな理由サー！？》

『……そのままじゃあ……ないかしらあ……？』

作っているときの記憶を失うのは勿体無いし、そうなれば作っているときだからこそその閃きも忘れてしまう。実に勿体無い。

《あーはいそうだなー》

『……そうよあ……』

そうだぞ、ナイア。

食事はあまり多くはなかったが、私に合わせたかのような量だった。

《本当に合わせたんじゃないノー？》

恐らくその通りだろうな。

……ふむ。中々旨い。

これを人の手を離れて作ることができるようになる日が来るとは……。

《驚きだよネー》

《……ほんとにねえ……あはははっ……》

ハヴィラックも私と同じように食べている。私とハヴィラックは体の作りが違うはずなのだが、何故かハヴィラックの方が私より参っていたように見えた。

……元々は一人で食べるはずだったこの食事にハヴィラックを同席させたのは、ハヴィラックが殆ど食べも休みもしていないように見えただからだ。

ハヴィラックに無理をさせて壊してしまっではいけない。まだまだしかりと役に立って貰わねば。

《ナチュラルに‘壊れる’って外道な事言ってるルー！？》

そうか？ 人も機械もいつか壊れるものだろうか？ 誰かが言っていたではないか。‘形あるものはいつか壊れる’と。

《‘崩れる’だった気がするんだけどー？》

そうだったか？

『……ふふふ……意味としては、同じようなものでしょう……？』
一理あるな。

異世界での二回目の食事は一月後。

《一回目は三十分位だったのにネー》

異世界編 1 - 4 (前書き)

異世界編は基本的に短いです。

フルカネルリだ。あれからしばらくして、ひとつの作品を作った。

《何かナー 何なのかなー》

『……………何かしらあ……………？』

上着だ。

《もつとためてヨー！》

必要ない。結局私が作った物は丈夫な上着なのだから。

《……………ムー……………そうなんだけどサー……………》

私が見た新技術の中に、特殊な繊維に金属を吹き付けたという丈夫な布があつた。

それを使い、新しく白衣を作ったのだが……………一枚が異様に薄かつたので何十枚か重ねて作つたら、理論上は直径一メートルの球体の隕石が十五Km/秒の速度で衝突してもなんとか形を保つたままであるという計算結果が出るような物になつてしまった。

《なにそレー！？》

『……………あらあらあ……………すごいわねえ……………』

まあな。

……………ただし、この布は熱に弱く、燃えやすいという欠点があつた。そこで私は氷雨の服に刻まれていた術式を刻むことによつてその弱点を解決したのだ。

《超科学と霊術のコラボはすごいネー》

いや、霊術だけではなく妖術も使っているぞ。

妖術で熱に弱い点を克服し、霊術でさらに布自体の耐久力を上げている。

それによつて服だけならば核を撃たれても無傷という状態まで持つていくことができた。

現在の目標は、術式なしでこれと同等以上の物を作る事だ。

《ものすごい目標たててルー!?》

『…………ふふふ…………そう…………頑張ってねえ……………』

ああ。言われずともやるとも。

さあ、研究のための道具も出来た。研究しよう。

ひたすらに研究と実験を繰り返し、気付いた時には既に十年が過ぎ
ていた。

私は変わらないが、ハヴィラックは少し老いた。そうは言っても普
通の人間よりもずっと遅いが、私よりは早い。

《フルカネルリは老いないようになってるからネー》
何度も聞いた。

…………ふむ。この速度ならば後四百年で肉体年齢九十といった所か。

…………よくもまあこれほど脳が持つように作ったものだ。

………………………早めに次を作らせておくべきか。

「ハヴィラック」

「はい、フルカネルリ様」

私の後ろから声が上がる。

「お前が壊れた後の準備をしておけ」

「承りました」

ハヴィラックはそう言ってどこかに連絡をしている。

フルカネルリ様より、命令。私の代わりを、製作しておけ、と。

了解。素体はコールドスリープ状態にて、来る日まで。

採用。

…………なるほど。作ろうとすればすぐに作れるわけだな。

ただ、ある程度使えるようになり、その上で長く使えるようにする

には短くとも三年はかけてゆつくりと成長させねばいけないようだ。
…… よろしい。ならば私の次の目標は、ハヴィラックを作るときに
必要な時間を一年まで縮めて見せよう。

《……うー。もうこれで目標の数が三百いっちゃったヨー。……
できるのかナー？》

やってみせよう。私はフルカネルリだ。

自由に振る舞うフルカネルリ。

フルカネルリだ。空間を歪めて広くしたり狭くしたりする機械を開発した。

ただこの機械を動かすにはかなり巨大な電力が必要になるため、ナイアの言う‘四次元ポケット’ができるまでには機械の小型化+効果の効率化をしなければならぬ。

発電機については周りの機械の物を流用すれば何とでもなる。

《頑張れ頑張れフルカネルリー》
わかったわかった。

ナイアには悪いが、空間を広げるより、縮める方が早く開発が進んだ。

縮める方の使い方は、点と点の間の距離を限りなく0に近づけ、その短くなった距離を進んでやれば疑似瞬間移動になる。

それと空間歪曲装置だが、小さくするのは出来ないが効率化には成功した。

……そこでポケットの中の空間を広げ、その中に発電機と共に入れてみたらできた。

ただし、いくら空間を広げても中身の重量は変わらないため、着るのが嫌になる程度には重い。

……反重力発生装置でも作るか。幸い、理論だけならばできていることだ……

目が覚めると私の部屋のベッドに横になっていた。

……やれやれ、また倒れたか。

《運んだのはハヴィラックだヨ》

そうだろうな。あいつ以外に触られたら起きていただろう。

……ああ、ナイアとアザギは別だ。おそらく起きなかつただろう。
……それにしても、絶食の限界はまだ見極められん。その日その
時でかなり変わる。

《いや、むしろ睡眠不足だヨー。ここ半年くらい寝てなかつたでシ
ヨー？》

……そういえばそうだったな。

……そうか、そちらか。

『……あ、そうそう……ハヴィラックから、伝言よお……？』
何だ？

『……研究は、連続三ヶ月まで……徹夜も、同じだけど……絶食は、
一月まで、……ですってよお……』
な……せめて四ヶ月半にならないものか……。

『……ふふふ……瑠璃らしいわねえ……』

《無理だと思つヨー》

……そうか。

記憶はしたがいつもは思い出す事もなく脳の奥に眠っている記憶の
なかに、古い古い住民票が存在した。

時間があるのでその中の私に関係のある人物の記録をみてみることに
した。

《……やめといた方がいいと思うヨー？》

……私もそう思うさ。だが、それでも私は知りたい。

私が私であるために。

《……好きにするといいヨー》

それだけ言つてナイアは、珍しく気まずげに黙り込んだ。

……やれやれ、嫌な予感が止まらん。

はじめは白兔について調べてみる事にする。

頭の中のデータベースで白兔の名前を検索する。

するとすぐに見つけた。

春原白兔 享年七歳。

……何だと？

他の名前を探するために、私は自らの思考の海に飛び込んでいった。

……調べてみると、どうやら私の周囲にいた者達は、総じて早死にするか、もしくは産まれてすらいなかった。

父は、祖父が子を作る前に殺されていたために産まれていなかった。母は、全く知らない男を夫とし、結婚後三年で包丁で滅多刺しにされ、殺されていた。

白兔は生まれつき病弱で、七歳まで生きていたことが奇跡と言われている。その両親は白兔の死を切っ掛けに首を吊って自殺。

……そして、私達が通っていたあの学校は影も形もなかった。

……なるほどな。ナイアが止めた理由がよくわかった。

……気分が悪い。今日はもう寝るとしよう。

だからやめといた方がいいって言ったのにサー。知らない方が幸せなことだってあるのに、なんで人間って言うのは何でも知ろうとするのかサー？

……まあ、そのなかでもフルカネルリは違うけどサー。

普通ならここで、知らなければよかった、って思うんだけど、フルカネルリはそれをただの、可能性、として受け入れることができる。いる。

こんなことがキミがない世界で起きました、って言われて

「そうか」

の一言で終わらせられる人間はなかない。特にそれが自分の
中のいい人間だった場合には。

『……きっと、瑠璃は……どこかが、おかしいのねえ……？』

《人間としてはそうかもネー》

……神様としては否定しないけどー。

ナイア達のフルカネルリ観察日記。

異世界編 1 - 6 (前書き)

実は異世界編は六話で終了の予定でした。

……いえ、まだ続きますよ？ 色々とノリで付け加えたので。

フルカネルリだ。さて、研究の続きをするか。

《全くあと引いてないノー!?》

引いていないが?

《……人間味のない人間だナー……》

『……ほんとにねえ……』

悪いか?

《別ニ?》

『……いいんじゃないのお……?』

そうか。

壊れた機兵はすぐに溶かされて再び資源になるようだが、一機だけもらって分解してみた。

……うむ。やはり設計図と実物の差は大きいな。

設計図はいつからか専門の機械が引いているようで、感情や意思といったものが全く感じ取れない。

……精々ひたすらに良いものを作ろうとしていることぐらいなものだ。

『……ふふふ……瑠璃に、似てないかしらあ……?』

……流石にあそこまで感情がないわけではないし、私は作る者ではなくただの知りたがりという違いがあるが……その通りかもしれないな。

……だからといって研究の手を休める事は無いが。

《……根っからの研究者がなんか言ってるヨー》

五月蠅い。酸性雨を頭からかぶり続けて溶けて死ぬ。

《すっごい嫌だし痛々しいんだけどー!?》

『……あららあ……頑張つてねえ……?』

《こんなこと頑張るわけないでシヨ―!?》

毎日の日課であった朝の太極拳だが、一度眠って起きた後にやるように変化した。

…… 毎朝やっついては研究が進まん。

そのかわり、量と質を少しずつ上げて行く。元々太極拳だけではなく様々な中華系拳法の套路の組み合わせだったが、今や中華系拳法の以外の物もふんだんに取り入れられている。

その分長くなっただはすなのだが、時間は変わらない。

これは恐らく体が慣れてきていて、少しずつ早くなっついていっているのだろう。

…… まあ、なんであろうが私のやることは変わらない。ただ、毎回起きれば体を動かし、それから食事をして研究に戻り、限界まで研究に没頭して気絶するか自分でベッドまで戻って眠る。

その繰り返し。

なんのために研究を続けるかなど知ったことではない。私が知りたからやっているだけだ。

調べたものがなんの役に立つのか？ そんなものはどうでもいい。役に立とうがたつまいが関係無く私は知りたい。

私の限界まで。

《…… このままだと、いつか祭り上げられて神様になっちゃいそうだって、言っという方がいよいよネ―?》

ああ、その方がありがたい。

だが、それでも私は研究を続けるぞ?

《好きにしなヨ―。ボクはフルカネルリが神様になろうがどうでもいいからネ―》

そうだな。私もそんなことはどうでもいいさ。

《自分のことだヨ―!?》

…… あれか、私はそんなこともわからないような馬鹿だとしても?

《いやいやいやいや! そうじゃなくってネ―……》

まあ確かに私はこういったことに関しては馬鹿だがな。
《自分で言っちゃっター!?!》
事実だからな。

いつの間にやらこの大隊の名がフルカネルリ機甲兵大隊になっていたのを発見した。

……なぜ私の名がここで出てくるのだ?

《秘密にして自分で調べル? それとも今ここでボクに聞いちゃうことにすル?》

その前に……調べればわかるのか?

《わかるはずサー》

そうか。ならば秘密にしておいてくれ。

《オツケーだヨ》

よし。

……さて、調べるのはまた後にするとして……

《後にしちゃうんだ》

するとも。今は古くからの酒作りの方法を学ぶので忙しいのだ。

《体十歳だからネー!?!》

知っている。だがそれがなんだ? お前自身が掛けた健康の呪いによってアルコール中毒や二日酔いにはならないだろう?

《……ならないけどサー……》

『……ふふふふ……こんな風に使われるなんて、思ってたかったかしらあ?』

《……まあネー》

それはお前のミスだな。私はやるぞ。

……ハヴィラックはいまだに私を子供扱いして酒もタバコも許してくれないが。

……タバコは吸わないから良いとして、酒については実験どころか料理に使うこともできない。

…………やれやれ。

《何度も言っけど体は十歳だからネー!?!?》
頭の中身は爺だな。

酒は嫌いじゃないフルカネルリ。

フルカネルリだ。予測はしていたが、私が作って来たものはこの時代から見れば古めかしいガラクタになってしまふようだ。

……だが、私は機械に作られた服より、自分で作った服を着ていた
い。

……ただのわがままであるということは理解しているし、合理的でないことも理解している。

……と、いうわけでそれらの技術をすべて使って今までの服を作り替えた。

原型は残っているが、もはや別物だ。

《作り替えちゃっター！？》

『……作り替えたわねえ……』

元々隕石の直撃を喰らっても平気な布を服に加工するのは大変だったが、最初から服の形にする事で解決した。勿論色々な所に収納があり、その一つ一つが空間歪曲装置によって広大な空間になっている。

……唯一の欠点は、ポケットの口に入らない大きさのものは入れることができないということだろうか？

《十分すぎると思うんだけどネー？》

いやいや、確かに一時の完成は見ているが、改良点があるならば改良せずにはいられないのが科学者というものだ。

……うまくやれば持って帰れる物の制限がかなり軽くなる。そうすれば機械兵だろうが設備だろうが持って帰れる。特に重要なのは私の世界ではまだ見つかっていない素材だな。もしくは原子配列変換器。

《未来の超科学ってスゴー！》

『……ふふふ……鉛を金に、つてえ……まさに、錬金術、ねえ……』
その通りだ、アザギ。これがあれば私が錬金術師であった頃の夢が叶えられるということだ。

……悔しいことに、自分の手で作ったものではないが。しかし、それでも始まりは私達、錬金術師の技術だ。

《ほんとーに始まりの方はネー》
そうだな。

ハヴィラックに頼んでどこかに秘匿されている情報と知識も持ってきてもらう。それだけでかなりの時間がかかるらしいが、私にとつてそれはどうでもいいことだ。すぐに始めさせる。

《強引だネー》

まあ、構わないだろう。今までに見た情報によると、生き残った人間はみな月か火星で暮らしているのだから。

『……超科学つて……凄いわねえ……？』
そうだな。私も驚いた。

これほど驚いたのは転生した後に人が月に行ったと聞いたとき以来だ。

……無論、その火星と月からも情報は集めているのだが。

……私の考えが正しければ……。

……いや、今はこちらのこと集中しよう。

フラグを立てるだけ立てて引いていくフルカネルリ。

……やれやれ。鋭すぎると嫌われるヨー？

どうせ悩んだってなにも変わらないんだからサー、もっと気楽に行こうヨー。

……言わなくってもフルカネルリならすぐにその結論を受け入れて、何もなかったかのように過ごすと思うんだけどネー。

そして少しだけ心配するナイア。

フルカネルリだ。どうやらこの世界に来てから既に五百年以上は過ぎていたようだ。

《よくわかったネー？ 正直言ってフルカネルリがそんなことを気にするなんて思ってたんだけどー？》

ああ、私も気にしていなかったが、あることが起きてな。

『…………… ああ…………… あれ、ねえ……………？』

…………… アザギが何を考えているかは知らないが、恐らくはな。

事は簡単に説明できる。本当に口にするなら五秒も要らないほどに簡単だ。

ハヴィラックが寿命で死んだ。壊れた、でもいい。それだけだ。

《なにか思うことハー？》

無い。どうせもう代わりは作ってあるし、それにはハヴィラックに蓄積されていたデータも入っているのだから。

『…………… それでも…………… もう、ハヴィラックには会えないわよあ……………？』

その言い方ではフルカネルリという男の記憶と行動原理を持っているだけの私はフルカネルリではないと言っているように聞こえるぞ？ 誰がなんと言おうが、私はフルカネルリであり、私だ。それ以外の何者でもない。

たとえば体が少女のものであってもそれは変わらない。

『…………… そう…………… なら、それでいいわあ……………』

《アザギが拗ねちゃっター》

『…………… 拗ねてなんてないわよあ……………？』

…………… 仲の良いことだ。

二代目ハヴィラックはそのままハヴィラックとして動いている。私もその方がありがたい。

この時代の科学力で作られたハヴィラックは、二十歳を少々過ぎた程度の体であるときが一番長く、それだけで生まれてからの四百年の内の九割八分以上を占める。

……つまり、今はまだ幼いと言うことだ。

「ハヴィラック」

「はい、フルカネルリさま」

《ちよつとだけ舌つたらずな所がかーわいいネー》

……すまない。私にはそのような趣味は無いため同意しかねる。

《ちよつと待つテー！？ フルカネルリなんか勘違いしてるヨー！？》

……ナイアは、幼児性愛者ではないのか？

《違うヨー！ 邪神の名にかけて違うヨー！》

そうか。ならばいい。

『さっぱりしてるわねえ……』

《……ボクはものすつごく疲れたけどネー》

ハヴィラックは小さくなってもハヴィラック。つまり、

「フルカネルリさま。やくそくの三か月です。お休みください」

私のことを子供扱いするのは変わらない。

……今となつてはハヴィラックの方が肉体的には年下なのだがな。

「きいているのですか、フルカネルリさま？」

「わかつたわかつた。休憩にするよ」

……やれやれ。もう長い付き合いになるからか、私の操縦の仕方を覚えてたらしいな。

それを私より小さな体でやるのだから、どこか微笑ましいものを感じる。

《キミも似たり寄つたりだつて気づいてるかナー？》

ああ、微笑ましい。

《……え、久々に完璧スルーされちゃったヨー。なんか懐かしいよ
うな気がするナー》

よしよし……おっと、ついハヴィラックの頭を撫でてしまっていた。
もとの世界に帰った後に撫で癖がついてしまったらどうしようか？

《……おいフルカネルリー。ツッコミ所だヨー？》

……まあ、その場合は白兎を撫でてやればいいか。

『……あらあら……形無し、ねえ……』

《……確かにその通りだけどサー。何でキミはそんなに嬉しそうな
のかナー？》

『……うふふふ……嬉しそう、じゃなくってねえ……た・の・

し・い・の・よお……』

《……あ、ソー》

『……ええ……』

やれやれ。元気なことだ。

それなりに長い時間を異世界で過ごしてきたフルカネルリと愉
快な仲間たちのある日。

フルカネルリだ。流石の未来科学でも時間跳躍を安定して行うことは不可能だったようで、いまだに完成していない設計図のデータが出てきた。

正確に言うとは理論的にはこれで時空間跳躍は可能となるのだが、このままでは人間の体のままでは……いや、たとえ人間以上の再生力、そして頑丈さを兼ね備えていたとしても、生きて時空を越えることは不可能だというものだ。

《そりゃあもうそこまでいったら化物の域だからネー。神様には程遠いとしたって人間のままじゃあ無理サー》

私なら出来るか？

《楽々できるヨー》

邪神直々に人外認定をもらってしまった。

『……それでも……瑠璃は、瑠璃よお……？』

わかっているさ。

やはり私の予測は当たっていたようだ。

この世界にはもう生きた人間は居ない。既に滅びているらしい。

だからハヴィラックやその他の機械兵は、私の命令を全て実行してくれたらしい。

……ナイア。お前は知っていたのだろうな？

《知ってたヨー》

それでこそ神だ。

……だが、私にとってそれはむしろ都合だ。

すぐさま火星と月の住居に連絡を入れて、記録されている全ての情報を地球に送らせる。

なぜこれほどの技術を持った世界が滅んだのか……非常に興味深い。

様々な予測を裏切り、滅んだ理由はただのうっかりと不幸の連続だったらしい。

ことの始まりは、とある研究者のある発明からだった。

データの破損が酷すぎて詳細は不明だったが、どうやら当時に流行していた病の特効薬であるらしい。

病名はデータが無いために不明だが、ウィルス性の病で、かつ放っておけば徐々に体の末端から痺れが広がって行き、酷くなれば動かなくなり、最後にはゆっくりと心臓が動きを止めるという病。

発症から四十年ほどの時間をかけて緩やかに症状が進んで行くその病の特効薬。それはその当時の者達に諸手を上げて歓迎される物だった。

しかしその薬は健康な者には猛毒であり、ほんの僅かな量を摂取するだけで医学が異様に発達していたその時代でも僅かな延命が限界なまでのダメージを肉体に与えるような物であったようだ。

しかしその科学者はその事がわかっていたにもかかわらず、その事を伝えるのを忘れてしまった。

当時は割合にして九割以上の人間がその病にかかっていたらしい。その薬はあつという間にその病を払ってみせた。

しかし、発症していなければそれはただの毒。

治った途端に殆どの人間は全身に深いダメージを負った。受けていないのは、まだ産まれたばかりの子供と、ほんの僅かな健康だった大人のみ。開発した科学者すら、その問題が表面化した時には死んでいたようだ。

こうしてほぼ全ての人間は死に絶え、残った者達も超科学の檻の中でゆっくりとその命を消していったらしい。

……… まあ、私には関係無いことだがな。

《健康呪いがあるもんネー》
そうだな。

……さて。昔のことも良いが、今はこっちの研究の方が大切だ。

「……そうねえ……初めて瑠璃が一人で作る、人造人間だものねえ……？」

ちなみに元はハヴィラック。それに私の遺伝子も少々混じっている。《文字通りの子供だネー》

そうだな。名前はプロトだ。

《……ネーミングセンスがないネー》

……私がつける名前はもっと酷いからな。安直な名前の方が良いのだよ。

《例えばどんなヤツ？》

……ハンゲツドマン？

《……ゴメン。ボクが悪かったヨー》

本当にな。空から降り注ぐ鉄アレイの雨に全身を打ち付けられて死ぬ。

《なんかすごい久々！？ でもやだヨー！？》

世界で一人きりのフルカネルリ。

異世界編 1・10（前書き）

異世界に行ったらバトルがあるなんて一言もいってはおりませぬ。
簡単に言いますと、そんなものは無い。
少なくとも、この世界では。
それでは。

フルカネルリだ。プロトが産まれて早二ヶ月。私は一旦研究を止めて育児に精を出している。

……普通の子と同じようにゆっくりと成長していくようにしたのだが、ここまで育児が大変だったとは……………。

《おかーさんたちに感謝だネー》

そうだな。ありがとう、もうこの世にはいない母よ。そして産まれることもなかった父よ。

『……………この世界では外れてはいないけどお……………それはどうなのかしらあ……………？』
さてな。

わんわんと泣いているプロトをあやしつつ、ハヴィラックに集めてもらった情報の中であまり触れてこなかった所を整理する。

それは例えば農業に関するものだったり、料理に関するものだったり、掃除の豆知識や家事であると便利な小道具の知識だったりもした。

……………この時代では機械がそういったものを使って掃除をしていたのだろうか？ そう考えると少しばかり笑いがこみあげてくる。

手元を見てみると、私が笑っているのにあわせてか、プロトも笑っていた。

まだまだ右も左もわからない赤子だが、中々に愛着が湧く。

《フルカネルリー。なんかすっごくお母さんしてなイー？》

……………さて？ どうだろうな？

『……………ふふふふ……………別にいいじゃない……………悪いことじゃあ、ないわよお……………？』

ふふふふふふ……………とアザギが笑うと、プロトがぐずりはじめた。…

…やれやれ。赤子はこういったことに敏感すぎるな。

私は半泣きになっているプロトを抱え直し、心音を聞かせる。私の体は大きくないので少々大変だが、赤子というものは親の心音を聞いていると落ち着くものらしいからな。

《やっぱりお母さんしてるヨー》

五月蠅い、偶然降り注いだ流星群のうちの三発に頭、喉、鳩尾の三点を撃ち抜かれて死ぬ。

《隕石で三点バースト!? 何て無茶苦茶なことを言ってるノー! ?》

『…………ふふふふ…………いつも通りじゃないのお…………』

《…………そーいやそうだねー》

そうだろう?

朝は早くに起きて太極拳もどき。そのあとに起きてぐずりだしたプロトをあやしつつ朝食を作り、おむつを取り替える。本来ならば私がやることはないらしいのだが、私はあえて自分の手でこういったことをやっている。

…………戻った後に使えるものとして覚えるためにも、これは必要なことだ。

私に子ができた時の健康管理のやり方も覚えられることだし、体にいい料理も作れるようになれる。

…………まあ、相手がいればの話だが。

《白兔ちゃんハー?》

お前は馬鹿か? 白兔は女で私も女だ。子が作れるはずも…………いや待てよ? 確か記憶の中に同姓同士で子を成す技術があったよ。うな気が…………ああ、これだ。

…………ふむ、白兔さえ良ければできるようだな。私としても相手が白兔ならば文句は無いことだし。

《白兔ちゃんなら普通に喜んで受けそうだよネー》

『…………ふふふふ…………面白そうねえ…………』

そうだな。だが今は、プロトの世話で精一杯だ。
ハヴィラックに押し付けてもいいのだが、それでは学ぶものがなくなってしまう。

子育てを始めてみることにしたフルカネルリと、その息子の話。

フルカネルリだ。最近、やっとプロトが歩けるようになったのだが、なにかがおかしいと感じるようになった。

……そう、例えるならばプロトの中にプロトではない誰かがいるような感覚だ。

……なぜだろうな？

《あ、それたぶんハヴィラックがやってた睡眠学習の効果だと思っ
ヨー。プロトが寝ている間に情報を無理なく頭のなかに詰め込んで
いつてるからそんな風に感じたんじゃないかナー？》

……ハヴィラックはそのようなことをやっていたのか。私は自然に
育ったプロトを見てみたかったのだがな……………。

『……残念ねえ……………』

……まあ、過ぎたことは仕方がない。いつか普通の子を育てる機会
があれば、その時は普通に育ててやろう。

《ポジティブシンキングだネー》
そうだな。

ハヴィラックのお陰かどうかは知らないが、プロトはとても大人し
い。

体はまだまだ私よりずっと小さいが、すでにかなりの知識を手に入
れているらしく、あまり我儘を言ったり騒いだりということがない。
しかし子供らしいところもあるようで、自分で歩けるようになって
からもよく私の傍にいるし、好きなことは私に抱かれて心音を聞き
ながらゆるゆると眠りに落ちることだと言っ。

《……なんと言うか……………老成しちゃってるネー》
そうだな。

ちなみにまだ人間が絶滅していなかった頃でもこの年代の子供にこ

これまでの知識を埋め込むことは多くは無かったようで、人間が滅ぶ前の映像を見てみれば子供たちは普通に子供らしく無邪気そうに笑っていることが多かった。

……まったく、ハヴィラックはやはり過保護だな。

《過保護ですむ話じゃないと思うんだけどナー？》

それはお前の気のせいだ。

《なーんだそっカー。安心したヨー》

『……安心することじゃあ……ないと思うのだけどねえ……？』
そうか？

プロトを寝かせてから徐々に研究をすることにした。

今までは研究になるとのめり込んでいってしまい、プロトの世話ができなくなってしまうので止めていたが、今ならば違う。

意識の一部を人型の機械に移らせ、それを操ることで研究とプロトの世話を両立させることができる。

ちなみに、その方法の根幹はアザギから教えてもらった。アザギはこれを‘憑依’と呼んでいるようだ。

『……ふふふ……憑依だものお……』

《憑依だもんネー》

そうか。

私が乗り移る機械には‘ネルリ’という名をつけた。安直だが私が凝った名を付けようとすると妙な名前になってしまうのだ。

……フルルカネール等という名は嫌だろう。

《……ネーミングセンスはどーしても残念なんだよネー》

言うな。自覚はしている。

それに実際は付けていないだろう。自分でも駄目だと思っではいる。

《でもハヴィラックって悪い名前じゃないと思うんだけどー？》

それは名前がないまま設計図を作っていたら弟子が分かりにくいと勝手に名前をつけたのだ。

《そうなのー？》

ああ。

……ちなみに、その名前をつけたのはスプリングコートだ。

《……ああ、あの‘簡単な人造人間の作り方’シリーズの人カ―》

そう、あの馬鹿弟子だ。

……なつかしい話だな。

《そうなのー？》

まあな。

昔を懐かしむフルカネルリの話。

「フルカネルリ様。プロトが泣き喚いています」

……どうやら機械の私ではお気に召さないようだな。一応あれも私本人だし、機械と言っても生体部品を使っているから温もりもあるはずなのだがな……？

《匂いじゃないノ―》

ああ、それが。

そしてしばらくはプロトの世話をし続けるらしい。

異世界編 1 - 1 2 (前書き)

すみません、遅れてしまいました。受験って面倒ですね。

フルカネルリだ。プロトもずいぶん大きくなって、自分の力で歩けるようになった。行動範囲が一気に広がって大変だが、ハヴィラック達がいつも見ているし、知識もあるので危ないところには近寄らないだろう。

《そうだネー》

最近は研究を機械の私に任せてプロトの世話をしている。

トイレには自分で行けるようになったが、まだおねしょはなおらない。

《フルカネルリは三歳の時に止まったんだっケー？》

ああそうだ。どうしても嫌で気合で止めた覚えがある。

ちなみに、母は小さい頃から果物が好きで夜寝る前に果物を食べたがおねしょがまだなおっておらず、禁止されそうになったがところで絶対におねしょはしないから果物を食べさせてくれと懇願して本当に止めたらしいな。これも三歳の頃だと聞いたが。

《意思の力ってすごいネー》

『……ふふふ……驚きねえ……』

……もしかしてプロトも同じような理由で三歳になったあたりで止めるのだろうか？

《……ありそうな気がするナー》

『……十分、考えられるわねえ……？』

どうやらプロトは私の血を引いているが、ナイアから受けた呪いはかかっていないらしい。風邪をひいてしまったようだ。

……流石に万能の風邪薬は無いが、すぐに治せるようだから別に構わないな。

しかしこの時代の細菌は薬に異常と言っても良いほどに強く、また毒性も強いものが多いな。私が元の世界に帰るときに一緒に持っていくようなことがなければいいのだが……。

《大丈夫サー。元々フルカネルリとフルカネルリが求めたものだけを連れて帰るようにしてるからネー》
そうか。ならば安心だな。

……しかし、やろうとすれば生命体ですら持ち帰ることができるのだな。

《そうだヨー》

ならば細菌のサンプルやこの時代の麴も持ち帰ることができるのか。それならば今のうちからワインでも作っておくか。

「ハヴィラック」

「はい、フルカネルリ様」

呼んですぐに私の目の前にハヴィラックの立体映像が映し出される。声はその辺りに浮いている小さな機械群が細かく振動することによって出ていると設計図に載っていた。

「酒を作ろうと思う。材料を用意してくれるか？」

「お酒は二十歳になってからです、フルカネルリ様」

……やれやれ、またか。

私は軽く溜め息をついてからハヴィラックの立体映像を見やる。

「……私はすでに五百を越えているが？」

確かに体は十歳のままだが、年月だけならばそれだけ長いことこの世界に存在している。

ハヴィラック達は私の体が未だに十歳の頃と変わっていないためにそう言うのだが、健康の呪いのお陰で酒を飲もうが煙草を吸おうが劇物を摂取しようが全く体に害はないのだ。

……煙草はあの匂いで集中が途切れてしまうので嫌いだ。それに前世ではまだそういったものに耐性が無かったため、頭にぼんやりと霞がかかったような気分になるのが嫌だった。それが今も残ってはいらるが。

《吸わない方が自分のだけじゃなく、周りの人の健康にも良いしネ
ー》

そうだな。

「……了解しました。二時間ほどお待ちください」
ハヴィラックはそう言って通信を切った。

……二時間か。ハヴィラックにしては少し長いな。星を越えて最高
級品でも集めるつもりか？

『……ふふふ……どうかしらねえ……』

……まあいい。とりあえず、上手く酒が出来たら飲ませてやる。

《宴会ダー！》

『……宴会ねえ……』

フルカネルリはお酒好き、でもあまり量を飲もうとはしない夕
イプ。

二十万アクセス記念外伝（前書き）

いつの間にか二十万アクセスです。応援ありがとうございます。
誤字脱字は、見つけたら報告をお願いします。

……それと、感想募集中です。

二十万アクセス記念外伝

これは昔々の話。まだまだナイアが幼くて、あんまり物事を深く考えなかった頃の話。

「てけりっ！お茶のお代わりはいかがでしょうか？」

目の前にシヨゴスさんがティーポットを片手に近寄ってくる。

「んー、じゃあお願いしよっかナー」

ボクがそう言ってカップを出すと、シヨゴスさんは嬉しそうにそれを受け取って、

「てけりりっ！」

と返事をした。

そのメイドのような格好の女性は、この家に代々使えている奉仕種族の一人であった。名前はシヨゴス。

そして、今シヨゴスにお茶を入れてもらっているのは、この家に遊びに来ていたナイアである。

「てけりりー はいどうぞ」

「ありがとネー」

シヨゴスからカップを受け取ったナイアは、くびっとその中身を飲み始めた。

そして一言呟く。

「……遅いナー……」

「……遅いですね……」

今日ナイアがここに来た理由は、友神のことで相談があったからで

ある。

その友神は、なぜかは知らないが最近引きこもりではなくなってきたヨグソトスのことだ。

「……先生は、今何をしてるのかナー？」

「……てけり。おそらくまだ寝ているのではないでしょう？ あの方は休みの前日には限界まで徹夜を繰り返し、休みの日に纏めて眠るという習性がありますから……」

「……ふーん」

はあ、と溜め息をついて、ナイアはまた紅茶を啜る。

「……てけり。ご主人様がいらっしやるまで、私とお話でもいかがでしょうか？」

「……それもいいかもネー……おかわりってまだあるかナー？」

「てけり。お好きなだけ」

こぼこぼとナイアのカップに紅茶が注がれる。淹れてからしばらくたっているはずのそれは、なぜか今もまだ湯気を立てるほどに暖かい。

ナイアは注がれたそれを一口飲んで、テーブルの上に置いた。

「そうだネー。お話しよっカー」

その言葉を待っていたかのように、シヨゴスという名のメイドさんは笑いながら答えた。

「てけりっ。お望みのままに」

独特な話し方をする二人は、のんびりと長い時間話を続けた。

話の途中で喉が乾けば紅茶を飲み、小腹が空けば少しだけ菓子を摘まみながら、二柱は多くのことを話した。

でネー。それからこんなこともあってサー……」

「てけりりりり……そうですね、そんなことが……なら、こんなことは知っていましたか？」

「え？ 何なニー？……でもその前ニー……」

「てけり。どうぞ」

赤い液体がナイアの持つカップに注がれる。

「ありがとネー」

「てけり。奉仕種族としては当然です」

くすくすと笑い合いながら話は緩やかに続く。

「……それにしても、先生は遅いネー？」

「……てけり。遅いですね……ところで、ケーキを作ってみたのですが、ご試食はいかがですか？ 味見はしてありますが」

「うーん……もらっちゃっていいかナー？」

「てけり。どうぞ」

シヨゴスがそういうと、どこからともなく一切れのケーキが現れた。丁度1つの丸いケーキを十二等分すればこのケーキができるだろうという程度の大きさだ。

「……もくもく……うん。美味しいヨー」

「てけりりっ それはよかったです」

「いいお嫁さんになるヨー」

「てけりっ!？」

そんなことを言われることになるとは思ってもみなかったようで、シヨゴスは頬を赤らめながら叫んだ。

「……ところで、紅茶のお代わりはまだあるかナー？」

ナイアがそう言うのと、その動揺はすぐさま抑えられ、

「……てけり。望みのままに」

こぼこぼと真つ赤な液体が、ナイアの持つカップに注がれた。

この頃から人をからかうのが好きだったナイアとそれに振り回されていた有能なメイドさんのある日のできごと。

「……え、あノー、シヨゴスさん？ 多すぎるような気がするんだけドー？」

「てけり。どうぞお口の方からお迎えに行って上げてくださいませ」

「………もしかして、怒ってたリー？」

「てけり。どうでしょうか？」

そしてメイドさんの可愛い仕返し。

異世界編 1 - 1 3 (前書き)

もう少ししたら更新が停滞するかもしれません

フルカネルリだ。プロトが私を、お母さん、と呼んだ。まあ、仕方がない。父には見えんしな。

《そつだネー》
ナイアのせいだがな。

今までに覚えた知識の中から必要なものだけを取り出し、組み合わせ、理論を作る。

そうしてできあがった理論の検証をして、自分の望む物に近づけて行く。

《何作ってるノー？》

ん？ ああ、これは白衣のポケットの中身についてのことだ。

広がった空間には空気が無く、真空とも言える状態のはずなのだが、なぜか外から空気を吸い込むこともなくそのまま存在しているだろう？

《……あー、言われてみれば確かにそつだよネー。なんデー？》

簡単な話だ。広がる前からその中に入っていた物は空間が広がる際にその空間が広がった分だけ大きくなる。それだけのことだ。

無論広がった後から入ったものはそのままの大きさなのだが、そのせいで少々困っているのだ。

《なにになにどうしたノー？》

……前から入っていたものが大きくなりすぎて、後から入れたものを出すときに邪魔で仕方がないのだ。

それを何とかしようとしているのだが………難しいな………。

『……ならあ………一回中身を全部出してえ………中に外から新しく空気を入れちゃえばいいんじゃないのかしらあ………？』

……出したとして、その後どこから空気を持つてくる？ この地

球上に存在する分では絶望的なまでに足りないぞ。

《木星つて中身が氷で外側は全部空気だったよネー？》

……ああ、つまりそうすればいいのか。

それに原子変換機で幾つか星を全て空気に変えてやれば……いや、その前に大きくなった原子をそのまま変換して細かくすれば……

久々に徹夜をした。実験は大成功、これでポケットの中身を取るのに不便はなくなった。

それに欲しいものを思い浮かべながらポケットに手を入れれば勝手に検索して手の方に近寄らせてくれるようにしたし、改造ついでにポケットの中に原子変換機と発電機と半重力発生装置を入れ、半永久的に空間を広げたままでいられるようにした。

発電機で作った電気で原子変換機を動かし、燃料を作ると同時に半重力発生装置で重力を打ち消す。

原子変換器が燃料に変えるのはポケットの中の空気。ただし発電機が物質の質量をそのまま電気エネルギーに変えた上ではほぼ抵抗が0の状態で流すという凄まじく効率がよいものなので、あまり気にしなくても勝手に動き続けるのだが。

しかもその上で私の組んだ術式の効果によってその周りだけ時間の流れが遅くなっているため、使うエネルギーはずっと少なく済んでいる。

《科学と幻想が合わさるって怖いネー》

そうだな。それに霊気を圧縮した球体を燃料にすれば私が存在している限りは動き続けることができるようにすることも可能だ。

つまり、私が元の世界に戻るまでは事実上動き続けるわけだ。

……まあ、それはおいておくとして。今さらこの服の性能がわかったところで大した違いは無いだろうし。

食事にしよう。ナイアとアザギも一緒に。

《やっター！》

『……ふふふ……ありがとねえ……？』

こうして異世界で仲良く暮らすフルカネルリ一行の話。

フルカネルリだ。プロトに身長を抜かれてしまった。喜ぶべきなのだが、何故か釈然としない気分だ。

《確かにそれはちよつと嫌かもネー》

『……わたしも、経験あるわねえ……？』

《経験あんノー！？》

『……あるわよお……？』

おそらくナイアもあるのではないか？ 例えば同級生は昔は同じくらしいの背の高さだったのに、気付いたら皆自分よりずっと背が高くなっていた、ということが。

《……あるヨー。嫌だけどネー》

やはりあったか。

さて、ようやくプロトがある程度の免疫力を持ったことだし、危なくない薬の実験台になつてもらうか。

《何このド外道！？ 自分の息子を新薬の実験台にしようとするなんテー！？》

危なくないもの限定だ。本来ならば私自身で試すのだが、健康の呪いのお陰で薬が全く効かないのでな。

それに実験台にすると言つてもしつかりと実験用のマウスで効果を確認した後での話だ。さすがの私でもいきなり自分で産み出した存在を実験程度で潰す気は無いさ。

……元々そのために作ったものでなければ。

《プロト君ハー？》

プロトは科学力だけで人間を作れると知つてついやりたくなくなつてしまったので作ったものだ。それに私の体の一部を受け継いで作られた人間に私の呪いが遺伝するのかといった実験という意味もある。

……実験の結果、呪いは受け継がれることはないとわかったが。

《ボクに聞いてくれれば良いのニ》

あまりナイアに頼ってばかりではつまらないからな。

……さて、手始めに性別逆転薬の実験に移るとしようか！

《いきなりフルカネルリのテンションダダ上がりしター！？》

『……気持ち悪いくらいに上がったらわねえ………』

実験成功。プロトは息子から娘になった。

……とは言え、流石に永遠にと言うわけではなく一時的なものだったし、思考や言動もそのままだったが。

いつか効果が永遠に続く物を作ってみたいな。

《フルカネルリには効果がないけどネー》

それについては仕方がない。おそらくナイアならばなんとかできるのだろうが、あまりそうしてもらいたいと言うことは無いしな。

……やる気も無いだろう？

《さっすがフルカネルリ。ボクの事をよくわかってるネー》

長い付き合いだからな。

……十年ほど違うが、アザギもな。

『……うふふ……あら、嬉しい………』

性別転換薬の効果は実証されたので、すぐに解除薬を飲ませて様子を見る。

性転換時の初めは軽い痛みを訴えていたが、それは解除するときも同じであったようだ。

……ふむ。おおよそ、紙で指を切った、程度の痛みらしいな。ピリピリとした痛みが全身、それも皮膚だけではなく体の内側までしているらしい。できることならば使いたくないな。

……ああ、私の場合使っても意味はないのだったか。

さて、次の実験に行く前に……

「昼食にするか。なあ、プロト？」

「はい、お母さん」
……やれやれ。こついうところまでハヴィラックにそっくりなのだ
な。

……あれ、なんか久々な気がする。なんでかナー？

……まあいいいー。久々だろうがなんだろうが、神にはあんまり
関係ないしネー。

フルカネルリはプロト君と一緒にご飯を食べている。

今はいいけど、いつもはハヴィラックも一緒。今は多分フルカネ
ルリのお願いを実行するために無理してるんだと思う。

……ま、フルカネルリのために、ついでにボクの暇潰しのために、
頑張つてネー。

久々に視点交代をしたナイアの一人語り。

お母さんの細胞を使い、ハヴィラックのそれと混ぜ合わせて作られた人造人間試作型0号機。通称プロトです。頭にはハヴィラックと同じように脳の情報のバックアップを常時私のマザーコンピュータに送るための機械が取り付けられ、さらにそれを利用することによりハヴィラックや他の機械郡と無線で連絡がとれるようになっていきます。

お母さんの言うことの真似ではないですが、とても便利です。

お母さんは毎日朝早くに起きます。私も早く起きようとするのですが、どうしても布団から離れられないのです。

お母さんに早く起きるコツを聞いてみましたが、前日に早く寝ることと、後は慣れと言われてしまいました。

早く眠るのはもうやっていますし、これから少しずつ慣れさせていくしかないようです。

……ハヴィラックに起こしてもらったり、薬を使ったりすれば簡単に起きれるとは思いますが、それでは自分の力でやったという達成感が無いので却下します。

目標は、お母さんの寝顔を見ることです。

お母さんはいつも私より早く起き、遅くまで起きています。そのため、私はまだ一度もお母さんの寝顔というものを見たことがありません。

いつか私もお母さんのお手伝いをする日が来るのでしょうか。とても楽しみです。

朝食の後は時間がたつぷり。その時間を潰すために文章のデータをハヴィラックにお願いして持ってきてもらう。

頭の中で臨場感たっぷりに流れる映画も良いですが、こういったものも私は嫌いではありません。

おそらくこれはお母さんの影響でしょう。お母さんも映像で見るより文章の方が好きみたいですから。

お昼になって、いつものように食卓に移動する。

本来ならこんなところに来ないでもこの施設内ならばいつでもどこでも食事はとれるのですが、お母さんの趣向でこうして集まるようになっていきます。

しかも、経口で食事をとっています。

この地球から人間がいなくなったころ、およそ八千年前の話ですが、その頃にはすでに一般家庭ですら経口ではなく栄養剤を直接血管内に入れることが主流になっていて、形があるものを食べることはほぼ無かったと聞いています。

しかしお母さんはそんなことは関係無いと当然のように食事をしていきます。

お母さんの血を引く私とお母さん以外は食べることはできません。

そう、ハヴィラックですら少し辛いのです。

何故なら、あまりにも使われていなかったために顎が脆くなりすぎたからで、ある程度ならばなんとかなりますが、根本的な解決にはなりません。次のハヴィラックは初めから顎を強くしておくことでしよう。今回のハヴィラックはお母さんが来てすぐに用意された体であるため、食べることを考えていなかったようです。

夜になれば体を洗い、歯を磨いて布団に入ります。

これらは全てそれ専用の機械がやってくれますが、お母さんはいつも自力で機械と同程度まで磨いています。

……どうやっているんでしょうか？ 不思議です。

それが終わればお母さんは私が眠るまで傍に居てくれます。少し前までは子守唄を歌ってくれたりもしました。

今でも私が歌ってほしいと強請れば歌ってくれるでしょうが、強請りません。私はもう精神だけならば十分大人です。

このようにして私の一日は終わります。たまに薬の実験台に使われる時もありますが、概ね楽しい毎日です。

フルカネルリ作・人造人間0号、プロトの一日。

異世界編 1 - 16 (前書き)

いきなりですが、異世界編はこれで終わりです。

フルカネルリだ。私は全く変わらないが、プロトは肉体的には二十歳を迎えた。

成人式がこの時代まで残っていたかどうかは知らないが、関係無く祝う。

《ちなみにやる人が絶滅しちゃってるだけで成人式は残ってるヨ》
そうか。ならば遠慮はいらぬ、祝おう。

『……………結局はあ……………そうなるのよねえ……………ふふふ……………』

プロトの二十歳のお祝いにケーキを作ってみた。この時代までのあらゆる手法は私の頭の中に詰まっている。

それは薬の事であったり、農業知識であったり、科学知識であったりするが、その中には料理や菓子作りという元の世界でそれなりに役に立ちそうな物から知っていたところだ。なんの役にも立たない無駄な知識まで様々だ。

プロトの好き嫌いやハヴィラックの体の構成も把握している。無論ハヴィラックが次に体を替えるときには顎を丈夫にしようとしていることも知っている。

人間が地球を離れる頃にはすでに食事は娯楽以外の何物でもなかったよ。いくら食べても太らない薬の方が食品よりも圧倒的に安かったよ。

《人間ってわかんないネ》
嘘をつくな。予想はしてたくせに何を言っているのだか。

『……………ふふふ……………様式美、ってやつじゃないかしらあ……………？』
なるほど、それは大切だな。

数年前からプロトには実験台以外に役に立ってもらっている。

実際になにかを作る時もそうだし、私以外の視点から見ればまた新しいアイディアが出てくることもあるだろうから研究資料を読ませたりもしている。

……実際のところ、アザギとナイアにも見せているからあまり必要ではないのだが、かわいい最高傑作（息子）のためだと割り切つて今でも続けている。

一応それが役に立ったことも無いこともないしな。

『あんまり期待はしていないけどー、害はないしやらせてるって事かナー？』

まあ、その通りだな。

……たまに中々良いものを見つけてくれるから、宝くじのようなものでもある。ハヴィラックにはできないことだ。

『……頭があ……固すぎるものねえ……』

長く存在していれば、すべからくそうなっていくものだ。

例えそれが人間であろうと亡霊であろうと……神であろうと、な。

『アブホースは昔っから頭ガチガチだけどネー。酒を飲ませて一つの部屋に放り込んでやっても全然進展しないしサー』

それは個人差だろう。

……訂正、個神差だろう。

『読みはおんなじ、こじんさ、なのに、細かいことだネー』

お前が邪神仲間を、友神、と言うのとたいして変わりはないさ。

瑠璃が眠っている間に、わたしはゆらゆらと夜の地球を彷徨う。

この世界には霊気も妖気も存在しないため、あまり瑠璃から離れすぎると少々辛いんだけど、月ぐらいまでだったらなんとかなる。

それだけわたしは強くなっている、ということだ。

……あの邪神の近くにいて、ということも原因のひとつではあるだろうけど。
そんなわたしがどうしてこんなことをしているかといえは、ただの好奇心だったりする。

瑠璃を見ているのもいいけれど、たまにこうして散歩をしたいときだってあるのだ。

色々なものを見て、瑠璃に見てきたものを話してあげるのも楽しいし、まだわたしがただの人間だった頃から散歩をするのは好きだった。

人間の頃はこんな夜遅くに外には出なかつたけれど、この世界に今のわたしを害せるものは存在しないから普通に外に出ている。

……さて、今日はどこまでいこうかしらあ？

まだ文明が残っているところもいいけれど、機械からも見捨てられた旧文明というのも……中々面白いわねえ……。

……ふふふ……ど・う・し・よ・う・か・し・らあ……

散歩に出てみたアザギの話。

帰還編 1-1 (前書き)

はい、フルカネルリのご帰還です。

フルカネルリだ。この世界に来てから早二万五千年。ハヴィラックは五十代目が最近壊れ、プロトと共に記憶を小さなメモリーカードの中に保存された状態だ。

そして私もそろそろ研究対象が無くなってきたのでハヴィラックの素体の元とプロト達の記憶媒体、そしてこの世界で私が作り、手に入れた全てのものを持って元の世界に帰ろうとしている。

《ずいぶん長居したネー》
そうだな。

来たときは意識がどこかに飛んで行くような気分だったが、帰るときは自分の体に吸い込まれるような感覚だった。

《イメージとしてハー、掃除機のコードをきゅるるっ！って巻き取る感じだヨー。ただしコードレスだけどネー》

ふむ。どうやっているのか興味があるな。

『……そこはあ……コードを巻き取る感じなのに、コードレスってどういうことお……？ ……って、ツツコミを入れるところよお……』

そうか。それでは……

《いやいやいやいや、他の人に言われてからツツコミ入れられても悲しくなるだけだからネー！？》

…… そうなのか？

《そうなのサー》
そうか。

………ところで話は変わるのだが、私はなぜこのような狭い箱の中に居るのだ？

《ああうん、それ棺だヨー》

……ああ、そう言うことか。

《説明役としての出番は無いんだよネー。フルカネルリってば理解力ありすぎだと思っヨー》

まあ、気にしないことだな。もしくは、諦める。

《……そうしとくヨー》

棺から出て周囲を見渡すと、辺りは真っ暗だった。どうやら夜であるらしい。

……だが、そんなことよりも大切なことがある。

……何故私はウェディングドレスを着ているのだ？

《未婚の女性にウェディングドレスを着せて葬るところは結構あるヨー》

……ああ、成程。

そう思いながら私は立ち上がる。香の匂いが鼻につくが、まあ、いたしかたないか。

ドレスが足に引っ掛かって邪魔なことこの上ないが、恐らく母と父が用意してくれたものであるうドレスを破るのは少々気が引けるため、仕方無くずるずると裾を引きずりながら歩く。

……やれやれ、スカートと言うものは実に扱いづらいな。これだから嫌いなのだ。……多分に私の精神的な物も入ってはいるがな。

《仕方ないサー、人間だもノー》

『……神様でもお……おんなじだと思っただけどねえ……？』

着替えを探したのだがどこにも見当たらなかったため、そこらに生えていた草を取り、分解して再構築して服を作った。

《帰ってきて初めて使う理由がそれって言うのはどうなんだろうネー？》

私らしい。

『……ふふふふ……完璧な返答ねえ……』

《……確かにネー》

だろう？

さっさと着替えてドレスを置く。いつもに近いスラックスにいつも通りのシャツと薄い上着。こちらの世界でのいつもの服だ。

……なんだ、かなり離れていたのだが、意外と覚えているではないか。これならば日記など必要なかつたかもしれない。

……だが、何か嫌な予感がする。昔にこの目に慣れようとして、出来る限り理解しようと深いところまで調べたときと同じような……

《……がんばレー、フルカネルリー》

……何かあるのだな。しかも相当痛いことが。

……早めに終わらせてくれ。

『……ちよつとだけ、助けてあげるわぁ……』

……ありがたい。

《んじゃ、いくヨー》

瞬間、私の全身に激痛が走った。

ボクの目の前で、フルカネルリが全身をぎゅうつと縮めて痛みに耐えている。

数万年分の成長を一気にさせているわけだから痛いのは当然。アザギがちよつと抑えていてくれていたとしても、普通ならあつという間にぶつ壊れちゃうほどに痛いはずだ。

……なんでフルカネルリは耐えられるんだろうネー？ しかも、悲鳴もあげないで。

たしかに腕に食い込んだ爪は皮膚を傷つけて血を流させているし、思いっきり食い縛った歯は割れてしまいそうな程にギシギシと音をたてている。

それでもフルカネルリの口から漏れるのは歯軋りの音と、小さな呻き声だけ。

……ほんつとに、フルカネルリは丈夫だネー。

二時間ぐらいで体の痛みは止まり、そろそろ冷静な思考を取り戻せる頃だと踏んで話しかける。

「気分はどうかナー？」

フルカネルリはボクの声に反応して、ちらりと横目でボクを見た。

《……まあ……悪くない》

そして、指先についた自分の血を、ペろりと舐め取った。

『……ふふふ……お疲れさまあ……わたしもお……ちよつとだけ、疲れたわあ……』

《……私もさ》

そう言つてフルカネルリは目を閉じる。上がり続けた回復力で、傷はもうどこにも残つていない。

それに、今の高速成長で体の成長も頭の中身の成長も一気に加速しただろう。

そんな中で眠るように目を閉じたフルカネルリに、体の封印を再開する。これでもっと成長するのは早くなる。

……早くボク達のところに来てくれないかナー？

満面の笑顔を浮かべるナイア。端から見るとただのドS。

《ボクは別にSって訳じゃないヨー。ただ相手がボクにからかわれている所を見るのが大好きなだけサ》

そして本神のコメント。

フルカネルリだ。目が覚めたときにはもう周囲は明るくなりかけていた。私はどの程度の時間、眠っていたのだろうか？

《今の話なら三時間くらいだヨー》
死んでいた時間は？

《……ざっと、三日位かナー？》
……そうか。

目を覚ました私は、とりあえず周囲を散策してみた。

『……葬儀の途中みたいねえ……？』
そうだな。

……しかし、自分の葬儀の場を見るのは初めてだ。

《そりゃそうでショー》

『……わたしも、見たこと無いわねえ……』

そうか。元は人間で亡霊に成ったアザギならば見たことがあってもおかしくないと思ったのだがな？

……おお、私の写真だ。あまり大きいものではないが、まあ、こんなものだろう。

私に友と呼べるものはあまり多くはなかったし、大きすぎても困るだろう。

……それにしても喉が乾いた。

《なんの脈絡も無いんだけドー！？》

仕方ないだろう、乾いたものは乾いたのだ。

さて、近くの水道は……。

水を飲んでみると、急に辺りが騒がしくなった。

何が起きているのかは知らないが、小さく聞こえてくる声を聞けば、

明日火葬する予定だった死体が無くなっているらしい。

……私か？

《キミだろっネー》

『……瑠璃よねえ……』

だろっな。

騒ぎの方へ近付いて行くと、父と母の怒鳴り声が聞こえた。

「母よ、父よ、何故そんなに騒いでいるのだ？」

「……へ？」

父と母に話しかけると、何故か二人は固まってしまった。

「……ああ、そっだ。言い忘れていた」

いまだに固まったままの二人に目を合わせて。

「ただいま」

次の瞬間、私は両親に抱き締められていた。

……痛い痛い、とても痛い。

困惑したまま抱き締められているフルカネルリに、ボクとアザギは
やれやれ、といった空気になってしまふ。

『……瑠璃ってえ……鋭いのか、鈍いのか……わからないわねえ……』

……？』

「そっだネー。それでこそフルカネルリって感じもするけどサー」

……でも、なんとなくわざと気づいてないような気もするんだよねー。
とぼけてる、って言ってもいいかも。

ボクとしては楽しいからなんでもいいんだけど。

ハッピーエンドもバッドエンドもいっぱい見てきたし、あんまり終
わった話に興味は無いんだよねー。

長生きしてみるとよくわかるヨー。昔のことに囚われてばかりいる

と、今を楽しめなくなっちゃうのサー。

……さてと。そろそろアフターサービスの時間かナー？

邪神流のアフターサービスはしっかりしてるヨー？ ほとんどボク限定だけドネー。

普通なら生き返ったら大騒ぎになるところを、ボク力で隠し通す。周りのフルカネルリと関係が薄い人間達の記憶からフルカネルリ達のことを別人に置き換えて、今日で火葬まで全てを滞りなく終わらせたことにしておく。これが一番自然でばれにくいからネー。

それからクトちゃんとかトウグア、それにアブホースにも連絡を入れる。

これで大体大丈夫、っと。

じゃ、久々に仕事したことだし、寝よつかナー。

……オヤスミー。

真面目で不真面目なナイアの一仕事。

《今回はフルカネルリが異世界にいつてる間の回想だヨー。だからボクの出番はここだけサー》

『……わたしも、そうなのよねえ……』

《寂しいネー》

『……寂しいわねえ……』

いつも通りに起きて、くっ、と伸びをする。

目覚まし時計を覗きこむと、そこにはいつも通りに6:00の文字が浮かんでいる。

カーテンを開けて、朝日を浴びて、今日も一日いい日であるようにと願った。

……すぐに、いい日ではなくなったけど。

いつもなら瑠璃ちゃんが既に起きていて庭に出て体操をしているのだけれど、今日は珍しく瑠璃ちゃんの姿が無かった。

今日は寝坊でもしたのかな？ と思っていた。

今日は瑠璃ちゃんの誕生日だし、日曜日だし、ゆっくり寝かせてあげよう。

だからあの人が瑠璃ちゃんがない理由を聞いてきた時もまだ寝てるみたいと答えたし、部屋を覗いた時も、何事もなく眠っているように見えたからそのままにしておいた。

でも、流石に十二時まで起きてこなければおかしいと思う。

いつも起こされることもなく朝早くに起きてくるはずなのに、いくらなんでも遅すぎる。

そう思った私は、瑠璃ちゃんを起こすために部屋へと入っていった。

瑠璃ちゃんは静かに横になっていた。

目を閉じて、全く動かない。

瑠璃ちゃんは、朝に見たときと、全く変わっていないかった。

「瑠璃ちゃん、もうお昼よ？ そろそろ起きない？」

声をかけても全く反応しない。そんな瑠璃ちゃんのほっぺを撫でる。

冷たかった。

「……え？」

もう一度、撫でてみる。

認めたくなくて、もう一度。

やっぱり冷たくて、それでも、もう一度。

何度やっても、結果は変わらなかった。

口元に耳を澄ましてみる。

何も聞こえない。

胸に耳を当ててみる。

何も聞こえない。

手を掴んでみると、既に固まっていた。

いつも手を握ると、柔らかくて、暖かいはずの瑠璃ちゃんの手は、

もう、暖かくはなかった。

ここから先はよく覚えていない。ただ、泣きながらあの人に電話をして、あの人がすぐに帰ってきてくれて、話し合っ………そして、瑠璃ちゃんのお葬式を、やること、に………

学校に行ってみただけど、瑠璃はいなかった。

いつも私より早く来ているのに、珍しいなと思うと同時に、風邪で

も引いたのかな、と思うだけだった。
それが違うつてわかったのは、高中先生が朝のホームルームで、瑠璃が死んじゃったと言った時だった。

最初は信じられなかった。本の少し前まで、瑠璃はとっても元気だったんだから。

先週も、‘また学校で、’って言うてくれたのに……。

「ねえ、嘘だよね？」

先生に聞いてみる。

先生は首を横に振った。

そして、たった一言。

「事実」

それだけ言つて、教室から出ていった。

私は、その日を魂が抜けたみたいないな気分で過ごした。

夢を見た。私がついて、瑠璃がついて、いつも通りにお話したり、一緒にお弁当を食べたりしていた。

瑠璃は笑いながら私の頭を撫でてくれたし、私も楽しそうに笑っていた。

……でも、もうこんな日は来ない。瑠璃がいなくなっちゃったから。

それを思い出した途端に、瑠璃は笑顔じゃなくなった。

そして、私を置いて歩いていく。

走つても追いつかない。

手を伸ばしても届かない。

声を上げてでも止まってくれない。

瑠璃は、どんどん小さくなって行く。

……待つてよ、瑠璃。お願いだから。

瑠璃はほんの少しだけ止まって私の方に振り替える。

そして、悲しそうな顔をして 首を横に振った。

……私は、泣きながら目を覚ました。

瑠璃の話聞いてから、毎日こんな夢を見る。

いくら泣いても涙は止まらない。視界はいつもぼやけっぱなしだし、泣きすぎて目が痛い。

それでもやつぱり涙は止まらなくて、私はまた泣く。

枕元に置いてある瑠璃からのプレゼントに目をやって、それを優しく抱き寄せる。

そのまま目を閉じて、夢の中に逃げる。

……このまま、瑠璃のところに行けたらいいのになぁ……。

泣きながらも気丈な哀華と依存の強い白兎

帰還編 1 - 4 (前書き)

これにて帰還編も終了。次からはまた日常に戻ります。

フルカネルリだ。父と母に抱き締められているのだが、素晴らしく痛い。そして苦しい。

《あんなに長い間死んでるからサー。もっと早く帰ってくればよかったんだヨー》

しかし、最低でもあのくらいはやっておかねばこれからの研究に支障が出てしまう。

……なんとかならないか？

《……今度からは固定で三分後に帰ってこれるように調整するヨー》
ありがたい。

……ああ、締め上げられているお陰で意識が……。

『……あらあらあ……？……大変ねえ……』

気絶しそうになったところで離してもらった。あのまましばらく時間が経っていたら本当に死んでしまう所だったな。

《死なないですんでよかったネー》

ああ、そうだな。アザギと同じになるにはまだ早すぎる。

私は謎が有る限り、生き続けて行きたい。

……人間ゆえに限界はあるだろうがな。

《神様になつてみなイー？》

それはまたいつかな。

『……亡霊に、なつてみない……？』

死んだらな。しばらくは無理だ。と言うか嫌だ。

『……そう……仕方ないわねえ……』

それから少々忙しかった。役所に生き返ったという報告をして、

医者に書類を出してもらい、学校に連絡をして、白兔の家に電話をかけた。

何でも学校からの話では、白兔が学校に来なくなっているらしい。何故私に言うのかは知らないが、一応電話で挨拶だけでもしておくでしょう。

《……カオスな匂いがするヨー？》

『……面白そうな匂いがするわぁ……』

白兔の母に直接話を聞くと、どうやら白兔はここ二日ほど食事を一切とっていないらしい。

起きている時はただ虚ろな目で空を見上げ、私が作った兔の置物を抱き締めて眠ろうとするらしい。

……そこまでシヨックだったか？

《シヨックだったんだらうネー》

そうか。

……まあ、こんな時には顔を見せてやるのがいいだろう。それでも駄目なら抱き締めて、頭を撫でてやろう。

……父と母は……まあ、何とかしよう。具体的にはあの世界から持ってきた超科学の産物で。

少なくとも二人は命が懸かっているわけではないし、なんとかなるだろう。

『……手伝っちゃわよぉ……』

ありがたい。是非頼む。

結果だけ残そう。

始めは無反応だったが、徐々に反応を返し、目に光が戻り、焦点が合ったと思ったら抱きつかれた。

夢と混同しているようだったが、しっかりと会話し、そして一緒に眠って起きた時によやくいつもの白兔に戻ってくれた。

嬉しそうに私と話をしながら学校へ向かう。

ここで大切な事は、私の家からはあの世界で私がプロトの世話をしているときに研究をしていた機械人形が出発していると言うことだ。学校に着いてすぐに機械人形から今日必要なものを受け取り、機械人形は改造に改造を重ねた白衣のポケットに入れて隠した。

ナイアから校長達に連絡が行っていたらしく、大した騒ぎもなく受け入れられた。

……ナイア。何かしたな？　あまりに周りの反応が薄すぎるぞ？

《あ、ばれター？》

これは流石にばれるだろう。少なくとも違和感は感じるぞ。

……された方はともかくとして。

担任の高中教諭には校長から話が行っていたらしく、すぐに迎え入れてくれた。

その際、いつもの面倒臭げな顔を少しほころばせていたのが少々驚きだった。

教頭からはぶつきらぼうに、副校長からはやにやという笑顔と共に「お帰り」との言葉を頂いた。流石はナイアと肩を並べる邪神の二方だ。私がどこで何をして来たかなどすべて見通しているようだ。《クトちゃんはまだちょっと気付けないかナー？》

そうなのか？
《そのつもりで軽く隠しながら行ったのサー》
そうか。

こうして私の初めての異世界旅行は終わり、またいつも通りの日常が再開した。

今日もナイア達と元気に過ごすフルカネルリの優しい日常。

2 - 4 5 (前書き)

最近色々手を出しすぎて書く量が少なくなってきました。
……鬱だ

フルカネルリだ。私も忘れかけていたのだが、今月は林間学校だ。ちなみに、つい最近に仮死状態になったことがあるせい、父と母が騒がしかった。まあ、最後には宥めてすかしてなんとか説得したが。

《……説得？ あれガー？》
説得だ。

《ちよつとくらい口ごもってもばちは当たらないと思つヨー？》
知らんな。

『……どう好意的に見ても、詐欺だったわよお……？』
そうか？

泊まるところは山の中の古めかしい建物だった。こういったところに泊まるのは初めてだ。

《異世界の体験も含めてはじめてだネー。向こうにはこんな木製の建物なんて無かったシー》
そうだな。

ちなみに校長達も来ているが、
「きゆう」

「クトおおおっ！！傷は浅いぞしっかりしばるんっ！？」

「こんな所まで来て騒ぐなっ！あと傷じゃなくなつてただの車酔いよっ！」

……とまあ、久々に見る‘いつも通り’の光景を見せてもらった。

「瑠璃ー！こつちこつちー！」

「ああ、わかつているさ」

さて、荷物を部屋に置いて来るとしようか。

校長のかわりに教頭からの林間学校の開始の挨拶が終わり、すぐに昼食となった。

「はい瑠璃。あーん」

「……あむ……」

《抵抗しないんだネー》

もう慣れていているからな。それに断ると泣いてしまいそうな気がするし。

《……ありえるネー》

『……ありそうねえ……うふふふ……』

ありそうだろう？

「美味しい？」

「ああ、美味しいな。白兔も食べたらどうだ？」

「瑠璃が食べさせてー」

……やれやれ。

私はいまだに汚れていなかった自分の箸を取り、白兔の料理をつまんだ。

「……あーん」

「あむっ」

《嬉しそうだネー。あんなにほっぺが緩んじやってるヨー》

白兔は素直な娘だからな。

……それと、殆ど関係ないことだが校長が昼に出された辛子菜を食べて涙目になっていた。

《あ、クトちゃんまだ辛いのが苦手なんダー？》

そうらしい。

夜になったらすぐに眠る。そうしなければ怖い怖い教頭先生が角を生やしてしまうからな。

《あいつ怒ると恐いんだヨー。いやほんとにサー》

まあ、私は周りの事など気にせず眠るがな。

「あれ？ もう寝ちゃうの？」

「ああ。早起きと健康のためにな」

『……………気にしなくってもいいのにねえ……………？』

《健康呪いがかかっているしネー》

知っているし覚えているさ。だがこう言っておいた方が後々面倒臭くならないだろうしな。

……………ついでに言っておくか。

「お前も早く寝た方が良くぞ？ この辺りには色々というようだからな」

「……………えーと、それって例えば……………お化け、とか？」

その問いには答えずに曖昧に笑い、布団を被る。

「え、ちよつと瑠璃？ 冗談だよな？ 冗談なんだよね!？」

……………やれやれ。見えないのだから気にすることは無かるうに。

『……………ふふふふ……………ちよつと、悪戯してもいいかしらあ……………』

《……………やめといた方がいいヨー。クトちゃんとクトウグアとアブホースの領域だからネー。下手したら消滅させられちゃうヨー》

『……………あらあらあ……………残念ねえ……………』

……………あまり騒ぐな。それにアザギ。恐らくナイアに頼めば見回りの名目で悪戯をすることぐらいならば許可してくれるように計らつてくれると思つぞ？

『……………』

《……………わかったヨー。行けばいいんだロー》

あの後、あの邪神がお願いしてくれたお陰で、遅くまで起きていた子達に色々な悪戯をしつつ、他の邪神達に報告をするという簡単な仕事をする事になった。

……とっても楽しい

明るくしたまま騒ぐ子達は流石にいないけれど、小さな明かりをつけてトランプをしている子達や真っ暗な中で恋話をしている子達も居た。

恋話をしている子達は、それこそこういった学校行事の醍醐味だと思うのでスルーしたが、トランプをしている子達には軽い悪戯を、そして騒がしくしていた子達にはちょっと酷い悪戯をした後に、教頭役の邪神に報告した。

……どんな悪戯かは秘密。その方が、面白いものねえ

……でも、その教頭役の邪神は副校長役の邪神とナイアに振り回されていたらしく、とても疲れた顔をしていた。

……今度、愚痴でも聞いてあげようかしらねえ……？

悪戯大好きアザギのターン！

フルカネルリだ。一夜明けて、林間学校の二日目だ。

《あー？ なんかいつもより時間が過ぎるのが遅いよう》
「黙れ。」

『黙りなさいなあ』

「黙つとけよ」

「黙りなさい」

《……フルカネルリはともかクー、アザギにクトウグアにアブホー
スマデー……ちよつとひどすぎないかナー？》

「な、ナイアさん、落ち込まないで！」

《……ボクの味方はクトちゃんだけだヨー！》

ナイアはどう見ても十代前半にしか見えない校長に、実体化して抱
きついた。

「てめえこの野郎何クトに抱きついてんだゴルうぼほう！？」

「生徒の前で殺気なんて出すんじゃないっ！」

それから始まる大喧嘩。とは言つてもすっかり周りのことを考えて
いるらしく、物を壊さない程度まで加減をしている。

……やれやれだ。

いつも通りにさっさと太極拳もどきを終わらせる。異世界の時とは
違って体はあまり動かないが、それでも限界に挑戦する勢いで体を
動かす。

……お陰でいつの間にもやら自分の体の動かし方ならまるで精密機械
のように動かすことが出来るようになってしまった。

これにより、人間の体の構造的に無理な動きでなければその通りに
動かせるようになった。

……ああ、勿論物理法則的に無理な動きも無理だ。
『……霊術、使ったらあ……どうなるかしらあ……？』
ある程度ならば出来るようになるな。物理法則無視。
……やれやれ。私も相当に人間離れしてきたな。
《今さら今さら》
『……今さらすぎよお……あはははっ……』

朝から白兔はにこにこしている。

「あーん」

「……飽きないのか？」

「飽きないよ？ だから、はい、あーん」

「……やれやれ。……あむ」

「えへへ」

《知ってるかナー？ キミと白兔ちゃんが恋人だつて噂が流れてるんだー》

……まあ、似たようなものだろうな。些か一方的すぎる気がしないでもないが。

白兔がそれでいいのならばいいのではないか？ 私としては相手が

白兔ならば構わないし。

《白兔ちゃんはまんざらでも無さそうだよー》

そうか。ならばいい。

楽しいことはすぐに終わる。

知識だけならばこの世界に存在している人間の全てよりも持っている
と確信しているが、実際にやるとなるとやはり勝手が違う。

……まあ、知識の通りに体を動かすだけなので、すぐに慣れたがな。
簡単な手作りらしい舟にクラスメイト達と乗り、小さな湖を軽く一
周。途中で白兔が魚を見つけてはしゃぎ、全員が片側に寄ったお陰
で転覆しそうになるというハプニングがあったが概ね事件は無い。
副校長が舟に乗りたくないという騒いで教頭に正座で怒られるという光

景はここで毎年見られる物らしく、案内人も「またか……」と苦笑
いしていたが。

《あ、やっぱりまだ水は苦手なんだネー》

「……うるせえ。クトが異常なんだよ。なんだよ水浴びしても平気
な炎の神性って……」

《気合いでなんとかなるもんサー》

「ならねえよ」

「なってるよ？」

《ほらクトちゃんもこう言ってるじゃないカー》

「……畜生……ここには敵ばっかかよ……」

……まあ、強く生きてくれ。死なないだろうがな。

《まあそうだネー。ボク達くらいになると死にたくても死ねないヨ
ー。そんなボク達が仲良くしてるのはネー、殺しても死なないから
争うなんて馬鹿馬鹿しいと思ってるからサー》

やれやれ。また無駄な知識が増えたな。

……もしかしたらいつか使うことになるかもしれんが。

夜になり、二泊三日の林間学校の最後の夜。キャンプファイアーに
火が灯り、その周りを私達が踊りながら回る。

ただ、調子にのって高速回転しすぎると、

「きゅっ」

こうなる。

「クトおおおっ！」

そしてこう続き、

「おとなしく寝かしときなさいよこのバカっ！」

「ぼべうっ!?!」

最後にこうなる。

……実に痛そうだな。

《痛いヨー超痛いヨー? 何てったってアブホースの鉄拳だからネ
ー》

それを何度も食らっているのに副校長は叫ぶのだな。

《クトウグアはシスコンだからネー》

……そうらしいな。

「瑠璃っ！踊ろ？」

「……やれやれ。白兔は元気だな」

そう呟きながら、私は白兔の手を取った。

……未来の知識の中には、一応こういったダンスについての知識もある。

それを脳の奥底から引っ張り出して、覚えていただけのことをすぐに理解するレベルまで持っていた。

「それでは一曲、踊りませんか？」

白兔は私の問いに少しだけ考えて、すぐに笑顔になった。

「うん。お願いね、瑠璃」

私と白兔は手を取り合って、炎に照らされた地面の上でくるりくると踊り始めた。

フルカネルリと白兔ちゃんの二人につられて色んな子達が同じように踊り始める。

それは女の子同士だったり男の子同士だったりしたけれど、女の子と男の子の組み合わせは少なかった。

『……恥ずかしがってるだけよお……』

……そうかもネー。

……ボクも久々に踊ってみようかナー？

「お相手しますよ？」

「あー？ クトちゃん、体は大丈夫なノー？」

「はい、もう平気です」

……たしかに顔色も悪くないシー、体内の力の流れ方もおかしい所はないみたいだネー。

「じゃあ、お願いできるかナー？」

「はい！」

影響力のあるフルカネルリと流されやすいナイア。

『……うふふふ……楽しそうねえ……』

そして観客のようにそれを見ているアザギ。

フルカネルリだ。林間学校の最終日となった。母への土産と父への土産を選ぶとしようか。

《お酒なんてどうかナー？》

私の身体は未成年だから売ってもらえないだろうな。

《あ、そつカー》

『…………ふふふ…………忘れんぼさんねえ…………』

買えた。

《マジでカー！？ クトちゃんもクトウグアもアブホースも国家権力に真つ向から喧嘩売ってルー！？》

そうだな。

だが酒を買った場合、すぐに教頭に住所と名前を告げて預けることになっている。帰ったら返されて親に連絡が行くようになっていくらしい。

《…………ならいい…………のかナー？》

『…………良いも悪いもお…………やっちゃってるものお…………』

《…………たしかにネー》

まあ、この他にも色々買ったがな。

《なに買ったナー？》

扇子とカステラと茶碗だな。

『…………統一性が無いわねえ…………？』

《ないネー》

そうだな。

帰りのバスの中。白兔は騒ぎ疲れたのか私に寄りかかって眠っている。

……やれやれ。まだまだ子供と言うことか。

《実際子供だしネー》

まあ、その通りだな。

……では、校長が同じように教頭に寄りかかって眠っていることについてはどう思う？

《クトちゃんは昔から身体が弱かったからネー。眠れるときに寝ちゃわないと身体が持たなかったせいですぐに寝ちゃうのサー》
ほう、そうだったのか。

《そうだヨー。今は少しよくなってるみたいだけドー、身体はまだ昔のことを覚えてるんだらうネー》
そうか。

……直す気が無いだけではないのか？

《ノーコメント。でもあえて一言言うなら、その通りだと思うヨー》

『……それえ……ノーコメントじゃあ、無いわよねえ……？』

コメントもあるしな。

家に帰るまでが林間学校。と言う訳で白兔と手を繋いで歩いている。

《何が、と言う訳、なのかわかんないだけドー？》

そう言うものだ。それにナイアならばわかるうとすればわかるだろうに。

《それやっちゃうと神生がつまなくなっちゃうんだヨー。未来予知なんかで悦に浸る奴は本当の全知全能の恐ろしさを理解してないのサー》

……ああ、それは何となく理解できる。

私も恐らく全てを知ってしまったたら気力をなくすだらう。もしかしたらその予知以外の未来にするためにはどんなことをすればよいかの実験を始めるかもしれないが。

《慣れるまでは結構難しいヨー？》

慣れるほどにやって来たのか？

《……暇だったからネー》

……そうか。

家に戻ってすぐに父と母に抱き締められる。どうやら寂しかったらしいが……父よ。仕事は良いのか？

「瑠璃の方が大切さ」

……やれやれ。そういうことを普通に言うから父は母に天然タラシ等と呼ばれるのだ。

《言わないであげてヨー》

言おうが言うまいが変わらんだろうに。

『……その通りなのだけどねえ……』

《……まあ、本人には言わないであげてヨー》
言わないさ。そのぐらいの分別は付く。

父と母に土産を渡す。中々に喜んでもらえた。特にカステラは限定品だったらしく、母が大喜びだった。

……今度カステラでも作ってみるか。

《試食とかはあるかナー？》

……まあ、良いだろう。切れ端や形の悪いところになるが、構わないか？

《大丈夫サー！》

『……わたしにも、ちょうだい……？』

いいぞ。量はないが、ナイアと仲良く食べてくれ。

『……ふふふふ……ありがとねえ……』

どういたしまして。

瑠璃ちゃんが林間学校に行ってる間、家の私達はちょっと寂しかった。

つい最近、冷たくなっちゃったこともあってとても心配だし、瑠璃ちゃんは可愛いから開放的な環境で積極的になった男の子から告白されちゃったり……ああ、心配だ。その時にあの人を抑えることができるだろうか。むしろ私が積極的にその子にプレッシャーをかけてしまったりしないかしら？

……ああ、考えれば考えるほど心配になってくる。

……もし、瑠璃ちゃんが帰ってきたときに、

「好きな相手ができた」

なんて言われたら………どうなっちゃうかしら？

……それにしても、心配だ。

ああ、心配だ。

以下無限ループにより省略

親馬鹿極まる古鐘哀華の考え方。

ああ、心配だ。瑠璃が帰ってきたときに

「好きな相手ができた」

なんて言われたら、僕はその相手になにもしないでいられるだろうか？

もしかしたらその相手が家に来たときに思いっきりプレッシャーをかか

以下略

そして似た者夫婦の証。

2 - 4 8 (前書き)

寝落ちしてました。慣れない徹夜なんてやるもんじゃないですね。

フルカネルリだ。夏休みに入ったのだが、今年は例年よりも暑いな。

《暑いよネー。クトちゃんは大丈夫かナー？》

さあな。気になるなら見に行ってみるか？ 今の時間ならば学校に居るだろうし。

《……いや、別にいいヨー。やろうとすれば普通に見えるしネー》
そうか。

この季節になるといつもの図書館に新刊が増える。最近はやイトノベル系の本も増えてきたので娯楽には困らない。

……が、やはり異世界に居るときの身体能力に慣れてしまっているため、少々動きづらい。

『……仕方無かって、諦めた方がいいわよお……？』

そうだろうな。やれやれ。

……読み終わったら子供向けの本でも書くか。白兔にでも読ませてもらおう。

《またずいぶんといきなりだネー》

流石に家で異世界でやっていたような実験をしようとは思えない程度の常識的な思考能力は持ち合わせているのでな。

『……ふふふ……嘘おっしやい……』

《キミを常識人扱いしたら苦情の一つ二つ来てもおかしくないヨー》
そうか？ 私ほど常識的なものは白兔位しか居ないぞ？

《ご両親ハー！？》

あの二人は十分に非常識だろう。

それに高中教諭は非常識なまでに無口だし、校長、副校長、教頭の三人は邪神であり、人間としての常識が通用しづらいだろう。

……いや、教頭は確かにかなり常識に沿って行動しているが、身体

能力的には十分非常識だ。

《……これは認めるしかないネー》

『……そうねえ……』

……ちなみに、ナイアとアザギも十分に非常識だ。自覚してくれ。

《キミもネー》

『……瑠璃もよお……』

家に帰ってすぐに本を書き始める。練習用に軽く短いものは考えていたため、少し位ならば悩まずに書くことができる。

主人公は気が小さな山根の神。普通の山根と何ら変わらない生活を好み、争い事を嫌う優しい山の神。

ちなみに語尾を伸ばす癖は無い。

《それってボクへの当て付けかナー？》

いや？ だが、私にとって神と言えばナイアであると言つのは疑うべくもない真実だ。

《……ありがとう》

どういたしまして。

さて、続きを書くのでしょうか。

平和が大好きな山の神。この神は最後に何を考えるのだろうか？

……まずは、名前を考えるとしよう。

作り終わった。が、あまり見せられた物ではなくなった。

ナイアに日本神話が実在する世界の妖獣から神になったものの話を聞いたのが悪かったのか、ととても子供に見せられるものではない物語になってしまった。

《……あっチャー……やりすぎだよこれハ……》

お前もそう思うか。

……まあ、いくつか抜粋して表現を柔らかくしてやればなんとかなるだろう。

……… 今度また異世界に行く事があつたらこの話を神話として語り

継がせてみるか。宗教に狂う馬鹿供は直接は見たことがないし、ちようどいい。

《……知ってルー？　そういう、話が先に出来た、神様もいるんだヨ―？》

ほう？　そんなのか。

『……へえ……面白そうな話ねえ……わたしも混ぜてえ……』

《いいヨ―。で、話の続きなんだけどサー、そうやって出来た神様って存在が希薄なのが多いいンダー》

それは話の情報のみで作られているため、世界に存在したという確固たる事実が存在しないからか？

《話が早いネ―。例えば中世ぐらいの病気は呪いってことになってたでシヨ―？　その噂から魔女が生まれ、呪いをかけながら存在を消費していったって、最後には消えちゃうってことが他の世界にはざらにあるんだヨ―》

なるほど。致命傷はその病気が呪いではなく細菌によるものだと多くのものに認識されることか。

『……へえ……そうやればあ……作れるのねえ……』

……ふむ。つまり、元々存在していた山根を神に変え、他のものが起こした事を山根の仕業だと多くのものに本気で信じ込ませればいいのだな？

《まあそうだねー。なんなら次に行く世界は魔法や魔物なんかがいる世界にしてみルー？》

………その方が信じ込ませやすいか。

………ふむ。

フルカネルリが悩んでいるけど、フルカネルリの事を知って少しだ

けわかるようになってきた。

フルカネルリは魔法のある世界に行くことになる。
と言うか、行かせるヨー。

理由は簡単。フルカネルリなら魔法もちゃんと理解したいだろうし、魔法のある世界の生態系なども研究したいだろうからだ。あとボクもその方が楽しいシー。

フルカネルリは自覚していないけど、魔力も気も霊力も妖力もついでに神気も一杯持っている。成長速度が上がったまま異世界で数年も生きていたのは伊達じゃないってことだネー。

ボク？ ボクのは伊達だヨー（笑）

……さーてトー。フルカネルリが次に行く世界の選考でもしようかネー。

道化を演じるのが大好きなナイアのお仕事。

フルカネルリだ。簡略化した山根の神の話面白くしてみたところ、それなりの評価をもらった。七十八点だそうだ。

《あー？ 意外といい点じゃないカー》

そうだな。私もこれほど高い点になるとは思っていなかった。

『……………わたしはあ……………結構、好きだけどねえ……………』

そうか。

ふと思い付いた。白衣のポケットの中でならば実験や研究をすることができないのではないかと。

《できないことはないだろうけどやめといた方がいいと思うヨ》
確かに入口がわからなくなりそうだ。それに恐らく真っ暗だろうしな。

……………それ専用の施設でも作るか？ なにか壺でも使えば簡単にはいかないが作れないことはないだろう。

《フルカネルリ、キミがなんか言ってる間にキミの手はもう試作品を作り始めてるヨ》

……………おや、いつの間に。

『……………あらあ……………本当ねえ……………』

……………まあいい。どうせ何時か作る予定だったのだ。それが少々早まっただけだ。

勝手に動いていたわりにはどう作ったかも確りと覚えているし、害はないだろう。

出来上がり。試作品とはいえ全力で作ったのでそれなりにハイスペックだ。

中身にどれだけ入ったとしてもある一定以上の重量にはならないよ

うにした。

そして本体は壊れないようにあの世界で最高級の硬度と最大級の強度を併せ持つ、そんな金属をさらに私の霊気と妖気とナイアに貫つたものだろう未だに名前のわからない様々な力を込めてひたすらに強くしたものを使っている。作った私でも壊すのは少々骨が折れる。……まあ、ナイアや教頭、それに校長たち邪神ならばさして苦勞もなく壊してみせるのだろうか。

《今なら楽々できるヨー》
やはりか。

『……わたしはあ……ちょーっと、苦勞するかもねえ……？』

……ふむ。ならばいつの日にかこの箱庭をさらに強化して、アザギには壊すのが難しいものを作ってみるとしよう。

『……ふふふ……待ってるわよお……？』

ああ、待っている。

確実に時間が空いている時に箱庭に入り浸るようになったのだが、やはりそんな時間は極々限られた時間しか入れないので研究はともかく実験が上手くいかない。

……こうなれば異世界の科学力で中の時間を早くするか、外の時間の流れを遅くするしかないな。後者は難しいので前者で行くとしてよ。

《頑張るのは良いけどサー。それやったら年齢がずれちゃうヨー？》
む……それは困るな。これは暫くは使う予定なのだから、使えば使うほど年齢がずれていくのは危険だ。

外から見たら二十後半にも見える小学生等は御免被る。

……折角理論だけは作ったのだが、お蔵入りか。

……いや待て、年齢がずれるのが問題ならば、年齢がずれないようにすれば良いのだ。

それは例えば、異世界などで使うならばなんの問題もないと言つことだ。

私の体が成長し、周囲とのズレが問題になるのならば、元々私の体が成長しない異世界ならば、それも私の知り合いなど誰一人居ない世界なら、全く問題はないな。

《そういうことだネー》

『……ふふふ……よく、できましたあ……』

……まあ、使う使わないは別として、一応実装はしておくか。どうしても箱庭を使わなければならない時は時差を一倍にすれば良い訳だし、今は便利な倉庫扱いで構わないだろう。

《……超科学の産物を便利な倉庫扱いカー……》
なにか問題でもあるか？

『……ふふふ……別に無いわよお……？』
ならばよし。

今日、瑠璃に頼まれて本を読んだ。題名は「小さな神様の話」。ちよつと読んでみたけど、今までに読んだことのない種類のお話だった。

主人公は、小さな一匹のヤマネ。名前は無いけれど、周りからはミモリ様と呼ばれているみたいだった。

そんな小さなヤマネがいつの間にか長生きをして、神様になってしまふという話。

この主人公は、やっていることが一々可愛らしい。瑠璃に丸い耳と大きなふさふさの尻尾を生やした姿で頭の中で再生すると……こつ、きゅんつとくるものがある。

特に冬眠のシーン。自分の尻尾に丸まって幸せそうに眠る瑠璃なんて……ほんとに見たらとりあえず撫でちゃいそう。

……あれ、おかしいな？ 急に涎が……？

……じゅるり。

「白兔？　どうかしたのか？」

「……！な、何でもないよ！ほんとだよ！」

「……そうか」

それでもキョトンとした顔のままの瑠璃を見てると……なんだから罪悪感が凄い……。

妄想したり萌えたりしながら話を読み進めていって、読み終わったのは十五分くらい経ってからだった。

「さて、読んでみた感想はどうだ？」

感想かあ……瑠璃が持って来た本にしては、ちょっと味が薄かったような気がする。ちよつと子供向けかな？　と思っただけだ。

それにしても字は小さいし、難しい表現もいっぱい使われていたから違うのだろうけど、なんとなくそう思った。

それを加味して換算すると、大体八十五点くらい。

でもここはあえて少し低めにつける。なぜかと言うと、こうした方が次に良い本を持ってきてくれることが多いからだ。

……まあ、瑠璃が持ってきてくれる本は外れが全然無いんだけど。と言うわけで七十八点をつけたんだけど……まさかあれを瑠璃が書いてたなんて……思ってなかった。普通にどこかで売ってるものだと思ってた。

……だって、カバーついてるし絵も描いてあるし、ちゃんとした本になってるんだもん。気付かないよ。

ちよつとばかり危ない方向に進んでいる白兔の採点。

フルカネルリだ。今年の体育祭は雨で中止になった。邪神の力ならばこの程度の雲などすぐさま晴らすことができるだろうから、恐らくなにか非常事態でも起きているのだろう。

《大正解だヨー。クトちゃんがお見合いするからぶち壊しにいくんだってサー》

……それは……いいのか？

『……ふふふ……良いんじゃないかしらあ……？……あの娘……好きな相手が、居るみたいだし……ねえ……』

そうか。……まあ、本人が良いと言うならばそれで構わないだろう。

体育祭を楽しむにしていたらしい白兎はクテツと机に突っ伏している。そこまで落ち込むことは無いと思うのだが、私も他人にはわかるはずもないことで一喜一憂することがあるので何も言わないでおく。

「瑠璃ー、慰めてよおー」

向こうから来た。私としては放っておくのが良いと判断したばかりだと言うのに。

「まあ、どうせあの校長の事だ、別の日にやり直すのではないか？」

「だよね！」

いきなり元気になったな。

「うんうん、考えてみれば当然だよ。あの校長先生だったら自分が見れなかったっていう理由で体育祭をやってももう一回やりとかしそっだもんね。雨が降ってたら絶対やるよそっだよそっに決まってる！」

そう言っつて白兎が私に抱きついてきた。とりあえず頭を撫でておく。

「まあ、落ち着け」

「はい」

私の腹にぐりぐりと頭を擦り付けている白兎だが、へにやりと緩んだ顔をしているのは想像に難くない。

……やれやれ。もう一人子供ができたような気分だよ。

《前世も含めれば二児の親だもんネー？》
そうだな。

ここで大切なのは二児の‘親’であることだ。けして‘母’ではない。少なくとも前世では男だった訳だし。

《気にしないで良くないかナー？》

『……瑠璃にもお……譲れないことがあるんでしょ……？』

まあ、アザギの言う通りだな。私は私が女だとは考えていない。

《意識してないだけで男とも考えてないでシヨォー？》

……やれやれ。やはり煙には巻けないか。

《一応、結構高位の神様だからネー》

『……邪神だけど、ねえ……』

そうだな。

フォーマルハウト、クトウグアの実家。

………の、近くのどこか。

「てめえは燃えるクソ親父！」

「その程度で父を越えたつもりか！？ 片腹痛いわア！！」

ぎちぎちと炎を圧縮して作られた剣がクトウグアとクティウム（クトウグア父）の間で火花を散らす。

それらの剣は恐らく太陽すら凌ぐであろう熱量と光量を秘めており、

罅迫り合いをするだけで干渉しあったエネルギーが辺りに撒き散らされていてもではないが人間が直視できるような闘いではなかった。

「ハ！無駄に歳食ったおっさんが言いやがる！」

「クソガキはいつまでもクソガキだなあ！」

「……だとゴルア！！！」

剣の熱量が更に増し、辺りが異様なまでに暑くなる。

「決着つけるぞバカ親父！」

「いいだろう、来るが良い！」

「……おおおおああああつ！！！！！」

「……お兄ちゃんもお父さんも、元気だなあ……」

「そうねえ……」

一方、クトとクトネリシカ（クトウグア母）は離れたところでのんびりとお茶を飲んでいた。

「……で、今回はお父さんが寂しくなってお見合いをさせるって名目で私達に会うつもりだったのね？」

「そうよ。まったくあの人も素直じゃないんだから……」

「しょうがないよ、お父さんだもん」

「……それもそうね」

くすくすと笑いあって、じゃれあっている二人を見る。

今では剣は無くなり、拳と拳のぶつかり合いになっている。

「……あ、お茶がなくなっちゃった」

「お代わり、いる？」

「……うん。いない」

ぶるぶると首を横に振ってお代わりを断り、今回のお見合いの相手の顔を見る。

「……クトちゃんも、あんなのが兄貴で大変だな」

「いえいえ。良いお兄ちゃんですよ？ ノーデンスさん」

「ノーデンス！てめえクトに色目使ってんじゃ」

「余所見とは余裕だなクトウグアアツ!!」

「うるっせえ! 余裕過ぎてあくびが出るわボケ爺い!」

「……あれでもかい?」

「……あ、あははは……」

ノーデンスの呆れたような問いかけに、クトは答えることができずにただ曖昧に笑った。

「……あ、そろそろ止めてきてくれないかしら? 今日久しぶりにご飯を作ろうと思ってね?」

「止めますよ」

「委細承知、止めようか」

クトとノーデンスは久々の美味しいご飯のために、いまだに暴れ続けている二人へと近付いていった。

嘘の見合い話とクトウグアが素直じゃないのは父親からの遺産という事。

「……ああ、クトネリシカの飯はいつ食べても旨いな」

「生きてくのに必要なのに、何でこんな旨いのかねえ……?」

「……(お兄ちゃんの胃袋を押さえるのは大変だろうけど……頑張ってくださいね、アブホースさん!)」

そしてクトネリシカの作る食事は異様に旨いという話。

2 - 5 1 (前書き)

ちよつとネタ切れになってきたので2 - 5 5が出たあとは一週間ほどお休みします。

フルカネルリだ。本当に体育祭をやり直すことになった。白兔は諸手を上げて喜んでるが、私としては良い迷惑だ。

《研究の時間が削られちゃうもんネー》

『……………あらあらあ……………それは大変ねえ……………』
 本当にな。

一年生達の元気な叫びを聞いたり、先輩達の妙に上手い組体操を見たりしていればあつという間に時間は過ぎる。

私は個人として徒競走に出場したため残りの出番は応援合戦と全体競技、学年競技のみである。

「応援しないの？」

「しているぞ？」

一応クラスメイトだしな。それに優勝賞品があるそうだし。

《あるノー！？》

あるぞ。中身は聞いていないがな。

『……………ふふふ……………勝つてからのお……………お楽しみ、ねえ……………』
 そうなるな。

優勝はできなかったが、敢闘賞を貰った。

中身は……………干瓢だな。

《干瓢！？ 敢闘で干瓢ってなんなノー！？》

『……………駄洒落ねえ……………』
 駄洒落だな。

《……………考えたのはクトウグアかナー？ あいつ意外と親父ギャグ好きだシー……………》
 そうなのか？

《あんまり外には出さないけどー、実はそうなのサー》
そうなのか。

「今夜は干瓢巻きが主食かな？」

「酒のつまみにもいいだろうなあ……………」

父と母は既に食べる方向に思考がシフトしている。

……………干瓢巻きが主食は……………なんとかならないか？

「……………ならないんじゃないか……………ないかしらねえ……………？」

悲しいことだな。

《でもそれが現実なんだよネー》

意外といけた。

《予想外すぎるよその反応ハー！？》

「……………なんで、倒置法……………なのお……………？」

なぜだろうな。きつとナイアだからさ。

「……………ふふふ……………そうかもねえ……………」

まあ、なんにしる確実なことは母の料理は旨いという事だな。

《……………あーうんそうだねー》

うむ。私ではあれほど旨い干瓢サラダや干瓢ステーキを作るのは難しいだろう。

《ステツ！？ マ、マジデー！？》

ああ。さすがに驚いた。

やはり料理には無限の可能性が眠っているのだな。

《無限って言うよりもただフリーダムなだけって気がしてきたヨー！》

そうかもしれないな。

だが、美味しいものは美味しいのだから仕方がない。

「……………わたしもお……………食べてみたいわねえ……………」

またいつかな。

遙かな未来のとある異世界のこと。食卓についたナイアとアザギがワクワクとした顔で何かを待っている。

「まだかナー　　まだなのかナー」

「…………ふふふ…………もう少しよお…………のんびり待ちましょう…………？」

「それもそうだなー。…………でも楽しみだナー」

アザギに笑われてもワクワクを抑えきれないらしいナイアは、用意されているナイフとフォークをくるくるくるくるるとかなりの高速で回している。

それは速いだけでなく無駄に滑らかで、暇な時間をどれほどこの手慰みで過ごしていたのかが伺い知れる。

そしてそれから三分ほどの時間が過ぎて、漸くナイア達が待っていた声が聞こえた。

「できたぞ」

「イヤッホー！」

「…………ふふふ…………ナイアは元気ねえ…………」

その声を聞いた途端にナイアは喜色に満ちた声を上げ、アザギはそんなナイアを見て苦笑している。

「まあ、喜ぶか否かは食べてから決めてくれ」

そう言つて姿を見せたのは、外見の年齢はおおよそ二十歳を少々過ぎた頃であるうフルカネルリ。その手には薄い皿と料理を持っている。

「アハハー、まさかフルカネルリがあんな小さな約束を覚えてくれるなんて考えてなかったからなー。嬉しかったのサー」

「…………正直なところお…………わたしたちも、忘れていたものお…………ねえ…………？」

そんな話をしながらもフルカネルリの動きは止まらず、ナイアとアザギの前にその料理の乗った皿を置いた。

「……うーん、やっぱり見た目はかなりあれだネー……ほんとに美味しいネー?」

「人の好みにもよるが、不味くはないぞ」

ナイアのそんなわかりきった質問にフルカネルリは答える。その手は「ないあるらとほてつぷ」と書いてある茶碗にぺたぺたと真つ白なご飯をよそっていた。

「まあ、食べてみる。話はそれからだ」

「……そうだネー。それじゃ、いただきますー」

「……頂きます……」

フルカネルリに言われて覚悟を決め、ナイアとアザギはぱくりとそれを口にした。

「……あれー? 意外といけるヨー?」

「だろう?」

びつくりしたように呟くナイアに、フルカネルリは言葉を返す。

「なぜか母の作る料理はある一定よりは不味くなるのが無いんだ」

「……へえ……不思議ねえ……あらあ、ほんとに美味しい……」

「意外だろう?」

ぱくぱくと食事を続ける二人にだけではなく、自分にも向けて呟く。

「……やれやれ。なぜこんなものが美味しいのやら……」

ちらりと目をやったその料理の名前を思い出す。

「……母も妙なものを作ってくれたものだ」

「……ほんとだよネー。何で干瓢でステーキを作ろうなんて思ったんだロー?」

ナイアとフルカネルリは、二人揃って首をかしげた。

そんなあるかもしれない未来の事。

フルカネルリだ。文化祭では中々にノリの良い奴等が集まってアツプテンポの曲に合わせて歌って踊って大変なことになっていた。どうも今流行りのアニメの曲らしいのだが、私はアニメは見ないのでよくわからない。

《フルカネルリは暇があつたら頭の中で研究タイムだもんネー？》
そうだな。

今年の私のクラスは有志でダンスを練習している。私はもちろん入っていない。

「瑠璃はやらないの？」

「やらないぞ」

「えー、やりなよー」

「嫌だ。絶対に」

などということもあつたが参加はしていない。

私は踊るよりも歌い奏でる方が好きだ。

それに、体を動かすことならば朝の体操（と言う名の太極拳モドキ）で十分だ。むしろ最近ではこの体で行うにはキツすぎるようなものになってきているため、十分すら通り越して十二分ですらある。

《フルカネルリは非常識な体をしてるから大丈夫なだけどネー》

「……………もしも非常識な体じゃなかったらあ……………とづくに全身ズタ

ボロよお……………？」

私はそんな恐ろしいことをしていたのか。

……………まあ、非常識ゆえに問題は無いし、構わないだろう。

《構ってヨー！もつとボクを構ってヨー！！》

聞き分けのない子供かお前は。第一今でもかなり構っているだろうが。

私にしては破格だぞ？

昔の私ならば集中している時は生返事、考え事をしている時は空返事、大抵研究の事を考えていて上の空が当然だったのだ。今の態度ならば満点を越えて点をくれてやっても良いところだ。

……まあ、私にとって満点など在于って無いようなものだが。

《無いんだー？》

満点の上があるからな。

《それって満点じゃないよネー！？》
だからそう言っているではないか。

クラスの連中はノリノリで歌って踊って満足したようだ。白兔はなぜか不満そうだがな。

まあ、私に害はない。

《そうかナー》
作るなよ？

《

そんなことはしないサー》
今の間は何だ。

《あ、キミのご両親が来たヨー。キミを見つけてすごく嬉しそうだし》

なあ、ナイア。私の質問に答えてくれ。

今の、間は、何だ？

《……………。お、怒らないイー？》
物による。

……………が、あまり外には出さないように善処しよう。
《……………。》

ごめん、いつか少しの間だけ記憶喪失になってもらって女の子が好きそうなゴスロリとかヒラヒラフリフリな服とか着てもらおうと

してましター》

……そうか。

……ふう。落ち着け、私。いいか？ 怒るなよ？ いくらナイアがふざけた頭が涌いたようなことを抜かしたとしても、怒らない努力をしようと云ったんだ。落ち着け、落ち着け、落ち着け。落ち着いて深呼吸をしろ。この秋空の下で冷たい空気を肺一杯に吸い込んで、すぐさまこの怒りを押さえ込め。さあ、大きく吸い、そして吐き、意思の力で怒りを思考の奥底まで押し込めろ。……ああ、間に合わないか。ならば今すぐに落ち着くように術式を組め。まずは思考を根幹から冷やし、怒りと言う感情を凍らせる。話はそれからだ。

……ふう。

《……落ち着いター？》

五月蠅い、ヤンデレ化した校長と友人に焼かれ刻まれ食されて死ぬ。《久々に聞いター！？》そしてそれはいくらボクでもさすがにきついヨー！？》

だからこそ焼かれて死ぬ。

《酷いよフルカネルリー！》

お前がやるうとしたことも十分酷い。故に刻まれて死ぬ。そして激痛の中で悶え苦しみながら死ぬ。

《……ごめんなさい、ほんとにキツイです、許してください（泣）》
いつかな。

《フルカネルリーー！（泣）》

泣きながら瑠璃に赦しを乞い願っているナイアを見ながら、わたしはクスリと笑いを漏らす。

いつもは飄々としていて掴み所がないナイアでも、惚れた相手には勝てないことがわかると、ナイアにはわるいが何故か笑みが湧いてしまう。

……流石に万年も一緒に過ごしていればそのくらいの事はわかる。

ナイアは自分の事を隠すのが上手いからわかりづらかったし、瑠璃はそういった感情をナイアに向けていないようだから気付くのはかなり遅くなったが、一度わかってしまえば凄く簡単だ。

……けれど、やはりナイアは邪神らしく、およそ普通とは言えない感情の作りをしているようで、その思いは男が女に向けるような愛情でも無ければ娘に向けるものでもない。それどころか男が持つには少々珍しい思いだ。

……まあ、だからと言って困るわけでも無いけれど。

ついに実体化して土下座までしている奇妙な邪神と、その邪神に妙に気に入られている瑠璃を見ながら、わたしはのんびりと浮いている。

少しキレたフルカネルリと横から見ているアザギ達の日常(?)

フルカネルリだ。初雪だ。

そして初雪となれば今までもそうだったが校長が生徒に混ざって雪合戦だ。

「やつ！はっ！」

「あはははっ！いくよっ！えーいっ！」

校長が投げた雪玉は見事な勢いで飛んでゆき……

ガシヤツ、パリンツ！

「「「あ」「」」

……さて、教頭の長い説教に巻き込まれないように逃げるとするか。

《……賛成するヨー》

「ふふふ……逃げるが、勝ちよお……」

その日の五時間めの授業はクラスの二割ほどが休むことになった。

教頭から逃げるができなかったのだらう。

……合掌。

《アブホースの説教は長いヨー……がんばレー！》

ちなみに白兎は何故か

「今回は参加しない方が良い気がする」

と言つて不参加だった。

……白兎。お前はいつの間にかそこまで直感が鋭くなったのだ？

《この学校には人間の潜在能力を引き出す力がネー》
在るのか？

《別にないヨー》

無いのか。

《ただし人間の範疇を越えない程度に成長させてくれるみたいだネー》

ほうほう。それで白兔はあれほどの直感を？

《そうなんじゃないかナー？ クトちゃんって優しいシー、自分の生徒たちへの選別がわりにそういうことをしてもおかしくないんじゃないかナー？》

……ほお……………。

ならば、私はどうなのだ？

《……………ナー、炎に相性が良くなってるネー。火傷とかすぐに治るだろうシー、術式も少しだけ強くなるんじゃないノー？》
人間の範疇は越えない程度に？

《そうだネー。でもキミの場合は成長するから人間の範疇とかはあんまり気にしなくても良いんじゃないかナー？》

……そうか。

《……………ちなみに、フルカネルリはボクの加護も持つてるからネー。

大地の方にも気持ち適正があるヨー》

ほう？ どの程度だ？

《石ころの形を整えて球体にしたり正四面体にしたり二つ以上の石ころをくつつけたりとかかナー？》

便利だな。早速使わせてもらおうとしよう。

『……………ふふふ……………何に使うのかしらねえ……………？』

アルミ製の銃を砕いてポケットの中に入っている原子配列変換機で材質を変える。名前はつけられていなかったが、私の白衣に使われている金属と同じものだ。

それを使ってもう一度銃を作り直す。反動がきつなくても身体強化でどうにでもなるし、異世界で使うぶんには全く問題はない。

……………異世界で銃刀法に当たる法があればまた話は変わるが、今度行く世界にはそんなものはないだろう。

そんなことを考えながら砕いた銃だった金属を一つに纏め、全てくつつけて一つの金属塊に。さて、ここからだ。

口径を変える技術や術式を弾丸に組み込む技術、それに術式そのも

のを弾丸に変えるもの、銃身の冷却術式、弾道の補正、威力の増加用のオプションパーツの製作などが楽々できる。

……実に便利だ。

《……良い笑顔をしてるネー……》

そうか？ 自覚はないのだが……まあ、ナイアが言うのならおそらくそうなのだろう。

「いい？ 確かに雪合戦が楽しいのは分かるわ。でも、だからと言って窓ガラスを割るのはダメよ」

「うう……はい……」

現在、私はアブホースさんのお説教を受けています。

隣にはお兄ちゃんが正座で座っていて、どうしてガラスに当たる前に蒸発させなかったのかと監督責任を問われています。

その他にも後ろでは私と一緒に雪合戦をして遊んでいた生徒たちがずらっと正座で並んでいて、アブホースさんのお説教を聞いています。

……ちなみに、この時点でアブホースさんは四人になっていて、私とお兄ちゃんと生徒のみんなのお説教に一人ずつ、最後の一人は割れたガラスの片付けや新しいガラスの搬入（と言う名のガラスの創造）、それにお説教中の私達のお仕事の肩替わりで忙しそうにしています。

「……と言うことは言わなくても……クトちゃん？」

「は、はいっ！」

い、いけない。ちょっと考え事で聞いてなかった……。

「……今、私が何の話をしてたかわかるかしら？」

「……ゴメンナサイ」

アブホースさんは深くため息をついて、

「……………もう一度最初っからね」

死刑宣告にも似た言葉を言った。

……………そ、そろそろ足が限界……………（泣）

結局解放されたのは放課後だったクトとクトウグアと生徒達。

フルカネルリだ。今年は学校ではなく家族旅行としてスキーに行くこととなった。大丈夫だろうか？

《キミのご両親の話かナー？》

ああ。滑ることができるのか？

《できるヨー。というか結構うまいヨー》

そうか。なら安心だ。

「はっ！」

おお、なかなかやる。

《結構うまいって言ったでシヨー？》

ああ、その通りだったな。

……しかしこれはただ上手いと言うレベルではなく、な気がするのだが……。

《……ヒントをあげるヨー。そのいち、キミのご両親は結構古い付き合いがある》

……ふむ。何となく読めたが、第二のヒントをもらおうか。

《良いヨー。その二ー、昔からこの近くに小学校はクトちゃんの学校しか無かつター》

ああもう構わん。理解した。

《あ、そウー？ まあ、そんな感じであの二人はスキーが上手なのサー》

なるほどな。

……つまり、母が作る創作料理の数々は元々の才と言うわけだな？

《……あー、そうなるネー》

……そうか。

……さて。氷雨に挨拶でもしに行くとするかな。この辺り一帯は

氷雨のテリトリーだと聞いたし。

《迷子にならないように気を付けるんだヨー》
なに、アザギもいるのだから平気さ。

『……………うふふふ……………嬉しいことを、言ってくれるわねえ……………』

『これはこれは、お久しぶりにございます古鐘様、アザギ様、ナイアルラトホテツ様』

何故か敬語だった。使いなれていないためかどこかおかしいような気がするのだが、私はそういったことはあまり気にしないようにしているので放っておく。

「なに、ここまで来たついでに挨拶でもしようと思っただけ。こちらの都合で態々呼びつけることもないだろうし、こちらから来た、と言っただけだ」

『……………ふふふ……………そうねえ……………それだけよお……………？』

《そうだねー。たいした意味もなく来たネー》

……………実際のところ、意味が無いわけではないのだが、その辺りは黙っておく。態々言っただけでもないし。

さて、アザギ達が仲良く話しているうちに、こちらの用も済ませしておくでしょうか。

じつ、と氷雨を見つめる。

久し振りに全力で解析を行い、最後に見た氷雨と今の氷雨の違いを理解する。

……………ほんの僅か、人間にしてみれば超回復中の数十秒程度の違いではないが、力が全体的に増加している。

アザギに聞いた話では、こう言った妖怪などは基本的に時間経過と知名度で力の強弱がつからしい。

……………無論、誰にも知られずに最強の座に手をかけ、そしてその座を捨てた猛者も居ることは居るようだが、そういった存在は極々稀なんだとか。

……確かに私達はナイアの存在を知らなかったが、事実としてナイアは私達には想像もつかないほどの力を有し、存在している。しかしそんな存在が多く存在するわけもない。そういうことだろう。……まあ、実際にそうかは知らないが。今度本人に聞いてみるとうよう。いつになるかはわからないが。

雪の上をフルカネルリが滑っていく。なんか異様に上手い。

最初はぎこちなかったのに、あっという間に慣れちゃったのかジャンプとか急旋回とか縦回転とか……って、縦は無いでしょ縦はサー。

……フルカネルリのお母さんたちはフツーにやってたけどー。

……やっぱり神の加護ってすごいよネー。邪神だろうと善神だろうと関係なくサー。

……フルカネルリに頭が上がらないボクが言うのもあれだけどネー。

《何の話だ？》

「いやいやいや、何でもないヨー。ちょっとクトウグア達にどんなお土産を買っていこうか考えてただけだからー」

フルカネルリは滑りながらボクに意識を向ける。余所見は危ないヨ
ー？

《……はあ。まあ、いい》

「ありがとネー」

嘘だとわかってもらってもさらりと流してくれるフルカネルリ。多分、隠そうとすれば無理矢理わからなくすることで隠すこともできると思うけど、隠すことでもないし開けっぱなしにしている。

……そこに触れないのは、優しいのか意地悪なのか。

……いや、天然だサー。絶対。

フルカネルリは確かに優しいけどー、知りたいこととかがあればそ

っちを優先するだろうシー、ほんとに興味がないんだろうナー。

……信用されてるって思っておコー。

『……ふふふ……実際、信用されてるわよお……？』

「そうなんだろうナー」

……あ、そうだ。写真撮ったところ。綺麗だし。

ナイア、フルカネルリ、アザギ。雪山にて。

2・55(前書き)

しばらく(最低一週間)休みます

フルカネルリだ。炬燵には一種の魔力があると思うのだが、どう思う？

《出たくなるよネー》

『……出てもあんまり変わらないってえ……わかってるのにねえ……』

「瑠璃ちゃん、ミカンとってきてえー」

「じゃんけんぽい」

母が出したのはグー。私はパー。

「……うう……こういうときの瑠璃ちゃんじゃんけん強すぎ……」
そうか？

《こういう自分に害が来るときだけで見てみるトー……なんトー！
百二十一連続一発勝ちだヨー！》
なるほど。強いらしいな。

《……ところでサー》
どうしたナイア。

《……フルカネルリが、じゃんけんぽい、って…………すっごく似合わないヨー》

五月蠅い、一瞬でゼロから秒速三十万キロまで加速させられて死ぬ。

《流石のボクでもつぶれちゃうヨー！》

潰れてもどうせあつという間に再生するだろうが。

《そうなんだけどネー》

炬燵でのんびりするのも良いが、やはり私は研究所で白衣を着てなかなか進まない実験に頭を悩ませている方が性に合っているな。

《……エー……フルカネルリッテ……マゾな人だっk》

五月蠅い、魚の鱗を飲み込んで咽を切って癌になって死ぬ。

《神様にだって癌はあるんだヨー!? それで死んじゃった神様だ
つているんだヨー!?!?》

死んでも甦るだろう。

《……そうなんだけどサー》

……ついでに言ってしまうえば、まずお前達の咽がが魚の鱗程度に負
ける所など想像もできん。

《……そうなんだけどサー……》

……まあ、だからこそ私もそんなものを原因にと言っている訳だが。
……私も、あの世界から帰ってきた時の急速な成長のお陰で、中
々に強くなっているのだろう? 少なくとも、私の発した言葉が力
を持つようになる程度には。

《……大正解だヨー。もうキミは確実にアザギより強くなってるシ
ー、今もどんどん強くなってるのサー》

……そうか。

……さて、実験に入ろうか。まずは

《フルカネルリー! 反応薄いヨー! 薄すぎるヨー!!》

……なに、悪いことではないし……アザギやナイアと同じような
存在になれるのならば……悪くない。

《……嬉しいこと言ってくれんじゃないノー》

ん? そうか?

……まあ、流石にもう一度人生を終わらせてからであって欲しいが
な。

……今生の両親と、それに白兎とは、人間として別れを告げたい。

《……良いヨー。信者のお願いを聞いてあげるのも神様のお仕事
だしネー》

『……ふふふ……やっぱり、邪神でもそうなのねえ……』
そうらしいな。

……さて、実験に入るとするか。

体は炬燵でのんびりしながら意識はキュルキュルと早送り。外から見ると炬燵が気持ち良くて蕩けているようにしか見えなければ、フルカネルリはいつも真剣に思考と研究と実験を繰り返している。

……外から見ると炬燵が気持ち良くて蕩けているようにしか見えなければいけれど。

その高速回転している頭の中に姿だけをお邪魔させる。あまりにもイライラしていなければ追い出されることもないし、怒らせなければ結構優しい。頭の中でお菓子を食べても怒らないしネー。

……邪魔になったら神とか人間とかそういうのなんて関係なしに怒られるし追い出されるけどー。

そういうあたりフルカネルリは素直で良いと思う。とつても人間臭いくせに人間らしくない。

……人間臭い邪神なボクが言えることじゃないけどネー。

ちなみにアザギは外でフルカネルリに害を与えるものが無いように散歩ついでに見て回っている。

そんなことをしなくてクトちゃんやアブホース達が見回りしてゐるから、このあたりはかなり安全なのにネー。

……まあ、無駄とは言わないけどー。実際少し良くなってるわけだシー。それにアブホースとクトウグアが一緒の時だと見回りつて言うよりデートに近いし。

……さつさと付き合っちゃえヨー。既成事実だってあるんだしサー。

ボクが仕掛けたやつだけドー。

ちなみに仕掛けたのがボクだってバレた後、いつもより1.3倍速くて1.3倍強いアブホースとクトウグアに追い回されたヨー。あのときは怖かったネー。

……アブホースとクトウグアの家族には親指立てて、GJ'って言

われたけドー。勿論クトちゃん含む。

……結婚しちやえヨー。披露宴でクトウグアとアブホースが無意識にいちゃついていた時とかの映像を流してやるから結婚しちやえヨー。

恥ずかしがって気絶しちゃうほどに昔からバレバレだったことを教えてやるからサー……………結婚してくれヨー。そのいちゃつきっぷりを見てるとどう見ても熟年の域なんだからサー。

……だいたイー、アブホースもクトウグアもお互いの家の合鍵まで持つてるシー、なんでそこまで行っててそこから先がいかないんだヨー。クトちゃんだってやきもきしてるんだゾー。

だからサー、キミ達さっさと付き合ってることを公ひよ
以下略

途中から愚痴に切り替わったナイアの話の話。

2・56(前書き)

どうやら本格的に書けなくなりそうなので、今のうちにあるだけ投稿します。

フルカネルリだ。白兔にチョコレートを買った。何を返せば良いと思う？ 意見をくれ。

《なんかつくってあげたらどうかナー？ 砂時計とかどウー？》

……ふむ。中々良い案だ。

『……こうしてウサギちゃんに持たせてえ……籠の中で、くるん、つて回すのはあ……ダメかしらあ……？』

……よろしい。採用だ。

そうと決まれば帰ってすぐに作り始めるぞ。

『……はあい……』

《わかったヨー》

アザギが作った形を実物として作る。

兔、籠、砂時計の固定台。一つ一つを手作りで。

……と、言ってもナイアの加護の助けを受けているので簡単に出来ているのだが。

ちなみに砂は未来で作られた磁気に干渉されず錆びにくい鉄より僅かに重い赤い金属を使用している。名前はエントンプソン鋼だそう
だ。通称、緋緋色金。

《……そ、そんなの使っているノー？》

『……緋緋色金ってえ……伝説の金属……だったかしらあ……？』
構わん。作れるからな。

それに、伝説の金属の名を通称といえどつけられるだけのことはある。多少脆いが異様に硬い。

それに合わせて外側の筒も強化する。そのまま使っては内側の傷で内部が見れなくなってしまうからな。

こちらの方も簡単だ。どこにでもある水晶の形を変えて筒状にして

強化してやればいい。

《水晶はどこにでもはないと思うナー？》

地中に元はいくらでもあるだろう。たとえ無くても作れる。

《……ボクに加護を教えたのつい最近なのニ……使い方が上手になってるナー……》

『……ふふふ……瑠璃だものお……そのくらい……やったって、おかしくないわあ……』

《……そうだネー》

そうだろう？

さて、形はできたことだし、一月後に渡せばいいのだから……白兔から貰ったチョコレートを食べるとしようか。

《晩御飯のことも考えて食べるんだヨー？》

わかっているさ。

……それにしても、この体になってから甘いものが美味しいな。元々辛いものが好きな私にとってはこの変化は驚くべき事だ。

ちなみに、甘いものが好きになったが、辛いものは好きなままだ。

《両党って訳だネー》

そうだな。

瑠璃にチョコレートをあげよう。

そう思ったらすぐに行動開始。お母さんに協力してもらってチョコ作り。まずはスーパーで業務用のチョコレートを買ってくる。多すぎるような気がしないこともないけど失敗することも考えて多い方がいいよね。

家に帰ってからすぐに手を洗ってエプロンつけて、台所に立つ。お母さんには口だけ出してもらって、手は借りない。

……瑠璃には私の作ったチョコを食べてもらいたいんだもん。
大きなチョコレートの塊を布で巻いてトンカチで叩いて割る。それからちょうどいい大きさになっているチョコを湯煎で溶かして、いくつかに分けて固める。

小さいのがいっぱいだと、中くらいなのが一つ。ハート型じゃあない。なんとなく、瑠璃はそういうのが好きじゃないような気がしたから。……気のせいかもしれないけど。

チョコを冷ましているうちに新しくチョコを溶かす。

さっきので本体はできたから、今度は飾り付け用のチョコだ。

……って言っても、瑠璃みたいにもものすごい上手な飾り付けとかはできないけれど。

瑠璃のはすごいよ？ 「どこの本職の人が作ったの？」 って聞きたくなるくらい上手なチョコ細工を作るし、さらにその上に綺麗な飴細工まで乗っけるんだもん。

……ほんと、瑠璃って完璧超人だよねえ……… 本人は違っって言い張るけど。

……そろそろ固まったかな？

固まったチョコにアーモンドを乗せたり刻みクルミを乗せたりしてできあがり。中くらいのは自分用。小さいのを一人四つぐらいで考えて……うん、大丈夫。

瑠璃の分は六つで明らかに鼻痕だけど、別にいいよね？

…… ふふふつ 明日が楽しみだなあ………。

…… 瑠璃は、喜んでくれるかなあ……… 喜んでくれると、いいなあ………

チョコの入った袋をもって学校に行く。今日は色んな所でチョコをあげたりもらったりする人達がいる。

私は教室に行っ、いつも通りに自分の席に座っている瑠璃に近づ

いて行く。

そして、いつもと同じように、ちょっと違った言葉をかける。

「おっはよ、瑠璃。はいこれ」

フルカネルリにチョコを渡すことに成功した春原白兔のバレン
タインデー。

そして、とある場所で。

「……はい、あんたにあげるわよ」

「ん？ なんだこれ……チョコか？」

「か、勘違いはダメよ。結構長い付き合いだし、今までもあげてたから今年からいきなりあげなくなるのも変かかって思ってたけど、ただけですからねっ！それに私があげなかったらクトちゃんからだけになってかわいそうだからよっ！」

「お、おう……ありがとな」

「……ふん」

クトウグアに真正面から礼を言われ、アブホースは頬を染めてそっぽを向いた。

そして毎年見られるツンデレと素直になれない邪神の話。

2・57 (前書き)

まだまだいきますヨー

フルカネルリだ。雛祭りという傍迷惑な行事から逃げ回っているのだが、父も母も毎年飽きないな。

《フルカネルリってば振袖似合うのに着ないかラー》
五月蠅い、腎虚で死ね。

《女の子がそんなこと言っちゃダメだヨー!》

……一応言っておくが、私の精神は枯れた爺なのだがな？

『……ふふふ……まだまだあ……若いわよお……?』

……そうか？

結局捕まってしまった。まあ、たかが十の子供が大人から逃げようとした所で無理に決まっているのだから当然と言えば当然なのだが、それでも逃げなくてはならないときは逃げる。

《えっトー……そノー……嫌だっけ言うのはわかってるんだけど

！……似合ってるヨー?》

……五月蠅い、わかっているなら言うんじゃない。

『……ふふふ……』

……なんにも言われずただ笑われるというのも、中々に気に障るものだな。

今の私？ なに、父と母に捕まって振袖を着せられているだけだ。

周到に用意されていた物をな。

「……え、えつとお……瑠璃ちゃん?」

母が私に話しかけてくるが、私は不機嫌であるというアピールを忘れない。

「……なんでしょうか、哀華さん?」

冷やかな目で、声は出来る限り低く。そして瞳は瞳孔が完全に開ききっていて光が見えない。そんな状態で母に言葉を返す。

《怖いヨー!? それすつごい怖いヨー!?》

だろうな。私がかもしも今の私のような人間を見かけたら、すぐさま目をそらして見なかったことにするだろう。

『……………調べてからでしょう……………?』

何を当然のことを。

私の視線の先で、母が半泣きになっている。

「……………うう……………お願いだからお母さんって呼んでえ……………(泣)」

そう言いながら泣いている母に、私は虚ろな瞳を向ける。

「…………………………」

そして、無言を貫く。

母の目には涙が溜まつているが、私には全く関係がないことだ。

……………ちなみに父は、私が最初に名前と呼んだときから虚ろな目で食卓で頭を抱えている。

……………そろそろ着替えても構わないな?

《いいんじゃないかナー?》

『……………ふふふ……………ご両親もお……………すこし、懲りたんじゃない……………?』

……………そうだといいのだがな。

振袖を脱いで、いつもの服を着る。ただそれだけのことがとても嬉しい。

さらさらとした布から腕を抜いて、多少重いが着なれたシャツを着る。

シャツだけでは肌寒いので(ここで母から「寒いならこれを着るといいかもよ?」とレースの沢山付いたワンピースを見せられたが丁寧に無視)、同じ素材できている白衣を羽織る。

……………この白衣、夏には体温を奪って涼しく、冬には体温を保って暖かくなるという便利なものだ。

……………最近、裾が短くなってきているというのが困りどころだが。

……………今ならばナイアの加護ですぐに仕立て直せるような気がするな。次の異世界に行く前に仕立て直すか。

2・58(前書き)

あといくつか。

フルカネルリだ。父と母につれられて花見に行くことになった。団子は母と私の合作だ。

《別に干瓢は入ってないヨ》

ハズレ団子に一つ入っていたような気がするが？

《入ってんノー！？》

入っているはずだ。……と言うか、知らずに言ったのか？

《……フルカネルリの家のお団子って怖いネー……》

そうか？ 味見はしてみたがそれなりに美味かったぞ？

『……ふふふ……すごいわねえ……』

色々な意味でな。

シートを敷いて、重石をのせて、私と父と母の三人が座る。何故か皆正座だ。

「今日のお弁当はあゝ……ロシアンルーレットお団子ゝゝ」

母がそう言いながら弁当箱の蓋を開ける。そこには白、紅、緑と様々な色の団子が並んでいた。

「中身は食べるまで秘密　それと、一度触ったものは全部食べる

こと！わかつたかしら？」

「わかつたよ、哀華」

「理解した」

……だが、なんとなく一番後悔するのは母である気がしてならない。

「それじゃあ……いただきますーす」

取った団子の中身。

私　おおか。父　海苔。母　梅干の種。

……やれやれ。おにぎりのつもりか？

《気付いテー！おにぎりの具にしてもおかしいのがまぞつてること
に気付いテー！！》

「……………うう……………すっぱい……………」

『……………あらあらあ……………』

二つ目。

私 鮭。父 昆布。母 塩（塊）。

今度は海に関係がある物が。

《普通塩の塊なんて団子に入れないヨー！？》

三つ目。

私 豚肉。父 牛肉。母 にんにく。

《駄洒落のつもりカー！！》

ちなみににんにくは生の塊のままだ。

『……………辛そうねえ……………』

四つ目。

私 粒餡。父 瀧し餡。母 銀色の餡。

《銀色つてなニー！？ 人間が食べていいものじゃないよそレー！》

私もそう思う。

……………だが、どうやら美味いらしいぞ？

「ん〜！おいしい〜」

……………な？

《……………ボク絶対食べないヨー》

『……………わたしも、嫌よお……………？』

……………だろうな。私も嫌だ。

五つ目。

私 ハバネロ。父 七味唐辛子。母 一味唐辛子。

《まさかの全員罰ゲームダー！？》

……………いや、私と父は辛いものは好きだから普通に食べるが？

《……………あつソー……………普通団子にハバネロ入れないよネー……………？》

簡単な話だ。母は普通ではない……………それだけの事だろう。

六つ目。

私 プレーン（強いて言うならば小麦粉と水と僅かな塩味）。父
プレーン。母 固まっていけないコンクリートを思わせる灰色のク
リーム。

《プレーン有りなんダー！？ そしてお母さんの食べてる灰色のク
リームってなニー！？》

母曰く、コンクリウム、だそうだ。美味いらしい。

《駄洒落カー！！》

『……………いくら美味しくてもお……………食べたくないわねえ……………』
そうだな。

七つ目。

私 酒粕。

《待デー！？》

……………いきなりどうした。

《キミ未成年だからネー！？ いくら精神が大人で健康祝いで急性
アルコール中毒とかにならなくってもキミ一応未成年だからネー！
？》

……………甘酒のようなものだし、平気だろう。

……………酒気は煮込んで飛ばしてあるようだし、アルコールの匂いも
殆どしないぞ？

《……………それだったラー……………好きにするといいいヨー》

そうか。ならば好きにするとするか。

さて、次は父だな。

父 別の団子。

《別の団子ってなにサー！？》

別の団子は別の団子だろう。その中身はカレーだったようだが。

『……………あらあ……………結構、美味しそうねえ……………？』

私も思った。

母 ジャム。ここで母がキブアップ。最後には美味しい味で締めた
かったらしい。

残りの団子は私と父の胃袋に収まった。

普通の団子も奇妙な団子も食べ終わり、今はゆっくりと茶を啜っている。

「……はふう……」

「……うん、美味しい」

母は父に体を預けて幸せそうにしているし、父はそんな母の頭を撫でながら頭上の桜を眺めている。

……実に平和だ。

《……そうだねー……》

『……そう、ねえ……』

……それはそうとして、二百メートルほど離れた所でいつも以上に元気に怒鳴り合っている副校長と教頭はなんとかならないか？
《さっきまでやってたみたいに意図的に無視するしかないヨー》

『……さっきまではあ……むこつも、静かだったのにねえ……？』
……そうだな。

……やれやれ。

……ぱく。もむもむ……ごくん。

ンー、これは竹輪かナー？ 結構美味しいヨー。

次はなにかナー……ぱく。

……うえ、納豆入ってター。でも食べるヨー。口付けちゃったしネー。……ごつくん。

……アザギは何入ってター？

『……胡麻、よお……？』

そっカー、胡麻カー。

……あれー？ もしかしてー……炒り胡麻が一杯包まれてるノー？

『……いいえ……？……一粒よお……』

……それはそれでむなしいナー……。

バレないようにちよいちよい摘まみ食いしていたナイアとアザ
ギ。

2・59(前書き)

まだもう少し

フルカネルリだ。修学旅行に行くらしい。準備は万端だ。

《行き先は京都だつてサー》

『……ふふふ……気を付けないとお……消えちゃうわねえ……わたし……』

それは大変だ。ナイア、なんとかならないか？

《……冗談だから安心しなヨー》

なんだ、冗談か。

新幹線に乗るのは初めてだが、あの異世界で乗った機甲兵や宙を走る車に比べると大したことはないな。

《まあ、あの世界はキミのいなかった世界の一つの未来の可能性だからネー。キミがいないこと以外は这个世界のかなり未来と一致するシー、そう思うのも当たり前じゃないかナー？》

その通りなのだが、やはりどこか不満だ。もう少し私の知らない機構などはないのか？

《この世界にそういうのをあんまり期待しない方がいいヨー》

『……未来のひとつを、見ちゃってるものねえ……？』

……そうだな。

「瑠璃っ！新幹線だよ新幹線っ！」

「ああ、そうだな。……何故そこまでじゃぐ？」

「だって新幹線だよ！？」

……子供の思考はわからない、と言つことがわかった。

「……まあ、はしゃぎすぎて向こうで疲れて動けないということにならないようにな？」

「いくら私でもそんなことにはならないって」

……なりそうだな。

《なるだろっネー》

『……なると、思うわぁ……？』

そうだよな。

子供の体力を舐めていたとしか言えない。いったいあの小さな体のどこにあれほどの体力が……？

《前にも似たようなこと言ってた気がするナー》

そうだったか？

……そうかもしれん。

「瑠璃ーっ！京都についたよーっ！」

「そうだな」

「もつ。元気ないよー。ほらほらもつと元気よく！」

……そうだな、を元気よく……？

「……そうだな」

うむ、性格的に私には合わないな。

「……むー、まあいいや。それより清水寺だよ！」

正直に言おう。ついて行けない。

『……テンションがあ……上がったときの瑠璃も、こんな感じよお

……？』

ほう、そうなのか。

《そうだネー。大体そんな感じがナー？》

そうか。

「やって来たよ清水寺！何回来てもいい景色」

《シー、クトちゃんが入るのもわかるナー》

「……さて、今年も警備の目の前で飛び降りルヴオツ！？」

「いい加減によしなさいっ！毎年毎年、誰が頭を下げてると思ってるのっ！」

「……悪い。ついテンションが上がって……」

「……ついで飛び降りなんてしないでよ……」
「全くもってその通りだな。」
「でも大体八割ぐらいの人は生き残ってるよ?」
「だからと言って、白兔は飛び降りるなよ?」
「わかってるって」
どこまで理解しているのやら。

音羽の滝で学業の水（特に効果がないのは確認済み）を飲み、今日から泊まることになるホテルへ移動する。

校長はその短い時間で酔ったらしく、教頭の膝枕で横になっていた。……新幹線は平気だったようだが、やはりバスは酔うのか。

《林間学校の時だって酔ってたじゃないか》
そうだったな。

「……う……きもちわるい……」

「酔い止め飲まなかったの?」

「……飲んだ……人間用……」

《そりゃ効かないだろうヨー。はいこレー、ヨガソトスが作ってくれたやつだヨー》

「ありがと……ごさいます……」

「はい、水」

「……いや、だから水を飲んでも平気な炎の神性ってなんだよ?」

「……諦めるといい。世の中自分の理解できないことで一杯だ」

「…………そだな」

私と副校長はゆっくりと溜め息をついた。

《……いつの間にか仲良くなってるネー》
お陰さまでな。

……ああ、着いたか。今日は疲れたし、早く寝るとしよう。

ナイアのお気に入りと話をしたが、中々面白い奴だった。

確かにあいつが関わると未来が読めなくなってくるし、性格的にも嫌いじゃねえ。

何より一番気に入ったのは、あのナイアが頭が上がらない相手だつて所だ。

……またすぐ異世界に行くらしいし、ちょっとぐらいならいいよな？
……せつ、と。

人外に妙に気に入られやすいフルカネルリと惹かれたクトウグア。

フルカネルリは『炎神の加護』を受けた。

フルカネルリの『炎神の加護』がLv3になった。

フルカネルリは炎属性のダメージを無効化できるようになった。

フルカネルリは炎に関する事象にボーナスを受けるようになった。

《……なんか悔しいからボクもやっちゃおうヨー！》

フルカネルリは『邪神の加護』を受けた。

『邪神の加護』が『地神の加護』に変化した。
フルカネルリは『地神の加護』Lv3を手に入れた。
フルカネルリは地属性ダメージを無効化できるようになった。
フルカネルリは大地に関する事象にボーナスを受けるようになった。
三柱以上の邪神の加護を受けたことにより、新たに『邪神の加護』
Lv3を手に入れた。

2・60(前書き)

具体的には異世界直前まで

フルカネルリだ。今日見るものは大仏だそうさ。

……少々気になるのだが、やはり神や仏というものはこういった像などを建てた方がいいのだろうか？

《フツーに信仰集めなきゃいけないんだったら、そうさヨー》

……ミモリの神は巨大な樹を神体とするつもりだったのだが……。

《あ、それなら自然信仰が勝手に集まってくるからある程度は平気だヨー。世界のすべてを偉大なる神が作り、自然の中に精霊を産んだ、とかいうのがなければネー》

……つまり、自然の驚異を司るものが居なければ、もしくは居たとしても知られていなければ平気なのだな？

《そういうことだネー》

白兔が私の肩に寄りかかり、うたた寝をしている。やはり疲れていたらようだ。

「……………」

ぎゅ、と袖を掴まれる。もうすぐ目的地に到着するのだが……やれやれ。私が運ぶしかないか。

白兔をおぶってバスを降りる。私の後ろから副校長が校長を背負って出てきた。

ふと、教頭と目があった。

……苦勞人の目をしていた。おそらく校長のことで副校長となんらかの話し合いがあったのだろう。

《精神空間の中で喧嘩してたヨー》

なるほど、肉体言語での話し合いがあったのか。それならば疲れるだろうな。

……一応、応援だけはしておくでしょう。

結局白兔はその日旅館に戻るまで目を覚まさなかった。昼には食事もとらせたのに何故起きないかは不思議だが、そういうものなのだろう。なんと書いても白兔だし。

《白兔ちゃんもキミにだけは言われたくないと思うナー？》
そうか？

《そうサー》

そうか？ ならば聞いてみることにしよう。

「白兔。お前は不思議な奴だな」

「……ん……るりに、いわれひゃ……くう……」

どうやら本当のようだ。

《何で白兔ちゃん完璧に寝てるのに受け答えできるノー！？》
さてな？ それも恐らく、白兔だから、なのだろう。

夕食の時間になったら白兔は飛び起きた。校長も同じように起きたような気配がする。

《いったいどんな気配サー？》

さてな。そのような気がしただけだ。

……あながち外れでも無いだろう？

《……確かにクトちゃんすぐ起きたけどサー……》
そうだろう？

「瑠璃？ ご飯だよ？」

「ああ、そうだな」

白兔に連れられてやって来たのは大広間（のような所）。生徒と教師、そして何故かナイアの方まで食事が用意されていた。

《アー、まあ、用意されてるんだっただラー……食べないとダメだよネー？》

……好きにすればいいだろう。

《じゃあ食べよっかナー》

そう言っとナイアは校長の隣で実体化した。

「お邪魔するヨ」

「いえいえ、こちらが勝手に用意しただけですから」

邪神同士、和気藹々と話をしているが、何故か周囲は一人増えていることになんの疑問も抱いていないようだ。

……また何かしたな。

そう思ったが、害になることを校長がするとは思えないので放置する。

そこで教頭が立ち上がり、ざわざわと騒がしかった周囲を静かにさせる。

校長からちよつとした話があつたが、それもすぐに終わる。

「それじゃあ、いただきますす！」

……いただきます。

ひゅるりと吹く風をすり抜けて、逃げ回っている霊を追う。

流石は京都と言つべきか、色々な所に様々な神霊が存在している。

しかしそれもあまり強い存在ではなく、事故や偶然でこの世界に流れ着いたものばかり。

ナイアに聞いたが、この辺りに存在している霊は全て知り合いの炎の邪神達に把握されているようだ。

それは単に自分の生徒のためであり、害を与えそうなものは駆逐してきたらしい。

しかし偶然や事故でこの世界に侵入してくる存在は少なくないようで、毎年襲いかかってくる者を駆逐しながら修学旅行を続けているようだ。

……今年はそのように気の抜けない状態を少しでも楽にしてあげるため、そして瑠璃に近付く害虫の排除のために、わたしがそれらを

叩き潰している。

食い潰せば少しはわたしの力になるし、わたしが強くなればそれだけ瑠璃に危険は及ばなくなっていく。

……今、すでに八十七体目を食い潰したところだ。残りは沢山。炎の邪神達には敵わないが、わたしになれば数で押せば勝てると思ったらしく、次から次に湧いてくる。

……… こういうのを、何て言うのだったかしらあ………？

……… ああ、そうそう………

「飛んで火に入る、夏の虫」

……… だったわよねえ………

それじゃあ、手早く終わらせましょうかあ………？

……… イタダキマス………

京都についてからずっと喧嘩中のアザギ。

フルカネルリだ。今日は午前中のみ自由行動で、昼食を終えたら帰るそうだ。

《なんていう日程を考えるんだー！？》

まあ、邪神だからな。

《……ボクも一応邪神なんだけどナー？》

知っているが、それがどうかしたか？

《………何でもないヨー》

そうか。

朝の太極拳モドキが終わった後、朝食までしばらく時間があつたので内風呂に入ることにした。

大きな温泉もいいが、こういった個人用の小さなものも良い。

私は小市民だからな。

《なんか言ってるヨー》

事実だが？

《……まあ、なんでもいいけどネー》

ならば構わないだろう。

……ふう。やはり、慣れないところで眠るといのは……疲れがたまるな。

ちやば……と湯船にたまっている湯が揺れる。

私は、時間になるまでゆっくりと目を瞑る。

………あと、23分。

湯から上がり、体を拭いて服を着る。

髪がしつとりと湿っているが、気にせずそのまま服を着てしまう。

《体冷えちゃうヨー？》

なに、冷えたら温めればいい。それにどうせ食事が終わったら外の風呂に入る予定であるし。

《まだ入るノー？》

ああ。私はそれなりに風呂好きだぞ？ 入れなければ入れないで別に構わないがな。

タオルで髪の水気を吸い取り、最低限乾かしておく。流石に水が滴るほど濡らしておくわけにはいかないし。

最後に髪を纏めて紐の代わりにタオルで縛る。これでよし。

《別に縛ることはないんじゃないかナー？》

どうせまた風呂に入るのだから、その時に新しくタオルを使うこともないだろう？

……さて、そろそろ朝食だな。

朝食が終わり、私は白兔の誘いを断って温泉へ。

……ああ。やはり風呂はいい。体の奥底に溜まってこびりついていた疲れすら溶け出して行くようだ。

《実際はちゃんと疲れは毎日とれてるけどネー》

そうかもしれないが、これは気分の問題だ。実際そうかなどは関係無く、私がそう感じているというだけのこと。

……はあ……。

私が全身を湯につけて空を見上げていると、不意にナイアが声を上げた。

《……あ》

……どうした？

《……ンー、ちょっと用ができたかラー、いつてくるヨー》
行きなり何を言い出すのかと思ったが、現状を思い返してみる。

私はあまり気にはしていないが、体は女。そしてここは露天風呂で、上空から……ああ、なるほど。

ニコニコと威嚇するように笑っているナイアに、一応の注意だけはしておく。

狩り終わったら殺さないようにここに連れてきてくれよ？ 研究したいし、実験台にもなってもらわねばならないし、それらが終われば知識だけを吸い出して残りをアザギにやるつもりなのだから。私がそう言つと、ナイアは嬉々として、

《わかったヨー》
と言った。

…… 自業自得だ。成仏しろよ？

ゆらゆらと空に黒い陰が流れている。

それは、偶然にもこの世界に流されてきた異界の存在。この世界ではそういつた存在は力も存在も削られて行き、いつか薄れて消えてしまつのが普通。それに抗えるのは、膨大な力を持ち、世界からの干渉をはねのけても存在を保つことができる最高位、あるいはそれに準ずる神か、それらに等しい力を持つ者。そして、そういつた存在から庇護を受けている者のみである。

しかしこの陰は、たいした力を持たないがゆえに力と存在を削られ、それでもなんとか生き延びようとこの世界に流れ着いた異界の存在を食い潰して来た、いわゆる妖魔の成れの果てである。

今回この陰が目をつけたのは、たった一人で風呂に入る少女。

その小さな体には不釣り合いなほどの力が満ちていて、その少女を喰らえばこの世界から脱し、元の世界に戻り、覇権を握ることができるとの力を得るだろうと、本能的に理解できていた。

…… たった一つ。その少女を守護していた人間霊という障害を除けば、それが手に入る。その妖魔は、その事を考えてはゆらゆらと体をよじらせた。

…… それは、何もなければその通りに事は進んだだろう。

しかし、この少女は

- 《 ぶっ殺すヨー？》
- 《 焼き尽くしますよ？》
- 《 灰すら残してやんねえからな？》
- 《 滅すわよ？》
- 《 狂わせてあげるね？》

邪神達のお気に入りであり、庇護対象であり、友人であり、良き理解者であり、親友の大切な相手だったのである。

その妖魔は、フルカネルリの研究室で生涯を終えた。最後の最後まで痛め付けられ、発狂してもすぐさま正気を取り戻させられ、幾度も幾度も解体と再生を繰り返し、最期に逃げ回っていた人間霊に食い潰された。力も、記憶も、何もかもを奪われた妖魔は、何も感じることも無く、消えていった。

フルカネルリの庇護者たちは最強だという話。ちなみに上からナイア、クト、クトウグア、アブホース、ヨグソトス。

フルカネルリだ。異界の妖魔の研究により、新たに私の中に魔力が存在する事に気がついた。

《……前に見つけてなかった？》

それとは別のものらしい。前の物は周囲の万物に宿るエネルギーだとすると、今回の物は個人個人を小さな世界と見立てて自分で生み出すことによつて使用できるものらしい。

どちらも魔力ではあるが、外で生み出されて取り込んだものと自分で産み出したものでは質が大分違う。

恐らく前者は同じ世界に存在しているものならばたいして変わることは（水や風といった属性は別として）無いだろうが、後者の魔力は同じ世界の存在でも随分と違うのではないだろうか。恐らく性別や生活によつても逐一変わって行くだろう。『……ふうん……おんなじ魔力なのに……ずいぶん、違ってくるのねえ……ふふふ』

……面白いわねえ……』

おや、久しぶりだな。お疲れさま。

『……ええ……会いたかったわよ……？』

修学旅行から帰るバスの中、私はなぜか校長達のすぐ近くでトランプに参加している。

……本当に何故だ？

「気にすることはないサー。ただ、キミは邪神とかに気に入られやすいみたいだから、今度は気を付けた方がいいかもネー？」

……それは、異世界の話か？

「どうだろうネー？」

「ナイア、お前だ」

「あ、ごめんごめん。……5！」

「6です」

「7よ」

「……私か。8」

「……9」

「クトウグア、それダウト」

「お兄ちゃん。ダウト」

「わかりやすすぎよ。ダウト」

「……あー……すまん。ダウト」

「……ちくしょう」

副校長は嫌そうに場に出ていたトランプを集めて自分の手札に加えた。

結果を見てみると、見事に性格が出てくる。

ナイアは相手に隠し事をする物では強く、騙し合いにはあまり強くない。

校長は

「クトでいいよ」

……クトは有り余る豪運で運と勘が勝敗の要となる物では異様なまでの強さを見せるが、他はそこそこといったところ。

教頭h

「アブホースでいいわよ。学校では役職で呼んでくれれば」

……アブホースは、私と同じ理論派であり、どのような物も平均して一定の結果を出している。

副校長

「俺もクトウグアでいいぜ」

……クトウグアは、正直に言わせてもらうとなぜここまで弱いかと思えるほどに運が無く、弱い。

「酷えなオイ」

「……否定、できるか？」

「……いや、まあ……できねえけどよ……」

そんなところだ。

……私か？ 私は、常にアブホースの一つ下につけていたぞ？

『……ふふふ……楽しそうねえ……』
混ざるか？

『……やめとくわあ……』
そうか。

「家に帰るまでが修学旅行です！くれぐれも事故などに遭わないように注意して帰ってください！」

クトが五年生達の前に立ち、マイクを使わず声を張り上げる。しつかりと聞こえるのは何故だろうな？

「声の量を増幅して、一人一人の耳元に送り込んでるからだヨー」
まだ実体化していたのか。いいのか？

「後でそこら辺の物陰で消えるから大丈夫だヨー」
そうか。まあ、平気ならばそれでいい。

……さて。母と父に構い倒される覚悟はしておかねばな。

ここ数日でグンと力の効率が良くなった。

今までは大雑把かつ力任せに使っていた術も、今では細かい操作もできるようになり、力も温存できるようになった。

やはり、ただ存在しているだけではわからないことや、戦ってみなければわからないことはあるようだ。

……こんなことを考えるなんて……。どうやらわたしも瑠璃に毒されてきているらしい。

くすくすと笑いながら、両親に可愛がられている瑠璃と、それをわたしと同じように不可視のままで見ているナイアを見る。

……まったく。もうすぐ出かけることになるのに、この一人と一柱は……。

《……でモー、その方がボク達らしいでショー？》

……ここで、違うと言えないわたしが恨めしい。

『なに、確りと準備は終わらせてある』

……あら、そうなのお……。

『ああ。そうだ』

瑠璃がはつきりとした声で語りかけてくる。

……けれど、母親に撫で回されながら言われてもねえ……？

わたしは、まったくすすすと笑い、何も言わずに瑠璃を見る。

昔、わたしを強烈に引き付けた瑠璃の光は、昔以上に強くわたしを魅了する。

そんな瑠璃を、わたしがわたしで在る限り、ずっと守り続けよう。

……わたしの身に余ることは、ナイアに押し付けてやればいいし。

フルカネルリ〃人外ホイホイ。

……かもしれないという話。

2・63(前書き)

本編はここまで。それとネタが一つ。

フルカネルリだ。異世界に行く準備は万端だ。

《ハンカチは持つター？》
持っている。

《ティツシユハー？ 忘れ物は無イー？》

……既にその質問は八回目で、確認するのは四回目だぞ？

『……うふふ……心配性ねえ……』

……まあ、確認はするがな。

《あ、するんだー？》

私にとってはしばらくというにはいささか長い時間離れる事になる
この世界の事を記録する。

前回は忘れていなかったが、今回も忘れないという確証は無いため
記録は細かく、そして詳しく。

《しっかりとってるネー》

臆病なだけだ。

『……ふふふ……いいことよお……？』

そうか？

……よし、終わったな。

前回書いたものと合わせればこの世界の事を確りと記録した。

……さて、行くでしょうか。

《準備はできてみたいだシー、飛ばしていくヨー！》

『……体は、強くなってるからあ……気を付けてねえ……？』

わかっているさ。……まあ、どこまで強くなっているかは理解して
いないのだが、その辺りは慣れて行けば良いだろう。

前回と同じように私が荷物を掴み、アザギが私の肩に乗った。

《今回は行き方ちょっと違うからネー》

そうか。

その瞬間、私の足元が闇色の何かに吞まれ、私はその中へと落ちていった。

……確かに、随分と違うな。

《でシヨォー？》

『……………そうねえ……………』

Fate風ステータス表（前書き）

ネタです。

今回の異世界に行く直前のステータスです。

ネタです。

おかしいところがある、または他に知りたいものがあれば設定として決めているものでしたらお答えします。

ネタです。

ネタです。

ネタです。

何度でも言います。ネタです。

Fate風ステータス表

真名：フルカネルリ

性別：女

クラス：研究者

属性：狂気・中庸

筋力	EX (E -)	耐久	EX (E -)
敏捷	EX (E -)	魔力	EX (E -)
幸運	A++ (C)	宝具	EX

クラス別能力

【道具作成】：EX (C)

元々はちよっとした研究道具程度しか作れなかったが、邪神の加護により魔力を帯びたものすら作ることができる。物によっては中の神造武具並の物にもなりえる。

【解析】：EX (D)

邪神のプレゼントの解析の魔眼により、他者の思考や概念、存在、真名すら解析可能。ただし使いすぎるとあまりの情報量に頭が疲れる。普通は狂うか廃人になる。魔眼を使わなければランクはD。

保有スキル

【神性】：D

多くの神に加護を与えられているが、友人程度の付き合い。

【悪霊の加護】 : B

中位の神にすら匹敵する悪霊、アザギの加護。幸運が1ランク上がり危険から逃れやすくなるが、たまにアザギが暴走して呪いを撒き散らす。

【地神の加護】 : A

邪神、ナイアルラトホテプの加護。大地に対する絶対耐性と地属性の存在に対する極大の支配権を持つ他に、幸運が1ランク上昇する。

【炎神の加護】 : A

邪神、クトとクトウグアの加護。炎に対する絶対耐性と炎属性に対する極大の支配権を持つ他に、幸運が1ランク上昇する。

【邪神の加護】 : EX

三柱の邪神に加護を受けている。自分の力ではどうにもできない事態に陥ったときに邪神が助けてくれることがある。このランクならばほぼ100%。その他に幸運が1ランク上昇する。

【全ての微才】 : B

邪神、ナイアルラトホテプにより植え付けられた才能の塊。ほんの僅かだがあらゆることに適正を持つ。

【霊術】 : A -

霊気を使った術を操る。アザギに習った後、自分で改造を続けてこのランクに。このランクならば人間としてのほぼ限界値。

【妖術】 : EX

妖気を使った術を操る。氷雨の服に組み込まれていた術式から独自に発展。もはや人外。

【神術】 : B

ナイアルラトホテプに少しだけ習う。

【魔術】 : E

存在と術式の基礎の基礎を知識として保有している程度。

【神位共通言語】

神御用達の言語。もはや日常会話どころかスラングまで完璧。

【超科学の知識】 : A -

知識があるだけだが、その知識を有効活用できる腕を持っているため、役に立っている。

称号

【神殺し】

神を殺したことにより神属性を持つ相手に有利になる。

【神様達のお気に入り】

三柱以上の神と友誼を持つことにより、神族以外のみ持つことができる称号。

宝具

【白衣】 : C

未来の科学力と魔術・妖術・霊術によって作られた異常なまでに

丈夫かつ強靱な白衣。ポケットは中身がほぼ無限。

【銃】：B

未来の科学と（r）術式と実弾を撃つことができる大型の拳銃。口径を変えることもできればオプシオンパーツによってライフルの真似事もできるという優れもの。

【成長速度上昇】：A++

ナイアルラトホテプによって年齢以外の成長が加速されている。現在およそ20億倍。常時発動。

【上限突破】：A

文字通り上限を突破することができる。成長限界無し。常時発動。

【下限値固定】：C

あらゆる物の下限値を固定する。成長率の下限値も固定するため、放っておいても勝手に強くなる。常時発動。

【健康の呪い】：EX+

何があるごと健康であり続け、あらゆる状態異常を無効化することがができる。

怪我や骨折、四肢を失う、洗脳、幻覚等は状態異常に分類されずぐさま回復されるが、空腹、疲労は状態異常に分類されない。常時発動。

【封印】：EX

邪神、ナイアルラトホテプによってフルカネルリにかけられている封印。身体能力を年相応まで抑える代わりに成長速度を上昇させる。幸運以外のステータスがE-まで落ち、回復力も落ちる。常時発動、任意で解除可能。

異世界編 2・1（前書き）

お待ちせしました。……待っていてくれた人なんているのかな？ 真
暇です。

帰ってきました。そしてようやく落ち着いたので投稿再開しようと思
います。

……ただし、ブランクのせいか指が動いてくれないので、ゆっ
くりですが。

フルカネルリだ。この世界に来て始めに目に入ったのは

「海だな」

《海だネー》

『……………海、ねえ……………』

そう、海だった。ちなみに見える方向は下。

《……………落ちてるネー》

まあ、何とかするさ。

久々に着た白衣のポケットから半重力発生装置を取り出し、電源を入れる。

ふわりと加速が止み、空気抵抗で徐々に速度が落ちて行く。

それに合わせて霊気と妖気の混合術式を組み、海面に叩きつけられる少し前に停止するように飛行する。

……………ところで、この世界に来たときから私に悪意と呪いをぶつけてきているのは何だ？

《……………ナー、この世界の神、かナー？》

『……………フフフ……………いい度胸よねえ……………？』

そうか。

呪いを弾きながらこの世界の神の元へと進む。この世界とは僅かに異なる場所に居るようだが、この程度ならば私でも同じことが出来る。

まして、すでに一度以上開かれている世界に足を踏み入れるなど、研究の片手間で十分だ。

……………流石に、ナイアのように遠い遠い異世界に行けと言われると困るが、今回は異界と言うか、多少の世界間移動だ。できないはずもない。

ちなみにどの程度違うかと言われれば、ナイアの真似をするのを日本から歩きと遠泳でアメリカまで移動する程度だとすると、今やっているものは二条通りから三条道りへ歩いて移動する程度のものだ。《ずいぶん差があるネー》

そうだな。

途中で小さな小さな存在が私にぶつかってきたが、軽く霊気を含ませた声で命じてやっただけで動きを止めた。

……ところで、こうする前から私を襲おうとする小さな者の気配は決まっていたようだが、どうしたのだろうな？

《大地と炎に関連しない精霊だけが襲ってきてるんだヨー。ボクとクトちゃん達の加護は結構強いからネー》

……つまり、創造主よりも強い神からの加護があるから私を襲わない訳だな？

《そうなるネー》

そうか。

《……ちなみにアザギは世界の構成に関係無い邪魔な奴をみんな一手に引き受けてくれてるヨー》

そうなのか？ ならば、後で労ってやらねばな。

……だが、今は私の邪魔をするモノを、なんとかするのが先だ。それに、私が考えていた人工神を認めさせるには丁度良い。

……待っているよ？ まだ見ぬこの世界の神よ。

《……黒いナー。ボクもだけドー》

邪魔者を振り払い、障害物を撃ち砕き、私はこの世界の創造神の前に立っている。

それはナイアと違い、形を取るのに相手の思う神の姿しかとれないという三流神だった。

私がただの人間だった頃ならば畏怖していただろう気配を持っているが、今の私には親の胎内から出てきたばかりの鶏程度の圧迫感しか感じない。

《……親の胎内から出てきたばかりの鶏ってサー……卵だよネー？》
その通りだが？

《……卵に圧迫感なんテ……感じるノー？》
いや全く。

《……あっソー》

うむ。つまりはその程度と言うことだ。

目の前の形の定まらない神に目をやる。

「それで、弁明は？」

やれやれ。無駄にプライドだけが高すぎるモノの相手をするのは疲れな。

まあ、中々手に入らない神のサンプルが手に入ったのだ。少し位は多目に見よう。

さあ、研究だ。それが終わったら神の信仰と力を別の存在に受け継がせるための術式を組もう。無論、実験台は用意した。

《……ひどいネー》

『……それでこそ、瑠璃よお……』

そうだな。

トリップ早々その世界の神に喧嘩を売られ、買った上に勝つちやっただという話。

異世界編 2・2 (前書き)

しばらく更新が無かったはずなのに、
以外と見てくれる人っている
んですね。

なので、少し頑張ってみます。

フルカネルリだ。数十年をかけて神の解体と解析を完了した。

《こんなのとボク達を一緒にしないでネー？》

何を当然の事を。

ちなみに解析し終わった神だったモノは、私が作った山根に喰わせ
た。

一つ目の世界の超科学で作った、私の意を汲んで行動する、可愛い
小動物だ。

『……あらあ……ちゃんと、神になってるわねえ……』

そうか。実験は成功だな。

神格を持っているのならば神位共通言語で会話ができるはずだと思
い、話しかける。

「……聞こえるか？」

ピクリ、と山根の瞼が震え、うつすらと目を開いて私を見る。

「……あいあい、聞こえておりました」

……おや。これはまた奇妙な口調だな。

「ではでは、始めに自己紹介をいたしましゅ」

山根は眠そうな眼のまま、ぺこりと頭を下げた。

「はじめまして、我が造物主しやま。私は見守と申しましゅ」

これが私の作り上げた見守の神の、初の言葉だった。

『……ふふふ……眠くて呂律が回ってないのねえ……？』

《そつらしいネー》

見守の神は私の作った見守神話の通りの性格をしていた。

面倒臭がりな事無かれ主義。好きなことは眠ることで嫌いなことは
住処を追われること。住処を守るためならば恐らく私にすら牙を向

三十万アクセス記念外伝（前書き）

再開して早々に越えたようなので……

三十万アクセス記念外伝

これは昔々の話。まだまだナイアが幼くて、あんまり物事を深く考えなかった頃の話。

暇潰しに他の世界を覗き込む。

それは剣と魔法の世界であったり、貴族が支配する魔族の世界だったり、戦争によつて、もしくは災害によつて殆どの命が失われてしまった世界だったり、宇宙に進出した人間達による最大規模の戦争中だったりした。

しかし

「……予想通り、だナー……」

あまりにも予想通り過ぎて、つまらない。

ずっと未来のことまで予想して、それが外れることなんて殆ど無かった。まるで何度も見て飽きが来たコメディ映画を再び見ているような感覚。

「……つまんないナー」

それでもやることがないのでコロコロと見る世界を変えながらも他の世界を見るのを止めようとはしない。

……まるで平日の昼間に仕事を全て終わらせて暇になった主婦のようである。

しかし、ある世界を見た途端に、ナイアの目が驚愕の色を浮かべた。

「……………読めない」

いつもならば有り得ないその状態に、いつもの口癖すら忘れて呟い

た。

再び集中して未来の予測を始める。しかし、答えは同じ。

その読めなさは、ある男が中心となっていているようだった。

その男が生まれるまでは楽に読みきれた未来が、その男が生まれた途端に形を読ませなくなつた。

その事は、娯楽に餓えていたナイアをひどく喜ばせた。

ナイアは、遙か未来のある世界で生まれるはずのその男に夢中になつた。

存在するだけで自分の予想を外し、既知だったものを未知へと変えるその男を、まるで愛おしい人を思う少女のように一途に思うようになった。

「んふふフー　楽しみだナー」

「キモイぞナイあばあっ!？」

ゴシャアツ!つとクトウグアを殴り飛ばし、ナイアは思いを馳せる。時間移動は簡単だけドー、それをやると帰ってくるときの許可申請とかが面倒くさいシー、楽しみは後にとつとかないとネー

「んふふふふフー」

「……嬉しそうね……何があつたのよ？」

「聞きたイー?　聞きたいノー？」

この時点でアブホースは

「聞くんじゃなかった……」

と言いたそうな顔になつたが、頭が春になっているナイアは嬉々として語るのだった。

ながーい間待つた。

その間は、ずっとキミのことを考えてきた。

キミに会ったらどんな挨拶をしようか考えて、その時の反応がわからないという事実喜んだ。

クトウグア達とも今まで通りに楽しく接してきたけれど、やっぱりキミの事を考えるとそれだけで嬉しくなった。

キミが生まれてからは、意識の半分は常にキミの事を見ていた。

キミが動くことによつて未来がコロコロと変わるのが楽しくて、それだけで詰まらないと感じることがほとんどと少なくなつていった。……でも、キミは人間。寿命もあれば病気で死ぬこともある。そして、一度消えた命は元には戻らない。

だからボクはキミが死んじゃうほんの少しだけ前にキミの意識を持つてきて、記憶をそのままに別の時代に甦らせた。

……その事でアブホースにめっちゃくちゃ怒られたけど、ボクは全く気にしなかつた。だつてキミを見てからボクの中のどこかにいつも吹いていた退屈と言う名の荒野にやつと小さな芽が生えてきたんだから。

今までそこには激しくも暖かい炎やプルプルと震える半液体の川、それに暗い所にはいつも小さな影が居たし、その他にも分厚い本が一杯の図書館や大空を埋め尽くす風が居たけれど、生物がそこにいるのは初めてだつた。

だから、それだけ嬉しかつた。そして、いつまでも居て欲しいと思つた。

最後にはアブホースも仕方がなさそうに協力してくれたし、クトウグアやクトちゃんも手伝つてくれた。

……だから、ボクは今、とつても幸せだ。

「ねえねえフルカネルリー？」

ボクはいつも通りにフルカネルリに話しかける。

《どうした？》

フルカネルリはすぐに返してくれる。

その事に少し嬉しくなりながら、またいつもと同じように軽口を叩き合う。

……早くフルカネルリが人外になってくれないかなー

ナイアがフルカネルリにあんなに言われても離れない理由の一つ。

異世界編 2・3 (前書き)

異世界編にしては異様に長くなりました。
それと、更新は二日か三日に一度になりそうです。

フルカネルリだ。私の研究室ができてから一月。始めは街路樹程度だった隣の樹も大きくなり、今では樹高数百メートル、周囲十数メートルという大きさにまで成長した。

《でかすぎてショー!? 何やったのサー!?!》
なに、毎朝太極拳の後に樹に世界から取り込んだ魔力を流し込んでいただけだ。

毎朝毎朝異常な量が注がれていたせいか、この島全体にこの大樹を中心とした地脈を構成してしまっただし、今朝注ぎ込んだら大きくならずに全体が宝石のように透き通った。なぜだろうな？

《神木化したんだヨー!》
そうか。見守の住処にふさわしいな。

地脈を利用してこの島に結界を張った。出入りの禁止と内外の断絶これによってこの島の生物は独自の進化を遂げていくことだろう。そして外側の陸には、他の大陸から人間を呼び寄せる。

呼ばれた者は、領主に娘を差し出すのを嫌がって逃げていた老夫婦と娘だったり、無実の罪を着せられて投獄されていた男だったり、盗賊に村を襲われて命から逃げ出した兄妹だったり、雪山に一人取り残されていた探求家だったり、実に様々だ。

ここに呼ぶときも、確りと交渉をしてから呼んでいる。
老夫婦と逃げ出した兄妹は森の中を逃げていた所を霧に迷わせて空間を繋げて呼び、研究室で話し合いをして住むことを決めだし、無実の罪を着せられた男と雪山の探求家は夢の中で話をした。

その他にも多くの者を呼び、たった一月でこの大陸で暮らす者は八千人を越えている。

私が彼らに要求したことは三つ。

平穩無事に過ごすこと。

見守の神の存在を知っておくこと。

そして、大陸の中心の島には立ち入らぬこと。

それだけだ。

《これだけやってれば見守ちゃんが消えちゃうこともないシー、集めた人間たちが争って勝手に減ることもないシー、見守ちゃんの眠りを妨げることも無いネー》

ああ。ついでに私の研究の邪魔をするものもいなくなるだろう。

『…………ふふふ…………考えてるわねえ…………』

…………まあ、色々欠点はあるがな。

停滞することで魔法は進歩しないだろうし、人口も減りはしないだろうが目に見えて増えることも恐らく無い。

外から断絶しているために私が新たに招かなければ緩やかに衰退していくだろう。

『…………あらあら…………させる気もないくせに…………』

まあ、それなりに苦勞して作り上げたわけだし、私から壊す気は無
いさ。

『…………ふうん…………？』

見守の神木だが、神木になってからも成長を続け、樹高七百、周囲八十まで成長した。

《だからおつきすぎだつてバー！？》

仕方がないだろう。私もここまで巨大になるとは思ってもいなかった。

『…………しかも、普通の樹がいつぱい生えてきてるわよ…………？』

その上そつちも結晶化してな。

赤青白緑に黄色に黒。実に色とりどりだ。

《ちなみに赤は火、青は水、白は光、緑は風、黄色は土、黒は闇の属性の結晶だヨー》

恐らくあの巨大な神木に収まりきらなくなった分の力を樹の形にし

て地脈から放出したのだろうな。

『……そのお陰でねえ……前からいた虫とか、小さな動物たちがねえ……すごいわよあ……』
ほう？　ならば見てみるとするか。

想像以上だ。

草食・肉食問わず全ての生物が結晶のまま活動している。

草食のものは直接結晶の木の葉を、肉食のものは結晶の木の葉を食べた草食のものを食べることによって私の魔力を体内に取り込み、一気に私の作ったこの場に適応したのだろう。

『……適応って言うよりはあ……』

《……進化って言った方が合ってるヨー》
そうか。

ざくり、と畑を耕しながら、この大陸に来た時の事を思い出す。

始まりは、私達の住んでいた村を治める貴族の視察だった。

いつも通りに働いていた私を見て、いきなりその貴族が、

「その娘を差し出せ」

と言い出した。

私は確かに村の中では美しいと言われてきた。しかしそのせいで住み慣れた家から居なくなることなんて、考えてもいなかった。それも、私を家畜のようにしか見ないような相手に嫁いで行くななんて、悪夢にしか思えない。

お父さんとお母さんは私の幸せのためにとすぐさま家を捨てて逃げ出す準備をしてくれたけれど、魔法も使えない、剣も握ったことがない私達が生きていくには、村の外は危険すぎた。

農作業で体力がついていたとは言え、ただの村娘と村人。魔物に襲われればそれまで。

それでも私達が村を出たのは、このままでは確実に不幸になるから不幸な生か、幸福な死か。私達が選んだのは後者だったと言うだけの話だ。

結局私達は助かった。魔物から逃げていた時に急に現れた霧に迷うと、そこに小さな家があった。

魔物から逃げるために食糧を置いて来てしまった私達は、ほんのすこし食べ物を分けてもらおうとその家の扉を叩く。

こんにちは。

軽く叩いただけでその扉は音もなく開いた。まるで、私達を迎え入れるかのように。

「……入らないならば退いてくれ」

「わひゃっ!?!」

いきなり後ろから声をかけられた。慌てて振り向くと、そこには珍しい黒い髪の少女が、見たことの無い白い上着を高級そうな服の上に着て、両手に持った大きな籠にいっぱい透き通った葉っぱのようなものを入れて立っていた。

「……ふむ。まあ、この大陸に来たということは、何か事情があるのだろう。歓迎しよう」

その少女に連れられて家の中に入る。

その家の中は見たこともないものでいっぱいだった。

「さて、色々聞きたいことはあるだろうが、まずは自己紹介とはいかが」

私達の目の前にことりとからっぽの湯飲みが置かれ、少女の前にも同じものがおかれた。

「……あれ? 透明すぎてよくわからなかったけど……なにか、入ってる?」

「ああ、見難いかもしれないが一応茶だ。先ほど取ってきたあの葉で淹れている」

「あ、ありがとうございます」

……あれ？ 私、口に出したっけ？

女の子の顔を見つめるけれど、女の子は素知らぬ顔で湯飲みに口をつけていた。

それから、あれよあれよと話が進み、私達はここ、ドトール大陸で暮らすことになった。

初めは私達と少しの動物しかいない寂しいところだったけれど、いつの間にか人が増え、村もできはじめていた。

以前の生活と違うのは、この世界の創造神ではなく、創造神を打ち破り、この大陸を作り上げたミモリという神を信じることと、近所付き合いがリセットされたことぐらいだろうか。

……最近、再び周囲とはいいい関係を作れてきている。

そして、私達をこの大陸に呼んだあの少女とは会っていない。

「……また、会いたいなあ……」

そしたら、いっぱいお礼を言わないと。

助けてくれてありがとう、って。

逃げていた老夫婦の娘の話。

記念（前書き）

下らない上に訳のわからない記念ですか、作ってしまったので一応。

記念

どごそのネギまバトン風にフルカネルリへ質問を試みるコーナー。

はい、という訳で意味もなく始まりました質問コーナー。作者の真暇です。お相手はこの小説の主人公、フルカネルリこと古鐘瑠璃さんです。

「……で、私は何故こんなところに居るのだ？」
作者の嬉しさが天元突破したからです。

「ほう？ 何にそれほど喜ぶ？」
……下らないことなんです、作者にはある目標がありました。今回それを確認したら目標値に届いていたのです。これが喜ばずに居られるわけではない。

……と、言うことでノリが続くうちにさっさと質問へと移って行きましょう。

1・お名前は？

「……さっき自分で言っていたではないか……フルカネルリであり、古鐘瑠璃だ」

2・名前の由来は？

「知らん」

3・あなたの性格は？

「さて、どうなのだろうな？ 自分では研究者であり知識がほしい

と喚く子供のようにであり、といった所だと思っが」

4・生年月日は？

「6月の16日」

5・何歳ですか？

「異世界暮らしも含めれば軽く数万といった所だ。恐らくまだ伸びるだろうな」

6・兄弟、姉妹は居ますか？

「居ないな。少なくとも私の知る限りは」

7・好きな人は居ますか？

「ナイア、アザギ、母、父、ハヴィラック、プロト、白兔、見守、クト、クトウグア、アブホース……それと、前世の妻と弟子たちだ」

8・どんな人？

「皆々明らかにおかしい私などを気にかける妙な奴等だ。そこに救われているのも事実だが」

9・へえ、今度会わせてくださいよ。

「好きにすればいいだろう？」

10・冗談です。

「そうか」

11・嫌いな人とか居ます？

「研究の邪魔をするモノは皆嫌いだ」

12・どこが嫌い？

「存在しているという現在存在していたという過去存在しえるという未来存在するという事実存在するかもしれないという可能性全てが気に入らない」

13 .好きな食べ物は何？

「甘い物も辛い物も苦い物も皆嫌いではないぞ？ 特に辛い物と甘い物が」

14 .嫌いな食べ物は何？

「母が作っているところぐたまに出来上がる解析しても毒性は無いという結果に落ち着く食物兵器」

15 .癖とかありますか？

「視線を向けると解析の魔眼を発動してしまうこと」

16 .口癖は何？

「さて、だな」

17 .寝癖は何？

「つかないしついたこともないな。いつも真っ直ぐだ」

18 .幼馴染みは居ますか？

「ああ」

19 .その人は大切な人ですか

「そうだな」

20 .苦手なものは？

「女装だな。あれは駄目だ」

21・特技は？

「高速思考、多重思考、暗算、高速演算、脳内シミュレーション、
etc.etc……」

22・趣味は？

「研究と知識の収集」

23・自分は実は だ。

「ロマンチストだ。なかなか信じるものは居ないがな」

24・へえ、そうなんだ。

「ああ」

25・そろそろ終わりですね。

「そうか。ならば早く研究に戻りたいのだが」

26・このバトンを誰に渡しますか？

「渡す相手など居るのか？ ……ああ、ならばナイアで頼む」

27・最後に自分に向かって一言。

「む？ 私自身にか？ ……うーむ……………」。

焦るな、驕るな、妥協するな」

28・お疲れさまでした。

「ああ、お疲れ。私は研究に戻るとするよ」

と、言うことでフルカネルリさんでした。お次はバトンを渡された

ナイアさんです。

Q1 貴方の名前は？

「ナイアルラトホテプ。ナイアでいいヨー」

Q2 名前の由来は？

「わかんないかナー」

Q3 貴方の性格は？

「面白さ最優先の享乐的なのだネー」

Q4 生年月日を教えてください

「マイナス何億年の……いつだロー？」

Q5 何歳ですか？

「時間移動分含めれば京単位。含まなければ十億単位だ」

Q6 兄弟、姉妹はいますか？

「いないヨー」

Q7 好きな人は？

「フルカネルリかナー」

Q8 どんな人？

「ボクの予想をことごとく外してくれるビックリ箱みたいな人かナー？ しかも開けるたび中身が変わるようなのでサー」

Q9 へえ、今度会わせてくださいよ

「さっき会ってたよネー？」

Q10 冗談です

「……あっソー」

Q11 嫌いな人とか居ます？

「嫌いつていうか苦手な相手だったらいるヨ」

Q12 何処が嫌い？

「……純粹すぎて隠し事とかするとこっちの心が痛むところかなー？」

Q13 好きな食べ物？

「美味しければ何でも食べるヨ」

Q14 嫌いな食べ物は？

「美味しくないものかなー？ 曖昧でごめんネー？」

Q15 癖とがあります？

「キレると口調が変わるらしいヨ」

Q16 口癖は？

「語尾を伸ばしちゃうことかなー」

Q17 寝癖は？

「寝言でニヤンコニヤンコ言ってたことがあるらしいけどー？」

Q18 幼なじみはいますか？

「クトウグアトー、クトちゃんトー、アブホーストー、ヨグソトストー、ノーデンストー、ハスタートー、ヨグソトストー、ツアールトー、ロイガートー、シュブ・ニグラストー、ツアトウグアトー……

（以下、数百に及ぶ名前が出てくるのでカット）」

Q19 その人は大切ですか？

「みんないい友達サー。苦手なものもあるけどネー」

Q20 苦手なものは？

「……本編に出てないカラー、ナイシヨー」

Q21 特技は？

「変身だネー」

Q22 趣味は？

「フルカネルリの観察だヨー」

Q23 自分は実は○○だ

「邪神だヨー。知ってると思うけどネー」

Q24 へえ、そうなんだ

「そうサー」

Q25 そろそろ終わりですね

「そうだネー」

Q26 このバトンを誰に渡します？

「ソー、それじゃあまた今度、ヨグソトスにネー」

Q27 最後に自分に一言

「楽しんで生きて行こうヨー！」

Q28 お疲れ様でした

「はいお疲れー」

こんな感じでした。

ちなみに真暇の下らない目標とは、一日の話別PVで十未満のものを
出さないことです。

……ようやく、最低が13に……。

異世界編 2・4 (前書き)

ゆっくり更新していきます。

フルカネルリだ。他の大陸からの人口の流入も緩やかになり、三万人程度で落ち着いた。これからは増えるとしてもじりじりと増えて行くだけになるだろう。

確かにこの世界は広く、存在している生物の多様性もかなりの物になるが、ああいった外れ者達が無限に存在するかと言えばそれは違うわけだ。

……まあ、一時的にいなくなってもまた何らかの要因で誰かが外れ者になるのだろうが。

「……人間つてえ……やあねえ……？」

《人間以外でも同じようなもんだヨー。特にこの世界ではネー》
やれやれ。救い難いな。

一応、私は全員の顔と名前を覚えている。そして恐らく私に直接会ったこの大陸の住人達も私のことを覚えているだろう。

《覚えてるっていうかなんかキミはミモリの神の唯一の巫女みたいな目で見られてるヨー？》

……まあ、そう見えるように行動したのは私だし、構わないだろう。

「……表情と言ってることがあ……矛盾してるわよお……？」

そうだろうな。私は女扱いされることにはなにも思っていないが、そのせいで私の動きの邪魔をすることになるようなものは大嫌いだからな。

今回で言えば、巫女だという理由で私に何らかの制約を求めてきたり、私を通して見守を利用してしようと近付いて来たりするのが鬱陶しい。

利用しようとするのは全く構わないが、それをばれていないと思

てるも自由という状態で放置するもよし、死なずに新たな幸せを見つけ、それに溺れた所でそれを奪ってやるもよし　などと考えたことだろう。

……うむ。やはり私は優しくなったな。今ではこの程度しか浮かばない。

『……実行はあ……しないのお……？』

しない。態々そんなモノのために時間を割いてやるなど馬鹿のやることだろう。

《フルカネルリってサー？　意外にかなりドSだよネー？》

五月蠅い。酸性霧を吸い込み続けて肺から溶けて死ぬ。

《久々に聞いター！？　そしてやっぱり超絶的に痛い死に方ダー！？》

そうだな。

《……こついうのを普通な思い付くからドSだって言われるんだヨ
ー》

五月蠅い。頭頂部から少しずつピーラーで剥かれて揚げられナイアチップスになって死ぬ。

《食べるやついないよそんなノー！？》

そうか。どうでもいいな。むしろそのまま腐り果てる。

《うわーん！》

ナイアは泣きながらどこかへと消えていった。

……まあ、放っておけば勝手に帰ってくるだろう。

……さて、例の呪いを実行するか。

そのあとほんとに実行しちゃったフルカネルリ。

フルカネルリだ。ハヴィラックとプロトをこの世界に作り上げた。体を作った後に記憶をインストールするだけだったのもとても楽しかった。

《二人ともまだまだ子供だけどネー》
そうだな。

ハヴィラックは前の世界でもやってきたように私の世話を焼く。私より身長が低いのに背伸びをして私の世話をしようとしているのは、見ていてほほえましい。

ちなみにプロトは今回は始めから女として作ってみたのだが、今までも何度か女になっていたこともあって平然としていた。

《なんとというカー、二人とも苦労してるネー？》
私と同じようにな。

そして二人に魔法を教えているのだが、その際に常識を破壊すること一番苦労している。

今まで科学が異常に発達していた世界で育ってきたのでそんなものがあるわけがないという下らない固定観念が二人のなかにあった。

そこで目の前で魔法を使い、それについて説明を繰り返し、何度も何度も固定観念と常識と偏見を破壊しつくしてようやく二人は魔法を使えるようになった。

魔法の存在を受け入れてしまえば二人の成長は早く、次々と魔法を覚えて行く。

私はそんなとても優秀な二人に分かりやすく魔法を教えることができるよう、魔法についての研究を続けていた。

この世界の魔法は世界に満ちる魔力のうち、自分に相性の良い属性の魔力のみを体に溜め込み、その属性に合った魔法を使うことがで

きる。

しかし、あまりに溜め込む量が多すぎると体を壊したり、精神を病んだりすることが多いらしく、あまりまとものはいないようだ。そして溜め込んだ魔力を使いきり、自分の体に最低限必要な魔力まで使ってしまうと……まあ、死ぬ。

……と言っても大抵は使いきる前に頭に激痛が走り、使いきらないように体が勝手にセーブするようだが。

《ちなみにこの世界の魔力はそうだって言うだけの話デー、他の世界の魔力や魔法は違うかもしれないヨー》
そうか。

……まあ、魔法についてはそんなところだ。

ハヴィラックとプロトが魔法を使えるようになってからしばらくして、家の周囲の樹海で起きている獣達の縄張り争いに参加することにした。

このままでは私の住むところもどこかの獣の縄張りに入ってしまうような気がしたからだ。

獣達は大きく分けて七種。

火の属性の赤いもの、水の属性の青いもの、土の属性の灰色のもの、風の属性の緑のもの、闇の属性の黒いもの、光の属性の白いもの、そして純粹な魔力そのものである無属性のもの。

ちなみに見守の神は島の中心を支配する無属性の一番大きなものであったりする。それに合わせて無属性の獣は島の中心に集まっている。

まあ、このまま放っておいても見守の力で手は出さねいだろうが、気分が悪い。

と、言うことで六種の獣の中でも強力で大きな領域を持っている六体を……ふむ……調教して支配下に置き、そのあとはそれぞれ支配領域を決めて放置する。

青は湖の沿岸、赤は中心と外側を除いた部分を五等分した北側、灰

色は同じく東側、白は西側、黒が南東、緑が南西でその境界に少しずつ中立の部分が存在するように分けた。

今ではとても平和に弱肉強食の野生的な状態が罷り通っている。

《……それは平和なのかナー？》

平和じゃないか。とても普通で当たり前前の状態だよ。

『……そうよねえ……』

ソレはいきなりやって来て、私達の中で一番強いものを叩き伏せた。私達、白い結晶獣は体に光の力を宿し、高速で移動することによって相手の反応できる速度を越えて行動できるはずなのに、ソレはそんなことは関係無いと私達の中で一番速く、一番強かったものを更なる高速で追い詰め、あつという間に地に這いつくばらせた。

その瞬間から、私達の群れはソレの支配下になった。

ソレはそれまでも私達の同族を纏めていたようで、ソレについて行くと私達と同じ、白の体を持つ結晶獣が大勢いた。

そこでソレは私をこの大きな群れの頂点として、一ヶ所に纏まった巨大な縄張りを用意してくれた。

ソレは私達にその中から出ないようにと言い、姿を消した。

それ以来、私はこの大きな群れの中で頂点として君臨している。

ただ、他の色の獣達も居るのであまり大きな顔はできないし、私より上にはあの存在がいる。

この島のすべてを掌握しているのに、私達に自由を与えているあの存在が。

……しかし、なぜだろうか？ 私は……いや、私達は、あの存在に出会うと、確かに安心感を覚えるのだ。

白い結晶獣の長、白く長い尾を持つ鳥の姿の、^{はくび}白尾、の独白。

その御方が現れた時、我々は本能的に悟った。

この御方こそ、我々がお仕えする方だと。

私を初めとするすべての赤い結晶獣は、全く同時にそれを理解し、そしてその御方に頭を垂れた。

その御方は我々を率い、ばらばらになっていた小さな同族の群れを集めて、一つの広大な土地を与えた。

そこには我々の好む赤い樹が多く、我々が宿す炎の力を強くした。しかし、その力で何をするかと思えば、何もせずに生きることが望む。

あの御方からは、炎以外にも様々な臭いが残っている。

それは我々と相性の良い緑の臭いもあれば、あまり良くはないと言える青の臭いもある。

恐らくあの御方は、我々以外にもこのように広い縄張り、自由をお与えになっているのだらう。何をお考えになっているかはわからないが、我々はその御方について行こう。

……この世界が滅び、我々が死に絶えるその時まで。

赤い結晶獣の長、赤く長い牙を持つ、^{せきが}赤牙、の独白。

《……まあ、こんな感じでフルカネルリはこの島を実質的に支配してるのサー。白い子が安心感を覚えてるのは、体の大半を形作る結晶の殆どがフルカネルリの魔力でできているからだヨ。つまりお母さんみたいに思われているのサー》

『……赤い子はあ……炎神の加護の効力が強くってえ……勝手に従属してるのよお……』

《わかったかサー？》

異世界編 2・6 (前書き)

遅くなりました

フルカネルリだ。結晶獣を研究しているのだが、面白い特性を見つけた。

《何々なんなノー？》

うむ。どうやらこやつらは、死体になった同族を食すとその知識や力を引き継ぐことができるようだ。

『……へえ……代替わりに……便利ねえ……』

《つまりー、擬似的な転生が出来るわけだネー？》

そういうことだな。

……ちなみに、異なる種族のものが食してもあまり受け継がれず、下手をすれば対消滅してしまうようだ。

《危ないナー。それはあの子達もわかってるんでショー？》

本能で理解しているらしく、けして口を付けようとはしていない。

『……凄いわねえ……本能って……』

そうだな。

この島の獣はどうやらこの世界で最強に近いようだ。恐らく龍種でもそう簡単には負けはしないと思われる。

……と言つのも、最近この島に降りてきた龍を獣たちが排除したのだが、その時にとても簡単に潰すことができたようだ。

降りてきたところで仲良く散歩をしていた赤と白の小さな獣がそれを見つければ、とりあえず見たことがないので攻撃してみたらしい。

ぱんっ、と簡単に弾け、拍子抜けしたところで親に見つかり、こっぴどく怒られたそうだが。

その時に島中に広がる魔力の根から入った映像を見ると、それはどう見てもドラゴンだった。

まあ、知識はなさそうだったのでたいして強くはないのだろうか、

それでも龍種は龍種。それなりに強いのだろう。

……少なくともこの世界においては。

そしてその龍種を殺した事により、この島に新しい情報が入った。龍種が存在する、ならば、ここに龍種がいてもおかしくはない。

……この島の生態系は、基本的に私の意思に依存している。

私が望めば全ての獣は形を変えるだろうし、私が認めなければその存在は姿を消すだろう。

そして私の中に新たな常識が刷り込まれれば、生態系はその姿を変える。

……つまり、それぞれの色の獣を統べる長達の姿は、私の思う強者へと変わる。

即ち、龍種へと。

《いきなり自分達の姿が変わるっテー……ビックリだねー》

『……ふふふふ……そう、ねえ……』

確かに。私も産まれたときに女と言われて驚いた覚えがある。

水色の水晶のような色だった鱗が深い青へと変わり、分厚く、強靱になる。

体そのものも巨大になり、イルカ程度の大きさだった体は大型の鯨ほどまでに膨らんでいる。

牙は長く、太くなり、顎が大きくなるにつれて数が増えて行く。

元々水中での活動に特化していた体は、更に進化する。

そして、その変化が終わったときにそこに居たのは、巨大な一体の水龍だった。

水中での活動に支障が無いようにとその体は美しい流線で作られており、硬質そうに鈍く輝く鱗の下にはしなやかな筋肉が存在してい

ると言うことが手に取るように理解できる。

元々の形が大蜥蜴であるために翼は存在しないが、あったとしても完全に退化していることは間違いないだろう。

自らの体がいきなり変化した青の結晶獣だったそれは、思い切り、天に向けて咆哮した。

ビックリしすぎな青の結晶獣の長、青の鱗に包まれた、青鱗、せいりんの変化。

元々全身が岩の塊のようだった黄色の獣の長は、自分の体に起きた変化を何でもないかのように受け入れていた。

元々長かった爪が更に長く太く、強靱になっても、ああ、伸びたな、程度にしか思うことはなかった。

流石に全身が巨大化した時は驚いたようだが、それでもすぐに受け入れて自分の巣である地中の空間を拡げる事に精を出していた。

全身を覆っていた黄色の結晶はまるで鎧のように更に重厚になり、一部の隙すら許さないと云うかのように前後の足や口内、瞼すらも覆って行く。

それはまさに城塞と言つに相応しいほどの鉄壁だった。

……しかし、当の黄色の結晶龍は、巣を拡げ終わると何事も無かったかのようにその目を閉じて、眠り始めた。

逆に落ち着きすぎな灰色の結晶獣の長、黄色の甲殻の、黄甲、おうかうの変化。

《ちなみに黄甲がこんなに落ち着いてるのはボクの影響が強いせいだヨー。近くにボクが居るから安心してるのサー》

……ふむ、青鱗が落ち着いていないのは、自分以上の強さを持つ同族がいないからか？

《だと思っヨー》
そうか。

フルカネルリだ。龍化した獣達に異常がないか勝手に調べてみたのだが、特に異常らしい異常は確認できなかった。精々がいきなりの強化に龍達が戸惑っている程度のものだ。

《十分じゃないかナー？》

そうか？ 大したことでは無いと思うのだが……。

『……大したことだと、思っけれどねえ……？』

この世界の創造神だが、どうやら新たに信仰を得て再生したらしい。しかしそれでは私はおるか見守にすら勝てない程度の力しか持てないようで、あれほど偉そうにしていたのが嘘のようにおとなしくなった。

……最初からこうしていてくれたなら、もう少し穏便なやり方もとれただろうに。

まあ、それも今だからこそ言えることだな。

ちなみにその信仰の殆どは見守に行っている。その神が得ている信仰は、外典や曲解された少数の信仰のみだ。

……その無理矢理さを理解できるこちらとしては、よくもまあ復活できたものだと半ば感心している。

復活の折り、こちらに手を出さなければなにもしないことは明言しているため、向こうから何かをしてくることは恐らく無いだろう。

『……ううん……どうかしらねえ……』

《アレからは無くなってモー、アレの作った人間は何かしてくると思っけどネー？》

まあ、その時はその時だ。戦は許さんしこの島に入ることも許可しないが、個人個人が外側の大陸に永住を決めたりするのは一向に構わんぞ。

見守の神はその名の通り、全てを見守る神だからな。

《自分の平穩のために自分の目の届かないところを滅ぼしてもなんにも思わない神様らしい神様だけどネー》

お前はどうかんだ。

《ボクは一周回って楽しければオツケーなとつても神様らしい(邪)神様だけドー?》

ああ、なるほど。

久しぶりに住処である大樹の洞から外に出る。

小さな小さな体であると正典に刻まれている私は、他の結晶獣の長たちと違って体のどこにも結晶らしいものはなく、そして体も小さいままだ。

……考えるときにはこうしてちゃんとしているのに、

「なぜなぜ、口に出しゅとこうなるのでしょうか?」

眩しいので瞼は閉じたまま、くりつと首を捻って考える。

しかし、すぐに考えるのをやめる。

「まあまあ、考えてもわかりましえんし、また寝ましゅか」

太陽の光を体にたっぷりと浴びてから、さっさと自分の巣穴に戻る。無色のガラスのような質感でありながら柔らかなクッションのようでもある大樹の葉に体を埋め、丸くなる。

沈黙がその場を支配し、そしてすぐに幽かな寝息が聞こえ始めた。

舌っ足らずで面倒臭がりな見守の神、二度寝開始。

「……ふふふふ……みんな、元気ねえ……」
アザギは黒の結晶獣の領域に居た。

普通ならばここまで来る前に襲われるのだろうが、アザギは元々悪霊であり、そして闇の気質の強い事が幸いしてここまで何にも邪魔されることなく移動することができた。

がさり、と音を立てた黒い茂みに、アザギは目を向ける。

「……あらあ……やっと出てきたわあ……」

そこには、大きな黒い馬のような結晶獣が居た。

それはアザギを警戒している目で見つめながら、じりじりと下がって行く。まるで、圧倒的に力の離れた化物から逃げようとするかのようだ。

「……いや、正にその通りなのだろう。」

アザギは今でこそ穏やかだが、下位とは言え神を食い潰し、そしてその神に乗っ取られるような事も無く存在し続ける事ができる、力だけならば中位の神にも匹敵する化物なのだ。

「……ちなみに、ここの世界の創造神は中位に片足突っ込みかけて失敗しているギリギリ下位の神だ。」

つまりアザギはこの世界を作り上げた神よりも力だけなら上位になる。

「……ナイア？ 最上位に極限まで近い上位神だ。最上位には友神であるヨグソトスや先生であるアザトースがいる。」

もちろんクトやクトウグアもナイアと同じ位置に存在している。

そのような化物じみた力を持つアザギは、そうとは全く思わせない笑みを浮かべて黒い獣に囁いた。

「……逃げちゃあ、駄目よあ……？」

たったそれだけで、じりじりと下がっていた足が止まり、まるで地面に縫い付けられたかのように動かなくなった。

「……良い子、ねえ……」

アザギは動きを止めた黒い獣にゆっくりと近付き、その頭を撫でた。

「……あらあ……寝てるのかしらあ……？」

そう言つてアザギが撫でるのをやめると黒い獣はどさりと倒れ、泡を吹き始めた。

「……仕方ないわねえ……」

アザギは面倒くさげに呟き、その場を離れていった。

「……ふふふふ……次は、どんな子が出てくるのかしらねえ……」

「

自分が怖いせいで相手が気絶したとは一切考えないアザギの散歩風景　～最早いつもの事～

フルカネルリだ。面倒な事に、この世界にいきなり現れた私達とこの大陸を支配しようとする魔王が戦争を仕掛けてきた。実に面倒臭い。

《で、どうするノー？》

うむ。とりあえずこの大陸の周囲に私達に敵意を持つ存在を通さない結界を張る事にした。球形に張るので上空や地下、海中から来たとしても安心だ。

もちろん知能が低く、敵意などを持つことはできないが害を成そうとするものも通り抜けることはできないし、一時的に記憶や感情を操作して通り抜けたとしても内側で何らかの害意のある行動をとれば直ぐ様私達の住んでいる中心の島に飛ばされるようになっていいる。ここで（無いとは思うが）濡れ衣だと判明すれば何もなく大陸の元居た場所に転送されるようにした。

濡れ衣でなければ、周囲の獣達に食われて終わり。

《えげつない結界だナ。外側から入ろうとした時の効果を秘密にしてるあたりフルカネルリ自身がえげつないヨ》

五月蠅い、核融合炉に飛び込んで青い光に包まれて死ぬ。

《炉心融解！？ 何で知ってるノー！？》

『…………アレグロ・アジテート…………』

《そしてキミも何で知ってるのサー！？》

アザギだからな。

…………魔法の研究を続けている中で、一つ気になったことがある。

それは、魔力を体に通すことによる簡単な肉体強化の魔法についてだ。

……………簡単と言っても発動するだけならばと言う意味で、体内に魔力を通す順番や経路、質、属性、回路の個数等によりかなり効率や

付加能力が変わってくるのだが、それこそ使っただけならば何も知らない子供でも無意識に使っている事もある程度の難易度だ。

細かいことは省くが、私がそれを使って体を強化した後、強化を解除したら身体能力はどうなるかという疑問だ。

……何を馬鹿なことを言っているのかと思うだろうが、思い出して欲しい。

私には、下限値固定という能力があるのだ。

これによって強くなった体はその時点より弱くなることが無くなるわけだが、魔力によるドーピングとも言える肉体強化で強くなった分はどうなるのだろうか？

《強化を切った後も下限値固定で強化された時と同じ身体能力になるヨー》

……それは、例えば純粋な硬化魔法で肌を鉄板並に硬化した後、後に切っても同じか？

《そうだヨー。その場合は普通に肌が鉄板みたいに固くなったまま肌として機能するヨー》

……恐ろしいな。下限値固定。

《さらに言っちゃうと強化した場合、その強化率が今までの成長率を上回っていけばそれも固定されるヨー》

……恐ろしすぎるな。下限値固定。

鍛えられないはずの場所もかなりの強度になりそうだ。

『……今でも、眼球で8ミリ弾頭位ならあ……止められそうだけどねえ……』

《いやいやー、強化で一気に強くなってるからー、13ミリのゼロ距離ぐらいだったらなんとかなると思うヨー？》

そうか。もうそんな所まで私の体は行ってしまったのか……。

《実は前の世界から帰ってきた時にはもうできるようになってたと思っヨー》

強化ありならばあの頃でも出来ただろうな。今ならなしでもできるだろうが。

《衝撃を感じるだけで痛くも何ともないはずサー》
だろうな。十分想像できる。

ある日を境に巨大になった体を風に任せ、いつものように島の上空を飛ぶ。

海の果てに多くの船とさらに多くの私達とは質の違う魔物が見えるが、あの御方が張り巡らせた結界を通り抜けることができずに立ち往生している。

始めに来た時は、何度も結界に攻撃を繰り返しては反射した自らの炎に焼かれ、氷に貫かれ、風に刻まれて居たのだが、今では学習したのかそうだったことは起きていない。

……ただ、いまだに知識を持たない者は体当たりをしては消し飛ばされている。

……ふう、と溜め息をつき、私は広い空に身を踊らせる。この大陸から離れると体が脆くなるが、それでも結界の内側ならば全く変わることはない。

しかし、結界の外とは言え私の空に羽虫が飛び回っていると言うのは気に入らない。

風に語りかけ、外の空を舞っている羽虫の羽を切り落とす。障壁が何かがあると思ったのだが、あっさりと切れてしまったことにこちらが少々驚いた。

……まあ、あの御方ならば、叱りはしないだろう。

そう思いつつ、溺れそうになっているもののうちの三体を拾い上げ、あの御方の元へと運ぶ。

ぎゃんぎゃんと五月蠅かったが、声が届かぬように大気に振動を禁じてやっただけならすぐに静かになった。

さあ、これを運んだら散歩に戻るとしようか。

毎日風で光学迷彩をかけながら空中散歩をしている緑の翼が雄
大な「緑翼」の宅急便。

異世界編 2・9 (前書き)

新しく東方小説を見切り発車いたしました。本当に暇な方はどうぞ五話ぐらいまで増えてからお読みください。

フルカネルリだ。魔王の軍勢は結局二月ほど粘ってから帰っていった。恐らく食料が切れたか結界が抜けられないと諦めたかのどちらかだろうが、何もせずに帰してやるほどこの島の住人達は優しくはなく、空を飛ぶことのできるものは空から、水中を移動するものは水中からそれぞれ数発ほど攻撃魔術を撃ち込んでいた。

ちなみに私は緑翼の持つてきた研究対象を解析し解体し分析し分解し物理的に科学的に魔法的に生物学的に理解するのに忙しかったため参加はしていない。

《それがなかつたらどうしてたノー？》

無論何匹か研究対象を捕まえるために参加していたとも。

少々不便を感じたので、見守の住む大樹の近くに湧き水を用意した。ここからこの島に川という形で水が供給されるだろう。

赤い獣達も水は飲むだろうし、無駄にはならないだろう。

そして私はそこから水を汲み、三人分の朝食を作る。朝は軽めに簡単なトーストと目玉焼きとレタスサラダ。ついでにベーコン。

《ここまで来たらトマトが欲しいナー？》

あるぞ。

《あるノー！？》

ああ、ある。

……また今度にBLETサンドでも作ってみるか。

八ヴィラックだが、あの異常に科学の発達した世界で生まれ育つたためかアナログな料理が苦手なようだ。

掃除と洗濯はそれなりに出来るのに、何故料理だけが苦手なのかは理解できないが、そういうこともあるのだとあまり深く考えないで

おく。

……火力の調節が今後の大きな課題だな。

しかしプロトと組んで片方が火力調節を、もう片方が調理を担当すれば一気に良くなるだろうに、何故やらないのだろうか？

《台所には一人で立つものっていう固定観念でもあるんじゃないノ
ー？》

ああ、それはあり得るな。今度それとなく言ってみることにしよう。ちなみにプロトは地味な仕事が入っているようで、いつも鼻唄まじりに外を掃いたり家庭農園の雑草を抜いたり水をやったりたまに遊びに来る小さな獣達と戯れていたりするようだ。

この世界で作る時に、その体にしっかりと魔力の器を付け加えたり、肉体を基本的に強靱にしたりという事はしているので、まだ小さな獣を相手にするだけならば平気だろう。

……と言うか、平気であるように作ったのだからそうでなければ困る。

影から影へと渡り、その先に奔めく我らが敵を蹴り飛ばす。

あの御方に名を頂く事になり、あの御方が目をお付けになった我が蹄。それで死ねるのだからまだ幸せだろう。

……少なくとも、緑翼や白尾に一方的に攻撃を受け、なにもできずに死んで行くことや青鱗に水中に引きずり込まれて水圧でじわじわと潰されて行く事よりはまだマシなはずだ。

我は一応姿は見せているし、攻撃も届く距離に居る。ただ、常に己の影を島に直結しているためにこの世界のどこでも力の減衰が無い程度だ。

横から飛んでくる魔法を蹴り飛ばし、影を通っていまだに呪文の詠

唱を続けている者達の後ろに。そして頭を蹴り飛ばす。

十数秒の詠唱で発動するにすれば弱すぎる魔法を掻き消された程度で狼狽していた魔術師達は何もできずに蹴り飛ばされて行く。

………そろそろ、次の船に移るとするか。

我は影に飛び込み、一番近くにあった船へと転移した。

自分も他のと大して変わらないことを自覚していない黒の結晶獣の長、黒の蹄の「黒蹄」の使う殲滅方法。

………転移魔法か。なるほど、研究して術式を組み替えてやれば時空間移動や平行世界への移動も可能になりそうだな？

フルカネルリは、黒蹄の使っていた魔法を覗き見て、とても嬉しそうに呟いた。

異世界編 2 - 10 (前書き)

不意打ちします。

フルカネルリだ。実験動物から

「殺して」

という台詞が出たので、

「ならば貴様等の居た大陸に進行し、新しく拾ってこなければなら
ないな」

と言ってやったらさらに酷い顔になった。

「……外道枠は、私のはずんだけどねえ……?」

私は基本的に研究のためならばある程度外道で非道で邪道な事もや
って見せるぞ?

《知ってるヨ》

この世界の言語は、文法は英語に良く似ているが文字は平仮名のよ
うに一つの文字に一つの発音が存在するという奇妙なものだった。

まあ、神位共通言語よりは複雑でも無いし、覚えるのも発音するの
も話すのも簡単にできた。これで前にここに人を呼んだ時のように
意思から意味だけを抜き出して相手に直接送り込むといった面倒な
ことをしないで済む。

……神が面倒臭がったのかこの世界の言語は1つだけと言うのもわ
かったし、あの実験体には感謝だな。

家庭農園だが、周囲の森と同じように結晶化してしまった。

食べられるのかどうか心配だったので解析してみたのだが、魔力を
多く含んでいる以外は普通の野菜や穀物と同じだったのでプロトに
収穫を頼んで、私は魔法式の冷蔵庫を作った。氷雨の服に刻まれて
いた術式を魔法に応用するだけだったので簡単にできたのだが、内
容量が少ないので今度から中身を広げる魔法を組んでみようと思う。

恐らく空間転移の術式からスタートするのが速いだろう。

《科学ならもうできてるのニー、何でわざわざ魔法で作ろうとするのサー？》

簡単に答えると、作るのはついでで研究をして新しいものを見つけただけだ。

《ふーん、そっカー》

ああ、そうだ。

……さて、プロトも帰ってきたことだし、料理を始めるか。

火力の調節に魔法は便利だ。加護もあるために妙に使いやすい。

《魔法もそういう使い方だけだったら平和なのにネー》

『……ほんとにねえ……？』

そうだな。まあ、無理だと思っが。

……おっと、炒飯が焦げ付いてしまっ。

初めて違う世界で生まれて、魔法なんていう物を教えてもらって、そして初めて見る自分とハヴィラック、そして母親であるフルカネルリ以外の生物との触れ合いに、彼女　プロトは喜んでいた。

自分にじゃれついてくる赤い小さな獣を撫でたり、抱き上げてみたりと色々なことをしてみた。

それをフルカネルリは微笑ましいものを見る目で見ていたがそれには気付かず、プロトは生命に満ちる世界のなかでできぱきと働いた。前の世界ではやろうとする前に機械が勝手にやってくれたので発揮されることは無かったが、プロトもハヴィラックと同じく世話好きだった。

この世界でもフルカネルリの世話はハヴィラックが主体で行っているため、プロトが世話するのは必然的にフルカネルリ以外の相手

になる。

例えばそれは今している畑だったり、たまに遊びに来るようになった小さな結晶獣達であったりと様々だが、プロトはその事を心の底から楽しんでいた。

「さて、今日もいい天気だし、畑の雑草抜かないとな」

くっ、と背中を伸ばしてからプロトは前の世界でも着ていた服を仕立て直した物を着て、のんびりと太陽の下へと歩いていった。

フルカネルリの子、超科学の産物、プロトの日常。

フルカネルリだ。この世界に元からある大陸にはそれぞれ上位精霊達が住んでいるらしい。四大の火、水、風、地の四体。それぞれに意思と性格があり、仲の良い悪いもあるようだ。

《……解体するノー？》

してみてもいいのだが、そうするとこの世界が崩壊するような気がしてならないからやめておくさ。

《賢明だヨー。ここの神の力が弱ってる今、精霊達まで弱ったら大変なことになるだろうからネー》

やはりそうか。あの神が魔王なんてものをほったらかしにしていたからおかしいとは思っていたのだが、見守りに信仰と神格を食われて以来、自分の作ったものよりも弱くなってしまったのだな。

魔法と科学を組み合わせる魔法科学を作ろうとしているのだが、これがなかなか面白い。

科学にも穴がある。それは、けして物理法則という壁を乗り越えることができないということだ。

しかし魔法は物理法則とはまた別の法則によって規定できるので、科学とうまく重ねてやれば魔法の穴と科学の穴をお互いが上手く埋めてくれるのだ。

とは言え、魔法もものによっては物理法則に依存しているものもある。

例えば炎を出す魔法だが、寒い所と暑い所では難易度が随分違ってくるし、空気の乾燥具合によってもまた変わる。

それとは逆に純粋な肉体強化等は魔力をただ流せば良いので物理法則ではなく魔法法則に依存する。魔法法則は基本的に精神論になるが、魔力自体が多分に精神的な要因で創られているためにそれはあ

る意味当然とも言える。

しかしこの世界には魔力そのもので物質を破壊できるという事実が存在するのだが、私は恐らくこの世界そのものが神の奇跡、つまり魔法で創られているからだと考える。

それならば創造神が自分の作り出した世界のものに絶対的なアドバンテージを持つかも理解できるし、力を失うと反乱などが起きると言う事もわかる。

自分の魔法をある程度操れないものは早々居ないし、力がなくなればその操作に荒が出るのも当然だと言うことだ。

……つまり、アザギはこの世界ならばわざわざ実体化しなくても物に触ることができるといふ事だ。無論触ろうとしなければすり抜けすることもできるだろうがな？

《何で魔法科学の話からこの世界の作り方にまで話がずれるのかはわかんないけど、その辺りを思考実験だけで導き出しちゃうフルカネルリは人間としてどうかと思うヨー？》

五月蠅い、音楽を聴こうとしてイヤホンをつけたらいきなり大音量で流れてきたジャイアンの歌に脳を揺らされ発狂して死ぬ。

《長い上に面倒な上に発狂までするノー！？》

この大陸に住む者達には、とある不文律が存在する。

まず始めに、相手の過去を詮索しない。これはフルカネルリが集めた者達がこの世界のみだし者であることに由来する。

誰しも知られたくない過去や、言いたくない情報、思い出したくない記憶を持っているのだ。

次に、けして盗賊行為は行わないこと。これを破った場合、確実にその者に呪いが降りかかると言うことをこの大陸に来た時に見守の

巫女に直接注意されているからだ。

そのためこの大陸では非常に横の繋がりが強く、家と家、村と村、町と町が争うことなど滅多にない。

子供の喧嘩や意見の相違によるぶつかり合いは多発するが、お互いに殺し合うことまで発展することは皆無と言ってもいい。

……周囲の大陸から見ると信じられないだろうが、この大陸はあまりにも平和だった。

そして、フルカネルリに直接呼ばれ、この大陸に住むようになった者からは、この大陸はこう呼ばれている。

「この大陸は、まるで異端の楽園のようだ」

フルカネルリの知らない大陸事情。

「ふふふふ……瑠璃はねえ……知らないんじゃあ……無いのよ
お……？ ……ただ、気にしてないだけで、ねえ……」

異世界編 2・12（前書き）

何故か今回の異世界旅行は異様に長くなりそうデス……具体的には
まだ不明ですが、五十話くらいは行きそうな勢い……
何がどうしてこうなった……

フルカネルリだ。私の周囲で知りたいことはほとんど理解してしまつたし、旅に出ることにした。無論この大陸の結界や見守はそのまま残しておくが。

《キミの好きにするといいヨー》

『……………わたしたちはあ……………瑠璃に、ついていっただけだからあ……………ねえ……………』

そうか。

とりあえず鳥を出るのに空を飛ぶ。前にここの神に落とされた時のような無様なものではなく、ステルス、光学迷彩、魔術迷彩、ソニックブームの抑制、重力軽減、認識阻害……………等、様々な効果をつけた物だ。

苦労したのは限界まで無駄を無くすために大気摩擦やそれによって発する熱と空気の振動を無くしたことだ。

それによって副次効果ではあるが、かなりの消音と高速化が実現された。

……………飛んでいるときに鳥を何羽か捕まえて解析、解体、修復、丸焼きにしたが、問題ないよな？

《ボクにも一羽ちょうだいヨー》

『……………ふふふ……………胡椒だけっていうのも、良いわねえ……………』
そうか。……………ほら、できたぞナイア。

《ありがトー……………むぐむぐ……………ウマー！》

……………ちなみにハヴィラックとプロトは留守番だ。魔法的にも強化したため、確実に長命化したし老化も遅くなったのでしばらく帰るつもりはない。

……………さて、この世界にはどれ程の謎が存在しているのやら？

とても、楽しみだ。

そう思いながら私は一番近くに存在した大陸の一番端に降り立った。その大陸の名はエインハルトと言うらしい。どこへ行くか等全く決めていなかったため人に会うまでしばらく時間がかったのだが、出会ってすぐに解析で知識を読み取って情報を得た。この大陸の概形や地理も理解した。

……まあ、この男の知識が外れていなければの話だが。ついでに言うところは随分と田舎の方で、こんなところに来るのは流刑にされた罪人ぐらいなものだそう。つまり、私の銃の初仕事という訳だ。

……情報を握られれば私などすぐに殺されてしまうだろうから、見ていたものは私の研究の役に立ってもらおうとしよう。

合成獣を作ってみたいと思っていたんだ。ちょうどいい機会だし、実行してしまおう。

だが魂は要らん。アザギ。

『……ふふふ……いただきまあす……』

私が頭を撃ち抜いた男の魂は、嬉しそうなアザギに食べられた。

……さて、先程捕まえたこの虫と、合成しようか。

《仮面ライダーとかそんなのになりそうだな》

さて、実際はどうだろうな？ 私としてはもっと予想外になっても良いのではないかと思うがな。

存在と存在を混ぜ合わせ、主体は人に。しかし魂は虫で、体は間の子。

私の予想を外してくれよ？

見事に外れてくれた。素晴らしい

《珍しいナー》

そうか？ 私の予想が外れる事などざらにあるのだがな？

《そうじゃなくてナー……》

『……………瑠璃が、そんなに楽しそうなのはあ……………なかなか無いわよお……………?』

《そういうことだヨ》

そうか。

……………さて、この面白い実験結果はどうするか。

私の腕の中には小さな命が存在している。

……………いや、比喻ではなく実際に小さな人間が居るのだ。簡単に言うてしまえば、妖精サイズの人間だ。

ただし背中に虫のような透き通った羽が生えているし、魔法の力もかなりあるため、恐らく本当に妖精のようになってしまっているだろうが、それでも人間だ。

ちなみに記憶の方はほぼ完全に消滅した。しかし過去や個人、個体のこと以外は覚えていらっしゃるらしく、恐らく話すことはできるだろう。

……………さて、さて、さて。どうしてくれようか……………

《……………楽しそうだね》

『……………ふふふ……………そうねえ……………』

エインハルト大陸。山と荒野の割合が高いこの大陸で、町と町を繋ぐ街道を外れて歩くのは自殺行為だと言われている。

荒野で道を外れてしまえば砂漠と同じ。どちらが今来た方向かすらわからなくなる上、食糧が尽きればあつという間に屍を曝すことになるからだ。

草原ならば近くに動物や植物、そして水があることもあるが、この荒野にそんなものは存在しない。

運良く見つけたとしても、それらは魔物によって占拠されているため、よほどの実力者でなければ使用することは不可能だ。

数千kmを踏破して荒野の向こう側へ出てしまえば話は変わるが、

大抵の者はそこまで行く前に力尽きて息絶える。
しかし、そんな場所だからこそ荒野を拠点とする者達も居る。
たとえばそれは何かに追われているものであったり、行き場の無い
ものであったり、罪人であったり、盗賊であったりする。
彼等はそのいった者達の寄せ集めの盗賊だった。
ある男は人を殺して逃げた者だし、他のある男は実力が無いと実の
親から勘当された魔法使いの血筋の者、命令に逆らって受けた処罰
に嫌気がさして軍を飛び出した者や、貴族に税を搾り取られすぎて
食いつめた元農民。様々な者がこの集団に存在していた。

そんな集団が今狙っているものは、一人の少女だった。
その肌は雪のように白くきめ細やかで、黒くしなやかな髪との対比
が美しい娘。

顔も整っており、目はややつり目気味で厳しそうなイメージを受け
る、まるで貴族の令嬢のような雰囲気、十を少し越えたばかりと
いった少女。

しかしその近くには護衛の姿も馬車も無く、見たところ武器の一つ
すら持っていないように見える。

あの娘を拐って奴隷として売れば、暫く遊んで暮らせると思った盗
賊達は、ゆっくり、気付かれないようにこそそとその少女を取り
囲むように近付いて行く。

そしてこの盗賊団の頭にあたる男が姿を見せながら少女に近付き、
「こんなところでどう？」

バシユ、とその男は後頭部から勢いよく血となにかを吹き出し、絶
命した。

残りの盗賊たちは何があつたかわからないと呆然としていた。
その娘は剣も槍も持っていなかった。そして魔術師の証とも言える
長い杖なども持っていなかったし、呪文も唱えていなかった。
それなのに自分達の頭は頭から血を拭き出して倒れている。

何故？ と思う間も無く少女が小さな妙な形をしたものを自分に向

ける。
なん d

暗転

とある盗賊団の最期の時。フルカネルリがある下っ端の脳から
抜き出した情報。

……ふむ。この世界では魔法を使うときには長ったらしい呪文を唱
えなければならぬのか。面倒だな。

《フルカネルリは今まで唱えたことってあったっけ？》

……ふむ。その辺りも検証してみようか。

異世界編 2・13（前書き）

すみません、前に言ったことを早々に撤回します。
五十話所か、八十くらいは行っちゃいそうです。

……ぶっちゃけもう異世界編2だけで長編が一つできそうなの……
……そんな勢いです。

こうなったらほんとに独立させちゃいましょうかね？ 意見を下さ
い。

独立した方が良いか、このままの方が良いかです。
よろしく願います

フルカネルリだ。とりあえず予想外の実験結果だが、他の者もそこらにいた色々な種類の虫と混ぜてから同族意識を持たせ、私の作った大陸の外側に纏めて転送しておいた。

恐らくそれらで小さな村でも作って平和に暮らしてくれるだろう。

……ちなみに人間の方は皆男だったが、混ぜた虫の方が雌だった場合、女になるようだった。これは逆も言えるのではないかと思うが、実験には至っていない。

《魂が雌のまま混ぜられてるからネー。輪廻に入ってリセットされてないんだったら女になるサー》

それに混ぜているときは肉体は形を失っているわけだし、変えるのは容易と言うわけか。

……小さくなったのは、魂の絶対量が少なすぎたからか？　そしてあの体にわずかに残った魂の残滓を吸収してあの大きさまでの体を手にしたが、それ以上の大きさを保つには足りないためにそこで止まった、と。

……うむ、実に素晴らしいな。世界には謎が満ちている。

私は実に幸福者だ！

のんびりとこの大陸中を巡ることにする。食糧を気にしなくてもいい旅は気楽で良いな。

《この世界なら空気の中の魔力だけで生きてけるからネー》

そうか。まあ、食べられる時には食べておこな。

『……美味しいものを食べるのって……幸せよねえ……』

そうだな。美味しいものを見つけたら作り方を覚えて振る舞おう。それでいいか？

《ボクはそれで良いヨー》

『……ふふふ……期待、してるわよお……』
ああ。

……と言っても、あまり期待はできないようだがな。
私の前に置いてあるのはかなり質素な食事。

この世界の金はあるの盗賊から貰ったのがあるので初めて見つけた町の酒場兼宿に泊まったのだが、食事が酷い。

塩や砂糖がないのはまだ良い。私も前世では高価い塩や砂糖を買うことなどほとんど無く、素材の持つ塩分だけで生きていた頃もあった。

しかし胡椒やハーブといったスパイスも無く、ただ焼いただけと言うのは酷い。

胡椒はともかく、ハーブはこの世界では野草としてそこら中に生えているのになぜ使わない？

そう思いながら私は白衣のポケットから塩と胡椒を取り出し、恐らく近くに生息する食用できる魔物の肉だと思われるステーキに軽く振りかける。

……その時、周囲が私に注目していることに気付いたが、だからと言って何かするわけでもなく私は食事を続ける。向こうからなにかしてこなければ私からなにかすることは無い。

……む、中々美味い。食べたことの無い肉だが、身がしまっていて弾力性があり、噛む度に肉の味が口の中に広がって行く。

残念なのはその肉の美味さに胡座をかいて上を目指そうとしていないことか。

……やれやれ。視線が鬱陶しいな。私がここから離れたら確実に何かあるような気がする。

《……ないヨー。絶対に》

『……あるわけないわよお……フフフフフフ……』
……そうか。

……さて、そろそろ寝るとしようか。眠っている方が思考に集中できるしな。

《お休ミー》

『…………お休み、瑠璃…………』

…………ああ。お休み、ナイア。お休み、アザギ。

この世界に来てから殆ど見なくなったフルカネルリの寝顔。起きてるときは綺麗とかかっこいいとかそういう方が先に出てくるけれど、寝ている時は可愛らしいと言う方が合っている。

…………それじゃ、行こうかナー。

「フルカネルリをよろしくネー？」

ボクがそう言っていると、アザギはにっこりと優しく笑いながら答える。

『…………言われないでも、わかってるわよお…………？ ……………静かにねえ…………？』

「だいじょぶだヨー」

するりとフルカネルリの泊まっている部屋の壁をすり抜けて、扉の前に居る人間に指を向ける。

「聞こえないだろうけど…………死んでおくれ」

ぱん、と幽かな音をたててその男の全身が弾け、分子より細かく崩壊して行く。

完全に止まったままのその世界で、ナイアは次の男に手を伸ばし、指差す。

ぱん、と弾け、次へ。

ぱん、次へ。

ぱん、次へ。

ぱん、ぱん、ぱん、ぱん、………………

フルカネルリに近付く影が無くなって、ようやくナイアはいつもの

のほほんとした表情に戻る。

この近くに存在する意思を持つ生物は、フルカネルリとこの宿の主人、そして僅かな客のみ。

害するモノはひとつも残さず、ナイアはこの世界からもあの世からも、文字通り消滅させた。

「……まあ、こんなところかナー？」

密かにフルカネルリの部屋に張った結界を解き、何事もなかったかのようにフルカネルリの眠る横で浮く。

「……いっぱい居たみたいねえ……？」

「そうだネー。キミに任せればよかつたかナー？」

「……ふふふふ……そうかもねえ……？」

ふわふわと浮きながら二人で話す。フルカネルリの眠りという実験の邪魔をせぬよう音を遮断する結界を張り、その中で。

「……気付いてるんでしょうねえ……」

「そうだろうネー。フルカネルリはこういうことには鋭いシー」

「……過保護ねえ」

「キミに言われたかないヨー」

一体の霊と一柱の神は、守護する少女が目覚めるまで、ゆるゆると話を続けていた。

フルカネルリは色々なモノに護られているという事。

目を醒まし、ゆっくりと周囲を観察する。

《あ、オハヨー、フルカネルリー》

『……ふふふ……おはよう……』

ああ、お早う。

……ふむ。随分と心配が減ったな。ナイアかアザギが何かしたか？

……まあ、良い。食事によよう。

異世界編 2・14 (前書き)

もうすぐ連続投稿します。

フルカネルリだ。この大陸最大の国であるツエンディ、その王都に到着したのだが、とても気分が悪い。とりあえず二、三人ほど解体してやりたい気分だ。

《なんなら拾ってこようカー？》

……いや、いい。終わつた後に自分に嫌気がさすことになりそうだ。
『……あら、そう……』

王都と言うだけあつて中々に大きなその街は、魔物の襲撃から身を守るためか戦争のためかは知らないが巨大でかつ分厚い壁に四方を固められていて外敵に対する備えは確りとしている。

中央の大通りは活気があり、そこらじゅうで売り子の声や子供の笑い声等が響いている。

……ああ、またか。

懐に伸ばされた手を掴み、手の持ち主を引き寄せて軽く裏拳で鼻っ面を叩く。

腰の入っていない軽い拳でも人は飛ぶらしい。それも常人には視認することもできないような速度で。

先程からもう十二人ものスリの顔を物理的に凹ませていると言うのに、次々とスリはやって来る。何故だ？

《常人には何が起きているかもわかんないから吹き飛ばされてるって気付いて無いんじゃないノー？》

……ああ、成程。確かにその可能性は高そうだ。

……おっと、十三人目。今度は十に届くか届かないかの子供か。見た目は私も同じようなものだが。

……さて。そうだとするとどうする？ 私としてはあまり目立ちたくないのだが、なにもしないでいるとまたスリが……ほら来た。十

四人目。

ここは本当に王都か？ だとすると治安が悪すぎるだろう。この王族はなにをしているんだ？

……ああ、そうだった。血筋に胡座をかいて自分達がもつとも偉く、常に正しいと思ひ込んで気の向くままに生きているのだったな。

一応剣や魔法を習っているようだが、やはり錬度が……十五人目、と。

……やれやれ。確かにこれならあの魔王が支配しようと思えるかが理解できる。

これならあの程度の軍でも十分にこの大陸の勢力図を魔王の国のもの一色に塗り替えることもできるだろうな。

それに放っておけば勝手に弱りながら肥え太って行ってくれるのだ。中々行動せず自分の身を隠すことに集中するのは良い手だな。

自分達は密かに国力と錬度を高めながら相手が肥大し、国力を低下させながら巨大になって行き、それが最大になったところを見計らって侵攻し、支配する。この時は国の一番上を洗脳するか、自分達の言うことを聞くようにして暴政を行わせ、自分達の手駒に反乱の指揮を執らせて国王を討ち、支配するのも良い。

まったく、よく考えて……十六人目。

……やれやれ。これでは外で眠っていた方が安心だったかもしれないな。

《そつかもネー》

『……でもねえ……わたしは、ここの方が調子が良いわよ……？』

……ああ、多くの人間が負の方向の意識を持ちながら集まっているようだからな。

例えばあそこの商人は安物のナイフに有名な魔法道具師の刻印を押して高値で売ろうとしているようだし、……十七人目。こういつたスリや時には強盗が居る上、裏路地には餓死者や腐乱死体が存在し、さらにそれらを食べて飢えを凌ぐような年端もいかぬ子供も居る。

……極めつけには、我儘な王女とその護衛が偉そうに混雑した道のど真ん中を当然のように歩いてきている。

……おや、王女の護衛にまで入りは居るのか。まあ同じように気付かれる前に殴り飛ばしたが。

ちなみにこの時音はしていない。破壊力を上げるために魔術で物理法則を弄って作用反作用の両方の力を一方に向け、音として散らされる力も集中して打ち込んで居るために威力は倍で消音仕様でできあがっている。当然音速を越えてもソニックブームは発生しない……事はないが、その衝撃すらも威力へと回されてさらに威力が上がる。

《元々力は化物じみてるのにネー？》
そうだな。

……十九人目。やれやれ、このままの頻度なら今日一日で三桁まで行きそうだな。

フルカネルリだ。日が沈み、辺りが薄暗くなると人通りも露店も少なくなってくる。確かにこの程度の時代では日が沈んでからはもう明かりとなるものは月と星、人工ならば松明と蠟燭ぐらいしか照明器具が無いだろうし、特にこの世界では夜になると活発に動き出す魔物も居るようだし仕方無いと言えば仕方無い。

一応魔法の明かりも在るには在るのだが、そういったものは使い手を選ぶし道具にしても異様に高価であり、王公貴族か大商人ぐらいしか使う者が居ないと言うのが現状だ。

……ちなみに私は夜目が非常に利くため、松明も魔法の明かりも必要ない。

《アザギの悪霊の加護の隠し能力だヨー。闇とか夜とかに強くなるのサー》

ほう、初耳だ。すると他の、例えば邪神の加護や地神の加護にも何か隠されているのか？

《ンー、まだヒミツ》

『……ですつてよお……ふふふ……』

そうか。なら仕方無い。

裏路地に入るとあまり良くない視線が私を舐めるようにして這い回る。何人かに良い獲物だと思われたかもしれないが、手を出してきたらその時がそいつの命日だ。

《体はフルカネルリが消し飛ばしテ》

『……魂はわたしが頂くわあ……』

そしてナイアは知られぬように結界を張る。役割分担だな。

昼に殴り飛ばした数十人（百には僅かに届かなかった）から収集した知識を頼りに夜の王都の裏道を歩く。

この先に見合った金さえ払えば何でも売るといふ万屋のようなものがあるらしい。それも昼はただの壁にしか見えず、夜になってさらにそこにその店が存在していると確信を持っていなければ知覚することもできないようになっていくのか。

……ああ、あれか。確かにこれなら私のような術式が目視できるような存在でも無い限り気付けなないな。

まあ、それも私にはなんの効果も無いが。

キィ……と木製の扉を軋ませて中に入ると、そこには様々な魔法道具や魔法を付加された武器がこれでもかとはかりに存在していた。

《おー、沢山あるネー》

「……量は、ねえ……？」

そのあたりは初めから期待していない。私達がこの世界で暮らしていたあの場所は、魔力が結晶として物質化するような所だぞ？ この世界の中であそこ以上に魔力が濃い所など想像できんな。

……私とナイアの体内以外では。

《ボクの体もフルカネルリの体もこの世界じゃ無いヨー》

そうか。なら想像できんな。

……さて、見学するか。面白いものを見付けることができるかもしれんし。

拍子抜けだ。つまらん。

どれもこれも炎の魔石を使った杖だの炎を生む剣だの切ったものを凍らせる槍だのと少し考えれば出てくるようなものばかりだ。もう少し頭を捻って欲しい所だな。

例えば汎用性を伸ばした魔力そのものを小さな固まり（それができなかった場合は鉱石などに魔力を溜め込んで代用する）として、その魔力を様々に変化させることのできるよう術式をいくつか用意して結晶を組み込み、射撃砲撃斬撃打撃地水火風光闇無とその時必要なものに組み換えて使う道具一式や、そうでなくても私の銃の弾丸のように魔法を溜め込んで長ったらしい詠唱無しでも魔法を連発で

きるようにするなど色々あるだろうに。

さっきの炎を生む剣にしても、ただ炎を纏わせるだけでなく火球にして飛ばしたり固めて攻撃の有効距離を伸ばしたり鞭のように中間距離を埋めたり斬撃を炎と言う形で飛ばしたり突きを外したと見せかけて首の後ろで鎌のように刃を作って首を跳ねるなりと、いくらでも改造はできると思うのだがな。

《あー、この人間たちって魔法道具を作った後に手を加えるって
いうのをやろうとしないからナー》

……何故？

《さあネー？ 何でかナー？》

『……………どうしてかしらねえ……………？』

……………理解できんな。

まあ、いい。とりあえずここに来る道中で拾った（夜盗を返り討ちにした時の戦利品）の剣に簡単な炎の術を込めた魔法道具を売って金に変えるでしょう。こういった裏の店はある意味表の店よりもよほど信用が必要だし、いきなり騙すような事は無いだろう。

騙そうとしたところで解析しながらの商談でならば思考程度は十分読めることだし、それを理由に吹っ掛けることもできるだろう。

これかどの程度の価値になるのかで、私の旅のやり易さはずいぶん変わってくる。

……………さて、商談に入ろうか。

「店主。買い取りを願いたいのだが」

王都の路地裏にこの店ができてから、かれこれ二十年近くなる。

そんな店の中でその店の店長　バークホルムは暇をしていた。

店を作っつてすぐの頃は客なんて冷やかしか、意味もなく偉そうにし

ている兵隊が税だと言って適当に見繕ったそれらしい名前のものを持っていくかのどちらかだった。

しばらくしてそうした武器を多く売っていると評判になり、実力は無いくせにやたらと偉ぶる貴族がわかりもしないのに講釈をたれていくようなことが増えてから、バークホルムはひっそりと貯めていた金で魔法道具を買い、自らの店を隠した。

実力があるものにだけ見付けることができるように结界を作り、それに気付けないような相手には来店を断るようになってから、この店に来る客はガクンとその人数を減らした。

今では月に一人か二人、顔馴染みが来れば良い方だ。

そんな中で、久し振りに店の扉が軋むような音をたてて開く。

バークホルムはなにも言わずに、入ってきた客を確認して………目を疑った。

そこにいたのは、十を数えるか数えないかといった程度の少女だった。

ただそこらにいる子供と違い、その瞳には長い年月を生きてきたような深さがある。

その少女は商品の陳列されている棚を一つ一つ物色し、その度に何故かつまらなさそうな顔をする。

時には鼻がくつつきそうなほど商品に近づくこともあれば、一瞬目をやっただけで流すものもある。

だが最後に決まってするのは、落胆の表情。

まるで自分の求めている物では無かった時の子供のような、そんな顔をしていた。

その少女が全ての棚を見るのに使った時間はたったの数分だったが、バークホルムにはまるで数時間のようにも感じられた。

全ての棚を見終わった少女は、やや面倒臭げな表情のままバークホルムの居るカウンターへと近付き、ポロポロの剣と鞘を持ってこう言った。

「店主。買い取りを願いたいのだが」

ボロボロに見えた剣は、バークホルムが長年夢見てやまないものだった。

炎の剣。それならばこの店にもいくつか存在する。

魔法を弾く剣。それも数は少ないがある。

しかし、魔力を吸収し、そして自らの炎の薪とする剣は一つも無かった。

それはそうだ。この世界に同時に二つの魔法を組み込まれた剣は存在しない。伝説と言われる闇剣ロンブルや光剣イジャーヤですら巨大な闇と光の力を持った剣であり、魔法を切り払うことができても持ち主の魔力を使わずに特殊な能力を使うことは不可能なのだ。それが、この剣は外からの魔法を分解して自らの力へと変えることができる。つまり、魔力を持たない者でもこの剣があれば魔術師とも互角に戦うことができる。

確かに魔術師が魔法を使うときには十数秒にも渡る詠唱をしなければならぬが、距離さえ離れていればなんの問題もなく魔法を完成させて騎士達を殲滅させるだろう。以前にあった魔術師団と騎士師団の戦いでもそれはわかる。

だがこれさえあればあの魔術師達に一泡ふかせることができる。

バークホルムは、この剣を作った誰かと、この剣を自分に渡した少女に感謝した。

元・ツェンディ王国騎士団長、バークホルム＝レガートのある
夜中の客。

フルカネルリだ。簡単に作った剣がかなり良い値段で売れたが、今後は売り物に組み込む術式は一つにしようと思った。これが原因で奇妙なことに巻き込まれては困るからな。

《好きにすると良いサー。キミの邪魔はしないヨ》

『……頑張ってねえ……』

ああ。

王都を出るには朝まで待たなければならぬようだが、私は光学迷彩で姿を隠すことができるので普通に空を飛んで王都の壁を越える。この世界の魔術師達は空を飛ぶことができるほど器用ではないので、対空防衛網には全くと言ってよいほど力を入れられていない。精々が有翼の魔獣や魔物を見付けるための見張り台程度しか存在していない上に、そこで仕事をしている兵もやる気が見られない。

まあ、そのお陰で私はこうして月夜の空中散歩を楽しめるわけだし、全く構いやしないが。

とん、と爪先で地面を蹴って浮かび上がり、それと同時に姿を消す。ふわふわと浮きながらのゆっくりとした移動は高速で飛ぶ時と違っていまだに浮遊感に慣れないが、たまには良い。

遙か下方に地面があり、遙か上には月が浮く。その中間で私はのんびりと目を瞑る。

……さて、これからのことを考えようか。

とりあえずこの国を隅々まで見てから隣の国へ移動しよう。上空から見た限り、この国を全て見るのに五年もあれば十分だろう。最終手段として上空から大陸全土をまとめて解析すればそれで終わるわけだし、のんびりと十年かけても良い。

そしたら次の大陸へ移ってまた同じように各地を見て回ろう。植物や動物も大陸によって変わるだろうし、地域や食べたものによって能力や形態にもなんらかの差異が出る事もあるだろう。

それらを全て記録し終わったら一度私の研究室に戻り、頭の中に記録したそれを全てなんらかの記録媒体に書き写してからもう一度初めからやり直す。

他のところに行っている間に起きた出来事や変わった動植物を記録しながらまたのんびりと世界中を旅する。それを今回は………そうだな。この世界が自然に消滅するまで繰り返してみようか。

《確実に何百億年ってかかると思っけドー？》

なに、私の寿命は無限だろう？ ならばやらねば損ではないか。

それに、ここまで巨大な魔法で作られた世界の終焉を見るなど、中々できないことだ。

実に、興味深い。

《………キミがそう言うならいいけどネー》
そうか。

空を飛んでいる間に襲い掛かってきた鳥のような魔物を解体して解析する。そうしている間に血の臭いに誘われたのか狼のような魔物が群で現れる。

……一、二、三………八体か。解析と解体に二、実験に四、後は……逃げようとするなら逃がすか。

とりあえず、この鳥擬きの解析が終わるまで檻の中で大人しくしていてくれ。どうせ五秒程度の事だ。

狼達は最終的に逃げ出した。囮として四頭が残り、後の四頭は逃げた。

しかし、解析に必要な雄と雌が二頭ずつ残ったので別に構わない。記憶を引きずり出してどのような場所に住み、どのような餌を食べ、どのような生活をしていたのかを知るのにそれだけいけば十分だ。

……それに、けして敵わないと思ったのか残ったうちの二頭から乞われてしまったしな。
一応、向こうから襲いかかることが無ければもう手は出さない。私は約束は守るぞ？
《嘘はつくけどネー》
そうだな。

フルカネルリ異世界旅行記

フルカネルリだ。高山地域に竜が棲んでいると聞いたので見に行くことにした。少なくなってきたがやはり夜盗が出てくるが、一人残さず実験台に。今回は虫ではなく植物と混ぜてみることに。

《何になるかナー？》
さてな。

植物には意思がない。そのため魂は人間寄りになり、ある程度自意識を持つようになったが自力での移動は不可能と言う結果に終わった。ちなみに魂だけが人間寄りの樹と言った所だ。意思を強く持てば実をつける時期を多少ずらすことくらいはできるようだが、前にやった虫と混ぜた時に比べてあまり大きな差にはならないようだ。一応種を採取して一気に育ててみたのだが、どうやら子に意識は発現しないようだ。

……まあ、一応何かの役に立つこともあるかもしれんし、持つておくとするか。

竜と言えば幻想種でも相当強力であり、ものにもよるが言葉を理解し神に匹敵するものも居ると聞いていたのだが………どうも、先程から出てくる翼竜は知識を持たないただの動物と同じようなものにしか見えない。

『………瑠璃の研究所のお………周りの子達の方が、まだ強いわよねえ………？』

《そつだよネー？》
やはりそうか。

………やれやれ。まあ、これまでの竜は全て東洋竜に翼をつけたような外見だったし、ドラゴンはまた別だと思いたいな。

……… 思ったかったが、どうやら思わせてはくれないらしい。もしやこの世界には人語を理解できる魔物は居ないのか？

……… いや、まだ決めつけるには早すぎる。この大陸のことすら全て知っているわけではないのだから、勝手にそう思い込むのはまずいだろう。

そう考えつつ、目の前のドラゴン……… 腕が翼になっっているためワイバーンだと推測されるその吐く炎を止める。

今までは料理と実験の際の火力調整程度にしか使うことはなかったが、炎神の加護を受けている私にこの程度の炎は効果がない。

……… さて。これを使ってどんな実験をするかな。始めは解析と記憶の引き出しからだが、できることなら言葉を話せなくともある程度理解はできてかつこいつの記憶に喋るドラゴンが居れば良いのだが……… 流石にそれは高望みすぎだな。

……… 大人しくしてくれよ？ この世界で外に出てからと言うものの、周囲の存在の脆弱さに戸惑っているのだ。逃げ出された場合にうまく加減できる保証はない。

《ま、それだけ命の危険に陥る可能性が少ないんだからサー。そこからへんは我慢してヨー》
わかつているさ。これは私が慣れれば良いだけの話だ。

『……… 強くなり続けてるのだからあ……… 難しいと思うわよ………？』
難しいだけで不可能ではないさ。第一、この程度で諦めていたらひたすら学ぶと言う行為を数万年にわたって続けて来たのが無意味になっってしまうだろう？ 難しくともやってみせるさ。

……… 失敗した時の相手には御愁傷様と言うしかないが。

山の頂上に張られていた結界をすり抜け、おそらく結界を張る知識があるだろうドラゴンを見上げる。

……… ふむ。中々に巨大だな。力もあるし、今までに見てきたワイバーンなどとは違い理性も知識もあるようだ。

体の作りもはや別物と言っても良いほどに違つし、それ以前に存在としての強度が段違いだ。

……とは言うものの、やはりあの神の創造物である以上あの神の最盛期より強くなる事はないだろうし、見掛けから私を見下しているようなので戦闘になつてもなんとかなるだろう。

さて、解析するか。これのお陰で解体の手間が省ける。本当なら実験もしたいが、流石にこの大陸の食物連鎖の頂点を切り崩すようなことはしたくない。

後々面倒になる事もあるだろうし、生態系もかなり変わるだろうし良い事など殆ど無い。

……それに、なぜか止めておいた方が良さそうな気がする。ことだし。《たぶんそれ正解だヨ》

『……いつか、何かあるわよ……きつと、ねえ……』
そうか。

小さき者が山にやってきたと聞いた。たった一人であるらしい。

小さき者は魔術を使い、多くの眷属を屠つたらしい。

小さき者は魔術に詠唱を用いず、道具を媒体として目視するのも難しいほどの速度の魔術を使つたらしい。

小さき者はゆつくりと歩を進め、回り道をしながらこの山を登っているらしい。

そして今、小さき者は我の目の前に居る。

小さき者は、小さき者の中でもとても小さかった。眷属に合わせて言つならばまだ五十も生きていないような小さき者は、我をその透き通った黒曜石の瞳で見詰める。

小さき者が我を見つめるのに合わせ、我もその小さき物を見詰める。

小さき者の目は、まるであらゆる物を見通すかのような広さと同時に、見た目通りの幼子のような無邪気な光が宿っていた。

周りで唸りを上げる眷属達を黙らせ、見つめ会う。

しばらくしてふと気が付くと、その小さき者はいつの間にか姿を消していた。

……そろそろ眠るとしようか。あの小さき者もこの山を降りたようだし。

後の龍神、クルエリオスとの出会い。

フルカネルリだ。そろそろ次の大陸に移ろうと思うのだが、今回の移動は船ですることにした。一応この国と貿易を行っている国があるらしい。どうも貿易と言うより力で無理矢理引きずり出しているような印象があるが、それでも一応貿易としておく。向こうもちゃんとこちらの国を利用しているようだし。

それ以外に巨大な客船もあり、貴族や商人が利用しているらしい。まあ、今回は平民用とでも言うべき質素な船にしておこう。

……ああ、そうだ。ナイア、アザギ。今回は私の手に終えなくなるまで手は出さないでくれ。何が起きるかを体験したいのでな。

《わかったヨー》

『……手に終えなくなったら、すぐに手を出すわよお………？』

ああ。すまないが、よろしく頼む。

船に乗り込み、まずは指定された自分の部屋へ。荷物を置く気は無いが、部屋の場所と同室に泊まる誰かの顔と性格程度は見ておくべきだろう。

その際、何らかの手出しをして来た時はこちらからも報復をしなければならぬし、気は抜けんな。

金を払った相手は特に後ろ暗いことに首を突っ込んでいる様子は無かったが、他の乗組員や客の一人一人まで信用することは無い。

……ああ、ここか。

扉を開くと中に居た数人の視線が私に突き刺さるが、その全てをさりりと受け流しながら空いているベッドの一つを占領する。

それから、すでに私に視線を向けていない同室の者達の解析を開始する。

……さて、どのような者達だろうか？

あまり儲かっていない商人が一人。旅人が一人。身分を隠した貴族の次男が一人。そこに私を加えた四人がこの部屋に泊まるようだ。……さて、なぜこれほど厄介事に巻き込まれそうな部屋に割り当てられたのだろうか？ 呪われているのか？

……呪われていたな。そういえば。

《呪ってるヨー。ボクがネー》

まあ、それはいい。この程度の世界ならば最新の研究は戦場に出てくることが多いからな。

しかし、戦場以外にも謎や知識は意外と転がっているものだ。そういったものを取りこぼさないように注意しながら行動するとしてよう。……そうだ。今度から指定した場所の映像を移す鏡と場所を指定する楔を作り、様々な場所に打ち込むようにするか。無論鏡無しでも知覚することができるように術式を組み、常にその場から情報を送るように……。そうすると、見ていない時の映像を記録するものが必要だな。

……それも平行して作るか。どちらも術式で構わないだろう。

まずは楔を打ち込む術式と楔に力を送り込む術式。それに楔から3km以内の出来事を映像に音声つきで記録し、記録用の道具に送る術式を組み上げる。

それに平行して、取り出した魔力の結晶に記録用の術式と目録を作る。それと記憶領域が間に合わないだろうと思われるので外付けの記憶媒体も。

楔を打ち込む術式は靴にでも仕込んでおけば良いか。そうすれば私がかた歩きだけで世界中に楔が打ち込まれる。それにそれぞれの大陸の位置関係もわかるし、地図いらすだ。

……まあ、作るが。

食事は一日二回。朝と夜にあまり多くない量を食堂へ食べに行くよ
うだ。

……それにしても、この時代の保存食と言つのは本当に不味いな。これなら魚でも釣つて自分で料理でもした方が美味しいものを食べられるだろう。

よし、思い付いたが吉日。早速作るとしようか。

材料は研究室の周囲に大量に生息している無属性の結晶の樹の枝と、畑に生えていたとうもろこし（結晶化）の茎をほぐして編んで作った糸。針は無属性の獣の抜け落ちた歯を削り出して再利用する。

《へー、きれいだネー。どこで釣るノー？》

甲板と言つことになるだろうな。大物を釣る気はないから構わないだろう。舵は離れているし、動力も櫂ではなく帆を使っているので邪魔にはならないはずだ。

結晶の樹は高い硬度としなやかな強度を併せ持った良いものだ。糸もそう簡単には切れないし、魔力でできているために形成が簡単なのもまた良い。

餌はそこに居た鼠を捕まえ、挽肉にして固めた肉団子。釣れるかどうかは運次第だ。

《捕まえたノー！？　そして潰したノー！？》

ああ。

『……回りが引いてたわよお……？』

そうだったか？　正直に言ってどうでもよかったので気にしていなかった。

……さて、行くとするか。

異世界編 2・19 (前書き)

多分この先で皆さんの予想を裏切ります。

フルカネルリだ。大漁大漁。

《オメデトー！》

ぱあん！と頭の隅でクラッカーが弾ける音がする。消音設定は確りと残っているらしく、あまり五月蠅いと言うことはない。さて、早速調理して今日の昼食として食べるのでしょうか。

七輪に炭を入れ、その上に網を置いて火をつける。

火が大きくなるまでに魚を捌き、切身を作る。残った内臓は塩漬けにすればしばらく持つだろうし、骨や頭も粗煮にする予定だ。

醤油と味醂は素晴らしい。欠点と言えばこの世界で作ったそれは透明であるため味の調整をしにくい所だが、そんなものは味とそれまですて入れた量を覚えていればどうにでもなる。

切身に少しだけ醤油を塗り、炭火でじっくりと焼き上げる。

外側に焦げ目ができる程度まで焼いたら出来上がりだ。山葵醤油が良く合う。

本当なら火で内側から熱を通せば全体を均一に焼くこともできないはないのだが、こういった時にそれをやると変人としてではない理由で目立ってしまうために自重した。

《……え？ フルカネルリが自重？

……うん、夢だナー》

『……瑠璃……？……疲れてるのかしらあ……？……？』

私が自重するとおかしいか？

《うん、凄く変だと思うヨー》

五月蠅い、シャーペンの芯を食べ過ぎて死ぬ。

《喉に刺スー？ 胃を破ルー？ それともちゅ・う・ど・クー？》
全部だ。

《言つといてアレだけでもさかのフルコンボー!?!》

『……………あらあら……………仲良しねえ……………』
そうだな。

……………さて、食べるとしようか。そろそろ周囲の視線が鬱陶しいし。頂きます。

快適とは言えない船旅だったが、ここでもまた様々な事を知った。釣りのついでに海底にも楔を打ち込んだり、その映像から狙って海草を取って味噌汁にしてみたり、魚も色々なものを釣ることができた。

ちなみに釣った魚はすぐに解析して切身にして食べた。脂がのっついて口の中でほぐれるものから身が引き締まっついていて歯応えのあるものまであり、飽きることは無かった。

途中から私の真似をしてか釣りをするものが増えたが、あまりいい結果ではなかったようだ。

そのうち私の使っていた竿を売ってくれと言う者も出てきたが、丁重にお断りした。

さて、新しい知識の収集に行くのでしょうか。

どうも船を降りてから誰かに後をつけられているようだ。誰だろうか？

『……………誰かしらねえ……………』

《誰だろうネー?》

……………ふむ。まあ、害がなければ別にいいだろう。それに見られてはならないことをやる訳でもなし、問題無い。

邪魔になればその時にどうにかすればいいし、のたれ死ぬならそれはそれで私には全く関係無い。

わざわざ助ける義理も無し、好きにしてくれて一向に構わん。

……………命の保証はしないかな？

狼の群れに遭遇した。しかし前の大陸の狼に比べて平均して小さく、その代わりに牙と爪の発達の仕方が目に見えて違う。

前の大陸の狼は、元居た世界の狼と体の大きさ以外に違いはなかったが、この大陸の狼は牙が長く延び、噛み千切ることよりも切り裂く方向に特化しているようだ。

爪は地を踏みしめる以外にも獲物を押さえつけるために通常僅かに長くなるのだが、体が小さいためかこれもまた切り裂くために丈夫かつ鋭くなっている。

恐らく同数の群れと遭遇したときの被害はこの大陸の狼の方が多くなるだろう。

……とは言っても、私にはどちらも大した危険は無いのだが。

襲い来る狼の一頭をはたき落とす。少々強すぎたのか挽肉になってしまった。次は生かしたままにせねば。

もう一頭に軽く衝撃を打ち込む。脳を揺らしたので暫くは動けないだろうが、意識は常に全体に。回復力等は実際に見てみるのが一番早い。

……と言っても深く解析してしまえばそれもすぐわかるのだが。

三体目は電撃で気絶させ、四体目と五体目は釣糸で縛り上げて捕獲。それ以外は少し魔力と害意を乗せて睨んだらさっさと逃げ出した。

……さて、それでは早速研究に入るとしようか。まずは筋肉と骨格と牙と内臓の成分調査から……

フルカネルリ研究中

フルカネルリだ。狼については亜種ではなく別種として記録することにした。流石にあそこまで異なる点が存在するものをただの亜種とするわけにはいかないだろう。

《わかればなんだっていいような気がするけどナー？》

私としてはそれでも構わないが、例えそれが仮のものであったとしても名称は存在した方が良好だろう。

解析は終わった。解体して筋肉や骨格も確認した。主要な血管がどこを通っているのかも理解したし、どこをどの程度までなら弄っても平気かもわかった。

それと、なぜこの世界の魔法を私が見えるかも。

この世界の通常の生物は、大なり小なり魔法を使うことができる。例えそれが全く魔力を持たない者でもそれは変わることはない。

何故ならこの世界の全てはあの神の作った魔法であるからだ。故に人も獣もどんなものでも自らの命と存在を削れば魔法を使うことができる。

このように命を削って使った魔法は普通の魔法よりも数段強くなる。しかしここで重要なのは、普段使える魔力が多いからといってこの時に使える魔力が多いとは限らないと言うことだ。

この世界では殆どの生物は四大の属性から体を構成している。よって存在を削って使う魔法はその構成している属性のバランスを崩壊させて使う訳だが、通常使っている魔法は産まれる以前に与えられた魔力の中で体を作る構成からあぶれた物で、構成には関係無いので消費しても問題は無いわけだ。

人によって火の属性が多かったり風がわずかに少なかったりするとそれだけである程度性格にも影響するようで、火が得意な魔法使い

に激情家が多いのは火属性の割合が高いとそうなりやすくなると言う理由があるらしい。

何が言いたいかと言うと、普段使っている魔力がいくら多くても存在を削る魔法を使う際には全く関係は無いと言うことだ。

この時の魔法の強さは体を構成している魔力が多ければ多いほど強力になり、少なければ少ないほど弱くなる。つまり、まさにこの世界では才能がものを言う訳だ。

ちなみに光と闇は肉体ではなく精神を構成する属性であり、ここでは省くことにする。

そして、なぜこの世界の出身ではない私がこの世界の魔法を使えるかと言うと、ナイアが私に小さな魔力の受け皿を作ってくれたからだ。

この世界の生物ならば受け皿の代わりに自分という水滴に魔力という水を取り込めるのだが、それは全てが魔法でできているこの世界の存在だからできる事であり、実体であり実体でない魔法でできた体を持たない私はナイアがやってくれたように受け皿を用意して水を受け止めてやるしか無い。

だが、利点もある。魔法でできた体ではないために魔力を使いきっても全く関係なく行動することができるのだ。

それだけではなく、少し疲れるがその受け皿そのものを大きくすることもできる。これは体が魔法でできていないものだけの特権だが、受け皿を作るまでが異様に辛い上に痛いのであまりおすすめはしない。

魔法は大きく分けて二種類存在する。

一つは私や精霊、魔物がよく使っている‘魔法’。

もう一つは基本的に人間しか使うことはない‘魔術’。この二つだけだ。

どう違うかと言うと、魔術は世界のどこにでも居る精霊に魔力を渡して術式を作ってもらって使うもので、魔法は自らの力で術式を作

り上げて発動するものだ。

魔術に詠唱が必要な理由は、簡単に言ってしまうえば自分の周りに居る精霊に集まってもらうためである。

集まってもらわなければ魔力は受け取り相手がいないので無視されるか、もしくはガメラれるか、24面サイコロで二十回連続で何が出るかを当てられる程度に運が良ければしっかり働いてもらえるかの三択。最後のは練習のような何でもない状態ではなく、命を懸けた戦争の真っ只中のような時の方が物見遊山の精霊が手を貸してくれる確率は高くなるようだ。

しかし当人の使える魔力以外の属性の魔術はけして使えず、ある程度威力は決定されてしまっている。

その分使いやすく、術式をわざわざ作らなくても良いために魔法を使う人間は存在しないようだ。

……まあ、実際はそんな器用なことができるような人間はあまりいないから廃れたようだ。

………そこまで難しいか？

《フルカネルリは常人じゃ無いから平気なのサー》

『………そうよねえ………？』

フルカネルリの魔法考察、その2

ちなみに、魔法は自らの知識と魔力と操作力の許す限り改造し、より強力に、より悪辣にすることができる。私のような研究馬鹿には堪らない仕様だな。

《自分で研究馬鹿って言うっちゃっター！？》

異世界編 2・21（前書き）

誤字・脱字があった場合、是非ともご報告を。

それと、もうすぐ大量更新します。

多分。

フルカネルリだ。私のことをつけている相手を撒いてみようと思っ
たので、魔物が大量に出て危険だという森に入ってみることにした。
ついでに平野ではなかなか御目にかかることは無いだろう植物など
の採取と記録もしよう。

《どんな魔物が出るのかはお楽しみだヨー！》
そうだな。楽しみだ。

植物が出た。刺の生えた蔦がある派手な花だ。食人花か？ ……い
や、別に人とは決まっていけないのか。となると食肉花？

「ジャアアアツ！」
妙な鳴き方をするのだな。あれのどこに声帯と肺があるのか、無い
のならばどのようにあのような声を出しているのか、多少興味が出
てきた。解析ついでに解体してみよう。毒が無ければ食べてみるの
もよし。

《……食べるノー？》
そのつもりだが……なにかまずいか？

《………何でもないヨー》
そうか。

意外と食べられる。

蔦に生えた棘には麻痺毒があったが、それさえ抜いて外側の固い皮
を剥いてしまえば中身は水分たっぷりの胡瓜のような味だった。普
通に美味しい。

《よく食べられるネー？》
大した事ではない。昔々の貧乏な頃に食べたことのある焼いただけ
の百足よりは見た目も味もまもだったしな。

それにこの植物の体液は棘にあつた麻痺毒の解毒剤にもなるようだし、栄養もある。

……まあ、その辺りは解析したのだが。

さて、この辺りに生えている殆どの植物の解析結果を記録しておくことにしよう。見た目に始まり、色、生息地、生態、毒の有無、薬効、利用法方、特徴、備考などを考え付く限り全て。

例えばその辺りに群生しているどう見ても雑草にしか見えない草も、名前はともかく薬効はあるし、食べれば美味い。レタスのような食感だった。

その他にも根に猛毒を持つ物や異様に水分を必要とするもの、周囲の毒素を取り込むことで毒の種類が変化するものなど、多岐にわたっていた。

……この世界にこれて良かった。心の底からそう思う。

《喜んでくれて嬉しいヨー》

『……瑠璃が楽しいとお……わたし達も楽しくなるのよお……』
そうか。

湖を発見した。とりあえず解析してみることにした。

……ふむ。毒性は無し、十分飲めるし魚や水草等の小生物もいる。

備考として湖の中心最深部に中々の水の気配がある。恐らく水の上位精霊だと推測されるが詳細は不明。よってもう少し深く解析することにする。

……解析の結果、推測はおよそ正しかったと言えるだろう。

ただ、この世界が全体的に弱ってきているようでこの世界の自然そのものとも言える精霊もあまり好調ではないらしい。

まあ、確実に私が原因だな。この世界の創造者をぼろぼろにして力を奪い取ったのだから。

……そろそろ信仰を戻してやるとしようか。見守は見守で別物として信仰させておくが、信仰を奪い取る術式を破棄すればそれで少しは良くなるだろうし、世界が強くなれば私がこの世界にいられる時

間も延びる。

……とは言え、あの神がこうした情けをかけられるのは嫌がりそう
だ。だがそれでも力を取り戻したくない訳ではないだろうし、この
世界の事を思えば歯を食い縛りながらも受けとるだろう。

たとえ信仰を渡した直後に襲いかかってきたり私の研究室と実験場
に手を出すのならばその場でもう一度叩き伏せて見守りに食わせてや
ればよし。

『……どうしてかしらあ……？……あれが瑠璃に、もう一度ぼろぼ
ろにされている所しか、想像できないわあ……？』

《あ、アザギもそう思ウー？》

なんだ、全員同意見か。まあ、その時はその時だ。別に困るわけ
も無し、その時の流れに合わせて臨機応変に行動しよう。

ここでも釣りをする。解析は終わっているのだが、実際に捌いて食
してみたと思ったのだ。

……そこでふと思いついたのだが、針や糸を変えた場合、何かかか
る獲物は変わるのだろうか？

思い立ったが吉日、と言う訳で早速作ってみることに。

この場で六種作ったのだが、今回使うものは水属性の物のみ。

作っている最中にそれぞれシミュレートしてみたのだが、火属性は
水と対消滅を起こし、風属性は水を弾いてしまうという結果になっ
たため断念。そして光属性はここではなくかなり深い海でならば提
灯鮫鰻のように光でおびき寄せるだけであり、闇属性は小魚が隠れ
るように近付いてくるのみ。よって結果が一番わかり難かった水属
性を使う。

……さて、どのような結果になることやら……。

私がこの世界に存在するようになってから、もうどれほどの時が流れたのかはわからない。

初めてあのお方に産み出され、それからずっと私はこの場所で世界の水の流れをを管理していた。

私は水の精霊。あのお方が最初にお作りになられた水の化身。そしてこの世の水の精霊を支配する、精霊王と呼ばれる身でもある。

しかし、ある日を境にあのお方の力が弱まった時から何かか狂い始めた。

私の知る限り、海の一部の海流が突如現れた大陸によって書き換えられ、多くの場所の生命が失われた。

それは今では新たな生態系を作ることによって解消されたが、その時に消費した私たちの力はお方から送られてくることなく、徐々に衰退して行くしか道はなかった。

あのお方が再生し、ようやく回復が始まって送られてくる力は微々たる物で、衰えることはなくなっても回復したとはいえないような状態が長く続いた。

そんな中で、急に私の棲む湖の中に巨大な水の力が現れ、少し手を伸ばせば手に入れることができるのならば……手を伸ばすしか無い。

それを掴み取り、口へ運ぶ。

ばかり。と口に入れれば、最盛期の私の半分程度の強さを持つ水の力が私に流れ込んでくる。

しかしそこで、くい、と糸が引かれてそれは私の口から出ていこうとする。それが嫌で私は糸を掴むのだが、何が起きているのか私の体ごとそれは湖の外へと引き上げられた。

そしてそこに居たのは、釣竿を持ったまま不思議そうな顔をしている、黒い髪の少女だった。

……あれ？　もしかして私……釣られた？

クーボケな水の精霊王

フルカネルリだ。大物が釣れてしまった。違う意味で。

《確かにちよつと違うネー》

『……………食べるのかしらあ……………?』

流星に食わんよ。解析はするが。

……………いや、食べてみるのも面白いかもしれんな……………。

《ダメだヨー!?!》

駄目か。ならば仕方ない、諦めるとしよう。

釣り上げた水の精霊をじっくりと見てみる。確かにこの精霊はその辺りに浮いている小精霊に比べて異常なほどの力を持っているが、それでも精霊王と言われると首を傾げてしまう。

「……………ん? ……おかひいら……………」

「……………何がおかしいのかは知らんが、そろそろ針を返せ」

それは今も私の釣竿の針に食い付いているのも理由のひとつだが、それ以前に弱々しいからだ。この世界に来た当時はもう少し強かったような気がするのだが、私の記憶違いか?

《あつてるヨー》

『……………瑠璃が、強くなったのよお……………?』

それを含めての話だ。いくらなんでも弱くなりすぎだと思う。このような状態でこの世界の水と水の精霊を統べることができるなら私でも出来るぞ?

……………まあ、出来たとしてもする気はないが。

何度言っても針をくわえるのをやめない水の精霊だが、なぜか不思議そうな顔をして私に問いかけてきた。

「どうしてこれを吸収できないんでしょう?」

……ああ、なるほど。確かにそれは気になるだろうな。水の精霊王に従わない水属性の力など初めてだろう。

「ああ、それは釣りの時に水に溶け出さないよう気付かないほど薄い無属性の魔力で覆っているからだ」

……と、言うことは無属性の魔力で覆えば火属性や風属性を使ってもなにも起こらないということなのだが、恐らくなにも寄ってこないだろうと思われるので却下する。

溶岩の中に生物がいるならば使えそうだが。

《いることもあるヨー》

いるらしい。いつか使ってみることにしよう。

「この針を頂けませんか？」

いまだに口の中で針をモゴモゴと動かしている水の精霊は真っ直ぐ私を見つめている。

……まあ、構わないか。この辺りで少しは回復させてやらないと世界が終わってしまう。それはつまらんしな。

「針だけだぞ」

「ありがとうございます！」

水の精霊は嬉々として針をくわえたまま湖の底へと戻っていった。

最後に私に何かをしていったようだが、恐らく私に害はないだろう。

……さて、もう少しここで釣りを楽しんでから出発するか。

《そう言えばサー》

どうした？

《あの針ってまだ無属性の魔力で覆ったままだけドー、使えるのかなー？》

さあな。私に頼まなかったのだから何らかの策があるのだろうよ。

ナイアと話をしていると、竿に反応があった。あまり大きくは無いが、かかったらしい。

貰ったばかりの針をくわえたまま湖の底の私の住処に戻る。これだけの力があればこの世界に存在する水を全て新しいものに変えることすら出来るだろう。

それじゃあ早速、浄化の甘い所を浄化しようとな力を振るおうとして、気付く。

……魔力で覆うのをやめてもらおうの忘れてた……。それに、他の精霊王達に会ったら力を貸してあげて下さいと頼むのも……………。

……………どうしよう？

……うん、とりあえず皆に伝えておきましょう。特に風の精霊王にあの子ならきつと他の精霊王たちと違って自由に動けるから、あの人間に会うことも簡単なはず……………よね？

やっぱりクーボケ水の精霊王

『……………瑠璃は、まだ上にいるんだからあ……………直接言えばいいのにな
え……………』

《だよネー。なんでやらないんだロー？》
気付かないのではないか？……………おお、またかかったぞ。

そしてそれに気づいても言わない一人と一体と一柱。

異世界編 2・23 (前書き)

投稿、トレス・オン開始

冗談です

フルカネルリだ。森を抜ける頃には私を追ってくる者はいなくなっていた。何があつたのだろうか？

《昨日解体した熊みたいなやつの中に入っていた物を羅列してみテー？》

鹿のような魔物の物だと思われる肉が僅かと、人だと思われる肉がおよそ一人分。

「……わかつて言ってるのよお……きつとねえ……」
予想はしていたが、確定はしていなかったのだな。

あの森には様々な物がいた。食肉植物もそうだし、熊のような魔物も角のある兎のような魔物もそうだ。
中には魔法を使ってくる物も居たし、道具を使う小器用な魔物もいた。

……ついでに、若干間の抜けた精霊王も。

《あれはアホの子だったネー》

「……可愛らしい子だったじゃない……」

……可愛らしい……のか？ あれが？

……まあ、人の趣味に口を出すつもりはないので構わないが。

ああ、それと人間と魔物では魔術の使い方が多少異なるようだ。

簡単に言ってしまうえば、人間は精霊を呼ぶ必要があり、魔物は呼ぶ必要がない。ただし呼ばずに使うと多少弱体化するが、人間と違って確実に魔術は発動するようだ。

また、精霊に気にいられるとその属性の魔術が使いやすくなり、さらに威力や無詠唱時の発動確率と威力が大きく上がる。

……ちょうど、今の私のように。どうやら水の精霊王は最後に私に加護を与えていたらしく、あれ以来妙に水の魔術が使いやすくなっ

た。

ただ、魔法の方は私が自力で術式を組んでいるので特に変わることはない。

……あまり使うことは無いが、無いよりはあった方が良いだろうな。使わないが。

《二回言っター！？》

『……重要なこと、なのかしらあ……？』

いや、特に重要ではないな。ただの事実だ。

この世界は全体的に治安がよろしくない。何せ、王都ですら堂々とスリやら物取りやら詐欺師紛いの商人やらがいるのだから本当に酷いと言っているのがわかる。

短い間とは言え平和な日本で暮らしていた私から見るとさらに酷く見える。前世の私の生まれた町よりも酷いぞ？

……とは言っているものの、そう言った者達が多ければ多いほどに実験素材や情報収集の種になってくれるのだから、あまり文句を言ってもりは無い。私に迷惑の来ない程度に勝手にしてしてくれ。

《迷惑が来たらどうするノー？》

勿論実験体にする。今ならば肉体を精霊化させる薬の試験に使うこととなるだろうな。

『……へえ……すごいわねえ……？』

ただ、精霊化に伴って人格や意識といったものが消失すると思われるがな。

……さて、丁度良い所に来たな。痛くないように注射してやるから、あまり暴れないでくれよ？

こうして私は世界を回る。何度も何度も何度も回る。

そして世界の全てを楔の効果範囲に入れ、私は自らの作り上げた大陸の研究室に戻る。

なにも変わらぬその中で、私は見て回った世界の記録を作る。

題名は【イギリス研究日誌】。この世界の名をつける。

……さて、一度纏めるまでにはどれほど時間がかかるかな？

見守はある日、ざわりと大陸中の空気が変わったことに気が付いた。懐かしい存在が、五十年以上もかけてようやく帰ってきた気配。それを祝福するかのように島の木々は光輝き、魔力をまるで色のついた雪のように降り注がせる。

「……ふにい……はぶ。……ようよう、おかえりなしゃいませ
え……」

それだけ呟き、見守はキラキラとした周囲から身を守るように丸くなって寝息を立て始めた。

帰ってきたフルカネルリに対する見守の反応。実はこれでも最上級。

『……まあ、いつもはあ……寝たままだものねえ……』

異世界編 2 - 2 4 (前書き)

投稿、
重装トレース・フラクタクル

いえ、冗談ですって。

フルカネルリだ。記憶の資料を纏めては旅に出てを繰り返していたのだが、今回の旅の途中である頼まれ事をされてしまったので、暫く研究室に籠ってしようと思う。

《何があったのかナー？》

なに、見知らぬ婦人が死にそうな所に居合わせたら

「息子をよろしく願います」

と言われ、受け取ってしまったのだ。

……まあ、別に構わないがな。今度こそ普通の赤子であるわけだし、ただの子供を育てて見るというのもいい経験になるだろう。

『……プロトちゃんはあ……普通とは、言えないものねえ……？』
特に赤子の時に知識を植え込まれた辺りがな。

確かに手はかからなかったが、あまりにも手がかからなさすぎて拍子抜けしたものだ。前世の息子はもう少し手がかかった事を覚えているので余計にな。

研究と実験は意識を移した機械の私に任せて、私は新しくできた小さな息子の世話をする。あまりにも才能の無い子供だったのでその才の無さでどの程度の力をつけられるかの実験もできる。

……寿命を削ったり存在を削ったりして一時的に力を得るような危ない薬は使わないぞ？ 精々が魔術や魔法の才の無い者に無理矢理余剰魔力を付加する薬や余剰魔力の属性を変換して体を構成する魔力を増やし、身体能力を恒常的に上昇させる薬位しか使う気は無いとも。

……と言うか、最低限プロトかハヴィラック程度の身体能力は無ければここでは生きて行くことができないので嫌でもこの二つだけは使う。でなければ死ぬ。

流石の私でも敵対の意思を見せない他人から預かった子供に理由も無く薬を打つようなことはしない。

《あればやるんだー？》

ああ。

子供がいると時間が流れるのを早く感じると言うのはおおよそ事実であるようだ。異様に早い。

私が作った粥を口の端から溢しながら食べたり、おむつを変えてやったことが随分と懐かしい。

自分で動けるようになってからはまた随分と手がかかる。最低限この島で生きて行ける力を持たせているため移動速度や行動範囲が広く、最終的に楔を体に（物理的ではなく）撃ち込んで常に見ることができるようになってよっほどのことが無い限り放置しておくことに。

この島の獣たちはそれが私の息子だとわかっているので手を出すことはないが、小さな幼獣とはたまに喧嘩をしている。その時には好きにやらせるようにして、致命傷を負いそうになった時だけ助けから叱っている。相手の動きをよく見て、それに合わせて上手く動けるようになってからやれ。できないならできないなりに考えて動け、と。

勿論川で溺れそうになった時や湖に転がり落ちたときにはすぐさま転移で引き上げに行つたし、木から落ちたときには風で浮かせることもした。この後も勿論叱つた。自分のできることとできないことをしつかり理解して、できることをやれ。できないことは失敗してもいいように準備をしてからできるようにしてからやれ、等々。

ある程度大きくなってからはそういった技術を体に教え込む。主体は対人・対魔物用の剣術。力は人一倍あるはずなのでとりあえず長剣を用意して振らせる。基本の形は私が教えたが、正直あまり自信は無い。なぜなら私は科学者であり、戦闘は門外漢だからだ。

まあ、それでもある程度はできるが。

いつの間にか身長を越された。うむ、大きくなったものだ。昔は私の腕の中にすっぽりと納まるほどだったのに、今では私より頭二分ほど大きい。

……それでもまだまだ剣でも魔術でも負ける気はしないかな？

『……経験値が、違いすぎるわよね……』

そうだな。まだまだ私の千分の一も生きていないのだこの息子は。

この世界では一般的に十六で成人扱いとされる。

なので、十五になったときに剣と食料と魔法発動体を持たせて見聞に出した。

《……なんであえて十五なノー？》

平気だろうと思っていたし、丁度サバイバルや夜営の仕方、簡単な調理方法と獲物の取り方などを教え終わっていてきりがよかったからだ。

それに私の知ることを色々と教えておいたため、外でも十分にやっ
ていけると思われた。なにしろ結晶獣の成体を一対一で倒すことができるため、国一つぐらいなら敵に回しても力づくで解決できるだろう。

それでも見せる力は最低限に、時と場合を選んで潜む時は目立たず、
やる時にはあえて目を引くようにするなど戦闘の小技と意識も教えた。

あれはけして騎士等という良いものではなく、傭兵や戦士といった戦うものである。

……まあ、そうなるように色々と妙なことも教えてきたわけだがな。さて、私は暫く退場するでしょう。

付き合わせてすまん、ナイア、アザギ。

《別にいいヨー》

『……問題ないわよ……？……だって、瑠璃と一緒にだもの……』

…

そうか。

十五になった日の朝、いきなり母さんに家から放り出されることになった。よくわからなかったが、母さんは私が一人前になったと思っっているようだ。

……正直に言っつて、ちょっとそれはないだろうと思う。

いまだに母さんには片手一本と短剣だけで一方的に負けるし、プロト姉さんにもハヴィ姉さんにも勝てる気がしない。

家の回りにいる色々な色の大きな獣には一対一でならなんとか勝てるようになってきたけれど、相手が二体以上になると勝率はかなりゼロに近付くし、勝てたとしてもボロボロになるだろう。

そんな私が一人前と言われてもどうしても信用できなかつたのだが、母さんの有無を言わせない笑顔に押されて家を出ていくことに。

……自信無いんだがなあ……………。

過ぎたことで悩んでいても仕方ないので、とりあえずこの大陸を出てからどこに行くかを決める。

あまり治安の良くないところだと何があるのかわかつたものではないので、この大陸の次に治安が良いらしい三つ隣の大陸のある国に行くことにした。名前はたしか‘ランドリート’。

この国では騎士と魔術師の二つの軍団が存在し、直接的な戦争能力では三大陸最強と言われているらしい。

実際の最強はもうひとつの大陸に存在する魔王の率いる軍が最強だと母さんは言っていたが、あの結晶の獣より強いのがさらに居ると言うことだろうか。

……勝てる気が全くしない。

まあ、今はまだ伏して他の三大陸の国が弱るのを待っているだろうから動かないと思うが、最悪のことはいつでも考えておくべきだ

ろう。

あと、ランドリートの騎士団と魔術師団だが、非常に仲が悪いらしい。外に敵がいるのにそれで良いのかと思うが、他の国の軍はもっと酷いところもあるらしい。賄賂を用意すればどんな無能でも位が上がり、逆に用意しなければどれ程功績をたてても一兵卒のままといったところもある。

その点を考えればお互いに嫌い合い、反目し合っていても力を見せれば認められるランドリートは良い所なのだろう。

それに丁度もうすぐランドリートで大きな大会があるらしい。剣技大会であり、なおかつそれで良い成績を残せば国軍からスカウトが来ることもありえる。

そして何より賞金だ。なんと白金貨が二十枚。これだけあれば十八年は生きていくことに困らないだろう。

……もし優勝できたら半分は母さんに送ろうかなあ……。

……いやいやいや、まずはそこに行く所から考えないと。

…………やっぱり、船か？

漁船に乗せてもらって隣の大津に。すぐに抜けてまたその隣に。それを繰り返すだけであつたという間に到着した。途中の船では釣り用の竿と糸と針が貸し出されていて、殆どの者が釣りを楽しんでいた。なぜこんなものを始めたかと聞いてみると、昔々にこの船に乗った少女がキラキラ光る美しい竿で釣りを始め、釣った魚を美味そうに食べていたのを見た船員たちが真似をしたのが始まりらしい。

……何故か母さんがいつもの無表情で釣りをしている映像が頭に浮かんできた。

……いや、まさかな。

ランドリートに到着。さつさと大会に出場登録をしておく。銀貨を二枚払ったが、このくらいは許容範囲内。

大会開始は一週間後の五つ時らしいので、それまでのんびりこの辺

りの散策でもしていよう。どうせ宿を探しても大会の見物客や参加者で一杯になっていいるだろうし。

とりあえず落ち着いた場所を見付けたら剣の手入れでもしておくか。いくら非常に丈夫で異常に頑丈で常軌を逸して頑強だとしても剣は剣。壊れることもあるだろう。そういうことも一人旅の必須科目として習ったので一通りはできる。

……まあ、このあたりでいいかね。

大人びた少年はそう呟くと、さっさと剣の手入れをし始めた。

だが、少年は理解していない。自分の強さを。

自らの周囲にいたのが化け物揃いだっただけで、彼もまたこの世界のものとは思えぬほどに強いと言うことを。

彼は知らない。自分が一体ならなんとか倒せると言った結晶の獣の強さを。そしてその獣たちを作り上げた、自らの母親の強さを。

彼は、何一つとして知らない。

治安はあまりよくないが、ざわざわと騒がしく活気のある町。それが私がこの町に抱いた感想だった。

二日ほどかけてゆっくりと見回ってみたのだが、やはりここも綺麗なのは表通りとそこに面した路地程度でそこから先はやはり酷いものだった。場所によっては死体が転がっている所もあったし、明らかに血の跡であるう染みもそこらじゅうに存在した。

……と言っても私が何かするわけではないが。それに割りと多くの騎士団と魔術師団の者達が主要な通路の見回りをしているし私は必要ないだろう。

まあ、私が襲われない場合に限るが。

特に何もなく終わった。母さんの作ったチエインシャツは凄い。具体的には動きやすいが防御面では異常と言っても過言ではない程に硬い。切りつけられたら向こうの短剣の刃が折れた。

……母さんが切りつけた時は簡単に切れたような気がするが、母さんだから仕方ない。うむ、仕方ない。

襲いかかってきた追い剥ぎは適当に解体してその辺りに捨てておいた。叫ばれたりして人を呼ばれると面倒なので早めに消えてもらったが、構わんよな？

……それにしても母さんのお手製は凄い。何で切っても切っても切れ味が落ちないんだ？

………それもきつと、母さんだから、なんだろうな。

ひたすら歩き回ってようやくまだ部屋の空いている宿を発見した。

そこはかなりがらがら………と言うか私以外に一人も客がいない。

しかし私の勘はこの料理は美味しく、サービスもちゃんとしている

と告げている。何故繁盛していないかは知らないが、私が泊まる分には全く関係がない。

「いらつしゃいませ……お客様……ですよね？」

出てきたのは見た目は八ヴィ姉さん程の、少しやつれた顔をしている女性。身だしなみもちゃんとしているし、掃除も完璧。なのに何故ここには客がいないのだ？

……私には関係の無いことか。

「ああ。とりあえず一週間ほど泊まりたい。これで足りるか？」

銀貨を二十五枚出して、その女性に握らせる。

「こ、こんなにあつたら3ヶ月は泊まりますよ!？」

そうなのか？ ふむ、一月は三十日、三月で九十日、二十五を割ればおよそ27・78で銅貨二十八枚だが3ヶ月はと言ったところから考え、およそ二十五枚と言ったところか？

「まあ良い。それで一週間ほど頼む。少々延びることになるかもしれないが」

私がそう言うのと女性は少しだけ明るくなった声で返事をして、それからカウンターの顧客名簿を差し出してきた。

「あの、お名前を……」

「ああ、わかった」

文字を書くのはあまり得意ではないが苦手ではないので、羽ペンにインクをつけて名前を書きいれた。

私の勘は当たっていたらしい。

食事は美味しい接客も確り出来ている。掃除もちゃんとしているようだし、なにより安い。これがここまで安くて良いのだろうか？

と言うか、本当に何故この店が不人気なのか余計に気になってきた。

……うむ、厄介事の匂いがするな。母さんが持ってきた蛍光緑の薬と同じ匂いだ。

いや、確かにあの薬には度々助けられたが、正直に言って私はもう

あの薬は飲みたくない。早い味ってなんだ早い味って……。と言
か早い味なのか？ 確かにあれは早い味としか言えない味だが、
それでも早い味と言うのは……。まあ、いいか。確かにあれは早
い味だ。それ以外には表現できん。
それに今はこっちに集中せねば。

やはり厄介事だった。母さんはあんなに運が良いのに何故私はこの
ようなことに異様に巻き込まれるのだろうか？（フルカネルリの方
も大概です）

この宿屋はそれなりに古くからある宿で、この女性が祖父から受け
継いだそうだ。

受け継いだ後も平和に宿屋を続けていたのだが、ある日いきなり祖
父に金を貸していたと言う集団が現れ、法外な金銭を要求したら
しい。

当然その場は突っぱねたのだが、そこからそいつらの嫌がらせが始
まったらしい。

悪い噂を流され、店にいつまでも居座って騒ぎ、どんどん客足は
途絶えていった。

そしてさつさといなくなつてほしいと金を払うと言えば、前回に言
われた額より遥かに膨大な額を突きつけられる。

そうしているうちにどんどんと払えるあてと客は少なくなり、今は
こうして寂れているらしい。

（……やれやれ。私もお人好しだ）

そう考えながら立ち上がり、剣を掴む。

「少々外出しますので、夕食の準備をお願いします」

それだけ言い残して、彼はその宿屋を後にした。

正直、大したことはなかった。

皆遅く、皆鈍く、皆脆く、皆軽く、そして皆々弱かった。確かにこれが普通なら、あの母さんはともかく意外と過保護なハヴィ姉さんが私を外に出したのも頷ける。

これなら流石に負けようがない。恐らくもっと強い者は多く居るだろうが、それでも母さんやハヴィ姉さんほど強いものは早々出てこないだろう。

……出てこないと信じたい。

夕方になってその宿に行くのと、ちょっとした歓迎を受けた。あの話を聞いて帰ってくると思っていなかったのか、驚きが多かったようだが。

だが、やはり食事は美味い。ここを選んで実に良かった。

……大会まであと三日。それまでのんびり鍛練でもしながら待っていようか。

あの人達が来てからどんどん人が少なくなつた私のお店。数年前にはもっともつと人がいて、私が生きていくには十分すぎるだけのかせぎはあった。

でも、度重なる嫌がらせのせいでお客様はどんどん減って行き、今では名前どころかその存在すら知らない人が増えた。昔、お祖父様がこの宿を経営していた時にはこの宿を知らない人はこの町にはいなかったというのに。

それでも私はお店を続けて来た。しかし、お客様がいない宿はただ

の小屋。このままでは私が生きていくこともできない。

だから、今月いっぱいこの店を畳もうと考えていた時に、久し振りに扉が優しく開いて人が入ってきた時に、私は少しだけ嬉しくなると同時に、申し訳ないような気分になった。

この宿がなくなる前に、たった一人とはいえこの宿のことを覚えていてくれる人になるかもしれないという喜びと、あの人達が来たときに迷惑をかけてしまうという申し訳なさ。

きつと、今私の目の前にいる少年が最後のお客様になるのだろう。

ならば、私はこの店の最後のお客様に出きる限りの事をしよう。

そう考え、私は少年に今できる限りの笑顔を向けた。

少年はディオと名乗った。本来なら名簿に名前を書いてもらった時にわかるのだが、少年が書いた名前は私には理解できない言語で書かれていたため、直接名前を聞いたのだ。

……どこかでこの文字を見たことがあるような気がするが、思い出せないの後に回すことにした。今はお客様の事だけを考える。考えることができる。

……あれ？ 涙が出てきた……。嬉しいのに……。どうして？

私の作った料理をゆっくりと食べているディオ様（お客様ですから）を見ていると、少し前の事を思い出す。

前はこの宿に来る全員が、こうして幸せそうな顔をしてくれたものだった。

それが嬉しくて、私はまた掃除や料理に力をいれていた。

人を雇っていた頃は、その子と一緒に新しい料理を作ったり、どうすればもっとお客様に満足して頂けるかという意見を出しあった。

その時に喧嘩のようなこともしたけれど、私もその子も思いの方向は一緒だったので仲が拗れるような事はなかった。

けれど、彼女も嫌がらせが始まってしばらくして辞めていった。私はそれを止めることもなく、仕方ないと受け入れた。

その時から涙は流れなかったのに、今は悲しくないのに溢れてくる涙を止められない。

ふと気付くと、私の前に不思議そうな顔をしたディオ様が立っていた。

「何故泣く？ 話くらいは聞くことができるぞ？」

多分、私は凄く弱っていたのだと思う。冷たくはなく、かといって温かくもないディオ様の言葉に引かれ、今の状況をすべて話してしまった。

この店のこと。昔のこと。借金のこと。その事情を、全て。

何も言わずに私の話を聞いていたディオ様は、少しの間考え事をしているようだったが、やがて何も言わずに席を立った。

そして剣を掴み、出口へと向かって歩いて行く。

……そうですよ。こんな宿になって、居たくありませんよね………。

私の心は、黒く深い所に落ちて行く。

しかし、ディオ様は扉の前で立ち止まり、私に一言だけ言った。

「少々外出しますので、夕食の用意をお願いします」

ぱあ……と、辺りが明るくなったような気がした。

夕食の準備が必要と言うことは、夕食はここで食べるということ。

そしてそれは、またこの宿に戻ってきてくれると言うことだから。

私は、自分の顔が意識の外で笑みの形をとるのがわかった。

ランドリートの小さな宿屋的一幕。

大会当日。タルウイさん（宿の主人。数日の間に聞き出した）に追加で銅貨十枚を払って弁当を作ってもらった。母さんほどではないが、やはりここの食事は美味しいのでやる気が出る。食事はやはり大切だ。

食事が終わり出発すると伝えると、他に客はいなかったためタルウイさんが見送りに来てくれた。大会に出ることは言っているが、何故か異様に心配された。

……何故だろうな？

会場に行くと、受付でEと書かれた板をもらった。どうやら私はこの予選を受けることになるらしい。

予選の規則は至ってシンプル。多くの者と同時に戦い、残りが四人になるまで倒し続けるのみ。

武器はありで魔術も使えるならば使つてよし、殺人はできるだけ控えて欲しいが禁止はしていないし、およそ考え付く事はやってもいいらしい。

……なんと、買収や事前に雇った相手と組んでの予選突破も構わなという。

禁止事項は、わざと客に被害を向けるような行為や降参した相手への追撃。ただし降参した方も攻撃することはできず、反則行為は即失格となり酷ければ罰金もあるという。

勝利条件は相手の降参、戦闘不能（気絶しても動けて戦えれば続行）、十秒以上のダウン、死亡、それと早々無いらしいが場外。

何故場外が早々無いかというと、周囲が透明の魔術障壁で囲まれているからだ。

そのせいで場外になったときには既に戦闘不能になっていること

が大半らしい。

……母さんなら楽々壊してしまうのだろうな。あの程度。

そう思いながら大会規則の確認をしていると、やっと予選が始まるらしく大きな声が響いた。魔術で拡声をしているらしい。便利だな。ちなみに拡声は風属性の魔術で、ムラなく行うには多少の慣れと実力を必要とするもの……らしい。

母さんは狙った一人にだけ聞こえるように拡声と消音を同時にできるらしいが、正直あれはもう化物の域だと思えない。なんでそんなことができるんだ？

……母さんだからだな。そうとしか思えない。

……おっと、そろそろ行かなければ。失格になってしまう。

予選が始まった。私を弱者と見たのか、何人も私に襲いかかってくる。

……だが、この程度なら少し前の強盗紛いの詐欺師集団の用心棒の方がずっと強かった。

一人目の手から剣と鞘をもぎ取り、剣の柄で腹に一撃。悶絶させる。魔力を流し、身体強化。速度も力も十分だとわかったので、精度と思考速度を上げる。

ハルバードを降り下ろしてきた二人目はそのハルバードの柄に鞘を横から叩きつけ、軌道を逸らして間合いの中に入り込む。長柄の武器には接近戦だ。

……ハヴィ姉さんはいきなり武器をどこかへと消して格闘戦で圧倒してくるが、流石にそういった相手はそう多くはないはずだ。武器を使うより素手の方が強いなど反則にも程がある。

あり得ない話ではないので、一応考えには残しておく。

ちなみに何故自分の剣を使わないかという点、この剣は性能が良すぎるのでこの剣の性能頼りになってしまふのは良くないと思っただか。たとえば母さんの作品であるうと剣に使われるなど、少しはあるプライドが許さない。

と言うことでもぎ取った剣と鞘を使っているわけだが、それでもな
んとかなくなってしまふのは何故だ？ 母さん達を相手にしてそんなこ
とをすれば、漸く三十秒は持つようになったのを二秒まで縮められ
るのは明白だというのに……。

……まさか、ここに居る全員より母さん達は強い？

想像してみる。母さんが私の代わりにこの大会に参加している所を。
私が倒した者達をいつもの無表情で必要最低限だけ壊して行く母さ
ん。勝ち名乗りを受けてもにこりともせず、さっさと下がって行く
母さん。最強だと言われている騎士を近寄れないように遠距離から
魔法で攻め続け、倒してしまう母さん。

……ああ、簡単に想像できた。怖い怖い。

そんなことを考えながら横から不意を打つように飛びかかってきた
短剣使いの額と喉を剣の鞘で突いて悶絶させた。

俺はそこまで弱く見えるのかね？

その姿が予選会場に見えた時、誰もが失笑を隠さなかった。

いまだに成人していないだろう子供、それも持っているものは剣が
一本だけで鎧すら身に付けていない。そんな少年が参加して勝ち抜
けるほどこの大会は甘くないし、参加する選手も弱くはない。

だがそれでも周りの者はそれを止めない。実際に子供が参加したこ
ともあったし、それは周りにとって良い鴨になるからだ。

そう考えたものは非常に多かつたらしく、参加と同時に何人もその
少年に切りかかっていった。

しかし、今はどうだろうか。その少年は背にある長い剣を抜かず、
始めに襲いかかってきた相手から剣と鞘を奪い、それを使って一人
も殺すことなく全員を沈めている。

使い慣れていないはずの武器でそこまでの強さ。ならば少年が背中の長剣を抜いたときにはどれほどまでの強さを発揮するのか。少年は観客と選手達からのそんな視線を真っ向から受け止めながらも最初から最後まで全く精彩を欠くことなく戦い続け、そして本戦へと駒を進めた。

三十二人の本戦参加者の中に、少年の名前が刻まれる。その名前は誰にも読めなかったが、本人が付け加えた言葉からディオと読み方が付け加えられていた。

炎の大陸、戦の国、ランドリートの大会にて。

さて、始めようか。

大陸最強を決める大会。およそこの場に居る全員がこの大会をそう言うものだと考えている。

それだけではなくこの大会で優勝すれば白金貨で二十枚というかなりの金も入ってくるし、優勝できなかつたとしても本戦に参加できたと言うだけで確実に評判は上がる。上手く行けば王国の騎士団への道も開けて来るといっただけあって、その本戦に参加する者達は皆何かしらの強さを持っているし、大体は元々高い実力と評価を持っていることが多い。

例えばそれはギルドに登録されている冒険者の中でも高いランクを持っている。者だつたり、騎士団の中でも隊を一つ任されているものだつたりと様々だが、ここで頭角を表し始めるものがないわけではない。

そしてそんな見付けられていなかった才能を持つ者達は、今までに知られていた者達以上に注目されるものだ。

今も、参加者の控室ではピリピリとした緊張感が張りつめている。その緊張感の中心にいるのは、いまだに成人すらしていないような少年だつた。

一人、また一人と名前を呼ばれて控室から会場へと移動して行く。それでも少年は全く緊張の色を見せてはいない。

そして、少年の名前が呼ばれ、少年は会場へと歩いていった。

「……あのガキ、かなり強えな」
残ったうちの一人。Aランクギルド‘バロネッツ’の副団長、イザツク・ネルゲイがもう二人残ったうちの一人に声をかける。

「……ああ、そうだな、イザツク」
話しかけられた一人、王国騎士団長アルフレッド・ハーウエスが、まるで旧友に対するように言葉を返す。

それもそのはず。この二人は元は同じギルドの構成員同士だったのだから。

「……しかし、負けるつもりは無いのでしょうか？」

最後の一人、この大会で唯一の魔術師であるアクトリウス・ニユーロメルトが二人に声をかける。

「当然だ。この国の騎士団の長は、最強であらねばならん」

「やれやれ、やっぱアルフレッドはお堅いねえ。もう少し力抜いてこうぜ？」

「……とか言いながら、一番本気なのはイザツクじゃないですか」
「あ、バレた？」

けらけらけら、と笑っているイザツクだったが、その目はどう見ても笑っておらず、いかにして勝ち抜いて行くかを考えているようだった。

「……お、呼ばれたみてえだな？」

「そうみたいですな」

イザツクの名が呼ばれ、イザツクは控室の扉に手を伸ばす。

「……んじゃ、お互い当たるまでは生き残ろうぜ？」

「安心しろ。お前に言われずとも手は抜かん」

軽口を叩き合い、二人は獰猛な笑顔を浮かべた。

「……うーん、僕はどこで口を出せば良いのかな？」

ぽつりと呟いたアクトリウスの姿を確認し、片方はやや大袈裟に、もう片方は心底そう思っていたとわかる口調で言った。

「お、そっぴや居たんだったな」

「済まない、完全に忘れていた」

「あ、やっぱり？ うん別に良いよ？ 忘れられるのにはもう慣れてるしね？ でもあんまり忘れられちゃうと、僕も君達が怪我をしたときについっかかり回復魔法を使うのを忘れちゃうかも知れないけど、別に良いよね？ 何でかは知らないけれど君達がいつもこうやって僕を忘れる事があるんだから、僕が明らかに大怪我をしている君達を偶然忘れちゃったとしても不思議はないよね？」

「……いや、ホントすまん」

にこにこ笑いながらひたすら呟くことを続けるアクトリウスは、妙に怖かったらしい。

優勝候補、イザック「ネルゲイの遅刻の理由。」

勝ち抜き戦は計五回。一度負ければそこで終了。ただし準々決勝からは負けた者同士の戦いもあるようだ。

勝ち抜いて行った者同士の戦いを本戦、負けた者同士の戦いを順位決定戦と言い、たとえそれで最下位だったとしてもこの大陸で八番目に強い者として見られるようだ。

賞金は本戦出場者なら最低でも金貨で十枚は貰えるようで、そこから勝ち上がる度に増えて行くらしい。

つまり私はこの時点で金貨十枚は確実に貰えるわけだ。……死ななければ。

とりあえず、他の出場者達を観察しておく事にする。あまり苦戦しそうな者はいないが、それでも数人は中々に強いと思われる。

まずはすぐ近くに居る槍を持った背の高い男。私より頭一つは大きい。……いや、実際は周りの者達全てがその程度はあるので私の背が低いのだと思うが、その辺りは置いておく。

その男は明らかに軽装ではあるが、それは関節などを固めず動きやすくし、攻撃を弾くのではなく避けることでダメージを食らわないようにしてあるようだ。

その証になるかどうかはわからないが、その体は見える筋肉ではなく見えない筋肉が多いようで、まるで母さんが作った鉄の糸で編み上げられてできているロープのようにしなやかだった。

そしてもう一人。肉厚の大剣を背負い、筋肉質な体を全身鎧で隠した男。

こちらは恐らくある程度攻撃を食らうことを前提とした戦法をとるのだろう。そしてその上でそれらの攻撃を鎧で弾き、大剣による一撃を食らわせる。

筋肉質な体はたとえ鎧がなくともある程度の攻撃を弾けるようにと

鍛え上げられているらしく、ぎつちりと限界まで中身が詰まっている筋肉は鎧と擦れる度に何故か金属同士をぶつけ合わせたような硬質な音を立てていた。

……いや、鎧同士がぶつかっている音ではなく、本当に筋肉と鎧がぶつかっている音だ。冗談のようだが本当の話。

それと、前の二人とは違う方向で強く見えるのが一人。槍の男と同じように軽そうな鎧をつけている………恐らく男。

どうやらこちらは魔術師寄りらしく、素の身体能力はあまり高くはないように見える。

それでもこの大会でここまでこれていると言うことはそれだけの戦闘センスと身体能力の低さを補う強化、または詠唱の速さを持ち合わせているのだろう。

……もしかしたらどちらもち合わせた上でさらに奥の手があるのかもしれないが、私は母さんではないので流石にそこまではわからない。

そして最後に初めの方に呼ばれていた双剣使いとそのすぐ後に呼ばれた槍使い。

どちらも速度を重視した体つきをしており、特に双剣使いの方は瞬間の移動速度に、槍使いの方は突きの速度に目を見張るものがあるだろうと予測できる。

魔力による強化を含めればの話だが、素の私より速い可能性がある。

……あまり強い相手とは当たりたくないな。強い者は強い者同士、ぶつかりあつて引き分けでどちらも消えてくれるとありがたい。

選手全員の紹介が終わり、司会者が籤を引き、出てきた名前を呼びながらトーナメント表を埋めて行く。

……唐突な話だが、この大会は昔々から二年に一度あるらしい。そして前回の優勝者の名はアルフレッド・ハーウェスと言うらしい。

これはタルウィさんに聞いたし、司会者の説明でも言っていたことなので恐らく間違いではないだろう。

そしてその前回の決勝戦でアルフレッド・ハーウェスと互角の勝負を演じ、観客達を熱狂させた槍使いの名はイザック・ネルゲイと言
い、この大陸ではギルドに関係がある仕事に就いていて知らぬ者な
ど居ないと言うほど有名なパーティの副団長をしているらしい。

……そして、一回戦第七試合。私の試合の相手の名もイザック・ネ
ルゲイと言っらしい。

……あれか、あんな事を考えたのが悪かったのか？ それとも
名前が同じなだけの赤の他人か？

……私の運の無さから言って他人は無いだろ。恐らく本人だ。
やれやれ。困ったものだ。特に槍が相手と言っのがまた困った。

私の剣は反りが全く無く、厚みも重量もあまり無い。

その代わりに有り余るほどの切れ味と貫通力を持つが、重い攻撃は
できないのが特徴だ。正直、母さんはどうやって刃渡り25センチ
程度の短剣であの重みを出しているのが心底気になるが、できな
いものはできないので潔く諦めた。

かわりに力尽くで重みを出すようにしたが、そうして出した重い一
撃を母さんは短剣で弾き飛ばすのだ。

……せめて流してくれよ。自信無くすだろ？

前にそう言ってみたんだが、その時母さんは

「そんな事で無くなる自信ならさっさと棄ててしまえ、下らない」
だっさ。

……いい母親を持ったよ。

まあ、その事はひとまず置いておくとして、とにかく私の剣は普通
の剣よりやや長い槍ほど長くは無く、槍ほど近接距離の取り回し
には苦勞しないが普通の剣より扱いにくいという中途半端な仕様な
のだ。

そのため槍を相手にするとその間合いを抜けるまでが大変だし、抜
けたとしてもこちらの間合いを保つのも難しい。だから私はハヴィ
姉さんの相手は苦手だった。

……母さんの場合は逆に間合いを離さなければあっという間に終わ

つてしまったため、逆に相手をこちらの間合いに入れたままそれ以上接近させない戦い方を学べたわけだが。

……おや？ もしやこれは母さん達が狙ってそうしたのか？

……有り得るな。

まあ、やるだけやるとしようか。うまくやればなんとか無傷で行けるだろうし。

どうやら相手は武器に破壊不能効果をつけてはいないようだし、大して上等な物でもないようなので突き合わせてやればいつか折れるだろう。

戦争と戦闘の違いとはなんだろうか。

私の中のこの二つは、規模の大きさを分けられるものだと思っ
ている。少なくとも軍単位のぶつかり合いから戦争で、子供の喧嘩
や決闘のような個人戦は戦闘だと思っている。

ここでいきなり話は変わるのだが、一人軍隊ワンマンアーミーと言言葉を知っ
てい
るだろうか。

それは一人の圧倒的な戦闘力を持つ者が、たった一人で軍と同じか
それ以上の戦力に計算されているような状態によく言われるものだ。
つまり、千人からなる軍を一人で相手取ることができるような実力
者の事をこう呼ぶことがあると言っだけの事だ。

……さて、話をころころと変えて申し訳ないが、少々今の私達の状
態についての質問だ。

私達が今行っているこれは、果たして小さな戦闘だろうか？ それ
とも戦争の域に入るのだろうか？

……いや、確かに私と相手の一騎打ちなのだが、もはやこれをただ
の一騎打ちと言っではいけないような気がしてな。

一人軍隊同士の戦いは………どちらになるのだろうか？

「 それでは、第七試合の選手を紹介したいと思います！まずは
火の門より、あの有名ギルド、バロネッツの副団長にして最速の槍
の名手と名高いイザック・ネルゲイ選手！」

司会が俺の名を呼ぶのと同時に闘技場に入る。すると周りの客が一

斉に大歓声をあげた。うるせえ。

「イザック選手は前回・前々回とこの大会に出場し、常に好成績を残して来ており、優勝候補の一人と言えるでしょう！サイン下さい！」

また歓声。だからうるせえって。もう少し静かにしてくれや。あとサインは勘弁だ。面倒なんで。

「……対するは、水の門よりデイト選手です！」
俺の時とは違い、かなり少ない拍手に迎えられてあのガキが出てきた。

「デイト選手については全く資料がございません！出身、年齢、戦法、全てが不明です！」

客どもがざわざわとしているが、今の俺の中には入ってこない。

「選手の紹介が終了しました！それでは、一回戦第七試合……」

俺は槍を構え、腰を落としてガキを見据える。対するガキは背中の獲物を抜くと片手で胸の前に手を置き、切先を俺に向けると言うレイピアのような構えをとった。

……つまりあれか？ このガキは俺と突きの速度で勝負しようってのか？

ビリビリと空気が引き締まる感覚。殺意は感じねえが、その代わりに異様な気配を感じ取れる。

……良いぜ？ その勝負、受けてたってやろうじゃねえか。

司会が開始の合図を出すまでの時間が長え。イライラしてくるほどに。

そしてようやく、司会の口が動き始める。

「開始！」

それと同時に俺はガキに向けて突っ込み、ギリギリ俺の間合いに入った瞬間に槍を突き出す。

それは一直線にガキの喉元へと奔り、ガキの喉を貫こうとした所で剣で正面から弾かれ、逸れた。

突き切った所から風が溢れ、矢のように飛んで行く。

しかしそれすらも首を捻ることで避けられた。

「今のは、風の槍？」

「ああ。まさか初見で避けられるとは思ってなかったぜ」

「……まあ、似たようなのを見たことがあるから」

そしてまた俺が突き、ガキが槍を弾く。しかも一回目以降は風の矢すら初めから当たらないように。

……このガキ、マジでやりやがる。

速度を上げてもついてくる。狙いを散らしても追いついてくる。槍の突きが剣の突きに弾かれる時の火花で視界は良好とは言えないし、五月蠅くなり続ける金属音で耳が痛くなってきやがる。

だが、それでも楽しい。まさか団長とアルフレッドの奴以外にここまで強え奴が居たなんざ、全く想像していなかった。

更に速度を上げ、自分でも手が霞むほどにまで速度を上げてもそのガキはまだついてくる。

……そんならいつちょ、後先考えねえ全開でやるかあ！

おお、早い早い。素晴らしい速度だ。

風の槍を使っているため軽くて丈夫と言う所と、さらにそれから発射される風の魔術が厄介だが、ハヴィ姉さんが同じような武器で近接中距離遠距離問わずの弾幕攻撃を避けるか打ち落とす訓練をしていなかったら多少危なかったかもしれないな。

真正面からやるのではなく擦らせるように弾いているためあまり重さは感じないが、正面から受け止めたら恐らく衝撃が強く弾き飛ばされることもあるだろう。

……む、まだ速度が上がるのか。だが、全て見える。この程度で見えなくなっていたら、私は確実にここにはいない。

が、辛いものは辛い。右手一本であるため疲労も早い。まだしばらく

くは続けられるが、一応早めに決着をつけた方が良いだろう。
……ならば、ここからはこちらからも上げて行くとするか。

戦いは加速する。もはや素人には二人の腕から先は霞んで見えていないし、見物に来ていた騎士や魔術師、それに冒険者達も何が起きているかはわかってるも殆どが残像か実体かの区別が付かないほどの速度。

そこから更に加速する。もはやそれを‘観戦’できているのは僅か三人だけになっていた。

そのうちの一人、魔術師アクトリウムが隣の男に向けて呟く。

「……君なら勝てる？」

それは、自分が戦った場合、確実に負けると予想しての言葉。弱音にも似たそれを、言葉を向けられた男は鼻で笑う。

「知らん。あれが本気ならばまだなんとかなるが、あれは明らかに本来の戦い方ではないだろう」

そう返された言葉にアクトリウムは目を見開く。この男が　ランドリートの騎士団長であるアルフレッド「ハーウェス」が、まさかそんな言葉を返すとは思っていなかったと言う顔だ。

「……何を不思議そうな顔をしている。世界は広い。私でも勝てるかどうかかわからぬ相手など、掃いて捨てるほど居るだろう」

「最強と名高い騎士団の団長に勝てる相手が掃いて捨てるほど居てたまるか」

アルフレッドの言葉にアクトリウムがズバリと返す。

実際、アクトリウムはこの男が負けた所を見た事がなかったし、そんなことができる相手を想像することができなかった。

しかしそれでもアルフレッドは変わらずに言う。

「いや、少なくとも一人。そしてその人が言っていたことが正しいのならば更に二人、私より強い者が居る」

「うそお？」

「……恐らく、本当だ。少なくとも私はまだ短剣一本で重装備の三千人の軍は相手取ることとはできない。無論、防具は無しだ」

それを聞いたアクトリウムはしばらくぼかんとした顔でアルフレッドを見つめて、

「……それは、人間？」

そう呟いた。

その問いにアルフレッドは苦笑と共に答える。

「さてな。本人は人間だと言っていたが、実際はどうなんだろうな？」

「名前は？」

アルフレッドはすこしだけ考える素振りを見せて、それから一言で答えた。

「フルリィカーネルだそうだ」

その戦いの終わりは唐突だった。連続する衝撃に耐えきれなくなったのか、相手の持つ槍が悲鳴をあげた。

「うおっとお！？ まさかこいつに輝が入るとは……」
パキッ、という小さな音に気付いたらしく、相手の槍は今まで以上の速度で離れていった。

「ちよ、待った！ちよっくら確認だけさせてくれ！」その言葉に私は追おうとしていた足を止める。恐らく自分の武器を大切にする者ならば、あの傷で終わるはずだ。

相手が輝の入った槍を見つめ、傷の深刻さを判断している間、私は静かに構え続ける。いきなり襲われても対処ができるように、視野は広く、意識は全体に散らしながら集中させる。

……今日は調子が良いらしく、いつもより色が鮮やかに見える。暫く槍を見ていた相手は、コリコリと頭を掻きながら呟いている。

「……あー、これくらいだったらなんとかなるか？ かしなあ……まあ、アイツに見せてから考えるかね……」

アイツ？ それはその槍を作った本人か？

私がそう考えている間に確認は終わったらしく、残念そうな顔をしていた。

「あーあ、もうちよっと試してみたかったんだがなあ……これ以上やったらこいつが使い物にならなくなりそうだしよお……参った。俺の負けだ」

その言葉が聞こえてすぐ、司会から相手の棄権が発表された。

……ふう。ようやく終わったか。

舞台から降りた俺は、すぐさまアイツのところに向かった。この場合のアイツとは、今しがた輝を入られた‘風魔の槍’を作り上げた魔術師兼鍛冶師であり、俺の槍の他にアルフレッドの‘炎鬼の大剣’や団長の‘雷獣の扇’、アクトリウムの‘氷猿の杖’を作った我らがパーティ御用達の鍛冶師の事だ。

今では他の客の相手もしているが、俺達はアイツがまだまだひよっこだった頃から世話になっている、言わば上客って所になっているらしい。

……いや、アイツにはよく世話になったぜ……俺やアルフレッドが武器を荒く使うと研ぎに出した時やぶっ壊れちまって新しいのを買いに行くときに怒られたり、傷だらけで行ったときは心配してくれ、たし、アイツ自身がかなりの使い手だってんで対魔術師用の訓練や武器の融通も効かせてくれたしな。

……いや、本気でアイツには頭が上がらんね。上げてるが。

……今回はどんなこと言われんだかなあ……。

「……へえ、つまり強いとはいえ所詮は子供と思って油断してたら想像より強くて、私の作った中でもかなり壊れにくいはずのこれを壊すほどの事をしたと。そう言うわけで良いのね？」

私がニッコリと笑いかけながら聞くと、イザツクの馬鹿はばつが悪そうに頷いた。

……まあ、こいつ相手にこういう説教をするのは何回と知れないほどやってるけれど、今回の態度ほど怒ってはいない。試合だし、実際に私が強化した鎚を使って全力で叩いても歪み処が傷一つ入ることが無かったそれに輝を入れるような化物だ。むしろそこで棄権しなかった方が怒る。

そんな思いのなか、私は手に持った槍を眺める。

「……とりあえずやるだけはやってあげるけど、元通りに戻るかかって聞かれるとちょっとわからないわよ？」

正直言つて、自信は無い。これは私の作った中でも文字通りの最高傑作とも言える作品だ。運が良ければ元通りになるか、最高に運が良ければ性能が上がるが、悪ければ能力も槍自体の強度も劣化し、最悪二度と槍の形に戻らないかもしれない。

……まあ、私の仕事はそんな頑固で難しい武器の機嫌を直してあげることだし、頑張るとしましょうか。

「すまねえ！恩に着る！」

「良いわよ別に。どうしてもって言うなら、これからも私の工房をご贖員に……ってね」

久々に忙しくなるわね。風魔の槍の無いイザツクってなんか格好つかないし、うちに置いてある貸し出し用の槍じゃあイザツクの握力や速度に耐えきれないで潰れたり割れたりしちゃうからね。

それに、こんなに良いお客さんを武器が無いせいで殺しちゃうのはちょっとばかしもつたいたいと思うし、一応、友達だしね。

アイツ＝スコッチウエルズの徹夜再開の原因。

今日は一回戦のみで終了。私の知らない技や魔術がいくつもできてたため、その対策を考える。

「いかがですか？」

「美味しいですよ、タルウェイさん」

ああ、美味しい料理はやる気と元気の源だな。母さんも不味い料理と美味しい料理、栄養価が同じなら当然美味しい方を取った方が研究の効率も上がると言っていたし、実際不味い料理ばかりだとやる気が失われて行くのがわかる。

「……ん、美味しい」

私の言葉を聞いたらしいタルウェイさんは、嬉しそうにニツコリと笑顔になった。

食べ終わってから武器の状態を確認する。が、

「……輝どころか歪みも刃こぼれも全く無いって……」

そうなのだ。あれだけの速度でかなりの回数打ち付けあったと言うのに、この剣には刃こぼれ一つ見当たらない。

それもあの槍はかなりの魔装であり、今までどれだけ荒っぽく使ってきたのかは知らないが一度も輝が入ったことが無いといった事を口にしていた。

それに輝を入れるような威力を出したと言うのに、こちらは全く堪えていないように見える。

……流石は母さん。妥協しないね。

剣を鞘に入れ、私は故郷の母を想った。

……そう言えば、母の名前はなんだったかな。いつも母さんとか呼んでいなかったせいで全くわからない。ついでに年もわからない。なんと言ってもあそこの住民は基本的に長命である上に老化が

遅い者が多く、小さな獣ですら私より長く生きていたということもざらにあつたから外見からの予測は全くできない。島で最も長生きな者は母だと聞いているが……まあ、あの母なら一万年生きていると言つても信じられるな。

一回戦は全て終わっているので今日からは二回戦が始まる。今回の私の相手は私と同じような剣を持っている男。名前は知らないし覚えていない。当然覚える気も特に無い。

それに、これを覚えていても仕方が無いだろう。面倒なことになるくらいだろう。

貴族のお坊ちゃんには馬鹿が多いと聞いたが、これはどうなのだろうな。意味も無く威張り腐って反感を高値で買う馬鹿か、黒い中身を嘘の仮面で隠しきれている嘘吐きか、それともそれ以外か……。

そう考えながら始まった試合だったが、昨日のあの槍使いの男に比べると未熟も良いところだったのですぐに終わった。剣を払い、相手の懐に潜り込むと同時に鳩尾に抜き手を一発。昔私も母さんにやられたことがあり、あまりの痛みに気絶してしまったほどのそれを一発。

……どうやら口だけと言うわけでもなく、それなりの力を持っているようだ。おそらく近場に自分より強い相手がいなくなったため、純粹に強い相手を見に來ただけらしいな。あわよくば優勝するか、負けたとしても強そうな者に顔を覚えてもらうことくらいはできる。それどころか弟子入りを頼むことすらできるだろう。

……つまりこの貴族はあれだ。バトルジャンキー。しかも脳筋じゃなくって頭のいい馬鹿。しかも自分の限界を理解して限界まで突っ込んでくる型の。

ちなみに私はどちらかと言うと感情的な慎重派、だがよく暴走するため、母さんからは頭が良いが要領の悪い馬鹿等と言われている。誉め言葉ではないよな。

ちなみに母さんにそう聞いてみた時には

「確かに誉め言葉には聞こえないかもしれないが、この世界には馬鹿だからこそ解決できる事というものがある。覚えておくといい」と言われた。よくわからなかったが、一応覚えておいた。母さんの言葉に間違いはない　とは言わないが、今までに言った言葉の中に嘘がほとんど無かったのは事実。たまに冗談を言ったりもするが、とても優しく、可愛らしく、厳しい母だ。……本当に今更だが、名前くらい聞いておけばよかった。私はそんなことを考えながら、銀の匙亭の柔らかな布団に潜り込む。……よし。次に母さんに会ったときに名前を聞こう。そうしよう。

階段を上っていくディオさんの背中を見つめる。最近、ふと気が付くとあの人の姿を追っている自分が居ることに驚く。

しかし私はそれを表に出すことをせずに、掃除と洗い物を始める。ディオさんがここに泊まるようになってから、毎日のようにこの宿に来て色々なところを荒らしていたあの人は来なくなった。それだけでずつと気が楽になる。

私にはわからないけれど、きっとディオさんが始めに外出した時に何かしたのだと思う。

けれど私は何も言わずに、ディオさんをもてなす。きつともうあの人はもうここには来ないだろうし、うまくすればまたお客さん達も戻ってきてくれるかもしれないけれど……私はこの店を閉めるつもりだ。

だから最後のお客さんであるディオさんには、最高のおもてなしと、できることならば最高の思い出を持っていてほしい。

この店がなくなっても、あの人だけでいいから覚えていてほしい。

この場所に、銀の匙を看板に掲げた宿があったということを。
たとえその名前を忘れてしまっても、私のことを忘れてしまっても、
この場所に宿があったということだけは……どうか、覚えていて
ください……。

私は神様に祈る。今までは何度となく呪ったくせに、それでも祈る。
……さあ、お仕事を再開しよう。ディオさんに喜んでもらうために。

健気なタルウィさん。

三回戦、四回戦と戦ったが、どうも一回戦の相手ほど強くなかったらしく大した手間ではなかった。

ただ、五回戦……つまり決勝戦の相手はそう簡単にはいかないだろう。少なくとも一回戦で戦ったイザック・ネルゲイと同等かそれ以上の相手であるはずだ。

なにしろその相手こそ、前回の優勝者でありこの国の誰もが（基本的に仲の悪い魔術師すらも渋々ではあるが）認める王国最強の男。アルフレッド・ハーウェスだからだ。

武器から見てあまり速度は無いような印象を受けるが、おそらくそんなことはないだろう。少なくとも鈍重な攻撃だけを繰り返すような者が最強の座に付くことができるとは思えないし、速度を補えるほどの堅固さと一撃当たれば終わるといふ威力を両立させるような者でなければそういった戦法すらも取れない。

つまり、最低でも全体的にはイザック・ネルゲイと同等の速度とスタミナの持ち合わせがあるということが予想できるわけだ。それにあわせて早々抜けないと有名な防御と鎧、そして体術の上手さ。強敵だろうな。

……正直、母さんよりはましであることを祈るしかない。

母さんの場合、全身の力を振り絞っての攻撃を体を受けても傷一つない上に細い鉄の棒で思い切り鉄塊を叩いたような衝撃がこちらに来る。体勢を崩しもしないし反撃までしてくるのだ。勝てる気がしないと言つか無理。色々無理。

まあ、こうして食らってくれること自体が全くと言っても良いほどに無いが。まず避けられるか流される。そして反撃を食らう。

………何で全力で強化した俺の速度に素で付いてこれるんだろうな？ 本当に人間なのか？

全身鎧で無精髭のこの人がアルフレッド「ハーウエス。固っ苦しい
気配がするので冗談が通用しなさそうだ。こういう人間はあまり得
意ではないが、けして苦手ではない。ただ、やりにくいだけだ。
互いに何も言わずに剣を抜き、構える。今回は相手が大剣というこ
とを考えて突きではなく払いが出しやすい形にする。大剣の一撃を
真正面から受け止める何てことは馬鹿か止められるという自信のあ
る奴しかやらないだろう。ちなみに私はその方が楽だから払うよう
にしている。

……試合が始まった。

「……私はアルフレッド「ハーウエス。ランドリート王国騎士団団
長だ」

「……やれやれ面倒だな……ただの旅人だ。ディオと呼んでくれ」
二人はそれだけ言っと、両手に持った剣を握る手に力を込めた。

始めに仕掛けたのは、武器の間合いで劣るディオ。高速で近付いて
剣を振るうが、アルフレッドの持つ大剣に弾かれる。

突きで無かったとはいえ、自分の武器より遙かに軽い武器の速度に
付いてくる。それだけでアルフレッドの実力がかなりの物だと理解
できる。

しかしディオも弾かれた勢いを利用して再び逆方向から剣を振るう。
そして再び大剣に弾かれる。

今度は大剣が高速でディオの頭を縦に割ろうと振るわれるが、大剣
の横腹に剣を叩き付けて軌道を逸らせる。

お互いに避けようとはせず、ただひたすらに剣を振るう。

攻めるために、防ぐために、何度も何度も繰り返す。

「……これだけやっても折れないか……いい剣だ」

「そっちのも。こいつと打ち合ってよく斬れないな」

「誰の作だ？」

「母さんの手作りらしい。曰く、とても普通の研究者作の丈夫な剣だ」と

剣を打ち合いながら言葉を交わす。打ち合う音が五月蠅いのに、なぜかこの二人の言葉だけは邪魔されることなくお互いの耳に届いた。「そうか。……お前、騎士団に入ること考えないか？ お前ほどの腕なら歓迎するぞ？」

「いきなり勧誘か？ ……まあ、どうせ行くともないし、考えておくとしよう」

ニヤリと笑い合い、口を閉じる。ここからは更に速度が上がって行く。

二人共に避けるような素振りが全く見られなくなる。そして急に武器のぶつかりあう音が轟音に変わった。

まるで一度ぶつかるごとに鐘を突いているような音が響き、振るえば風切り音までもが観客の耳に届く。

「……おいおい。俺の時は本気じゃなかったってか？」

「おや、イザックじゃないか。アイツには許してもらえたのかい？」

「……頼む。思い出させないでくれ……」

「……ああ、御愁傷様」

その答えでおおよその想像がついたようで、アクトリウムはイザックの頭を撫でながら苦笑する。

「……野郎に撫でられて喜ぶ趣味は無いぜ？」

「安心しなよ。僕にはある」

「…………は？」

「冗談。びつくりしたかな？」

アクトリウムはクスクスと笑った。

「……おい、ほんとにそういう趣味無いんだろうな？」

「あ、アルフレッドの勝負終わったみたい。あの子魔術も使えるんだね」

「無視すんなコラ」

観客席での出来事。

「おい、本当に無いよな？ 本当に無いんだよな！？」

「あつはつは。無いんじゃないかな？」

「無表情で笑うなよ感情込めろよ怖えんだよ！！」

大会で優勝し、白金貨二十枚を受け取った私は今。

「お前達！こいつがこれから新しく騎士団に入ることになったデイオだ！」

……なぜか、いきなり騎士団に入ることになっていた。

……本当に何故だ？ 正直に言って理解しがたい。

……まあ、面倒だとは思うが別に嫌ではないので、構わないと言えば構わないのだが。

事の始まりは簡単だ。試合の途中で言っていた騎士団の入隊を進める言葉。どうやらあれはかなり本気の事だったらしく、決勝戦が終わってすぐに私の所にやって来た。

……最後に私が使った魔術は確かに急所には当たらなかつたとはいえ直撃のはずだったのだが……なぜここまで傷が少ない？ 少しばかり自信を無くしてしまいそうだ。

そう思っていたら騎士団長についてやってきた魔術師が苦笑して教えてくれた。どうやら岩の塊の殆どを大剣で弾き飛ばし、残った岩は鎧と筋力に任せて無理矢理弾き、最後の爆発は衝撃と爆風で気絶してしまつたが鎧が致命傷からは守ってくれたらしい。

……最後の爆発で多少のダメージと気絶だけ……なんだ、この騎士団長も化物か。

それからあれよあれよと入団が決まり、こうして多くの者達の前で紹介されているわけだ。

「……なお、デイオには最初に全員が受ける叩き上げを受けてもらう。いいな？」

「別に構いませんが暴言吐かれたら切れますよ？」

いやこれは本当。旅の途中で母さんの悪口を言われた時に気付いたんだが、どうも私は家族の事になるといきなり沸点が低くなるらしく、その男と私を止めようとした者全て跡形もなくなってしまうた。その店も含め、辺り一帯が。

その後は当然逃げた。幸い（？）目撃者など一人も残していなかった。たので何事もなくこうしているが、あれは反省しなければならいだろう。

……なぜ私はあの場で殺してしまったのだろうか。もっと痛々しいことはできなかっただろうか。

そう考えると私はまだまだ精神修行が未熟だと思う。

とはいえ、母さんたちを馬鹿にされて切れない私は私だろうか？

母さんは昔友人を馬鹿にされたときにその相手の家族と三十親等以内の家系全てに衰弱の呪いをかけてやった事があるらしいが、私も同じようにした方が良かったか？

……今更だな。あまりにも今更過ぎる。もう既に終わった事だ。そんな事を言っている暇があるなら剣を振っている方がよほど建設的だ。面倒だし。

叩き上げの試練を受けてみたのだが、大したことはない。母さんの特訓の下から三番目の方がよっぽどきつい。

……ちなみに内容は島巡り。島中を歩いて渡り、七色の結晶の体を持つ魔物達の長と戦ってくると言うものだ。

正直に言って、死ぬかと思った。むしろ死なないわけがないと思っ
てしまうほどに厳しかった。いやまあ生きているが。

因みに抜け道があり、戦ってくるだけなので勝たなければいけないわけではない。そこで見つけては喧嘩を売ってすぐさま逃げ出すと言う事を続けたのだが、それでも死ぬかと思った。特に無色と黒の長。

魔力そのものを固めて作った槍をあらゆるところから撃ち出してくるのも、どこまで逃げてても影を使つての瞬間移動で追ってくるのは

反則だと……。本当に死ぬかと思った。

もちろん他の長も強かった。白の長はあり得ない速度で突撃してきたし、黄の長はいきなり地面に吞まれて潰されそうになったし、赤の長は超広範囲を焼き払う勢いで炎をぶちまけてきたし、青の長は津波を起こして危うく飲まれるところだったし、緑の長はなんといきなり周囲を真空にしてきた。後0.2秒遅かったら内側から弾け飛んでいた所だ。

まあつまり何が言いたいのかというと、潰れるまでひたすら走るとか周りの騎士達の三百人抜きなんて楽々できると言うことだ。

「……化物か」

「あの魔術の直撃を受けて二時間で自分の足で動けるような人には言われたくない」

「……恐らくだが、お前もできるだろう？」

「当然だな」

叩き上げはこうして三百人も騎士達のプライドがへし折れる音と共に終了した。

「……どうやらディオは元気でやっているようだ。良いことだ」

「そのようですね、造物主様」

フルカネルリは研究所の鏡の前でのんびりと紅茶を啜りながらディオの行動を覗いていた。

「いやー、それにしても世界って狭いネー？ あの騎士団長って昔フルカネルリに喧嘩売ってきたパーティーの一人でシヨー？」

「……ああ……道理で、どこかで見た気があ……するわけねえ……」

「ああ、そうだな」

そこには当然のようににこにここと笑っているナイアと空中に浮かびながら陽炎のように揺れているアザギもいる。全員が実体化しているが、ハヴィラックもプロトも驚いた様子は見せていない。

「……気紛れで生かした男だったが……随分と強くなったようだな」

「目標があると、人間は伸びやすくなるからネー」

「……あらあ……？ ……亡霊だって、おんなじよあ……？」

「もちろん神様だっておんなじサー」

「そうか」

フルカネルリとナイアは鏡を見ながら幽かに笑う。

「……さて。そろそろ研究に戻るとするか」

久々に登場フルカネルリさん。こちらは異世界でもやっぱりいつも通り。

異世界編 2・36 (前書き)

少し書き方を変えました。

叩き上げを（決闘で教官を全員叩き潰して無理矢理）終わらせた。

今の私はランドリート王国騎士団の七番隊隊長だ。いきなりの出世だがそれは能力があれば誰もが持っている権利であり、上に上がれないのは自分達の能力が足りていないためだと嫉妬はするが納得するらしい。そして他人を蹴落とす暇があるなら自分を鍛えて力をつけるようだ。

無論能力とは個人の戦闘能力ばかりではなく、指揮能力や策の立案や書類仕事も含まれる。

……なんと潔い国風だろうか。驚きだ。

騎士団の朝は早い。毎朝日が昇る前に目を醒まし、早朝の訓練に明け暮れる。これは強制ではないが、やらなければやらないほど周囲との力の差が離れていくだけだと全員が理解しているため参加しないものはいない。

無論私も参加する。ただし、他の者とはかなり違うやり方だが。

「隊長殿！それはいつたい何をしておられるのでしょうか！？」

私がいつも通りに鍛えていると、七番隊の隊員の一人が声をかけてきた。

私はそれにちらりと目をやってから視線を元に戻し、一応説明する。

「体内に魔力を溜めて、外に漏れ出さないように全身を循環させているだけだ。上手くやれば僅かだが魔法耐性が付くし、体力や頑丈さも付く」

……と、母さんが言っていた。母さんはこれを体を動かしながら完璧にやって見せるが、私は完璧にやるならば動きを止めなければできない。

……情けない事だ。

そう思っている間に私に話しかけてきた隊員は私と同じように座り込み、目を閉じてぶつぶつと呟き始めた。

「……体内……魔力を……抑えて……流す……」

どうやらぶつぶつと呟いているのは私の真似をしようとしているらしい。だが、これは早々できることではない。

まず魔力を使うと言うと、殆どの者が魔術を使う時と同じように魔力を練り上げようとする。

しかしここで大切な事は、魔術を使う時と言うのは必ず魔力を外に出すと言う事だ。

そのやり方では永遠に体内に魔力を流すことはできないし、外に出した魔力はかなり操りづらい。

……無色の結晶の獣の長は当然のようにやっていたが、あれは例外だ。母さん曰く、あれは創造神に匹敵する神だそうだし。

そんなわけで体内に魔力を流す時は、体の外に出す門以外に体内に流すための経路を作ってやらなければならない。強化と殆ど同じだな。

ただし、作った経路の容量以上の魔力を流そうとすると体に痛みが走るし、少なすぎれば効果は殆ど無いので匙加減が大切だ。

朝の調練が終われば朝食となる。しかし食堂で作っているそれはなぜか異様に美味くない。舌が肥えたか？

仕方がないので自作する。材料さえ持ってくれば食堂の厨房を使う

ことはできるらしいので、遠慮なく使わせてもらう。透き通っていない食事は中々慣れないが、美味しいものは美味しい。

……料理と言えば、銀の匙亭のタルウィさんは元気だろうか？ 元気ならばいいのだがなあ……。

……また今度行ってみることにしよう。あそこの料理は美味しいからな。

隊によって差はあるが、七番隊では昼に見回りと言う名の散歩がある。決まった道を歩くので散歩と言って良いのかどうかは知らないし、泥棒や罪人が居れば取り締まらなくてはならないが殆ど散歩のようなものだ。

「……いや、普通隊長だったらこんなこと下っ端に任せて鍛練でもやってますぜ？」

「そうか。まあ、他は他、私は私だ」

そうだろう？ 副隊長。

昼食後は自由時間。ここで騎士団員の行動はおよそ二つに別れる。一つはひたすら剣を振ったり走ったりしている者達。もう一つは全力で休んでいる者達だ。

まあ確かに剣を振りたい気持ちもわかるが、やり過ぎると筋肉が摩耗したり体を壊したりするのであまりおすすめはしない。その時の体調と当日に行った訓練量から判断しておくべきだな。

ちなみに私は訓練側だ。体をあまり動かしていなかったのでひたすら速く剣を振る。

「隊長、なんか隊長の剣から出てるんですが、風の魔装ですか？」

「いや？ ただの丈夫で切れ味のいいだけの剣だ。速すぎて風の刃でも出てるんだらう。いつものことだ」

「……やっぱ化物ですね」

母さんはこれを突きでやっていたんだがなあ……。それに比べればまだまだ……。

……よし、目標は突きで二十メートル先の木の板を割ることだ。それを目指して頑張ろう。

夜になれば皆眠る。とは言え誰も警戒していないわけではなく、専門に何人もの兵がこの王都を見回り、外からの侵入者への警戒をしている。

私達は専門ではないので夜には眠るが、それでも敵襲などに備えてすぐさま起きて出動できるようになっている。

……明日も早い。速く眠るとしよう。

四十万アクセス記念外伝

これは昔々の話。まだまだナイアが幼くて、あんまり物事を深く考えなかった頃の話。

邪神にも色々な嗜好を持つ者達が居る。

例えばそれは研究だったり料理だったりと実に様々だが、基本的に死んでも死ねないほどの力を持つ最高位の邪神達はその果ての無い寿命を活かした果ての無い物を趣味とすることが多い。

ここに居る者もそうだ。

ありとあらゆる世界の垣根を越えて集めた本を一心不乱に読んでいる。

それは研究書であったり、魔導書の類いであったり、児童書であったり、下らない三文小説であったりと様々であったが、どれも出てくる度に一瞬にしてその男に捕らえられ、一瞬で情報を吐き出し、その内容を咀嚼され、それが終わればその男の興味はすぐさま次の本へと移動する。

わざわざ一つ一つを手にとって読んでいくのは、それがただの暇潰しでしかないからで、暇潰しのために集めた本を一瞬で読み終えてしまうのは馬鹿らしいからであろう。

そんな男のすぐそばに、いつの間にか誰かが立っていた。

「……ナイアか。どつたの？」

「シー、暇潰し？」

「そか。ま、好きにせ」

「お言葉に甘えるヨー。ノーデンス」

ナイアはふわふわと空中に座り、ノーデンスが読み終えた本の山から適当に一冊引きずり出した。

「……ふーん。あの世界のパロディカー。どっからこんなの見つけてくるのサー？」

「……適当に呼び込んだら混じってた」

「……へー」

会話が途切れる。しかしそれは嫌な沈黙ではなく、ただ話す意味がないから話さないというだけの、本好き同士ならば良く在る沈黙だ。ぱらぱら……と、流れるようにページが捲られる音が重複する。

「……人間ってサー、色々面白い解釈をするよネー」

「……そだな。ワケわからん事もあっけど、基本的に面白い方向から面白いことを考えるかな」

「何の役に立つのかって事に本気で取り組んだリー、凄いことができることをあっさり放り出したリー……」

「……そんで、無駄なことからオモロイもんを作ってた……」

「そうそウー」

それだけ話して二柱は黙る。ぱらぱらとページを捲る手は止まらな
い。

「……そう言や、お前、クトウグアの惚れた女の名前知ってるらしいな？」

「次その話をしたら、いくらノーデンスだって言っても容赦無く虐めるよ？」

「……了解。もー言わね」

「賢明な判断だネー」

……。

「……で、誰に聞いたのかな？ ヨグソトスは多分話さないだろっし、先生？」

「……カマかけたって言ったらどうする？」

「うーん……………よし、シヨゴスさんにあることない
ことぶちまけようかナー」

「それはマジ勘弁してくれ！」

「土下座って知ってルー？」

ナイアがそう言った瞬間にノーデンスの姿が消え、ナイアの足元で
土下座をしていた。

「……………別にやれなんて言っていないヨー？ やったってやらなくたって
ボクがやることは変わらないしネー」

「……………え？」

「現在、ボクの分身がシヨゴスさんの所でお茶してるヨー」

「ちょ、まつ、ごめんさい、本気で悪かった、すまんっ！」

ガンツ！と床に額を擦り付けるノーデンスを、ナイアは可哀想なも
のを見る目で見ていた。

「……………ボク、やっても変わらないって……………ちゃんと言ったよネー？」

「最初っからそんなのやる気無いヨー？」

「……………は？」

ノーデンスが視線を上げると、一転して悪戯が成功した時の子供の
ような目をしたナイアがそこにいた。

「いやー、あまりにも気持ち良く騙されるノーデンスに、ついつい
ネタばらしするのが遅れちゃったヨー。ごめんネー？」

「……………つな、なんだよ……………冗談か……………心臓に悪いぜ……………」

「あはははハー。やだナー、ボクがそんなことするはず無いじゃない
カー」

無邪気に笑うナイアを見ながら、ノーデンスは昔にあったことを思

い出す。

昔、本の取り合いをした時に、じゃんけんだと言って手を離させ、その隙にぱつと分身にその本を借りさせたこと。

昔、お気に入りのおもちやをクトウグアに壊され、その仕返しにクトにあることないこと吹き込んだこと。

昔、名前も知らない相手に馬鹿にされ、その相手をぶん殴って気絶させ、女装させて縛り上げて棄てていったこと。他にもまだまだある。

(……ナイアが言うと、どんだけ突拍子の無いことでも本気にしか聞こえねえし)

……それでも、そんなことをおくびにも出さずにノーダンスはナイアに笑いかけた。

「……そうかい」

……多少、ひきつっていたかもしれないが。

「そうサー……ところでサー」

「……今度はなんだよ？」

「安心した？」

「……いや、あの、そろそろマジで勘弁して欲しいんだが……」

「あつソー。じゃあこのへんでやめとこっかナー？」

ケラケラと笑うナイアを見て、ノーダンスはこいつの事を怒らせるのはやめようと、心に誓うのであった。

昔から他神をからかうのが好きだったナイアとその被害者の

一
柱。

銀の匙をかたどった看板を下ろし、タルウィは小さく溜め息をついた。

「……………これから、どうしようかな……………？」

実はタルウィ、今までずっとこの宿の事ばかりを考えて生きてきたお陰で年頃の娘のやることなどの知識が欠片も無い。

あるのは同じ知識でも冒険者から聞き齧っただけのやりかただったり、野宿の時の便利道具等の知識ばかり。

簡単に言つと、タルウィはどうすれば良いのかわからずに困っていたのだ。

「……………お金はあるし、どこか遠いところに行つてみようかな」

それでもなんとか曖昧にこれからの方針を決め、いざ出発……………という時に、幸か不幸かこの世界に仕込まれたとある術式が発動する準備が調つてしまった。

ほんの少しの間だけ、タルウィはこの世界の全ての存在に忘れられてしまった。

人間も、魔物も、精霊も、神も、彼女を知るもの全てが彼女から意識を外した。

その瞬間、彼女の姿がぐにやりと歪み、ゆらゆらと揺れる。

誰もそれを止めるものは居らず、タルウィはその場から忽然と消え去った。

そしていつの間にかタルウィが立っていたその場所は、水晶のよう

な樹木が立ち並ぶ森の中だった。

「……………」

……………き……………気まずい……………。

あのあとタルウィはすぐ近くにあった家の扉を叩いていた。この場所がどこで、何で自分がここに居るかなど、知りたいことが山積みだったからだ。

しかしその家から出てきたのは無表情の、人形のような美しい少女だった。

そして私になにも言わないうちに家の中へと上がり込まされ、気付いたら目の前に何かしらの飲み物の入ったカップが置かれていて、私と向き合う位置に座ったその少女からそれを薦められている。

「……………飲まないのか？」

「い、いえ、いただきます」

その女の子に言われてカップを傾ける。……………あ、美味しい……………。

ほう、と息をついてからもう一度回りを見渡す。そこら中に見たこともない物がたくさん並んでいるこの場所は、目の前の女の子の研究室らしい。

「……………さて。落ち着いたようだし、話を初めても構わないか？」

「あ、はい、お願いします」

結論だけ言つと、私はこの大陸で暮らすことになった。

私がここに居る理由も聞き、戻れることもできると聞いたけれど、わざわざ戻りたいと思うほどの未練も無く、それに私のたった一人の友人であるザリチエもこの大陸に来ていと聞いたからだ。

「……………そうか。ならば、ゆっくりしていつてくれ」

女の子……………フルリさんは、少しだけ笑いながら歓迎してくれた。

一週間ぶりに銀の匙亭に行つてみたところ、看板は下ろされ中には居らず、どう見ても臨時休業ではなく閉じていた。

……………久々に美味しい飯が食えると思つたと言つのに……………。

……………まあ、いつまでも悩んでいたところで何かが変わるわけでもなし、切り替えるでしょう。

少し落ち込んだディオのある休日。

とある日の朝のこと。

アタシの食堂の扉が開き、カランカラン、とベルが鳴る。

「悪いんだけど、準備中だよ」

「知ってるわ。変わらないわね」

懐かしい声。懐かしい響き。

その響きに引かれて顔を上げると、そこにはしばらく前に別れた友人がいた。

驚きはした。だが、ソイツがここにいってもおかしくないと思ったアタシは、昔からソイツに見せていた普通の笑顔に向けた。

「おや、久しぶりじゃないかい、タルウィ」

私の言葉にタルウィも笑顔で返す。

「本当にね。ザリチエ」

その笑顔はやっぱり同姓であるアタシをも惹き付ける。まあ、久しぶりの再会と言うことで、今日の金の針亭は臨時休業とさせてもらうかね。

この国に来て数年。成人と同時に騎士団の団長にされたことには驚いたが、まあなんとかやっていつている。

……それにしても母さんの言っていた通り、国の上層部はドロドロだな。主に腹の中身が。魔王が全世界に宣戦布告してきた今になっても自分の利益のことしか考えていない馬鹿と、理想と現実の擦り合わせが上手くできずに理想を並べたてる馬鹿ばかり。

……やれやれ。これで一人も現実を見ている者がいなかったなら、使い潰される前に騎士団を纏めて反乱でも起こしてやるつもりだったが、そういった者がいるのは上の中あたりにしかいないのが幸이었다。

……もし反乱をしたら魔術師団は……まあ、上手くすれば協力してくれるだろう。騎士団との仲の悪さがポーズのようなものだとわかったことだし。
競い合う相手が居ると言うのは良い事だ。

魔王の宣戦布告があつてから神官が創造神アリバシーヤに伺いをたてたところ、あの魔王の力は神の力を越えて強くなっていて、この世界の存在では手出しができないと言われたらしい。

しかし、それはこの世界の中での話であり、外の世界から才能のあるものを連れてきて鍛えれば魔王を倒せる可能性が出てくるらしい。……そんなことをしなくとも母さんならあつという間に叩けるような気がするが……まあ、何も言わないでおく。

……すまないな、異界の者よ。お前に全く関係のない世界の戦争に巻き込んで。

いままでどのような暮らしをしていたのか、どんな相手かも知らないが、謝らせてくれ。

召喚の準備にかかった時間は丸二年。私はもう既に二十一歳になり、数度目の大会優勝してきた。

……まあ、それでも母さんたちに勝てる気はしないが、それでも少しは強くなったのではないかと思う。

「さあ、召喚を始めてくれ」

王が魔術師団長に命じ、魔術師団長は詠唱を開始する。

詠唱が進むにつれて地に描かれた魔術式が輝きを増してゆく。

そして最後に一際眩しく輝いたと思うと、そこに誰かが

黒曜石のような、黒く、しなやかな髪が目に入る。

意識は無いようだが、恐らくその瞳は髪と同じように黒いのだろう。それが私には簡単に想像できる。

最近は見えていないとは言え、全く同じ色を十五年近くも見てきたのだから。

その少女は、私の母さんと同じ色を持っていた。

フルカネルリだ。この挨拶は実に久々だが、今はそんな事を言っているような時間は無い。この世界の寿命が一気に縮まりかねない事が起きているからな。

《面倒なことになったネー。あの駄神は何考えてるんだロー？》

『……………どうせ、下らないことよお……………わたし達を、排除するとか

あ……………ねえ……………』

あの駄目神なら有り得ないことではないな。

違った。どうやら今まで魔王を放っておいたツケが来ただけらしい。

……………だが、そのツケすらもあの駄目神は払おうとはせず、他の世界の者を無理矢理に呼び寄せて魔王を倒させようとしているようだ。

《救いがたいネー》

『……………なんなら、わたし達が滅ぼしてみよう……………？』

いや、わざわざあのような奴を相手にしてやることもないだろう。

向こうから来たら反撃するだけで十分だ。

……………まあ、一応言っておくとしようか。

ようこそ、私とはまた違う異界からの客人よ。

これからお前には多くの困難が待ち受けているだろうが、精々頑張っ
って生きていってくれ。

それと、どうしても帰りたくなつた時は私の所に来ると良い。お前の
住んでいた世界への道は駄目神がさっさと閉じてしまったが、場
所は記録した。ぴったりお前の居た世界に帰してやろう。

……まあ、そう言った所で聞こえはしないだろうがな。

ディオに貼り付けた楔の術式から召喚用の魔術式を解析する。完全にランダムで外の世界から誰かをつれてくる術式を改変してこちらから外の世界に送り込む術式を練り上げる。ランダムならば今でもできるが、狙った世界に送るとなると少々手間がかかる。

まあ、できないことはないだろうとは思うが、一応実験はしておかねばな。

《何をするのかナー？》

なに、そこらにある石や自殺志願者を実験台にして術式を使えば良いだろう。妙な言い方だが、本番ほど練習になるものはない。

「……………そうよねえ……………」

と、言うことで実験開始だ。向こうの世界に着いたは良いが死体になっていたり怪我をしていたり、そもそも着かないと言う事態はなるべく避けるようにすべきだろう。

その方が私も楽しいし、上手く行けば今度から自分の力で世界間移動ができるようになるかもしれないという考えもあるが、なんにしるやるからには全力で挑むとしよう。

フルカネルリさん、実験開始。

異世界編 2・39 (前書き)

漸く異世界2の主人公が出揃いました。

……ゆつくりと意識が浮き上がる。

いつ眠ったのかの記憶はない……と言っか、この前に見たのは……

……

いきなり現れる銀色

誰にも気づかれずに私を引き摺り寄せる銀色

助けを求めて手を伸ばしても、誰も私に気付かない

そして、私は銀色に飲み込まれ

「　　っ！！」

声にならない悲鳴をあげながら、私は飛び起きた。

「　　起きたか」

飛び起きた私の耳に始めに届いたその声は、今までに聞いたことのない響きを持っていた。

しかし、聞いたこともないはずのその言葉が、なぜか理解できる。

日本語に聞こえるわけではなく、その言葉をその言葉のまま聞き取

り、そして意味が理解できてしまう。

「……随分と落ち着いてるな。もう少し騒ぐものだと思っていたが」
「……騒ぎたいですけど、騒ぐより先に私がどうしてここにいるのか、ここがどこなのか、とかを聞きたいですね」

そう喋ってから気付く。私はなにも考えずに日本語で話したつもりだったのだけれど、動いた口は全然違う言葉を話している。

そんな私の動揺に気付いていないのか、はたまた気付いていて無視しているのかはわからないけれど、その男の人は落ち着いた声で話を続けてくれた。

「……まず、自己紹介から始めようか。私はダイオ「カーネル。周りからはダイオと呼ばれている。できることなら君もそう呼んでくれ」

「……あ、はい、これはご丁寧に……私は寺島てらしま 渚なぎさです。ナギって呼んでください」

お互いにペコリと頭を下げ、自己紹介おしまい。

……あれ、どうしよう話が続かない。

何を隠そう私はかなりの人見知りなのだ。今挨拶ができたのが奇跡と言っても良いほどの人見知りで、いつもは話しかけられないように逃げ回ったり、知らない人に話しかけられた場合はすぐに逃げしてしまうほど。

そんな私にダイオさんのようなかっこいい人のお話スキルなんて期待しちゃあだめなんです。それは置いておくとして、どうしよう……。

「……聞きたいことがあるんじゃないのか？」

「ふあっ!？ へ、は、はい!」

あわ、話しかけられちゃった……。

私は慌てながらもなんとか頭の中で聞きたいことリストを作り、そこに聞きたいことを書き連ねて行く。

……うん、このくらいかな……？

「……それじゃあ、いいですか?」

「ああ。答えられることなら答えよう」

その人は落ち着いた声でそう答えた。

「まず、ここはどこですか?」

「世界名はイギリス、国名はランドリート、王都ファルゼスにある王城の一階の南端にある治癒室だ。召喚の際、ナギ殿は気を失っていたため運ばせていただいた」

私の質問を予想していたらしく、ディオさんはすらすらと答えてくれた。

……って、召喚? 召喚って……あの銀色?

「……召喚って、なんですか?」

「魔術の一種。自らが必要とするものを招き寄せる物で、今回は創造神アリバシーヤよりもたらされた術式を王の命の下、魔術師団が使用した」

「……ちなみに、帰るための術式は……」

召喚と聞いたときから感じていた嫌な予感が外れてくれることを願いつつ、ディオさんに聞いてみる。

……けれどその願いは届くことなく、ディオさんは痛ましそうな顔で首を横に振った。

「残念ながら、アリバシーヤは帰還の術式は用意していない。呼び出した救世主が目的を果たせば、もしかして……と言うところだな」

「……救世主？ ……目的……？」

「救世主とはこの場合ナギ殿のことだ。そして目的とは、魔王の殺害、または消滅になる」

……ああ、やっぱり。

簡単に言ってしまうと、私はよくある異世界召喚に巻き込まれてしまったらしい。しかも帰るには必ず魔王を倒さなければならぬし、ディオさんの言い方だと倒したとしても必ず帰れると決まっていな
いみたい。

……泣いてもいいよね？ 私にしては落ち着いて話を聞いたただけでもすごく頑張ったよね？

「……ふえ……」

あ、涙が勝手に……。

「……ふえええええ……」

……もう止まんないや。

話をしている途中で泣き出したナギ殿に、私は何をしていたのかからず呆然としていた。

私の周囲の者達はこのように泣くことなど皆無だったため、どうすればいいのか、どうすべきなのか、全くわからないのだ。

……正直私もあまり泣くことは無かったため、自分が泣いたときにどうしてほしかったかもよくわからない。

……だが、たったひとつだけ覚えている記憶がある。

それは私がまだ小さかった頃の話。何故か夜中に目が覚めて、辺りの暗さが怖くて泣いた時の事だ。

あの時は確か、私の泣き声を聞いて私のところに来てくれた母さんに抱かれていたら、気付いたときには眠っていたのだったな。

朝起きたときに目の前にいた母さんに驚いたものだ。

……そうだな。私にできることはこれくらいだ。

童女のように泣いているナギ殿を、優しく抱き締める。嫌がられたらすぐに放すつもりだったのだが、ナギ殿は逆に私の服を掴んで放そうとしない。

そんなナギ殿が落ち着くまで、私はナギ殿の背を撫で続ける。

……本当に、申し訳無いことをした。

私達の世界の事情に、他の世界の者を巻き込んでしまった。それもこんな弱々しい者を。

本当ならばまだ成人もしていないだろう少女に、私達の世界の全てを押し付けてしまう。そんな私の無力さに反吐が出る。

……ああ。なんの償いにもならないが、せめてナギ殿の事は私が守ろう。

この王都で渦巻く陰謀から、悪意から、護ろう。

そのためには力が必要だ。今のままではまだまだ足りない。もっともっと大きな力が必要だ。

ハヴィ姉さんに届くほどに。プロト姉さんに届くほどに。そして母さんに届くほどに。大きな力が必要だ。

……修行をきつくするか。

いつの間にか眠ってしまったナギ殿を放そうとするが、ナギ殿が私の服から手を放してくれない。

……あの時の私もこうだったのかもな。

私は少しだけ笑って、ナギ殿の掴んでいる外套を脱ぐ。

……騎士団の外套に感謝したのはこれが初めてかもしれないな。そして近くにあった椅子に座り、体内での魔力の循環を始めた。

……次はいつ起きることになるのやら。

一目惚れ(?)したディオオの決心。

ふっ、と目が覚める。いつもの私の部屋の天井とは全然違う灰色の天井が目にはいる。

……ああ、そつか。やっぱり夢じゃないんだなあ……………。

少し前にディオさんに受けた説明を思い出す。

いきなり異世界に召喚されて、魔王を倒さなければ元の世界に帰ることができないと言われた。それも確実に帰してくれるわけではなく、あちらの意思次第で。

それを聞いて私は

ここまで思い出して、私は急いで記憶に蓋をしようとする。

けれど一度思い出し始めた記憶はそんな蓋では押し止めることはできなかつたらしく、次々に情景が流れてくる。

わんわんと子供のように泣いている私。

困った顔をしながらも、私を抱き締めてくれたディオさん。

ディオさんの腕の中で泣き続ける私。

私。
ディオさんの柔らかな心音に包まれ、ついには眠ってしまった

……………泣き疲れて眠るとか……………子供か私は……………っ！！

確実に顔が真っ赤になっているだろうけれど、全力で無視を……で
きない。

頭を抱えてその時の記憶を消し飛ばそうとするけれど、思い出す度
にどんどんどんどん記憶が刻み付けられて行くような感じがする。

……おもいつきり頭を叩きつけられれば忘れられるかなあ……？

「……とりあえず、頭を叩きつけても痛いだけだと言っておこつ
「ふえいつ！？」

その声が聞こえた方向に首を向ける。コキツという音が聞こえたよ
うな気がしたけれど、そんなことは無視。

そして私の視線の先には、当たり前のようにディオさんが椅子に座
って私を見ていた。

「……あの……いつから見てましたか……？」
「……」

ディオさんは私の問いに無言で私の手元を指差した。

……あれ、この毛布って……？

広げてみる。白地に金色の糸で大きく十字架が描かれている。

裏を見てみるとそこは綺麗な紅あかで、同色の糸でよくわからない模様
が描かれている。

そして少し狭くなっている片側を見ると、銀色の留具が目には
いる。

……つまり、これは毛布ではなくマントだ。しかもかなりの高級品

……そう言えば、これと同じものをディオさんが着ていたような

……。

デイオさんを見ている。マントをつけていない。
手元を見してみる。マントだ。

……つまりこの手にあるマントは、おそらくデイオさんの物。何故
私を持っているかは……眠ってしまった時に掴んだまま放さなかつ
た？

……どこまで子供だ私は……っ！！

しばらく待ってようやく起きたナギ殿は、少しの間宙を見つめてい
たかと思うといきなり赤面し、ぶつぶつと何事かを呟き始めた。
内容は、基本的に

「うああああああ」

や

「ムリ、いやいやいやダメムリほんとムリいい……」

などの奇声であり、たまに

「子供か！私は三ちゃんの子供か！」

などの意味のある言葉が混ざる。

正直、見ていて面白い。

「……………おもいつきり頭を叩きつければ忘れられるかなあ……………」
「……いやいや、私も昔やってみたが、記憶が消えるより先に生死の境をさまよったので辞めておいた方が良い。」

そんなことを考えながらも私はナギ殿の反応を楽しむべく言葉を探す。

「……ああ、母さんがたまに突拍子もない冗談を言う気持ちがあったよ。……あ、母さんがたまに突拍子もない冗談を言う気持ちがあったよ。……あ、母さんがたまに突拍子もない冗談を言う気持ちがあったよ。……あ、母さんがたまに突拍子もない冗談を言う気持ちがあったよ。」

何度かナギ殿をからかいながら説明と疑問の解消をして行く。わからないところはわからないと言いつもりだったが、今のところそのような事は無い。

ナギ殿の質問は実に多彩だった。魔術の有無。この国を含めた世界の状況。金銭について。宗教について。魔術の詳細。魔術適正について。異世界に来たことによる変化について。等、実に様々。中でも魔術に興味を持っているらしく、異様なまでの熱意を見せていた。

そこで本人に一つ魔術を教えてみたところ、すぐさま使いこなして見せた。才能はあるらしい。それも桁外れの物が。

「わ、わわ、光った！」

「……照明の魔術が成功して光らないなら、その魔術は不良品か使った本人に魔力が欠片も無いかのどちらかだと思われるが」

「あ、確かに」

やれやれ。

「……だが、まさか一度で成功するとは思っていなかった。通常なら

魔力の流れを感じとるだけで数ヶ月、長くて数年もかかることがあるのだが、ナギ殿は数分で理解を見せた。

……これが天性の物が召喚による後付けの物かは知らないが、おそらく魔王を打倒するのに重要な能力だと言えるだろう。

……恐らく魔王を打倒した後は帰還を餌に人間同士の戦争に協力させられるのだろうな。そして最後に英雄として祭り上げ、暗殺でもするのだろう。

正直に言って胸糞悪い。これだから中途半端に権力を持った腐った貴族は嫌なんだ。

……やれやれ。前途多難だな。

ああ、そう言えば当たり前すぎて言い忘れていたな。

「……他にもあるが、今回はこれだけだ。魔力を使いすぎると死ぬから使いすぎないように」

軽く脅かしてから外套を返してもらおう。そろそろ私も眠い。王への報告は……まあ、明日でも構わないだろう。

私はそう結論付けて、治癒室を後にした。

簡単な状況説明とその後の事への思考。

朝になったので王の所へ。正直、あまり好きな相手では無いがそれでも一応王は王。ある程度の敬意（例え外見だけでも）は必要だ。

何しろ私は騎士だからな。騎士に忠誠を誓われていない王は基本的に無能が多いのだ。そしてそういった噂が広まると民はその国から逃げて行く。

そのため世の王族は躍起になって騎士達を膝まずかせようとするわけだ。実に面倒なことに。

騎士が膝まずいた所で忠誠を誓っているわけではないということも本当に理解しているのか？

……していないのだろうか……。やれやれ。

そんなことを考えながら私は王の前で膝まずき、最低限の騎士の礼を向ける。

「救世主が目を覚めました」

「……ふむ。昨日には既に目を覚ましていたと報告が来ているが？」

「その後説明をしたところ、精神的に疲労したため再び眠りましたので、それを勘違いなされたのでは？」

ああ鬱陶しい。周りの血統ばかりの糞貴族と賄賂で地位を得た屑供が騒がしすぎて鬱陶しい。

斬り刻むぞ塵屑供が」

……おや？ 急に静かになったな？ まあ良い。いつものこと

だ。

静かになっている間に報告を全て終わらせる。まともにも聞いているのは騎士団副団長、魔術師団団長・副団長、ランドリート王、そして頭の中身がガチガチではあるが腐ってはいない誇り高い大貴族と、その他私の殺気に慣れ始めた衛兵や屑貴族の一部のみ。

……やれやれ。この程度の殺気で怯むとは。あの島では確実に二日と持たないぞ？

……まあ、行くことはないだろうが。

「……以上です。次回は本人を連れて参りますので、くれぐれも、く・れ・ぐ・れ・も！ 妙な行動には走らないように。そのようなことになった場合、もしかしたら手が、滑る、ことがございます」

不敬だの反逆だのと言ってくる者達も居るが、正直に言っただけに馬鹿らしい。

こうして島の外に出てしばらくになるが、私は一つ確信していることがある。

それは、私一人がいればこの国一つくらいなら三日で全て落とせるという事だ。

ちなみに母さんなら五分あれば大陸一つを消滅させられるだろうと予想している。私は無理だが。

何が言いたいかと言うと、反逆だと言われて牢に入れられようが処刑されることになるのが私は力尽くで全てを振り払って逃げ切ることもできるので、屑貴族の言葉には失笑と侮蔑の感情しか持てないということだ。

……もし本当に私を処刑しようと言うのなら、この国ごと大陸全てを焦土に変えてしまえば私を処刑することはできなくなるだろう

うし、追われることもない。
正直そっちの方が楽だったりするのだが、しばらく世話になったところだし、一応もう少しのんびりしていこうと思う。

……………利用できるうちは利用しなければ勿体無いだろう？

救世主としてこの世界に呼ばれてからはや三日。王様に会ったり色々な人に会ったりしたりしたけれど、みんな私ではなく私の立場を見ているような気がして気持ちが悪い。

泣きそうです。色々なもの（心とか精神とか人間として生きていく上で大切な何か）が折れそうです。と言うか多分ディオさんが居なければ折れてたと思います。‘救世主’じゃあなくて‘私’を見てくれてありがとう。ディオさん。

現在、簡単には殺されたりしないように修行中です。

いきなり剣を持たされた時は驚きましたが、一度も持ったことがないと正直に告げると少し驚いたような顔と一緒に剣を木剣に取り替えて振ることに。握り方をしっかりと教えてもらって振り始めた。周りではディオさんや騎士団の皆さんが剣を振っています。凄く速いです。特にディオさん。見えることは見えますが、真似できません。

……………見える？ 何故あの速度の動きが見えるのでしょうか？

……………ああ、召喚の特典ですかね？

振っても振っても疲れません。もうそろそろ七百回ほど振っているのですが、疲労する心配が欠片もありません。むしろ爽快です。元の世界では体を動かすのは大嫌いだっただ私がこんなに動けるなんて……。

やっぱり召喚の特典ですね。もしくはこの世界の重力は元の世界のそれよりずっと弱いとか。映画でコーヤコーヤ星に降り立ったの太くんみたいなものですか？

「……雑念が混じると怪我をするぞ」

「はい！」

怒られちゃいましたので、考え事はこのくらいにしようと思います。

……早く帰りたいなあ……。

‘異界からの救世主’ ナギの異世界奮闘記（？）

今日は魔術についての詳しい勉強だそうです。なんでも人にはそれぞれ使える魔術の属性があり、大抵の場合性格でおおよそわかるそうです。

ちなみに私は落ち着いているところがあるので水の属性が強いのではないかと言われています。

……こつこつという時は大抵光が強いと相場は決まっていますけれど……。

魔力の質を調べる道具に手を置きます。量を調べるものはまた別にあるそうです。

一緒にしてしまえば良いと思うのですが、魔術師団の団長さんが言うには不可能とのこと。できるならやりたいと言っていたので、多分それは本当なのだろう。

……元々炎の属性を持った鉱石で作った武器に風の魔術を刻めば擬似的に二つ刻んだのと同じことになると思うのは私だけでしょうか？

……そんなことよりも今は私がどの属性を使えるかと言う方が大切ですね。文字通り命に関わりますし。

水晶のようなその道具は一つにつき一種類の属性の適性の有無しか

わからないようで、いくつもの水晶に手を置くことになりました。属性によって色が違うその水晶は、私に触れられると眩しいほどに光輝きます。この光が強ければ強いほど適性があるということらしいのですが……だとすると、私の適性は全てに存在することになりますね。

この結果のお陰で魔術師の皆さんが私を見る目が珍獣を見る目から化け物を見る目に変わったような気がします。

……まあ、一部のマッドサイエンティストが研究対象を見る目よりはずっとましですが。

それからずっと訓練の日々。魔術を覚えたり剣を振ったり、何故か教えてもらえない常識や金銭感覚についてをディオさんから教えてもらったり。

……あと、少し前にディオさんと一対一で実践訓練を試してみた時に思ったのですが……私がいなくてもディオさんが居れば魔王くらいどうとでもなるような気が……。

「そのあたりどうですか？」

「……さて、どうだろうな？」

ディオさんは薄く笑うだけで答えてくれませんでした。そう言えば、ディオさんが質問に答えてくれないのはこれが初めてです。

「……だが、もしそうだったとしてもナギ殿は呼ばれていたと思うが？」

なんでも、この世界では神の言うことは絶対だそうで、神が救世主を外から呼べと言ったら絶対に呼ばなければならないんだとか。

そう言っているディオさんは、少し不機嫌そうだった。

「……ちなみに私の育った大陸では創造神アリバシーヤではなく、ミモリという神が信仰されている。戒律は戦争をせず、一日に一度祈りを捧げるだけという物だ」

「ず……ずいぶん簡単な戒律ですね……」

「本人は面倒くさがりで眠たがりの小さなヤマネとも聞かぬがな」

「や……ヤマネですか……」

想像してみる。小さな体で巨大な力を持つ、いつも寝ているヤマネを。

………つわ可愛いっ！撫でてみたいっ！お持ち帰りしたいい
くっ！

「……ちなみに、私でも勝てん」

「……あははは。まるで戦ったことがあるような……」

「………」
「………なんで目を逸らすんですか？」

冗談ですよね？ 神様と戦ったことがあるとか……冗談ですよね？

「冗談ですよね？」

「………冗談だったら良かったのだがなあ……」

………あ………あははは………。そうですね。冗談じゃないんですね……。

魔術に必要なものは、集中力と魔力と詠唱。昔見たことのある小説だと、公用語とはまた違う言葉を使うことが割とあったのだけれど、この世界の魔術は公用語でいけるらしい。上手くなれば詠唱無しでも使うことはできるようになるらしいけれど、こっちは失敗するところが多くなるみたい。

例えば、同じ魔力で使った魔術でも集中力や想像力が足りないと弱くなったり思い通りに動かなくなったりすることがある。

その上、何故か同じ人が同じ量の魔力で同じ魔法を使っても威力が違うことがあるみたいで、それについては何故かは不明だが最低限の威力はおよそだけれど決まっているらしい。

……デイトさんなら何か知ってるんじゃないかなあ……………？

聞いてみた。

「ああ、それは一般的には知られていないが精霊と言うものが魔力を受け取っていてだな　　」

本当に知っていた。何で？

「精霊ですか？」

「ああ。それも強いものから弱いものまで様々らしいぞ？」

「……………そうですか」

精霊かあ……………どんな姿なんでしょうか？

……………まさか知ってたり……………

「いや、流石に知らん。そこら中にいるらしいが、少なくとも私は見ることができないからな」

そうなんですか……。

……あれ？ 何かおかしいような……。

目の前で首をかしげているナギ殿は、島にいた頃に私になついていた小さな結晶の獣を思い出させる。恐らく口に出していないのに答えが返ってきたことに疑問を持つているのだろうが、このくらいならばあの島に住んでしばらくすればみな使えるようになる。獣達とのコミュニケーションをしっかりとれるようになるのではないと、近所付き合ひもままならないからな。

悩み続けているナギ殿の頭に手を置いて、そのままナギ殿が思考から戻ってくるのを待つ。

……やれやれ。いつまでかかることやら。

フルカネルリとは似た者親子。血よりも水は濃いらしい。

どうやらナギ殿が旅を始めるらしい。そして何故か私が供に選ばれた。

「……駄目……ですか？」

「別に構わん。理由がわからなかったただけだからな」

私がそう言うと、ナギ殿は明らかに安堵の表情を浮かべた。

「よかったあ……他にもついて行きたいって言う人達はいたんですけど、なんとなく目の色が怖かったり雰囲気が悪かったりして不安だったんです」

……なるほど。上司に命令されたかナギ殿を利用して名声を自分の物にしようとした者達の集まりだったか。

まあ、仕方ないと言えば仕方無いな。ナギ殿は外見だけならばどう見ても成人すらしていない小娘だ。期待していた救世主がこれでは信用することは難しかったのだろう。

私と訓練をしているうちに騎士団の方からはそれなりに信用されるようになってきていたが、流石にその他の者にはあまりいい感情を持たれてはいないようだ。

……まあ、何にしるナギ殿があちらから近づいてきてくれた方が私としても直接的な干渉から守りやすいので何かをする気はないが。周りの者には御愁傷様と言っておくのでしょうか。

御愁傷様。

とりあえず団長の仕事を元団長のアルフレッド・ハーウエスに任せ、私はナギ殿に付いて行くことを王に言っておく。

王も他の貴族も何だかんだとごちゃごちゃ言っていたが、率直かつ正面から

「認めてくれないのならば離反して隠居します。そして国内にも国外にもこの国の内部情報をぶちまけます。ついでにこの場で止めようとした者全ての鼻をきつちり25センチ凹ませます。ご安心下さい。足りなければ追加しますし、それより多かつたなら一度治してから何度でもやり直しますので」

と説得したら折れた。

……ああ、説得だとも。暴力を背景にした説得もまた説得の一種だろう？

まあ脅迫とも言うが、別に構わないだろう。私に損は無い。

例えこの国から追放されることになったとしてもナギ殿を拐って行けば心残りも無くなるし、そうすることにほんの僅かの躊躇いも無い。そしてそれができるだけの力はすでに持っているしな。

結局ナギ殿を選んだのは私一人。それでは流石に不味いので後々良さそうな相手を見つけたら相手の意思を尊重しながら勧誘していいという話になった。それまでは二人旅だな。

「なんとなく、ディオさんが居れば大丈夫だと思っただんですけど…

…」

良い勘だ。まあ、信用されていると思っておこう。

それに今回はほとんど離反のような状態でこの国を離れるわけだし、付いてくる者が全員向こう側の人間である可能性を考慮すると、もう戻らないつもりでいた方が良いだろうな。

……やれやれ。面倒なことだ。

魔王の住む大陸には強力な結界が張られているらしい。これを破るためにはこの世界のどこかに住むと言う四体の精霊王の力を借りなければならぬらしいが、魔術師達はどこにいるかを全く知らないらしい。

神に聞くことができれば早いのだが、私は創造神には嫌われているために聞くことができない。

……ふむ。とりあえず適当に世界中を回って情報を集めてながらのんびり探していくとしようか。焦っても良いことは少ないからな。

母さんが言っていたことによると、精霊王は神とは違ってこちらに少しは好意的だし、一つの大陸に一体と決まっているから気配察知を限界まで広げてやれば解るらしい。

何でもそれなりに大きな力を持っているので探す場所がかなり限定できるとか。

……そんなものなのか？

《あいあい、そんなものでしゅ》

ミモリの神の声が聞こえた。なるほど、創造神の信託が全く聞かえない訳だな。別の神を信仰しているのだから当然と言えば当然か。

《そうそう、当然でしゅ》

なるほどな。

……そうだ、この大陸の精霊王はどこに？

少しだけ手助けがあれば簡単に見つかるかもしれない、ということ
でミモリの神に聞いてみることにした。

気紛れで面倒臭がりであると有名なこの神に聞いても答えてくれる
かはわからないが、聞いてみるだけなら只だ。

そんな風に考えていたから、ミモリの神が私に本当に教えてくれた
時には開いた口が塞がらなくなった。

《さてさて、どこにいるのかでしゅかね？ ……おやおや、君の

後ろの子がこの大陸の精霊王ではないかじゃ？》

くるりと後ろを振り返ってみる。すると目の前に半透明の少女が驚
愕の表情を浮かべていた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ナギ殿。確保」

「せっ！」

「はにゃっ！？」

とりあえず確保。話は後でじっくりと聞かせてもらうことにしよう。

あつという間劇場（風の精霊王捕獲編）。

異世界編 2・44（前書き）

作者はアホです。あり得ない書き方をしてしまいました。

今回は、携帯で見ると長いですがパソコンで見ると短いです。

風の精霊王は何故か異様に好意的だった。

「ねえ、君ってあの娘の知り合いでしょ？ あの娘はあの娘だよほらあの娘。わかんないかなあほら黒い髪で黒い目のあの娘。あ、やつぱり知り合いだったみたいだね、うん、間違っていないみたいで良かったよ。私たちはあの娘には凄く感謝してるんだ。何ていつても消滅の危機から救ってくれたんだからね。あの娘がいなかったらきつと私たちはとくにこの世界から消えてしまってもおかしくないんだけど、今までお礼に行かなかつた理由はどうしてかアリバつさんがあの娘の事が嫌いみたいでね？ 会いに行くのを許してもらえなかつたのさ。だから今ここで君を通してお礼をいっておく事にしたんだ！別に受け取ってもらえなかつたらそれはそれでもう一度私の方から精霊王代表としてそちらに行く予定だから別に良いと言えば良いんだけどね。あとさ、そろそろ首と手首と足首と背骨と腰が痛くなってきたんだけど縄を解いてくれないかい？ あ、だめ？ ならしょうがない、もう少し我慢することにしよう。なんだか少しずつ気持ち良くなってきたし。何て言っても今まで私をこうして縛れる物なんて聞いたことがないからね。これが私の初めてになるのかな？ 初めては痛いものだけど相手のことが本当に好きなら心地よいものだって聞いてたんだよね。あれ、そうなる私と君のことが好きだと言うことになるね？ 三つ指をついてみていいかい？ つと、縛られてるからできないんだね。なんだかこうして自分の体に食い込んでくる縄と痛みが心地好いを通り越してもはや愛おしくなってきたよ。私を縛れるものなんてアリバつさんの命令くらいなものだと思っていたんだけど、まさかこうして人間に縛られる時が来るなんて思っても見なかつたよディオさん。どうして名

前を知っているかわからないという顔をしているね。簡単さ、名前を知っているのは私が風の精霊を統べる風の精霊王だからだね。風の精霊はこの世界のどこにでも存在するのさ。そして私に必要な色々な情報を集めてきてくれるんだよ。今回の召喚や君達の事も少しは知っているよ。なにしろ私は風の精霊王だからね。この世界の大雑把な均衡と存続にしか興味の無いアリバっさんとは違うのさ。アリバっさんはこの世界の事があまり好きではないらしいけど、私はこの世界が大好きさ。ああ、そう言えばディオさんとナギ殿は魔王を倒しに行くんだっけね。それで私を含む精霊王を探してたわけだ。うん、もちろん力を貸してあげよう。アリバっさんにも命令されるし早めに終わらせた方が良いんだろうけど、ってそう言えばナギ殿は処女かい？ って恥ずかしいのはわかるけれど殴らないでくれよ痛いじゃないか、興奮して濡れてきちゃったらどうするつもりだい？ それにこれは結構大切な事なんだよ？ 処女の娘だったら更にそうなんだけどナギ殿は純情そうだしね。と言うわけでナギ殿は処女だねわかってるよ。大丈夫別に大したことじゃなくってちょっとナギ殿と私の唾液を交換しながら舌を絡ませ合わないと契約ができないと言うだけだから。ついでに契約する時には私の舌を干切れない程度に強く噛んでくれると最高だね、とても興奮する。あふつ　痛いよ御主じ……ディオさん。おや？ 今何を言いかけたかって顔をしているよ？ それは秘密さ、恥ずかしいからね。まあそんなわけだから初物は好きな人のためにとっておくと良い。私は実は結構暇だし、他の精霊王達とは違って大陸を離れられるからね。契約したくなったらいつでもどこでも呼ぶと良い。すぐに駆けつけてあげるよ。さて話は変わるのだけど、御……ディオさんにお願があるのさ。なに簡単さ。それに悪いことではないと……ああ、わかった本題だね。ううん、こうして拘束され自由を奪われている状態で命令されるのは気持ちがいいね。頭の中が蕩けてしまいそうだよ。と、言うことでペットを一匹飼ってみないかい？ 名前はウルシファイって言うんだけどね。いきなりなんだって顔をしているから

言うけれど、大したことじゃない。餌もいらなし、躰もそこまで必要ではないはずさ。ただ少しおしゃべりだが、実力と利便性は折り紙つきさ。できるなら首輪と鎖で繋ぎながら優しく酷い事をしてあげると悦ぶから、ちよっとした、っはぁんっ　　そ、そうだよそうして苛めてあげて欲し、くふうっ！　い、椅子にされてるうっ」

とりあえず縛られたままの風の精霊王の背に腰を下ろしてみたのだが、精霊王は余計に興奮したのか甘ったるい声をあげている。

私の隣にナギ殿も座るが、少し居心地が悪そうだ。

それもそうか。今私たちの下にで椅子になっているのがこの世界の四大精霊王の一体、風の精霊王だというのだから。

しかし精霊王は何も言っていないのに私達が座りやすいようにと体の位置を調整している。当然、その息は荒い。

………駄目だこの精霊王。はやくなんとかしてやらないと………。

風の精霊王はクール系(?) お喋りマゾ。

異世界編 2・44（後書き）

ちなみに、彼女の雛形は昔にとある場所で見ただグレッシブな佐々木さんです。
涼宮ハルヒ出演の。

風の精霊王の背の上でナギ殿と話し合う。内容を具体的に言つと、他の精霊王達についての事だ。

「……他の方達もこうなんでしょうか……?」
「さてな。……どうなんだ?」

ちらりと視線をやると、風の精霊王は嬉々として話し始めた。

『……そうだねえ、つあ、水のはちよつと天然入ってるかなあ……
あ、んああ ふ、んんっ』

喘いでばかりでしばらく時間がかかりそうだが、一応話す気はあるらしいので私は風の精霊王が言葉を紡ぐのを待つ。

『炎のはあ、あは 熱っ苦しい男だね、つ、ああ……』
「……ディオさん。心配になってきました」
「安心しろナギ殿。私もだ」

風の精霊王の話によると他の精霊王達にこういった性癖は無いらしいが、それはついさっきまでの自分にも言えることなのであてにはならないそうだ。

土の精霊王は落ち着き払った老年に見える男で、自分のやらなければならぬ所だけは確実にやる奴らしい。

ただし、それは自分の管轄外だと思つたところにはけして手を出さず、完全に放置するタイプのようだ。

『それで……むぶっ!?!』

「もついい。少し静かにしている。……ナギ殿、どうする?」

「……色々と言いたいことはありますけど、とりあえずこの大陸で修行を積もうと思います。私はまだまだ死にたくないですから」

ふむ。そうなるとまた少しばかりスパルタ方式で鍛え上げてやるか。するか。

少しばかりやり過ぎたかもしれん。

そう思いながら座り込んでいるナギ殿の隣に腰を下ろす。

「
……
……」

沈黙が周囲を支配する。これも私がナギ殿に母さんから受けた特訓をほぼそのまま受けさせたせいだ。
私は何も言わずにナギ殿を見つめる。

「……私、とっても平和なところで生まれたんです」

「……そうか」

ナギ殿は、ゆっくりと話し始める。頭の中身はまだぐちゃぐちゃだろうに、それでもなんとか私に話しをできている。

か細い声を拾い上げるのは難しかったが、風の精霊王が周囲に音のみを遮断する結界を張っているため、できないことはない。

「……確かに戦争はありましたけど、私にはほとんど関係ないよう

な遠くでの戦争ばかりで……私の育った国では人を殺すことは、何があってもダメなことだったんです」

「……ほう。そうか」

なるほど。ただ殺しただけなのに、異様に怯える理由が少し理解できた。

怖いのだろう。辛いのだろう。ただ、それは人を殺したことが怖いのではなく

人を殺したことで、自分が元から居た世界との繋がりが薄れてしまふ事が怖いのだろう。

自分の服を、両手の指が真っ白になるほど力を込めて握り締め、この世界に来てからその体の中に溜まった暗いものを吐き出しているナギ殿。その姿は実に痛々しく、夢げで、放っておけばいつの間にか消えてしまいそんな雰囲気を持っている。

近くには血の海が広がっている。先程、私とナギ殿が殺した夜盗の死体がいくつも転がっているからだ。

二十以上の死体のうち、五体はナギ殿が殺したものだ。

いきなり襲われて頭の中身がぐちゃぐちゃになっている時に肩を切りつけられ、頭が真っ白なまま反撃した。

その時の事はよく覚えていないだろうが、その感触だけは確りと手に残っているだろう。これは経験談だ。

「……私、この世界に来た時……怖かったです。いきなり銀色の光に吸い込まれて、起きた時には全然知らない場所で……突然救世主って言われて持ったこともない剣なんか持たされたと思

「……」

声が震え始める。私はナギ殿に答えを返すことができない。

「……誰も私を見てくれません。……皆が見ているのは、私、じゃなくって、‘救世主’っていう‘何か’なんです」

「……どうして私だったんですか……？ 他にもいっぱい人はいるのに………何で………」

ナギ殿は更に強く自分の体を抱き締めた。

小さい背中には、いつもの明るさも元気も全くない。暗い暗い恐怖と悲しみが、のし掛かるように纏わりついていた。

「……だが、私にはそれをどうにかすることはできない。それは他人に言われてどうにかできるものではなく、自らがどうにかしなければならぬものだからだ。」

「……すまん。ナギ殿。それは私にはどうすることもできん」

私が言うと、ナギ殿は少しだけ顔をあげて私を見た。

「……あはは。やっぱりデイオさんは優しいです」

「……そうか。ナギ殿がそう言うのならそうなのだろう」
「はい」

無理矢理に笑っているナギ殿に、私は思った通りの言葉を返す。それにナギ殿は、まるで返答がわかっていたかのようにすぐさま返す。

「……知ってますか？ この世界に来て、一番最初に私を見てくれたのは……ディオさんなんです」

……確かに、私は最初からあの場に居た。そして恐らく、始めにナギ殿と話をしたのも私だ。

その時にはもう私はナギ殿を救世主ではなく一人の特殊な力を持つ少女だと見ていた。力も存在も性格も、全て纏めてナギ殿だと。

「……一番始めに厳しいことを言ってくれたのも、一番始めに私の心配をしてくれたのも、私の一番近くに居てくれたのも………みんな、ディオさんなんです」

急に大きな力を持ってしまうと、殆どの者が驕ってしまふ。だから私はその驕りを叩き潰すために、本気になったナギ殿を剣のみで叩き伏せたし、その後になんか話した話を周囲の失敗談と共にいくつか話しました。

ナギ殿がそれなりに強くなってからは私と元団長、副団長ぐらいしか相手をできるものが居なかったので、大抵私が相手をしていました。

「……ディオさんにとってはどうでもいいことかもしれませんが」

ナギ殿は、涙を浮かべたままの瞳を私に向ける。

ディオさんは、ずっと私の支えだったんです」

救世主、寺島渚の闇。

私の言葉を聞いたディオさんは、いつも通りの表情の薄い顔で私を見ている。

初めは何を考えているのか全く理解ができなくて怖かったけれど、今ではただ表情に出にくいだけでちゃんと感情もあるし、すごく優しい人だとわかつているので怖いと思うことはなくなった。

けれど、今の私はいつも通りのディオさんがとても怖い。

私がこんなことを思っていたと知られるのが怖かった。実はディオさんも私の事を救世主としか見ていなくて、それを上手に隠しているだけだと思つと怖かった。

私が支えにしていたと知られるのが怖かった。もしそれが鬱陶しいと言われ、私から離れていってしまうかも考えると怖かった。

この気持ちが全て仕組まれていたものだという可能性が怖かった。私の事を裏で嘲笑っているのかもしれないと思うことが、そしてその可能性をけして否定できないことが、心の底から怖かった。

……それでも、一度言ってしまった言葉は戻らない。それは零れた水が戻らないように。

時計の針は戻せても、進んだ時間は戻らない。世界が砂時計ならひっくり返せば戻るけれど、砂時計じゃない世界では何を言っても無駄でしかない。

私は怯えながらディオさんの言葉を待つ。頭の中では悪いことばか

りがぐるぐると回る。

ディオさんに捨てられる私。手を伸ばしても声をあげて懇願しても、ディオさんは私を振り返らずに歩き去っていく。

ディオさんが嘲笑っている。笑顔でありながら、私を都合のいい物だと嘲笑っている。愚かな私はそれに気付かずに、楽しそうに笑っている。

ディオさんが私を殺した。使い物にならないと言って、首をはねた。また王宮で召喚された誰かに優しくしている。優しくされているその子は幸せそうだけれど、きつといつか私と同じように首をはねられる。

……そして、ディオさんが私に向かって口を開く。

「初めから予想していた」

「……………へ？」

予想外の答えに、私はつい間の抜けた声をあげてしまった。

「始めに全身を見たときに、あまり体を動かしていないことはわかっていて。それに加えて戦闘に関する知識があまりにも少ないことから、相当平和な世界に暮らしていたことも予想はしていた。無論、人を殺したことが無いことも」

淡々と話し続けるディオさんに、ふと怒りが沸いた。

「なら、どうして私に殺させたんですかっ!!」

「ナギ殿が本当に必要な時に剣を振れるようにするためだ」

激昂した私の叫びに冷水をかけるような声で言葉を返された。

「こんな夜盗など、この世界のどこにでも居る。その時に私が必ずナギ殿を守れるという保証は無い。だから今回、確実に守れる時に練習として殺させた」

私の頭が徐々に冷えていく。ディオさんの言葉はいつも通りに冷たく、それでいて優しい。

分かりにくくはあるけれど、やっぱりディオさんは優しすぎるのだと思う。

「殺した相手の事をどうしろとは言わん。背負って行くのも捨てて行くのも好きにしる」

「……ディオさんはどうしてますか？」

私がそう聞くと、ディオさんは不思議そうな顔をして答えをくれた。

「私は何とも思わんさ。初めから悪いとも思わんが、私から態々殺そうとしたことは食事にするとき以外は無い」

ああ、やっぱり違うんだな。

私は当然のようにそう言ったディオさんを見てそう感じた。

確かにその通り。今回私達を襲ってきて、殺そうとして来たのは向こう。私の常識では殺しては駄目なのだけれど、この世界にそんな

法は存在しない。

そんなものがあっても役に立たないし。魔獣なんかが普通にいるこの世界でそんなことを通していれば間違いなく私はその時にパニックをおこしていただろう。

最悪、何もできずに死んでいた可能性も否定できない。

だからこそ、私は思う。

「……ディオさんは、やっぱり優しいですね」

そう呟くと、ディオさんは心底訳がわからないという顔をした。

「そんなことは無い。私は私のやりたいようにやっているだけだ。今ナギ殿と一緒にいるのも、騎士団を辞めたのも」

そう言っているディオさんは、表情の薄い顔に苦笑を浮かべていた。私はそんなディオさんに、つい笑ってしまう。

ああ、なんだ、こんなに簡単なことだったんだ。

私はきつと、ディオさんに依存している。

そして、それと同時にディオさんに恋をしている。

それは助けてもらったという現状からの勘違いかもしれないけれど、今の私にとってはそれが真実。

……うん。それじゃあ、言ってみようかな。私の思いをここまで暴露しちゃったんだし、勢いがないと多分ずつと言えないから。

私は深呼吸をして、ディオさんに向き直る。

私の顔は赤くなっているだろうか？

耳まで真っ赤になっていたりして。

ディオさんは私の思いに気付いているのだろうか？

もしかしたら、さっきみたいに予想されていたりして。

……そうだとしたら、少し、恥ずかしいな……。

……でも、これを言ったら私とディオさんの関係は変わる
んだろうか？

今のままでも不満なんて何もない。時間があれば話をして、なかなか
疲れない体でこの大陸を歩く。時々盗賊が出るけれど、私達なら
大丈夫。

人を殺すことにはまだまだ慣れないけれど、きっと今度からはもう
少し楽になる。

食べ物に困ることも全然無いし、ディオさんと二人というのも問題
じゃない。

……じゃあ、このままにしよう。きっとさっきの私はどうかしてた
んだ。

このままの幸せが続くなら、それでいいかな。

……今は。

「……あの、ディオさん」

「どうした？ ナギ殿」

「私の考えていたこと、わかります？」

私がそう聞くと、ディオさんはやれやれと大きく溜め息をついた。

「……よく言われるんだが、私は決して全知でも全能でもない。ただ、少しばかり頭の回るだけの人間だ。他人の考えなど予測以外はできんよ」

……ほんとかなあ………？

「本当だとも」

そっか。

………あれ？

寺島渚の依存と初恋。

「やあ、話は終わったみたいだね？ それじゃあ早速契約についての話に入るうじやないかあぐっ」

「少し空気を読んでください。風の精霊王なんですから、そのくらいはできるでしょう？」

ああんっ この娘も私を殴れるんだねっ こんなにしてもらって私は幸せだよ？

「残念なことに私は風の精霊王であって空気を読むわけじゃないんだよね。むしろ私が空気を支配するから私の要るところでそんな真面目な話を続けようなんて土台無理な話なのさって痛い痛い肩甲骨を押されるの地味に痛い痛いってばあ」

また体が火照ってきちゃうじやないか。色んな所がとろとろだよ？ 頭の中身とか、ってそれは元々か！あっはっは！

そんなことを考えているのがばれてしまったのか、私の目の前にいる‘ディオさん’と‘ナギ殿’の冷たい視線が私に突き刺さる。確かにあんな良い雰囲気壊しちゃったのは悪かったかもしれないけれど、これじゃあ私にとってはご褒美だよ？

「……変態ですね」

「そうだな。救いようが無い」

ああんっ こんなに罵倒してくれたのはずっと前の黒髪のあの娘以来だよ

悪戯しようとしていた私の手を掴んで地面に叩き伏せてくれたあの娘。今も元気にしてるかな……………？
あの時は怒ってしまったけれど、今考えるとあれは完全に「褒美だつたんだよね。」

私達を助けてくれたお礼に精霊の加護を与えてみたんだけど、全然使ってくれてないんだよね。

……………ハッ!? もしかして放置プレイなのかな? そう考えたらなんだかすつごくきゅんって来たよ

「……………何を考えているのかすつごく分かりやすいんですけど、蹴っちゃって良いんですかね?」

「何を馬鹿なことを言っている。変態が移ったら困るだろう。辞めておけ」

「あ、それもそうですね」

あはぁんっ もっと言うっておくれ

『さあ真面目な話に入ろうかな。私はウルシフィ、この世界で風の精霊王何てものを兼任しているディオさんのペットさ』

「お前を飼うぐらいならか徴びを飼う」

『ああつ、御主人様酷いっ!でもそこがイイ』

その冷たい目で見下されるように見られると、ゾクゾクしてきちゃっつよ

「真面目な話じゃなかったんですか？」

『ああうんそうだよ？ 簡単に契約についての説明をしようと思っ
てね』

「三行でお願いします」

え、三行かい？ 中々難しいことを言ってくれるじゃないか。燃えるね。

『それじゃあまず始めに契約をするとどんな良いこと、悪いことがあるかを説明するよ？』

「三行ではやらないんですね？」

だって面倒だからね。私はおしゃべりが好きだからそれを抑えられちゃうと力があまり出なくなる気がするんだよ。だから私はしゃべるのさ。

『良いことその一。簡単に言っちゃうと魔術の改造ができるようになるよ。ただし改造したそれは自分でしか使えないから魔力とかの操作が難しいし、暴発する可能性が割とあるけどね。良いことその二。魔術を使うときの魔力の消費がちょっと減る。これは嬉しいよね。いままで三発しか撃てなかった魔術が四発撃てるようになったりしたらお得だよ。良いことその三。イライラしたときにいつでもどこでも私を呼びつけて苛めることがおふっ』

靴の踵で背中を踏みつけられた。ごりごりという感触が服越しに……って言ってもこの服も私自身だから直接踏まれてるようなものなんだけどね？

うくうっ それにしても御主人様は風の精霊を苛めるのが上手いね。こうして地面に這いつくばらせて自由を奪うなんて、とっても

屈辱的で……ああ、顔に泥が……

「それで、他にもあるだろう？ さっさと喋ったらどうだ？」

『もちろん喋るよ？ 私はおしゃべりが好きだからね。良いこと四つ目、契約前に比べて魔術の威力が上がるよ。ただ、魔法の方はそのままだけだね？ ああ、魔術と魔法の違いはわかるかな？ 簡単に言うと、自作したり改造したりしたのが魔法で、君達が今まで使ってきたのはみんな魔術だね。魔力を今まで通りに込めると威力が上がるから、さっき言ったのの見方を変えるところなるってことだね。でも私は風の精霊王だからその効果は風の魔術にしか無いよ？ 他の属性の魔術や魔法にもこの効果をつけたかったらカルシフエルやマルシファーと契約してね？ もちろん私とアルシフスともね。仲間外れは良くないからね』

「黙れ」

そんな理不尽な

私がひれ伏したままゾクゾクしている間に、ディオさんとナギ殿はなにかを話し合っている。

聞こえずらければ聞くことはできるそれを、私はあえて意識をはずして聞こえないようにする。

……いやいやいや、私だつて一応女だしね。精霊の性別なんて飾りみたいなものだとわかっているのだけれど、それでも恋路の邪魔はできないさ。

嫌いな相手だつたらともかく、どちらも好きな相手ならなおさらに。

……それにしても、ディオさんは気付いててああいう態度をしているのか、それとも気付かずにしているのかは知らないけれど、もし気付いててああいう態度をしてるんだつたら意地悪だよな。

まあ、多分気付いててやってるんだろうけど。

でも自分の気持ちはわかってないのかな？ これでも暇潰しに色々観察はしてきたからね。ここまで歪んだ人間は久し振りに見たけどさ。

……ああそつだ。どうせだったら一人には幸せになってもらおうかな。アリバっさんは魔王を倒した後はどうなっても関係無いみたいだし、それだったら幸せになってもらった方が気分が良いからね。

一番優しく一番慈悲深い風の精霊王の心情。

デイトさんと話し合って、契約は後にすることにした。

デイトさんはそういうのは私に任せてくれる。そしてどうしてもやらなくっちゃいけない最低限の事は何で必要かと言う理由と一緒に教えてくれるし、やり方やコツも教えてくれる。

多分、デイトさんは騎士以外でもとても有能なんだと思う。

デイトさんもそれは認めている。けれどそれでももつと上を目指している理由は、お母さんに勝ちたいからだそうだ。

初めて聞いたときにはなんでかわからなかった。デイトさんより強い人が居るなんて思っていなかったから。

けれどその人の凄さは、話を聞いて少しだけわかった。

その人は、きつと天災だ。

人の努力も才能も、何もかもを容易く飛び越え、蹴散らし、踏み潰して行く。

きつとその人は、まるで象が意識せず蟻を踏み潰すように。津波が大木を地面ごと海に引き摺り込むように。極々当たり前のようにそれをするのだろう。

たまにそんな人が居ると、私はお母さんに聞いたことがある。

私のお母さんは高校時代に弓道をやっていて、インターハイにも出たことがあるらしい。

そして、そのインターハイで才能の塊のような人に出会った。

その人が歳上なら納得できた。せめて私と同年代ならまだ目指すこ

とができた。

その人が男なら、それを理由にして追い付こうと頑張れた。

でも、その人は女で、私より歳下で、そして私じゃあ追い付こうとすら思えないような才能の塊だった。

お母さんは懐かしそうな、そしてどこか寂しそうな顔でそう言っていた。

その人の名前は知らない。お母さんも知らないらしい。

ただ、今でも見つけたら絶対にわかると言っていた。それだけ深く印象に残っているんだと思う。

……………とまあ、母さんの昔話はどこかに置いておくとして、今はこれからの事を考えないと。

風の精霊王であるウルシフィは地面と仲良くなったまま恍惚の表情を浮かべている。

今は使い物にならなさそうだけれど、正気に戻ったら他の大陸の精霊王達の居場所を教えてもらおう。

早く帰らないと、お母さんやお父さんも……………多分、心配していると思うから。

……………でも、帰るってことは……………ディオさんとはもう会えなくなるってことだよな。

……………どうしようかなあ……………。

『さて、それじゃあさつさと話を進めていこうかな。私が悶えていなければもつと早く進んだんだけどね。うんうん、冷たい視線を浴びるのは気持ちがいいね さつきは良いことばかり言ったけど、もちろん悪いことだってあるよ？ 当然って言えば当然なんだけどね。例えば慣れないうちは契約した精霊王と同じ属性の精霊達との感応力が強くなりすぎてトランス状態になることもあるし、早めに全部の精霊王と契約しないと性格のバランスが崩れちゃうこともあるんだけどそこはナギ殿なら平気だと思うよ？ ああ、トランス状態の方は十分可能性はあるから勘違いはしないでね？ ナギ殿の性格は魔力に依存していないから性格の方は平気だと思うっただけさ』

風の精霊王はやはり随分と舌が回る。それも空気は読めるだろうに気分次第でぶち壊しもそのままいくかも決めているようで実に厄介だ。

それにしてもトランス状態か。あれは訓練には良いのだが戦闘には向かないから、契約するのならば暫く安心して休める必要があるだな。

その辺りの宿では……まあ平気だと思うが、どこにでも馬鹿は居るからな。安心はできんだろう。

……やれやれ。銀の匙亭がまだあれば良かったのだがな。

『ああそうだ。私にとっては割とどうでもいいことなだけでさ。この大陸のランドリート以外の国が団結してランドリートを倒そうとしているみたいだよ？ どうもどこからか救世主を異世界から召喚したって言うのが漏れたみたいだね。まあ宰相が魔王に報告してそこからこういう風に仕向けられたみたいなんだけど。で、ディオさんとナギ殿はどうする？ 捨て置く？ それとも救いに向かう？ 私としては捨て置いた方がいいと思うけど、好きにすればいいん

じゃないかな？　ちなみにアリバっさんが伝えた魔法はランダムで求めたモノを呼び出す術式だから、あの国じゃあまずナギ殿を元の世界に戻してあげるのは無理だと思うよ。何て言っただって今現在の世界で魔術式の改変ができるのは両手の指で数えられる程度の人数しかないからね。ちなみに私の指は風でできているから増やそうと思えばいくらでも増えけほつ　鳩尾に爪先がつ　ナギ殿も加減がなくなってきたね。良いことだと思うよ？』

その点については同意しよう。自分より下位の敵と戦う時に加減するのならばともかく、精霊王のようなもの相手に加減は必要ない。特に相手は変態だ。変態に加減など自殺行為以外の何物でもない。何をどういう手段でひっくり返してくるかわからないのが変態と言う生物の特徴なのだから、油断は大敵だ。

……………そう考えると、母さんは十分変態の域に居るわけだが……まあ、否定する要素はないな。けして本人の前では言えないが。

「……………私としては無視したいんですけど、どう思いますか？」
ナギ殿が不安そうに私を見るが、そんなものはとっくに決まってる。

「ならば無視しよう。特に私達が困ることはない」
困らなければできるだけ限り無視。特に面倒事はそうするに限る。それで私達に害が来るのならば一番楽なところで介入して排除すれば良い。

私の言葉を聞いたナギ殿は内容の暗さを知ってか知らずか、とても明るい笑顔を浮かべた。

外道騎士と外道救世主の旅路。精霊王付き。

こうして私とディオさん、そしてウルシフィは旅を続けることになりましたが、とても平和な日本に暮らしていた私にとって、この世界の旅とは想像以上に危険なものでした。

時には魔物に襲われ、時には人間にも襲われ、スリに合いそうになったこともあれば騙されて盗賊や奴隷商人に売られそうになったこともありました。

それでもこの大陸はそれなりに優しく平和な方だと言われて驚きましたが、異世界なのだと自分を無理矢理納得させることもしばしば……。

それでも私が旅を続けているのは、使命感や正義感といった綺麗なものじゃありません。

私が魔王を倒さなければ……いえ、倒すではなく殺さなければ、いつかディオさんがその魔王に挑まなければならぬ日が来るかもしれないからです。

……口に出して言うのは恥ずかしいですが、自分が好きになった男の人を守るのも、女の子の幸せのひとつ……ですよね？

旅に出掛けてからと言うもの、ずいぶん寝起きが良くなったと思う。それはきつとあの城の中のような間接的で真綿で締めくるような危険ではなく、もっと直接的で真剣のような危険が一杯だからだと思っっています。

なんといつてもこの世界、特に町の外には魔物がたくさん存在する

わけ。

それに、一度寝起きに気を抜いていたらいきなり後ろから襲われたこともあるので、いつでも気は抜けません。

……まあ、それでもあの少しずつ少しずつ追い込まれて行って、気が付いたら勝手に行動を決めさせられているような状況に比べればまだ楽だとは思いますがね。

私が始めにこうして旅を始めることになったのもそれが原因な訳だし、そういうのがすごく上手な相手ばかりだったから暫くしてデイオさんに言われるまで気付かなかったですし。

……この世界の人間が少し嫌いになった瞬間でしたね。

その後も町や村をいくつか回ってきたけれど、若い男と若すぎる女の二人組と言うだけで色々なことを言われてきた。私が対象になるときもあればデイオさんが対象になるときも、同時に色々言われることもあった。

異世界ではよくあるギルドなんて物もあったし、その人に声をかけられることも、酔っぱらっているのかどうかは知らないけれどもいきなり私に酌をしるなんて言ってくる人もいた。

そう言うのは大体（デイオさんが言う所の）中堅のパーティに多いらしく、少し大きな町の宿屋や酒場なんかではほとんど毎回絡まれた。

だから私達はそれを避けるため、それなりに大きな町ではできるだけ寂れた宿屋に泊まるようになった。

けれども小さな村や集落では、排他的なところを除けば悪い人はあまりいないし、少しくらい排他的なところでも、関わり合いになりたくないというだけで割と悪いことは考えていない。

この世界にきてから、少しそういう感情や気配に敏感になった。そ

れでも、どろどろとした悪意を感じることは少ない。精々、タイミングが悪くて生贄が必要な時期にそこに来てしまった時に、生贄の女性の父親からの、この旅人を代わりにできないだろうか……、といった目に睨まれた時くらい。

きつと彼らは悪意を持たない。ただ、少し残酷なだけで。

……まあ、それでこの世界がどんどん嫌いになっていくのが止まるわけでは無いけれど。

「……ふむ。随分とストレスが溜まっているようだな。発散しに行くか？」

ある日、私の顔色が悪いのを見て私の体を診察したディオさんはそう言った。

「どうやってですか？」

「なに、確かにこの大陸は割と平穏であるためにそういったものは二年に一度しかないが、他の大陸に行けば大小はあるが年に数度はそういうものがある」

ディオさんは笑いながらそう言うけれど、私には何の事だかわからない。

『簡単に言ってしまうと大会だね。それも賞金が出たりするタイプの。出場には別にお金はかからないけれど、たまに非合法で非公式なところで奴隷と魔物を無理矢理戦わせてその勝敗で賭けをすることそんなのもあるよ。その場に空気があればそこは私の知覚範囲内だからね？ 私から物を隠そうとするならそこに空気がないように

しなくちゃ。別に繋がっていなくてもそこに空気があればわかるさ。ただし結界の中だけはわからないから秘め事はその中でね』

……つまり、そういう大会で暴れてストレス発散でもすればいいってことかな？

……あ、結構いいかも。

『あれ、私のことは完全に無視かい？ まあ、それはそれで放置プレイとでも思っておくから別にいいんだけど、他の精霊王に同じことはしないであげてくれよ？ 私がこうしているのは、単に私がド変態のマゾヒストでその中でも精神的肉体的に責められるのも屈辱を味あわされるのも普通に誉められるのも大好きな致命的なレベルでいかれてるってだけなんだから』

「自分のことをそこまで理解できているなら少しは直す努力をしろ。口を塞いで目隠しをして首輪と鎖で繋いで引き摺るように散歩するぞ」

『あはうあ どうしよう想像するだけでドキドキしてきました。そして私のあまりの駄目っぷりに興奮してきたよ。こうなったらそれを実行してもらっしかないね。さあ！』

デイオさんとウルシフィは仲良く言い争い(?)ながら笑っている。こうして誰かが私のそばにいてくれるだけで、随分助かっている。

……けれど、デイオさんは私のです。最後には私が勝って、デイオさんをものにして見せます。

とりあえず、男は胃袋から攻めろという話をよく聞きますし、料理の勉強から始めていきましよう。

寺島渚の花嫁修行。開幕編。

異世界編 2・50 (前書き)

わわわ忘れてた……申し訳ありません……。

ランドリートの王宮から急ぎの手紙が届いた。どうやら私とナギ殿を周囲の国に対する防壁にしたがっているようだ。下らない実には下らない。

それに今の私はランドリートの騎士団長ではないし、ナギ殿もランドリートに所属しているわけではないのになぜランドリートの命令を聞く必要があるのだろうか？

やれやれ。これだから自分が世界の中心だと思い込んでいる輩は困る。

……… ついでに、この手紙の最後に書いてある脅迫文だが………
……… できるものならやってみると声を大にして言いたい。

国中を探して私の母を殺すやら、ナギ殿を元の世界に戻してやらなど書いているが、どちらも元々できやしないだろう。

と言うか、できる奴が居るならさっさとそいつに魔王を殺しにいかせれば万事解決だろう。あの母さんを殺せて魔王程度を殺せないわけがない。

「……… どうしますか？」

「無視だ。私を殺せないものが私の母を殺せるものか」

『それにナギ殿を帰さないとか書いてあるけど絶対使い潰されるだけだと思うよ？ 召喚はできても送り返すことはまあ無理だし。できるとしたらアリバっさんかあの娘くらいかな？』

……… 前から思っていたのだが、たまに出てくるあの娘とは誰だ？

母さん以外にもそんなことができそうな人間（？）には心当たりがないのだが。

……まあいい。とりあえずこの手紙を持ってきた伝令に返答をしてやろう。

私達が手を貸さない程度で滅ぶ国など滅べ、と。

伝令を返して暫くすると、どこからかは知らないが大量の暗殺者が涌くようになった。

まあ、ランドリートからだろうがな。実に面倒臭い。

「……ほんとにこの人達って暗殺者なんですか？ 訓練の時のデイオさんの方が気配が薄いんですけど……？」

「私は行動を読まれにくいように意識して薄くしているからな。もう少し予備動作を無くして動きを最適化させることができれば、初見殺しの剣技ができるらしいのだが……」

『私は今でも十分初見殺しだと思っただけだね。それよりも上があるっていつのは少々信じがたいかな。でも、あるって言うんならあるんだろうね。ああ怖い、あの威力が気付いたら自分に当たっているなんて……ああ怖い。怖くて怖くてゾクゾクするっふ』

「それは違うゾクゾクでしょう？ いいから早くこれを命じた人を教えなさい。さもないと暗殺者への盾にしますよ？」

『え、それは嫌かな。あんなのに痛め付けられても気分悪いし気持ち悪いしむしろこっちから切り刻みたくなるしというかも切り刻んでるし命令した馬鹿もその上役の馬鹿もついでにその家族もみんなバラバラにしちゃったけど別にいいと思うんだ？ 問題無いよね、構わないよね？ イライラしてついやった。後悔も反省も全くしてないよ？』

ふむ。やはり人外、気に入らない者への慈悲など欠片も持ち合わせていないか。

まあ、当然だな。私もそうだ。

だが、私も殺りたかったのだから？

「アザギ。ランドリートの王都全体に呪詛を飛ばしておいてくれ。致死性はいらんが、タチの悪い物をな」

『……………うふふふ……………わかったわあ……………』

フルカネルリに頼まれ、アザギは遠く、ランドリートの方向に体を向けた。

そしてその体から、どす黒い何かが飛んで行く。

《この世界の人間は馬鹿だネー。あんな神が作ったんだから、仕方ないって言えば仕方ないのかもしれないけどサー》

「そうだな。だが、なんにしるやることは変わらんさ」

《そうだネー》

けらけらと笑うナイアに、フルカネルリはいつもの無表情で返す。

……………しかし、ナイアなど付き合いの長い者達にはフルカネルリが少しだけ苛ついているのがわかるらしく、いつもならばついてくるからかいの言葉が無かった。

『……………終わったわよお……………もうすぐ、あそこで、風邪、が大流行するわあ……………』

「そうか。よくやってくれた」

この世界で風邪は、割と重病である。

なぜなら、怪我と違って回復魔術では治らないし、放っておけば弱った体が他の病にかかることもざらにあるからだ。

その他にも、この世界には病原菌の役割をする物を運ぶ小動物も多く、あつという間に広がっていくこともあるし、なにより薬らしい薬など存在しないからである。

この世界の存在とは、全て魔法でできた学習機能を持つAIのようなもので、風邪を引くと言うことは体を構成している魔法になんらかのバグ、または異常が出ている状態だ。

当然、バグが出ているAIに健全なAIが接触すればそのバグは移り、自己修復に任せなければならない。

回復魔術とは傷付いた状態を健全な状態まで修復する物なのだが、風邪などの病気ではその健全な状態が崩されるので、風邪は回復魔術では治らないのだ。

呪詛、つまり呪いとは、この状態を強制的に、かつ簡易的に引き起こす現象である。

普通の病気をコンピューターウイルスによる根本からの改変とすれば、呪いとはプログラムのどこかに一つ0を付け加えるような物で、そのぐらいならば魔術で割と簡単に取り除く事ができる。

……………普通なら。

しかし、今回呪いをかけたのは悪霊歴数万年を数えるアザギ。そんな存在のかけた呪いが普通の呪いである筈がなく、致死性はなくとも威力や持続力は抜群でありながら感染力も相当な‘風邪’が出来上がっていた。

これは単にアザギがこの世界、正確にはこの島の外の人間の力量を測り違えただけなのだが。

「さて、私も久し振りに出掛けるとするか。息子の未来の嫁の姿も直接見ておきたいしな」

『……………そうねえ……………見ておくべきよねえ……………ふふふふ……………』

そんなどうでもいいことをフルカネルリが気にするわけもなく、ランドリートはゆっくりと衰退していくことになるのだった。

アザギの呪風の恐怖。

《ちなみに症状は某ゾナ八病によく似ているヨー。違うのは笑おうが怒ろうが泣こうが収まらないところかナー？》

港町パラハツラに到着。ここから船に乗って他の大陸まで移動するのだが、少し考えることがある。

「ナギ殿。部屋の格があまりにも下に変わらなければ、安上がりの方が良いと思うのだが」

「そうですね。他にも色々使うことがあるかもしれませんが、節約できる所は節約した方が良いと思いますけど」

うむ。やはりそう思うか。

「二人で一部屋を使うよりも、この夫婦用の一部屋を借りた方が安上がりなのだが、それで構わないか？」

「ふっ！？ あ、は、はい！」

なぜそこまで慌てているのだろうか。何度か一つの部屋で眠ったことはあるだろうに。

『いやいや、わかってて言うのは趣味が悪いと思うよ？ それに御主人様はそんなに鈍くないし、今回と以前は割と違うんだよ。主に心の持ちようとかがね。あと以前だって普通に寝ていたんじゃないかって少し寝るのが遅かったし、ってなんだい？ また縛り付けて鞭打ちでもしてくれるのかな？ そんなことをされたら私は涎を垂らして喜ぶよ？』

そんなことをした覚えはないが、とりあえず黙らせるか。

全く、この変態は種族的に回復も早いし丈夫すぎるな。粉々にしても数分で復活するとは……。

まあ、自称だからどこまで本当かは知らないが、あり得ない話ではない。

「誰が御主人様だ誰が」

「かはっ」

船の出港まで二週間ほど時間がある。一月に一度の機会を逃せばまたしばらく待たなければならぬので、予約はしつかりと。

ナギ殿と夫婦として一つの部屋をとった時の相手の反応は、凄まじいまでの苦笑이었다。

恐らく私を少女趣味だと思っているのだろうが、この場では一応違うと言っておく。その時には言えなかつたのでな。

ちなみに私の初恋の相手はハヴィ姉さんだった。ただ、ハヴィ姉さんはそういったことに全く興味が無いらしく（私の家族は私を含めて皆そうだが）、そういった話を聞いたことがない。

一応子作りやら何やらの方法は母さんから聞いているし、何度か実践もしたので理解はあるが………修行で忙しく、そういったことをする機会と言うものがとても少ない。

……まあ、私としては一向に構わないが。

「ところで、船が出るまでどうするんですか？」

「まあ、特に決まっていはいないが………適当な宿に泊まり、時間を潰すことになるだろうな。どこか行きたいところややりたいことはあるか？」

私がそう聞くと、ナギ殿は少し考えてから首を横に振った。特に行きたいところは無いらしい。

そういうことで、なら私の用事に付き合ってもらおうことにした。
……これには一応ナギ殿も関係しているので付き合ってもらおうと言
うのはおかしいかもしれないが、およそわかれば構わないだろう。

行き先はこの世界に多くの拠点を持つ冒険者ギルド。その内の一つ
に登録しておくだけで簡単な身分証明書の出来上がりだ。

本来ならもう少し早めに取っておくべきだったが、ナギ殿の経
験が圧倒的に足りなく、あつという間に騙されてしまうということが
考えられたので先送りにされてきた。

しかし今は僅かとはいえ経験も積むことができたし、甘さもかなり
捨てることができるようになってきたということもあり、メリット
がデメリットを越えたために登録しようという流れになった。

「大丈夫なんですか？」

「なに、長い間ここに留まるわけではないし、ランクを無茶にあげ
なければ気にされることもない」

「……………けど、ディオさんって有名なんですよね？　そこから話が
広がっていくなんてことは無いですか？」

ふむ。なんとか思考を止めないことができるようになってきたな。
良いことだ。

だが、私とその程度のことを考えていないわけが無いだろう。

「無いことはないが……………知らないだろうが、私の名は、'ディオ'で
定着しているのでな。本名ならわかる者はまず居ない」

「……………それ、悲しくないですか？」

「必要な時に必要な相手に理解されていればそれで構わん」

とりあえず、母さんとハヴィ姉さんとプロト姉さん、そしてナギ殿といった所か。後は知られていなくとも一向に構わん。

ギルドに行つて、登録をする。よくある魔力を計る道具や使える属性を調べる道具等はなかったので、ある意味では目立つことはなく終わった。

けれど、やっぱりディオさんはなにもしていなくても目立つ。なんといつても、かっこいい。

受付のお姉さんに話しかけたときも口調は丁寧だったし、声も低めでよく通る。嫌味な雰囲気も無いし、知られてはいないだろうけど料理も上手。そして普通にかっこいい。注目されるのは仕方ないかのな。

……けど、それはやっぱり必要ない相手にまで注目されちゃうつてことで……私とディオさんは今、酒場と兼用になっている宿屋の一階で見知らぬ三人組に絡まれています。

……つて言つても、私もディオさんもほぼ完全に無視しているので向こうが一方的に騒いでいる状態ですが。

……ん。この世界のお酒つて、あんまり強くはないですね。流石に十杯も飲んだらくらくらしそうですけど、このくらいの強さなら二〜三杯くらい飲んでも問題なく行動できると思います。

「あ、そう？　ちなみに強いお酒を飲みたいんだつたら私が持つているのをいくつかあげるよ？　どうせ私は何十年に一度位しか飲まないし、飲む量も少しだけだし、あんまりお酒は好きじゃないしね。

お酒よりミルクの方が好きだよ？ 食べたり飲んだりする必要は全くないんだけど、どっちも必要は無いつて言うだけできることはできるし結構好きだからね。ちなみに一番好きな食べ物は何ですか？
『キだね。風属性が強いと私の舌は満足するのさ』

別に強いお酒を飲みたい訳じゃないし、ウルシフィの好みも聞いてないのでスルー。一応頭には留めておくけれど、恐らく思い出すことは無いだろう。

……ああもう周りが五月蠅いですね。誰が子供ですか誰が。
……いえ、確かに私成人してませんが、これでも十七……もう十八？ なんですから、子供扱いはあんまりしないで欲しいです。

寺島渚のちょっとした不満。

「っ！いい加減にこっちを向きやがれ！」
「「は？」」

はい、どうやら私達に絡んできていた見知らぬ誰かの一人が勝手に切れたようです。勝手に絡んで勝手に切れて……全くもう。

「頭がいかれてるのだろうか？」
「頭が狂ってるに違いありません」
「っだどこの野郎！！」

あ、つい思っていることが口に出てしまいました。
でも、ディオさんも口に出してましたし、そんな変わらないですよ
ね？
まあ、とりあえず。

「黙れ」
「静かにしてください」

黙らせますか。

……………私も好戦的になつたなあ……………。

こちらに向けて叫んでいる顔のまま固まっている氷像が一つ。驚愕の顔のまま固まっている石像が二つ。言うまでもなくさっきから私達に絡んできていた見知らぬだれかさん達だ。

私が一人、ディオさんが二人。私は石化の魔術はまだ使えないから凍らせたけれど、このままだと掃除が大変そうだ。

『目立たないっていう目標を忘れてないかな？ こんな高位の魔術を使ってしまえば当然目立つよ？ その辺りはどう考えているんだい？』

……そういえば、そうでしたね。どうしましょう？

ディオさんのほうをちらりと見ると、何事もなかったかのように出された食事を食べていた。

「あ、あのお……？」

「問題ないだろう。高が中位魔術の無詠唱だ。この程度で騒ぐようなら程度が低いと自ら認めているようなものだし、そうなれば仕事を干されて食っていけなくなるだけだ」

「そ……そうですか？」

「ああ、そうだ」

ディオさんは当然のように言っているけれど、確か石化の魔術は高位に最も近い中位魔術って聞いたような……。

『規模や解呪のしにくさ、持続性に精密性、魔力消費と付加効果と周囲への余波の軽減とか、そう言うものを全部纏めてやらなくっちゃいけないからかなり難しいよ。その他にも変わった後の石の強度や硬度、質なんかも色々あるし、派生に石化ならぬ金属化なんてのもあるし、色々応用は効くよ？ ちなみにアルフシスは空気に金属化をかけて大量に剣を飛ばすとかそんなこともできるし、相手を意識があるまま石化するとかそんなことまでできるって聞いたこともあるしね。ついでに、人間で使えたのは今までに片手の指で数えられる程度だよ？ もちろん長い詠唱をしてだけど』

……つまり、ディオさんは凄いつてことですね。
あと、たしかウルシフィの指はいくらでも増えると聞いたけれど……
……？
まあ、何でもいいですけどね。私に関係の無い人のことなんて。

朝。目が覚めると、趣味の悪い石像がいくつか置いてあった。寝る前にはこんなの無かったと思うんですけど……？
そう思っていると、扉が開いてディオさんが入ってきた。

「おや、起きたかナギ殿。久し振りの柔らかいベッドの感触はどうだった？」

「ディオさんの心音に集中しすぎて楽しむ余裕もなく寝ちゃったのでわかりません」

これは本当。そしていつものこと。一つの布団で眠るのも、固い地面に簡単なテントを張って寝るのも、柔らかなベッドが久しぶりだつていうのも、ディオさんの心音に集中していたつていうのも、全部。

……私も遅しくなったのかな？ この世界に来る前の私じゃあ、男の人と一緒に寝るなんて絶対無かったと思うし。

いや、別に私が女の子が好きつていう訳じゃ無いですよ？ 私はノーマルですよ？ ウルシフィみたいに変態性癖なんて持ってないですからね！？

『あははは、私かなんと言われようとディオさんとナギ殿なら別にいいけど、というかむしろもっと言つて欲しいけど、あんまり慌て

て否定し続けるとまるで凶星をつかれているように見えなくもないからやめておいた方が良くと思うけどね?」

「五月蠅いですね。静かにしてください黙ってくださいいつ誰が変態に発言権を与えたんですか」

『あううっ！ディオさんとはまた違う冷たさがイイっ！』

周囲に見えないように消えたまま空中でくねくねと身悶えをするウルシフィに冷たい目を向けながらディオさんに気を向けると、この石像について教えてくれた。

どうやら石像は昨日絡んできた見知らぬ誰かさん達と同じテーブルで騒いでいた人達だったようだ。誰かさん達を石にしたり氷付けにされてしまったので、私たちを殺して魔術の効果を解くつもりだったとか。

けれど、それで自分達が石化してしまっただけでは意味がないと思うんですけどね。

……あと、私はともかくディオさんとウルシフィの間をつこうなんて……きつとそれだけでかなり難しいと思う。ドラゴ ボールで言うと、飲茶《ヤ チャ》がブ リーに勝つと同じくらい………
…うん、無理ですね。

性癖その他以外は認める寺島渚のある日の目覚め。

初仕事です。内容は薬草を取ってくることに。そしてディオさんとは別行動。

……ちよつと寂しいと思ってしまった私は、随分とディオさんに依存しているのだと思います。

ちなみにディオさんは適当にそこらに居る魔物を狩って報償金を貰う予定らしい。まあ、ディオさんなら心配はいらないですよ。むしろ魔物の絶滅が心配です。魔物といっても（ゴーストやグールなどを含む一部を除いて）ただの動物と同じようなものらしいです。

薬草は結構簡単に採ることができた。何体か魔物ともであつたけれど、ちよつと睨み付けたらすぐに逃げ出してくれた。怪我はなく、勿論疲れもほとんどない。

……よくある異世界トリップ物でも、ここまで人付き合いが少ない『勇者様』も珍しいですよ。

私を知り合いと胸を張って言えるのは、ディオさんとウルシフィ。以上。

……想像以上の少なさに、少し落ち込んでしまった。元の世界では友達も結構居ただけだなあ……。

……まあ、良いです。今はそんなことを考えている時間ではなく、初めてのお仕事の時間です。こう言つと少し前に見たテレビ番組を思い出しますね。

気をとり直して立ち上がり、ギルドのあるバラハツラに向かって歩

き出す。ギルドカードがあれば普通に入れるし、面倒な手続きも必要ない。しかもギルドに関わる宿屋の料金が少し安くなる。良いこと結構一杯ですね。

「はい、これが報酬の銀貨一枚と銅貨二十枚です」

「……はい、確かに」

手の中にある硬貨の色と数を確認し、私はそれをディオさんに渡された袋の中に放り込む。

中に元から入っていた硬貨と今放り込んだ硬貨がぶつかりあって軽い音をたてる。これで明日の宿のお金はできた、と。他にもいくつか受けておこうかな。

そう思って依頼掲示板の所へ行くが、良さそうな依頼がひとつもない。

安全そうなものは時間がかかるみたいだし、近場で安全なものも全部やってしまった。

……あ、雑事掲示板の方を見に行ってみようかな？ 確かあつちは安全なものばかりで、一般人で時間がなかったり面倒だったりする事を任せる物だつて聞いたし。

『例えば子守りとか、家の大掃除や模様替え、庭の大きな岩の移動に害獣・害虫駆除。そんな簡単な仕事一杯あるのが雑事掲示板だよ？ 当然報酬は少ないけど、それでも時間を食わないのを選ぶば1日に十個くらい受けることもできるし、逆に時間がかかるのを受けてもそれだけ報酬は上がっていくしね。大抵歩合制か何を何個作つて欲しいとかそういうのばっかりだから、まあ悪くはないよ？』

……へえ。さすがは年の功、色々知ってますね。

ウルシフィの言葉に頭の中で返しながら雑事掲示板を覗き込む。

……飼犬の搜索、銅貨五十枚。引越しの手伝い、銅貨八十枚 + (歩合制)。ラクウルフの群れの討伐、一体半銀貨一枚。ひよこの雄と雌の見分け方を教える、銅貨三十枚。羊毛刈りの手伝い、一体銅貨十五枚、傷によって値段は上下。ハーブを買ってきて、銅貨二十枚。畑を荒らす魔物の討伐、銀貨二枚……。本当に色々ありますね……よくわからないのも含めれば二百以上。少しビツクリしました。

……あ、これなんか良さそうですね。

私が手に取ったのは、簡単な魔術を教えてほしいという依頼。教えてほしい魔術は、周囲を明るくする魔術、飲み水を出す魔術、火をつける魔術の三つ。幸い全部覚えているので後はその人に呪文と魔力の操作方法を教えるだけ。

まあ、いくら簡単な魔術とはいえ失敗すると消滅してしまうので注意が必要らしいけれど、そうなりそうなら私がなんとか抑えればいい。やってみよう。

教える相手は六歳くらいに見える少年。結構物覚えが良くて、十五分で明かりと点火の魔術は使えるようになってる。

後は水を生む魔術だけなのだけれど、どうやらこの少年には水属性の魔力の持ち合わせがないらしい。

さすがにそれで水属性の魔術を使うのは不可能なのでそう言ったのだが、少年はまだそれを認めてくれない。

……どうしようかなあ……。

……あれ？　つまり、水属性の魔力があれば使えるんですね？

次の日。水属性の魔力を固めて作った石を飲み込ませたら、少しだ

け水属性の魔術を使えるようになった。やっぱり、結構どうにかなるものですね。

依頼も成功しましたし、一件落着です。

森の中に入り、襲いかかってくるもののみを切り捨てる。既に五十以上の魔物を切り捨てているが、血の臭いに惹かれて次々に魔物が現れる。魔物の体は物にもよるが使えないところはあまりないので全体的に売ることができる。

そのため殺したものを全て運んでいるのだが、母さんや黒蹄と違って影などを使った倉庫を作るだけならともかく、維持するには魔力が足りないため、そろそろ運ぶ量に限界が見えてきた。

……今さらだが、やはりこの大陸の魔物は弱いな。何故強めに息を吹き出しただけで吹き飛んで樹に体をぶつけて骨を折るんだ。その速度で樹にぶつかったぐらいなら、普通少し痣ができる程度だろう。

……やれやれ。虚弱というのは大変だな。私も人のことはあまり言えた身ではないが。

ギルドに狩った魔物を売りに行く。何故か途中であり得ないものを見る目をされたが、理由はわからない。何故だろうな？

「……………え、えっと……………少々時間をいただきます……………」

「早めに頼むぞ」

ギルドの買い取り受付に居た女は、私が持ってきた魔物の群れだったものを見上げて、ひきつったような顔で笑っていた。

すぐに調査が始まり、時間にして三十分ほどしてようやく見積もりが出たようだ。途中で

「えっと、ラクウルフが七体と、ラズルマウスが十二匹に、……ええっ！フラットスネイクとフラットウイング！？ それに……レッサーワイバーンの首い！？ 一体どこまで行ってきたのこの人お！？」

という悲鳴が聞こえたような気がしたが、ワイバーンなど倒した覚えは無いぞ。私が倒したのは腕と翼が一体化したそこそこ大きく育ったトカゲだ。全長は八メルト程か。

「……も、もしかして……ひい！やっぱり竜の魔石が残ってる！？」

「それもこんなに！？ ぎ、ギルド長……！」

「なんだねさわがs……何い！？」

などという言葉も聞こえてきた。実に騒がしいな。
やれやれ。

結局買い取りはすぐに終わり、私の財布代わりの荷物入れは白金貨と金貨の占めるところが幾分増えた。これでこの大陸にいる間の金銭は確保できたな。

さて、今日はもう遅いし、宿に戻るかな。

常識外れのデイト。

異世界編 2 - 外伝1 (前書き)

リクエストがあったので書いてみました。

異世界編 2 - 外伝1

これはひとつの物語。

フルカネルリにねじ曲げられた、一人の青年に振り回された人達の物語。

私の名前はアブリシヤス。名字は無いが親にもらったこの名前だけはしっかりと持ち続けている。

職は元冒険者だったが、今では引退してギルドの受付をやっている。

……ちなみに、二十五歳の独身です。彼氏募集中。

けれど、昔の私の噂のせいで全然出会いがありません。

ちよつと頑張つて一人でレッサーワイバーンの死体を漁つて竜の魔石を取つてきたら、なぜか私がワイバーンを笑いながら殺して切り刻み、内蔵から引きずり出してきたっていう噂が広がって、そのせいでほとんどの人が私に向ける視線が畏怖と恐怖が入り交じったようなもの限定されてしまいました。

私だって女の子なんです！出会いも欲しいし恋だつてしてみたいんです！

……つて言つても現状では無理なんですけどね。

そう思いながらも仕事はきつちりと。もしかしたらこういふ真面目なところがいいっていつてくれる人もいるかもしれせんし。

「失礼。討伐した魔物の部位の換金はここで？」

あ、来たわね。仕事だし、ちゃんとしなくっちゃ。

「はい、承っております。まずは見積もりとなりますが、よろしいですか？」

「はい」

今回来たのは初めて見る顔の男。多分私と同じくらいね。

その男に私は魔物の部位を出すように言うと……

「すまないが、実はどこを持ってくればいいのかわからなくてね。

まるごと持って来たんだが、構わないか？」

「ええ、大丈夫ですよ」

……正直に言って、その時にそう答えたことを後悔した。と言うか、今もしている。

どこに持っていたのか、出てくる出てくる次々に。

始めに出てきたのはラクウルフ。討伐難易度が数によって激変し、一体だけならD、二体から四体ならC、五体以上十体以下ならC+、十一体以上ならBになるそれが、どんどんどんどん出てくる。

次に出てきたのはラズルマウス。これもまた数が厄介で、ラクウルフより一体一体の難易度が低くなる代わりに数だけなら確実にこちらの方が多いそれを、次から次に出してくる。何体かって？ 色々混ざって覚えてないわ。あとで数え直すし、それに傷や汚れも見なくっちゃいけないしね。

更に出てくる。だんだん面倒くさくなってきたのか、一度に出てくる量が多くなってきているので細かいものはわからないけれど……どう見てもヤバイものが混ざっている。

「……と、こんなところで」

そう言われたときにはすでに魔物の死体の山は天井に付きそうになるものが三つになっていた。

「……か、確認させていただきます……少々お待ちを……」

そう言っただけで私はまず一山を持って（持つと言うか引きずって運んでいるだけ）奥に入り、数人がかりでその山を攻略し始めた。

まずは種類を分けて、それから大きさで分ける。大体はラクウルフとラズルマウスだったが、たまにフラットスネイクやフラットウイングと言った中級の端（中級の上の下）にギリギリ引っ掛かっている魔物があり、その度に私たちは驚愕していた。

そして一山が終わって安堵したみんなに、次の一山を持ってくる。その場の全員の顔が引きつった。

そしてまた始まる種分けと大きさ分け。たまに新しい種があるから気が抜けない。

「……ん？ このフラットウイング……頭がない。どう言うこと？」

「せ、先輩！こんなものが出てきましたあつ！」

そう言われて視線を向けると、そこにあったのはワイバーンの首。

それも私が漁ったレッサーワイバーンではなく、本物のワイバーンの成竜のものだ。

……とするとこれは、そのワイバーンの翼の片割れ？ ……何て言う化物……………。

そう思いながらも種分けを続けていると、どんどんワイバーンの体のパーツが出てくる。もうすぐ一体分が揃う、となった所で……
……またワイバーンの首が出てきた。もう一体分があるらしい。それも、竜の魔石を体内に大量に残したままのそれが。

ふっ、と気が遠くなりかけたが、我慢して更に次の山を持つてくる。周囲に絶望感が溢れ出したが、仕方がない。やるだけだ。

出るわ出るわ次から次に翼が脚が牙が胴体が。もちろん他の魔物の体もあつただのだけれど、もう誰もそんなものは見ていない。

誰かがいつの間にか呼んだらしく、ギルド長もこの場に来て頭を抱えていた。

それはそうだ。こんなことができる冒険者など片手で数えられる程度の人数すらない。パーティを組んでいるならともかく、持ってきたのはたった一人の男だ。私でもまず勝てないし、ギルド長も無理だろう。次元が違う。

それでもなんとか見積もりを出すと、なんとその金額はギルドの年間運営費の七割強に匹敵するほどの値段となった。

……………ごまかしたとしてそれがばれたら確実に殺される。けれど今すぐこの場でそれだけの金額を用意することは……………難しい。

このときばかりは私も死を覚悟していたのだけれど、結果としては渡す金額は通常の半分に収まった。あとは借りになるらしいが……どんなことを要求されるのだろうか？

ギルドの受付嬢、元Sランク冒険者、飛竜狩り、のとある日。

異世界編 2・54 (前書き)

活動報告にも書きましたが、15日にまた十二話更新やります。

二週間後。私達は少し遅れたが船に揺られて水の大陸の港町、ケイルに向かっていた。

私はあの大陸以外のことはよく知らないのだが、なんとも運のいいことに情報に関しては素晴らしいソースがすぐ近くにいます。

『もしかして私かな？ だとすると少し嬉しいね。ディオさんが私を頼ってくれることなんてほとんどなかったし、頼ってくれたとしても結構どうでもいいことばかりだったしね。薬草の生えてるところを教えたりとか周囲の警戒とかストレスの発散とかはっ 衝撃がお腹に響くう 』

……これさえなければもう少し相手をするのも楽なんだがな。放っておくといつまでも喋り続けるから切りのいいところで黙らせなければならぬし。

ケイルに到着して初めにやることは、宿の調達だ。これはウルシフイが良い所を先に探しておいてくれたので時間はかからないが、やはり私とナギ殿の二人旅は随分と目立つらしくそれなりの注目を集めてしまっていた。

まあ、そんなことはどうでもいい。慣れない船旅で少しばかり疲れた。今日は早めに休むとしよう。

「……………」

ぼふっ、とナギ殿が無言でベッドに倒れ込む。ころりころりと寝返りをうつっていたが、自分が一番寝やすい位置を見つけたらしく動きを止めた。

そしてしばらくすると、ナギ殿から寝息が聞こえ始めた。どうやらナギ殿も疲れていたらしい。

私はナギ殿の髪を撫で、それから簡単な鬘を仕掛けて同じように眠ることにした。

『実は水の大陸に着いたのは夕方なんだよね。で、今は夜。眠くなくてもおかしくないさ。それと、私はちよつと出掛けてくるよ。カルフエルが住処を変えてないことを確認してくるからね。あそこは炎の精霊が多すぎて、風の検索が届きづらいし疲れるから直接行ってくるって訳さ。明日の朝には帰ってくるから安心してくれていいよ？ ついでに帰ってきた時にはご褒美にほっぺをつねってくれると嬉しいね』

……やれやれ。やはりウルシフィはどこまで行ってもウルシフィか。

目が覚めると、ナギ殿の顔が目の前にあった。いつものことだが、かなり近い。

ナギ殿を起こさないように体を起こし、朝の鍛練に勤しむ。

全身に魔力を流し、その量を徐々に増やしていきながらも外には一切放出しない。そのため魔術師に見られても何の問題もなく、そして広い空間がとれなくとも魔力操作と身体能力の向上が見込めるそれを、ナギ殿が目覚ますまで続ける。

……サボってしまうと母さんにはれた時に酷い目に合う。何で見てもないのにわかるのか本当に不思議になるのだが………まあ、

母さんだから仕方ない。

「ただいま帰ってきたよ。おおディオさん、もう起きていたのか、やっぱり早いね。それとカルシフェルの居場所はやっぱり変わらずツエセム火山の火口だったから、丁度そこまで行く途中に武闘大会の開かれるサノカツキがあるよ。あと大会では殺さなければ魔法も暗器も何でもありだつてさ。さて、報告することはみんなしたし、そろそろ私のほっぺをつねっへひはひい〜」

かなり強めにつねっているのだが、ウルシフィは嬉しそうな声をあげている。

正直、この趣味は理解できないのだが、誰かに迷惑をかけているわけでもなし、そこまで対応に苦しむことでもなし、少しなら付き合つてやることにした。

……そう言えばここは水の大陸と呼ばれているのに、この大陸にいるのは炎の精霊王なのだな。

「ふあふあ、ほえあらかんふあんつぶ……もう少しつねつてくれても良かったのに。まあ、簡単な話さ。元々私達がいた大陸に、人間達が適当に名前をつけたからそんな風にちぐはぐになっていないんだよ。それにアリバっさんは人間に私達の事も精霊の存在も伝えてないからね。仕方ないと言えばしかたないんだけどさ……そうそう、そう言えばディオさんは知ってたよね？ 何で？」

「母さんに教わった。魔力を目に集中させて、なんとなくでも存在しているのがわかるようになるまで……ひたすら修行を……不眠不休で……」

……ああ、母さんの、何でこんな簡単な事ができないんだ？、という本気で不思議そうな顔を思い出す。と言うか、言われた。実際に、

「何故できないんだ？」

と。

……けれど私としては、母さんのような人外筆頭と普通の人間である私と一緒にしないで欲しかった。母さんは魔力の集中無しで精霊をはっきりと見ることができないのに、私は……正確に言うなら大多数の人間は、魔力を集中しなければ存在にすら気付くことができないのだから。

……ああ、やはり母さんは人間かどうか怪しいな。母さんだし、仕方無いが。

……さて、そんな当然の事を言っている暇があるなら、もう少し集中できるだろう。

ディオ、炎の精霊王の居場所を知る。

五十万アクセス記念外伝

これは昔々の話。まだまだナイアが幼くて、物事をあんまり深く考えなかった頃の話。

「クトウグア。とりあえず死ね」

「いきなりなんだこのやうおっあぶねっ!？」

ちよつとクトウグアを二十回くらい殺そうと殴っただけけれど、かわされてしまった。ちっ。

「お前に何があつたんだ!？」

「ん？ 昨日の夢にクトウグアが原因の悪夢を見た。八つ当たりだと理解しているけれど辞められない止まらない。だからおとなしくボクに殺される」

「んな理不尽な!？」

ちよつと頭をかち割ってやろうとしただけなのに、見事にかわされてしまった。ちっ。

「だ、駄目だよナイアくん!」

そう言いながらボクの前に出てきたのは、水色の髪と瞳を持った女。

「……なんだ、クトウルフか」
「なんだじゃないよナイアくん！クトウグアくんをいきなり殺そうとしちゃ駄目だってば！」

そう言いながら涙目になっているクトウルフ。こいつは力はボクやクトウグアとタメをはれるくらい強いくせに、妙に弱気で真面目なやつだ。

ちなみにアブホースとは違う真面目で、正義感ではなくただひたすらに純粹なだけだ。

そのせいかとても子供っぽく、よく甘いものでつられる姿を見かける。

「今回の事を見ていないことにしてくれるなら、ミィゴーのパフェを奢ってやろう」

「ミィゴーのパフェ!？」

……ほら、つれた。

「そうそう、予約を入れてもなかなか出てこないことで有名な、あの意味伝説のパフェを奢ってあげる」

何しろあれは、店長の気分次第で出るかでないかが決まるので、予約すら受け付け手もらえないときもあれば予約をしても出てこないとき、相当運がよければなにもしていないのにサービスで出てくるときもある。そんなある意味伝説のパフェなのだから、甘味好きには堪らないだろう。

因みに、その店長はおかーさんの弟子であるとか。

……かーさんは一体何をしてたんだろうネー？

「……う……う……… 餡蜜もつけてくれる？」

「そのくらいだったら良いヨー」

買収成功。これよりクトウグアの殲滅戦に入る。

「……でも、なんでナイアくんはそんなに怒ってるの？」

ぎしっ、とボクの体が固まった。

思い出すのは昨日の夢。ボクが当然のように主婦をしていて、エプロンなんかつけて楽しそうに料理をしている。

足元に何かを感じ、視線を落とすとそこには二人の子供。どこかクトちゃんとはボクに似ている。

誰かが来た。クトウグアだった。ボクは笑顔でクトウグアを迎えている。クトウグアも、とても嬉しそうだ。

食事をして、子供たちを寝かせてから布団にはいる。するとボクの隣にはクトウグアがいて、ボクに顔を近付けて来る。

ボクも、満更でもなさそうに近付けて行って

「……うん、やっぱり殺そう。そして海に沈めよう」

「水嫌いのクトウグアくんは何てひどい拷問を！？」

クトウルフが何か言っているけれど、全く何も聞こえない。理解できない理解しない理解なんてしたくない。とりあえずクトウグアはぶっ殺そう。

ジャシニカ日記帳。なまえ、ないあるらとほてぶ

きょうは、たくさんたくさんくとうぐああをばかをころしました。なんとあのばかは、あろうことかぼくのゆめをあくむにかえてしまったからです。

そのないようをくとねりしかさんにいったら、にがわらいをしてしかたないとゆるしてくれました。くとねりしかさんがだいすきなみ「ごーのぷりんをおみやげにもっていったのがきいたのかもしれない。

くとちゃんには、くとうぐああのことをくとうぐあさんとよぶようにおねがいましたら、けっこうかたんにおねがいをきいてくれてよかったですとおもいます。おれいにかすたーどぷりんをあげました。

それと、あぶほーすに、これからくとうぐあがせいしんてきにおいつめられるから、そのときにやさしいことばをかけてやればかたんに落ちるかもよー？ といっておいたらかおをまっかにしていました。

そしてそれをかんがえ、じぶんのよくぼうとたたかっているようにした。そのすがたは、みていてとってもおもしろかったです。いつもこうやってからかえればいいのに。

まあ、それもそれで面白そうだけどー、今のままってのが一番かたー？

そんなことを日記に書きながら、ボクは日に日に憔悴していくだろうクトウグアのことを思い浮かべて笑った。

ナイア、八つ当たりぎみにぶちきれぬ。

ナギ殿が目を覚ましたので、早めにケイルを出発することを伝える。理由は簡単。大会の申し込みに間に合わないからだ。しかし、そろそろナギ殿が使っている剣にがたが来ているため、買い換えをしなくてはならない。流石に柄から砕けそうな剣の修理はできないのでな。

ちなみに私の剣はそういった心配が欠片も必要ない。手入れさえしつかりしておけば、まあ、折れるようなことは早々無いと母さんからお墨付きももらっている。

……一応試してみたらしく、折れた短剣を見せてくれた。横腹に刃を叩きつけたのにそういうことができるとは……。しかも母さんがいつも使っていた短剣だ。その強度は私もよくわかる。何度も何度も切りつけられ、打ち合い、弾こうとして剣を折られ、流そうとして剣を折られ、打ち合っていて剣を折られ、柄尻で殴られ剣を折られ、峰で叩かれ剣と骨を折られ……

『おーい、ディオさん？ 平気かい？ 目が虚ろになっていてどう見ても大丈夫には見えないけど、それでも聞いておくよ？ おーい、聞こえてるかい？ 顔が真っ青になってて凄く体調が悪そうだよけど、風邪か何かかい？』

……ははははは。もう思い出すのはやめよう。あれに比べれば、という時以外に思い出したら大変だ。主に私の精神の安定が。

ケイルでナギ殿の剣を買おうとしたのだが、どうも良いものが見つからない。仕方がないので手っ取り早く私が作ることにした。

「とりあえずは対魔術仕様と強度、切れ味の上昇をさせておいた。とりあえずはこれで十分だろう」

「ありがとうございます。……けど、確かこういう武器とかに込められる魔術って、ひとつだけって聞いたんですけど……」

「それは嘘だ。やろうとするもの達の能力が足りなかっただけで、実際は可能だ」

「………みたいですね」

ナギ殿はなんとなく納得したような顔を見せて、用意してあった鞘に剣をしまった。

ちなみに私が作ったのはナギ殿用に調整した長剣。軽く鋭く作られたそれは、ナギ殿の俊敏な機動力を殺すことを極力避け、その上で折れず、曲がらず、欠けずの三つに特に力を入れたものだ。

………かなりの魔力を込め、できる限り精緻な術式と精巧な形状の剣を作ったのだが、それでも母さんの作品には届いていない。

やはり、いつまでもあの背中では遠すぎる。あまりにも遠すぎて、それは影でしかないと言っのに見失ってしまいそうだ。

それでも、私は何とかして母さんを追い続ける。

………やれやれ。理解はしていたが、私はまじごとなきマザコンだな。

ディオさんに作ってもらった剣を何度か振ってみる。握った時からわかっていたが、妙に私と相性が良い。

私の剣は素早さ特化の剣で、速度はあっても威力はそこまで高くない。それでもある程度は速さで補ってきたし、体を強くする魔術で威力そのものの底上げもしてきた。

ディオさんの作ってくれた剣はそんな私の速さを殺すことなく振ることができるようになっているらしく、以前使っていた剣より馴染む。

取り回しのためか刃が少し短くなっているが、その分軽く、使いやすい。

『いやいや、まさかディオさんにこんな特技があるなんてね。いたいディオさんはどこまで万能なのかな？ 料理も上手い戦いも強い頭も良い要領も良い、ほとんど完璧じゃないかな？』

……完璧、ですかね？ 私としては少しくらい私の気持ちに気付く素振りを見せてくれるともっと良かったんですけど……。

……まあ、ディオさんですし。仕方ないですね。

そう思いながら、私は貰ったばかりの剣を鞘にしまう。

……そう言えば、武器は良いのがありますけど、防具はなくても平気なんでしょうか？

ディオさんにその事を聞いてみると、私がこちらの世界に来て、魔王を倒すということを決めた日に私の服に色々な防御用の魔術を込めたんだとか。

私の服は学校の制服の下にジャージのズボンと言う格好で、あちらでは結構よくある姿。特に向こうは私が来た当時は冬。大体の娘はこうしていたし、先生達も教室外では見逃してくれた。

今ではスカートは無いが、それでもジャージに制服の上という格好。着の身着のままではあるけれど、洗濯しているときにはこちらで用意してもらった服を着ているため、特に困ってはいない。

その制服は、ディオさんの魔術によってそこらの全身鎧よりも丈夫になっていくらしい。なんと耐炎耐冷防刃防弾耐熱耐衝撃耐魔術、その上どうやら耐Gと私にかかるGの軽減までしてくれているらしい。

……魔術ってすごい。科学じゃできないことをさらりとやって見せてくれる。痺れも憧れもしいけれど、素直に凄と思う。

『素直っていいのは良いことだからね。君はそのまま居れば良いと思うよ？ ついでにディオさんに告白してみたらどうだい？ デイオさんも満更じゃなさそうだけど、というか嬉しいと思うよ？ 失敗したときの責任は自己責任でお願いするけどね』

いえ、その時は全力で呪います。そして地の底に埋めます。

『……………あはうあ……………』

ゾクゾクしているウルシフィを放っておいて、私とディオさんは歩き出す。

どうせ後から追いついてくるのだし、問題ない。

どうやら炎の大陸は本当に治安が良い方だったらしい。まさか街中で当然のように殺人や強盗があるとは思っていなかった。

「人質をとられて動けないみたいですね。どうします?」

「ナギ殿が助けたいのなら助けてみるといい。今のナギ殿ならあの程度の使い手など無手でも勝てるだろう」

「……私が最適の動きで失敗をしなければの話ですよ?」

「当たり前だろう。それと魔法は余波で人質まで被害が行くことも考えられるので、範囲の狭いものをさらに狭くして使うのが良いだろうな」

まあ、それもやるならの話だが。

結局ナギ殿はなにもしなかった。だが見物に夢中になっている間にスリに道具袋をすられそうになっていたのではれないようにそのスリの耳の穴から脳に長い針を突き刺して殺しておいた。

こうしてやると脳から体に命令を送れなくなり、意識も思考もそのままにゆっくりと死体を作れるらしい。

大抵の場合は体が動かないまま雨ざらしにしておけばいつか本当に死ぬが、この町ではそんなものを待たずとも色々なものが居るためもっと早く死ぬことができるだろう。

まあ、短い生だが楽しんでくれ。

「さて、ナギ殿。出発しようか」

「はい。ディオさん」

『……………いやあの、夜だよ？ 夜だと魔物とかずつと強くなるんだよ？ それに回りも見えなくて危ないし、迷ってもわからないかもよ？ ついでに町の外に出る道も夜は封鎖されてるから通れないし。まあ、その分一回出ちゃえば人がいないから羞恥プレイとかを堂々道の真ん中でやったり首輪つけて鎖で引かれてお散歩とかぱっ！？』

何を言っているのだこの種族：変態は。始めの方はともかく、後の方はただのお前の欲望だろうが。

鼻っ面に裏拳を叩き込んでやったのだが、やはりと言つかなんと言うか、全くこたえていない。むしろ悦んでいる。

「ディオさん。そうやって相手してあげるから喜ぶんですよ？ なにもしなければ良いと思いますよ」

「なにもしなかったらこれはずっと話し続けて五月蠅いと思うのだが」

『あああゝゝ　　いい！いいよその冷たい目！全身を氷柱で刺し貫かれたようで、すっごくきもちいいいゝ』

……………。

『ほ、放置？ 放置するのかい？ それはいくらなんでも酷くないかな？ 泣くよ？ 喚くよ？ 興奮するよ？ だつてほら、私から話しかけてるのに返事がない状況とか、なんか世界全てから私の存在を否定されてるような気がしてなんだかすっごくゾクゾクするからね』

……………。

私は目線だけでナギ殿を見ると、ナギ殿も首だけを回して私のことを見ていた。

「……これでも、放置するか？」

そう聞いてみたら、ナギ殿は苦笑いをしながら首を横に振った。

フルカネルリだ。アンペラルド いや、これは私が勝手につけた名前だったな。この世界では水の大陸という呼称が一般的であるらしい大陸に到着した。ちなみに方法は飛行魔法。認識障害と光学迷彩、魔法的な迷彩までかけて来たため、まあ、気付いた者はいないだろう。

《まあ居ないだろうネー。というかこの世界じゃあ人が空を飛ぶのは飛竜や鳥なんか拐われたか殴られて飛ぶか魔術で吹き飛ばされるかのどれかだし、空を気にする人間なんていやしないヨー》

「……そうかしらねえ……？ ……もしかしたら、月見をしている人があ……居るかもしれないわよお………」

ふむ、月見か。それもいいな。今回はゆっくりと会場までいこうではないか。いつもは観戦していただけなので、参加するのは初めてだ。

……さて。サノカツキは向こうだな。行くか。

《わざわざ見に行くんだから、フルカネルリも親馬鹿だよネー？》

そうかもしれないな。

ナイアとアザギを連れて、私はゆっくりと荒野を歩く。これなら火山の麓をゆっくりと飛んでいっても間に合うので、急ぐことはない。それに、遅れそうになったなら楔に向けて転移すれば一瞬だ。

さっさとそうしてしまえば良いのかもしれないが、それではもしも私が居ること起きたかもしれない私の知らないことを見逃してしまう可能性がある。故に却下した。

《ないと思うけどネー》

私もそう思うが、可能性がないわけではない。

そんなとりとめもないことを三人（一人と一柱と一体？）で話し合いながら、誰もいない、魔物すらもない荒野を歩いていった。

……おや。ディオは随分とナギ殿とやらに優しいな。これは本格的に惚れたか？

私の楔の知覚範囲内でテントを広げ、その中で眠っているディオとナギ殿とやらを覗き込む。

さて、この娘は私の息子を任せるに値するかどうか。確かめさせてもらおうでしょうか。

とは言え、ディオがどうしてもと言えば普通に許す気であるんだが。

『……………瑠璃はあ……………本当に、優しいわねえ……………つぶつぶ……………』

……………さて、それはどうかね。

フルカネルリ、大会参加決定。

魔獣を発見。ディオさんとナギ殿にばれないように風の結界を張って対処する。

……いや、もうディオさんにはばれちゃっているかもしれないけれど、それでも夜なんだし、極力睡眠の邪魔はしない方がいいよね。魔獣は私の張った結界に気付くこともなくどこかへ行った。ちなみにそれは虫のような魔獣で、みていてあんまり気分の良いものでは無かった。

……昔と比べてああいうのが増えたね。魔獣を生む魔力が全体的に澱んでるのが原因かな？

まったく。アリバっさんももう少しまともじゃってくれたって良いと思うんだけどね。たしかにアリバっさんにとってはちょっとした遊びでこの世界を作ったのかもしれないけど、私達にとってはこの世界がなくなったら消滅しちゃうんだからさ。

よくある、自分で拾ってきたんだから自分でちゃんと世話をしろ、ってやつかな？ この場合は拾ったんじゃないかって作ったんだけど。

「そつえば、風を使って飛行はできないのか？」

歩いていたディオさんが、ふとそんなことを言った。

「とりあえず、何も無い状態だと難しいと思いますよ？ やるんだったら……そうですね、丈夫な板の上に乗って風に乗って滑るとか、あとはグライダーみたいな物を作れば飛べると思いますけど？」

確かに、できないことはないだろうけどそっちの方がずっと楽だね。
……ところで、グライダーって……なに？

そう思っていると、私のかわりにディオさんがその事を聞いてくれた。

「グライダーとはなんだ？ 話の流れから飛行に必要なものと言うのはわかるが、どんな物かがわからん」

ディオさんの言葉に、なんでかナギ殿はビックリしたような顔をした。

「……ディオさんでも、知らないことってあるんですね……」

「ナギ殿。ナギ殿は私のことをなだと思っっているのだ？ 私だって人間なのだから、知らないことの一つや二つ、あっても全くおかしいことは無かるう？」

ごめん、私はおかしく感じた。そしてたぶんナギ殿もおかしく感じてると思う。

「あははは……グライダーって言うのは、動力のついていない滑空するだけの羽根みたいなもの……かな？」

「……ふむ。つまり滑空機か。それなら作ることができるぞ。前に母さんの研究所にあったのでな」

ディオさんのお母さんって凄いね。いったいなんでそんなものを作ろうと思っただらうか？

……けれど、私はそんなものの存在は知らないよ？ 風の精霊王である私に、風のあるところで隠し事なんて……ああ、そう言えばディオさんはあの大陸の出身だっけ。あそこの結界の中身は

全然わからないんだよね。それならあり得るかな。

ナギ殿にグライダーの話聞いて、母さんのところにあつた滑空機のことを思い出した。

確かあれ単体で飛行することはできないが、風の魔術を使えば飛行も可能になるんだっただか。

それがあれば移動が楽になるし、逃げるときにも楽になるだろう。特に地上で強い獣や、人間相手でも。

そう考えたので、作ってみた。あまり上手くできたとはいえないが、形だけなら完璧だ。

「使えるんですか？」

「さあな。だが丁度良いところに風の魔術を使えて、なおかつ落ちても死なない奴がいるぞ？」

私とナギ殿は同時にウルシフィの方を見る。少しばかり驚いているようだったが、私には関係無い。

さあ、実験開始だ。

飛べるようだったので、私もやってみた。

初めは中々難しかったが、慣れれば大したことはない。

全く同じもので私の隣を飛んでいるナギ殿も初めは緊張しているようだったが、今ではのんびりと飛んでいる。

「これなら、あと二日でサノカツキまで着くだろう。かなり時間の短縮になったな」

「ほんとは、あとのくらいかかるはずだったんですか？」

どのくらいと言われれば、まあ、歩いての話だな？

「一週間ほど余裕を持って一月といった所だな。途中で荒野があり、そこでは食料や水の供給がないのでその周囲を円を描くように作られている町を経由していくつもりだったから遅かったが、この速度なら食料が切れる前に荒野を抜けられる」

それに、これは早くしようと思えばかなりの速度が出るようだし。

「は、速いですね……」

「ちなみに、陸路でも走れば一週間はかからないと思うぞ？」

『そうそう。ちなみにその時は私も風で背中を押すからいつもよりもう少し早くなるし、楽になるよ？』

ナギ殿と私、それにウルシフィの三人での初めての飛行体験は、それなりに有意義なものになった。

……大陸を渡る時にも使えなくはないだろうが、流石に疲れるし距離が遠すぎる。辞めておくのが無難だろうな。

それにこれだと体が固くなる。すぐに戦闘がある時に長時間は使えないな。

異世界人初の長時間飛行。だからと言って特になにかあるわけではない。

サノカツキに到着。ただしいきなり町中に降りるわけにもいかない
ので町が見えた所からは歩く。

……ふむ。やはり大会のせいかな、良くも悪くも活気があるな。

周囲は腕自慢の冒険者達がひしめき合い、商人達が声を張り上げて
いる。

空気はぴりぴりと張りつめていて、今ここで爆発音でも響かせれば
暴動が起きてもおかしくはないだろう。

私はそんなことをする気はないが、もしかしたらそういうことが起
きるかもしれないので一応注意だけはしておくことにする。

………何故かは知らないが、今回は妙に嫌な予感がするんだ。私
の嫌な予感あまり外れない。いい予感十回に四回は外れるのに、
嫌な予感千回に一回外れるかどうかと言うレベル。

例えば母さんに修行中に失敗したらまず死ぬような物をいきなりさ
れたときも嫌な予感がしたし、母さんから渡された厄介事の臭いの
する蛍光緑色の薬（しかもよく見ると周囲の空気が歪んでいた）を
渡されたときも、母さんに腹を刺されて治癒魔術の練習をさせられ
たときも、同じ魔術同士を正面からぶつけて威力が弱かったり失敗
したら死ぬような魔術の実習訓練をしたときも、毒があるか無いか
の判断に失敗すると泡を吹いて死ぬといった訓練のときも（この時
ばかりはこの予感で助かった）、母さんがわざと見せた隙に打ち込
もうとしたらそこに爆雷型の設置魔術が置いてあったときも、すべ
て嫌な予感がした。

………原因は皆母さんである気が……。

「ど、どうしたんですかいきなり？」
「……いや、気にするな。世の中の無情を意味もなく悟ってしまっただけだ」

…… 本当に、なんの意味も無い物をな。

大会に出場するための登録をしておく。それなりに大きな大会で、うまくいけば王の御前試合への出場資格を手に入れることができるので既に多くのものが参加しようとしているらしい。
ただ、私達は御前試合に出るためにここに居るわけではないので気にはならないし、負けたら負けたで問題ない。ただし死ななければ。

「わぁ…… 久し振りの人混みだ……」

「…… そうだな。私はあまり人混みは好きではないが」

「好きな人っているんですか？」

「さてな。もしかしたら居るかもしれんが、少なくとも私は知らん」

母さんなら…… いや、嫌いそうだな。本気で嫌になったら周囲ごとと消し飛ばしそうだ。母さんならできるだろうし、本当にやると決めれば躊躇わずにやるだろう。

…… ああ、大魔術で町を消し飛ばしている母さんを簡単に想像できる。おそらく神も魔王も止められないのだろうな……。

「デイオさん？ なんで遠い目をしているんですか？」

「…… いや、気にするな」

頼むから気にしないでくれ、ナギ殿。

フルカネルリだ。デイオとナギとやらを見付けた。しかし話しかけることはしない。何故ならそれは野暮だから。

《ほんとに自分が関わることで興味の対象になにか起こったらつまらないからでシヨー？》

その通りだが、どうかしたか？

『…………ふふふ…………瑠璃は、ぶれないわねえ…………？』

《そうだよネー》

そうか？ 私はかなり変わったと思っているのだがな。

宿はいらない。何故なら私はここで何度か悪質な者に騙されそうになったからだ。私が解析で相手の思考を読むことができなかつたら、奴隷の首輪をつけられて調教されて売り飛ばされるところだった。

……………さてよ？ それも経験か……………？

《やめとこつネー？》

『……………ダメよお……………？』

……………そうか。ならばやめておくとしようか。

ところで、ちょっととした興味からの質問なのだが、私に洗脳はとも

かく暗示は効果があるのか？

《……………都合の悪いのだけ無くしといたヨー。と言っても健康の呪いにちよっと手を加えるだけだから簡単だったけどネー》

そうなのか？

《そつだヨー》

そうか。

……………まあ、効果があるか無いかは知りたかったただけだったのだが、意外に気を使わせてしまったらしいな。少しばかり反省しよう。

《……………あのフルカネルリが、反省……………？》

『……………ふふふ……………きつと、疲れてるのよお……………今日は、いっぱい寝ましょお……………』

……………私が反省するのはそこまでおかしいことか？……………まあ、確かに中々無いことだと自覚はしているが。

……………さて、そろそろ私も大会出場に向けて動くとするか。

ダークホース、行動開始。

出場前に色々と鎧に仕込むものを仕込んでおく。

それは例えば目潰しであったり撒き菱であったり棒手裏剣のような暗器であったりするが、まあ、恐らく使うことはないだろう。

……おかしいな？ 早々無いはずなのだが、なぜか使うことになる気がする。

まあいい。今は大会に集中しよう。でないとしたらのように足元を掬われるかわかったものではない。

ルールの確認をする。

武器に関する制限は一切なし。

相手を気絶させるか場外に放り出せば勝ちだが、殺すのは反則。

制限時間は三十分で、それまでに決着がつかなかった場合は審判が勝者を決定する。

金的、目潰し、武器破壊、戦闘中に相手の武器を奪い取る等も許されているし、後で返す必要もない。

武器を破壊されたり奪われた場合、そのまま戦うこともできる。戦いたくなければ降参すればいい。

……なるほど。炎の大陸の大会とは全然違うな。向こうのはもっと荒っぽかったし、殺害されたらされるような実力しか持たないそいつが悪いといった風潮だったし。

……さて、予選会だ。気を引き締めて行くのでしょうか。こんなところで負けてしまったと母さんにバレたら……、
……忘れる私。全力で忘却の彼方に放り出せ。それは思い出し

てはならない類いの物だ。

「ちょ、ディオさん？ 顔色が悪いですよディオさん!？」

「……いや、大丈夫だ。それより、ナギ殿の準備は終わったのか？」

私がそう聞くと、ナギ殿はにっこりと笑ってその場でぐるりと回ってみせた。

「はい。準備は万端です」

「相手が毒を使ってきた時のための解毒薬は？」

「解毒魔術をキーワードで発動できるようにしたのを二十個ほど用意してあります」

「回復魔術は？」

「三十ほど」

ふむ。まあ、いいだろう。私でもその程度しかやらないし、足りないと思っただらその場でも使えるしな。

「なら、そろそろ行くか」

「はい。ディオさん」

予選会場には数千とまでは行かないにしろ、確実に千数百という数の人間が集まっていた。

男もいれば女もいる、若いから青年、中年と言えるものまで年齢層も様々だ。

『そりやこの大陸で御前試合に次いで二番目に大きな大会だし、このくらい的人数は集まるさ。強い弱い、天才秀才凡人化物色々だね。ちなみに賭けもやってるみたいだよ？ 一口銀貨十枚から百口

までが公式ので、非公式なやつはそこらじゅうにあるみたい。参加してみる？　するなら私がかわりに賭けてきてあげるよ？　選手はこういう賭けに参加できないみたいだしね。何口賭ける？』
「賭けは好きじゃない。割りに合わないからな」

実際そうだ。母さんならほぼ百発百中で当ててみせるのだろうが、私はそんなことはできない。

……私が賭けに弱いのではなく、母さんがおかしなのだ。何故コイントスを見もせず八十回連続で当て続ける事ができるのだ？

……母さんだからだな。そうに決まってる。

うむ。母さんなら仕方ない。むしろ当たり前か。

……はあ……。

デイオさん達が会場のため息をついているのを風を通して感じ取る。私はこの場で有望な選手を探しているが、あまりたいした人はいないように見える。

無駄に高価そうな槍を持っていたり、装飾の異様に多い剣を自慢げに見せびらかしている人間達は、デイオさんにもナギ殿にも早々届かないだろうという程度の力しか感じ取れない。

これなら、デイオさん達の一騎討ちで勝った方が勝つのか　ッ
!?

ぞわり、と危険を感じてその方向を見ると、どこかで見覚えのある黒い髪の少女が私の事を見上げながら、にっこりと笑っていた。

……あっちゃあ……これは無理かな。

そんなことを考えていると、その少女に手招きで呼ばれた。いったいなんなんだらうね？

「ふむ。久しいな」

「……そうだね。何百年ぶりかな？」

黒い女の子は私の前で無表情を崩ずに言う。前に会ったときと同じ、何を考えているかわからない顔だ。

この女の子はびっくりするほどアリバっさんに嫌われている。そのせいか小さな精霊達もこの娘には近づかないけれど、私達とは違う系統の精霊が常に周囲に存在しているため、魔術は使えているみたいだ。

その少女は、昔々に私達がこの世界の管理ができなくなるほど弱ったときに力を与えてくれた少女。かわりにちよっとした加護を与えたのだけれど、どうやら多少精霊との親和性が良くなった程度であり変わりはないらしい。

「……それで、私に何の用かな？ 君が何の意味もなく話しかけてくるような存在じゃないって言うのはわかってるから、わざわざ隠す必要は無いからね」

「当然だ。何故私が伝えたいことを隠さねばならん。馬鹿らしい」
やっぱりこの娘は変わってる。けれど、つい最近こういう雰囲気の人間に出会ったような……ああ、ディオさんか。

「さて、お前も用があるようだし、さっさと終わらせるとしよう。
……息子に力を貸してくれて、感謝する」

………は？ 何の話？ と言うか、息子？ この娘、息子が居たの？ じゃあ男親の方は誰？ ロリコン？ ロリコンなの？ 幼女趣味なの？ わーいへんたいさんだーこわーい。童女性愛者じゃないだけいいのかな？ いやいや幼女性愛者も童女性愛者も質が悪いことには変わり無いよね？

………そんな風にぐるぐるするとふざけた考え事していると、黒い少女は呆れたような目で私を見ながら軽く溜め息を吐いた。

………あれ？ おかしいな、妙にゾクゾクしてお腹の少し下の器官がきゅんつとしたよ？ 今までディオさんとナギ殿にしか反応したことがなかったのに。何があったのかな？

「何か馬鹿なことを考えているな？ 私は独身だし、処女だ。息子といっても血は繋がっていない」

な、なんだそつか。そうだよね、こんなに小さな体であんなのを受け入れたら、壊れちゃうかも

ウルシファイによる桃色空間発生中につき、しばらくお待ちください。

ごしやりと殴られて妄想の世界から戻ってくる。呆れの色はさらに深さを増していて、僅かに苛つきも混ざっていた。

「………まあ、言いたいことは言ったし、戻ってくれて構わない」「ん？ そうかい？ それじゃあね」

私は少女と別れて空に浮かび上がり、また厄介そうな相手を探す。

……これをちゃんと伝えたら、ディオさんはご褒美に苛めてくれたりしないかな？

ディオとフルカネルリ。ニアミス。

予選の内容は、この町のどこかにある二百五十六枚のプレートのうち四枚を集めてくることであるらしい。

もちろんこの時の手段は自由。集めてきたやつから奪うのも良いし、人を雇って人海戦術を使うのも大丈夫。当然自分で探すのもいいし、五枚以上持っているやつから買いとるのも反則ではない。

しかし四枚未満であればそれが三枚だろうが零枚だろうが失格。挑戦権は与えられない。戦いだけしか脳のない者達はここで脱落していくか、もしくは奪い取ることに成功するかのどちらかだ。

「まあ、私達には一切関係ないことだがな」

「そうですね。……ウルシフィ？ 集まった？」

『ちよっと待っててくれないかな？ あと五枚で十段ピラミッドができるから』

「「さつさと戻ってこい」「」

……やれやれ。

ウルシフィが持ってきた五十枚のうち八枚を私達の参加用として提出し、残りの四十二枚は売り払う。

「はいいらっしやい、大会指定のプレートだよ。一枚金貨一枚、二枚で二枚半、三枚なら四枚、四枚なら五枚だ。四十枚しかないから早い者勝ちだよ」

「二枚！二枚くれ！」

「四枚だ！」

うむ。中々にいい商売だな。ぼったくりと言えばぼったくりだが、誰も損をしないやり方だ。

買った相手は合格確率が上がって嬉しい、私は労せず金が入ってきて嬉しい、買えなかった相手は残念だが、恐らく探してくればなんとかなるだろうしな。ならなかったらそれはそいつの力が足りていなかったというだけだ。

「はいそっちは金貨二枚と半金貨ね。そっちは金貨五枚。はい、毎度」

ふむ、どんどん金貨が増えていくな。だが、そろそろ売り切れた。暴動が起きそうだし、さっさと隠れるとしようか。

「以上で売り切れた。それでは後は自力で探すと良い。行くぞ、ナギ殿」

「はい」

後ろから怒号が聞こえるが、私とナギ殿、そしてウルシフィはそれらを全て無視しながら予選会場から走り去ったのだった。

「よかったですか？」

「なに、ルールに商売をしてはいけない等という物は無い。ゆえに問題ない」

「……そ………そうかなあ………？」

さてな。実際問題無いとは思うが、どうだろうか？

フルカネルリだ。現在、私の周囲には色々な者達がいる。プレートを探すのに部下を使っている者。

とりあえず周囲の人間を傷付けてリタイアさせて倍率を下げようとしている者。

どうやったのかプレートを隠した大会の役員を締め上げてプレートの隠し場所を聞き出そうとしている者。

プレートを大量に集めて商売をしている者。ディオ

プレートを自力で見つけて提出した者。

ついでに、多めに見つけたプレートを隠し持っている者。実に様々だ。

……ちなみに私は最後の部類に入る。集めたプレートは二十枚程度だが、それだけでも四人が通過できないと言うことになる。四枚集められる者はただでさえ少ないだろうに、これではどうなることやら。

……まあ、私にはそんな者達の事は関係無いな。今の私の興味は、この世界の神の創った魔法生物と異世界の人間の恋の行方に絞られている。

《まあ、確かに気にはなるよネー》

そうだろう？ 何より、私の育てた初めての手のかかった息子の事だぞ？ 興味が無いわけが無いだろう。

『……あらあ……？ 普通の子は、昔居たんじゃなかったかしらあ

……？』

……昔は研究に夢中になっていて、全く手をかけていなかったのだ。全てが昔の妻任せで、私は研究の成果を雇い主に提出して与えられる金の半分を渡すくらいのことしかしていなかったのだ。

……最悪の父親だな。私は。

そしてそんな最悪な私を愛した妻と、私に懐いていた息子は……最後までその生き方を変えなかったな。変わっていればもう少し楽に生きていけただろうに。

《でも、フルカネルリも自分の生き方を変えないんでしょー？ 例えその道が滅びに繋がっていても、ずっとサー》

『……瑠璃なものお……変えられないでしょお……？』

……その通りだ。私はフルカネルリ。もうこの生き方は体の底を通り越し、魂にまで焼き付けられているだろうさ。私では永久に変えられん。

……そして、変える気も更々無い。私は私だ。誰になんとかわれようとな。

《それでこそ、かナー》

そんな私を見てナイアが笑った。アザギもそれにつられて薄く笑い、私も声を抑えて笑った。

……さて。もう私はここには用はない。明日の昼に合格者の名前とトーナメント表が貼り出されるようだし、それまでのんびりと害虫駆除に精を出すか。

ディオとの会合まであと少し。

フルカネルリだ。本戦出場者の名簿にしつかりと私の名前が刻まれているのを確認した。無論、ディオとナギとやらの分も確認したが、どうやらディオは準決勝で、ナギとやらは決勝で私と当たるようだ。一応、加減はしてやるつもりだが……どの程度加減するべきだろうか？

《死なない後遺症が残らないってぐらいでいいと思うヨー？》

『……治せばどこまでやってもいいんじゃないかしらあ……？』

……………良いな。実行しよう。

本戦出場者は全員で十七人。かなりの人数が絞られているようではあるが、今までこの世界で見えてきた人間として特別強いものは少ないように見えた。

例外を上げるとディオとナギとやらの二人だが……まあ、勝つのに苦労はしないだろう。

《そりゃしないでショー。と言うかこの世界の創造主にも勝てるのに、この世界でできたものがフルカネルリに勝てるわけ無いと思うんだけドー？》

その通りだと私も思うが、何事も用心はしておくべきだ。

例えばあの異界の少女がいきなりナイアやクト達の友神達と契約してくるといふ可能性が無いわけではないし。

『……………どれだけ、低い確率かしらねえ……………』

さてな。だが、無い訳ではないだろう？

《無いと思うけどネー》

私も無いと思う。

……………おや、ディオが私に気付いたようだ。手でも振ってみるか。

「……………何で母さんがこんなところに？」

「私がここに来てはいけない理由は無い。だがお前の問いに答えるとするならば、いつも通りの研究だ」

「……………ああ、納得した」

「そうか」

ディオに手を引かれて物陰に移動し、久し振りに話をした。見ていたので知っているが、元気そうで何よりだ。

「……………ディオさん？ この女の子とは、知り合いですか？」

おや、ナギとやらは今の話を聞いていなかったらしいな。全く、仕方無い。

「ディオの母だ」

「…………………………へ？」

端的に言ってやると、ナギとやらは気の抜けたような言葉を発して

固まった。

まあ確かに、私のような見た目は十と少しの小娘が実は子持ちでしかもその子供が自分の惚れた男ならそういった反応も当然と言えば当然か。

ナギとやらは固まった体を無理矢理動かし、ディオの方を向く。ギシギシという音が聞こえて来そうだが、私は何も聞かなかったことにする。

「……………ディオさん？」

「事実、私の母だ」

ディオからその言葉を得たナギとやらは、再び錆び付いた機械のようにギシギシという音を立てそうな動きで私の方に向き直る。その姿は実に滑稽だった。

《趣味悪いヨー》

『……………ナイアにはあ……………言われたくないでしょうねえ……………？』

そうだな。私より数段趣味の悪いナイアには言われたくないな。

「……………ふむ、私はお前を知っているが、お前は私を知らないのだったな。ならば自己紹介から始めようか」

私はナギとやらに軽くお辞儀をしながら、この世界で使い始めた偽名を名乗る。

「初めまして、異世界の一般人にして救世主。私はフルリ＝カーネル。先程も言ったがディオの母だ」

フルリさんと別れて少しして、私とディオさんはこの町に来てから使っている宿に戻った。

途中に賭けで負けた腹いせか何かは知らないが私たちに襲いかかって来た人達がいたはずだけれど、その事はよく覚えていない。覚える価値もなかったからだと思う。

「……ディオさん。どうします？」

「……どうしようもない。私では千年かけたとしてもあの母に勝てる気がしないのでな。精々母さんが気紛れを起こしてくれるのを待つ程度だ」

「……そうですか」

やっぱり、フルリさんにはディオさんも勝てないらしい。ディオさんより強い人がいるとは思っていなかったのだけれど、居るところには居るらしい。

しかしそうになると、この大会の後の事が心配になってくる。

大会が終われば私達はすぐこの町を出て、炎の精霊王の住む火山の頂上の洞穴まで行き、契約をしなければならぬ。

けれど、そこでもし私たちより強い者が私達の行く手を阻んだらどうなる？ もし、炎の精霊王がバトルマニアで戦闘を挑んできたら、戦い慣れしているディオさんや精霊王のウルシフィはともかく、私はどうなるだろうか？

私は形の無い魔物との戦闘は未体験だ。魔術を使えばいいのかも知れないが、精霊王相手に詠唱をしている時間があるだろうか？

大きな怪我をするかもしれないし、それが原因で後遺症が残る可能性もある。それどころか死んでしまう可能性だってあるだろう。

……実は、それ事態は何故かあまり怖くない。
……いや、正確には怖いけど、それ以上にディオさんに見捨てられるのが怖い。だから我慢できる。

ぼん、と優しく頭を叩かれる。顔を上げると、ディオさんがいつもの表情の薄い顔で私のことを見つめていた。

「……なに、ナギ殿の事は、私が守るよ。母さんは敵対しなければこちらを害することはないし、母さん以外ならなんとかなる」

………まったく。ディオさんはずるい。

近くにあったディオさんの胸に、コツンと額を当てる。金属の輪を繋げて作られたチェインシャツのでこぼこが少し痛いけれど、それでこそいつものディオさんだ。

「……ディオさん。私、好きな人ができました」

この後に起きたことは、私の中で宝物になっている。

ようやく思いを伝えた寺島渚の記念日。

《と言っても、好きだって言ってキスしただけなんだけどね？ まったく、ナギ殿もディオさんも初なんだから。いや、正確には初々しいって言うべきのかな？ どっちにしるおめでとナギ殿。初恋は実らないってよく聞くんだけど、例外はあるみたいだね。ついで

に私との契約も済ませて欲しいな。それだけでナギ殿の危険は割と無くなるしね。あと、もつと虐めてほしいかな？ 私はこの世界でなら殆ど不死身だし、かなり酷いことをされても大丈夫だし、最近欲求不満気味だし、もうボロボロにグチャグチャにバラバラにズタズタにされても良いんだけどね。と言うかされたい。私に痛みを与えて欲しい。ギブミーペイン！》

そして変態は加速する？

私の試合は一回戦の第五試合。デイオさんの試合は一回戦の第三試合。フルリさんの試合は第九試合。一回戦の第一試合で勝った方と戦うことになっているみたいだ。籤で決めたらしいので、文句があってもそれはこの世界の創造神 アリバシーヤの思し召しだと思ふことになっているらしい。

……神様なんて、自分で産み出した魔王に負けるようなお馬鹿さんだと思えますけど。

「そういうことは人前では言わない方がいい。特に坊主の前で言うと、異端認定されることがあるらしいからな」

異端認定って……火炙りとかされるんですか？ 怖いなあ……。

「ちなみに母さんは一度受けたが、教皇のいる大陸をまるごと一人で滅ぼそうとして七割ぐらい削った辺りで異端認定が解けたそうだし、まさかの力尽く!？」

しかも大陸ひとつを七割削ったって……。フルリさんってすごいなあ……。

けど、そんなことしたらこの世界のバランスが崩れちゃうような気がするんですけど……。

……あ、もしかして魔術を使って削った所を元通りにしたのかな？

昔にあった事件を思い出す。あれは確か千年以上も前のこと。あの黒い少女が異端認定を受けて自由に行動できなくなった事がきっかけの、あの事件。

内容は簡単。当時のマルシファーがいた大陸が、その黒い少女に文字通りに削り取られただけ。それだけだけれど、規模が問題だった。マルシファーの住む湖を除く大地の八割以上が、巨大な何かによって削り取られた。削られた大地は一ヶ所に纏められていたので飛散してしまふことはなかったけれど、削り取られた側の生物も残った側の生物も動揺して争いあっていた。

そこに現れたのが、異端認定を解かれていない黒い少女。彼女はその事を自分がやった、大陸を返してほしければ異端認定を解け、と当時の教皇を脅迫した。

もちろん人間がそんなことをできるはずがないと教皇は断じ、黒い少女を捕らえようとしたが、黒い少女は笑いながらその宮殿の半分と、その宮殿内にいた物を全て削り取った。

それが異端認定を解かれるまで何度でも繰り返され、五回目であろうやく教皇が異端認定を解いてその事件は終了した。

たった数時間のことだったが、私達は本当に黒い少女がこの世界をまるごと削り取ってしまうのではないかと戦々恐々としていたことを覚えてる。

何より恐ろしいのが、それだけのことをやっても世界には全くと言っていいほど負担がかかっていなかったことだ。

通常、そんなことをしたら世界にかなりの負担がかかり、私達が必死になってその元凶をなんとかしようと奔走することになるのだが、その時は大地を司るアルシフスと風を司る私、そしてその大陸に住んでいて直接見ていたマルシファーの三人しかそんなことがあった

と知らなかったのだ。

私達精霊王はこの世界そのものと言ってもいい。そんな私達ですら見ていなければ気付かないような方法で大地を削り取るというのが、どれ程の異常でどれ程あり得ないことか。

だから、私達は黒い少女の邪魔をすることは辞めた。幸い、黒い少女は邪魔さえしなければ監視をしても何も言ってこないので一応の安定にはなった。

アリバっさんも一応こちらと黒い少女との差は理解しているようで、悔しそうにはしていたけれど実力行使に出てくることは無かった。

そして、私の前で話し合いをしているディオさんはその黒い少女の息子………とは言え、血は繋がっていないらしいのであの力は純粹に努力の賜物なのだろう。

その事を知っても私はディオさんから離れる気はこれっぽっちも起きていない。

ある意味では良いことなんだろうけど、アリバっさんにばれたら怒られそうだ。

大会はまだ始まらない。暇なので術式を編んで待っていることにした。

昔に大陸を空間ごと別のところに飛ばして保管するだけの大したことの無い術式だが、燃費を良くしてやればいつか何かに使えるかもしれない。

《何に使うことになるんだろうネー？》

ナイアが私に聞いてくるが、私も知らない。使うことがなかったとしても所詮は暇潰しだ。問題ない。

大陸を脅したある意味魔王、フルカネルリの暇潰し。

ようやく一回戦の第一試合が始まりました。

……始まったのですが……………。

「……………なんだか、皆さん遅くありません？」

どうしてか、戦っている皆さんが妙にゆっくりに見えるのです。何ででしょうか？

私が考え込んでいると、ディオさんがその答えを教えてくれた。

「向こうが遅いのではなく、私達が早いんだよ。それに戦闘時ならもっと遅く見えると思うぞ」

「……………え……………手を抜いているとか加減しているとかそう言ったものではなく？」

「それも無いとは言えないが、回避に無駄な動作が多すぎるし体重移動がぼろぼろだ。これでは動作を完璧に制御した時に比べて七割程度も出せないだろうな」

……………すごいなあ。どうしてそんな風にわかるんだろう？

「……………よくわかりますね？」

私がそう言つと、ディオさんは苦笑しながら答えた。

「ナギ殿もいつかできるようになる。なりたいたいと思い、修行を積んでいればな」

三回戦。私の出番になった。ディオさんに励まされて会場に出た私は、大観衆に気圧されそうになる体を叱りつけて足を進める。対戦相手は22歳くらいのお兄さんで、使う武器は両手用の長剣。鎧は皮の部分が多い軽鎧で関節を覆うことはなく、とても動きやすそうだ。アルフレッドさんのように真面目そうな雰囲気ではなく、どちらかというと軽薄そうな印象を受ける。そして多分、その印象は間違っていない。

名前も知らないその人は、私を見て馬鹿にしたように笑う。予選があんな運がよければクリアできる物だったから、私もそうして偶然クリアしたのだと思っているのでしよう。

「お嬢ちゃん！ここは十五にもなっていないような子供の来る所じゃないぜ？」

ほら、やっぱり。

私はそんな言葉に特に何かを思うことはない。この世界に来る前から、そんなことを言われていたら泣いてしまっていたかもしれないけれど、今の私は違うのです。

「なんだお嬢ちゃん、怖じ気づいちまったか？」

「……私は、これでももうすぐ十八です」

私がそう言つと、何故か私の声の届いたと思われる周囲の人達が一気に静かになった。

……あれ？ どうして観客席の皆さんまで静かになっているんですか？

「……………マジか？」

男の人がそう言うのが聞こえる。……………ああ、魔術か何かで私達の声
を拾って観客席に流してるのか。

「はい。来月の頭で十八になります」

周囲から一気に怒号が響き渡った。内容は、大体私の容姿が若すぎ
るとか、どうやってその若さを保っているのかとか、そんな内容ば
かり。

……………いやまあ確かに私は童顔ですし、日本人は基本的に若く見られ
るらしいですけど……………いったいいくつくくらいに見られていたんでし
ょうか？

「……………わーお。てつきり十三程度だと思ってたぜ……………」

……………そこまで若く……………と言うか幼く見られるものですかね？ 確か
に胸は小さいですけど……………。

しょんぼりしながら自分の胸を見る。日本人の平均くらい（である
と信じている）トップ79のB……………こっちに来て少し大きくな
ったような気もするけれど、最後に測った時はそれだった。

…………………………わかってますよ。ちっちゃいですよ。でもあんまり言
われると泣きますよ？

フルカネルリだ。ナギとやらの戦闘を見ようと思っていたのだが、

見ることができなかつた。全く、自分と相手の力量の差くらいはある程度理解できるようになっていてほしいのだがな。

「あっという間に終わっちゃったもんネー。しかも柄での打撃でサ
ー」

『……結構、頑張った方じゃないかしらあ……この世界の住人としては、ねえ……？』

ふむ、そうだった見方もできるか。確かにディオも天然ならあそこまで強くなることはできなかっただろうしな。

……私も負けてはいられないな。さっさと終わらせられるなら終わらせるとしよう。
ディオの戦闘は更に早く終わった。やっていること事態はナギとやらと全く同じなのだが、その速度のみを引き上げた事を行っていた。魔術を使っていなかったのがわかったのだが、それである速度が出せるようになったと言うのは喜ばしいことだ。

……私も負けてはいられないな。さっさと終わらせられるなら終わらせるとしよう。
思考実験用の思考を戦闘用の思考に回さなければいけないというのは、私にとってあまり良いことでは無いのでな。

開始前に術式を組み上げ、開始直後に発動できるようにしておく。
内容は運動ベクトルそのものを相手の体に撃ち込むという術式^{もの}。仮性名称は、撃力発生術式試作三十八号、出力調整・効果範囲調整特化型[、]。

《そのまんまの名前だねー。もう少し捻ったラー？》

捻った結果があれだが。

《……うん、ボクが間違ってたヨ―》

そうだろうか？

そして開始直後に術式発動。相手は見事に吹き飛んで気を失った。しかしここでもし気絶から目を覚ましてしまった時の事を考えてあと五発ほど弱めに撃ち込んでおく。場所は眉間と人中と咽と鳩尾と内蔵全体に等しく一発ずつ。これで立ち上がってきたら今度は脳に直接撃ち込むことにしよう。

《……死んじやうヨ―？》

『……死んだら、負けになっちゃうわよお……？』

……そう言えばそうだったな。仕方無い、起きなくなるまで撃ち込むか。

そう思っていたのだが、なんともあっけなく試合は終わった。

……やれやれ。これでもこの大陸で中々強いものだと言うのだから情けないな。

主人公勢一回戦突破。

傷付いた人達を回復魔術で治してから、すぐに二回戦が始まった。

最初はあの黒い少女と戦鎚使いらしい女の人。黒い少女はやっぱり何も持っていないように見えるけれど、確かにあの速度で魔術を……いや、魔法を扱えるなら必要ないね。

そう考えていると、女の人の方が武器に魔力を込め始める。術式から見てみると、ただの武器の強化に見える。

けれど、それと同時に自分の肉体強化の術式を小声で何度か繰り返して詠唱して足りないところを補いながら、術式の欠けていないところを組み合わせて作り上げた身体能力の強化術式を使っているのを見て、少しだけわかっていなのだと思いを改める。

身体強化を終わらせて、黒い少女を睨み付ける女の人の武器の頭から、ファルシオンのような肉厚な片刃の剣が姿を見せた。

……この人間は、黒い少女にどこまで食い下がることができるのか。少しだけ、興味が湧いてきた。

黒い少女はどうやら身体強化の魔術は使う気がないらしい。まあ、確かに素であれだけの身体能力を持っているのならわざわざ強化する事もないと思うけど。

試合開始と同時に女の人が黒い少女に向かって飛び出す。そして戦鎚を振りかぶって、一気に黒い少女に叩きつけた。

ゴガンツ！という大きな音が響き、試合場の床に大きな輝が入った。けれど黒い少女はそれをすり抜けるように避けていて、女の人の武器を興味深そうに観察しているように見える。

そのためか魔法も魔法も使っていないし、いまだに一度も攻勢に出てはいない。それを理解しているのは、本人達とディオさんとナギ殿と私。それともう二三人くらい。

女の人の顔が悔しそうに歪むけれど、黒い少女は観察するような視線を向けるのをやめない。明らかにその女の人を見ていないし、試合にも集中していないのがまるわかりだ。

けれど周りの人達は、女の人が黒い少女を追い詰めているように見えるらしい。司会の人間も、色々と言いたい放題言っている。

………私は知らないよ？ 何があっても自分達の責任だからね？

ひらりひらりと動き回っていた黒い少女が急にその動きを止めた。

いったい何があったのかと思っただけで、単純に黒い少女がそろそろ終わらせる気になったというだけらしい。

それに気付かない女の人は、自分の武器である戦鎚を黒い少女に向けて振り回す。

当たる部分は、飛び出している片刃。普通なら体が横に両断されてしまうのだろうし、振り回した女の人も慌てたような顔をしているけれど、黒い少女に限ってそう言った心配は無用だろう。

黒い少女はするりと手を伸ばして刃の腹を上向きに弾き上げ、柄に腕を絡めて武器を奪い取った。

そして奪い取った戦鎚を片手の指先でくるくると回しながら、初めから全く変わっていない無表情で女の人を見据えた。

「………まだ、やるか？」

気付かないうちに武器を奪われて丸腰になった女の人は、悔しそうな顔をしながらグブアップ。黒い少女の勝ちになった。

……賭け、しておけばよかったかな？

「……あれが私の母さんだ。勝てると思うか？」

「ちよつとどころじゃなく無理ですね。あれ本気じゃないとかそんな話じゃなくて、戦っているという意識も相手が敵だっという認識も持っていないんじゃない？」

「いや、敵だという認識は持っている。その上で研究を優先しているだけだ」

ディオさんの言葉に、溜め息が出る。いやいや、あれに勝つなんて人間じゃあ無理ですって。

敵対していないならなんとかなると思ったけれど、武器を向けたら確実に敵だと認識されて技術や情報を研究ついでに奪われ、最後には魔術の実験台にされてしまったりとかする気が……。

「されるぞ。と言うか、したことがあるらしいぞ」

「された人がいるんですか!？」

私が言った言葉を聞くと、ディオさんは少しなにかを思い出すような顔になった。

それから何があったかを聞いてみたのだけれど………融合術式で虫と人の合成体を作ったり、樹と人の合成体を作って種を採取してみ

たり、掛け合わせてなにか新種ができないかを確認してみたりして
いたらしいです。

じ……人体実験はちょっと……しかもかなり外道なことをして
ますし……。

……あんなに可愛い顔をしてるのに……もったいない……。

次はディオさんの試合です。頑張ってくださいね！

『いやいや、ディオさんが頑張ったら大変な事になると思うんだけ
どね？ 例えば、気がついたら相手は物言わぬ肉塊になっていた、
しかしその肉塊は鼓動と共に収縮を繰り返し、ギリギリで生きてい
ることを私達に知らせてくる。殺してはいたいため勝利したが、対
戦者の仲間たちに恨みを持たれ、闇討ちされる……とか、大魔術
を連発しすぎて観客を巻き込み、八つ当たりの相手がいなくなる、
とかね。ちよつと困るんじゃないかな？』

うん、それは少し困る。目立つと何をされるかわからないと言っ
とは、元の世界でもこちらの世界でもきつと同じだろうから。

それでも止めない寺島渚とウルシフィ。

デイトさんの試合が終わり、私の番が来る。

そう言えば、この大会に参加した理由は私のガス抜きのためと、自分がどのくらい強いかわからない私にどの程度かを体で教えてもらうためだった。

だから、私はこれからもっと強くしていこう。けれど、殺さないように力を抑えて動こう。

自分の力を知るために、他の人の力量を知るために。

何より、私が魔王を殺すときの予行演習として、私はこの剣を振るうことにしよう。

もう生き物を殺すのにも慣れてしまった。ちょっと前までは私とデイトさんの二人で狩った魔物を料理して食べていたし、襲ってきたのは向こうからだけれど、殺人の経験もある。

こんな私が自分のことを考えるのはおこがましいのかもしれないけれど、それでも私は元居た平和な世界に帰りたい。

だから、ごめんなさい。私は、あなたの思いをへし折ります。

あなたの意思を踏みにじり、自分の通る道の足場にします。

許してくださいなんて言いません。けれど、私はそうして作った道を歩きます。

そして、私は私の願いを叶えます。

他の誰でもない、私のために。

そうして挑んだ二回戦でしたが、開始直後に相手の男性が

「ギブアーーップ！！ムリムリムリムリムリムリムリ勝てる
気しねえええ！！！」

……と、叫んだことにより終了しました。勝ったのは私なのに、何
だか私が負けたような気分になりました。

……くすん。

……いえ、泣いてなんていませんよ？ ちよっとくしゃみが出
そうで出なくて形だけでも出してみただけです。そういうことにし
ておいてください。

ちなみに、なぜか相手の人がそう叫んだ直後にどこかから

「ならば貴様が死ねえええ！！！」

という叫びが聞こえ、なぜか空から大きな薙刀（大刀）って言うんで
しょうか？ 漫画で関羽さんや張遼さんが持っていた物とよく似て
います）が降ってきてその男の人を貫きました。

するとその男の人は五秒ほど苦しそうな声を上げながら悶えています
が、

「……仕方ねえか。あいつの期待に答えられなかったしなあ……」

と言つて、死体を残さず消えてしまいました。どうやらあの男性は魔族の方だったようです。変身魔術でも使っていたのでしょうか？

あまり違和感がありませんでした。

ちなみにディオさんは薄々気が付いていたようで、危なくなったらルールを無視して乱入する予定だったそうです。こんな時まで私の修行に使うなんて、ある意味では流石ディオさんと言つべきでしょうか。

魔族とは基本的に人間に比べ体の性能がかなり高く、その為か身体能力などの性能に任せてのこり押しと言う戦いの運び方をする。そして強者は素直に称賛し、力を持つものにこそ頭を垂れる。そんなある意味では獣のような者達の集まりが魔族と言つものだ。

《率直に言つちゃうと脳筋のお馬鹿さんなんだよネー》

『……こおらっ、いくら本当のことでもお……言つて良いことと、悪いことがあるのよお……？』

《それフォローになつてないからネー！？》

全くだ。

だが、ナイアが言ったことは別に言つてはいけないことでは無いだろう？

『……ふふふふ…… ……もちろんよお……』

《なら言わないでよアザギー！フルカネルリもサー！》

すまんすまん。悪気はあまり無いんだ。

《ちよつとはあるノー！？》

はっはっはっはっは。

……さて、次は私とディオの試合だな。まだ二回戦の第四試合が終わっていないが、恐らく向こうから勝ち上がってくるのはナギとやらだろうし、気にする事は無いだろう。

《無視しないでヨー！泣くヨー！？ いい歳した邪神が恥も外聞もなくみつともなく泣き喚くヨー！？》

ならばその涙は私の研究室にある小さな無色透明のフラスコにでも入れておいてくれ。後で解析してなにか特殊な効果がないか調べておきたいのでな。

「……瑠璃のスルースキルはあ……世界一ねえ……」

この世界に限定すれば、その通りかもしれないな。

「さて、ディオ。久し振りに稽古をつけてやろう」

「……よろしく願います。母さん」

私はディオと向き合い、武器を取り出す。武器と言っても銃ではなく、ディオを相手にしているときによく使う大型のナイフを二つだ
が。

このナイフ二つは元の世界の軍用ナイフを元にしてソードブレイカーとしても使用することができるように改造してある。硬く、固く、堅く、とにかく頑丈に頑強に堅固にしつこいまでに強化を繰り返しているため、加減したとは言え衝撃を零距离から三十七発ほど打ち込んでも折れも曲がりも歪みもしなかった。そんなナイフを両の手に、私はディオに意識を向ける。構えは無し。構えないという構えをして、試合開始を待つ。

流石にこのナイフでディオが今使っている長剣を折ることは難しいと思うので、少々戦闘方法を変えねばならないが………ディオ相手ならナイフで十分だろう。

さて、と。始めるとしようか。

フルカネルリvsディオ、戦闘（訓練）開始。

戦闘開始の合図と共に、私はとりあえず母さんを中心とした火焰の竜巻を作り上げた。

それは天高く登り、雲を散らし、地を焼き払って余りあるものだったが……私は次の魔術の詠唱を始める。

作り上げるのは巨大な水塊。これを火焰の竜巻の中に放り込んで水蒸気爆発を起こせば、母さんの着ている服の端に焦げ目の一つくらいはつけることができるだろうと思いつきながら魔術式を精霊達に組み上げてもらう。

それを撃ち込むと同時に体勢を整え、衝撃と爆風を緩和するための風の魔術を起動する。

水が現れ、一気にその体積を増やして周囲を荒らして回る。使った私にもかなりの衝撃が襲いかかるが、爆心地で直撃を食らった（と思われる）母さんよりはダメージは……………。

思い出すのは昔のこと。私が追い回されていた結晶の鎧を持った獣を、片手を突き出すだけで止めた母さん。

魔術の実験の際、どの程度まで魔力を込めてもしっかり起動するかの実験中に、爆発に巻き込まれても平然としていた母さん。

当時の私の最大威力の火焰の槍を片手で受け止め、火傷の一つもしていなかった母さん。

結論。私の自爆だったな、これは。

その思考を肯定するかのように、周囲を結界ごと凧ぎ払った爆発の中から何の痛手も受けていない、無傷の母さんが姿を見せた。

……まあ、母さんだし……仕方がないな。

「……ふむ。中々良い炎だったな。熱量もあつたし、集束率も十分だ」

「……その中々の炎の直撃を食っても傷ひとつない姿で言われても、自信を失うばかりだと思ふのだが」

「前にも言っただろう。そんなことで無くなってしまふ自信など、さつさと捨ててしまえ」

母さんはやはり凄まじく理不尽だ。一応あの火焰にはかなりの魔力を込めたのだが……。

……正直、勝てる気がしないが……負けたら死ぬと言っわけでもなし、碎けるつもりで闘うでしょう。

手始めに、母さんがどうやってあの火焰と爆発の衝撃から身を守ったのかを見破るとしよう。できなければ、則ちそれは私の敗北だ。

母さんは強い。それは認めよう。

しかし、だからといって負けたいと言っ訳ではないのだ。

闘うからには勝ちたい。負けたくない。それは私にも普通に存在する思いだ。

私は構えを突き主体の物に変える。母さんはその黒く長い髪を靡かせていることから、恐らく風の防壁で竜巻も爆風も衝撃も受け流したのだろう。

そして、それが私に知られていることも予測しながらも、私の事を

面白そうに見ている。

身体強化、速度と力を水増しし、反射と動体視力も底上げする。

燃費の事は考えない。そんなことをしていたら、あっという間に追い詰められてしまう。

母さんは動かない。私がどんな事をしてこようとしているのかを、楽しそうに眺めている。

その間にぎりぎりまで準備をして、一気に発動する。

先程使った火焰の竜巻を圧縮し、風を入れて熱量を上げ、威力のみを重視したその魔術を分裂させ、私の周囲に待機させながら、限界まで熱量を上げる。

「……準備はできたようだな」

母さんの言葉に頷きを返し、両足に力を込める。

一番始めに全力を叩き込まなければ確実に負け、叩き込めたとしても確実性は無く、そもそも当てられるかどうかすら不確定。

……だが、恐らく母さんは私の力を見てみたいと思っただろう。そう思わせるためにあれだけの魔力を削ってまであの魔術を使ったのだし、それでも避けられたなら運がなかったと思っただけだ。

全速力で母さんに突撃し、私の周囲を飛び回っていた火焰の玉を腕から剣に沿っての螺旋を描くようにしてさらに集束させる。

そのまま母さんへと近付き、集束させた火焰の点を剣先から迸らせるように突きを放つ。

その点は母さんに直撃し、巨大な爆炎を生み出した。

結界がビリビリと震動し、ギシギシと軋みをあげている。誰もが母さんの命を心配している中で、私だけは別の事を考えていた。

「……………化物か」

ぼつり、と。誰にも聞こえないほど小さく呟いたのだが、どうやらその言葉はすぐ近くの存在には聞こえていたらしい。

「私は一応人間だ。化物じみているのは認めるがな」

火焰が一瞬にして消し飛び、そこには無傷の母さんが何事もなかったかのように立っていた。

その服にすら焦げ跡はなく、私の剣は母さんに触れる前に透明の壁のようななにかによって阻まれ、届いていなかった。

母さんは美しい笑顔を浮かべてナイフを仕舞い、くっ、と右手で拳を作った。

それを見て私は下がろうとしたが、いつの間にか身体中に土の束縛がかかっていたため動けない。

「……………ふむ。今は良かった。もう少しで障壁が抜かれるかと思っただぞ?」

だから、と母さんは続け、

「このくらいなら今のお前でも、まあ、平気だろう」

次の瞬間。私の体と意識は土の束縛を弾き飛ばし、空高くへと飛び出していった。

予想を超えて成長していたディオの相手をするのは、中々に面白かった。

長い間生きていると、やはり頭の中では勝手に固定観念が出来上がってしまつらしい。昔の研究内容をほじくり返してみれば、確かに先程ディオが使ったような形の理論があつた。

それを教えることはしていないが、ディオは自分でそれを見つけ、そして実用の域まで組み上げたらしい。

魔術で新しいものを組み上げるのは大変だつたらうに、それでもやりとげて見せたディオの事を、素晴らしいと思う。

だからこそ、私はディオに新しい力を与えてやろうと思った。

拳に乗せて、邪神に加護を受けている私の作った、六体の結晶の竜の加護を。

とても楽しそうなフルカネルリ。

《……いや、いくらなんでも死んじゃうと思うヨー？ だってほらー、原型保つてないシー？》

……む？ やり過ぎたか。

さて、治療に行くか。魔法でできているディオの体なら、完全に消滅していても作り直せる。原型を残していないとはいえ、残っているのならさらに楽に治すことができるしな？

ディオさんがぐちゃぐちゃになりながら空を飛んだ　と、思っ
たら元通りになっていた。これはきつとフルリさんに原因があるの
だと思います。

具体的には、やり過ぎたからすぐさま治した、とか……？

……けれど、もしそうだとしたらやり過ぎ過ぎだと思いません。
ディオさんって、私の知る限り今まで何があっても怪我らしい怪我
をしたことなかったんですよ？　それこそ、狼に噛まれようが剣で
斬りつけられようが……。

……もしかして、ディオさんが自分の事を強いと思えなかつ
たり、自分より強い相手がいて当然とと思っているのって……フルリ
さんが原因だったりするんでしょうか？

……そんな気がします。ディオさんも、結構苦労してきたんですね
……想像ですけど。

そうして私が綺麗に治ったディオさんを見ると、その頭の上に
急に小さな水の球体が現れ、弾けてディオさんの頭を濡らした。

「ぐ……っ、がほ、ごほっ!？」

「目は覚めたか？　覚めないのなら今度は千倍で行ってみようと思
うのだが？」

「……起きたので、勘弁してください」

……うん。苦労してますね。文句の一つも出てこないあたり、き
つとかなり昔からそういうことをされていたんでしょう。

……かなり昔から、全身が挽肉になるようなことを普通に？
…………苦勞してるの一言で終わらせて良い問題じゃない気がします。

よくよく考えてみると、ディオさんとフルリさんの戦いの後は、私とフルリさんの戦いが待っているんですね。

……無理です。勝てる勝てないじゃなくって無理です嫌です拒否します。そして死にます。死にたくないです。生きてお母さんたちの所に帰りたいです。

……すぐにギブアップすれば助かりますよね？ 機嫌を損ねたフルリさんがいきなり暗がりから襲いかかってきて挽肉なんて事はないですよ？

「……さて、どうだろうな？ 恐らく無いとは思いますが、正直に言って母さんの行動は読めないからな。何があっても不思議ではない」
『そうそう。あの黒い少女……フルリさんだよね？ フルリさんは本当に何をするかわからないよ？ 何て言っただって昔に私達精霊王とこの世界の消滅の危機を救ってくれたと思ったら、今度は急にアリバっさんの神殿に殴り込みに行ってアリバっさんの像に変な術式を刻んで行ったり、魔王軍を真つ正面から堂々卑怯に倒して見せたりと、本当に色々なことをやってきているからね。まさにフルリさんは天災って言う言葉が相応しいと思うよ？ ただ、意思があるってところが普通の天災より幾分厄介だけどさ』

棄権しても危ないんですか！？ そんなの酷い！

「まあ、恐らく平気だ。母さんはあれで抑えるところは抑えることができるし、加減もうまいからまず死ぬことはない。精々死ぬ寸前（文字通り字義通り寸前）まで追い詰められるだけで済む」「それは普通は、だけ、には入りませんよ!？」

私がそう言つと、ディオさんは疲れたような笑顔のまま私を見て言った。

「……ナギ殿は、勘違いをしている」

「……勘違い……ですか？」

「ああ。それも、あり得ないほどに巨大で分かりやすい上、致命的な勘違いだ」

ディオさんは真剣な目で私を見ながら、呟くように言った。

「……母さんは、けして普通じゃない」

……… ああ。確かに。納得した。

ディオさんは私の頭を優しく撫でて、言った。

「大丈夫だ。母さんは一応、興味を持ったものに対してはそれなりに優しいからな」

初めて、ディオさんの言葉を疑いました。

クスクスと笑いながら少女を見ている。風の精霊王にも、フルカネルリの息子にも気付かれないようにしながら、フルカネルリに道を歪められた者達を観察する。

けれど、多少読みにくいと言うだけである程度は読めてしまう。細かいところではボクの予想を外して見せるけれど、大きな道ではボクの予想の範囲内だヨー。

まるで、演じる者が変わった演劇を見ているような気分だネー。

それでもフルカネルリが接触する度に少しずつ外れる幅が大きくなって行く。いつかはこの少女やフルカネルリの息子も、ボクの予想から完全に外れた行動をとるようになるのかナー？

「……そうだったら、面白いんだけどナー？」

まあ、無いだろうけどネー。いくらフルカネルリに関わって歪められたと言っても、それは結局個人を根本から変えてしまったわけでは無いシー。

まったく、高位の邪神がなんだって言うのサー。自分の楽しみすら人任せにするしかない、そんな生き方は好きじゃないんだヨー？

ボクたちはそれでも楽しみを見つけようと生きているけどサー。長生き過ぎるから飽きるのが早いんだヨー。

……まあ、フルカネルリみたいに開けるたびに中身が変わるビックリ箱みたいな人間もたまには居るんだけどー、見つかる可能性はかなり低いんだよネー。

何て言っただって、ボクたちにとって楽しい人間は予測ができない人間だから、ボクたちの力が届かないから偶然に頼るしかないんだヨー。

でも、見付けるにはずっとしたくもない簡単な未来予測をしてないといけないし、やる奴なんてかなりの暇神ひましんだけだけどネー。

ボク？　ボクはかなりじゃなく、相当な暇神だヨー？

まあ、異界の救世主も頑張ってるネー。一応応援してあげるからサー。

暇神カミングアウトしたナイア。

フルカネルリだ。ナギとやらと試合をしようと思ったのだが、全力で棄権されてしまった。かなり力を抑えて良い勝負をしようと思っていたので、残念だ。

《本音ハー？》

異世界の者が使う魔術や異世界人の体の組成の研究・解析ができないのは残念だ。こうなったら闇討ちして気絶させて解析するしかないな。

《やめてあげてー！ あの娘はフルカネルリの子供の奥さんになるかもしれないんだヨー！？》

……なに、殺しも壊しもしないし、傷一つ付けないから平気さ。記憶にも残らないだろうし、見ている者がいない時にやってしまえば……。

『……そこまでよお……ナイアがあ……信じちゃってるわあ……』

……なんだ、ナイアは本気にしていたのか。

《フルカネルリの冗談は冗談に聞こえないから恐いんだヨー！》

……おや？ どこかから、ナイアだけはそれを言うんじゃないか？ という声が聞こえたような気がするな？

《……き、きつと気のせいサー！》

そうか？

《そつだヨー！そつに違いないヨー！！》

……まあ、そう言うならそれでも構わないがな。

『……ふふふふ………瑠璃は、優しいわねえ………』

話の中心となっていたナギとやはらは、ディオと一緒にこの町を出ていた。どうやら私から逃げようとしているらしく、かなり速い。

……まあ、転移すればすぐさま追い付ける程度だが、このような速度を出せるという事は、元々の体の作りがかなり良いか、もしくは馬鹿魔力で身体能力の強化をしているか、はたまた相当燃費の良い魔術形式で身体強化をしているかのどれかだろうな。
ナギとやらの体から発散されている魔力を試みる限り、最後のがもっとも確率が高そうだが。

……まあ、何でも構わん。目的地はわかっているし、先にそこに行つてしまおう。

目的地はツエセム火山。炎の精霊の王の住む場。

……しばらくは暇になるだろうし、溶岩の海で釣りでもしているとしよう。マグマリザードは火鼠の肉団子かフレイムウイングの手羽先で釣れるからな。上手く事が運べば今日の夕食はマグマリザード

のステーキと煉獄花^{れんごくか}のサラダを食べる事ができるだろう。

《……煉獄花つテ、実はすっごく辛いんだヨ。フルカネルリみたいな大の辛い物好きじゃないと食べられないくらいにネー》

『……とかげのほうは、結構美味しいのにねえ……？』

辛い物好きであることは認めるが、私は甘い物も好きだぞ？ いわゆる両党と言うものだな。

ツエセム火山の溶岩に炎属性の糸と針を垂らし、しばらく待つ。餌として火蟹を搗り潰した物を使っている。

火蟹は真紅の殻を持つ十五センチメートル程の甲殻種で、食べられないことはないが調理無しだとえぐみが強すぎて食べられたものではないほどに不味い。

毒は無いし、調理してしまえば実に美味しいのだが、一体見付ければ五十体は居ることを覚悟しなければならぬという火蟹は数が揃うと厄介になることで有名だ。

私としては踏み潰してしまえば搗り潰すときに楽なので関係無いが、この世界の多くの人間達はこの火蟹が百居れば命を捨てることを覚悟するらしい。

……よくわからんな。

……お、獲物がかかったか。

そう思つて竿を上げると、見事にマグマリザードがかかっていた。今夜の夕食のメニューが決定したな。

私は今、全速力で走っている。それというのも、ディオさんに教えてもらったフルリさんの修行のしかたがあまりにも酷すぎて、さらにそれがもしかしたら私にも降りかかってくるかもしれないとディオさんが言ったからです。

ディオさんは言いました。

「母さんがナギ殿に修行をつけることになったとしたら、まずは基礎からになるが……ナギ殿ならその部分はかなり飛ばされて次に行くことになるだろうな。次は実際に戦闘をして、精神的にも肉体的にも三桁ほど殺されて治されてを繰り返される事になるだろう。私も通った道だ。諦めて殺されるといい。私も付き合うぞ？」

その時のディオさんの瞳の諦めの光を見た時に、本当にディオさんはそんな修行（虐殺の間違いでは？）を潜り抜けてきたと理解しました。

逃げても逃げてでも無駄だとは思いますが、私はディオさんを連れて必死になって走ります。

目指す場所はツエセム火山。炎の精霊王が存在するところ。きっとあそこなら、いきなり修行と言う名の蹂躪は始まらないでしょう。

………きっと。

「正直、無駄だと思うがな」

「わかってますよそんな事！それでもきっと、人間はそんな理不尽に抗うために！そのために生きて、力をつけているんです！今使わないでいつ使うんですか！！無駄だとしても、諦めちゃダメなんで

す!」

あ、いま、私がかっこいいこと言った。こんな状況じゃなかったらもつとかっこよかったんだろうけど……必死だし、きつと問題ないと思います。

『それじゃあ私と契約しとかない? 風で後押しすれば少しは速くなると思うけど、ナギ殿はキスは嫌なんだよね? まあ、実は近くに一週間くらい居ればキスはしなくっても平気になるんだけど。額にちよんと指あてて、契約したいって思えばそれで完了。だからキスが嫌ならカルシフェルの意識の届く範囲内にはばらく居ればキスはしないで済むようになるけど? ちなみにカルシフェルの意識の届く範囲って言うのは火山の火口から麓までだよ。ただ、火口から離れれば離れるほど影響力が低くなるからね。火口近くだったら五時間くらいで終わる事もあるだろうけど、麓だと一月くらいかかることも視野に入れておかないとね』

「そういうのはもっと速く言って!」

『丁寧語でもっと陰湿に私の心を抉るように言ってくれないと気持ちよくないよ? 今でも可愛いお姉さんって感じで良いとは思うけどさ。できるなら私の身体的特徴をあげつらうようなけして否定できないし今すぐ変わろうとして変わることのできないことに焦点を置いて罵ってくれると私はだらしないうアへ顔さらして涎垂らして落涙するほど悦ぶよ?』

………駄目ですねこの精霊王。速くなんとかしてあげないといけないかもしれません。

この後、鼻唄を歌いながら溶岩に釣糸を垂らすフルカネルリを見て絶望しかけることをこの時点では知ることの無い寺島渚の逃走。

(y r 加)

「~~~~~」

私の視線の先に居るのは、上機嫌に小さく鼻唄を歌いながら真っ赤な溶岩に釣糸を垂らしているフルリさん。

どうしてここに居るんでしょうか？ 私、かなり頑張って走りましたよ？ 馬を潰す勢いで使って三日ほどかかるところを走って一日とほんの少し。それだけしか時間をかけていないのに、どうやって私達に先回りをしたんでしょうか？

デイオさんは落ち込んでいる私を優しく抱き締めながら頭を撫でてくれています。よく見てみるとその目はかなり本気で諦めている目をしていました。

……まあ、理由はわかりますけど。私もおんなじ人が原因で心が折れそうですし。

「……そんなところで見ていないで、こっちに来たらどうだ？」

そうこうしている内に、私達はフルリさんに気付かれました。いや、本当はもっと早く気付かれていたのかもしれないけれど、少なくとも私たちがフルリさんに気付かれたと思ったのはその時のこと。

そして、フルリさんに呼ばれているのにそれを断れるはずもなく、私とデイオさんは言われるがままにフルリさんの座っている近くに歩を進めるのでした。

……くすん。まだ死にたくなかったです。既に過去形。

意外と優しい人でした。表情はわかりにくかったけれど、それはデ
イオさんにそっくり。正確には、デイオさんがフルリさんに似
ているのですが。だったので、何となくですが読み取る事がで
きました。

なぜかデイオさんに対する想いを知られていましたが、これもきつ
とフルリさんなら仕方がないことなんでしょう。だって、フル
リさんですから。デイオさんのお母さんですから。

『あははは、久しぶりだね黒い少女改めフルリさん。こう呼んでも
いいよね？ 答えははいかハイかイエスの三択しか受け付けてない
けど。ところでここに居るってことはカルシフェルの熱血馬鹿には
会ったのかい？ あいつは元気にしてた？ 元気じゃないならから
かいに、元気ならもっとからかいかいに行くつもりだから教えてほし
いんだ』

「……ああ、風のウルシフィカ。私の記憶では割と最近会ったよう
な気もするが、久しぶりと言うならそれでいいだろう。カルシフェ
ルは前に会った時と同等に元気にしていたぞ。あまりに五月蠅かつ
たから殴ってしまったが」

『ええっ！？ 私の事は殴ってくれないのにカルシフェルの事は殴
るの！？ 酷いよ！差別だよそれは！』

「……この最後だけを聞いて、自分を殴ってほしいからそういう
ことを言っていると気付ける者は何人いるんだろうな………」

「……きつと、私達と一緒に行動する人以外はわからないと思いま
すよ？ ……私、よっぽどじゃないと仲間を増やす気はありま
せんけど」

ええ、増やす気はないです。だってこの世界の人達って基本的にがつがつしていて怖いんです。何故かディオさんはそういったものは見られませんが……フルリさんを見ると、それはフルリさん譲りではないかと思えます。フルリさんも大抵のんびりしているみたいです。

瑠璃達の掛け合いをナイアと一緒に歩引いて眺めているけれど、瑠璃以外はその事に気付けないようだった。

姿を態々隠そうとしているのではなく、いつもの状態でそれなので、この子達だけで（一応）魔王を倒せるのかと、少しだけ心配になった。

けれど、それがすぐに不必要な物だと考え直した。

なぜなら、瑠璃がこの二人の淡い恋の行方に興味を持っているから。恋が成就するも儚く散るも、生きていてこそなる話。ならば、瑠璃はこの二人を事故や魔王なんかに殺させることはないだろう。それでは恋の行く末がわからなくなってしまおうし、瑠璃だけでなくナイアもつまらないだろうし。

《……フルカネルリッテ、優しかったり意地悪だったり、子供みたいだったり老人みたいだったりデー………わからないよネー？》

ナイアがいきなり、あまりにも当然の事を言い出した。

「……当然じゃない………だって、瑠璃だものお………」

《……そうだねー》

くすくす、けらけらと笑い合う。こんな時間も、なかなか楽しい。

「……………ふふふふ……………それに……………そうだからこそ、瑠璃と一緒に居るんでしょう……………?」

《まあ、そうだねー。ボク達邪神とフルカネルリがよく似ているっていうのも理由の一つには入るけど、一番は見てて楽しいからだネー》

また笑いあつて、どちらともなく瑠璃を見つめる。

自分が育てた異世界の魔法生命体と、異世界のさらに異世界生まれの少女の姿を、それと気付かせることなく解析している。

今までも鏡越しに解析はしていたけれど、そのときと比べてずいぶんと丁寧に深いところまで観察していると思つてはいた。しかし、わたしはその子達にわざわざ忠告してあげるほど優しくはないし、瑠璃がそれでいいなら肯定する。

……………この世界に来てからしばらくして、わたし自身も瑠璃に解析されちゃつたと言うこともあるのだけれど。

……………なんにしろ、わたしは出来る限り瑠璃と一緒に居たいし、瑠璃もわたしを拒絶しないでくれている。それなら、わたしはわたしに出来る限りの事をして瑠璃と一緒に居よう。そう思う。

《まあ、良いんじゃないかナー？ ボクもアザギの事は嫌いじゃないシー、アザギと一緒に居たいならそうすればいいヨー》

……………ありがとうねえ……………

純粹亡霊アザギさん。そしてその暴走フラグ。

炎の精霊王に会うために火山を登る。魔物が多いけれど、このくらいなら私一人でもまだなんとかなる程度なので、デイオさんもフルリさんも手伝いはしてくれない。失敗しそうになった時や大怪我をしそうになった時は助けてくれるので文句はありませんけど、やっぱり少しきついです。

ちなみに今は洞窟の中で火の粉を散らしながら飛び回る蝙蝠と、地上でかしゃかしゃと甲殻を擦り合わせながら私に向かって走ってくる蟹の波状攻撃を受け続けています。

「~~~~っ！もう、多すぎです！【水よ！来たりて切り裂け】！」

いつもは使わない詠唱を使って水の魔術を使いますが、こんな水気の少ないところで使える魔術はそう多くはない。

けれど、私は魔力の量だけはそれなりに多いらしいので、魔力を込めて遠くの水の精霊も呼んで魔術を行使する。

ごぼぼっ、と水の塊が私の頭上に浮かび上がり、表面から少しずつ剥がれるようにして水の刃が飛んで行く。そしてそれらの刃が蝙蝠と蟹の大半を切り裂き、残った物はさっきのような全周囲型ではなく集束型で狙って切り裂く。

それでなんとか終わったけれど……………疲れました。

ぱちぱちぱち、と拍手の音が辺りに響く。音の方向を向いてみると、フルリさんとデイオさんが私に拍手をしていた。

「……ちょっとくらい手伝ってくれてもいいじゃないですか」
「それでは鍛錬にならないだろう。出来るところまでは自分だけでやっておけ」

フルリさんは、顔に似合わずすごいスパルタのようです。確かにこういうやり方ならディオさんがあそこまで強いのも理解できますし、ディオさんが私の限界を攻めるような修行の仕方をしたのかもわかりました。

……でも、いくらなんでもなんの覚悟もない私にいきなり殺人経験を積ませるとか、いかれてるとしか思えませんよ？ 主に頭が。

「……ふむ。ナギとやらも、言う時は言うのだな？」

当たり前で………え？

おそろおそるとフルリさんの顔を見ている。無表情だった。その次にディオさんの顔を見ている。やっぱり無表情だった。最後にウルシフィを見ている。

「………私、口に出してた？」

『出してないと思うよ？ まあ、空気を震わせないように声に出したなら別だけど。何があったのかな？ もしかして私を罵倒してくれたのかい？ どんな内容？』

………この精霊王はダメですね。

「駄目な精霊王だな」

「本当に駄目な精霊王だな。昔はこうではなかったのだが、いったい何があったのやら」

『あふんっ』

ディオさんの蔑みを込めた目もフルリさんの無価値

な物を見るような目もナギ殿の馬鹿を見るような目もいいね。体が熱くなってくるよ。……ああ、もうとろとろだ。こうなったら責任をとってもらってディオさんフルリさんナギ殿の三人にペットとして飼ってもらおうしかないね」

……ごめんなさい。原因は私とディオさんが初対面でやったアしです。屈辱にまみれるのが気持ちよくなってしまっ、いわゆるマゾヒストになるなんて欠片も思っていないませんでしたけど。

ナギ殿も中々強くなってきた。未熟な私が言うのもどうかとは思いますが、本当に。

始めの頃はこの短期間でここまで強くなるとは思っていなかったし、ここまで才があるとも思っていなかったが、本人に強い生存願望があるお陰か教えた事を見事に自分のものにしてみせる。やはり生きたいという欲は相当強いものだな。

しかし、魔王を倒すことができるかと言われれば首をかしげるしかない。会ったこともないし、直接見たこともない相手と比べるということ事態が間違っているのかもしれないが……。

……母さんならわかるのではないか？

「わかるぞ。もう一つといたところだな」

……もう一つか。それなら、まあ、なんとかなるか？

……ああ、母さんだし私の思考を読み取ることくらいは普通にやっつてのけるさ。当然当然。普通普通。ただし母さん限定の普通だが。

……ずいぶん新しい普通もあつたものだが、それが普通かあさんなのだから仕方がない。

母さんとナギ殿、ウルシフィとこの火山で生活を初めて一週間。炎の精霊王にそろそろいいんじゃないかと言われたとウルシフィが報告してきたので、頂上に存在する火口へと登り始める。

先頭はナギ殿で、弱い魔物の掃討もナギ殿。ある程度以上の力を持つ魔物は私で、母さんは自分が行動する先に居る魔物だけを殺している。邪魔をされなければ無視しているが、大抵は襲いかかるので、それらは私達の食事に用になる。

……母さんの作る料理が一番美味しい。どう見ても大雑把に作っているようにしか見えないのだが、何故か。

母さん曰く、料理は味見と自分の舌さえしっかりしていれば早々不味くはならないそうだが、私が始めに作ったものは黒いナニカと現すのがもつとも適当と言えるようなものだった。

……食べたとも。自分が食べて他人に食わせて恥ずかしくないものができるまで、失敗作は全て私が食べたとも。

ただ、多少毒性が出ているものは途中で気絶してしまい、捨てることになったが………。実にもつたいたない。もつとしっかり学んでから実践するべきだった。

「デイト。火蟹鍋ができたぞ。ナギとやらを呼んでこい」
「了解」

さて、食事だ食事。

ディオ、ツエセム火山の洞穴にて。

『ういつす！俺様がこのツエセム火山の主、炎の精霊王のカルシフェルだ！アリバシーヤの旦那にも言われてるし、さつさとその娘っ子と契約しなきゃなんねえんだが、その前にちつと戦うぜえ！なぜならいくらアリバシーヤの旦那の命令でも、俺程度を倒せないよ。うな奴がああ魔王を倒せるとは思えねえからな！』

『やかましいんだよこの超弩級熱血馬鹿。少しはその喧しい口を閉じて鼻で呼吸することを覚えた方がいいと思うんだけどね？ まあ、虫程度の知能しかない熱血吐瀉物なんかがそんなことを覚えて、あまつさえ実行なんてして見せたらこの世界が丸ごと滅んでもおかしくないからこつちからお断りだけどね。でもちよつとくらいこの声を小さくすることくらいはできると思ってるんだけど？ いくらお前が馬鹿で馬鹿で馬鹿で馬鹿で馬鹿でこの上ない馬鹿で比較するものが見つかからないほど馬鹿であり得ないほど馬鹿で並び立つものがないほど馬鹿で極限の馬鹿であまりの馬鹿さと熱苦しさに名前が熱血馬鹿ルシフェルになるほど馬鹿でこの世界全てでもっとも馬鹿である熱血馬鹿ルシフェルでも』

『俺様そんな風に言われてたの！？』

『そんなことにも気付かないから熱血馬鹿ルシフェルは熱血馬鹿ルシフェルと呼ばれるんだと言うことにすら気付けないんだねこの熱血馬鹿ルシフェルは。全く実に馬鹿な熱血馬鹿ルシフェルだね、もはや尊敬に値するわけないだろこの熱血馬鹿ルシフェル。頭がない訳じゃないんだから少しは使ってみなよ熱血馬鹿ルシフェル。使われない頭なんて鳴らない鐘より無意味だつてことくらいはいくら熱血馬鹿ルシフェルと呼ばれる熱血馬鹿ルシフェルでもわかるはずなんだけど、熱血馬鹿ルシフェルはもしかしてわかっていないのかい熱血馬鹿ルシフェル。さてここで問題です、私はこの二回の二重鍵

括弧内で何度「熱血馬鹿ルシフェル」と言ったでしょうか？」

私がそう言うのと熱血馬鹿ルシフェルは考え込み始めた。こうやってはぐらかされるから熱血馬鹿ルシフェルは熱血馬鹿ルシフェルを脱出できないんだよこの熱血馬鹿ルシフェル。

「元気だったろう？ 私が殴りたくなるのも仕方ないことだと思わないか？」

「思うよ。すつごく元気でもう元気すぎてイライラしたね。こんな奴が同族だと思うとなんだか……自分がこんなところまで落ちぶれちゃったんだなあってぞくぞくするね」

私はついつい自分の体を抱き締めてくねらせる。デイオさんフルリさんナギ殿の視線が突き刺さって、まるで太い矢に貫かれているみたいだね。

「……おい、ウルシファイ？ ……ナニやってんだ？」

「……ちつ。せつかくのいい気分が台無しだ。空気の読めない奴だな熱血馬鹿ルシフェルめ。だから熱血馬鹿ルシフェルは熱血馬鹿ルシフェルというあだ名がつくんだ熱血馬鹿ルシフェル。熱血馬鹿ルシフェルは熱血馬鹿ルシフェルらしく馬鹿馬鹿しく馬鹿なことをやっている熱血馬鹿ルシフェルが。空気も読めない女心も読めない男心もわからないじゃあ友人なくすぞ熱血馬鹿ルシフェル。愛すべき馬鹿ならともかく、熱血馬鹿ルシフェルはただの馬鹿であり熱血馬鹿ルシフェルでしかないんだから身の程と言うものをわきまえなよ熱血馬鹿ルシフェル」

「熱血馬鹿ルシフェル熱血馬鹿ルシフェルうるせえってんだろ！？

なんだよお前俺様のこと嫌いかよ！？」

『……好かれてると思つてたの？ は！あ・り・え・な・い・ね！
自意識過剰もいい加減にしなよ熱血馬鹿ルシフェル。私はマルシフ
アーヤアルシフスみたいに優しくないんだ。常識的に考えて私がお
前のことを好きであるわけが無いのと同じくらい、太陽が西から昇
つたりアルシフスがブレイクダンス踊つたりするのと同じくらいあ
り得ない勘違いだね？ 削られたら？』
『ちくしょおおっ！！ウルシフィのバーカバーカ！アルシフスに埋
め立てられちまえ！』

……まったく。虚しい勝利だね。

…………… ちょっと、私の目の前で起きている出来事が信じられない
んですけど。

ディオさんを見ている。けれど、特にこれといって変わったところ
は見えない。それはフルリさんもおんなじだけれど、誰も喋ろうと
はしない。

もう一度ディオさんを見ると、今度はディオさんと目が合う。
額かれてしまった。これは、現実だと。

………しかし、それでも信じられない。だって、自称・変態淑女のウ
ルシフィが、苛められることに快感を感じ、放置されることに喜び
を得て、痛め付けられることに喜悦を隠せないようなウルシフィが、
他の誰かを罵倒しているんですよ？

………これは夢ですか？ だとしたら、すごい悪夢なんですけど。

「夢ではない、現実だ」

「夢であつて欲しかった！悪夢でもいいから夢であつて欲しかった
！！というかももう悪夢であつて欲しかった！！！！」

「……諦める。人生は諦めと執着の切り替えが大切だ。諦めるべき
所で諦めず、執着すべき所で執着すればそれなりに平穩に過ごせる」
「デイオの場合は平穩に過ごしても私に日に何度か壊されるのだが
な」

「そんな平穩は嫌あ……………」

熱血馬鹿ルシフェルこと炎の精霊王カルシフェルと戦闘をすることになった。

……… なったのだけれど、ちょっと風の魔術で熱を遮断する結果を張って圧縮したら降参してきた。予想以上に早くって驚いた。

『……… ちくしょう、こいつほんとに人間か？ 今なら人型なだけの化物だつて言われても信じられるぜ………』

化物とは酷いですね。私は普通の人間ですよ。少なくとも、ディオさんやフルリさんほど人間辞めてません。

……… 多分。

『あはははは、何を言ってるんだか。ナギ殿ももう十分化物の域に入ってるのにさ。普通の人間はこんな真似はできなごふつ ひゅ、こひゅ………』

なら言い方を変えます。私は普通ではないにしろまだ人間です。ただ、ちよつとばかり異常なだけです。

「ちよつとか？ 正直、私のそれなりに本気の剣速についてこれる人間は知らないのだが」

「ほう？ デイオにある程度とはいえついていくことができるのか？」

「まあ、今までに数度しかやっていないが、一応訓練として」「成程。人間とは思えんな」

やかましいです。私は人間なんです。誰が何と言おうと人間なんです。

『あぐう 背中と首があ……………』

炎の精霊王との契約を終わらせ、さつさとツエセム火山を下りる。こんな暑い所にずっと居たくはないですし。

「……………次はどこに行くんですか？」

『風の大陸の魔の森にある、それなりに大きな湖だよ。そこにマルシファーが居るんだけど、魔の森って色々危ないから気を付けないと駄目だよ？ なんか服だけ溶かしてくるような触手とか人食いか大きな猪とかたまに修行のために籠ってる武者とかも居るからね』

武者者って……………。魔の森に入って平気なんですか？

「いや、大抵死ぬと聞いたぞ？ 私が入った時も何度か死にかけたしな。毒のある植物が怖いと知った」

「入ったことあるんですか!？」

「……………修行の一環で、少しな」

そう言ってディオさんは空を見上げる。つられて私も空を見上げてみると、なぜか寒気がする笑顔をしたフルリさんが浮いているように見えた。

……………ああ、なるほど。御愁傷様です。

ちなみにフルリさんは下山後に別れました。どうもディオさんが珍しく執心を見せた人がいるので見に来たんだとか。

……つまり、私ですね。本当は少し戦ってみたかったそうですけれど、私が全力でお断りしたので残念そうにしていました。そのあと、なにか私に術式を書き込んでいましたが、ちよつとした目印だそうです。いったいなんの目印なのでしょう？

「母さんの考えることは理解できんよ。理解できるものは、母さんただ一人だ」

「その点については完全に同感ですね。フルリさんを理解できちゃったら、何とというか人間失格って気分になりそうですし」

と言うか本当に人間を辞めないとわからないような気がします。まづフルリさんって本当に人間かどうかも怪しいですし。

「自称は人間だぞ。実際はどうか知らんが」

「……もし人間じゃなかったとしたら、ディオさんは少なくとも半分は人間じゃないってことになりますよね？」

そう聞いてみると、ディオさんは不思議そうな顔をした。

「……私、なにか変なこと言いました？」

「ああ」

すっぱりとディオさんは言った。いったい今の言葉のどこがおかしかったんでしょう？

「私と母さんは血が繋がっていない。私は拾われ児だ」

「あ……」

いきなり爆発した地雷に、私の思考能力が根こそぎ吹き飛ばされる。確かに、黒髪のフルリさんから金髪のディオさんが産まれるのは遺伝的にちよつと難しいし、父親の事は一度も聞いたことが無かったけれど、まさかそんな事情があつたとは思つてもみなかった。

いったいどんな事があつてディオさんはフルリさんに拾われることになつたのか、ちよつと興味があつたけれど、いくら私でもそれは聞くことができない。

きつとその事をディオさんは知らないだろうし、知っていたとしてもあまり話したいことではないと思うから。

「いや、特に私は気にしていないぞ？ 私と母さんに血の繋がりがあろうとなかろうと、私と母さんは親子だからな」

……あら、全然気にした様子がないですね？ 私の気の回しすぎでしたか。

まあ、これが原因でディオさんと仲違いすることになるとかそんなことが無くつてよかつたと言えればよかつたんですけどね。

気にしないでいいところは本当に気にしなさすぎるディオと、それに振り回されるナギの掛け合い。

風の精霊王ウルシフィと、炎の精霊王カルシフェルの二人（二体で
すかね？）と契約した私と、フルリさんから新しく力を受け取った
らしいディオさんは、なんとこのたび、空を飛べるようになりまし
た。

「……………おお。これが空を飛ぶ感覚か。母さんに飛ばされる以外では
初体験だ」

「……………あの、それって飛ばされるの前に、殴り、とか、蹴り、
とか入りませんか？」

「それ以外にも、投げ、や、吹き、弾き、が入ることもあるな。
唯一の救いは、消し、だけは今までに入ったことが無いと言っくら
いか」

殴りも蹴りも投げも吹きも弾きもまずいですけど、最後のだけは本
当に不味いですよね？ 蘇生される前に消滅させられちゃったら、
いくらフルリさんでも治せないでしょうし。

「 本当にそう思っているのなら、ナギ殿はまだ母さんの事を
知らない」

「……………できるんですか？ ゼロからの再生……………と言っか、再構築を
？」

「……………母さんだからな」

ちよつと納得しそうになりました。

空を飛べるようになったので、船を使わなくっても大陸間の移動をすることができるようになりました。

と言うわけで、すぐに出発です。目指すのは……どっちでしょうか？

「そのまま真っ直ぐだ。右に行くと炎の大陸に戻ってしまうからな」

『ちなみに斜め左後ろに行くと言魔王の住む土の大陸だよ。北の小さな島にアルシフスが居るけど、多分アルシフスは最後にしないと力を貸してくれないと思うよ？』

そうですか。なら、早く行きましょうか。

「急いでもしばらくかかると思うぞ。体力と魔力の配分はしっかり意識しておけ」

「はい、ディオさん」

私達は空を飛ぶ。水の精霊王のいる風の大陸を目指して。

……やっぱり、グライダーと一緒に使った方が楽ですね。自分の体重の事をあんまり考えないで済みますし、それに速いですし。

『あははは、やっぱりこうして空を飛ぶって言うのは良いね。最近の私にしては珍しく普通の意味で気持ちがいいよ。最近はあんまりこうして高高度長距離高速飛行とかしていなかったし、それにすぐそばにディオさんとナギ殿が居るっていうのも嬉しいね』

サノカツキに行くときに飛んだと思っていたのですけれど、どうやらウルシフィにとってあれは高速でも高高度でもない長距離飛行という扱いになっているようです。

まあ確かに、風の精霊王（一応）のウルシフィにとってはあのくらいの速さは速いうちに入らなくてもおかしくはないですね。変態で

すけど。

生身による飛行は母さんによる弾道飛行（強制）以外には初めてだったので少々期待していたのだが、やはり母さんが昔私の目の前でやって見せてくれた飛行魔術には及ばないようだ。

……と言うか、あれはもう魔術では無いと思うのだが……。

たしか母さんは、風を使わない飛行魔術を使いながら自分にかかっている重力を打ち消し、周囲を結界で覆って風の抵抗を無くして自分にかかる加速度を身体強化で耐えていると言っていたが、私はそれを真似することはできない。

なぜなら、私が同時に使える魔術は三つまで。飛行魔術を使わなければ飛べないし、重力を消さなければ高速飛行はできない。結界を張らなければ目も開けられないだろうし、加速度を無視すれば弾けてトマトジュレ（人肉風味）だ。何度か死んでいるとはいえ、わざわざ私から死に行きたいと言うことはない。

私はウルシフィとは違うのだ。

『私も死にたいとは思わないよ？　ただ、死ぬ寸前まで追い詰められて生殺与奪を握られているっていう状況には多少興奮するけどね。そうだ、ちよっとやってみてくれないかなディオさん』

「やらん」

「先に言っておきますけど、私もやりませんよ」

やれやれ。私もナギ殿もウルシフィの変態発言に慣れてきてしまったな。これも一種の洗脳か？

日が暮れたので、一度降りて今日の移動を終了する。周囲を見回して魔物がいないことを確認してから結界を張り、テントを組み上げる。

ナギ殿もかなり慣れてきたようで、私が指示をしなくても手際よく作業を進めている。

「テント張り終わりましたよ」

「そうか。食事の準備もできているし、食べはじめようか」

私とナギ殿は、こうして水の大陸での最後の夜を過ごしたのだった。

また日は昇り、朝焼けが目染みるほど眩しく見える。黄色く見えるわけではない。ただ寝起きの目が光に慣れていないだけだ。

腕の中で眠るナギ殿を起こさないように体を起こし、テントの外に出る。まずは、いつも通りの柔軟と魔力の体内周回をして目を覚ませよう。朝食を作り終わる頃にはナギ殿も起きてくるだろう。

横から見ているとどう見ても恋人。

風の大陸に到着。今回は船を使っていないので、面倒な審査などはすべて無視した。本来なら不法入国となるのだが、なに、ばれなければ問題無い。

「問題だと思いません」

『大丈夫だよ。もしばれたとしても、ディオさんとナギ殿を捕まえられる人間がこの世界に居るわけがないさ。安心していいよ』

「……フルリさんは？」

『私はフルリさんを人間とは認めない。フルリさんは絶対人外だっ
て思っているし、多分これからも思い続けるよ』

「……まあ、あながち間違っ
てはいないのだろうが……知られたら何をされるかわからんぞ？」

飛行可能になってから、ずいぶんと一日の移動距離が伸びた。それによつて探し物も楽になったし、戦闘もすぐに終わるようになった。何より索敵に一番役に立っている。

高度を上げれば地上にいる魔物の群れを発見しやすくなるし、食事に鳥肉が入ることも多くなった。

逆に見つかりやすくなつたのだが、高度を二百メートルまで上げてやれば届く魔物はほとんど居ないし、鳥型の魔物は進行方向と速度さえわかっ
てしまえばその先に剣を置くなり魔術を打ち込むなりしてやればけりがつくので扱いやすい。

「この世界で焼き鳥が食べられるなんて思ってたませんでした」

「そうか。まあ、味わって食べるんだな」

「勿論です」

ナギ殿は嬉しそうな表情で、塩を多めに振られた焼き鳥を頬張っている。私も昔似たようなものを食べたことがあるが、ナギ殿のいた世界にも似たようなものがあつたのだろう。

ふわふわと浮きながらの昼食だが、以外となにかなるものだ。風を抑えるのはある程度で十分だし、焼き鳥を作るための火の魔術も弱火で構わないので問題無い。あとは私とナギ殿が自分の体を浮遊させて場所を固定するだけでいい。

……ちなみに、なかなかいい修行になる。同時に体内で魔力を回すのもやるとさらに効果的だ。これなら私が生きているうちに母さんと同じ‘魔法使い’の高みまで登ることができるかもしれん。

『……たぶんだけど、ディオさんならもうできると思うよ？ フルリさんにもらった力がなにかは知らないけど、少なくとも私達精霊王と同格かそれより高い力を持った存在との契約なのは確定だしね』
「そうなのか？」

どれ、試してみるか。

炎の魔術を消し、自分の魔力のみで術式を組んで行く。

普通に精霊に渡すよりも苦労はするが、かなり使用する魔力は削減されている。

『ああ、そこはあんまり厚くしすぎると詰まって暴発することがあるからもうちょっと薄くした方がいいと思うよ。魔力の固め方や操り方は、もうほとんど文句はないね。ただ、慣れてないせいだと思

うけど、ちょっとゆっくりすぎるね。もう少し早くしないと実戦では使えないし、空間に固定するんじゃないかと、自分の前に固定するようにしないと移動できなくなるよ？ フルリさんは一瞬で組み上げて空間に固定して地雷式にして使ってるけど、ディオさんはまだ無理だろっ？』

……むう。難しいな。とりあえず練習あるのみだ。

ディオさんが新しく魔法に挑戦しているそうです。

この世界では精霊に魔力を渡せば、少し多目に魔力をとられますがかわりに術式を組んでくれて、そこに術者が魔力を流し込んで術を発動するのが人間の一般的な方法なのですが、魔力の扱いに長けている人は、精霊に組んでもらうのではなく自分で自由に術式を組むことができるのだそうです。

フルリさんは当然のように自分で術式を組んでいるそうですが、ディオさんは今まで努力はしてきましたが、できなかつたそうです。

けれど、あの時フルリさんを仲介して誰かとの契約をしたら、何となくですがわかるようになったらしく……ウルシフィに教えてもらいながら、黙々と術式を組み続けています。

……むう。少しウルシフィに嫉妬します。私だってディオさんに頼られるようになりたいです。今の状態では、何一つディオさんから頼られる所がありませんし。

……もっと頑張りましょう。そしていつか、ディオさんの後ろで護

られるだけじゃなくって、背中を任せてもらえるようになろう。

ファイト、私っ！

頑張ろうと決意したナギの話。空中浮遊したとある日のこと。

術式を自力で組む訓練をしながら飛行を続けておよそ二日。水の精霊王が住んでいるらしい湖に辿り着いた。

……が、なぜか水の精霊王は姿を見せない。ウルシフィが呼び掛けても、返事もしないらしい。

私も探してみたのだが、湖の底に、妙に水の力の強い場があることくらいしかわからなかった。

『うん、それマルシファーだね。湖の底にいられたんじゃあ私の声が届かないわけだ。やれやれ、私からマルシファーの方はわからなくっても、マルシファーの方から私のことはわかるはずなんだけどね？ あの可愛いマルシファーが私を無視するようになるなんて……時の流れは残酷だね、私のガラスの心が砕け散ったよ。と、言うわけでデオさん。傷心の私を助けると思って苛めてくれないかな？ 今なら私の処女がおまけでついてくるよ？ お買い得だとは思わないかい？』

「……………」

とりあえず、両手を後ろに縛り上げて転ばせてから背中を踏みつけてやった。最近是我的術式構築の先生もしてくれているし、このくらいのはしてやってもいいだろうと。

私の足の下でウルシフィはその顔を泥で汚し、肺に空気を取り込もうと必死になっているように見えたが……まあ、これはウルシフィの快感を得るためのスパイスの効かせ方だろう。

ぐりぐりと踏みにじるだけではなく、強弱や緩急もつけて踏み続ける。具体的には、わざと息を吸おうとしたところで体重をかけてみたりだな。

『は……すう……は……す、げほつ　あうう……』

「……私もやってみていいですか？」

「……まずは尻の辺りで感覚を掴んでからにしておくべきだな」

「はい、デイトさん……えい……わあ、なんだかプニプニしてる……」

ナギ殿も参加し、しばらくウルシフィを優しく苛める状態が続く。

『あ、かはう……うあ……　き、今日の、デイトさん……くう……
……やさし、ねえ……？　……うくう……』

背中を踏みつけられているためか、妙なところで言葉を途切れさせながらウルシフィは呟く。その言葉はしっとりとして湿っているかのようには粘度が高く、どろりと耳にいつまでも残っていた。

それを振り払うように私は更にウルシフィの背を踏みにじるが、ウルシフィはふるふると体を震わせて甘ったるい声をあげるのだった。

『っ……あ、はぐ……う……ああ……』

「……なんだか、ウルシフィが可愛らしく見えてきました」

「おや、ナギ殿もか？　確かにこれならペットを飼うのも良いかもしれんな」

『……え……ほんと、かい……？　嬉しいな、あはあ……』

「ナギ殿。そろそろ終わりにしよう」

『……ん、まあ、今回はかなり満足かな。久し振りに満たされた

よ？ 何て言ったってディオさんとナギ殿のペットになれそうだしね。嬉しいことだよ、少なくとも私にとってはね。けど、いつもだったら無視するのになんで今回は苛めてくれたのかわからないんだよね。どうしてかな？ もしかして、お礼だったりするのかな？ だったらディオさんのプレゼントは素晴らしいものだったと言わざるを得ないね、ありがとう御主人。』

「いつもの通りに呼べ。少なくとも、魔王をどうにかするまではペツトを飼う気はない」

「私も同じですから、いつも通りで」

そう言いながらディオさんはウルシフィの背中から足をどかし、ウルシフィの両手を縛り上げている縄を解いた。

私もウルシフィから足をどかして、ようやく真面目に湖を見る。

……うん。綺麗な水。魚とかもいっぱい居そう。

けれどその中心はすごく深くて、潜って行けるかどうかはわからない。

……どうすればいいんでしょうか？ 湖をどかしたりって言うのはまずできませんし、干上がせたら多分怒られますし……。

「……よし、割るか」

どうやらディオさんがなにか解決法方を……って、割る？ 何をですか？

ディオさんはいつもの表情の薄い顔のまま剣を抜き、いつもより少しだけ大振りに構える。

そして大きく息を吸い、短い呼気と一緒に剣を振りおろした。

するとディオさんが振り下ろした剣先から圧縮された風が迸り……

轟音と共に湖の水を叩き割った。

「……………」

『……………』

ぽかーん、と私とウルシファイがきれいに割れて湖底をさらしている湖を見ている隣で、デイオさんはひゅんひゅんと剣を振り、恐らく自分の予想以上だった威力に首をかしげている。

…………… モーゼって、こんな風に海を割ったんでしょうか？

「…………… まあ、威力の調整の必要があるとわかったのはいいことかもしれないな」

「…………… そうですね」

もはやそれしか言えません。

『…………… おーい、マルシファー！』

少しの間呆然としていたウルシファイが、割れた湖に飛び込んでいった。多分だけれど、マルシファーと呼ばれていた水の精霊王を呼びにいったのだろう。

…………… それにしても、よくあれだけで湖を割って、しかもいまだに固定していられますね。あそこだけ気圧を上げてあるんでしょうか？ やっぱり魔術は奥が深いです。使えるようになってもよくわからないところがたくさんあります。

…………… まあ、そういうところがあるうがなかるうが、元の世界に戻る

までの繋ぎですし、なんでもいいんですけどね。

驚きすぎて逆に冷静になったナギの思考。

デイオさんが叩き割った湖の底に居た水の精霊王。なぜかウルシフイの声にも返答しなかった彼女は、呼び出しにいったウルシフイと一緒に現れた。

『……………もう食べりやれまへんよお……………えへへえ……………』

ただし、眠りながら。

水の精霊王ともあろうものが、こんな昼間から涎を垂らし、羽衣のような服を着崩してお腹を出したまま眠っているなんて……………。

『マルシファーだからね。仕方ないんじゃないかな？ 何て言ったらマルシファーだしね。でも、結構大声で呼び掛けたんだし、起きて来てもおかしくはないはずなんだけどね？ 全くもう、またお腹出しっぱなしで寝ちゃって。風邪引いても知らないよ？ 引くかどうか知らないけど、こういうのは様式美だし一応言っておくよ。』

ほら、起きなつてマルシファー、アリバっさんに言われたらどう？

異世界からの救世主と呼ばせたから力を貸してやれってさ。おー

い

『……………んう……………あと……………二年……………』

『待てないからね？ 二年って確かに私達にとっては五分くらいなものだけど、人間には結構長いからね？ そしてあんまりふざけたことばっかり言っているといくら私でも怒るよ？ おしりペンペンするよっ。』

『……………おしりペンペンはいやあ……………わかった、起きる……………』

……ウルシファイって、もしかして結構精霊王達の中ではお姉さんの存在だったりするんでしょうか？ カルシフェルはウルシファイに頭が上がらないようでしたし、水の精霊王は明らかに子供扱いされますし。

デイオさんも同じような印象を抱いたらしく、ウルシファイと水の精霊王の掛け合いを無言で見つめています。

『ほら、ちゃんと服着て。マルシファーは女の子だからちゃんとしないとダメだよ？ カルシフェルみたいに大雑把にやっていると威厳がなくなっちゃうからね。それに今日は初対面の人とお話するんだから、失礼の無いように敬語を使うんだよ？ 敬語っていつでもそれらしく聞こえればいいから、こうすれば丁寧なんじゃないかな？ 程度でいいから』

『う……はい、わかりました……』

……それって、その本人達の目の前で言っていることなんでしょうか？と云うか、なんでしょうこのそこはかかない、ダメな子、オーラは？

「……母さんが昔会った時には、この湖で釣りを始めて十五秒で釣り上げられるほどの、お馬鹿、だそうだよ」

「……ああ、そうですね。お馬鹿、なら仕方無いですね」

うん、こういう憎めない馬鹿な子は嫌いじゃないです。むしろかわいいとすら思いますね。

ウルシファイにかいがいしく世話を焼かれてようやくちゃんとした水の精霊王は、さっきまでの緩みきった雰囲気帳消しにするような

しつかりとした雰囲気自我介绍を始めた。

『初めまして、私がこの世界のすべての水を治める水の精霊王、マルシファーです。あなた方の事は先程ウルシフィから聞きました……が、眠くてよく聞いていなかったので自己紹介をお願いします』と、思ったらしつかりしてるのは最初だけで、最後はもう駄目だった。この世界の精霊王って、こんなに残念な性格をしているんですね。ウルシフィしかり、カルシフェルしかり。

「ディオだ。こっちの娘はナギ殿」

そんなことを考えていたら、ディオさんが私の事も含めて自己紹介をしてくれました。

『はい、ディオさんとナギ殿ですね？』

「なんでディオさんはディオ‘さん’なのに、私はナギ‘殿’で固定なんですか？ ウルシフィもそうですしカルシフェルも……」

すると水の精霊王はにっこりと笑って言いました。

『その方が何となく収まりがいいような気がするからです。他意はありません』

……あ、そうですか。

しばらく私とナギ殿、そしてウルシフィはこの湖の周辺で生活する事になった。理由は当然、ナギ殿と水の精霊王の契約の際の口付けの回避のためだ。

……そう思っていたのだが、ナギ殿が湖から汲んだ水を飲んだ後になつてすぐ、水の精霊王から契約完了と言つメッセージが届いた。

……確かに、水の精霊王はこの世界のすべての水と繋がっているのだから、水を飲めばキスをしたも同然だな。むしろそれ以上かもしれない。それでもしばらく私達はこの場所で過ごすつもりでいた。なぜなら、ナギ殿はこの世界に来てからずっと気を張っていただろうから、ここで少し休憩を入れようと言つ話になつたからだ。

「……ふう……いい景色ですね……」

「……ふむ。私としては、母さんたちと一緒に住んでいた島の景色の方が好きだな」

「……なら、魔王を殺した後にでも、見に行つていいですか？」

「その時になつたなら、案内は任せろ」

くすくすと笑うナギ殿に、私も軽く笑顔を返す。その時が楽しみだ。

「……これで、死ねない理由が増えましたね？」

「……元々死ぬ気は欠片も無かつたがな」

ひゆう、と、私とナギ殿に湖からのひんやりとした涼風が吹き付ける。ナギ殿の髪が私の方に流され、私は反射的にナギ殿の髪を優しく掴み取る。

「あ……」

ナギ殿は少し恥ずかしそうにしていたが、私の手から髪を奪い返そ

うとはせず、私の好きなようにさせていた。

どこかのラブコメみたいなことを無自覚でやっているディオとナギの休暇。

『うん、仲が良いのは良いことだと思うよ？ ちょっと寂しかったりもするけれど、私は空気を読めないわけではないからね。むしろいつもは読んだ上でぶち壊している私だけれど、流石に今のディオさんとナギ殿の間に流れてる空気を壊したいとは思ってないし、思わないからね。だって、二人は私の大切な御主人様だからね。ペットはペットらしく、引くところでは引かないと。ちゃんと愛されるとは思ってるし、問題ないよ』

『……ウルシフィ？ 泣いてますよ？』

『……うるさいよ、マルシファー』

六十万アクセス記念外伝

これは昔々の話。まだまだナイアが幼くて、あんまり物事を深く考えなかった頃の話。

必要はないけど何となく眠かったから眠って、起きてみたら目の前にシヨゴスさんが座っていた。

「てけり・り？」

「……こんなところでなにやってるんですかシヨゴスさん」

「てけり。どうぞ私の事はシヨゴスと呼び捨ててくださいませ」

くりっ？ と首をかしげたシヨゴスさんが可愛いのは知ってますから、何でここに居るのか早く教えてください。

そう思っていると、シヨゴスさんはなにやら手紙を出して、ボクに渡してきた。一体なんなんだろうネー？

開けてみると、そこには先生の文字でこう書かれていた。

『シヨゴスがどうしてもお前に紅茶を振る舞いたいと言って聞かないから、悪いが付き合ってやってくれ。嫌なら嫌と言えば良いが、シヨゴスの涙目は高威力だから気を付けろ』

……シヨゴスさんをもう一度見てみると、いつものクラシカルなメイド服を着て、カチューシャをつけたままにつこりと笑っていた。

……はあ。

……まあ、とにかく。

「寝起きに一杯、紅茶を貰えるかナー？」

「てけり。お望みのままに」

につこりと笑ったまま、シヨゴスさんはボクに紅茶の入ったカップを手渡してくれた。

……ん。美味しいネー。

「てけり。ありがとうございます」

学校は無いので、のんびりできる。シヨゴスさんに淹れてもらった紅茶を飲みながら、何となく一息ついた。

「シヨゴスさん。なにかお話しなイー？」

「てけり。なんなりと」

シヨゴスさんはそう言って、ボクの斜め後ろから正面に移動する。

「……シヨゴスさん。座ってヨー」

「……てけり。それでは、失礼いたします」

昔は何を言っても座ろうとしなかったけれど、ボクが先生のところに行く度にそれを要求していたら、なんとか座ってくれるようになった。

シヨゴスさんは奉仕種族で、奉仕種族が主や主の招いた客人と同じところに座るのは許されないと良く言っていたけれど、ボクは結構わがままなんだヨー？

「最近の先生はどウー？ やっぱり時間に囚われない悠々自適な生活をしてるノー？」

「てけり。その通りです。あのお方は学校のある日と無い日の差が激しすぎるのです」

「まあ、先生だってそんなことはあるサー。生きてるんだしネー」

そう言いながら紅茶を飲む。形だけシヨゴスの前にも置いてあるが、シヨゴスはそれには一切手をつけようとはしない。これも奉仕種族の誇りの一つなんだとか。大変だネー？

それからボクは聞き役に回り、シヨゴスさんからのちよつとした日常の不満やその他のことを色々聞いていた。

ただ、先生の愚痴を言うときには必ずと言っていいほどシヨゴスさんの口調は柔らかくなる。

……やっぱり、シヨゴスさんは先生のこと大好きなんだネー。見ててわかるヨー。

「……ふふふフー。とりあえず、先生とシヨゴスさんは仲が良いって事はわかったヨー。色々言いながら嬉しそうにしてたしネー」

「……てけりり？ 嬉しそう……でしたか？」

シヨゴスさんは自分がさっきまでどんな顔をしたのかわかってないみたいだ。すっごく楽しそうな、嬉しそうな顔をしてたヨー。

不思議そうな顔をしながら自分のほつぺを引っ張っているシヨゴスさんにはそれを言わずに、ただ可愛いシヨゴスさんの仕草を見ていた。

「……そうそう、紅茶のおかわりをくれないかナー？」
「てけり。どうぞ」

こぼぽぼ……と小さな音をたてて、真っ赤な色をした液体がボクの持つカップに注がれた。

すぐには飲まずに香りを楽しむ。シヨゴスさんはやっぱり紅茶を淹れるのが抜群にうまい。いい色が出てるし、香りも味もボクが淹れたそれよりずっといい。

……葉の差についてはこの際無視する。どうせおんなじ葉っぱでも勝てる気しないしネー。

「シー、やっぱり美味しいナー」
「てけり。感謝の極み」

こうしてボクとシヨゴスさんは、ゆっくりのんびりと話をしながら紅茶を飲んでいった。

水の精霊王との契約を終わらせたので、ようやく最後の精霊王、土の精霊王の居る所に移動します。

なんと今度は大陸を丸々ひとつと三割くらいをまたがなければならぬので、少し大変です。

……とは言うものの、空を飛べるようになってからは移動はそれほど大変ではなくなりましたが。

『……あ、そう言えば、このまま飛んできるとドラゴンが支配している山の空域に入るけど、大丈夫？ ドラゴン結構強いよ？ 数も居るしね』

「ディオさんに勝てるドラゴンが居ます？」

『……可能性が一番高い相手でも、十五桁くらいかな？』

小数点以下で0以外の数が初めて出てくるのが』

「……ディオさん。人外の域に入りましたね。おめでとうございます」

「やかましい。……ああ、どうやらきたようだぞ。下級のワイバーンばかりのようだぞ」

下を見てみると、確かにドラゴンが群れでやって来ています。

……魔術で数を減らしたりできませんかね？

ちよつと魔力を込めて、威力を下げた氷の魔術を使う。狙いは柔らかそうな翼膜。これを貫いて穴を開ければ、多分落下はしないにしろ上昇は難しくなると思います。

「【水よ！風よ！集いて固まり、撃ち貫け】っ！」

そうして撃ち出された氷の弾丸は狙い通りに五十メートルほど離れた所を飛んでいたワイバーンの翼膜を貫き、破裂して翼膜どころか翼をまるごと凍結させた。

……え？　なんで？

私が呆然としている間にも下ではワイバーンの翼が砕け、飛ぶ方法を失ったワイバーンが地面に叩きつけられるように落ちていった。

「……ふむ。なかなか威力の高い魔術だな？　特に当たったところで破裂させて、効果範囲の拡大を狙っている所が良い」

「……偶然です。狙ってませんでした」

ディオさんの誉め言葉に、正直に返す。今回使った魔術はただの組み合わせだけけれど、使ったことはないし、そもそも効くかどうかすらわかっていなかった。

「なら、その偶然を毎回出せるようにしなければな」

ディオさんは私にそう言って、いつもより少しだけ大きく笑った。

ドラゴンを落としながら空を飛んでいると、ようやく大陸の終わりに差し掛かった。急げば日が沈まないうちに海を渡りきることができるとは思うけど、嵐や魔物の群れに襲われたりしたら間に合わなくなるかもしれないので、少し早いけれど今日は岬の上で一泊することになった。

……地上には盗賊団のアジトのようなものがありました。偶然雷

が集中して落ちてきたせいでそこは焦土になっています。空は晴れているのに、不思議なこともあったものですね。

『偶然って怖いね？　ちなみに私は空気を圧縮して雷みたいな物を作り、自由自在に落とすことができるよ？　数はまあ、二十万くらいかな？　やったのかった？　さあ、どうかな？』

「燃えるものに雷が落ちれば当然燃え出すんだが、地層のなかには地層そのものが燃える泥炭層というものがあるそうだ。錬金の魔法で試しに作ることもできるのだが、もしそこに雷が落ちたら地下だろうが関係なく燃えるな。……私は知らんぞ？」

「もし、そんな状態で地中から可燃性のガスが出ていたら大変ですね。人が逃げる間もなく吹き飛んじやいますよ。もしくは酸欠ですか？　火属性の魔術にガスを出す魔術はありますけど、どこにいくかは‘風まかせ’なんですよね」

『そうなんだ？　なにか嫌な予感がしたから空気を移動させたけど、どこにやったかなんて覚えてないよ？』

そうですね、覚えてませんよね？

そう、いくら盗賊たちが私を下卑た目で見つめてくるところかディオさんを殺して私を拐って犯して奴隷として売り払うなんて話をしていたからって、私達がそんなことをするわけないですよ。現に全く覚えがありませんし、覚えておく価値もありません。

……さて、と。今日のご飯は久し振りに海のお魚ですね。寄生虫や病気が怖いのでお刺身では食べられませんけど、それでも嬉しいいです。

「解毒や寄生虫を魚から取り除く方法もあるぞ？　水属性の魔術でな」

「ええっ!? そうだったんですか!？」

そんなあ……それじゃあ今までお刺身を我慢してきたのは無駄だったってことですかあ……? ?

……すぐくシヨックです。

怖い。それが俺達が考えている共通の事だった。

始めはただの世間知らずそうな娘とその護衛の男だとばかり思っていたのだが、俺達の言葉を聞いて、娘の方の雰囲気豹変した。

ざわり、と髪の毛を逆立たせたその娘は、いきなり剣を抜いて近くにいた俺達の仲間を切り捨てた。

胴体をまっぴたつにされたそいつは、何が起こったのかわからないと言う風に何度も目をしばたかせ、叫ぼうとしたが、どうやらまっぴたつにされた胴体の下の方に肺の一部があつたようで、息を吸うのも吐くのも失敗していた。

「は? 巫山戯た事を言っちゃいけませんよこの社会の屑。あなたたち風情がデイオさんを殺す? 私にすら勝てないのに? 夢物語もいい加減にしなさい妄言吐くのもやめなさい生命活動を辞めなさい動くな騒ぐな獣未満。理解しなくていいですよしてほしくもありませんし理解させる暇も与えませんがせよとも思いませんし殺すことは確定です。こういふときは何て言っただけ? ……そうそう、思い出しました。豚のような悲鳴をあげる、元々豚みたいな声してますからわざわざ言わなくても良いような気はしますけど、こういふのはデイオさん曰く様式美だそうですし、一応言

っておくことにしますね？　あなたたちみたいな単細胞生物未満には過ぎた手向けですけど」

ぺらぺらとその娘はよく回る舌でひたすら俺達を罵倒しながら切り刻み続けている。護衛だと思っていた方の男は、凄まじく凄惨な笑みを浮かべたまま何か魔術の詠唱をしているようだった。

俺達はひたすら逃げた。ばらばらの方向に駆け出し、自分だけは逃げられるようにと走った。

だが、アジトに戻ってみれば俺達の班員以外の奴等は無傷のままここに居る。これなら、あの娘と男が追ってきていても返り討ちにして、うまくすれば捕らえることもできるだろう。

その時の味見の事を考えてにやにやと笑ってしまいがそれより先に頭に報告に

盗賊、バントルムの最後の思考。

大陸と大陸の間にある海を渡り、土の精霊王の居る小島までやって来た。

そしてそこにいた人（？）は

「やれやれ、年寄りにこの作業は辛いのお……む？ ウルシフィカ！ 久しいの」

なんだかすつごく普通なお爺ちゃんでした。

……意外です。精霊王って言うのはキワモノの集まりだとばかり思っていました。

『そんなに大きくは外れてない気がするけど、それは偏見って言うものだよ？ 例えばこの世界でナギ殿が初めに会った人間はディオさんだけど、他の人間達はディオさんみたいにナギ殿の事を考えてくれたかな？ そういう風におんなじ人間でも……ディオさんが人間かどうかという議論は横に置いておくとして、それでも違いはあるんだから、私達精霊王にだって違いがあってもおかしくないと思うんだけどね』

はい、その通りですね。違って当たり前なんですから、精霊王に良識的な方が居たっておかしくはないですよね。

……なんだかすつごく府におちませんけど。

『……さて、お嬢ちゃんは確か、ナギ殿だったの？ 儂はこの世界

の大地を司る、土の精霊王じゃ。名をアルシフスと言う。短い間が長くなるかはナギ殿次第じゃが、よろしく頼むぞ?」

「あ、はい、よろしく願います」

とつても普通な自己紹介を終わらせて、アルシフスさんは優しい笑顔を浮かべた。

……私の名前が本当にナギ殿で固定なのはもう良いとして………普通通って、良いですね……。

じーん、と湧き上がってくる感動を抑えていると、自分がいたあの世界はどれだけ普通でどれだけ幸せか、本当によくわかる。

『……で、だ。アルシフス。アルシフス相手にどれだけ言葉を重ねても駄目なのを承知で聞くんだけれど……力を貸してくれないかな?』

『構わんぞ? このお嬢ちゃんは気に入ったしな』

そんなあっさり!?

「……まあ、精霊王は精霊を統べる者にして世界の欠片。なんとなくで行動したとしても、大抵の場合はそれを自分に都合のいい方向に持っていくことができる。更に言ってしまうえばアルシフスとやらは大地の断片にして支配者。私達が永遠に飛び続けることができたとしても、いつか捕まるさ」

『そういう言い方をするんだったら私とマルシファーもそうなんだけどね。何て言ったら世界に存在する大気と水の支配者なんだから。誉めてくれてもいいよ? と言うか苛めて?』

「後でな」

ディオさんとウルシフィは変わりませんね……。神経が実は一センチくらいあるんじゃないですか? もちろん太さの直径がですけど。

『かはははは！仲が良いのう！よし、今日は泊まって行け！作りたての野菜を食わせてやるう！』

そしてこの掛け合いを『仲が良い』で済ませてしまおうアルシフスさんも、やっぱりちょっとおかしいんですね。

でも、野菜はありがたくいただきます。

フルカネルリだ。ディオとナギはようやく魔王の住む大陸まで歩を進めたな。明日になれば夕食と朝食に出された野菜を仲介して契約が成されるだろう。

そうすれば魔王の張る結界を破り、大陸の中に侵入できるだろうが……そこからは大変だぞ？

結界を破っても魔王の兵はまだ居る。地力の高さも相まって、数も練度もそれなり以上。その上軍としてきつちりと統制がとれている。

それにその場は魔王軍のホームグラウンド。どんな罠が仕掛けてあり、どんな陣を張るかは相手の思いがままだ。

……さて、ディオとナギは、いったいどのようなようにして魔王の居る場まで辿り着き、いかにして魔王の息の音を止めるのか。その事には多少興味がある。

……ただ、恐らく正面突破とゲリラ戦の繰り返しだろうな。戦力差が大きすぎるし、魔王との戦いの最中に横槍を入れられてはたまら

ないだろう。

……ちなみに私がやるとしたら、暗殺するか大陸ごと、最悪星ごと消し飛ばすと言う手を取る。できる限り被害は抑えるが、それも言っていない状況も無きにしもあらず、と言うわけだ。

《いや、たぶん無いと思うヨー？ だってあの駄目神が作った魔法生命体だシー、一番強くてもあの時フルカネルリに倒された駄目神には届かないヨー？》

それでも自暴自棄になつて私を殺せば後は何も要らないと考えて存在全てをつぎ込んだ魔法を打ち込んでくれば、私に届くだろう？可能性があるのだから、少しは警戒しておかなければ。

『……ふふふふ…… ……実は、心配なんてしてないくせにい

それはそうだ。今この瞬間にも太陽が爆発する可能性はあるし、大体の学者はそれを知っているだろうが……それでも心配などとしてはいないだろう？ 私にとってはその程度の可能性だ。

……さて。ディオとナギが魔王を殺したのなら、一度この場所に招待するでしょうか。風の精霊王も、報告しないとという契約をしてからなら呼んでもいいな。

既にナギを送り返す術式は完成している。人体実験も済ませた。向こうにいきなり現れた者は警察に捕まっているが、それなりどころではなく馴染んでいる。日本の警察は優しいな？

それにナギの家族も、いまだにナギの事を心配しているしな。半年と少しだけとはいえ行方がわからなかったのだから、色々と聞かれるだろうな。

……ついでに、向こうの世界に魔力があることは確認した。この世界で作られた存在がこの世界の外に出ると、魔力の供給が無くなり体が崩壊を始めるのだが、これならなんとかなる。

……さて、実験は終了した。先に送ったあの男も、なんとか自分の存在を保っているし、生きています。

言語も通じているし、今のところ妙な病気にかかることもない。近くにいた者達と仲良くなり、彼らの中継して魔力を少しずつ取り込んでいるため消滅の危機もない。ディオの場合はナギが居るから余計にな。

ならば今度は実行するだけだ。それを成功させるために、準備だけは完璧を目指さなければ。

《……お手伝いはいらなみだネー？》

ああ。これは私が一人でやろう。私の息子の新たな門出だ。私がやらずして誰がやる。

……嫁も一緒に連れていく事になりそうだがな。

帰る術式を駄目神が用意してくれないなら自分で作れば良いじゃない、を実行して成功しちゃったフルカネルリ。

空を飛んで、魔法で爆撃。それを何度も繰り返す。

アルシフスとの契約を終わらせて、魔王の住む土の大陸の周囲に張られた結界を破壊してからの行動はそればかり。

魔力が切れそうになったら隠れて休み、回復したらまた行く。

私が地上への攻撃役で、ディオさんが対空攻撃や飛んで来る魔物を撃墜する役。ウルシフィは逃走と隠れる役。役割分担は大切です。

……ところで、今までの大陸はそこにいた精霊王の属性と大陸にいた名前が一致していなかったのに、何で土の大陸だけ一致しているんでしょうか？

『ああ、ある時魔王は外の大陸に進行したんだけど、その時に手酷くやられたみたいでね。それから情報を重視していた結果、自分達の大陸にアルシフスが居るってことに気が付いて、その時に色々あつて名前を決めたらしいよ？ 私はここの中の事は結界のお陰で話し半分にしか聞けなかつたけど、アルシフスは結界が無い地中で繋がってるからわかつたみたい』

へえ、そうなんですか？

……あれ？ つてことは……別に結界を破らなくつても穴を掘つていけば普通に入れたんじゃない？

『 あ 』

……まあ、やっちゃったものは仕方ないですけどね。力もつきま
したし、経験も積めたと言うことにしておきましょう。
……お仕置きは、無しです。

『ある意味だとそれが私に対する一番のお仕置きだよな？ お仕置
きしてほしい私にお仕置きしないなんて凄く酷いお仕置きだよ？
まあ、ナギ殿がそう言うんだったらお仕置き無しでもある意味ご褒
美だし、構わないと言えば構わないんだけどさ』

だったらいいじゃないですか。お仕置きしないことがお仕置きです。
はい、この話はおしまい。

「ここの神様……アリバシーヤでしたっけ？ 何を考えて魔族とい
う存在を作ったんでしょうか？ 素直に人間だけにしてあげばこん
な苦勞をしなくて済んだのに」
「なにも考えていなかったのだろう。夢見る少年と同じような思考
回路をしているのではないか？」

つまりそれって廚二……いえ。何でもないですよ？

……そっか、神様にもそういう時代はあるんだなあ……。

……黒歴史が今自分の首を絞めてきてますけど。それをやめさせる
ために関係のない他人の力を借りちゃってますけど。自分の黒歴史
の後始末くらい自分でやってほしいです。全くもう、情けない神様
ですね。

「無情の神だ。情け無いという意味で」

「駄目神なんですね。文字通り」

『こら、いくら本当のことでアリバっさんが情けなくて昔フルリさんにぼこぼこにされて力も信仰も奪い取られてお情けで信仰だけ返してもらったはいいいけれどその時にはもう既にフルリさんの住んでいるところで新しい神様が生まれていて信仰自体の量が減っちゃって今ではもうフルリさんどころかフルリさんの家の近くに棲んでいるとっても強い獣にすら勝てない程度の力しか持てなくなっていると
は言え、それは言い過ぎだと思っよ？』

ウルシフィには言われたくないです。欠片も容赦が………少しはありましたね。罵倒ではなく事実を言っているだけなので。

……けれど、やっぱり少し気分が悪いですね。敵対してるとはいえ、意思があって言葉が通じる相手を殺すなんて。今さらといえは今さらなんですけど。

グライダーは使わずに、空を飛びながら地上を攻撃する。翼がある者は私達に向かって飛んできたり、魔術や魔法を使ってきたりするが、私が全て撃ち落とす。

悪いとは思っが、加減はしない。私達も死にたくは無いのでな。

「【炎よ！風よ！集いて逆巻き、焼き払え】！」

「……ふむ、こんなものか。【凍てつく風】」

ナギ殿は大威力・広範囲の魔術で地上にいる軍を焼き、私は氷と風

を混ぜた魔法で翼を持つ魔族の翼を凍らせて地に落とす。

……もしかしたら、この魔族達には私達こそが悪魔に見えているかもしれないな。特に、戦う力を持たない者には。

まあ、私達を恨まず、原因を作ったアリバシーヤと救世主としてナギ殿を呼び出したランドリートを恨んでくれ。

快進撃は続き、軍も戦艦も壊滅状態。後は魔王の城を残すだけとなった。

「……ディオさん。この戦いが終わったら、ディオさんに伝えたいことがあります」

「……確か、そういう発言のことを死亡フラグ等と言うのではなかったか？」

母さんが昔そう言っていたのを聞いたことがある。

あと、大技を当てた後に、やったか？ は相手の生存フラグ、そして苦闘フラグだそうだ。

なんの事かはわからなかったが、使わない方がいいだろう。

「……ディオさんのそういう知識は、いったいどこから来るんですか？」

ナギ殿が、抜いた長剣に風と炎を圧縮して作った光を纏わせながら苦笑する。

「わかっているだろうに。母さんから」

私も同じように、風と炎を圧縮して太陽のような光を作り上げる。

「……あはは。やっぱりですか。流石フルリさんですね」

「ああ。母さんだからな。仕方がない」

『フルリさんだもんね。まったく、本当に二人とも理不尽に成長したね？ 私も全力で世界中の空気をこの場所に集めてサポートしてるから二人のことは言えないんだけど。じゃあ、頑張ってるね、御主人様』

……やれやれ。涙をこらえながら言われてしまっただけでは、頑張るしかないだろうよ。

「……頑張りましょう。ディオさん」

「……そうだな。ナギ殿」

まずは景気付けに、魔王の城にこの二発を撃ち込んでからだかな。

「【風よ！風よ！風よ！炎よ！炎よ！炎よ！炎よ！集いて、消し飛ばせ！】
つー！」

「……よし、できた。【炎天】！」

私達の作った熱量の塊は、お互いに解け合い絡み合いながら更に熱量を上げ、魔王の城に到達して、爆発を起こした。

さあ、戦闘開始だ！

ディオ、ナギ、人間失格コンビの魔界蹂躞。

『おや？　なんだかそういう名前でゲームでも出したら売れたりしないかな？　ただひたすらに力を求めて世界中を旅しながら邪魔するものを力尽くで蹂躪していく。ちよつとミスると大変なことになるかもだけど、最後はずつと一緒に戦い続けたコンピと結ばれるハッピーエンド、ペット付き。……………イける！』

魔王の城に突入しようと思ったのだが、私とナギ殿の起こした爆発で跡形もなくなっていた。当然のごとく、魔王の姿も死体もない。

「……いや待て、相手は魔王だぞ？ 確実に私よりは強いだろうし、最底でも母さんほどはなくともプロト姉さん程度の実力はあると考えていたのだが……。……隠れて私達の隙を伺っているのか……？」

『……いや、あのね。なんか消し飛んだみたいだよ？ 私はそこに空気があればそのことがわかるから言うんだけど、いきなり城の中の空気が薄くなって昏倒したところに太陽顔負けの炎と爆発。魔力で障壁を張ろうにも酸欠で頭が回らないから間に合わなかったみたいで、もう灰すら残ってないよ？』

「……なんだ、母さんですらただの研究馬鹿と名乗る中で魔王等と高尚な名を名乗っていたのだから、もっと強いと思っていたのだが……。名前だけだったか。」

「……えっと……。終わり……。ですか？」

「……そのようだ」

「……はあ……。なんだか拍子抜けです」

私もだ、という言葉は飲み込むことにして、焼け野原を通り越して熔岩となっている平野を上空から見下ろす。

母さんだったら、あの熱量も爆発も、その前の酸欠すらも無視して跳ね返しそうだ。そう思うと、なぜか笑いが込み上げてくる。

「ナギ殿」

「はい？」

きよとんと私を見つめているナギ殿に、笑いかける。

「約束だ。私の育った大陸を案内しよう」

ナギ殿の手をとって、三人で空を飛ぶ。目指すは、私の育った母さんの国。結晶の樹が並ぶ森と、そこに棲む優しい結晶の獣達が守る島。

「……結構、時間がかかるんですね」

「それはそうだろう。他の四つの大陸と違い、これから私達が行く大陸は母さんが作った大陸だ。他の大陸とはかなり離れているし、結界まで張ってあるのだぞ？ それでも土の大陸からだから、まだ近い方だ。……見えてきたぞ。あれが母さんの大陸を守護し続けてきた大結界。通称、見守の守護結界だ」

「……わあ……」

ナギ殿が小さく歓声を上げる。まあ、それも理解できない事は無い。普通に見ようとしても何も見えないその空域には、魔力によって常に変動し続ける術式がびっしりと描かれている。そして私もナギ殿も、魔力が存在しているところと存在していないところを見分けることができるのだから。

久し振りに見た大結界は、まさに芸術。母さんらしく実用性のみを追求したその術式は、解析するよりも早くその姿を変えてしまい、外側からも内側からも破壊を困難にしている。

様々な紋様を描き、常に自己修復と進化を繰り返している大結界の全ては母さんに繋がり、外側のことを内側にいる母さんに伝えていと聞いた。

私は思いきり息を吸い込み、その動きを見たナギ殿は慌てて耳を塞いだ。

「母さーん！ーん！！ただいまーん！ーん！！！！」

フルカネルリだ。どうやらディオが嫁とペットを連れて戻ってきたらしい。息子の成長ぶりには感無量だ。

《でも泣かないんだよねー。なぜならそれがフルカネルリだからー！》

そうかもしれないな。嬉しいときには笑うさ。嬉しくないときには大概無表情だが。

……さて、緑翼にディオを迎えにいかせるかな。私は久し振りに手料理でも作って待つとしよう。

……ナギのために日本料理を作っておくか。私の研究生活のためにも、息子の嫁には優しくしてやらねば。

「ハヴィラック！プロト！ディオが嫁とペットを連れて帰ってきたぞー！」

ドタタタ バスン！パリン！ハヴィラック！？ 何やってるの！？
も、申し訳ありませんお嬢様 もういいから！早くお母さんのと
ころに行くよ！ は、はい！

……何をやっているんだか。

《ブラコンお姉さんがいきなりそういつことを言われたらびっくり
すると思うヨー？》

『……心臓があ……停まっちゃつかもねえ……ふふふふ……』

無いと思うがな。

ディオオの帰還& a m p・嫁参上に、荒れる二人と荒れない者達。

しばらく空中で待機していると、いきなり目の前に大きな緑色のドラゴンが出てきた。どこから出てきたのかは知らないけど、戦う気なら……

『おかえりなさいませ、御子息殿。いらっしやいませ、お客人。私、この大陸にて風を司る結晶の竜、緑翼と申します。この度は主の命により、お三方のお迎えに参上つかまつりました』

……流石フルリさん。まさか喋るドラゴンをただの迎えに寄越すなんて……私の想像の遥か上をいつています。

……まあこれも、

「『母さん（フルリさん）だし、仕方無い』」

んでしょうね。きっと。

……いつまでも待たせるわけにはいきませんし、早く行きましようか。

私達の目の前で、どうやっているのか羽ばたきすらせずに宙に止まっている緑色のドラゴンの背中に乗ってみる。

「……ナギ殿……意外と命知らずだな……」

「へ？」

何ででしょうか？

「……ナギ殿が今またがっているそのワイバーンだが……前に言

った、大陸中どこに逃げても正確に雷を落としてくる化物だ」

「……………へ？」

……………マジデスカ？

恐る恐るとエメラルドを鱗として張り付けたようなドラゴンを見てみると、無言で肯定された。表情はわかりませんが、雰囲気と視線で少しはわかります。

「まあ、今回は母さんに言われて来たのだから、乗ることが前提だろうがな。ほらナギ殿、呆けてないでもう少し前に詰めてくれ」

「怒りますよ？ 本気で怒りますよ？ 私いま本気で死を覚悟したんですよ？ 全力で怒りますよ？ と言うかもうキレますよ？ そして最後に泣きますよ？ 年齢とか関係なしに幼子のように泣きますよ？」

「……………そこまでか。すまん」

そう言つてディオさんは私の頭を撫でる。それだけで機嫌が直つてしまう私は、きつともう手遅れなんだろう。

けれどそれが少しだけ悔しくて、私はディオさんの胸に後頭部を当てながら無言を貫く。

……………とは言つても、ディオさんには機嫌が直つたとバレているのかもしれないけれど。

『……………出発してもよろしいですか？』

『良いんじゃないかな？ でもね？ ここは空気を読んでもう少し見守つてあげるか、せめて何も言わずにゆっくりと運んでいってあげるのが正解だと思うよ？ あとついでに、私は入っていいのかな？ 私としては本体は入れなくつてもいいけど分霊くらいは入れたいんだよね。結界の外には情報を出さないからさ。駄目かな？』

『……外に出したら、この世界が消滅する事を理解した上で、本体の通過を許可されております』

ウルシフィと緑のドラゴンの話し合いから、この場には私とディオさんだけじゃないことを思い出した。

と言うか、ウルシフィは今までも居たんだった。私達がこうやっているといつの間にか影が薄くなるから忘れてました。

……ああ、もう。穴があつたら入って埋まりたいです。

家の近くの家庭農園（広い。具体的にはランドリートの王宮の総面積よりも広い）の端に降りる。ここまでの景色を見てナギ殿の目がきらきらと輝いている。

……む、あそこにいるのは……プロト姉さんか。

近付くと、私の方を向くことなくいきなり話しかけてきた。

「お帰り、ディオ。母さんからディオが帰ってくるって聞いてから、ハヴィラックが焦れて焦れて仕方がないから顔見せに行つてあげて？」

「ただいま、プロト姉さん。……ハヴィ姉さんは相変わらず？」

「そうだね。相変わらず……と言うか、少しレベルアップしてるかな。私じゃあ止められないから、たっぷりと愛でられてくるといい」

……私の頬はひくついていないだろうか？ ハヴィ姉さんの過保護にはあれ以上があつたとは……信じたくない新事実だ。

けれども母さんに呼ばれているので行かないという選択肢がとれる

はずもなく、私はナギ殿とウルシフィを連れて母さんの待っている
だろう実家に歩を進めるのだった。

「ただむぐつ！」

「お帰りディオ。怪我は無いかい？ 風邪は引いてないね？ 私が
誰だか解るよな？」

「……ハヴィ姉さん。いきなり抱き締められては呼吸ができません
「ああすまない。どうもディオの事が心配だね」

ああ、やはりこの美しく有能だが残念な姉は変わっていないかったか。
プロト姉さんの言った通りにむしろレベルアップしている。

「さあ、お母さんが待っているよ。早く……おや？」

どうやらハヴィ姉さんは今の今までナギ殿に気が付いていなかった
ようで、ようやくナギ殿に視線を向けた。

「……ああ、成程。貴女がディオの……いらっしやいませ、お客人
歓迎いたしますよ……そちらの精霊殿も……」

ハヴィ姉さんは恐らく……恐らく！笑顔を向けているつもりなのだ
ろう。だがその目は完全に笑っておらず、どう好意的に見ても恐怖
の感情しか湧き上がってこない。

……そういえば母さんが昔話してくれたな。笑顔とは元々攻撃的な
ものであり、大元は獣が獲物に向かって牙を剥く行為であったと。
その時は半信半疑だったが、直後に母さんが見せてくれた殺意混じ
りの笑顔に、それが本当のことだと理解した。

何せ無表情だったら耐えられた殺気が、強さは増していない筈なのだが笑顔になるにつれて強くなっていったような錯覚に陥ったのだから。

今のハヴィ姉さんの笑顔もそうだ。明らかに攻撃的なものがあり、歓迎している雰囲気ではない。

ナギ殿が私の背に隠れて震えているが、私にもハヴィ姉さんはどうにもできない。ハヴィ姉さんを力尽くで抑えられるのは

ガツンッ！！！

「ッ！？」

「……ハヴィラック。お前は何をしているんだ」

そう。母さん一人だけだ。

……見守の神は、どうなのだろうか？

《「……、無理を言わないでください」》

……無理であるらしい。

帰還早々理不尽に相對したディオとナギ。

フルリさんに案内されて来たのは……多分食卓。何で多分なのかと言つと、こんなに高級そうな食卓をただの食卓と言つていいのかどうかわからなかったからです。

「食卓で構わん、と言つより何でも構わん。本人がそこだとわかればそれでいい」

「あ、はい、わかりました」

……フルリさんつて、心が読めたりするんでしょうか？ デイオさんもやっていましたし、フルリさんができてもおかしくないと思いますけど……。

フルリさんを見つめてみる。視線が合った。

「……早く席に着くと良い。料理が冷めてしまつぞ」

「む？ 今日は母さんが作ったのか？ それは楽しみだ」

デイオさんはフルリさんの言葉を聞くと、すぐに自分用の椅子が置いてあるらしいところに座つてしまいました。

そして、私の方を見て自分の隣の席を指差します。ここに座れと言うことなんでしょうか……？

無色透明な結晶できている椅子に座つてみる。……意外と冷たくないんですね。元の世界で触つてみた水晶みたいにひんやりすると思つていたんですけど……。

それからすぐにさっきのハヴィラックと呼ばれていた人と、私達にフルリさんが待っていると教えてくれた人が食卓を囲むようにして座った。ハヴィラックさんは私のことを少し睨んでいたけれど、フルリさんにでこぴんされておとなしくなった。

……でこぴんの音が‘キュボツ!’で、当たったときの音が‘ドムツ!’だったと言うのは、少し恐ろしいですが。絶対あれすっごく痛いですよね？

「……揃ったな。では……いただきます」

「「「「いただきます」」」」

こうして、私にとっては凄く緊張する食事会が始まりました。

「……さて、ナギには質問があるのだが……欲しいか？」

そう言ってフルリさんが指差した先に居るのはディオさん。まあ確かに、ディオさんのことは好きですよ？ もし可能なら子供がほしいくらい。

「そうか。その辺りは別に構わんぞ。ディオにお願いして合意の上ならな」

……私って顔に出やすいんでしょうか？ ペたペたと頬を触ってみますが、特にいつもと違ってしている様子はありません。

「母さん。頼みがある」

「言ってみろ」

その間にディオさんがフルリさんに何かお願いをするようです。いったい何を

「ナギ殿を、元の世界に帰してやってほしい」

へ？

私の頭の中に雷が落ちたような衝撃が走りました。

だってディオさん、アリバシーヤに頼むしか方法はなく、しかも望み薄だつて言っていたじゃありませんか。私はそれを信じて、帰りたいと思いつつもこの世界に骨を埋める覚悟もしていたんですよ？

「……できるか？」

ディオさんは少し不安そうに言う。どうやらディオさんもあまりできるとは思っていないようだ。

確かに、いくらフルリさんが理不尽でも、術式も見ていない、どこから来たのかもわからない、いつ来てどれだけの時間この世界で暮らしていて、元の世界でどれくらい時間が過ぎていくかもわからない状態じゃあ、無理かもしれない。

しかし、やはりフルリさんは理不尽だった。

「構わんぞ。既にナギがいつ、どこの世界から来て、どの程度暮らしてきたかもわかっているのな。今すぐにでも帰還させる事もできる」

私の頭の中が、真っ白になった。

そのあと、何があったのかはよく覚えていない。前にもこんなことがあったよいな気がするけれど、多分そのとき以上に私は呆然としているはず。

気が付いたときには私はフルリさんにあてがわれた部屋で、布団に顔を押し付けて声を殺して泣いていた。

『……ナギ殿。どうしてナギ殿は泣いているんだい？ ナギ殿はあんなに帰りたいがっていたじゃないか』

このときばかりは流石のウルシフィも口数が少なくなっている。けれどその言葉には、いつも以上に優しさが込められているのがわかった。

「……だめ、なの」

『駄目？ 何がだい？』

「私……ディオさんがいないと、駄目なの……」

私がそう言うと、ウルシフィは優しく微笑んだまま私の頭を撫でてくれた。

『……そっか。ナギ殿は、ディオさんが大好きなんだね』

私は泣きながら、無言で頷いて肯定する。今声を出したら、きっとすぐくみっともない声になってしまうと思ったから。

『……でも、ナギ殿は帰りたいんだろっ？』

また頷く。涙と一緒にぼろぼろと、色々な我慢をしていた私が剥が

れ落ちていく。

『ナギ殿は、どうしたいんだい？ もとの世界に帰って、ディオさんに会えないまま暮らす？ それともこの世界に残って、ずっと帰りたいてって思いながら過ごす？』

ウルシフィの言葉に考え込む。

きっと私は、どっちを選んでも後悔しながら生きていくことになるんだろう。それはわかる。嫌でもわかる。

どちらかを選ばなければならぬ、と言ったこともわかっている。

でも、どっちを選んでも後悔するんなら……

「…………どっちも…………」

『……………』

「…………どっちも選ぶ。ディオさんと一緒に居たい。帰りたい。だから私は、どっちも選ぶ！」

ウルシフィは何も言わない。けれど私は目をそらさない。

しばらく見つめあっていると、ウルシフィが呆れたように溜め息をついた。

『……………だつてさ。どうするんだい？ デイオさん』

……………へ？

くるりと振り向くと同時に扉が開き、やはり呆れたような表情のディオさんが私を見ていた。

「ナギ殿。ナギ殿がそう言うのなら、私はナギ殿について行きたい

「……と思っているぞ？ 母さんにも許可をとってきたし、母さんも初めから私とナギ殿を同時にナギ殿の世界に行かせるつもりであったらしい」

「……………え……………ええ、と……………？」

『……………つまり、全員ナギ殿がどっちもって言う選択肢を選んで当然だと思っただ、ってことだよ』

……………*わざわざ*……………とウルシフィのことを見てみると、さっきまでの優しくそうな目はどこかに消えて、どちらかと言うといたずら好きそうな目が変わっていた。

『……………それじゃあ、私はこのへんで外に出てるよ……………じゅっくり……………くすくすくすくす……………』

この後の事は、秘密です。

ただ、全部が終わった後にウルシフィのことを二十ほど殴ってしまったいましたが、これくらいは許されますよね？

確かにデイオさんと結ばれ……………けふけふ、まあ、感謝していますが、あれだけからかわれたんですから。

フルカネルリだ。やれやれ、実に初々しいな。

『《そうだねー。かわいいよネー》

『……………ふふふふ……………』

ああ、可愛らしいな。驚いたときの顔がまた秀逸だ。

ディオはナギのことを好きだと自覚していなかったし、今回のことはちょうどいい発破になった。しばらくは時間を与えて、婚前旅行でもさせてやるとするか。

……ああ、だがその前にディオに向ここの常識や法を学ばせてやらなければな。

言語の方はナギと同じようにしてやればいいし心配していないが、そればかりはしっかりと学ばせても不安が残ってしまう。

なにしろ今までの常識とはかなり違う常識を教えられるのだから、かなり勝手が違ってくるだろうし……ああ、向こくに戸籍も作ってやらねばナギと正式に結婚もできん。

やれやれ、やることは山積みだな。ディオ自身がやらない社会的なことは、計二時間で終わらせるが。

《頑張つてネー！応援してるヨー！》

『……わたしはあ……手伝えないからねえ……？』

アフターサービスも万全、フルカネルリ運送（ナギとディオを送る的な意味で）。

フルカネルリだ。朝になり、ナギとディオの二人を見かけたのだが……。

「……ふむ。どうやら昨日はお楽しみだったようだな？」
「なばっ!?!」

おや、図星か。

「な、ななな、なー!?!」

あまりの驚愕と羞恥によつて言語中枢に何か不具合が出たのか、ナギは訳のわからない言葉を繰り返している。

……ふむ。これは……

「何でわかったか、か。とりあえず、本気で隠す気があるのなら私と会う前に風呂に入っておくべきだったな。性臭が酷いぞ？」
「ふえっ!?!? そ、そんなにですか!?!」

自覚は無しか。ここまで強ければ私もハヴィラックもプロトもわかると思っただがな。

「それと、首に虫刺されのような赤い痕がついているぞ? せめて隠したらどうだ?」

「あ、あわわわわっ!?!」

ナギは焦って首の痕を隠そうとするのだが、隠しきれていない。や

れやれ、鏡は部屋に一つは備え付けてあるのだから、気付いていてあえて見せつけているのだと思っていたのだが、どうやら違つらいな。

「ついでに言わせてもらおうと、声をあげすぎだ。この家は内部の防音などは全く考えられてはいないのでな。恐らくハヴィラックの部屋にもプロトの部屋にも聞こえていただろうよ」

「ッ！！！！」

ついにナギの顔が真っ赤になってしまった。本当にあれは大声だった。隠す気は欠片もないと思っていた最大の要因もこれだったのだが。

「最後に、この家で暮らせば普通が尻尾を巻いて逃げていくからな。普通でなければその程度はできるさ。今度から気を付けるんだな」

「……………はい……………」

それだけ言って、ナギは食卓に突っ伏してしまった。腰が痛いのか？ まったくディオの奴は。相手は初めてなのだから、加減してやれと言っておいただろうが。

「安心しろ。ディオのやつにはしっかりと責任を取らせてやるさ」

これを聞いたナギはまた赤くなり、ぷしゅと頭から煙を出してしまつた。

……………やれやれ。純情だなこの娘は。そう思いながら私は砂糖とクリームのたっぷり入ったコーヒーに口をつけた。

それから少しして、いまだに顔が赤いナギの隣にディオが座る。

「母さん。私は結婚することにしたよ」

「お前の人生だ。好きにしる」

相手は言われなくともわかるので聞かない。ディオがそこまで執着を見せたものは初めてだし、ナギの性格や性質も少しは理解しているつもりだ。

……まあ、私程度では一目見ただけでその人間を完全に理解できるわけではないが、それでもな。

《謙遜しすぎだと思っけドー？》

そうか？ 私としてはこのくらいの評価でいいと思っただが……
そうなのか。

まあ、ディオの結婚については向こうから言い出してくれたお陰でわざわざ発破をかける必要もなくなった。ナギがまた慌てているが、ディオはそれも可愛くて仕方がないらしい。

「よし、とりあえずお前達、旅行に行ってこい」

「よし、とりあえずお前達、旅行に行ってこい」

またいきなりフルリさんに言われた言葉に私たちは言葉をなく

「わかった。この大陸だけか？」

……訂正します。私は言葉をなくした。きっとディオさんはフルリさんのこういう発言に慣れてるから平気なんです。

「ああそつだ。少し気の早い新婚旅行のようなものだな。……私はその間に、ディオに知識を埋め込む術式の調整をしなければならぬいな」

し……新婚旅行……ですか……。つて、最後にすごいこと言いましたか？ディオさんに知識を埋め込むつて……。

フルリさんを見ると、どうも本気で言っているみたい。ディオさんもそれに反抗するそぶりは見せない。

……え、えつと……私が変なんでしょうか？

「とりあえず、こちらの常識はあつちでは通用しないのだろう？ならばその辺りを教えてやる必要があるだろう。幸い私は向こうが出身なのでな。多少おかしいかもしれんが教えてやれる」
「へー、そうなんですかってええ！？」

フルリさんも私と同じ世界の出身！？ 初耳ですよ！？

「言っていないからな。だが正確には同じではなく、とても良く似た世界の一つだ。私のいた世界には魔力などはなかったが、ナギの世界には魔力があることも確認している」

……フルリさんはどこまで私を驚かせれば気がすむんでしょうか？ 驚きすぎて心臓が止まっちゃいますよ？

……心臓が止まってもフルリさんなら難なく治してくれそうですけ

ど。

それと、今さらですけどナチュラルに私の考えを読むのをやめてください。本当に心臓に悪いんですから。

『ところで、私もナギ殿の世界に行くって事はできないのかい？

一応ディオさんとナギ殿のペットを自認している身としては、御主人様と一緒に場所に居たいんだけどね？　ちなみにこっちの世界は私の分霊を残していくし、こっちの世界から本体である私が消えれば残していった分霊が本体になってくれるから大丈夫だよ？　これでも一応風の精霊達の王なんて言う物も兼任してるからね。ちゃんと考えてあるさ。……駄目かな？』

ウルシフィがそんなことを言っているけれど、どうしましょうか？　私としてはウルシフィにはお世話になっていたと言うこともあるし、連れていっても良いとは思いますが……人（の形をしている何か）をペットにしているっていうのは、ちよつとどころじゃなくまずい気がしますし、フルリさんが送ってくれるか、術式は平気なのかといった問題があるんですが……。

『人の形をしたものをペットにしちゃいけないって言うんなら、私は猫型になるよ？　風は元々不定形、形をとった私だってちよつと気合いを入れれば外見くらいちゃちゃつとかえられるのさ。で、ディオさんは猫がいい？　犬がいい？　私はどっちにだってなれるよ？　もちろんそれ以外にだってなれるし、人型に戻るのも自由自在だから安心してね？　だけどディオさんやナギ殿、フルリさんになるのだけはやらないよ？　たぶん困ると思うしね』

「……まあ、ディオやナギが良いと言うのなら送ってやるが……」

あ、殆どの問題が消えましたね。フルリさんも送ってくれる気がするみたいですし、動物になれるんだったらペットとして飼うのにも問題はありませぬ。

……後はディオさんが良いと言ってくれるかどうかの問題ですが……。

「ナギ殿が良いなら構わん」

「あ、じゃあオツケーですね。フルリさん、よろしくお願いします」

そう言つて頭を下げると、フルリさんは少しかだけ微笑みながら了承してくれた。

ディオとナギの婚約話、そして気の早い新婚旅行。

ディオさんとの新婚旅行一日目。ゆっくりしてもあちらとこちらの時間の流れは相当違い、一月後でも一日程度しか変わらないとフルリさんに聞いたのでゆっくりとこの大陸中を回ることにしました。それに、今更ですが私の体の成長は元の世界の時間軸と同じように成長して行くらしいので、その辺りも安心です。

ちなみにディオさんと私は……まあ、『婚前交渉』をして繋がりましたが、それ以外にもフルリさんの作った術式でディオさんとウルシフィをこの世界から離しても消えないようにと、私と二人を魔力の経路で繋げてしまいました。

この経路はどこまでも伸び、物体も魔法もすり抜けてディオさんとウルシフィに私の魔力を送るものらしいんですが……繋げたあとにフルリさんにこっそりと、繋げなくても普通に活動可能だが、ナギとしては思い人と繋がっていた方が嬉しいだろう？ と言われてしまいました。

……なんとなくディオさんとウルシフィに申し訳無いような気分になりましたが、嬉しかったです。

こうして準備を終わらせた私達は、まずはフルリさんの実験場とも言うべきこの島を見て回ることにしました。

その際、フルリさんに葉っぱの形の首飾りをもらいましたが、なんでもこれは通行手形のようなものだとか。

これを持っていれば島の中で殺されるほどは襲われないし、子供達がじゃれついてくる可能性があるが、ディオさんと一緒なら問題ないそうです。

……でも、殺されない程度なら襲われることもあるそうです。怖い
ですね。

「怖そうには見えないぞ？」

「怖がつてばかりじゃあ、せつかくの旅行を楽しめませんか」

「……そこまではしゃぐことか？　今までと何ら変わらないだろう
に」

変わりますよ？　絶対に倒さなくっちゃいけない相手もいませんし、
殺される心配もありません。精神的な充実感が違います。

始めに行ったのは赤い樹の森。炎の力を強く持つ結晶の獣達が住む
場所だと聞きましたが、どうやら本当のようです。

何故かと言うと、炎以外の精霊の気配が全くといっていいほどあり
ませんし、唯一普通に存在している炎の精霊達はそれこそカルシフ
エルのいた火口に匹敵するほどの密度をもって存在しているからで
す。

……こういうところなら、確かに炎の属性を持っていないと入れま
せんよね。怖くって。

そう思いながらも私は周囲の綺麗な森に感動していた。

まるでルビーを削り出して作ったかのような、真紅の結晶。

葉も赤く、幹も枝も紅く、透き通っているのに、向こう側を見通す
ことができない、不思議な樹。

「この島の樹は全て純粹な魔力の結晶だ。ゆえに、この樹の枝の本分のを大陸の外で解放すれば、それこそ半径数十キルメートルが蒸発するだろう。海上ならばなおさら広くなるだろうな」

「へえ……… 凄い樹なんですね………」

私はディオさんに説明を受けたばかりの樹の幹を撫でてみる。すると私に返ってきた感触は、見た目とは大幅に違う普通の樹の感触だった。

「……… ちなみに、ナギ殿が触れているその樹を含めた全ての結晶樹は、母さんがまだ未熟だった頃に溢れ出した魔力のせいであっているらしい。現在でも母さんがたまに魔力を与えているらしい。家の近くに生えていた巨大な樹を通してな」

「……… それってつまり、一枝分が術式を通さないで暴走しただけで半径数十キロが消し飛ぶような魔力を持っている樹の……… 千本？ 万本？ …… とにかく、それだけの魔力をフルリさんはあの小さな体に持っているってことですよね？」

それも、私の知っている限りの六種類の属性を使えるし、私の知らないもうひとつの属性も。

「そうなるな。確か無属性といつていたか。どの属性の術式でも動かすことができ、さらに簡単に異なる属性同士を混ぜ合わせる事ができるらしいが……… 代わりに効率は多少悪くなるそうだ」

いえ、それくらいなら十分に凄いです。多分フルリさんやディオさんの言う多少はほんとに少しだけでしょーうし。

それから私達は炎の……と言つか、赤の結晶獣の長であるらしい、狼とドラゴンを混ぜて二で割った後に牙を付け足したような姿の赤牙さんの所で一夜を過ごすことになった。ディオさんはどうやらこの島の七色の結晶獣の長と顔見知りであるらしく、特に警戒したような感じはしなかった。

……私だったら、どうしても少しは警戒しちやいそうな気がしますけれど……。

「そんな時には母さんのことを思い出せ」

「フルリさんのことですか？」

なんででしょうか？

「簡単な話だ。……母さんも襲ってくるか来ないかわからない上に確実にこの島の頂点に立っているんだぞ？ どちらが怖い？」

少し考えてから、先ほど視線を外した赤牙さんを見てみる。……うん、やっぱりまだ少し怖い。

そこで、フルリさんがにつこりと笑いながら私とディオさんを魔法をガトリングガンのように連射しながら追いかけてくるところを……ひいっ！？ 想像だけでも怖すぎます！！

ディオさんに撫でてもらって落ち着いてから、もう一度赤牙さんを見してみる。

……あれ？ ぜんっぜん怖くないです。むしろ可愛らしくすら見えてきました。

「可愛いものだろう？」

ディオさんのその問いに、私は出来る限りの笑顔で答えます。

「はい。可愛いものですね」

どれ程フルカネルリが恐れられているかと言つ話。

ディオさんとの新婚旅行二日目。朝起きるとディオさんが目の前にいました。

ふらふらっと吸い寄せられるようにキスをして……後ろからの視線を感じて振り向くと、そこにはこちらに気を向けていない赤牙さんと、私達に興味津津の子供たちがいました。

「……流石の私でもこのような所で始めようとは思わないのだが？」
「ひゃあっ!？」

ディオさんを見ると、いつもと変わらない顔で私を見上げています。

「……えっと……もしかして、起きてました？」
「ああ。ナギ殿の寝顔を観察していた。百面相のようでなかなか面白かったぞ?」

私は、顔に血液が集まってくるのを感じました。顔も耳もすごく熱いです。きつと相当赤くなっているに違いありません。

そこでふと思いだし、結晶獣の子供達の方に顔を向けてみる。

「……見てた?」

子供たち全員が、肯定するように頭を縦に何度も振っています。

……気絶したと思ったのは、ディオさんに修行をつけてもらった初日以来です。

ちなみにその初日ですが、軽い木製の剣を形に気を付けてひたすら振り続けると言うことをやりました。初日なのでまだ私の体はあまり強くはなく、それでも五時間振り続けて休憩を貰ったと思ったら五分で今度は模擬戦闘をデイオさんと。

……あれは正直に言っ、恨みましたね。今思い出しても胸の内からこう黒いものが湧き出してきます。

『……うん、きっとそれ憎悪』

そうですか？

……っ、

「ウルシファイ？ お喋りでいつも必要以上に長台詞を喋っては私達に止められるかそれなりに長く喋らないと止まらないのに、何でそんなに台詞が短いんですか？ いつもウルシファイだったら今の台詞に続いて『もしくは殺意じゃないかな？ でもデイオさんはナギ殿のことを考えてやってくれたわけだし、ナギ殿だってその事を知っているはずだよ？ そうだろう？』くらいは続けるはずなのに……」

「ここには風の精霊が常識外れに少ないからな。火口の熔岩すれすれでもここまでは少なくないから、多少弱くなっていても仕方がないと思うぞ？」

デイオさんが種明かしをしてくれました。確かにこの風の精霊の少なさだと、風の力の塊であるウルシファイは辛いかもしれないですね。

……だからって、私と同一年くらいまで若返らなくってもいいじゃないですか。なんですかその胸。千切り取りますよ？

『し、仕方無いだろう？ 私だって辛いときはあるんだ……』
「……私から風の魔力を送ってやるからさっさと復活しろ」

そう言つてディオさんがポケットから出したのは、緑色の結晶のよ
うな葉っぱ。多分、風属性の結晶の樹の葉っぱなんでしょう。

「……くん」

「はい？」

くいくい、と袖を引かれたのでそつちの方を見てみると、赤い結晶
獣の子供が私の袖を引っ張っています。

……まるで、遊んでほしいかのように……。

「あそぼ？」

喋りました。そして勘違いと言う逃げ場がなくなりました。

「あそぼ？」

「あそぼつよ？」

「あそんで？」

……そしてついには物理的にも逃げ場がなくなりました。ディオさ
んはいま忙しそうですし……仕方ないですね。

袖を引っ張っていた子供を持ち上げ、膝に乗せて撫でてみます。針
のような結晶の集まった毛皮をしているようにしか見えないのに、
なんだかとても柔らかいです。

「つぎぼく！」

「ぼくも！ぼくもっ！」

「わたしも！」

なんだか、大人気みたいです。

朝御飯が終わるまで、私はわかるがわる膝に乗ってくる子供たちを撫でていました。
出発しようとした時の子供達の寂しそうな目が、なぜか忘れられませんが。

「次は白の結晶の森だ。急速に森の色が変化するから、覚悟はしておけよ？」

「はい、デイオさん」

なんの覚悟かはわかりませんでした、それはすぐに体で理解しました。

「め、目が見えない！？ 眩しくって目が……っ」

「……私は、覚悟しておけと言ったぞ？」

デイオさんが呆れたように私に話しかけてきますが、どこにいるかは全然わかりません。

「……それに、気配を読む修行はつけてきただろうが。上手く使えば地形や動植物の位置もわかるはずだ。この世界の全ては魔力で形作られているのだからな」

「そ、そんなに急に言われても……」

そう言いながらも目を閉じて、気配を感じ取ろうとしてみる。

………意外と簡単に出来た。確かに植物や動物、そしてディオさんの居る場所がわかる。

「………できちゃいました」

「当然だ。できるように教えたのだから」

そう言いながらディオさんは先に進んでいきます。私はディオさんに追い付いて、そのすぐ後ろを離されないように付いて行きます。

『うん、やっぱりディオさんとナギ殿は仲が良いね。仲良き事は良いことだと思うよ？ それと、この森って全体的に眩しいけれど奥に進めば進むほど光が強くなってくるみたいだね。魔力の目で見ないと観光すら楽しめないよ。光だけなら観る事はできるけど』

ウルシフィは復活したとたんにまた軽快に話し始めました。姿も元通り、大きくなっています。ウルシフィは着痩せするタイプの隠れ巨乳のようです。

………時間が空いたら、たっぷりと苛めてあげたいと思います。

島巡り二日目。これ以降は同じような流れのためカット。

ナギ殿との新婚旅行十日目。島から出て周囲を囲む大陸を見て回っていたのだが、懐かしいものを見つけて立ち止まった。

「? どうしたんですか?」

ナギ殿が私を見上げて問いかけてくる。

「なに、少し懐かしいものを見つけてな」

私はナギ殿にそう返し、見付けたそれに近付いていく。

もしかしたら違つかもしれないが、なんとなく私はその予感と懐かしさが正しいものだと感じていた。

私が見付けたそれは、銀の匙を看板に掲げた‘宿屋’だった。

少しばかり見慣れない金の針も付いていたが、恐らくそれが‘彼女’の友人が掲げていた酒場のシンボルなのだろう。確かに‘彼女’が言っていたそれに該当する。

真新しい木製の扉を開くと、そこには数人の客と店主らしい女性が一人。髪は短く肌は浅黒い、つり上がった目をしているその女性は、‘彼女’に聞いた友人の特徴に完全に当てはまっていた。

「いらつしゃい。こんな真つ昼間から女連れで酒を飲みに来るたあ、あんたは相当暇人だね。まあ、ゆっくりしていきなよお二人さ」

ゴズンツ!と鈍い音がして店主の頭がカウンターに叩き付けられた。

どうやら後ろから殴られたらしく、店主は後頭部を押さえたまま声もでない様子で悶絶していた。

「ザリチエ。あなたは何を馬鹿なことを言っているんですか。お客様に失礼でしょう?」

‘彼女’はそう言っているが、恐らく店主はそれを聞ける状態には無いだろう。あれは痛い。

私はくつくつと笑いながら、久し振りを見る‘彼女’に声をかける。

「まあまあ、そう言わないでやってくれ。私達は気にしないからな。タルウィさん」

そう言うと、‘彼女’……タルウィさんはバツと私の方に振り向いた。

「……久し振りだ、タルウィさん。まさかこの大陸に来ていたとは少ししか思っていなかったぞ?」

「……いらっしやいませ……私も、もう一度お会いできるとは……少ししか思っておりませんでしたよ。ディオさん」

タルウィさんは、そう言うてにっこりと笑った。

「……さて、一応紹介しておこう。こちらはタルウィさん。昔にランドリートで宿屋をやっていて、一時期お世話になっていた」

「タルウィ=ゾロアスターです。宿屋‘銀の匙’の主人をしております。以後、お見知りおきを」

そう言つてタルウイさんはぺこりと頭を下げた。その後ろで酒場の店主がにやにやと笑っているのは「愛嬌と言つものだろう。」

「そしてこつちは、ナギ殿。これでも十八で、私の妻だ」

「ええっ!？」

「なんだつてえ!？ それで十八!？ いくらなんでも若すぎだろっ!?!？」

二人とも……と言つた、この場に居た全員が驚愕の目をナギ殿に向けている。まあ確かに、これで十八には見えないな。私も年を聞くまでは十四〜五だとばかり思つていたし。

「どうすりゃそんな風に若さを保てるんだい？ と言つた何を食べて生きてきたんだい？ お姉さんに教え」

ゴツンッ!

「ザリチエ。彼女はお客様です。困らせるのはやめなさい」

「い、いえ! 私は大丈夫ですから……」

「おおっ……タルウイの拳骨は痛い……」

……仲が良いな。お前も混ざつてきたらどうだ？ ウルシフィ。

『ははは。やめておくよ。なんとなくだけどこの二人からは妙な気配を感じるからね。まあ、どう見てもただの人間のはずなんだけど、用心に越したことはないからね。もしかしたらディオさんみたいに私よりも強いなにかと契約してる可能性もあるし、もしかしたら私でも気付けなくらいに上手な魔法で人間のふりをしてるのかもしれないし。でもたぶん平気なんだよね。だってここはフルリさんの支配する大陸だから、きつとね』

そうか。

……まあ、母さんの大陸だから安心と言うのはおよそ間違っではないのだろう。ただ少し違うのは、母さんがどうにもできなかった場合は私達にどうこうできるわけが無いということでもあるし、その場合は諦めるしかないと言うところだな。

そう考えながらもタルウイさんと酒場の店主、そしてナギ殿を見る。実に楽しそうで、何よりだ。

それと、酒場の店主の名前はザリチェ。ハイカと言うらしい。ナギ殿が

「ゾロアスターとハイカ……拝火？ 確かそんな宗教があったよな……」

と言っていたが、恐らく関係はないだろう。

……… 渴きと毒草の邪神だったか？

『知ってるのはなんで？ って聞きたいところなんだけど、多分またフルリさんなんだろう？ フルリさんは本当に何でも知ってるよね。正確には何でもじゃないかもしれないけど、私たちが知りたいと思ってる時に知りたいことを知っているんだったらそれはきつと何でも知っているのとおんなじことだと思うんだけど、ディオさんはどう思う？』

まあ、知っている理由については正解だ。

それと、私の場合はそれ以前に、原因が母さんなら死者が生き返るうが神が死のうが朝起きたら世界中で挨拶が『ヒヤッハー！！』
になっていようが納得するぞ？ 受け入れるかどうかは別だが。

『……それはそれでどうなのかなあ……?』

珍しく短く終わらせたウルシフィの言葉を見無視して、タルウィさんが用意したものであるう台帳に名前を書く。

……タルウィさんの料理は久し振りだな。

ナギにライバル出現? いいえ、むしろ心から祝福してくれま
す。

タルウイさんとザリチエさんはいい人たちでした。

人当たりも良く、面倒見もよく、綺麗なあの人達はきっとこの宿屋の常連さん達には人気があるのでしょう。

ご飯も美味しいですし、私とディオさんも泊まってみてファンになりました。

……けれど。

「で、ナギちゃんはいつたいたいなんてそんなに若々しいんだい？」

「ザリチエ。お客様ですよ」

「いいじゃないか。タルウイだって興味はあるんだろう？」

これはちょっと困りました。逃げ場がありません。

「ディオさーん！」

ディオさんに助けを求めますが、ディオさんはなんだか私をかわいそうなものを見る目で見詰めてきます。

もっと具体的に言い現しますと、フルリさんにからかわれているときの私を見る目にそっくりです。

……つまり、これはディオさんにはどうにもできないことなんです
ね。

しばらくしてから結論が『人種の違い』で落ち着いてから、私はようやくディオさんの隣の席に座り込みます。

「災難だったな、ナギ殿」

「ほんとです」

コップに注がれた水を一部凍らせて氷水にしてから飲む。すると私の体のなかを冷たい冷たい水が滑り落ちて行って、慌てすぎて熱くなった体を芯から冷やしてくれる。

「ナギ殿。冷たすぎる水は体に悪いぞ」

「知ってます。でも飲まなきゃやってられません」

まるで社会に不満があるお父さんみたいな言葉ですが、一応これは今の私の本心です。

……少しは改善されましたが、やっぱり見知らぬ人と話するのは苦手です。

「……さて。そろそろ出発するか」

ディオさんがそう言って立ち上がります。するとタルウィさんはにっこりと笑って、

「またのお越しをお待ちしております」

そう言って頭を下げた。

「……ってタルウィも言ってることだし、いつでも来なよ」

ザリチエさんもどうやら歓迎してくれるみたいです。

カウンターの向こうでひらひらと手を振るその姿からは想像もできませんが、ザリチエさんもきつと苦労してきたんだと思います。

フルリさんにこの大陸の人達がどうやってこの場所に来たのかを聞いた時、フルリさんの話してくれた言葉が思い出されます。

「この大陸の住民達は、結界の外で存在を必要とされず、忘れ去られたもの達やあまりにも不幸すぎて消えたいと心の底から祈った者達、そしてその子供からできている」

……つまり、そう言うこと。ここで幸せそうに暮らしている人達は、殆ど外で何かしらの理不尽を体験してきている。けれど、それでも今は幸せそうだし、いいのかな。

「ナギ様」

タルウィさん呼び止められて振り向くと、もう一度タルウィさんは深く頭を下げた。

「どうか、ディオさんとお幸せに」

私はタルウィさんのそのお願いに、笑顔で答えた。

この大陸にやって来て、ザリチエと再会して、もう一度二人のお店を開いた。

ザリチエはまた適当にお店を開いていて、お客様にも普段通りの軽口で接待する。

そんなザリチエの所には、気の良い人が集まっていた。私はそれについては何も言わなかったけれど、初めてのお客様にまでそういう態度を取るのはいただけでない。

特に、初対面の人にかかわれていい気分になる人は少ないのだから、あまりにも度が過ぎるときには少し注意をした。

……このやり取りも、なんだか懐かしい。昔は私とザリチエで一つの店をやっていて、こういったやり取りをいつもいっつもしていた。

けれど、私達は一度別れて、そしてもう一度ここで出会うまでに五年近くの時間をかけていた。

……これなら、懐かしいのも当然かな。

……そして、ザリチエと一緒に新しい店を開いてからしばらくして、懐かしい人の顔を見ることになった。

……その隣には、可愛らしい奥さんがいたけれど。

「……タルウイ」

「なにかしら、ザリチエ」

いつもの寝る時間より少し遅く。私はちょっとだけ、ザリチエに頼んでお酒を飲ませてもらった。

「……お前さ……」

「言わないで」

……「こう言うと、ちゃんと静かになってくれるのがザリチエのいいところ。それなのに私に付き合ってお酒にも付き合ってくれるし、何も言わないでもそこですっと居てくれる。」

……私も、良い友人を持ちました。

久々登場、タルウィさん。

大陸中を回り終え、母さんの居る中心の島に戻った。母さんはいつも通りの無表情を崩さないまま、帰ってきたばかりの私に向かって避けられない速度で正体不明の術式を飛ばしてきた。

……恐らくこれが記憶を書き込む術式なのだろうが、何か言っただけにして欲しかった。

ナギ殿が心配そうな顔をしているが、母さんのことだから数秒で終わるはずだ。

そう考えている間にも術式の光は薄れ、書き込みが終了したという文字列が並んだ。

「……せめてただいまの一言くらい言わせてくれてもいいと思うのだが。ただいま」

「お帰り。どうせ数秒で終わるんだ。大して変わりはない」

確かにその通りなのだが……まあ、母さんに何を言っても無駄か諦めた方がいいな。もう終わったことでもあるし。

……それにしても妙な気分だ。頭の中に私の知らない事が常識レベルにまで刻み込まれている。所々おかしいような気もするが、母さん作だから仕方無い。きつと色々なところに母さんの常識が混ざっているんだろう。

「それってきつと致命的ですよね？」

「ナギ殿はたまに本当に命知らずな事を言うな？」

やれやれ。特に怒っていないようだから良いものの、もし母さんが怒ったらどうするんだ？ 私では止められないぞ？

帰ってから一日休み、すぐに私とナギ殿、そしてウルシフィはナギ殿の世界に移動することになった。餞別として色々なものを貰ったのだが、なぜ母さんは私の戸籍と住民票と銀行預金（残高二兆円）を用意できたのだろうか？

「お前たちが旅行に行っている間に一度世界を渡って用意してきたからに決まっているだろう」

「……なんとという非常識。流石母さんだ」

「息子の門出だからな。奮発した」

……母さんにもそういった感情はあったのだな。

そう思っていると、急に足元の魔法陣が輝き始めた。どうやら魔法が起動を始めたらしい。

「向こうの世界には精霊はそのウルシフィのみだから魔術は使えない。魔法なら使えるが、一般的には認知されていないから使わないことをすすめるぞ」

母さんは最後まで別れの言葉を言わない。だから私も、別れの言葉は言わない。

「……またいつか、会いに行く」

「……絶対です」

『そのときは私も行くからね。……つと、そろそろ変わっておこうか。……にゃあ』

私達がそう言うと、母さんは少しだけ驚いたような顔をして、それからゆっくりと笑みを浮かべた。

「……また、いつか」

母さんが言うと同時に光がさらに激しくなり、私達の視界を埋め尽くした。

そして気がつくと、私とウルシフィにとっては見慣れない、ナギ殿にとっては見慣れた景色が目に入った。

「……ただいま……私の世界……っ！」

隣でナギ殿が僅かに泣いている。しかしその顔は、眩しいまでの笑顔だった。

フルカネルリだ。私は今、この世界で手に入れたものを持ち帰るべく、大陸を球状に包み込んでいる結界の中身が丸々入るように球形の小さな瓶の中の空間を拡げている。

《……フルカネルリ。これでよかったノー？》

ああ。問題ない。

私はナイアにそう返す。

ディオとナギをこの世界から元の世界に戻してやるだけなら簡単だった。しかし、ディオの体を完全に向こうの世界に固定し、人間としてナギと同時に死ぬようにするには、ナギの魔力では足りなかったのだ。

そこで私は、私の結界で覆われていない外側を魔力としてナギの体に組み込んだ。

こうしてやればその世界に住んでいた人数分の魔力と回復速度が得られ、ディオが消えることも、ナギが魔力切れで発狂することも無くなったと言っている。

……その代わりに、私の結界の外が駄目神ごと完全に消滅し、太陽すらも消えてしまった。

……まあ、息子のためだ。研究に多少の遅れが出るかもしれないが、そのくらいのことは許容してやるべきだろう。

そう思いながら作った瓶に、太陽と月を作って浮かべる。球形の結界をそのままこの瓶の中に転移させれば……ほら、できた。

時間の流れは外の約三十倍。しかしこの中に生きる者達は高密の魔力によって通常の三十倍以上生きるだろう。

こういった実験場が欲しかったんだ。帰ってからは重宝することになるだろう。

ただ、使いすぎるとすぐに死んでしまう。まあ、魔力があって老化をほとんど停止状態にしてくれるので使おうとすれば使えるだろうが。

《……研究途中だった物もあるんでショー？》

ああ。あつたな。消えてしまったが。

……だが、私の今の一番の興味はディオとナギの恋の行方だ。
しかもそれはディオのためにもなる。一石二鳥だ。

ナギにも楔を仕込んであるし、観察することでもできるから問題ない。

『……ふふふふ……瑠璃はあ……やっぱり、瑠璃なのねえ……』

それはそうだ。私は私でありたいからな。

……さて、用意も終わった、この世界も終わった。ならばもう
用は無い。帰るとしよう。
懐かしき、私達の世界へ。

フルカネルリ、帰還。

フルカネルリだ。ゆっくりと目を開くと、私としては久しぶりになる私の部屋だった。研究所と実験場を兼ねた世界球や、あちらの世界で作ってきた物に忘れ物は無いことを確認した。

ちなみに瓶の大きさは直径にして十五センチメートルほど。外が揺れても中の物には一切影響が出ないようになっているし、早々のことではこの瓶は割れないようにしてあるが、それでも私は心配なのでボトルシップ等と同じように落ちないように並べておいた。

《ボクもいっしょに護ってるからクトウグアの炎にも五秒くらいだったら耐えられると思うヨー？》

つまりそれは太陽に入れても問題ないと言うことか。流石はナイア、異常なまでに高位の邪神、それも地神なだけはあるな。

《すごいでシヨー！》

ああ。

今回も私の記憶とこの世界の出来事に間違いがないかを確認していたのだが、一つもない。数万年も居なかったのだから少しくらい違ってもおかしくはないはずなんだが………知識量と言うことで下限値固定されているのか？

《されてるヨー》

先に言え。

……全く。無駄な時間を使ってしまった。

『……まあまあ……わかったんだから、いいじゃない……』

……そうだな。今わかったと言っことに喜ぼう。

帰還完了。再び日常へ。

フルカネルリだ。そういえばこちらでは6月。梅雨の時期だ。毎日毎日しとしとしとと降り続けていて、そろそろ飽きる。

《飽きるって……そういう問題なノー？》

『……いいじゃない……だって、瑠璃なんだものお………』

そうだな。

ただ、飽きが来るとは言ったがそれは今ではなく、もう少し後になりそうだ。

この世界には魔力や気、霊力、妖力を含むあらゆる異能の力が存在しない。そのせいでこの世界では魔法も魔術も使えないのだが、それについての抜け道を見つけた。

確かにこの世界では魔力が回復しないため、また精霊が居ないため、つい最近まで行っていた世界の魔法はそのままでは使えない。

だが、私の見つけた魔力はそれだけではなく、自分自身で生み出している魔力で同じように魔法を使うことはできるのだ。

……実のところ、あまりにも使っていないなかったためにこちらの魔力の存在を忘れていた。魔法を使うことができず、何か無いかと探していたところでこの魔力のことを思い出し、使ってみたら使えたと言ふことだ。

……やれやれ。私もまだまだだな。

《人間だもノー。間違えることだってあれば忘れちゃうことだって

あるサー》

『……そうよお……亡霊だって、忘れちゃうことがあるんだからあ……人だって忘れちゃうわよお……?』

そう言ってもらえると、救われるな。

「……あー雨むかつく。とりあえずてめえら七十二ページから七十九ページまで読め。一分で」

クトウグアが授業をしているのだが、いつもに比べて明らかにかつ圧倒的にテンションが低い。その上不機嫌らしく普通なら無理なことを要求してきた。

『ピンポンパンポーン　クトウグアーいくら雨が嫌いだから
って生徒に八つ当たりするんじゃないっ！　ピンポンパンポーン』

「……アブホースの野郎……」

……どうやら教頭はクトウグアが雨の日にごのようなことをするかがわかっていたようだな。

《まあ、ボクたちは付き合い長いからネー。そのくらいのこととは理解してるサー》

そうか。友情と言って良いのだろうか。

《あはははハー……そうだねー。たぶん本神達ほんにんも渋々認めると思う

ヨー》

私が言うと、ナイアはクスクスと笑いながら肯定した。
……だが、渋々なんだな。

雨が降るとクトウグアはイライラするが、それと同時に元気がなくなる。炎の神性であることを考えれば仕方無いのかもしれないが、なぜか同じ炎の神性であるはずのクトはそのような様子を全く見せない。

「……雨っていいですよ……こんなに簡単に水琴窟みたいな音が聞けるんですから……」

むしろ喜んでいようだ。炎の神性としては異常なのだろうが、悪いことでは無いだろう。

『……そう言えば……クトウグアの子は、あらゆる物を凍らせることができたそうねえ……？』

《あー？　なんでアザギがアフォーム＝ザーのこと知ってるノー？》

実在するのか？

《するヨー。ただ、ボクたちにとってはクトウグアに近い上位神の一族みたいな扱いなんだけどネー》

『……ふうん……？　……けっこう……違うのねえ……？』

《一応クトウグアの一族との繋がりはあるシー、間違っではないんだけどネー》

そうか。成程、神にも色々あるのだな。

……となると、クトは少々そちらに近かったりするのかな？ 凍らせるなら雨も水も平気だろうし、熱いものが苦手と言うのも頷ける。

《そうだねー、ちょっとだけそっちの方に近いんじゃないかなー？
ただ基本はクトウグアの一族だからそんなに凍らせたりとかはできないと思うヨー》

少しはできるのか？

《少しならネー》

そうか。まあ、熱量を燃やせばクトウグアでも物質を凍らせることはできると思うがな。温度とは科学的に簡単に言えば構成する原子または分子の振動であるわけだし、振動のためのエネルギーや運動ベクトルのみを焼き尽くせば絶対零度近くまでは行くだろう。

《多分やらないと思うけどネー？ あいつ冷たいの苦手だしー》

そうか。私の魔法で作った炎は物質または魔法、霊体などしか燃やせないからな。実験したくともできないのだが……。

……クトに頼んでみるか。それでダメならいつか出来るようになったら自分でやるか。

『…………ふふふ……………そこで、諦めないのがあ……………瑠璃よねえ……………』

《欲望に忠実な人間らしい人間だよネー。そんなフルカネルリが大好きだヨー？》

私もお前たちのことは好きだぞ？

日常に戻ったフルカネルリ達。

フルカネルリだ。七月に入り、ようやく梅雨が終わったことでクトウグアの機嫌が一気に良い方向に向かうようになった。……やれやれ、現金な奴だ。

《神って言うのは大体みんなそんなものサー。特にボクやクトウグアみたいな邪神だとネー》

そうか。

《そうサー》

七月と言えば七夕祭りだと母が急に言い出し、父がそれにノリよく笹を買ってきたために急遽私の家で七夕祭りが行われることになった。

……私は折紙に鉄を入れていくつも飾りを作り、それを使って笹をそれなりに飾るように言われたのだが、これがなかなか難しい。

具体的に何が難しいかと言うと、どうしても手が笹の上の方にまで届かないのだ。

仕方がないので紙を細く切って繋げて作った紙の鎖を投げて周回させるようにしたのだが……やはり少々不満だ。

『……十分だとお……思うんだけどねえ……?』

いやいや、確かに普通ならばそうかもしれないが、私は外見はともかく中身は爺だ。それも欲望まみれの上ばかり見ている爺だ。ならばこんなもので満足するはずがないだろう？

「……ふふふ……そうねえ……瑠璃だものねえ……」
《でも外見は可愛い女の子なんだけどサー》

五月蠅い、大八車に轢かれて死ぬ。

《何で大八車なノー！？ただでさえわかりづらいフルカネルリの思考回路がどこに繋がってるかさらにわかりづらくなっちゃったヨ
ー！》

「……元々、簡単にわかるような考えはあ………持っていないけどねえ………？」

ナイアがその気になればわかると思うのだがな。

《アー、それは無理だヨー。フルカネルリの事を予測しても未来を覗き見てモー、フルカネルリはその未来からさっさと離れていつちやうからネー》

……ほう、なるほどな。

私の他にもそういった者はいるか？

《シー……ボクたちくらいの上位神になると、大体そんな感じかな
ー？》

……なるほどな。

よし、決めたぞ。私の現在の目標は、ナイア達のような上位神の未

来を読んで見せることにする。今のところの最終目標だな。

『…………ふふふ…………頑張りましょうねえ…………？』

ああ。私が消滅するまでには突き止めたい。無理だった時は…………まあ、死後の世界で考えるさ。

七夕飾りに短冊を吊るす。願い事を書いておくと叶うと言うので、一応書いておくことにした。

母が書いたのは『家内安全』。父が書いたのは『家内安全』。私が書いたのも『家内安全』というなかなか無いことになってしまったが、それは家族仲が良いということ構わないだろう。

母と父はくすりと笑い合って、それから私に手を伸ばしてきた。

私は久し振りにその手をゆっくりと握った。

それだけのことでまた父と母は笑い声をあげた。何故笑っているのかはわからないが、やはり人間と言うものはとてもわかりづらいものなのだとわかった。

…………そう言えば前世ではよく人の事を理解できないとか化物とかいわれたな。そして私をそう呼んだ者が勝手に倒れていったため、貴族連中にはあまり好かれてはいなかったな。

…………ああ、実に懐かしい。もはや思い出すこともないと思っていたんだが…………。

フルカネルリは変わらない。何千年もこの世界から離れていても、何万年も生きていても、この世界を離れる前と全く変わっていない。確かに知識や経験は増えているし、やることはだんだん大きくなって来てる。

それでも、フルカネルリの根っこは変わってない。知識欲の塊。フルカネルリはそう呼ばれるにふさわしい思考をしている。

前世から今生まで、全く変わらないその生きざまは………神には無い情熱を感じさせてくれる。

ボクとアザギは、そんなフルカネルリが大好きサー。

『……ええ………大好きよお………』

《そうか》

帰ってくる言葉は素っ気ないけど、それもフルカネルリの魅力のひとつ。

……ああもつ、本当に可愛いなあ………

《可愛いと言われても嬉しくないぞ》

「ごめんネー」

ナイアのフルカネルリ考察。

フルカネルリだ。夏休みに入って暫くしてから図書館に行ってみたのだが、奇妙な本を見付けた。禍々しい気配がするのだが、はたしてこれは読んでも平気なのだろうか？

《題名ハー？》

ふむ……………セラエノ断章、と書かれているが……………聞いたことのない題だな。今月の新刊と言うわけでもないようだし、何なのだろうか？

《セラ……………あいつかあ……………まあ、確かにあいつならフルカネルリを気に入りそうだけドー……………》

知り合いか？

そう聞くと、ナイアは困ったような顔で頷いた。

《……………嫌いじゃないんだけど……………悪い奴じゃないんだけど……………
……………なんだかナー……………》

『……………セラエノ断章……………ハスターかしらあ……………？』
《だからなんでアザギはそれを知ってるんだヨー！？》
『……………うふふふ……………秘密よお……………』

ハスター？ 本から漏れ出している気配からして……………風の邪神か？

《……………そうだヨー。イタクアよりはいいんだけど……………まあ、ドS

だネー。それも精神から責めて泣いてる顔を見るのが好きなタイプのサー》

イタクアの方は？

《イタクアはあれはただの外道と言うカー……鬼畜と言うカー……暴力を振るうことに生き甲斐を感じる脳筋馬鹿かナー。前に嫌がるツアトウグアを引き回そうとして先生にイロイロされてからは少しだけ良くなったけど》

ふむ。付き合いは持ちたくないな。

だが、ハスターと言う方には会ってみたい。読めば良いのか？

《開いてから言うことじゃないよネー？ 読み進めながら聞くことでもないよネー？ いやまあ写本っぽいからまだいいけどサー！》

そうか。これほど強い力を持っているこれすら写本なのか。

《そうだヨー。本物は壊れた石板の形をしてるからネー》

……もしや、あそこで額に入って飾られているあれか？

私の言葉に反応して、ナイアはゆっくりと指差した方向を見る。

《……あれだネー》

……やはりそうか。……読んでみても平気か？

《うっっん……フルカネルリならまあ……平気……なのかナー？》

よろしい、ならば解析だ。封印中であるために、大して深いところまで見ることはできないが、今はそれでも良い。

じっと見詰めながら解析して、そのまま三十分。ようやく表面の解析が終わった。

「……いあ いあ は」

《やめようネー？》

「……仕方ないわねえ……」

ナイアとアザギは何をやっているのかわからないが、ナイアの態度を考えるとあまり良いことでは無いようだ。

……さて、読み終わったのは良いが、肝心のハスターとの接触方が書かれていない。どうするか……。

《そんなに会いたいんだったら生物実験室に行ったらいいんじゃないかナー？ ハスターってあの解剖大好き先生だから》

先に言え。

「……と、言うことで会いに来たんだ」

「本当に私に会いに来るかね普通。お茶でも飲むかい？ 筋弛緩剤入ってるがね」

「フルカネルリに手を出したら刻み潰すぞハスター」

「おやおや怖いねえ。安心したまえナイアルラトホテプよ。クトにもクトウグアにもアブホースにもクトウルフにもロイガーにもツアールにもツアトウグアにも、生徒達に手は出さないようにと言われているからね。筋弛緩剤だってこれほど可愛らしい少女が動かない

体を必死に動かして私から逃げようとするところを観賞しようとしただけさ」

「……趣味が悪いな、ハスター」

「全くだな……ってフルカネルリー！？ なに普通にお茶飲んじやってるのサー！？」

どうせ効かないだろうと思ってつい。

「効くのか？」

「いや効かないけどサー……」

「……ふむ。なるほど！つまらないが面白いな。気に入った」

何が琴線に触れたのかはわからないが、気に入られてしまった。

「一応言っておくが、私は痛いのは嫌いだ」

「安心したまえ。君にそういった方向のことは求めていないさ。友達付き合いをしようと言っているだけだ」

「……ハスター。頭打ったノー？ 保健室のクトウルフのところ行つといた方がいいんじゃないかナー？」

「私は正常だ」

「元タイカれていそうな雰囲気をそこはかたなく漂わせておいて、いったい何を言っているのやら」

「私はイカれてなどいないよ。ただ、相手を精神的に追い詰めた時の恐怖や絶望に歪んだ顔が大好きなだけで。泣き顔も良いね」

ああ、なるほど。こいつは変態か。

クトの学校で教師をしている理由は実に簡単。ただの暇潰しと、趣味だ。

教師となれば生徒は必ず会わなければならぬだろうし、話をすることもある。

ただその時、もし私が『学校中で有名な怖い先生』だったとしたらどうなるだろうか。

答えは簡単。怖がり、時に震え、泣きながらも私のところに来ることになるわけだ。

それが嫌でサボるのならば、それを理由に呼び出しをかけても良い。私は自分から手を出すことはないが、相手が勝手に私を怖がって怯えるのを止めることはできないからな。勝手に相手が怯えただけだ。

しかし今私の前にいる娘は私に怯えない。ナイアルラトホテプから話は聞いているだろうに、薬が入っていると行って出された茶を飲んでる。

……いや実際は入ってないが。入れたらクトに涙目で怒られてしまうからな。どうも私はあれだけは苦手であるらしい。

……ふむ。久し振りに加虐対象と昔馴染以外に興味を持った。

勝手に悪いが、契約させてもらうとしようか。答えは聞いていないが、まあ、悪いものではなかる？

フルカネルリは『風神の加護』L V 1 を受けた。風に対する抵抗と親和値が上昇しました。

特殊：自由を司る風により、強制契約が効きづらくなりました。

‘邪神の加護’がLv4になった。

フルカネルリだ。夏休みに入っただけの恒例行事だが、白兔達の宿題を見てやることになった。

「……降霊行事い……？」

《恒例行事だヨ。幽霊降ろしてどうするのサ》

「……好例行事い……？」

《むしろ悪いと思うヨ》

「……高齡行事ねえ……？」

《恒例だってバー。人間がいきなり歳取ったらビックリだヨ》

何を二人でふざけているのやら。

「瑠璃い……助けてえ……」

「お願いします瑠璃様！どうか！どうか！」

「……わかったから頭を上げる鬱陶しい。写すなり答え合わせをするなり好きにしる」

すると白兔を先頭とする全員が嬉しそうな顔をして、もう一度頭を下げた。

「ありがとうっ！さあみんな！瑠璃大明神様が貸してくれたよっ！やることはわかってるよね？」

「はい！適度に間違えながら写します！」

「作文は文の順番を入れ換えて書きます！」

「よろしい！それでは諸君、汚すなよっ！」

「……アイ、サー！」「」

……白兔ならばマムだと思うが……。まあ、わからんか。

《キャラが変わりすぎだと思っただけどナー？》

『……良いじゃないのお……そんなことも、あるわよお……』

そうだな。

白兔達が全速力で書き写している間、私は図書館から借りてきたセラエノ断章の写本を、軽くだが解析した原典の内容と擦り合わせてできるだけ正確に写していた。

神位共通言語ではないが、解析をして意味はわかっていたのでそれなりの速度で進んでいるが、実は相当不味いことをしているのではないかと少々不安になってしまう。

《いくら写本だからって、普通は読みはじめて数十秒で発狂したっておかしくないんだけどネー》

『……ふふふふ…… おかしくなんて無いわよお……？ ……だ

って、瑠璃だものお……』

《……あー……》

とりあえずこれを白兔達に見せるのは辞めておこう。何かあるかわかったものじゃない。

私は写本のページを捲る速度を上げて覚えてしまうことにした。白兔や古之山このやまや木乃里このまが私に聞きに来た時に開いたページを覗き見させても困る。

ちなみに、古之山も木乃里も私の友人である。フルネームは古之山

機^{まき}乃と木乃里 竹野^{たけの}。トランプに興じたこともある。
茸の山と筍の里と言われるのを嫌がっているようなので、そう呼ばないようになっている。

……そう言えば、そんな名前の菓子があつたな。食べたことはないんだが……今度食べてみるとするか。

三日をかけて白兔達は宿題を全て終わらせた。答えがあつたとはいえ、この速度はなかなか早いな。

「宿題も終わつたし、遊ぶよーっ！」

「何する？ 何したい？ 私はウノがいいな」

「トランプ！」

「麻雀しない？ 楽しいよ？」

……白兔。ルールもわからないようなこいつらを相手に麻雀はどうかと思うぞ。それ以前に卓も牌も無いのにどうするつもりだ？

しかしどうやったのか白兔の鞆の中からは牌と点棒のセットと雀卓（！？）が出てきた。この町……と言うか邪神学校の生徒ではこういう特殊能力なようなものが割と普通にあるとは言え、ここまで物理法則を無視できる能力を見たのは初めてだ。

「凄いね白兔！なんでできたの？」

「うーん……こうしたいって思ったらできたから……わかんない」

「そっかぁ……ちっ！残念！」

……なぜこいつらはここまで能天気なんだ。家の母や父にも言える

ことだが、理解できん。

そのくせ能力の秘匿にはきっちりしているし……と言つかこの世界にはそう言った特殊な力は無いのではなかったか？

《クトちゃんやクトウグア、アブホース達が皆に力を少しだけ貸してあげてー、その人が死んじゃったらちよつとだけ強くなった力を返してもらってるんだヨー。貸してあげる時に意識に悪用禁止とか秘匿とかはちゃんとするようにって暗示みたいのをかけてるのサー》

……そうか。そうすると私の父と母にもそう言った能力があるのか？

《あるヨー。お母さんの方は創作料理がどんな下手物を使っても食べられる物になる能力。お父さんには右手と左手を同時に思い通りに動かすことができる能力があるのサー》

……そうか。

『……ある意味、凄い能力ねえ……』

《ある意味ネー。ちなみに白兔ちゃんのお母さんには弓矢の射程距離内なら確実に狙ったところに当てられる能力があるヨー》

……ああ、白兔の家の一階に置いてあつた賞状はそれか。なるほどな。どうりでこの町に有名人が多い訳だ。

例えばマラソンで世界記録を持っている御歳六十二の爺さんや、毎試合ハットトリックを決めることで有名なサッカー選手の自宅もこの町にあるし、いくつも特許を持っている発明家の生家も、世界最高と言われるパティシエの実家も、全てこの町の中にある。

それについては外の人間達が気付いても気にならなくなるようになってるし、学校と結びつける者はほとんどいない。居たとしても

すぐさまそれが気にならなくなり、記憶がまるで水にとけてしまったかのように薄まり、その事実を認識したままどうでもいいことだと思ってしまうようになっていたようだ。

……明らかにクトやクトウグア達何かしているが、私に害があるわけではない……私にとってはむしろいいことなので流している。

《ちなみにそれについてはボクも協力してるヨ》

そうか。

フルカネルリはこの町の秘密を知った。

フルカネルリだ。いつもならば体育祭なのだが、今年は雨でやらな
いことになった。クトウグアが発狂しそうなほど怒り狂っていたが、
アブホースに殴られ蹴り転がされ水を被らされて静かになった。ず
いぶんと手慣れているな。

「それはそうよ。だって昔からこいつのストッパーは私だったんだ
から」

なるほどな。

ところでナイア。お前はクトウグアに言うておくことがあるんじゃない
なかったか？

『……………そうだね。今のうちに言うておくよ。……………ボクのために
も、クトウグアのためにもアブホースのためにもね』

……………随分と本気なようだな。応援はしよう。

『……………ありがと、フルカネルリ』

なに、気にするな。

クトウグアが居る保健室に行く。クトウグアだけじゃなくてクトウ

ルフも居たけれど、ちょっと買収して人払いをしてもらった。

からからと軽い音をたてて扉は閉まり、外に音が漏れないように簡単に結界を張る。

クトウグアに襲われたら大変だけど、きっと大丈夫だと思う。クトウグアだからね。

「……………」

言いたいことは山ほどあるけれど、何も言わずにクトウグアの寝ているベッドの隣にある椅子に座る。

……………いつ起きるかナー？　ボクの事を覚えてるかナー？

……………あれー？　なんでボクは覚えていて欲しいみたいなのを考えてるんだロー？

……………ああ、今のボクは女の子の体だからかな？　声も顔も髪もあの時のまま、クトウグアに告白されてどこか嬉しかったあの時のままだからネー。

とはいえ、時間は過ぎてるから落ち着いてはいるんだけどサー。

「……………つくあ……………あ、のやる……………」

やっと起きたみたいだね。

そう思うと同時、ボク……………私とクトウグアの視線が、正面からぶつかり合った。

「……………あ……………ひ、久し……………振り……………」

「……………覚えていてくれたんですか」

うん、なんだかすごく嬉しいけど………なんだかすごくヤバい気がするヨー。気のせいだといいナー。

「……覚えてる？」

「……もちろん覚えている。忘れられるわけ無い」

クトウグアはボクに熱い眼差しを向けたまま答える。知ってはいるけど。何度も何度も聞いてきたわけだし。

「………それで、どうですか？ クトウグアさんは、まだ私のことが？」

「………ああ。惚れてる」

真っ直ぐにボクを見つめる眼差しが、熱い。まるで本当に熱を持っているかのように。

「………だが………他にも惚れた女ができたんだ」

「………知ってるヨー。」

ボクの心の中の眩きを知らないで、クトウグアは言葉を続ける。

黙っていれば良いのに、そういうことまで真っ正直に言っちゃうんだよネー、この馬鹿は。

「そいつ、いつもいつもうるせえ奴なんだ」

「はい」

「俺が何かする度にギャーギャー騒いで、それで当たり前みたいに俺の事をぶん殴ってくるんだぜ？」

「はい」

クトウグアはアブホースについてぐちぐちと愚痴り続ける。しかしその口調に悪意などは全く入っていないし、それどころかほんのりとだが愛情まで感じとることができる。

「俺より神格は低いのに、妙に強い、綺麗な目をしてるんだ」
「はい」

……ついにはのろげが入ってくるようになった。まあ、別にいいけどネー。録音してるシー。結婚式で流してあげるヨー。

「……………何て言っても、嘘をついたことには変わりねえ……………」

クトウグアはベッドから降りて、床に正座した。

「すまん！俺からあんなことを言っておいて調子のいいことだとはわかってるが、俺は、あんたを妻にはできねえ！」

そして、床に叩きつけるように頭を下げた。今なら靴を舐めろって言ったらほんとに舐めるんじゃないかナー？……………やらないけどネー。

「……………いいですよ。許します。クトウグアさんに新しく好きな方ができたのも、二股をかけるようなことをしていたのも、みんな許してあげます」

クトウグアがすっごい悩んだのは知ってるからネー。責める気にはなれないのサー。

……………今は女心が痛いけど、戻ればいつも通りになるサー。

ゆらり、と揺れるようにして姿を消そうとする。それに気付いたクトウグアは、ボクの目を見上げてきた。

「……………あんだ、名前は……………？」

……………そう言えば、教えるって約束してたよネー。仕方ないナー。

「……………私の名前は、ナイアルラトホテプですよ？　ほんとに気づいてなかったんですね」

「…………………………へ？」

ぼかーんとしたクトウグアの顔を見ていると、笑いが込み上げてくる。

「それじゃあ、クトウグア。またすぐ会おうネー」

最後にこのくらいの意趣返しは許されると思うんだよネー？

「てめえナイアこの外道！なんつー真似してくれやがんだ！！」

「やかましいヨー。第一あれをボクって見抜けないで初対面で告白してきたのはクトウグアじゃないカ！。保健室のあれだけじゃなくって全部ボクだヨー。クトウグアの初恋の相手の話を聞かされてぶん殴られた意味はわかってくれたかナー？」

なんだかすっごい逆ギレされた。ボクは全然悪くないのに、クトウグアがすっごい剣幕で詰め寄ってくる。

と言っか、口の軽いことで有名なクトウルフを遠ざけたことを感謝してほしいネー。結婚式で全部バラす予定だけドー。

ついにネタばらししたナイア。クトウグア初恋編

フルカネルリだ。体育祭がなくなった分、文化祭に力を入れているところが多い。

そんな中で私はというと、結晶樹の枝から部品を削り出し、組み合わせて作ったオルゴールを出展した。ちなみに流れる曲は最近私の大陸で流行り始めた音楽だ。題名のない曲だが、中々に良い曲だ。

《作者はとある音楽家だヨ。本人はもう死んじゃってるけど、その子供たちが歌ってるのを聞いて流行り始めたんだってサー》

そうか。よくそこまで詳しく調べたものだな。流石はナイアだ。

「……………瑠璃ってさ……………時々ほんとに小学生なのか怪しくなるよ
うな行動をするよね」

「もうすぐ中学生なのだから、普通だ」

「そっか！もうすぐ中学生だもんねってそんなわけないよね!？」

ノリ突っ込みか。私が異世界に居る間に随分と変わったらしいな。
三秒だが。

《固定で三秒だけだネー》

『……………三秒だけよねえ……………あははははっ』

……………これはまた妙に楽しそうだな、アザギ。

「……ふふふふつ…… ……お祭りはあ………楽しまなくつちやねえ………？」

教室ではなぜか私の作ったオルゴールの曲が延々と流され続けている。そしてその曲を聞いた者達はほんやりとした目でオルゴールを見ながら立ちすくんでいる。

……なんだ、いったい何があった？

《……うーん………多分ネー、魔力に当てられちゃったんじゃないかなー？ 普通のこの世界の人なら平気なんだろうけどー、クトちゃん達のお陰で魔力を持つてる人が多いからネー》

………物質的ではない存在である魔力はこの世界の人間には無意味………何故なら魔力を欠片も持たないため、魔力によって体内の魔力をバラバラされてしまうこともない。何故ならバラバラになる魔力自体が無いから。

しかしこの場に居るのはクトの学校に在籍していた者達なのだろう。能力として体内に魔力が存在しているそいつらは、魔力の影響を僅かにだが受けるようになる、と。そういうことで良いのか？

《そつだネー、だいたいあつてるヨー》

そうか。………ならば、オルゴールは片付けた方が良いか？

「だめっ！止めさせないよっ！」

………何故クトがそれを言うのだろうか？ そして何故止められなければならぬのだろうか？

「大丈夫だから！影響とか私が押さえるから！ね？」
「……わかったわかった、やってくれるなら問題ない」
「よっし！」

なぜか片付けようとしたら止められた。どうやら相当気に入ったらしい。

……まあ、クトが何とかすると言っているのだから、それで良いか。

なんだか久し振りの気がする白兔です。きっと気のせいだと思っ
ているけど、本当はどうかな？

……そんなことはいいや。とにかく今は文化祭を楽しまなくっちゃ。

瑠璃と一緒に仮装をして学校を回る。みんな思い思いの格好をして
いるから目立たないけど、確かに私達はここに居る。

色々なものに興味を示す瑠璃と私は、見る人が見れば仲の良い姉妹
に見られると思う。主に身長とおっぱいの関係で。

……瑠璃は私と同年だよな？ 何でそんなにおっきいの？

じいじい、と見つめていると、瑠璃に優しく叩かれた。怒っている
様子はなかったけど、どこことなく責めるように

「セクハラだぞ」

って言われた。可愛かった。

白兔は変態淑女に進化した？

え？ してないよ？ 変態だったとしてもそれはきつと変態と言っ
名の淑女か愛の暴走だよ？

「先生それは十分変態だと思うなあ？」

フルカネルリだ。十一月の二十八日、初雪が降った。

「あははははっ！えいっ！」

「ぷはっ！？ あははは、やったなあ校長せんせー！お返しだー！」

「わっ！？ 固めてないのに投げるのはずるいよ！避けられないじゃない！」

「それそれー！」

「もう！えいっ！」

……………クトは実に楽しそうだな。あまりはしゃぎすぎて風邪を引かないか心配だ。

《一応言っておくけどネー？ クトちゃんだって上位の神様なんだヨー？ だいじょぶだってバー》

最近、貧血を起こして倒れていたような気がしたが？

《……………おーいクトウグアー、クトちゃんがはしゃぎすぎて倒れちゃったヨー？》

「なにい！？ クト！大丈夫かクト！？ 衛生兵ー！！！」

「学校に居るわけじゃないでしょうがこの馬鹿！そんなことをしてる暇があるんなら、さっさとクトウルフの所につれていきなさい！」

「ぶべらっばー！」

……………仲の良いことだ。

ぼんやりと窓から空を見上げる。銀色の小さな月が私を見下ろして輝いている。

私の作った世界の月はあれよりずっと小さいが、その分近くを回っているため数段大きく見える。

魔力の流動によって赤くなったり青くなったりとところどころと色を変えるが、その周期はおよそ四季と一致している。

流石に太陽の色は変わらないが、太陽も太陽でたまに恥ずかしがって顔中に黒点をだして真っ黒になってしまうことがある。困ったものだ。

《普通は困ったで済ませるようなことじゃないんだけどネー》

私にとってはその程度のことだ。ナイアにとっても似たようなものだろうか？

《……まあ、そうだネー》

『……わたしにとってもお……似たようなものねえ……』

そうだろうか？

また空を見上げる。ハスターと契約してからと言うもの、風を読み、そして風そのものを見ることができるようになった。

もちろん見ないようにすることもできるので今は見えなくしているが、風を見えるようにするとわかるあの流れは美しい。それで一枚絵を描いたこともある。

ただ、私の絵の中には誰もいないことが多い。風景ばかり描いていて、たまにナイアやアザギ、ハヴィラックにプロトが入る程度。

それが多少寂しく思えるときもあるが、数秒でその事は気にならなくなる。

……ぞわりと言う感覚と共に、風の流れが変わることがわかった。空に所々被さっていた雲が払われ、黒一色にぼつぽつと銀や金などの光の粒が見えるようになってきた。

あまりにも不自然な風の動きだったので原因を探してみると、学校の屋上にハスターが立っているのが見えた。

《ほら、そんなところではなくこちらにきたまえよ。お茶を用意してあるからね》

《筋弛緩剤入りかい？》

《いやいや、私と同じものを同じ相手に使うものか。今回は少し強化してあるよ。これなら呪いを抜いて少しは効くんじゃないかな？》

……ふむ……今の私に効果のある薬か。興味深いな。死にはしないだろうし、飲んでみるか。

《フルカネルリの考えることがわかんないヨー！》

気にするな。それでこそ私だろう？

……ふむ。動かん。ピクリとも動かん。これが筋弛緩剤を受けた時の状態か。

目も開かないし口も閉じられずに僅かに涎が垂れてしまっている。まったくはしたない。

呼吸はできるし心臓も動いているから死ぬことはないだろうが……

さて、薬の効果はいつごろ切れるのだろうか？

「……ハスター。どれだけ強化したのサー？」

「安心したまえナイアルラトホテプ。かなりの強化をしたが、けして死なないように、生命活動を続けることに必要なところには効果が無いように調整してある。動けも話せもしないだろうが、ナイアが本気でやればさっさと治せるさ。風の私とは違って、君の本分は土なのだから」

「……ああ、確か陰陽五行では人体は土行だったな。ナイアならこの程度は朝飯前だろう。夜だが。」

「……ん？ 少しだけだが動けるようになってきたな。私の体の免疫力のせいかな？」

「今まで一度も病気にかかったり毒が効いたためしなかったからわからなかったが、どうやらわからなかったただけですいぶん強くなっていたらしい。」

「ぐっ、と体を起こして見ると、ナイアとハスターがかなり本気で驚いているらしい目を向けてきた。」

「……並みの人間なら二週間は自力では動けない程度に効いているはずの薬を、こつこつと容易く無効化するか……」

「……ボクが言うのもあれなんだけどサー……フルカネルリってほんとに人間であつてるノー？」

「……人間じゃないナイアが、言う台詞とは思えないわねえ……」

「そう呟く三人（全員人外）をスルーしながら手を握り締めたり緩めたり、いつも朝やっている演武をやってみたりと体の調子を確認する。」

そこで驚いたことが、一度完全に力の入っていない脱力状態になつたせいかな……妙に体の切れがいい。

具体的に言うと、今までは強弱のダイヤルだけしかなかった力の入れ方に、オンオフのスイツチが新しく追加されたような感じだ。

メリハリがきちんとつけられ、さらにダイヤルを強にしたままスイツチを切つて脱力し、一気に力を込めることができるようになった。

……ふむ……ふむ。これならそれなりに鍛えた大人程度の身体能力しか無くとも、やり方によつてはかなりの速度を出せるようになるかもな。

……さて、それじゃあそろそろいつも起きている時間だし、私は家に帰るとしようか。

さらに武の坂道を駆け上つたフルカネルリ。

フルカネルリだ。今年はスキーに行くことにした。久し振りに氷雨と話をして変わったことが無いか聞いておきたいしな。例えば地球温暖化で辛くないか、とか。

《……辛いと思うヨー。なんか作っていつてあげたラー？》

それもいいな。魔力はあることだし、電池式にして冷却魔法もしくは凍結魔法の術式でも渡してやるか。

……出来た。作成時間二秒。

《速くなったネー》

『……始めはあ……何時間も、かかったのにねえ……？』

そうだな。これも成長加速の恩恵の一つだろう。

いつものスキー場に到着。早速滑りにいくことにする。術式を渡すのは、二十五キロコースを三回滑り終わってからでいいだろう。

《七十キロも滑ってたら日が暮れちゃうと思うヨー？》

リフトを使わず転移する。そしてスキー板を魔力で被って滑りやすくして加速する。減速にも魔力を使ってやれば問題ない。

《……問題だらけだと思うのはボクだけかナー？》

『……わたしも、問題だと思っわよお……?』

そうでもない。ばれなければ。

……さて、行くか。

ひゅん！と空間が曲がったと思えば、私は山の頂上近くの一番長いコースの出発点に立っていた。

板をつけてストックを持って、ゴーグルをつけて。さて、出発だ。

三周終わったところで氷雨に会いに行く。術式はしっかりと持っているし、魔力電池（仮）も丸二年分は用意してある。

まあ、必要ないと言われてしまえばそれまでなんだがな。

《多分必要だと思っけどネー?》

そうか。

「それで、実際のところはどうなんだ？」

『きついです。夏とか本当に暑くなってきました。比喻じゃなくって溶けちゃいそうです』

そうかそうか。雪女も大変なのだな。

『昔は頂上近くの洞窟にいれば夏でも平気だったんですけどね……はあ……』

「そんな氷雨には私の作った冷却術式をやろう。魔力でも妖力でも効果があるように調整してあるし、冬の寒い間に妖力を込めて夏に

使えるように電池のようなものも用意した。試作品だから使った感想を聞かせてくれればそのまま使ってくれても返してくれても構わん」

『ありがたく使わせていただきます』

……美しい土下座とはこういう物の事を言うのだろうか。正座の形と言いつの角度と言いつの背中から首にかけてのラインと言いつの素晴らしい。

《……土下座誉めてもネー……》

『ありがとうございます！』

《喜んじやったよこの子。駄目だもう早くなんとかしてあげないト……》

『……無理だと思っけどねえ……？』

洗脳でもすれば変わると思っがな。

《外道な発言が来ター！？》

『……そんな外道でもないじゃない……ナイアは、大袈裟ねえ……』

全くだ。

《ボクがおかしいノー！？ そんなことないよネー！？》

夏の間、私は洞窟の中で直射日光を避けながらひっそりと過ごしている。

日光は熱いから嫌い。夏は暑いから嫌い。クトさんは熱かったり冷たかったりしてよくわからないけれど、クトウグアさんは暑苦しいから嫌い。

本当のところ、暑いと私は溶ける。文字通り溶けて水になる。それに、全部溶けたら元に戻れない。だから暑いのは嫌い。

けれど最近是我的夏の間の住処である洞窟の中の氷が溶け始めるという事態になり、私が服に妖気を通して温度を下げるということをしているのだが……年々暑くなって行く今の状況のままでは、いつか私が消えてしまっただろう。

それでも妖気を使わなければ緩やかな消滅の危機であるため、使わないわけにも行かずにただ自らの身を削ってわずかな時間を永らえるだけだった。

それが、今ではどうだ。

洞窟内は夏だというのにキンキンに冷えていて、岩から染み出す水滴は滴る前に凍り付く。

私は冷気に体を浸し、ここ毎年消費し続けていた分の妖力を回復していた。

「……………はあ……………極楽、極楽……………」

……………まるで年寄りが温泉に浸かった時のようだった？ 五月蠅いよ。実際極楽なんだ。

考えてみればわかるだろうけど、私にとって氷を溶かす温度の空気というのは、人間で言えば砂漠の太陽に直接焼かれているにも等しいこと。

そんな状態から自分にとって最高の状態になれば、こうしてだらけ

てしまうのも仕方ないだろう。

.....
はあ.....

九死に一生を得た氷雨。

フルカネルリだ。初詣には私服で行った。私としてはあまり行きたくないのだが、母も父も行くこう行こうと騒ぐので仕方ない。

……やれやれ。

《まあまあいいじゃないカー。フルカネルリだって実のところ少しは楽しみにしてるんだロー？》

少し前まではしていたがな。今ではそんなことは全く無い。

この神を殺してしまったあの時から、私はこの神社が好きではない。見守を作ろうと思いついた時に、神域のサンプルとして調べたとき以外にここにあまり近づこうとしなかったということであるだろう。

……まあ、別にあの神に祈らなければならぬと言っわけではないし、ここは適当に私の信じる神に祈りを捧げてみるか。

……ナイアとクトとクトウグアとアブホースとハスターと見守とクトウルフとノーデンス……こんなものか。

ちなみに、ノーデンスとは学校の図書室で知り合った。図書室の司書として働いているらしい。

《へー？ よくノーデンスが神だってわかったネー？ 隠してるはずなだけドー………何デー？》

主に勘。それと雰囲気と発言だな。

……ところで、ノーデンスはどちらかと言えば邪神だが、違う顔も持っているだろうと思うのだが……違うか？

《……あつてるヨー》

そうか。まあ、ノーデンスにはまだまだ届かないし、あそこまで話が合う者も早々いないし………研究は基本的には魔眼による解析一本に絞られることになりそうだ。

私はまだ神の研究を諦めたわけではない。下級神のカテゴリに入る一部の解体と解析はしたことがあるが、それだけでは不十分だ。

私には、もっと知りたいことがある。

それは難しく、遠く、私が死に、存在が滅び、あらゆる存在の記憶から消え去るほどの時間があつても叶わない可能性が高い。

……だが、それがどうした。可能性が低いなら低いなりにやればいい。ゼロでなければ十分だ。

私は知識が好きだ。他の者から与えられた知識ではなく、私自身の手で探し、見付け出した知識を集めることが好きだ。

そのためならば荒事に首を突っ込むこともするし、必要があれば下げたくない頭も下げよう。

確率が低いなら引き上げる。引き上げなくともその低い確率を掴めばそれでいい。
何をしてでも。

……さて、研究を続けよう。世界の未知を既知へと変えるために。未知と言う道は終わらない。終わったように見えたとしたら、それはただの知識の不足か諦めだ。

既知の道が途絶え、未知がその先を覆う全ての世界で。私は未知を既知に変えるために歩き続けよう。

この身が朽ち果て屍を晒し、私の全てが失われるその時まで。ただ、ずっと。

……こんな私のことを、手伝ってくれるか？ ナイア。アザギ。

《……ふふふふ……もちろんだヨー！たえフルカネルリが嫌がったとしても、勝手にして行くサー！》

『……ふふふふふふふふふふ……当たり前でしょう……？
わたしはぁ……瑠璃が、好きなんだからぁ……ねえ……』

……そうか。そいつは、実にありがたいことだな。

……ああ、実に……ありがたい。

フルカネルリの野望。神を含めた全てを既知にすること。

フルカネルリだ。恒例となった豆まき大会だが、今回はクトが恐ろしい物を持ち出してきた。

それは何かと言えば、銃。それも単発式ではなく、連発式の散弾（豆）を撃ち出すタイプの。

「……ま、待ってくれクト。何でそいつがあるんだ？　なんでお前はそいつの銃口を俺に向けてんだ？」

「女の子の純情を踏みにじった罰だよ？　具体的にはアブホ」

「クトちゃん。私が直接やらないと駄目なの。だから………ここは私に譲ってくれない？」

アブホースの優しいお願い（絶対零度の気配付き）に、クトはくすぐくすと優しくワラって答えた。

「はい、アブホースさん。秒間三億発の×15だけ撃てますから、手加減なしでやっちゃってください！」

「わかってるわよ。誰がこれを作ったと思ってるの」

「………そうでした」

この間、終始笑顔。しかしかなり雰囲気怖い。

………そういえば、未来のことを考える以外で何かを怖いと思ったのは久し振りだな。

そうだ、この感じ。この感触だ。恐怖とはこうだった。あまりにも久し振りすぎて忘れていたな。

《いやいやそれは人間として忘れちゃ駄目でショー？》

私も人間だからな。忘れることくらいあってもおかしくはないだろう？

『……ふふふ…… そうよねえ……… おかしくなんて、ないわよねえ………』

《……そうだけどサー……… なんか納得いかないんだよナー………》
気にしても無駄だ。諦めておけ。

「それじゃあ、さっさと死になさい。大丈夫よ、クトウグアなら死んでも元通りだから」

そう言いながらアブホースは構えた銃の引金を引く。

「いや、待て、確かに平気だけど痛いものは痛いぎゃー！！」

…… ああ、あれは痛いな。全身があつという間に豆に埋め尽くされてしまった。

…… いや、正確には豆を埋め込まれたと言う方が正しいのか？

《なんにしる痛そうだよネー》

『……痛いでしょうねえ………』

まったく。いったい何をしたんだクトウグアは。

「お兄ちゃんが何したか？ アブホースさんに冗談でほっぺにキスしたんだよ。アブホースさんが『お持ち帰りOK!』っていう空気を出してるのに」

……よくわからないが、クトウグアの奴は馬鹿なんだな。

《いやつなんだけどネー……バカなんだよナー……》

『……お馬鹿さんねえ……』

そうだよな。

……まったく。好きなら好きとさっさと言えばいいものを。婚前交渉をしたくないなら理由を含めてしっかりと話し合えば良いだろうに。

……ただ、その場合は人生……じんせい神生の墓場一直線だろうが……まあ、惚れた相手と一緒になら平気だろう。

《……よく忘れるんだけどサー……フルカネルリって、結構ロマンチストだよネー？ 現実をしっかりと見つめてるのにサー》

何を言っているんだか。

現実がこうであるからこそ、ロマンチストは遙か遠いロマンを追い求めるのだよ。

《……へー。なんだか乙女チックだネー》

五月蠅い、五円玉を眼球から脳までぶちこまれて死ぬ。

《久々に聞いたけどやっぱり手厳しいー！？》

『……瑠璃だもの……当然でしょう……？』

そうだ。私だから仕方が

ダダダダダダダダ……！！

「あははははは！削り潰れなさいっ！」

「妙にグロいこと言ってるじゃねえよっおうばっ!？」

……。

《……削り潰れろっテ……》

『……怖いわねえ……あはははっ……』

……やれやれ。

今年の豆まき大会は、もっとも多くの豆を鬼クトウグアにぶつけたアブホースが優勝となった。ところでこの優勝とはいったい何で決まるのだ？

「すべての鬼にぶつけられた豆の数のうち、合計数が一番多かった人が優勝だよ？　今回はダントツでアブホースさんだけだ」

まあ、あれは仕方がないな。さすがにあれに追い付けるほどの速度で豆をぶつけるのは気が引ける。

《……できない訳じゃないんだネー？》

ああ、できる。やるつもりはないがな。

「えーっと、優勝者のアブホースさんにはお兄ちゃん……じゃなかった、クトウグア副校長との休暇が与えられます。ハスターさんやクトウルフさんからも、見ていて鬱陶しいからさっさとくっつけ馬

鹿共という暖かい言葉が贈られています」

「ちよつ!? 聞いてないわよ!？」

「言ってますんし。今言いましたし。それと……頑張ってくださいね? 私はその日は家に帰れませんから」

おお、どんどんと外堀が埋められていく。ヨグソトス印の妙薬（文字通りの妙な薬）などどこで手に入れたのやら。

《あ、ボクがあげたヨー。クトウグアの鎖も切れたシー、そろそろくつついてくれると嬉しかったからアブホースがクトウグアの所に言ったら盛れってネー》

何をやっているんだお前は。友神に薬を盛ろうとするな。

息子に薬を実際に盛った私が言う台詞ではないが。

《そう言えばそうだよネー》

豆まきと言つ名を借りた肅清の形をとつたラブロマンスのふりをした外道物語。

「ちなみに休みをとらせた次の日、アブホースさんは足元がおぼつかず、お兄ちゃんを見ると顔を真っ赤にして逃げていました。ついでにお兄ちゃんの部屋から出されたシーツには血の跡が。……お洗濯が大変です」

フルカネルリだ。今日は楽しい雛祭り……全く楽しくない。雛霰は美味いかな。

《ポリポリ……美味しいネー。なんかたまに食べたくなる味だヨー》
確かに、そんな高頻度で食べたいとは思わないが、たまに無性に食べたくなる。カップラーメンやスナック菓子と同じだな。

『……………（ポリポリ）』

……………美味いか？

『……………ええ……………』

久しぶりの同窓会。裕樹さんと一緒に、地元の友人がやっている居酒屋まで歩く。

「いや哀華。あそこは居酒屋じゃないよ？」
「居酒屋でいいわよ。私達はほとんどそついう風にしか使っていないんだし」

私が言うと裕樹さんは苦笑いして頷いた。

「そうだけどさ……………あ、見えてきたよ」

視線を向けるとそこには、久しぶりに見る友人たちの姿が。

「やつほー哀華。元気してたー?」

「もちろん元気よ。裕樹さんも……………ね?」

「……………けっ。爆発しろリア充め」

「あらあ? みつちゃんにも春が来たって聞いたんだけど?」

「ツ!?! だ、誰から!?!」

「ひろくんから電話があつたわよ? よかったじゃない。これでみつちゃんもリア充の仲間入りね」

「……………あ……………のっ……………馬鹿が……………っ!」

あらあら怒っちゃった。ごめんねひろくん、頑張つて?

ちらりと視線を向けると、裕樹さんも懐かしい顔の所に挨拶にいつている。肩を組まれたり叩かれたり、リア充爆発しろと言われたり……………あら、私とおんなじこと言われてるわね。

お揃いね

「……………変われば変わるもんだな。あの冷血女がこんななつちやうとは……………愛つてのは怖えや」

「そんなものよ、みつちゃん。みつちゃんだつて丸くなつたじゃない。具体的には私と弓で勝負してぼろ負けになつたからつて弓を長物みたいに使つて喧嘩なんてしてこないでしょ?」

「今まさにやりたくなつたそコラ」

「あらあら、それでも負けちゃつたみつちゃんが、ずいぶん大きく出てくるわねえ……………」

「……あん時の私と今の私を同じに見てると痛い目見るぞ?」
「……へえ? なら、試してみる?」
「は! 飛び道具持っていない哀華なんぞ、私の相手になるわけねえだろ」

私とみっちゃんはお互いにきつい目で見つめあって……

「……ぷっ!」

「……ははっ!」

「あはははははは!」

同時に吹き出して、笑い始めた。

「いやーあははは、やっぱり哀華との掛け合いは楽しいわ!」

みっちゃんが笑う。私も笑う。

「あははは、ほんと、懐かしいわね。あはははは!」

私達は笑いながら店に入る。すぐに裕樹さんも入ってきて、私達に貸しきられている座敷に座る。

さあ、それじゃあ始めましょうか。

私達の、同窓会を。

小学校から大学まで。ずっと私達は一緒にやって来た。その長さの分だけと言うのはおかしいかもしれないけれど、私達の同級生は仲がいいことが多い。

大抵はクトウグア先生が持っている企業がクトウルフ先生が持っている病院に勤めることになる。もちろんそれ以外の道に進む人もいるけれど、それでもあまりこの町から離れたいと思う人はいない。そのためこの町は、ある意味では一つの国家のような物になっている。

……まあ、私にとっては裕樹さんと瑠璃ちゃんと、三人で仲良く暮らせて、たまにこうやって友達と集まって騒いだりできればいいんだけどね。

「うえええん彼氏がほしいよおおお！！哀華あ何とかしてかっこのいい彼氏をくれよおおお！！！！」

「……そんな無茶な……………」

……ああ、裕樹さんはあげないよ？ 取ろうとしたら脳天ブチヌク。

「哀華ああって怖っ！？ 酔いがまとめて消し飛ぶくらい怖っ！！？」

「…………裕樹さんに手を出したら……………（キリキリキリ…………）」

「出さない出さない出さないから矢をつがえてあるボーガン下ろして！！」

「みっちゃんの心臓に向けて？」

「ちげえよ！？ な、南雲っ！お前の妻が暴走してんぞ助けるマジで！！」

うふふふふふふ……………ど・こ・か・ら・ぶ・ち・抜・こ・う・か・な

「こら哀華。駄目だろうそんなものを人に向けちゃ。向けるときは大切なものを守るときだけで十分なんだから」

優しく私を抱き締めて、裕樹さんはそういつてくれた。
それを見ていた周りからは、口笛や囃し立てる声がある。

……まあ、いつものことね。

同窓会ではこの程度の暴走はいつものこと。

フルカネルリだ。四月に入り、新入生が入学し、私達も最高学年になった。年々階段を上がるのが面倒になってくるが、まあ、仕方無い。

……それにしても桜か。私には風流と言うものはわからないが、美しいものを美しいと思うことはまだできる。

ひらりと舞い落ちる桜の花弁を一つ、片手で掴み取る。

その手を目の前で開くと、わずかに歪んだ桜が風に吹かれて舞い上がった。

くるくると身を翻らせる花弁を目で追っていくと、散る前の五つの花弁を持った一つの花が目にはいる。

……ああ、平穩というのも、良いものだ。

《……そうだよネー……平穩じゃなかったら落ち着いて研究もできないもんネー……》

ああ、実にその通りだ。だからこそ私は今までの世界で拠点作りを重要視したのだから。

……それのお陰でデイオを育てて観察することもできた訳だし、周囲のことをあまり考えずに研究を進められたのだし。

研究に続く研究の日々。たまには脳を休める日があってもいいと思
い、ゆつくりと一日を過ごすことにした。

揺り椅子に座り、膝に薄い毛布を掛け、眼鏡をかけて、研究とは一
切関係の無い本を読んでいる。

《……なんだかフルカネルリがおばあさんみたいに見えるヨー》

……ふう……いい風だ。そう思わないか？ アザギ。

『……そう、ねえ……よくわからないわあ……』

……そうか。

きい、と木が軋む音を聞きながら、揺り椅子を揺らす。

……きい……きい……。

「……ふう……」

……疲れてはいないが、眠くなってきたな。
昼寝は久し振りだが……まあ、良いだろう。

目を閉じて、呼吸をゆつくりと落ち着けていく。

ざわざわとした風の音と、草木が擦れる音。そして揺り椅子の軋む
音がまるで子守唄のように、ゆるりゆるりと私を眠りの沼に引き込
んでいく。

……お休み、アザギ。お休み、ナイア。

《……ん。お休ミー》

『……おやすみ、瑠璃……』

揺り椅子に揺られながら目を閉じたフルカネルリを見ると、どうしてかボクも少し眠くなってきた。

ボクには睡眠なんて娯楽以上の意味は無いものなのに、おかしいネー？

『……おかしいわねえ……でも、私も眠くなってきたわあ……』

アザギはゆっくりとフルカネルリの周りを回りながら、フルカネルリと同じように目を閉じた。

『……飛ばされないように、固定しておいてくれないかしらあ……』

『？』
『《そのくらいだったら別にいいヨー》』

くるり、と指を回して椅子を作る。フルカネルリが座っている揺り椅子と同型のそれにアザギを座らせて、固定する。

『……ありがとう……ねえ……』

『《気にしないでいいヨー。ボクにとっては大したことじゃないからネー》』

……。それに、どうせボクも寝ちゃうからついでみたいなものだしネー。

それは言わずにボクもゆらりと浮かんで目を閉じる。木陰でこうして眠ってみるのもいいね。平和で。

人間は生き急ぐ。寿命があまりにも短いからそれも仕方ないけれど、その姿はある意味では少し羨ましかったりもする。

ボクたちみたいな寿命が無いに等しい存在は、そうして生き急ぐ気持ちかわからないから。

ボクたちが死ぬ原因は、だいたい子供を作って寿命があるレベルや死んだらちゃんと死ぬような力まで落ちること。それを望んで子供を作ろうとする馬鹿もいるし。

……ちなみに、子供を作ったからって確実に死んだらちゃんと死ぬくらいまで力が落ちるかと言われればそれは違う。子供を作ってもまだまだ寿命がないようなやつも普通にいるし、むしろ強くなるよ
うなやつもいる。

理由？ そんなのは知らないサー。ボクにはまだまだ早いことだし。
！。

ゆっくりと深呼吸。別にする必要も意味もないけれど、やっておく。

……………いい天気だサー……………。

たまにはのんびり。

ふと目が覚めると、私の周りには沢山の動物が集まっていた。

例えば鳩。そして猫に犬。なぜか喧嘩をすることもなければ食い合うこともしていない。

その他にもネズミが居るし、虫もいる。蝙蝠も居れば白兔も居る。

《……白兔ちゃんは動物カウントなノー？》

人間は動物だ。間違いない。この場で動物でないのは、草木とアザギとナイアくらいなものだ。

《確かにネー》

2・75(後書き)

もしすぐ異世界です

フルカネルリだ。5月と言えばゴールデンウィーク、と白兔は言っていたが、ゴールデンウィークだろうがなんだろうが私の休みの日にやることは一切変わらないということに気が付いた。さて、研究だ。

《若いもんがやることじゃないよネー》

今日の研究はナイアの体について調べようか。さあナイア、その台の上に寝てくれ。

《怖いこと言わないでヨー！やだヨー！？》

そうか。かなり本気で残念だ。

ナイアが嫌がったので、仕方無く先送りになっていたナイアの涙（律儀にもフラスコに入れてとってあった）の解析することにした。

……そうだな。ゲームのアイテム風に記録しておこうか。

【ナイアルラトホテプの涙】

道具。所有しているとその涙に込められた悲哀の念により、病にかかりやすくなる。ただしこれはナイアルラトホテプに加護を受けて

いれば無効化される。
等量の水と混ぜれば大幅なステータスアップが見込める薬が出来る。道具として使用すると不死の呪いを受ける。ただし、不死であるだけなので古いもするし飢えも乾きもする。たとえ体が細胞の欠片になろうが灰になろうが生き続ける。
それと同時に猛毒状態になり、毎秒残りHPの七割のダメージを受ける。
更に全身が麻痺して動けなくなり、ゾナ八病に似た症状を見せる。治療法は一度体を粉碎されること。

【邪神の妙薬（地）】

ナイアルラトホテプの涙と水を混ぜて作られた薬。使うと大幅なステータスアップが見込めるが、使用前の精神力が800000以上なければ発狂する。また、使用前のHPと素の防御の値が合計1800000以上無ければ副作用で全身が焼け爛れ腐り落ちて蒸発する。
ちなみに、世界にもよるが基本的にレベル100の人間の精神力は高くても800程度。HPもその程度。防御は素だと300ほど。人間が使用するのをおすすめできない。

《おすすめできないってレベルの話じゃないんだけどネー》

『……………瑠璃ならあ……………平気そうな気がするわあ……………？』

いや、流石にこれは無理だな。精神力の数値がいくつあるかは知らないし、同時にHPと素の防御がどの程度あるかも知らない。それでも、これはまずいな。飲んだら確実に私の呪いをすり抜ける。

《すり抜けるけど大丈夫だヨー。ボクに加護と共鳴して負の効果か

消し飛ばし、第一フルカネルリのステータスなら大丈夫サー》

……おすすめでできないってレベルの話じゃないと言っていないかったか？

《人間にはネー。フルカネルリはもうそろそろ神になれるヨー。どうすルー？ なってみルー？》

やめておこう。私は人間のまま限界に挑んで見せよう。そして人間の限界を悟ったならば、その時にでもなってみるさ。

フルカネルリにお願いされて、そのために泣かせたりする必要はないけどチャンスがあったら他の邪神達の涙をとってきてほしいと言われた。

暇だし早々ないことだし気楽にOKしたんだけど………なんでこんなときに限ってアブホースが飲み屋で泣きながら愚痴ってるかナー。なんでこういうときに限ってクトウグアとクトちゃんがフランダーズの犬を見て泣いてるかナー。

なんでこういうときに限ってハスターが間違えて邪神用催涙ガスをぶちまけてるかナー。

なんでこういうときに限ってクトウルフが指先を針で刺して泣いてるかナー。

……まあ、フルカネルリの運は豪運だサー。ある意味じゃあ当たり前なのかもネー。

そして集めてきたそれを使って、フルカネルリは同じように薬を作った。

効果はほとんど同じのその薬。一本だけは回復薬（回復しすぎてHPの最大値と現在値の差が500000以上無ければ確実に死ぬ。ちなみに500000あつても死ぬときは死ぬ。確実に生き残りたのなら1000000は欲しいところ）だけドー、結局普通の人間には使えないって事はわかった。

……フルカネルリは本当に人間なのかナー？ 下級の神であつても、あれを持つてるだけで精神を削られて発狂したっておかしくないだけドー……。

……まあ、フルカネルリだったらある意味当然かナー。よくよく考えてみれば元々発狂してるに等しい思考回路をしてるわけだしネー。発狂したモノを更に発狂させることはできない。もしできたとしたら、それは元々は発狂していなかったというだけの話。

まあ、発狂してようがしてなかるうが、フルカネルリはフルカネルリな訳だし……特に何かが変わるってこともないしネー。

研究大好きフルカネルリさん。

2・77(前書き)

今回は短いです

フルカネルリだ。さて、三度目の異世界旅行となるのだが、ここで一つ質問がある。

レベル制ゲームと聞いて、一番始めに想像する物はなんだ？

《ボクはドラ食^クエかナー？ 勇者一人で魔王を倒したあの感動は忘れられないヨー……》

『……そうねえ……アー食^クザラッド？、かしらねえ……ちよこちゃんはあ……可愛かったわねえ………』

そうか。

まあ、なぜこのようなことを聞いたかと言えば……次に行く異世界がそう言った世界だからだ。

ただ、レベル制とは言っても一人一人レベルの最高値は違い、レベル30で止まるものもいれば100になってもまだ上がる者もいる。ゲームのように一定ではない。

そしてその世界にはスキルポイントやステータス画面等が一般化しており、本人が見たいと思えば簡単に出せ、さらに他人には見せようとしないうり見えないらしい。

……実に便利な仕様だな。どうやっているんだ？ その世界に生まれた瞬間に世界が出生登録でもしているのか？

《それかなり近いヨー。大体そんな感じサー》

そうか。

ところで、私のレベルはどこからなんだ？ 1か？ それとももっと高いのか？

《どっちがイイ？》

1の方が良いな。あまり遊んだことはないが、レベルは低い方が次のレベルに上がりやすいと聞いたからな。

《じゃあそうしておくヨ》

助かる。

……………さて、準備は良いか？

服は三組持った。白衣も着れるのを十二着持った。

《白衣だけ多くなイ？》

何を言っているんだ。研究時に着る六着と、予備の三着。それに外出用と戦闘用と正装の三着。本来なら研究用の予備は十二、外出用の予備を一、正装用の予備を一、戦闘用の予備を三。それぞれ持っていきたいのだが、この世界で作るのは疲れるからこれしか用意していないんだ。

《正装まで白衣なんダー？》

科学者の正装と言えば白衣だろう。私はそう思っている。

……それと、頑丈を通り越して最早堅固な双振りの大型ナイフと、あまり使われていない大型の拳銃（銃剣付き）。私の魔力や霊力等を固めた石と、最近作ったばかりの薬をいくつか。

科学と魔法と妖術とその他諸々を掛け合わせて出来上がったそれらすべてをポケットに入れ、旅の支度はできた。

……今回はどんな出発だ？

《こんなだヨー》

足元にいきなりトランポリンが現れた。とりあえず跳んでみたが、三回目で凄まじい勢いで上空に弾き飛ばされた。

天井にぶつかると思ったがそんなことはなく、私は異世界の青空の下で上昇を続けていた。

…… Hello . Another World .

異界旅行、三回目。

通常スキル

二刀短剣：LV9 (+118)
二丁拳銃：LV9 (+246)
長剣：LV9 (+63)
槍：LV9 (+58)
狙撃：LV9 (+93)
気配遮断：LV9 (+239)
体術：LV9 (+980)
魔導：LV9 (+1361)
高速思考：LV9 (+1755)

保有属性

火：LV9 (+255)
地：LV9 (+257)
水：LV9 (+36)
風：LV9 (+137)
光：LV9 (+36)
闇：LV9 (+629)
氷：LV9 (+182)
岩：LV9 (+255)
回復：LV9 (+81)
無：LV9 (+40)

特殊スキル

悪霊の加護：Lv9 (+52)
地神の加護：Lv9 (+212)
炎神の加護：Lv9 (+210)
風神の加護：Lv9 (+92)
火竜神の加護：Lv9 (+36)
地竜神の加護：Lv9 (+36)
炎竜神の加護：Lv9 (+36)
風竜神の加護：Lv9 (+36)
光竜神の加護：Lv9 (+36)
闇竜神の加護：Lv9 (+36)
見守の加護：Lv9 (+41)
邪神の加護：Lv9 (+532)
対神：Lv7
経験値25億倍
状態異常無効
下限値固定

】

……さて、私の記憶が正しければ、確かこの世界の生物のスキルの上限は基本的にLv9だったはずなんだが？

《上限突破したヨー》

……地神の加護はLv3だったと思うが？

『《この世界だと強くなってるみたいだねー》
『……わたしの加護も、ねえ……』

……そのようだな。

体力や他のステータスについては………まあ、良いだろう。隠しパラメーターがありそうだが、それはゲームでも変わらないしな。

《ポケモ の努力値みたいなものだネー》

何故ナイアがポ モンを知っているかは聞かないでおくが、そうだろうな。

まあ、実際にはより多くの者と戦ったという戦法の引き出しのような物が増えるのだろうな。

つまり、経験値は性能面の、隠しパラメーターは技術面の経験値と言っわけか。軽くだが理解できてよかった。

……さて、それではまず、この世界について調べなければな。

この世界の魔法……魔導と言っらしいが、その源は己の中から湧き出してくる意思の力であるらしい。ステータスのMPと魔力の合計がこれにあたり、MPは使うことができる回数（多数消費する魔導もあり）、魔力は精密な操作や威力に深く関係するらしい。

ちなみにこの情報の情報源は歩いていたら見付けた魔導学校の生徒の脳味噌。解析したら結構簡単に出てきてくれた。

……所で、経験値はどのような時に入るのだろうか？ ゲーム等ではモンスターと戦って勝利したときに入ってきたり、戦闘中に何らかの行動をとると入ってきたりしたのだが。

例えば、子供が外を走り回ると筋肉を使うわけだが、それで経験値が入ったりする事は無いのだろうか。

それともそういう行った行動は経験値稼ぎにはならず、Lvが上がった時のステータスの上がり幅が大きくなるだけなのか？

……そのあたりの事は魔導学校の生徒もわからないらしいので、また今度知っている相手がいたら確認しておくことにしよう。

それとステータス画面だが、解析したら見えた。名前から何まで確認と。

……所で、私のステータス画面には身長体重スリーサイズの欄は無かったのだが、その魔導学校生にはあった。解析したからわかったのか……？

……そういうことにしておこう。

私は最近また大きくなってきた胸を見て、溜め息をついた。

……動く揺れるようになってから、動き辛いんだがなあ……。健康の呪いの副作用……助かってはいるが、副作用がなければ……。まさかここまで邪魔になるとは思っていなかった。あのとときの自分にもう一度考え直せと……。

……なあ、ナイア。副作用と言うのは嘘だろうか？ 実は健康の呪いの他に、胸が大きくなる呪いをかけただろう。 実健康の

《……そうだなー。かけたヨー》

……そうか。

……すー……

貴様はアホかアホだなアホだろうアホめ死ねこの変態セクハラエロエロ邪神が。元男にこんな無駄に大きな乳などいらねいだらうにお

前はこんなものを勝手につけよってなんだ元男に乳をつけて楽しいか邪魔だ邪魔だと思ってる元男を見てその反応を楽しんでいるんだろうムツツリスケベめ溶け落ちるサディストサイコアホエロ邪神いつかお前に性転換の呪いをかけてやる当然巨乳でな。そしてその乳を揉み潰す勢いで揉んでやる覚悟しておけ。

《悪いのはボクだけど流石に酷いヨー!? ……それと、女の子になっておっぱい大きくするんだったら今でもできるけどー?》

ナイアが言つと、ナイアの居たところにはナイアを女子に変えたらこうなるだろうと言つ姿の女子がいた。

…………… よろしい。揉み潰してやろう!

草原に、私とアザギにしか聞こえないナイアの悲鳴が響いた。

フルカネルリの暴走。

《……………しくしくしく……………ボク、もうお嫁にいけないヨー……………》

知るか。どうしても言うならもらってもいいぞ。ナイアだったら構わん。

《……………白兔ちゃんはどんなノー?》

白兔は正妻だ。白兔が良いと言つたなら、だがな。

『……二号は、わたしでいいかしらあ……?』
《アザギにまで先を越されちゃっター!?!》

フルカネルリだ。ステータスを確認し終わったので、とりあえず解析をかけながら歩いている。モンスターも人も居ないので、もっぱら植物や土壌の解析をしている。

……前の世界のように完全に魔法で作られているわけではないが……やはりこの世界でも魔導が世界に根付いているようだ。

便利な魔導のお陰で科学が進まない。私はそれでも構わないが。

……さて、この世界ではどのような謎が待っているのやら。

先程の学生の頭から読み取った情報からするとこの世界は相当平和であるようだが……私の居るうちに、なにか大きな事件が起きる気がして仕方ない。

どのようなものかは不明だが、それは恐らく私にとっても悪いものではないだろう。

《それじゃあ、まずは散策だネー》

そうだな。情報は大切だからな。

楔の術式をこの世界風に改造して、情報を取りながら私達は進んでいった。

一歩目でファンファーレが脳内で鳴り響いた。

「スキル【魔導作成Lv1】を入手しました」

「スキル【魔導改造Lv1】を入手しました」

「スキル【魔導具作成Lv1】を入手しました」

「スキル【魔導具使用Lv1】を入手しました」

……… 凄まじい勢いでスキルが増えたような気がしたのだが？

《当然でシヨ。むしろここまで能力値が高くって特殊スキルがあれだけあるのニ、通常スキルがないって言う方がおかしいんだヨ
ー》

……… そうか。

もう一步踏み出すとまたファンファール。魔導具使用がLv2にな
っていた。

……… 早すぎないか？ まだ二歩目だぞ？

《成長加速って怖いネー。現在二十五億倍だヨー》

……… こっちの方の成長まで加速するのか。
そう思っていると、なにもしていないのにまたファンファールが響
いた。

……… なるほど。つまり貰った経験値が切れるまではLvが1ず
つ上がっていくわけか。

しばらくはこの間抜けたファンファールにつきまとわれることにな
りそうだ。

歩き続けて五分。ひっきりなしに鳴り続けていたファンファールが
ようやく収まり、魔導具使用のスキルを見ると、Lvが7まで

上がっていた。

通常はここまで上げるのに、才能のないものは千年かけても不可能で、才能があっても死ぬまでの時間を使っても届かないものが多く、極々まれに天才と呼ばれる者達を鼻で笑い飛ばせるような五千年に一度の本物の天才が二十歳程でなることがある程度のレベルで、ここまで上げるのもここから先に進むのも相当の才能と努力が必要になると言われている。

……言われているのだが……私はただ歩いただけでこんなところまで来てしまった。それも五分程度で。

ちなみにそれだけで五分間ひっきりなしに鳴り続けるわけがなく、記憶にあった術式をこの世界でも使えるように少し弄ったり、弄ったそれを改造したりを繰り返していたらこうなった。

高速思考のLvは上がっていなかったが、【魔導作成】、【魔導改造】、【魔導具作成】のLvがそれぞれ6、7、3に上昇していた。

そして新たに【魔導書作成】が追加され、こちらはまだ手はつけていないためLvは1。これからは少し作った魔導を書き記しておくことにしよう。防御用や暮らして役に立つものばかりだが。

……なんなら、それぞれのページの最初の呪文の名前を連ねていくと自爆魔導が出来るようにしておくか。私が教える相手には見せなければいいし、それ以前にそうやって読もうとする馬鹿は早々いないだろう。

もし読んで自爆しても私は知らない。勝手に読んだそいつが悪いし、私はそれを手放す気は無いので読めたら泥棒だろう。知らないね。

……そうだ、ページの始めの呪文の頭文字に強調点をつけておこう。

そして表紙の裏側に、強調部を続けて読むべからず、と書いておく。強力無比にして最強の魔導が発動する、とでも書いておけば、読もうとするやつも出てくるだろう。自爆するとも知らずに。

……くくくく……いたずらと言つのは楽しいな？

《いたずらの域を軽々と越えていつてるような気がそこはかたなくするんだけドー!?》

『……いつものことじゃないのお………』

《……そう言えばそうだネー》

喧しいぞ。

……それじゃあさつさと作るとするか。立派に見える外表紙に新品に見える紙を張って、それから大したことのない魔導とちよつとした魔導を書き記しておく。

後はこれを劣化しないようにして、適当な迷宮かどこかに放り込んでおけばいいだろう。

洒落にならないいたずらを仕組むフルカネルリ。

《……ところでサー………目的変わってないー?》

……ああ、そう言えばそうだな。ちゃんとまともな物も作って
おしじ。

七十万アクセス記念外伝

これは、昔々の話。まだまだナイアが幼くて、物事をあんまり深く考えなかった頃の話。

「てけりりっ！」

「またですかシヨゴスさん」

「てけり。どうぞ私のことはシヨゴスと呼びすてにしてください」

「嫌だヨー」

「駄目です」

却下されちゃった。いつものことだから、まあ、いいカー。

「それで、今度はいったい何の用かナー？」

「てけり。アザトース様より、お届け物でございます」

「先生かラー？」

「一体なんだろうナー？」

「てけり。なんでも、しばらく前に頼まれていた物らしいですが…
…ところで、紅茶はいかがですか？」

「しばらく前の頼み物……？ あと、紅茶はいただくヨー」

「てけり。準備はできております。どうぞ」

こぼぽ………といつの間にか用意されたカップに紅茶が注がれる。手
品師？

「てけりり。あくまでメイドでございます」
「手品師でもやっていけそうだよネー」

まあ、それでも先生大好きなシヨゴスさんは、先生のメイドさんを続けるんだらうけど。

「てけり。私はこの仕事の事に責任と恩と好意を持っておりますゆえに」

「先生のことが好きって言うのにも反論しないんだネー？ まあ確かに面倒臭がりな先生にはシヨゴスみたいな相手が必要だと思うけど」

そう言ってみると、シヨゴスさんの頬が一瞬だけ朱に染まる。うんうん、シヨゴスさんは可愛らしいネー。先生が困らせたがるのもわかるような気がするヨー。

「……………それではナイア様。お届け物のご確認を」
「わかったヨー。……………何を頼んでたっケー？」

シヨゴスさんに言われて渡された袋の中身を確認する……………ああ、そう言えば頼んでたっけネー。

……………でもサー、先生。シヨゴスさんにこれを運ばせるのは酷いと思うヨー？ いろんな意味でサー。

「なにか足りないものはございましたか？」
「……………大丈夫だヨー。みんなあるサー」

……………中身？ アブホースがクトウグアを誘惑するために探した、布地が薄くて少ないメイド服一式だヨー。

酒を飲ませた時に愚痴られて、ついクトウグアの性癖ばらしたらそれを留意してって言われちゃってサー……。

……まあ、シヨゴスさんには見せられないし、言えないネー。

「そうですか。それでは私はこちらでお暇させていただきます」

「わかったヨー。また来てネー」

するりと消えたシヨゴスさんを見送って、数十秒。ボクはアブホースに念話を掛けた。

「あ、アブホース？ 前に言ってたクトウグア用のメイド服が手に入ったけど……いルー？」

『あなたの家でいいのよね？』

「そうだヨー。来るんだつたら早めにネー？」

次の日。かなり本気でキレているクトウグアが襲来した。

「ナイア死ねえええっ！」

「おつとつトー。いきなり危ないじゃないカー。ボクがいったい何をしたって言うのサー」

「やっかましい！ てめえアブホースにナニ吹き込みやがったあ！」

「クトウグアの性癖をちよつとだケー」

「お陰で理性が吹き飛びそうになったわこのボケナイア！ クトがまだ起きてんのに気付かなかつたら最後まで行つてるところだったぞ！」

「……………ヘタレだナー」

「ヘタレ言うなあっ！！」

「だってヘタレじゃんカー。そこまでやらせておいて手を出さないとカー…… アブホースがかわいそうだヨー」

あんなに勇気を出して着ていったのにサー。

「うるせえ！いいからてめえは黙って死ねえ！」

そう言いながらクトウグアはボクに殴りかかってくる。危ないナー。

……まあ、今回は失敗しちゃったけど、ちゃんとクトウグアはアブホースの事を意識してるからさ。気長にいこう？ ボク達には、時間だけはたっぷりあるんだからサー。

「で、アブホースに襲われたクトウグアは、いったいどこまで押されたのかナー？ キスされて舌を絡ませ合って唾液の交換はしター？」

「うっがあああああ！！殺す！殺すっ！！ぶっ殺してやらあああ
っ！！！」

したのカー。ふーん？

「俺をそんな生温い目で見んじゃねえええええっ！！！」

あっはっはっハー

とある日のクトウグアとナイア。大喧嘩の原因。

フルカネルリだ。着々とスキルのレベルを上げながら歩いていると、町が見えてきた。

見たところ平穩そうな町だ。周囲にあまり防護策が施されたなにかが無いところからもその事が伺える。

この町は、今までに大規模な魔物の群れに襲われたことはないのだろう。かなり弱々しい柵が周囲にぐるりと一周されているだけで、それ以外には大したものはない。

………危機感が足りていないと思うのだがな。

《それで被害を受けるのはこの住人なんだシー、別に良いんじゃないかナー？》

私は別に構わん。研究が終わったあとならば、死のうが滅ぼうが勝手にしろ。

……まあ、私はたまに滅ぶことが前提の実験もするがな。

《そう言えばそうだよネー。ナギちゃんにやったあれだって、後天的に人間の器を広げるための実験の試作品だったもんネー》

思考実験と理論では成功してしかるべきな実験ではあったが、その通りだ。

町に入るのには色々と厄介なことが必要らしいので、とりあえず不法侵入した。色々と見て回って、それからの方がいいだろう。幸い人は多いし、知識の収集には問題ないと思うので、私はそこらに居る人の頭の中身を覗きながら歩き回る。

……ちなみに、これもやると頭にファンファーレが鳴り響く。全くサイレントモードなどは無いのか？

そう思ってステータス画面を私にしか見えないように展開して探してみるが、サイレントモードやそれにあたる物はないらしい。

仕方がないので我慢しながら頭の中を覗いていると、それなりに詳しく知っている者が居たのでその頭の中身を一気に解析して覚え込む。またスキルのレベルが上がった。

この世界の身分証明書はステータス画面らしい。一部……名前を見せればそれで良いらしいので、自己紹介の時や町に入る時等の軽い場合、そして国外に出る時やギルドに所属しようとする時等の重要なもそれで大丈夫らしい。

……だが、私のステータスの名前は登録されていないのだが……フルリ＝カーネルとでもしておけば良いのか？

「名称【フルリ＝カーネル】が登録されました」

……良かったらしいな。

他の者達も、名字と名前の二つを持っていたし、疑われることはあまりないはずだ。これで当面は大丈夫だろう。

それと、経験値についてもいくつかわかったことがある。

経験値はモンスターと戦っているときに蓄積され、倒したときに比べれば少ないが、倒せなくともある程度の経験値は入るそうだ。そしてその経験値は、およそ三通りの使い方がある。

一つは純粹にレベルアップに使う。

自分のレベルは通常これでは上がらず、他に上げる方法は特殊な道具を使うか、もしくは自分より高位の存在に祝福を受けるくらいしか無いそうだ。

二つ目は、スキルのレベルアップに使う。

スキルのレベルはこれ以外にもスキルを使うことによって僅かずつ蓄積されるスキルポイントでも上げられるらしい。

ちなみに私がやっていた狂気的なレベルアップはスキルポイントの方法だ。

そして三つ目。自分のレベルは上げずにステータスのみを強化する。これはまずやるものはない。何故なら、レベルアップで上がるステータスの方が数段上昇値が大きく、そして一つのステータスだけでなく全体的に上がるからである。

ただ、才能の限界、つまりもうレベルが上がらなくなってしまった者で、更に強くなりたいものはこれをやっていることがある。その程度のことだ。

だからこの世界では基本的にレベルが高ければ高いほど偉いと言う風習があり、王公貴族も実際にやっていると言う情報も得た。

……しかし私は、Lvが1でもあのステータスだ。他の者のステータスを見て、あれがどれだけ異常なステータスかも理解した。それだけではなく、私のステータスは今も上昇を続けている。

成長が数値で理解できるこの世界に来てわかったことだが、およそ一秒で攻撃力が300、防御力が280、HPが1300、MPが8200、魔力が16300ほど上昇を続けているらしい。ステータス画面を開いている時はその変動が数値化されないが、消してすぐさま出すと上昇しているという一種のホラーのようになってしまっている。

……………この状態でLvまで上げてしまっただけではつまらないので、よくある縛りプレイをやっつけていこうと思っている。具体的には自分のLv上げ禁止で上げるのはステータスのみと言う縛りプレイ。ハヴィラックとプロトはあの世界の魔力に触れすぎて精霊のような状態になってしまったので今も私の研究室か実験場で暮らしている。魔力がある限りほぼ無限の寿命を持っているので文句はない。特にプロトは私の子だ。何度も死なせるのは忍びない。

そういうこともあって、現在私はいつもの三人で居るので問題ないだろう。

「……………そうねえ……………私も、やってみようかしらあ……………?」
《多分アザギはレベルアップはできないと思うヨー。生き生きしても死人だからネー。精々ステータスアップとスキルアップくらいだヨー》

「……………それでもいいわあ……………面白そうだし……………ねえ……………」

そうか。まあ、好きにするといい。私は私で好きにするさ。

廃プレイを決意したフルカネルリ。

フルカネルリだ。一度町を出てから、もう一度正規の方法で町に入る。私は臆病なので常に解析はかけたままだが。

《臆病っテーwww》

五月蠅い、血液の代わりに血管にマグマを流されて焼け爛れて死ぬ。

《かなり痛い死に方なんだけドー!?!》

だろうな。そういつた死に方をチョイスしているし、当然だろう。

……だが、嘘はよくない。別にその程度で死にはしないだろう？

《死にはしなくてもその死に方をしたらすっごい痛そうだよー!》

『……ふふふ…… ナイアなら、大丈夫だと思うけどお……?』

入り口のところで簡易的な身分証明書を渡さた。これがあれば、この町の中で買い物ができるらしい。逆に無ければ衛兵を呼ばれるらしいが。

……一度入った時に何も買わないで置いて正解だったな。そういつたところがあるかもしれないと思っていたが、正しかったな。

……さてと。世界のレベルを見るには、まずは武器を。そして、あるなら学校で教えられている内容を知るのが手っ取り早い。

特に学校は分かりやすいように教えられている(一応、そのはず)

なので、利用しやすくして良い。

こう言った中世のような時代では嘘を教えるところもあるためすべてを信用することはできないが、少なくとも常識を学ぶことはできる。便利な場所だ。

この町にはどうやら学校に当たる場所が無いようなので、とりあえず売られている武器を見に行くことにする。

武器を見れば科学がどのあたりまで進んでいるかわかるし、魔道具

……いや、魔導具を見れば、どのくらいの魔導師が居るかもわかる。魔導についても理解を深めることができる。悪いことなど殆ど無い。……… ついでに、そこらにあった砂鉄を集めて純化して炭素を混ぜて作った長剣を売りに行こう。店に入ってなにもしないで出ていくと言うのは相手の気分を悪くさせるしな。

と言うわけで簡単に作ったものを持って行ったのだが、かなり良い値段で売れた。どうもこう言った武器は上等であればあるほど多くの魔導言語を刻んでやることができるらしく、私の作ったそれはその点については大したものらしい。

魔導は使えるものが少ないためかそうだったことはあまりされないが、上等な武器はそういったところとは関係なく人気があるそうだが、

……まあ、この町では大した事は危険はないようだったが、この町以外では危険も多いだろうし、当然か。

……ちなみに、初めのうちは姿からかなり舐めた思考をしていたし、剣についてもかなり悪どく買い叩かれそうになったが色々と話をして、正規の値段で買い取り願ったら嬉しそうに何度も頭を縦に振ってくれた。

……優しい私は特に酷いことはしていない。ただ少しお話をしただけだ。

『もしもこうやって騙そうとしたという噂が広がってしまったとして、そんな噂のある店で買い物しようとする人は居るかな？ 今はこちらか武器屋はないから良いかもしれないけれど……もし、誰かが店を開いて客を集めてしまったら……どうなるかな？』

……と。

暴力で終わらせてしまつては、それはただの強盗だ。こうして『お互い』納得ずくの『商談』にするのは、知識がなければならぬ。その結果で相手は嬉し涙を流しながら買ってくれたわけだ。

……まあ、運が悪かつたと思つて忘れてもらおう。正規の値段であつただけマシというものだ。
ぼつたくらなかつたのだから、本当に私は丸くなつたな。

《その点については同意かナ。昔はすごかつたもんネー？》

『……残虐、ここに極まれりい……つて、ねえ……』

……そこまで酷かつたか？ 精々国ひとつを消し飛ばすとか、王宮御用達の井戸に水銀を混ぜてやつたとか、ゾナハの病風を吹かせたりとか……その程度だぞ？

《十分外道で鬼畜で悪魔だヨ》

そうか。なら今度から少し気を付けよう。派手さは抑えて、瞬間転移で内蔵のみを抜き取るとか。

《キャトルミューティレーションっ！》

『……………ああ……………確かにそうねえ……………』

……………私はなにか変なことを言ったか？

《言っていないんじゃないかナー？》

そうだよな。

……………さて、時間もまだまだあるし、どうせならこの世界の魔導学校に行ってみるといいうのも面白いな。もしも名指して王宮に呼ばれたりしても断るが。

なにせ王宮と言えばディオの感じた通りの隠謀渦巻く七面倒な所。そんなところでは保身のために私の研究の邪魔をするものも出てくるだろうし、第一私は他人の命令を聞くのが大嫌いだから団体行動というものが苦手だ。

……………私は未知を既知にできればそれでいいと言うのに、なぜわざわざそれを利用して面倒なことに引きずり込まれようとするのやら。

……………まあ、いいか。邪魔をするなら滅ぼせばいい。前に立ち塞がるなら蹴散らせばいい。

幸いにも力には恵まれている。大体のことはできるだろう。

だがナイアが居るように、この世界にも私より強い者が普通にいる可能性も

《今のところは無いですヨー》

今は無いらしい。しかし今はそうだと言うただけだ。

私より強いものは普通にいると考え、私より強いと言質を取ったものには本気で向き合い、殺し合いの時は相手のステータスや思考を読むなどして万全の状態で挑み、決闘等は受けないことにしよう。面倒だしな。

対戦相手に死亡フラグ乱立のお知らせ。

フルカネルリだ。魔導学園に入学することにしたが、適当に手を抜いておくことにする。知識は教師や他の生徒から写し取れば問題ないし、実技も問題ないはずだ。

金については……まあ、なんとかするさ。学園外で自作の原材料費0の剣や槍を売ればいいだろう。そこそ良い値段で売れてくれるはずだ。最悪金を作れば問題ないしな。

《問題だと思っヨー。別に良いけど》

まあ、犯罪だろうな。だから最悪と言っただんだが。

しかし、もしかしたら合法かもしれないぞ？ この異世界の法を全て理解したわけではないしな。

……例え犯罪だとしても、ばれなければ一切問題ない。あまり金を作りすぎると経済が破綻するだろうが、それこそ知ったことではないな。

……さて、それでは入学手続きと試験のために、学園都市と呼ばれるルラクモまで行くでしょうか。

この田舎町には根っからの悪人はあまりいないようだが、都会（恐らく、この町に比べればそう言えるだろう）では違うだろうし、気を引き締めていかなければな。

利用されるのは構わないが、私に害が来ればすぐさま叩き潰してくれる。

……そう思いつつ出発した私だったが、前回の異世界をハードモードだとしたらこの世界はイージーどころかベリーイージーであると言ったことが発覚した。

……ハードモードではなくヘルモードと言った方が良かったか？あの程度でヘルモードとは言えないと思ったからハードモードと言ったんだが。

……まあ、いいか。なんでも。

魔物は強くない、魔王もいない、柄が悪いのも少ない、強盗もほとんどいない、人買いや身売りも早々なく、戦争すらここ数百年は無いらしい。そんな平和な世界がここのらしい。

……よろしい、ならば研究だ。平和な世界で進んだ魔導は日常に使える便利魔導がとまっているはずだ。頭の固い者でなければ改造の十や百はしていても当然だからな。ある程度術式さえわかればいくらでも改造してくれる。そういうたことは得意分野だ。

私にかかれれば戦闘用魔導も日常に便利なお手軽魔導に早変わり。

竜巻で相手を切り刻む魔導はごみを集めて細かくする魔導に。

炎で相手を焼くための魔導は火力の調節で料理に使い、しっかりと中まで均一に火を通す魔導に。

水の刃で相手を刻むための魔導は、手の熱が伝わりやすいエビなどの食材を調理するための調理用に。

このように魔導にはいくらでも利用法方がある。

……とは言え、失敗すれば大変なことになるだろうが……知ったこ

とではないな。

……さて、実技用に細かい術式の五つくらいは用意しておこうか。幸い時間はあることだし。

《頑張つてネー》

ああ。やるだけやるさ。

魔導を操ることができる者を、‘魔導師’と呼び、魔導をある程度以上使うことができるものを、‘大魔導師’と呼ぶ。その具体的な分け方は、魔導を使うときの詠唱の有無であるらしい。

さらに具体的に分けると、大魔導師とは三小節以上の魔導を無詠唱で発動できなければならないらしく、それができるのは今では片手の指で数えられる程度の人数らしい。情報源は旅の途中で見付けた魔導師の脳味噌。

その分け方で言うと私は大魔導師に分類されるのだが、およそ魔導スキルがLv6あればそう呼べるだろうな。

……なんだ、大魔導師としても私は規格外か。

《人間として規格外なんだからサー。今さら今さら》

……そうだな。やれやれ。

とは言え、私を知っている魔導の事など大したことではない。慣れ親しんできた魔術や魔法ならともかく、まだほとんど慣れていない魔導の事などわかるものか。

ただ、この世界の魔力の産み出し方はわかる。昔にナイアが連れてきた覗き悪霊の研究で、これと同じ魔力を所有しているからな。扱いは二つ目の異世界の魔力で慣れているので問題ない。ただ魔力を引き出すところが違うだけだからな。その程度ならば応用でできる。

それと、この世界の魔導は精霊を利用するわけではない。自分という一つの世界の中身を、魔力を使って一部だけ外の世界に表出させることによって魔導を行う。だから一人一人属性は違出し、使える魔導や使えない魔導があるわけだな。

簡単に言ってしまうえば、英雄の霊を従えた七人の魔術師が万能の願望器である聖杯を奪い合う戦争を60年に一度行っている話に出てきたの固有結界を相当劣化させたようなものだ。

《フルカネルリは元の世界では十二歳だからネー？　そういうゲームはまだやっちゃダメだヨー？》

安心しろ。広大なネットの海には二次創作というものが存在する。駄作から良作までな。

それには当然そういったシーンが無いのもある。私は十八禁と書かれている物は読んでいない。

《じゃあ安心だネー》

ああ。

『…………十五禁はあ…………？』

…………さて、次は無属性の術を作ろうか。強制的にベクトルを一方に向ける魔導などどうだ？　かなり便利な防御だと思いが。

《否定してヨー!》

フルカネルリの趣味の話。

フルカネルリだ。山もなく谷もなく魔導学園に到着。あまりにも山も谷も無かったので、つい暇潰しの思考実験に没頭してしまった。お陰で魔導の種類がかなり増えたが、私の魔導は他人の魔導とはどうも根本的に違う気がする。

まあ、魔導が全く同じ者が居たら恐ろしいが。時軸が違えば変わるものだし、世界が変われば違うものだし、その日の朝に食パンを食べたかクロワッサンを食べたかでも十分変わっていくし。特に私は異世界人なのだから、この世界の者と魔導が違っていても全く妙なところはない。

そんなことよりも今は実技だな。筆記試験はあつてないようなものだったし、知識がなくとも魔導は使えるし、知識が無いからこそ学園に通う意味がある。つまり実力があればある程度はどつとでもなると言うことだ。

……まあ、なんでも構わないがな。

「それではまず、使える属性すべてを教えてくださいませ」

私の前で椅子に座っている老人は、優しく見える視線を私に向けてそう言った。

その回答として私は、無詠唱で炎と風を生んだ。実際はもっと多いが、これで十分だろう。

「……………それだけかね？」

無言で頷く。この世界では使える属性の数が多くても少なくとも、大して反応は変わらない。

だが、一人一人が世界を内包するこの世界では一人が四つや五つの属性の適正を大なり小なり持っていても不思議ではない中で、二つと言っの少ない方なのだろう。

……………それでも魔導師自体が少ないため、十分に希少ではあるのだろうか。

「……………それでは、魔導スキルはいくつだね？」

「8」

「……………8？」

あ、顔がひきつった。まあそうだろうな、この老魔導師の魔導スキルは7だし。十分大魔導師と呼ばれるだけの实力はある。

ステータスを開いて、魔導スキルを見せる。そこにはしっかりとLv8と出ているはずだ。そう見えるように偽装したし。

……………無属性の魔導は便利だな。特に幻術は。

「……………よろしい。入学を認めましょう」

「それはどうも。……………ああ、できれば騒がれたくないので私のスキルについてはご内密に……………」

にこりと形は笑って、部屋を出る。教師相手ならともかく、生徒が相手なら落ちこぼれ扱いされていた方が動きやすいからな。邪魔したら銀の煙を吸ってもらおうが。

儂がその娘と出会ったのは、季節が順繰りと回り終わり、次の一周へと差し掛かるうとしていた頃の、ある入学試験の日の話だと記憶している。

その年は確実に不作だった。実力があれば上に行くことができると言うのがこの学園の基本だったが、その年の入学生は光るものを持つものが少なく、持っていたとしても実に小さなものばかりという上にあがるのが絶望的とも思えるような………教師の言うことではないが、才能のある生徒のあまりの少なさに辟易としていたときに、その娘が現れた。

その娘と目を会わせた瞬間、儂の体に衝撃が走ったかのように思えた。すぐさまステータス看破のスキルを使ったが、そこに見えたのは名前とLv、そして人間という種族名だけ。

ステータス看破は、自分のステータスとの差が三倍以上ある相手には効果が無く、そして自分の持っていないスキルを相手が持っている場合はそれも見えなくなってしまう。

それを利用して戦うときの判断基準としているが、ここまで見えぬ相手は初めてだ。

それも、その相手のLvはたったの1。見たところ十程度の娘とは思えない。

それでもここは魔導学園。魔導を習いたいものならば、相手が何歳だろうと誰だろうとLvがいくつだろうと受け入れる。それがこの

魔導学園だ。

僕は努めて笑顔を保つ。今思えば必要なかったかもしれないが。

聞いてみれば魔導の適正は火と風で、魔導スキルはLv8だと聞いた。

……しかし、恐らくそれは嘘だろう。8ならば僕のステータス看破で見えるだろうし。

それでも僕はその事については何も言わなかった。なにかを言っただけで相手ではないと思ったと言うこともあるし、なにかを言っただけでこれほどの才能の塊を入学させないというわけにもいかないと言うこともある。

面接室から去っていく娘を止めることもなく、僕は娘の事がかかれた紙に、合格とだけ書いておいた。

これが、僕とあの娘の出会いの一部始終。後の『魔導の最奥』との初の会合だった。

有名になることが確定した話。

フルカネルリだ。入学には成功した。特待生のような物は無いらしいので自分で学費を払う必要があるが、それを行えば授業をサボろうが図書館に入り浸ろうが成績がよければ許される。中々良い学校だとは思わないか？

《きつつい皮肉だねー？ そのくせ実践授業にはしっかりと参加してるしサー》

実践は大切だからな。この学園では人目につく所で風と炎以外は使えないが、それでも。

ちなみに私はこの三ヶ月、おちこぼれを演じている。その方が楽だからな。

生徒の中の小さな苛めなどもあるが、軽く反撃してやっているし、問題はない。

……………どうしても鬱陶しくなったら洗脳してやるか、もしくは事故に遭ってしばらく休んでてもらっている。事故の内容は、階段から足を踏み外す、魔導の実践での暴走または暴発、病気など様々で、今までに身内以外でバレたことはない。

……………それもあって、今では私に手を出そうとする輩は減ってきた。初めの頃は本当に鬱陶しかったからな。

例えば研究の内容を日本語で書いたノートを盗まれて燃やされたり（実行犯と教唆犯の肝臓に焼かれる痛みを発生させる呪いをかけた呪術スキルを手に入れて研究対象が増えた）、問題ないことは確認

してあるのに本の貸し出しを無駄に渋られたり（脳から情報を引き出すときに渋るようにはしなかった）、直接的な暴力を振るおうとしてきたり（ベクトル操作型防御魔導で跳ね返してやった）、貴族の坊っちゃんに父親の権力を笠に着て交際を迫ってきたり（私はどうやら美しい部類に入るらしい。断つたら騒いだので不幸にしてやったら父親が一月で没落。今までの不正が王宮に証拠と一緒に提出されたらしい）……実に色々あった。

私に関わると不幸になる、という噂が立つたが、便利なのでそのまま言わせている。外れてはいないしな。

今日も図書館に行く。教師達の頭の中身は殆どすべて読み終わつたし、教わる事はもう無いと言っても良いような状態だからだ。

そもそも個人個人で自分の世界からの魔力の引き出し方や自分の世界の表出の仕方も違う魔導を、他者から教わるうという時点で間違っていると思われる。

使えて精々一番初めの自分の中の世界の有り様を自覚する、といった所くらいな物だ。

私が前の世界で使っていた魔法と違い、魔導には同一の魔導を使うものは少ない。内包する世界が似通っていても、ほんの僅かなことでその世界は表情を変える。

使うものが怒っていれば、内包する世界の怒りを象徴するものが割合を増す。

それは例えば燃え盛る炎であったり、沸き立つ熔岩であったり、吹き荒れる嵐であったり、凍てつく氷河であったり、まばゆい閃光で

あつたり、滲み出す暗闇であつたり、猛り狂う化物であつたりと、実に様々だ。

そしてその割合を増したものが、世界を内包する者の魔力を産み出し、そして外の世界に侵食することもある。

ちなみに私の世界は巨大な図書館だ。

高すぎる天井には今までに調べた鳥やドラゴンなどが舞い、調べたあらゆる動植物が存在している。

雨も降るし風も吹く。泉もあれば山も火山もある。

そんな異常にまでに広い図書館だ。

……その外には、私の知ったあらゆる言語が空を流れていた。

その言語群はある程度集まると形になり、図書館の中に吸い込まれるように消えていく。

これは恐らく、私の知識の収集を表しているのだろう。

私の中で知識と言えば本というイメージがある。そして、今までの経験から本と言えば図書館というイメージもある。

つまり、私にとって私の世界とは、知識の収集と収集した知識を元にした実験と観察。自分が育てた子供すらも実験動物のように扱う私には相応しい世界だと思わないか？

《そこにはボクはいるノー？》

『……わたしはいるはずよねえ……？』

ナイアは少しだけ居る。性格などが少しはわかっていると云うことだろう。

そしてアザギだが、私の知識の塊である本を掃除して回ってくれている。埃も無いし本を食う虫もないが、そうしてくれるのはあり

がたい。

『……………わたしじゃないからあ……………複雑な気分ねえ……………』

なに、気にするな。

……………さてと。水の中でも燃え続ける炎の魔導でも開発するか。これを使えば湯を沸かすのが相当楽になるだろうし、うまくいけば次は狙ったものだけを燃やすことができる炎に繋がるし。

私の世界の中に居るクトウグアを表出させれば、水も氷も岩も空間すらも燃やせる炎ができるだろう。

……………実に楽しみだ。

マッドアルケミスト、フルカネルリ。

フルカネルリだ。魔導学園のしきたりに、卒業までに一度は学内対抗戦に出場しなければならぬという決まりがある。

実に面倒臭い決まりだが、実行しなければ卒業できないと言っただから仕方がない。面倒だが出ることにしよう。

……優勝賞品の学食フリーパス（半年間学食が無料でいくらでも食べられる）は魅力だな。この世界の料理には、いったいどんな新しいものがあるのやら。

《……って言うか、そんなのがあるのかナー？》

『……どうかしらねえ……？ …… …… ふふふふふ……』

なに、ここに無くても一向に構わない。それだけ夢は広がるものだ。少なくとも調味料はあるし、問題はない。

魔導学園には、誰もが知っている有名人というものがいる。

まずは、学園長であり、世界最強の大魔導師と名高いハスクウェル
II バランガ。

強大な五つの属性魔導を自在に操り、五百年もの時を生きるという生きる伝説とも言える老魔導師だ。

それから教頭であり、魔導具作成のスペシャリストであるアラン・アーヴァイン。
魔力こそ多くはないが、彼の作る魔導具は天下一品であり、そのほとんどが一品で小さな庭付きの屋敷と土地が買えるほどの高額な物になる。

肉体派魔導師として有名なレイオス・ランブレラ。
通常の魔導の一切を使えない代わりに、たった一つの使える魔導である身体強化を極めたとも言える男。

生徒会長、ミリエリ・ライブレス。

今年で学園の最高学年となり、卒業後は宮廷魔導師への道が確定されていると言う、学園のアイドル。

そして、こちらはいいい意味ではないが確実に知られている、フルリ・カーネル。

授業はほぼ常に出ていないのに、成績は常に八位。どれだけ困難だったとしても、常に。

使える属性の少なさと、レベルの低さから目立ってはいたが、今では確実に全校生徒が知っている。

なぜなら、彼女に近付いた者は必ず不幸になるという噂があり、本人もそれを一切否定しなかった。

……そして、実際に彼女に近付いて不幸になったものもいる。

そんな彼女は大抵は図書館にしていると聞いていたが、入学してからずっとこの学園対抗戦には出てこなかった。

しかし、ようやく彼女がその重い腰をあげたということとで学園には噂が広がっていた。

対抗戦当日に現れた彼女は、噂がすべて嘘だと言ってもおかしくない、そんな小さな子供だった。

学園に通う生徒の平均年齢は十六。しかし彼女はどう見ても十にようやく届いた程度に見えた。

対抗戦に参加している誰もがそんな彼女に負けるはずがないと思い、参加していないものも、フルリの優勝を考えているものはほとんどいなかった。

……そう、私も含めて。

試合開始直後。ほぼ全員がフルリを無視して戦闘を始めた。

あるものは雷を指先から撃ち出し、あるものは炎の玉を宙に浮かべ、またあるものは氷の刃を飛ばす。

そんな中でフルリは、なにもない空中を掬い上げるようにした手を顔の前に持ってきて……ふう、と息を吹き掛けた。

落ちこぼれとして有名だったフルリの行為を気に止めるものはほとんどいなかったが、観客席から全体を見ていた私には、フルリの掌から溢れたピンク色の何かが空中に舞うのが見えた。

それはひらひらと踊るように空中で翻り、ステージ全体に広がって行く。

そして、

「爆ぜろ」

ステージすべてを、白に近いピンク色の爆発が蹂躪した。

たった一つの魔導で対抗戦を終わらせたフルリは、今日もいつもの通りに図書館で本を読んでいる。

最終学年の最優秀者でも起こせないような爆発を起こした彼女はただのサボり魔ではなく、優秀な魔導師だったということらしい。

そして、噂はある程度は本当であつたらしいが、研究の邪魔をしなければ特に相手を不幸にする気は無いらしい。

……だが、彼女の隣には黒い強大な魔力を持った『何か』が居る。その『何か』がなにもしないとは限らない。

……彼女の本領は、いったいどこにあるのか……。

『……気付いちゃったからにはあ……黙っててもらつたよあ……』

ぶっん！

とある生徒の失踪と裏事情。

なし

保有属性

地：LV9 (+ 8 8 5 4 5 6 9 2 3)

闇：LV9 (+ 8 8 5 4 5 6 9 2 3)

特殊スキル

呪い：LV9 (+)

魔法：LV9 (+)

神の奇跡：LV9 (+)

不老

無限再生

残機無限

変身

】

こんなところですよ。アザギもいつか出します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5216p/>

フルカネルリさんの転生苦労日記

2011年10月9日00時11分発行